

# 中城御殿跡(首里高校内)・櫺園跡

—首里高校校舎改築に伴う発掘調査(2)—

令和3(2021)年9月

沖縄県立埋蔵文化財センター



## 序

本報告書は、沖縄県立首里高等学校の校舎改築に伴い、沖縄県立埋蔵文化財センターが、平成29(2017)～平成30(2018)年度に実施した発掘調査成果をまとめたものです。

現在の首里高校の敷地は、1700年代に描かれたとされる首里古地図に照らし合わせると、中城御殿や大美御殿、櫓園、浦添按司屋敷、浦添城内余地の範囲にあたります。

今回の発掘調査は、平成25(2013)～平成26(2014)年度に当センターが発掘を行った中城御殿跡の敷地内と考えられる範囲に加え、櫓園跡とされている部分の調査を実施しました。

中城御殿は、次期国王となる世子の邸宅として1621～1640年代に現在の首里高校の敷地に創建され、明治8(1875)年に首里大中町の県立博物館跡地に移転しました。

櫓園跡は、創建された年代等は明らかではありませんが、蠟燭や漆器の原料となる漆を採取するための櫓園があった場所とされています。

発掘調査の結果、中城御殿と櫓園に関する遺構が見つかりました。それぞれの遺跡毎に紹介します。

中城御殿の部分では、屋敷敷地の北東隅にあたると思われる石牆や屋敷内部の石垣、中城御殿の東側にある遺跡を確認することが出来ました。これらの発見により、中城御殿の敷地範囲を明確に把握することが可能となりました。また、道の検出によって、隣接する屋敷との境界も明らかになり、当該地の屋敷配置がより明確にわかるようになりました。また、屋敷全体を造成した痕跡があり、造成工事を行うために一部の石積や遺構を埋めている状況が確認できました。このことから、中城御殿は屋敷全体を大きく改築していたことが判明しました。

櫓園跡の部分では、石組土坑内から多くの貝殻片が確認され、これらは人為的に割り取りがされているものがほとんどで、貝製品製作を行っていたと考えられます。漆をとるための場所に加え、漆器に使う螺鈿やその他の製品製作を行っていた場所である可能性が高いことがわかりました。

首里高校の敷地内にある埋蔵文化財は、首里地区においても他に類を見ない遺跡であることから、関係機関と調整を重ねた結果、地中に保存することが可能な部分がありました。様々な歴史の語り部である遺跡は、再び私達の前に姿を現すときまで、地中に大切に保管されることとなります。このような大事な遺構を地中に残すことができたのは、学校関係者の皆様をはじめ、県教育庁施設課、県土木建築部施設建築課、工事業者の皆様の協力があったことにほかなりません。

このような成果をまとめた本報告が、首里地区の歴史のみならず、沖縄県の歴史や文化を理解する資料として活用されるとともに、広く文化財の保護・活用について関心をもっていただければ幸いです。

最後に、発掘調査及び資料整理作業、遺構保護に際し、様々な御指導、御助言、御協力をいただきました関係者各位に厚く御礼申し上げます。

令和3(2021)年9月

沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 瑞慶覧 勝利



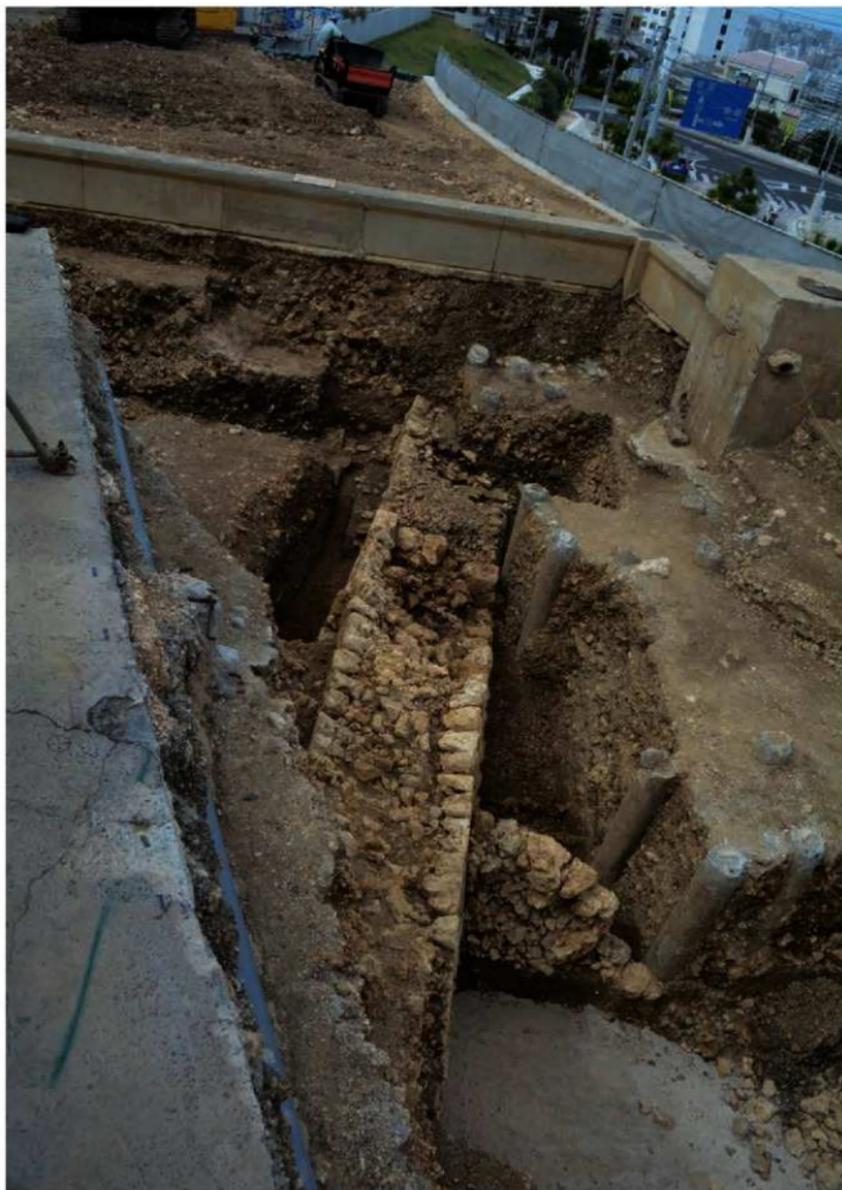
巻頭図版 1 上：米軍撮影航空写真(1945年撮影)(沖縄県教育庁文化財課史料編集班所蔵)

下：中城御殿跡(首里高校内)・植園跡周辺航空写真



巻頭図版 2 上：中城御殿の北側石牆(SA3001)と門(H29年調査 III区)

下：中城御殿の北側石牆(SA3001 西側)(H29年調査 III区)



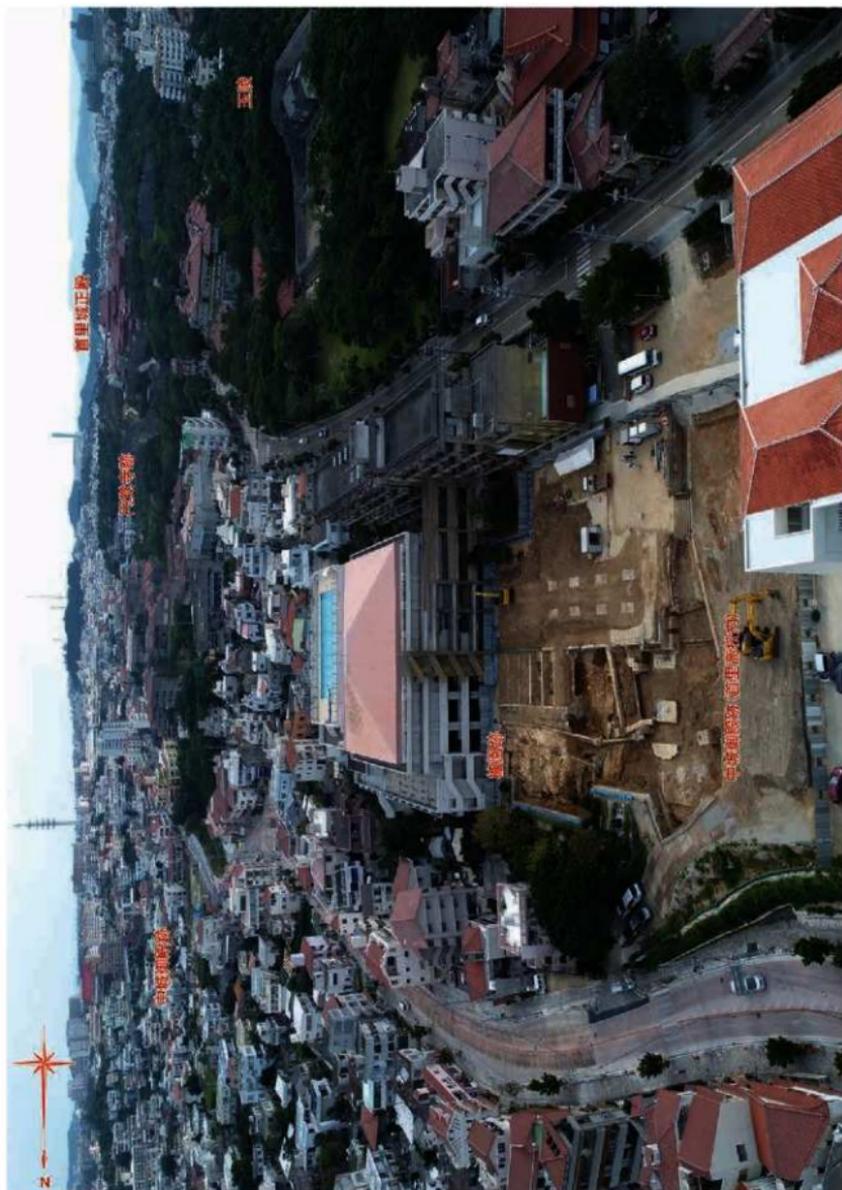
巻頭図版 3 中城御殿の北側石牆(SA3001) (H29年調査III区) ※写真奥は首里高校の外壁



巻頭図版 4 上：中城御殿内の石積(SA4001) (H29年調査Ⅳ区) 下：検出した道跡(SF5001) (H30年調査Ⅴ区)



卷頭図版 5 上：SM3001 完掘状況(H29 年調査Ⅲ区) 下：SM5002 遺物出土状況(H30 年調査Ⅴ区)



巻頭図版 6 調査区遠景 (H30年V区調査時の写真)

## 例 言

- 1 本報告書は教育庁施設課から予算令達を受け、平成29(2017)～平成30(2018)年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した首里高校敷地内に所在する埋蔵文化財(中城御殿跡・櫓園跡)の発掘調査成果をまとめたものである。
- 2 本報告書で報告する中城御殿跡は那覇市首里真和志町2丁目 首里高等学校敷地内に所在する。明治8(1875)年に移転した那覇市首里大中町に所在する中城御殿と区別するため、本報告書では中城御殿跡(首里高校内)と標記する。
- 3 発掘調査は、沖縄県立埋蔵文化財センターが担当し、民間調査組織に調査支援業務を委託した。
- 4 整理作業は、現地作業と並行しながら平成29(2017)～令和2(2020)年度まで実施した。報告書作成作業は令和2(2020)～令和3(2021)年度に、沖縄県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 首里高校敷地内の埋蔵文化財の取り扱いについては、記録保存を目的とした調査を実施していたが、関係機関と調整を行い、一部の遺構は、現地に保存することができた。
- 6 遺物注記は、遺跡を表す名称として「首里高校内埋蔵文化財発掘調査」を簡略化し、「首高内」を用いた。
- 7 本書で用いたレベル数値は、標高である。
- 8 地図データは、国土地理院の電子国土webシステムから配信されたものを使用している。
- 9 本報告書で使用している座標は、世界測地系の第XV系を用い、方位は座標北を用いた。  
座標軸は、X軸(水平方向)・Y軸(垂直方向)の標記となっている。
- 10 土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』に基づく。
- 11 遺物実測図の縮尺は、陶磁器類 1/3、瓦・埴等 1/5、銭貨 1/2 を基本とする。その他、大型製品などの例外については、実測遺物毎に縮尺を示した。
- 12 本書の編集は、当センター職員の協力を得て、亀島慎吾が行い、編集補助を太田樹也が行った。執筆は下記以外を亀島が行った。また、第5章は下記執筆者とそれぞれ検討を行い、亀島が執筆した。  
第4章 第2節 第1項・第2項  
中国産陶磁器・・・古堅あゆみ・太田樹也  
タイ産褐軸陶器、その他の輸入陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産施軸陶器、沖縄産無軸陶器、貝製品、骨製品・・・太田樹也  
ガラス製品、瓦、埴瓦・・・平良和樹
- 13 引用文献は本文中に(執筆者 発表年)で示し、執筆者は適宜略称を用いた。引用・参考文献は、巻末にまとめて掲載した。
- 14 本書に掲載された写真は、現地調査記録写真は亀島慎吾、玉城綾、太田樹也、我喜屋優真、島袋桃子、平良悟、根間翔吾、波照間紗希、外間裕一、株式会社アーキジオパシフィック支店が撮影した。  
遺物写真等は伊禮若奈、與儀暎裕が撮影した。
- 15 今回の調査で得られた遺物、実測図及び写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。
- 16 報告書掲載資料について、文化財保護・教育普及・学術研究を目的として利用する場合は、掲載許可申請等は不要ですが、出典を明記してください。

# 目次

序	
巻頭図版	
例言	
第1章 発掘調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査経過	3
第4節 立会調査	
第1項 経緯と経過	10
第2項 立会調査成果	10
第5節 遺構の現地保存	
第1項 現地保存に至る経緯	16
第2項 遺構保護	16
第3項 校舎基礎と遺構	16
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	30
第2節 歴史的環境	30
第3章 発掘調査の方法	
第1節 発掘調査	37
第2節 整理等作業	38
第3節 層序	39
第4節 調査区毎の概要	39
第4章 発掘調査の成果	
第1節 遺構	51
第1項 III区	52
第2項 IV区	61
第3項 V区	69
第2節 遺物	
第1項 遺物の概要・分類	86
第2項 埴瓦Ⅷ類	183
第3節 自然遺物	
第1項 脊椎動物遺体	188
第2項 貝類遺体	217
第4節 人骨	226
第5章 総括	239
引用・参考文献	287
巻末図版	289
報告書抄録	322

# 挿図目次

第1図 調査経過1	8
第2図 調査経過2	9
第3図 工事立会箇所	13
第4図 工事立会1	14
第5図 工事立会2	15
第6図 遺構保護砂	17
第7図 遺構保護1	17
第8図 遺構保護2	18
第9図 遺跡と新校舎地中梁基礎重ね図	19
第10図 遺跡と校舎基礎重ね図(I区)	20
第11図 遺跡と校舎基礎重ね図(III区、IV区、V区)	21
第12図 校舎断面図と遺構保護高さ1	22
第13図 校舎断面図と遺構保護高さ2	23
第14図 校舎基礎地中梁と遺構1	24
第15図 校舎基礎地中梁と遺構2	25
第16図 校舎基礎地中梁と遺構3	26
第17図 校舎基礎地中梁と遺構4	27
第18図 校舎基礎地中梁と遺構5	28
第19図 校舎基礎地中梁と遺構6	29
第20図 沖繩県の位置	32
第21図 中城御殿跡(首里高校内)の位置及び周辺の遺跡	33
第22図 首里古地図	34
第23図 中城御殿北側にある井戸	35
第24図 水場遺構	35
第25図 洞穴遺構	35
第26図 内の井戸(ウチヌカー)	35
第27図 指(佐)司笠樋川(サシカサヒージャー)	35
第28図 グリッド配置図	37
第29図 層序1	43
第30図 層序2	43
第31図 層序3(1)	44
第32図 層序3(2)	45
第33図 層序4(1)	46
第34図 層序4(2)	47
第35図 層序5	48
第36図 層序6	49
第37図 層序7	50
第38図 全体図	51
第39図 III区平面図	52
第40図 SD3001 検出状況(南西から)	53
第41図 SD3001 平面図・断面図	53
第42図 SA3001 平面図・立面図	54
第43図 SA3001 断面図	55
第44図 SA3002 立面(東から)	56

第 45 図	SA3003 検出状況(北から) ……………	56	第 88 図	SS5004・SQ5001 半載状況(東から) ……	71
第 46 図	SA3005・SA3010 検出状況(北から) ……	56	第 89 図	SX5003 検出状況・半載状況 ……………	71
第 47 図	SA3006 検出状況(南東から) ……………	56	第 90 図	SQ5001 半載状況(南西から) ……………	72
第 48 図	SK3001 半載状況(北から) ……………	57	第 91 図	SS5005・SX5007 平面図・断面図 ……	72
第 49 図	SK3002 断面(南から) ……………	57	第 92 図	SS5005 検出状況(南から) ……………	72
第 50 図	SS3002 検出状況(東から) ……………	57	第 93 図	SX5007 検出状況(北東から) ……………	72
第 51 図	SX3002 検出状況(北から) ……………	57	第 94 図	SA5002 検出状況(南西から) ……………	72
第 52 図	SX3003・SX3004 検出状況(北西から) …	57	第 95 図	SA5002 平面図・立面図・断面図 ……	73
第 53 図	SM3005 半載状況(北から) ……………	58	第 96 図	SA5004 立面(南から) ……………	73
第 54 図	SM3005 平面図・立面図・断面図 ……	58	第 97 図	SA5005 立面(南から) ……………	73
第 55 図	SM3007 検出状況(南から) ……………	58	第 98 図	SA5006 断面(南から) ……………	74
第 56 図	SM3004・SM3008・SM3009 検出状況(南から)	58	第 99 図	SA5006・SS5009 平面図・立面図・断面図	74
	……………	58	第 100 図	SM5002 平面図・立面図・断面図 SS5002	
第 57 図	SM3008 平面図・立面図 ……………	58		検出状況・半載状況 ……………	75
第 58 図	SM3009 平面図・立面図・断面図 ……	59	第 101 図	SP5032・SP5037・SP5040 完掘状況	
第 59 図	SM3001 平面図・立面図・断面図 ……	59		(南西から) ……………	76
第 60 図	SM3002 平面図・立面図・断面図 ……	60	第 102 図	SP5032、SP5037、SP5040 平面図・断面図・	
第 61 図	SM3003 カンギク出土状況(南東から) …	60		半載状況 ……………	76
第 62 図	SM3003 平面図・立面図・断面図 ……	60	第 103 図	SP5037 半載状況(南西から) ……………	77
第 63 図	IV区平面図 ……………	61	第 104 図	SP5040 半載状況(南から) ……………	77
第 64 図	SD4001 検出状況(南から) ……………	61	第 105 図	SX5004 検出状況・半載状況 ……………	77
第 65 図	SA4001 平面図・立面図(1) ……………	62	第 106 図	SD5004 検出状況・断面 ……………	77
第 66 図	SA4001 平面図・立面図(2) ……………	63	第 107 図	SD5008 平面図・立面図・断面図・検出状況・	
第 67 図	SA4001 石材加工痕跡 ……………	64		断ち割り状況 ……………	78
第 68 図	SM4004 検出状況(北から) ……………	64	第 108 図	SA5003 西側堆積状況(北から) ……………	79
第 69 図	SA4003 検出状況・断面 ……………	64	第 109 図	V-V' SA5003 西側堆積状況(北から) …	79
第 70 図	SA4003、SP4022、SX4007 平面図・立面図・		第 110 図	SD5006 平面図・立面図・断面図 ……	79
	断面図・検出状況・半載状況 ……………	65	第 111 図	V-V' SF5001 堆積状況(北東から) ……	79
第 71 図	遺構検出部分 ……………	66	第 112 図	SF5001 堆積状況(北から) ……………	79
第 72 図	SA4002・SR4004・SS4002 平面図・立面図・		第 113 図	SF5001 平面写真 ……………	80
	断面図 ……………	66	第 114 図	SF5001 ほか関連遺構 平面図 ……………	81
第 73 図	SR4001・4002 検出状況(北東から) ……	67	第 115 図	SF5001 ほか関連遺構 立面図・断面図 …	82
第 74 図	SM4001 平面図・立面図・断面図 ……	67	第 116 図	SF5001 ほか関連遺構 立面図・断面図 …	83
第 75 図	SM4003 断面(東から) ……………	67	第 117 図	SF5001 ほか関連遺構 層序 ……………	84
第 76 図	SD4002 完掘状況(西から) ……………	68	第 118 図	SF5001 設定トレンチ各種状況 ……………	85
第 77 図	SM4002・SS4001 重複状況(南から) ……	68	第 119 図	明朝系軒丸瓦 分類表 ……………	94
第 78 図	SM4002 平面図・断面図 ……………	68	第 120 図	明朝系軒平瓦 分類表 ……………	94
第 79 図	SK4007 半載状況(西から) ……………	68	第 121 図	Ⅲ区の出土遺物 1 ……………	106
第 80 図	V区平面図 ……………	69	第 122 図	Ⅲ区の出土遺物 2 ……………	107
第 81 図	SX5005・SD5004 検出状況(北から) ……	70	第 123 図	Ⅲ区の出土遺物 3 ……………	108
第 82 図	SX5006 検出状況(北から) ……………	70	第 124 図	Ⅲ区の出土遺物 4 ……………	109
第 83 図	SS5003 平面図・断面図・検出状況 ……	70	第 125 図	Ⅲ区の出土遺物 5 ……………	110
第 84 図	SS5003 半載状況(西から) ……………	71	第 126 図	Ⅲ区の出土遺物 6 ……………	111
第 85 図	SS5004・SX5003・SP5031・SQ5001 平面図・		第 127 図	Ⅲ区の出土遺物 7 ……………	112
	断面図 ……………	71	第 128 図	Ⅲ区の出土遺物 8 ……………	113
第 86 図	SX5003 平面図・断面図 ……………	71	第 129 図	Ⅲ区の出土遺物 9 ……………	114
第 87 図	SS5004 検出状況(北から) ……………	71	第 130 図	Ⅲ区の出土遺物 10 ……………	115

第131図	Ⅲ区の出土遺物 11	116	第178図	V区の出土遺物 18	178
第132図	Ⅲ区の出土遺物 12	117	第179図	V区の出土遺物 19	179
第133図	Ⅲ区の出土遺物 13	118	第180図	V区の出土遺物 20	180
第134図	Ⅲ区の出土遺物 14	119	第181図	V区の出土遺物 21	181
第135図	Ⅲ区の出土遺物 15	120	第182図	V区の出土遺物 22	182
第136図	Ⅲ区の出土遺物 16	121	第183図	埴瓦Ⅳ類 模式図	183
第137図	Ⅲ区の出土遺物 17	122	第184図	埴瓦Ⅳ類 1	184
第138図	Ⅲ区の出土遺物 18	123	第185図	埴瓦Ⅳ類 2	185
第139図	Ⅲ区の出土遺物 19	124	第186図	埴瓦Ⅳ類 3	186
第140図	Ⅲ区の出土遺物 20	125	第187図	埴瓦Ⅳ類 4	187
第141図	Ⅲ区の出土遺物 21	126	第188図	脊椎動物遺体 同定標本数(NISP%)	189
第142図	Ⅲ区の出土遺物 22	127	第189図	魚類 同定標本数(NISP%)	189
第143図	Ⅲ区の出土遺物 23	128	第190図	V区 遺構出土魚類 同定標本数(NISP%)	191
第144図	Ⅲ区の出土遺物 24	129	第191図	哺乳類 同定標本数(NISP%)	191
第145図	Ⅲ区の出土遺物 25	130	第192図	I区 遺構出土哺乳類 同定標本数(NISP%)	192
第146図	Ⅲ区の出土遺物 26	131	第193図	Ⅲ区石組土坑(SM) 巻貝出土数(NISP)	218
第147図	Ⅲ区の出土遺物 27	132	第194図	Ⅲ区石組土坑(SM) 二枚貝出土数(NISP)	218
第148図	Ⅳ区の出土遺物 1	139	第195図	V区石組土坑(SM) 貝類出土数(NISP%)	218
第149図	Ⅳ区の出土遺物 2	140	第196図	ヤコウガイ殻 出土数(NISP%)	219
第150図	Ⅳ区の出土遺物 3	141	第197図	ヤコウガイ殻破片 出土数(NISP%)	219
第151図	Ⅳ区の出土遺物 4	142	第198図	ヤコウガイ殻 分類	220
第152図	Ⅳ区の出土遺物 5	143	第199図	ヤコウガイ殻破片 分類	221
第153図	Ⅳ区の出土遺物 6	144	第200図	チョウセンサザエ 出土数(NISP%)	222
第154図	Ⅳ区の出土遺物 7	145	第201図	チョウセンサザエ 分類	223
第155図	Ⅳ区の出土遺物 8	146	第202図	サラサバテイラ 分類	224
第156図	Ⅳ区の出土遺物 9	147	第203図	サラサバテイラ 出土数(NISP%)	225
第157図	Ⅳ区の出土遺物 10	148	第204図	マガキガイ 分類	225
第158図	Ⅳ区の出土遺物 11	149	第205図	タカラガイ 分類	225
第159図	Ⅳ区の出土遺物 12	150	第206図	設置されたシャコガイ(SA3001門跡)	226
第160図	Ⅳ区の出土遺物 13	151	第207図	出土人骨 歯	226
第161図	V区の出土遺物 1	161	第208図	グスク時代の遺構	240
第162図	V区の出土遺物 2	162	第209図	近世前期の遺構	242
第163図	V区の出土遺物 3	163	第210図	近世後期の遺構	242
第164図	V区の出土遺物 4	164	第211図	近世後期の遺構面標高	244
第165図	V区の出土遺物 5	165	第212図	近世後期の屋敷内段差構造	244
第166図	V区の出土遺物 6	166	第213図	出土遺物一覧 1	263
第167図	V区の出土遺物 7	167	第214図	出土遺物一覧 2	264
第168図	V区の出土遺物 8	168	第215図	出土遺物一覧 3	265
第169図	V区の出土遺物 9	169	第216図	出土遺物一覧 4	266
第170図	V区の出土遺物 10	170	第217図	出土遺物一覧 5	267
第171図	V区の出土遺物 11	171	第218図	出土遺物一覧 6	268
第172図	V区の出土遺物 12	172	第219図	出土遺物一覧 7	269
第173図	V区の出土遺物 13	173	第220図	出土遺物一覧 8	270
第174図	V区の出土遺物 14	174			
第175図	V区の出土遺物 15	175			
第176図	V区の出土遺物 16	176			
第177図	V区の出土遺物 17	177			

第 221 図	出土遺物一覽 9	271
第 222 図	出土遺物一覽 10	272
第 223 図	出土遺物一覽 11	273
第 224 図	出土遺物一覽 12	274
第 225 図	出土遺物一覽 13	275
第 226 図	出土遺物一覽 14	276
第 227 図	出土遺物一覽 15	277
第 228 図	出土遺物一覽 16	278
第 229 図	出土遺物一覽 17	279
第 230 図	出土遺物一覽 18	280
第 231 図	出土遺物一覽 19	281
第 232 図	出土遺物一覽 20	282
第 233 図	出土遺物一覽 21	283
第 234 図	出土遺物一覽 22	284
第 235 図	出土遺物一覽 23	285
第 236 図	出土遺物一覽 24	286

## 図版目次

図版 1	遺構 1	289
図版 2	遺構 2	290
図版 3	遺構 3	291
図版 4	遺構 4	292
図版 5	遺構 5	293
図版 6	出土遺物 1	294
図版 7	出土遺物 2	295
図版 8	出土遺物 3	296
図版 9	出土遺物 4	297
図版 10	出土遺物 5	298
図版 11	出土遺物 6	299
図版 12	出土遺物 7	300
図版 13	出土遺物 8	301
図版 14	出土遺物 9	302
図版 15	出土遺物 10	303
図版 16	出土遺物 11	304
図版 17	出土遺物 12	305
図版 18	出土遺物 13	306
図版 19	出土遺物 14	307
図版 20	出土遺物 15	308
図版 21	出土遺物 16	309
図版 22	出土遺物 17	310
図版 23	脊椎動物遺体 1	311
図版 24	脊椎動物遺体 2	312
図版 25	脊椎動物遺体 3	313
図版 26	脊椎動物遺体 4	314
図版 27	脊椎動物遺体 5	315
図版 28	脊椎動物遺体 6	316
図版 29	脊椎動物遺体 7	317
図版 30	巻貝 1	318
図版 31	巻貝 2	319
図版 32	二枚貝 1	320
図版 33	二枚貝 2	321

## 挿表目次

第 1 表	工事立会一覧	10
第 2 表	中城御殿跡 関連年表	36
第 3 表	遺構記号凡例	37
第 4 表	遺構面対照表	40
第 5 表	遺構面対照表(つづき)	41
第 6 表	埴瓦分類対照表	93
第 7 表	Ⅲ区瓦当分類表 明朝系瓦	95
第 8 表	Ⅳ区瓦当分類表 明朝系瓦	95
第 9 表	V区瓦当分類表 明朝系瓦 a	95
第 10 表	V区瓦当分類表 明朝系瓦 b	96
第 11 表	Ⅲ区埴瓦 分類表	96
第 12 表	Ⅳ区埴瓦 分類表	96
第 13 表	V区埴瓦 分類表 a	96
第 14 表	V区埴瓦 分類表 b	96
第 15 表	Ⅲ区出土遺物観察一覧 a	97
第 16 表	Ⅲ区出土遺物観察一覧 b	98
第 17 表	Ⅲ区出土遺物観察一覧 c	99
第 18 表	Ⅲ区出土遺物観察一覧 d	100
第 19 表	Ⅲ区出土遺物観察一覧 e	101
第 20 表	Ⅲ区出土遺物観察一覧 f	102
第 21 表	Ⅲ区出土遺物観察一覧 g	103
第 22 表	Ⅲ区出土遺物観察一覧 h	104
第 23 表	Ⅲ区出土遺物観察一覧 i	105
第 24 表	Ⅳ区出土遺物観察一覧 a	133
第 25 表	Ⅳ区出土遺物観察一覧 b	134
第 26 表	Ⅳ区出土遺物観察一覧 c	135
第 27 表	Ⅳ区出土遺物観察一覧 d	136
第 28 表	Ⅳ区出土遺物観察一覧 e	137
第 29 表	Ⅳ区出土遺物観察一覧 f	138
第 30 表	V区出土遺物観察一覧 a	152
第 31 表	V区出土遺物観察一覧 b	153
第 32 表	V区出土遺物観察一覧 c	154
第 33 表	V区出土遺物観察一覧 d	155
第 34 表	V区出土遺物観察一覧 e	156
第 35 表	V区出土遺物観察一覧 f	157
第 36 表	V区出土遺物観察一覧 g	158
第 37 表	V区出土遺物観察一覧 h	159
第 38 表	V区出土遺物観察一覧 i	160
第 39 表	埴瓦Ⅲ類観察一覧	184
第 40 表	脊椎動物遺体種類一覧	188
第 41 表	脊椎動物遺体 出土数	188
第 42 表	魚類 同定標本数(NISP)	188
第 43 表	V区 遺構出土魚類 同定標本数(NISP)	190
第 44 表	鳥類 同定標本数(NISP)	190
第 45 表	哺乳類 同定標本数(NISP)	190
第 46 表	Ⅲ区 遺構出土哺乳類 同定標本数(NISP)	190
第 47 表	V区 遺構出土哺乳類 同定標本数(NISP)	190
第 48 表	I区 遺構出土哺乳類 同定標本数(NISP)	192
第 49 表	I区鳥類・哺乳類集計表 a	193
第 50 表	I区鳥類・哺乳類集計表 b	194
第 51 表	I区鳥類・哺乳類集計表 c	195
第 52 表	I区鳥類・哺乳類集計表 d	196
第 53 表	I区鳥類・哺乳類集計表 e	197
第 54 表	I区鳥類・哺乳類集計表 f	198
第 55 表	I区イノシシ/ブタ白歯計測値(mm)	198
第 56 表	I区ウシ白歯計測値(mm)	198
第 57 表	Ⅲ区魚類出土状況	199
第 58 表	Ⅳ区魚類出土状況	200
第 59 表	V区魚類出土状況 a	201
第 60 表	V区魚類出土状況 b	202
第 61 表	V区魚類出土状況 c	203
第 62 表	Ⅲ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 a	204
第 63 表	Ⅲ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 b	205
第 64 表	Ⅲ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 c	206
第 65 表	Ⅲ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 d	207
第 66 表	Ⅳ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 a	208
第 67 表	Ⅳ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 b	209
第 68 表	V区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 a	210
第 69 表	V区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 b	211
第 70 表	V区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 c	212
第 71 表	V区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 d	213
第 72 表	V区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 e	214
第 73 表	V区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 f	215
第 74 表	Ⅲ区ウマ白歯計測値(mm)	216
第 75 表	Ⅲ区鳥類上腕骨計測値(mm)	216
第 76 表	Ⅲ区哺乳類四肢骨計測値(mm)	216
第 77 表	Ⅳ区ウマ白歯計測値(mm)	216
第 78 表	Ⅳ区鳥類中手骨計測値(mm)	216
第 79 表	Ⅳ区哺乳類計測値(mm)	216
第 80 表	Ⅳ区哺乳類四肢骨計測値(mm)	216
第 81 表	V区ウマ白歯計測値(mm)	216
第 82 表	V区ニワトリ肢骨計測値(mm)	216
第 83 表	V区イヌ四肢骨計測値(mm)	216
第 84 表	V区ネコ四肢骨計測値(mm)	216
第 85 表	V区ウマ四肢骨計測値(mm)	216
第 86 表	V区イノシシ/ブタ四肢骨計測値(mm)	216
第 87 表	V区ウシ四肢骨計測値(mm)	216
第 88 表	貝類の生息場所類型	217
第 89 表	Ⅲ区石組土坑(SM) 巻貝出土数(NISP)	217

第90表	Ⅲ区石組土坑(SM) 二枚貝出土数(NISP)	217	第121表	V区チョウセンサザエ殻の欠損状況による分類(つづき)	229
第91表	V区石組土坑(SM) 貝類出土数(NISP)	218	第122表	V区マガキガイ殻の欠損状況による分類	229
第92表	ヤコウガイ殻 出土数	219	第123表	V区マガキガイ殻の欠損状況による分類(つづき)	229
第93表	ヤコウガイ殻破片 出土数	219	第124表	V区タカラガイ科 貝製品	229
第94表	チョウセンサザエ 出土数(NISP)	222	第125表	Ⅲ区巻貝出土状況 a	230
第95表	サラサバテイラ 出土数	225	第126表	Ⅲ区巻貝出土状況 b	231
第96表	ギンタカハマ 出土数	225	第127表	Ⅳ区巻貝出土状況 a	231
第97表	マガキガイ 分類	225	第128表	Ⅳ区巻貝出土状況 b	231
第98表	タカラガイ 分類	225	第129表	V区巻貝出土状況 a	231
第99表	人骨出土一覧	226	第130表	V区巻貝出土状況 b	232
第100表	Ⅲ区ギンタカハマ 殻の欠損状況による分類	227	第131表	V区巻貝出土状況 c	233
第101表	Ⅲ区サラサバテイラ 殻の欠損状況による分類	227	第132表	Ⅲ区二枚貝・ウニ綱出土状況 a	234
第102表	Ⅲ区ヤコウガイ 殻の欠損状況による分類	227	第133表	Ⅲ区二枚貝・ウニ綱出土状況 b	235
第103表	Ⅲ区ヤコウガイ 破片出土状況	227	第134表	Ⅳ区二枚貝・ウニ綱出土状況	236
第104表	Ⅲ区チョウセンサザエ 殻の欠損状況による分類	227	第135表	V区二枚貝・ウニ綱出土状況 a	237
第105表	Ⅲ区マガキガイ 殻の欠損状況による分類	227	第136表	V区二枚貝・ウニ綱出土状況 b	238
第106表	Ⅲ区タカラガイ科 貝製品	227	第137表	Ⅲ区出土遺物点数表 a	247
第107表	Ⅳ区ギンタカハマ 殻の欠損状況による分類	227	第138表	Ⅲ区出土遺物点数表 b	248
第108表	Ⅳ区サラサバテイラ 殻の欠損状況による分類	227	第139表	Ⅲ区出土遺物点数表 c	249
第109表	Ⅳ区ヤコウガイ 殻の欠損状況による分類	227	第140表	Ⅲ区出土遺物点数表 d	250
第110表	Ⅳ区ヤコウガイ 破片出土状況	228	第141表	Ⅲ区出土遺物点数表 e	251
第111表	Ⅳ区チョウセンサザエ殻の欠損状況による分類	228	第142表	Ⅳ区出土遺物点数表 a	252
第112表	Ⅳ区マガキガイ殻の欠損状況による分類	228	第143表	Ⅳ区出土遺物点数表 b	253
第113表	Ⅳ区タカラガイ科 貝製品	228	第144表	Ⅳ区出土遺物点数表 c	254
第114表	V区ギンタカハマ 殻の欠損状況による分類	228	第145表	Ⅳ区出土遺物点数表 d	255
第115表	V区サラサバテイラ 殻の欠損状況による分類	228	第146表	V区出土遺物点数表 a	256
第116表	V区ヤコウガイ 殻の欠損状況による分類	228	第147表	V区出土遺物点数表 b	257
第117表	V区ヤコウガイ 殻の欠損状況による分類(つづき)	228	第148表	V区出土遺物点数表 c	258
第118表	V区ヤコウガイ 破片出土状況	228	第149表	V区出土遺物点数表 d	259
第119表	V区ヤコウガイ 破片出土状況(つづき)	229	第150表	V区出土遺物点数表 e	260
第120表	V区チョウセンサザエ殻の欠損状況による分類	229	第151表	V区出土遺物点数表 f	261
			第152表	V区出土遺物点数表 g	262
			第153表	巻貝出土一覧	321
			第154表	二枚貝出土一覧	321

## 第1章 発掘調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

**埋蔵文化財事前審査願** 平成22年度に沖縄県立首里高等学校(以下、首里高校)の現校舎の老朽化に伴い、耐震化を図る必要性が生じたため、グラウンド部分を含めた首里高校敷地内に新校舎を改築することが決定した。事業者である沖縄県是那覇市教育委員会文化財課(以下、那覇市文化財課)に、「埋蔵文化財事前審査願」を平成22年10月7日付で提出した。これを受けた那覇市文化財課は平成22年11月5日付で沖縄県に対し、「現況不明」とし、今後調整が必要と回答した。

**試掘調査と初期の調整** 那覇市文化財課は、平成23年8月1日から試掘調査を実施し、遺物包含層と遺構を確認した。那覇市文化財課から試掘調査結果の報告を受けた沖縄県教育庁文化財課(以下、県文化財課)は、8月30日に現地視察し、8月31日には県文化財課、沖縄県教育庁施設課(以下、県施設課)、沖縄県土木建築部施設建築課(以下、県施設建築課)による合同現場調整が行われた。9月9日に現地の首里高校グラウンドにて県文化財課、那覇市文化財課、受注業者である国吉設計、国吉組による話し合いがもたれた。9月21日には県施設建築課、県施設課、県文化財課、国吉設計の集った調整会議において、継続して実施される発掘調査に要する経費は原因者である県施設課が負担することになった。なお、グラウンド北側の沈砂池予定地の発掘調査方法及びグラウンド南側の試掘調査は、現石積に近づくこと、石積倒壊の恐れがあることから、掘り下げ対象は約2.5m以上離れた場所とすることとなった。さらに、グラウンド北側の普通教室棟改築予定地の発掘調査については、平成24年度以降に実施することが決定した。

**工事中の中止** 校舎改築予定地内の埋蔵文化財の広がりを確認するため、平成23年12月8日までの間、那覇市文化財課が試掘・確認調査を断続的に実施した。その結果、グラウンド全域に遺物及び遺構が確認されたため、工事は中止されることとなった。試掘・確認調査を実施した那覇市文化財課は、本発掘調査を要すると県文化財課に報告し、平成24年3月27日に調査結果をまとめた報告書を提出した。

**中城御殿跡の確認** 平成24年2月から3月にかけて、県文化財課立ち会いのもと、校舎改築予定地内のグラウンド部分の造成土を掘削したところ、遺構の保存状態が良いことが確認された。遺構の平面測量を実施した上で、発見された石積遺構と1700年代に描かれたとされる「首里古地図」を重ね合わせる作業などを行い、当該地が17世紀前半に創建された中城御殿跡である可能性

が非常に高いことが判明した。

**工事中断と不発弾の発見** 平成24年3月には埋蔵文化財の発見により中止していた工事について、継続が困難と判断され、校舎改築工事の契約が終了した。こままでの間、不発弾が17発発見され、今後の発掘調査や改築工事に伴い、新たに不発弾が発見される可能性が指摘された。

**調査実施主体の決定** この間、那覇市文化財課と県施設課は埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、県文化財課が実施主体となり発掘調査を実施することとなった。これを受け、平成24年1月20日に県文化財課から沖縄県立埋蔵文化財センター(以下、埋蔵文化財センター)へ発掘調査実施の打診があり、発掘調査に伴う必要経費の算出や現地確認などを行うこととなった。

**関係者への説明会と要請** 平成24年度には、首里高校関係者への工事中断説明会や首里高校保護者説明会を実施した。そのような状況の中、首里高校校舎改築の早期実現を求める要請が首里高等学校PTA会長、養秀同窓会長、元首里高校校長会雄志の会会長の連名で、平成24年11月19日付で沖縄県教育長あてに「首里高校校舎改築の早期実現を求める要請」が提出された。

**南側石積の写真測量** 平成25年2月14日から平成25年3月29日の間、県文化財課は、発掘調査に先立ち、南側石積のトレンチ掘削及び石積の写真測量作業を実施した。

**文化財保護法に基づく手続き** 平成25・26年度当初、文化財保護法に基づく諸手続きは、改築工事に伴う範囲として首里高校グラウンド部分のみを対象として行われていた。今後の校舎改築工事は、首里高校の敷地全域に及ぶことから、事業主体である県施設課と県文化財課で調整を行い、改めて文化財保護法に基づく手続きを行うこととなった。

平成27年12月8日付で沖縄県知事から那覇市教育委員会に対し、首里高校全域を対象とした「埋蔵文化財審査願」が提出された。これを受けた那覇市教育委員会は、平成28年1月26日付で沖縄県に対し、首里高校改築工事のために申請された敷地内には遺跡があり、保存のための調整が必要との回答を行った。

首里高校敷地内の埋蔵文化財の取り扱いについて那覇市教育委員会は、平成28年2月2日付那覇市文化財第419号で沖縄県教育委員会に対し、首里高校内の埋蔵文化財について、確認調査等の対応を実施するよう依頼した。これを受け、平成28年2月9日付教文第1646号で那覇市教育委員会に対し、首里高校校舎改築工事に伴う確認調査等は、沖縄県教育委員会が実施すると回答した。

平成28年10月24日付教施1123号により沖縄県知事から那覇市教育委員会経由で、文化財保護法第94条

に基づく埋蔵文化財発掘の通知が沖縄県教育委員会へ提出された(進達文書は平成28年10月27日付那市文財第298号)。これを受け、平成28年11月7日付教文第1228号で、校舎改築に伴う土木工事等は、埋蔵文化財に影響を及ぼすため、工事着手前に発掘調査を実施することに加え、調査の結果、重要な遺構等が発見された場合は、その保存等について別途協議することと定めた。

その後、県施設課、県施設建築課と調整を行い、解体工事に伴う立会調査は、県文化財課と埋蔵文化財センターが行い、本調査は埋蔵文化財センターが実施することとなり、調査に着手した。

**工事立会** 本調査の他、校舎改築工事の際に、埋蔵文化財へ影響が及ぶ可能性がある際には、立会調査を実施した。立会調査中に確認した遺構の一部は、関係機関との調整の結果、現地保存や記録保存の処置をとった。詳細については、第4節で述べる。

**現地保存** 発掘調査で確認された各種遺構は、近世期の中城御殿やそれらに関連する遺構について、校舎改築工事に影響しない部分は現地保存することとした。また工事に影響する部分は、校舎設計図や施工図と照らし合わせ、最小限の掘削になるように現地で調整を行いながら調査を実施した。保存方法については第5節で述べる。

## 第2節 調査体制

本報告書の首里高校内埋蔵文化財発掘調査は、平成29(2017)・平成30(2018)年度に現地での発掘作業、平成29(2017)～令和3(2021)年度にかけて資料整理作業及び報告書作成を実施した。なお、現地での発掘調査は民間調査組織の支援業務委託を導入した。実施体制は以下の通りである(職名は当時のもの)。

**事業形態** 沖縄県教育庁施設課令達事業

**平成29(2017)年度(発掘調査・資料整理)**

**事業主体** 沖縄県教育委員会

教育長 平敷昭人

教育管理統括監 宜野座葵

教育指導統括監 與那嶺善道

**事業所管課** 沖縄県教育庁文化財課

課長 萩尾俊章

記念物班 班長 上地博

主任専門員 中山晋

**事業総括・事務** 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 金城亀信

総務班 班長 比嘉智博

主任 糸数見子

調査班 班長 仲座久宜

主任 亀島慎吾

専門員 玉城綾

専門員 田村薫

発掘調査作業 史跡・埋蔵文化財調査員

我喜屋優真、平良和輝、波照間紗希、

外間裕一

資料整理作業 埋蔵文化財資料整理員

糸数永子、慶田秀美、鈴木友瑠子、照

屋芳美、仲間文香、宮城友香

**支援業務委託** 株式会社アーキジオパシフィック支店

現場代理人 天久朝海

調査員 本村麻里衣

**平成30(2018)年度(発掘調査・資料整理)**

**事業主体** 沖縄県教育委員会

教育長 平敷昭人

教育管理統括監 宜野座葵

教育指導統括監 與那嶺善道

**事業所管課** 沖縄県教育庁文化財課

課長 濱口寿夫

記念物班 班長 仲座久宜

主任専門員 羽方誠

**事業総括・事務** 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 登川安政

総務班 班長 比嘉智博

主任 糸数見子

主事 富山彬

調査班 班長 中山晋

主任 亀島慎吾

専門員 玉城綾

発掘調査作業 史跡・埋蔵文化財調査員

太田樹也、我喜屋優真、小橋川里江、島袋桃

子、城間宏次朗、平良和輝、平良悟

資料整理作業 埋蔵文化財資料整理員

糸数永子、上田麻紀子、金城礼子、新城京美、

鈴木友瑠子、照屋芳美、渡慶次文、仲間文香、

宮城友香、玉那覇美野

**支援業務委託 (試掘調査)**

株式会社アーキジオパシフィック支店

現場代理人 手塚美穂

技師 宮平千春

(本調査)

株式会社アーキジオパシフィック支店

現場代理人 本村麻里衣

調査員 天久朝海

**平成31・令和元(2019)年度(発掘調査・資料整理)**

**事業主体** 沖縄県教育委員会

教育長 平敷昭人  
 教育管理統括監 儀間秀樹  
 教育指導統括監 半嶺満

**事業所管課** 沖縄県教育庁文化財課  
 課長 濱口寿夫  
 記念物班 班長 仲座久宜  
 主任専門員 羽方誠  
 主任 宮城淳一

**事業総括・事務** 沖縄県立埋蔵文化財センター  
 所長 城田久嗣  
 総務班 班長 池田みき子  
 主事 當山彬  
 調査班 班長 中山晋  
 主任 玉城綾  
 専門員(臨任) 太田樹也

発掘調査作業 史跡・埋蔵文化財調査員  
 我喜屋優真、鳥袋桃子、平良和輝、平良悟、  
 波照間紗希

資料整理作業 埋蔵文化財資料整理員  
 上田麻紀子、金城礼子、新城京美、鈴木友晴  
 子、照屋芳美、比嘉なおみ、手嶋永子、池宮  
 城聡子、宮城友香、仲間文香

## 令和2(2020)年度(発掘調査・資料整理)

**事業主体** 沖縄県教育委員会  
 教育長 金城 弘昌  
 教育管理統括監 儀間秀樹  
 教育指導統括監 半嶺満

**事業所管課** 沖縄県教育庁文化財課  
 課長 諸見友重  
 記念物班 班長 仲座久宜  
 主任専門員 新垣力

**事業総括・事務** 沖縄県立埋蔵文化財センター  
 所長 瑞慶覧勝利  
 総務班 班長 池田みき子  
 主事 當山彬  
 調査班 班長 中山晋  
 主任 亀島慎吾  
 主任 玉城綾

発掘調査作業 史跡・埋蔵文化財調査員  
 太田樹也、平良和輝、古堅あゆみ

資料整理作業 埋蔵文化財資料整理員  
 安次嶺沙織、兼島小百合、金城礼子、新城京  
 美、照屋芳美、上田麻紀子、仲間文香、宮城  
 友香、安里メグ、東仲千夏

## 令和3(2021)年度(報告書刊行)

**事業主体** 沖縄県教育委員会  
 教育長 金城 弘昌

教育管理統括監 佐次田薫  
 教育指導統括監 半嶺満

**事業所管課** 沖縄県教育庁文化財課  
 課長 諸見友重  
 記念物班 班長 仲座久宜  
 主任専門員 新垣力

**事業総括・事務** 沖縄県立埋蔵文化財センター  
 所長 瑞慶覧勝利  
 総務班 班長 池田みき子  
 主任 石原昌一郎  
 調査班 班長 中山晋  
 主任 亀島慎吾  
 主任 玉城綾

## 発掘調査・資料整理協力者・協力機関

## (所属等は当時のもの)

沖縄県立首里高等学校  
 教育庁施設課  
 沖縄県立埋蔵文化財センター 根間翔吾、市川里恵、大  
 城友理華、大村由美子、津多恵、比嘉美智子  
 那覇市市民文化庁文化財課 鳥弘、樋口麻子、吉田健太  
 西村貞雄(琉球大学)、池田榮史(琉球大学)、後藤雅彦(琉  
 球大学)、上原静(沖縄国際大学)、丸山真史(東海大学)、  
 大庭康時(福岡市経済観光局文化財活用部)、當眞嗣一(沖  
 縄考古学会会長)、江上幹子(沖縄考古学会)、山崎真治(沖  
 縄県立博物館・美術館)

## 第3節 調査経過

**過年度の調査概要** 首里高校のグラウンド部分におい  
 て、平成25年7月29日から平成27年2月27日まで  
 の約19か月間、現地での発掘調査を実施した。調査の  
 結果、多くの石積遺構や井戸、ゴミ捨て場跡、敷地造成  
 の痕跡がみられ、当該地が中城御殿跡であることが判明  
 した。加えて中城御殿が創建される以前にも当該地で生  
 活した人々がいたことが判明した。

調査中には、一般県民を対象とした現地説明会を平成  
 25・26年度に各1回ずつ実施した。また、首里高校社  
 会科の授業の一環として在学生を対象とした現地説明会  
 を随時実施するとともに、首里高校関係者を対象とした  
 現地説明会を行った。

発掘調査の際に出土した遺構の一部は、その歴史的価  
 値や保存状態の良さから、関係機関と協議を重ね、現地  
 保存に至った。なお、この協議により、今後の首里高校  
 内に所在する埋蔵文化財については、現地保存が可能な  
 場合は、関係機関と調整等を行いながら工事や調査を進  
 めていくこととなった。

現地保存方法等も含めた平成25・26年度の調査成果  
 については、沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第

93集「中城御殿跡(首里高校内)―首里高校校舎改築に伴う発掘調査―」に収録している。

**調査区** 平成29(2017)・平成30(2018)年度に現地での発掘作業を実施した際に、調査区をⅢ区～Ⅵ区まで設定した。平成29(2017)年度は、Ⅲ・Ⅳ区、平成30(2018)年度はⅤ・Ⅵ区の調査を実施した。今回の報告では、遺構及び出土遺物量や、継続して調査を実施している状況から、便宜的にⅢ～Ⅵ区までの調査成果について報告する。

**平成29年度本調査の概要** 平成29年度の調査は8月24日から年度を繰り越した平成30年4月27日まで実施した。調査前には、旧校舎の地中構造物が残存しており、これらの解体工事を実施する際に、立会調査を実施した。地中基礎と地中梁の間で溝跡を確認したため、記録保存調査を行った。この立会調査の結果や過年度までの遺構検出状況から、地中構造物の間に遺構が残存している可能性が高いため、解体工事を実施する際には立会調査を実施することとした。

発掘調査の支援業務委託として平成29年5月15日から平成30年3月16日まで「平成29年度 首里高校内埋蔵文化財発掘調査に伴う支援業務委託」契約を株式会社アーキジオパシフィック支店と締結した。その後、関係機関との調整を行いながら調査を実施するなか、校舎改築工事の計画変更や想定深度以上の部分で遺構を検出し、調査期間を延長する必要性が生じた。そのため、受注業者と協議を行い、平成30年3月9日及び同年3月27日に計2回の契約期間延長の改訂契約を締結し、平成30年4月30日に業務を完了した。

また、平成29年度中に平成30年度以降の本調査実施予定地で試掘調査を計画していたが、校舎改築の計画変更に伴い、調査を次年度に延期することとなったため、調査費用の次年度予算への繰越手続きを行った。

平成29年度に確認した主な遺構は、中城御殿の北側石垣や門跡、石組土坑などである。

**平成30年度試掘調査の概要** 調査着手前は、旧校舎が残った状態だったため、これらの解体工事を実施している最中に複数回現地確認を行った。解体工事に関しては、地中部分に遺構が残存している可能性が高いことから、上部躯体と下部躯体の解体工事を別々に実施するよう関係機関へ依頼した。

平成29年度から計画変更を行った試掘調査は、平成30年9月18日から11月7日まで実施した。試掘調査の支援業務委託として平成30年7月23日から平成30年9月28日まで「平成30年度 首里高校内埋蔵文化財発掘調査(試掘調査)に伴う支援業務委託」契約を株式会社アーキジオパシフィック支店と締結した。調査期間中、校舎改築工事の計画変更に伴い、調査期間を延長す

る必要性が生じたことから、平成30年9月26日に契約期間延長の改訂契約を締結し、平成30年11月30日に業務を完了した。

試掘調査は、旧校舎の基礎や梁の間を対象に実施した。この試掘調査で、次年度以降に調査実施計画があるⅧ区部分において堆積土の厚さや遺構の残存状況を把握した。

**平成30年度本調査の概要** 本調査は、前述した試掘調査と並行しながら、9月12日に着手し、年度を繰り越した平成31年4月24日に完了した。発掘調査の支援業務委託として平成29年7月23日から平成31年3月29日まで「平成30年度 首里高校内埋蔵文化財発掘調査(本調査)に伴う支援業務委託」契約を株式会社アーキジオパシフィック支店と締結した。調査を実施する中、中城御殿の東側に隣接する遺跡を検出したが、遺構直上まで旧校舎の基礎や地中梁等が残存している状況で、遺構全体を確認するため、地中構造物の解体及び撤去の必要性が生じた。そこで、平成30年11月30日に、数量等変更の協議(第1回)を行い、地中構造物の解体及び撤去作業を実施した。

また、当初想定していた以上の遺構数が確認され、調査期間を延長する必要性が生じたため、平成31年3月28日に契約期間延長の改訂契約を締結し、平成31年4月26日に業務を完了した。

平成30年度の調査では、中城御殿東側の石牆や隣接する遺跡、植園跡に伴う遺構等を確認した。

**文化財保護法に基づく届出** 調査着手後には、文化財保護法第99条の規定により、県文化財課へ着手報告を行った(平成29年9月28日付け埋文第399号、平成30年9月18日付け埋文第441号)。調査終了後には終了報告を行った(平成30年5月2日付け埋文第97号、平成31年4月26日付け埋文第127号)。発掘調査により発見された遺物については、文化財保護法第100条2に基づき、県文化財課に埋蔵文化財発見届を提出した(平成30年5月28日付け埋文第102号、平成31年4月26日付け埋文第126号)。

**普及活動** 一般県民を対象とした現地説明会を平成29年度分の調査成果は、平成30年4月14日に午前1回、午後2回の計3回説明会を実施した。

平成30年度分の調査成果は、平成31年3月2日、同年3月9日に、午前1回、午後2回の計6回の説明会を実施した。発掘調査中ということで、安全確保等の制限があり、人数制限を設けて説明会を実施したが、県民の関心が高いこともあり、参加希望定員は応募期間が始まってすぐに定員に達する状況だった。定員に達した後も参加希望の連絡が多かった。安全面を考慮しつつ、より多くの県民に公開できるように、説明会の開催方法を等

検討する必要があり、今後の課題である。

首里高校の敷地内で調査を実施しているため、調査進捗に応じて首里高校関係者や首里高校生に対して現地案内や現地説明会を実施した。

調査中には、考古学を専門とする研究者や県内及び県外の埋蔵文化財に携わる職員とともに現地確認を行い、遺跡の評価を行う際の助言を受けた。特に、那覇市市民文化財課(旧那覇市教育委員会文化財課。平成25年4月1日から市長部局へ移行。)の職員には、遺跡を管理する当該市町村の関係者として、何度か現地で調査進捗や遺構内容の確認を行い、情報共有を図った。

**日誌抄** 以下、調査経過を調査日誌抄にて示す。また、発掘調査時は多くの遺構を確認し、調査を実施したが、時期決定やそのほか遺跡の本質的な価値づけを行う際に重要となる遺構の概要を中心にまとめる。

#### 発掘調査

##### 平成29(2017)年度

- 7月3日 旧県立博物館跡地に現場事務所設置のための準備を実施。
- 8月11日 校舎建築工事に伴い、立会調査を実施。アスファルトや旧校舎の基礎跡等を確認。
- 14日 立会調査部分で、石列遺構を確認。石列遺構はSX3001と遺構番号を付与。建築工事を一時中断し、遺構調査に着手。
- 15日 民間調査組織を導入して、石列遺構の検出及び記録作業を実施。
- 19日 記録作業が完了したSX3001の掘削及び、校舎建築工事の再開。
- 24日 建築工事終了し、センターに現場引き渡し。Ⅲ区の発掘調査着手。
- 25日 磁気探査を実施。
- 28日 Ⅲ区の重機掘削開始。
- 30日 各種遺構を検出。記録作業と掘削作業(重機・人力)を並行して調査を継続。
- 9月8日 SA3001の上部を検出。石積遺構と判断した。
- 20日 SA3001の根石を確認。SA3001を境目として、北側と南側では根石部分の堆積土の様相が異なることが判明。
- 10月6日 SA3001の北側部分で岩盤が平たく整形された部分を確認。SA3001の構築時に岩盤を整形していることが判明。
- 10日 SA3001の根石周辺で、近世の堆積層が根石下にもぐることを確認。
- 13日 那覇市文化財課の島氏、樋口氏、吉田氏が現地確認。
- 18日 調査が完了した部分に遺構保護のための

保護砂を敷き詰めた。

- 23日 調査区北側を埋戻し。
- 24日 これまでの調査成果や、過年度調査の成果と合わせ、SA3001は中城御殿の北側石牆である可能性が高いと判断した。調査完了写真撮影を実施。
- 25日 調査区北側の埋戻し。遺構がある部分は保護砂を敷き詰めた後に調査発生土で埋戻した。
- 11月1日 Ⅲ区の西側を掘削開始。
- 21日 近代頃の遺構を確認。記録作業を行いつつ、掘削を継続
- 24日 近世期の造成土を確認。一部先行トレンチを設けて下層部分の確認を行ったところ、グスク時代の層を確認した。
- 12月5日 石組土坑(SM)や石敷(SS)等を確認。
- 7日 SA3001が西側に広がっていることを確認。近代期の堆積層を除去後、SM3001を検出。近世期と考えられる層を削平後に構築されていることから、近世期のなかでも新しい時期の遺構の可能性あることを確認。
- 18日 SM3001構築以前の石敷遺構を検出。
- 20日 石敷遺構の下部から石積遺構を検出。
- 22日 SM3001の発掘作業。
- 26日 SM3001の完掘。Ⅲ区西側の基本層序壁面の記録作業を実施。
- 27日 現場養生。
- 1月10日 Ⅲ区西側の完掘写真撮影。順次記録作業を実施。那覇市文化財課の樋口氏、吉田氏が現地確認。県立博物館・美術館の山崎氏が現地視察。
- 11日 那覇市文化財課の島氏が現地確認。沖縄考古学会の常員会長、江上役員、後藤役員、上原役員が現地視察。
- 12日 琉球大学の池田教授が現地視察。
- 16日 検出した遺構を保護砂で覆い、埋戻し作業を開始。
- 17日 IV区の表土掘削開始。50cm掘削する毎に随時磁気探査を実施。
- 30日 SA4001の上部を検出。
- 2月2日 SA4001の北側に炭層を確認。ガラス片等が多く混入することから、戦後に炭等を片付けた際の土と判断。
- 6日 SA4001の裏込め部分の検出。
- 7日 IV区南側の近世段階の層検出。
- 9日 SA4001の根石がⅢ12層上に設置してい

- る状況を確認。
- 13日 SA4002、SM4002を検出。
- 27日 SA4001の立面記録。
- 3月1日 SA4001の裏込め部分を掘削して状況を確認した。確認後は土嚢袋を詰めて保護し、埋戻しを行った。
- 9日 層序確認用トレンチの完掘。これらの状況から近世段階の造成土の状況が判明。校舎建築の影響のない部分については、掘削を行わず現地保存することとした。
- 14日 IV区北側の掘削開始。IV区南側の遺構について記録作業を実施。
- 15日 SA4003の検出。
- 20日 SA4001の西側部分を検出。
- 22日 西村貞雄氏にSA4001の現地確認及び指導を受ける
- 23日 SA4001の西側部分を保護砂で覆い、埋戻しを開始。
- 27日 調査区東壁の記録作業。
- 29日 上原静氏にSA4001の現地確認及び指導を受ける
- 4月5日 SA4003の全体状況確認。歩道に用いられた石積であると判断した。
- 10日 一般現地説明会前に、当センター所長を含めた職員による現地打ち合わせ。
- 11日 調査完了状況の空撮を実施。
- 14日 一般県民対象の現地説明会を実施。
- 16日 市町村関係者対象の現地説明会を実施。
- 17日 首里高校生を対象とした現地説明会を実施予定だったが、雨天のため室内にて遺物等の見学会を実施した。
- 18日 検出した遺構及び調査区全体を保護砂で覆い、埋戻しを開始。
- 19日 SA4001北側部分も保護砂で覆い保護。
- 20日 IV区南側の土層確認用トレンチ内部はすべて保護砂で埋戻した。
- 26日 埋戻し作業が完了。
- 27日 仮囲いや現場事務所等の撤去完了。平成29年度の発掘調査を完了した。
- 平成30(2018)年度**
- 8月7日 V区にあたる旧管理・特別教室棟の解体工事の立会調査を実施。
- 8日 SD5001を検出。
- 9日 SD5001及び関連する石敷遺構を確認。近世期の遺構と判断。
- 10日 層序確認用のトレンチを設定し、記録作業を実施。
- 14日 SD5001部分は今回の解体工事では撤去しないで工事を進めることを協議。遺構を残した状況で解体工事を進めることとなった。
- 20日 地中梁等を除去後に、柱穴等を確認。記録作業を実施。
- 22日 立会調査完了。現場引き渡し等について協議し、9月12日から調査着手することとなった。
- 9月12日 発掘調査に着手。磁気探査を実施。
- 18日 表土掘削開始。試掘調査に着手。V区にトレンチ1～2を設定。VIII区にトレンチ3～10までを設定した。
- 21日 トレンチ1の層序確認。トレンチ2でSS5001の検出。
- 26日 台風24号接近のため、調査現場の台風対策を実施。
- 10月3日 台風25号接近のため、調査現場の台風対策を実施。
- 10日 トレンチ2の下層確認を実施。トレンチ2の調査完了。トレンチ3で近世期の遺構を検出。
- 16日 トレンチ3、4の記録作業。
- 22日 トレンチ1、7の遺構検出。
- 23日 トレンチ5の遺構検出。トレンチ7の下層確認及び遺構検出。
- 24日 トレンチ6の遺構検出。
- 25日 県文化財課の濱口課長、仲座班長、羽方主任専門員が現地確認。
- 26日 トレンチ3～7の埋戻し。掘削した面は保護砂で覆い、保護砂の上には調査発生土を埋戻した。
- 29日 トレンチ8～10の調査開始。
- 30日 トレンチ8～10の遺構検出。
- 11月6日 トレンチ8～10の埋戻し。掘削した面は保護砂で覆い、保護砂の上には調査発生土を埋戻した。
- 7日 試掘調査完了。調査区北壁の記録作業。
- 9日 近代、近世2面、グスク時代1面の合計4面の遺構面があることが判明。
- 27日 那覇市文化財課の職員が現地確認。
- 29日 トレンチ1内でSM5002の検出。
- 12月6日 V区西側に残存していた旧校舎の基礎解体及び撤去。
- 17日 SM5002の半載。ヤコウガイ片などが多量に出土。
- 19日 SD5001に隣接する道跡(SF5001)の検出。

- この道跡を切る形でSD5004を検出した。
- 27日 SM5002の完掘。昨年度検出したSA3001の東側部分を検出。
- 1月7日 昨年度検出したSA4001の東側部分を検出。遺構名は新たにSA5005と付与した。
- 9日 近世期の遺構が確認できているので、校舎改築に影響のある部分までの掘削を実施することとなった。
- 21日 SF5001の全体確認。
- 22日 高麗大学考古研究所関係者15名が現地視察。
- 24日 V区の空掘。
- 25日 SF5001の全体状況の写真撮影。中城御殿が機能していた当時の中城御殿の石牆や隣接する道跡、道に伴う溝跡と判断した。
- 30日 一部調査完了部分に保護砂を搬入。インターシップの一環で仲西中学生2名を受入。
- 2月7日 現場に残存している旧校舎の地中梁を解体及び撤去。VII区の表土掘削
- 12日 VII区の地山面で柱穴跡や石組土坑等の遺構を多数確認
- 14日 トレンチ1に保護砂搬入。VII区の近代以降の堆積土が残っている部分の掘削。
- 25日 SA5004の南側部分の掘削。東海大学丸山氏、学生1名現地確認。
- 26日 RBCの取材を受ける。SF5001を中心とした調査成果を説明した。
- 3月2日 一般県民対象の現地説明会を実施。
- 4日 校舎改築に影響がある高さまで掘削した部分に、下層確認トレンチを設定して下層確認を実施。
- 5日 市町村埋蔵文化財関係者対象の現地説明会を実施。
- 9日 一般県民対象の現地説明会を実施。
- 11日 グスク時代の遺構面を確認した部分で、階段状に段を構築している部分を確認。VII区の近世期の遺構検出。
- 13日 SA5003の石積の高さが2m以上になることを確認した。
- 18日 当センター職員、恩納村教育委員会、与那原町教育委員会職員による現地視察。
- 19日 首里高校職員が現地見学。
- 20日 校舎改築の際の校舎基礎新設部分の位置出しを現地で実施。基礎部分にかかる遺構を記録保存し、それ以外の部分は現地保存することとなった。

- 25日 SA5002の断ち割り。
- 26日 V区北側部分の調査完了。
- 4月3日 SA5004部分に保護砂を搬入。
- 4日 V区北側に保護砂を搬入し、埋戻し開始。
- 9日 当センター所長を含めた職員が現地視察。
- 17日 VII区に保護砂搬入し、埋戻し開始。V区埋戻し完了。
- 19日 VII区埋戻し完了。
- 24日 現場事務所等の撤去完了。平成30(2018)年度の発掘調査完了。

#### 整理等作業

**報告書掲載事項** 今回の報告書作成にあたり、遺構及び遺構出土遺物を掲載することを最優先とした。中でもIII区の石組土坑(SM)など、出土遺物組成が良好で、年代観等を把握するうえで重要な遺構を中心に、選定を行った。

今回報告するIII～V区は、調査時期が複数年にまたがり、各調査区が別々に調査していることに加え、人為的な造成により同時期の層でも土色や混入物等が異なることから、層序把握が困難だった。そのため、層序の対応関係等について、堆積層の由来や造成方法、遺物組成などを詳細に検討した結果、対応層序について把握することが出来た。これらの層序の年代観を示すため、包含層出土遺物を掲載することとした。

**掲載遺物** 図化可能遺物と、年代観の把握が可能な中国産陶磁器、本土産陶磁器等を中心に選定した。また、遺物組成等がわかるように遺物を選定した。図化困難な遺物でも、遺構の時期を示す遺物等の存在や、遺構内での遺物組成を示すため、第5章で各遺構や層序の出土遺物の点数表を示すこととした。

**自然遺物** 脊椎動物遺体及び貝類遺体が多く出土した。これらの遺物は、当遺跡の食性等を考える上で重要なことから、現生標本を用いて同定作業を行い、結果を集計した。同定作業の際には、丸山真史氏(東海大学)の指導を得た。

**人為的割り取りの見られる貝類** 自然遺物の同定・集計作業を進めるなかで、貝類遺体のなかに、食料残渣とは異なる人為的割り取りのみられるものが確認できた。これらは、首里城跡銭蔵東地区や東村跡等で類似資料があることから、両遺跡出土資料を参考にして検討を行うこととした。

**報告書の刊行計画の変更** 報告書は、令和2年度中に刊行予定だったが、遺物実測、写真撮影等に想定以上に時間を要したため、報告書刊行の計画を令和3年度へ変更し、それに伴う印刷製本費について教育庁施設課と調整後、令和3年度への繰越を行った。



1 Ⅲ区磁気探査状況



5 V区校舎基礎撤去状況



2 Ⅲ区表土掘削状況



6 Ⅲ区遺構検出状況



3 Ⅲ区重機掘削状況



7 Ⅳ区遺構内掘削状況



4 V区重機掘削状況



8 Ⅲ区遺構保護砂搬入状況

第1図 調査経過1



1 首里高校生インターンシップ①



5 市町村埋蔵文化財関係者対象の現地説明会



2 首里高校生インターンシップ②



6 一般県民対象の現地説明会



3 首里高校関係者現地説明会



7 上原 静教授(沖縄国際大学)現地指導



4 首里高校生道跡内容説明会



8 遺物洗浄

第2図 調査経過2

## 第4節 立会調査

### 第1項 経緯と経過

首里高校内で確認された遺構は、現地保存が可能な部分に関しては地中保存している。

調査が完了し、遺構保護した後に埋戻しを実施したが、校舎改築工事に伴い、遺構付近まで掘削を行う場合があった。その際には、関係機関と事前調整を行い、当センター職員及び教育庁文化財課職員の立会調査を実施することとなった。立会調査時には、遺構への影響の有無を確認した。一部、遺構を掘削する必要がある部分は、掘削を最小限にするよう調整し、記録保存調査を実施した。

立会調査は、平成28年度から随時実施し、令和3年度現在も校舎改築工事に伴い実施している。

立会調査実施経過については、第1表に示す。

### 第2項 立会調査成果

立会調査成果については、調査実施順に報告する。立会調査の結果については、工事に伴う包含層や遺構の掘削状況について3段階の判別を行った。

#### 1 旧理科棟部分

旧理科棟基礎埋設物の解体工事に伴い、立会調査を実施した。旧理科棟浄化槽を解体後、側面に中城御殿に伴う造成土層を確認した。これより下部にも中城御殿に伴う堆積層を確認したが、この掘削面で解体工事が完了したため、これら堆積層の掘削は行っていない。

旧理科棟のフーチング及び地中梁部分について、解体を行うために掘削した範囲で中城御殿に伴う堆積層は確認されなかった。

第1表 工事立会一覧

No	調査年	西暦	期間	立会箇所・工事	埋蔵文化財への影響
1	平成28	2016	12月14日～19日	旧理科棟(調査III区にあたる)	A
2	平成29	2017	1月10日～17日	II区	A
3	平成29	2017	3月30日	A型側溝設置工事	A
4	平成29	2017	4月14日	綾門大道 旧校舎南西部(案内看板撤去)	A
5	平成29	2017	6月8日	旧普通教室棟南側 電気配管	A
6	平成29	2017	6月30日	綾門大道 街灯移設工事	B
7	平成29	2017	8月11日～23日	III区 校舎基礎梁掘削(SD3001 確認)	C
8	平成29	2017	9月21日～10月6日	南門(校舎側・綾門大道側)の掘削	B
9	平成29	2017	10月11日	水道管理設場所の掘削(2か所)	C
10	平成29	2017	10月13日	南門(校舎側)既設石積の撤去工事	C
11	平成29	2017	11月1日	南門(南西側)入口部分の排水柵設置工事	A
12	平成30	2018	5月10日	IV区(現VIII区)部分の土掘削	A
13	平成30	2018	6月27日～7月27日	校舎(旧管理棟)上屋部分解体	A
14	平成30	2018	8月7日～22日	V区校舎(旧管理棟)基礎部分掘削 先行調査として緊急発掘調査を実施	C
15	令和元	2019	5月30日～6月18日	V・VI区 校舎基礎梁撤去工事	B
16	令和元	2019	7月9日～12日	H鋼打設工事	B
17	令和元	2019	9月30日・10月11日	新校舎(東棟)根切工事	B
18	令和2	2020	2月10日～17日	旧校舎基礎梁撤去工事	B
19	令和2	2020	2月25日～4月20日	汚水柵移設工事(試掘調査実施)	C
20	令和2	2020	4月28日～5月15日	新校舎(東棟)根切工事・既設汚水管撤去工事	C
21	令和2	2020	7月30日～31日	新設雨水管設置工事	A

A:影響なし。もしくは包含層・遺構の確認のみ B:包含層の掘削を伴う C:遺構の掘削を伴う

## 2 発掘調査Ⅱ区

校舎改築工事の進捗に伴い、今後の発掘調査を実施することが困難と考えられる部分について、発掘調査を実施した。このとき発掘調査を実施した部分をⅡ区としている。

調査開始前の地表面の標高は89.6mでそこから約1.5mの掘削を実施し、標高88.1mまでの遺構及び堆積層の確認を実施した。

調査の結果、調査を実施した深度までは客土で構成されている状況だった。平成24年度に不発露処理場があった部分に重なっていることもあり、攪乱が激しかった。

一部で中城御殿に伴う造成土と思われる層序を確認したが、Ⅱ区部分は標高88.1m以下については校舎改築工事の影響が及ばないことから、これ以上の掘削は行わず、地中に保存することとした(第4図1)。

## 3 A型側溝設置工事

首里高校敷地の西側にA型側溝を設置する部分があり、立会調査を実施した。当該部分は、平成25・26年度の調査時には、現在の首里高校擁壁が崩落する可能性があったことから、調査が実施不能だった部分にあたる。

調査の結果、平成25・26年度調査時のI層とした客土のみを確認した。地中に残存する埋蔵文化財への影響はなかった。

## 4 綾門大道 旧校舎南西部 案内看板撤去工事

首里高校敷地の南側の道路部分は、綾門大道にあたるものが那覇市教育委員会の試掘調査により確認されている(那覇市教育委員会平成27年3月9日埋蔵文化財事前審査報告書)。

綾門大道の部分で、改築に伴う工事を実施する際には、立会調査を実施することとしたため、案内看板撤去工事の際に立会調査を実施した。

案内看板は、地中まで基礎が伸びておらず、地表面近くに設置されているものだったため、地中に残存する埋蔵文化財への影響はなかった。

## 5 旧普通教室棟南側

電気配管の設置工事に伴う立会調査。工事関係者との調整の結果、既存石積や地表面の掘削は行わず、地表に露出する形で設置となった。埋蔵文化財への影響はなかった。

## 6 綾門大道(首里高校南西部)

街灯移設工事に伴う立会調査を実施した。既設街灯の移設地点を掘削した。オーガーを用いて円柱状に掘削を行った(第4図2)。

当該地の周辺は、平成27年2月23日～26日に那覇市教育委員会が試掘調査を実施しており、その調査成果を参考とした。

調査成果については、オーガーでの掘削だったため、

写真記録及び断面模式図を作成して記録した。

調査の結果、地山を含めて5枚の層序を確認した。1～3層は、アスファルトなどの混入を根拠に、近代以降の層と判断した。4層は暗褐色土で礫が混入していた。4層は、那覇市の試掘調査で暗褐色混礫層として確認されており、綾門大道に関連する層だと考えられるが、整地の痕跡等は確認出来なかった。その下部は地山だった。4層からの出土遺物はなかった。

## 7 III区 校舎基礎梁撤去工事

調査区のIII区にあたる部分の校舎基礎梁の撤去工事に伴い立会調査を実施した。基礎梁と基礎梁の残されたわずかな範囲で溝跡(SD3001)を確認した(第4図3)。

支援業務委託した民間調査組織の作業員を導入し、検出及び記録作業を実施した。後に実施したIII区の調査成果と合わせて検討した結果、確認した溝跡は近代以降の首里高校に関連する溝跡だと判断した。

調査後は、遺構の掘削を実施した。

## 8 南門(校舎側・綾門大道側)の掘削

南門側のコンクリート壁撤去に伴う立会調査を実施した。コンクリート壁の下部からは石積遺構を確認した。また、一部では石敷遺構も確認した(第4図4・5)。これらの遺構に伴う遺物は確認できなかったため、遺構の使用年代等は不明である。

当該部分では、排水樹の設置工事があったため、確認した石積や石敷遺構については保護土で覆ったあとに施工した。

## 9 水道管埋設場所の掘削

水道管設置に伴う立会調査。1か所は、包含層や遺構まで到達しない深度での工事だった。

もう1か所は、西側の石積擁壁を掘削した後、石積内部の掘削を実施した。その結果、石積内部ではグスク時代と考えられる包含層及び柱穴跡を確認した(第4図6)。石積擁壁は、既設の水道管の上部に設置されていることから現代の石積擁壁であると判明した。

確認した部分は、これ以上の掘削がなかったため、写真記録をとり、調査を終了した。

## 10 南門(校舎側)既設石積の撤去工事

今回対象となる既設石積に関しては、試掘調査や写真測量の結果、近代以降の石積と考えられていたため、工事影響部分の石積撤去を実施した。築石及び裏込めの掘削を実施した(第4図7・8)。

## 11 南門(南西側)入口部分の排水樹設置工事

工事のため、掘削等を実施したが工事影響範囲がすべて攪乱層の範囲でおさまった。

## 12 IV区(現VII区)の土掘削

既設のプレハブやトンブロックの撤去に伴う工事だった。遺構や包含層に及ばない範囲での工事だった。

### 13 校舎(旧管理棟)上屋部分解体

第3節で述べたとおり、通常の解体工事とは異なり、上部躯体と下部躯体の解体を分けて実施した。基本的に上部躯体の解体だったので、遺構や包含層へ及ぶ掘削等はなかった。

### 14 V区校舎(旧管理棟)基礎部分掘削

普通教室棟建築に伴い、深い深度まで掘削が必要な部分を先行して工事する必要があることから、立会調査を実施した。

この際、道跡及び排水溝跡を確認した(SF5001及びSD5001)また、グスク時代と考えられる柱穴跡を確認した(第5図1・2)。

これらの道跡は、首里古地図に描かれる道跡等の可能性が高かったことから、関係機関と調整を行い、当該部分の掘削は行わず、後の本調査で詳細に調査を行うこととなった。柱穴跡部分は、旧校舎の基礎等が近くまで及んでいたため、撤去のために掘削が必要があることから、記録保存調査を実施した。

このとき確認した道跡の遺構は、V区の本調査の際に改めて記録作業等を実施した。

### 15 V・VI区校舎基礎梁撤去工事

旧校舎の基礎梁棟を撤去する際に、遺構に抵触する可能性があることから立会調査を実施した。基礎梁周辺のみを掘削する工事方法で実施したため、当該部分での遺構掘削等は発生しなかった。

### 16 H鋼打設工事

首里高校敷地内の北西側に工事用地確保のため、H鋼打設を実施した。調査区の端にあたる部分で安全上の対策が困難な箇所でも未調査部分への打設となった。

オーガーによる掘削だったため、掘削土で土色の変化や遺物の有無を確認した。その結果、掘削が近世の包含層やグスク時代の包含層まで及んでいることが確認できた。

### 17 新校舎(東棟)部分根切工事

新校舎建設部分の根切工事を実施する際に、遺構や包含層に抵触する可能性があったことから、立会調査を実施した。

一部の包含層の掘削があったが、遺構に影響が及ぶ範囲での工事はなかった。

### 18 旧校舎基礎梁撤去工事

旧校舎の基礎梁撤去の際に遺構や包含層に抵触する可能性があったことから立会調査を実施した。

一部包含層の掘削が発生し、遺構の近くまで影響が及ぶ部分があった。遺構部分は掘削せず、工事を実施することとなった。

### 19 汚水樹移動工事(試掘調査実施)

汚水樹の設置工事に伴う立会調査を実施した。2か所の立会調査を行い、それぞれ包含層及び遺構を確認した。

**1 地点** 汚水樹を設置するための掘削部分で、溝跡(SD5008)を確認した。この遺構は、溝に使用される石材や漆喰等の状況から、近代の首里高校に関連する溝跡と考えられる。記録後、掘削を行ったところ、遺構下部から道跡及び溝跡を確認した。これらの遺構はV区で確認した道跡(SF5001)にあたる。確認した遺構は、工事の影響を受けないことが判明したため、記録後に現地で埋戻して地中保存している(第5図4)。

**2 地点** 溝跡(SD7001)及び石組土坑(SM7002)を検出した。溝跡(SD7001)は溝石1点確認したのみであるが、溝石の後方部の包含層の状況等から近世期の溝跡と考えられる。この溝石は工事影響範囲内にあったため、記録後は遺構掘削を行った。

石組土坑(SM7002)は、周辺調査区の様相と合わせると、グスク～近世期の遺構と考えられる(第5図3)。この遺構も工事影響範囲内にあったため、記録後に石組土坑の上から1段目の石を掘削した。2段目以降の石は現地で地中保存している。

### 20 新校舎(東棟)根切工事・股設汚水管撤去工事

新校舎(東棟)建設に伴う根切工事があるため立会調査を実施した。当該部分は、調査区V区にあたり、当初設計で遺構に抵触する範囲が判明していた部分もあり、調査中に遺構を一部掘削している部分もあった。遺構にかなり近い状況で校舎基礎等を設置している部分もあるため、遺構保護のための防湿シート等を設置した。遺構と校舎基礎等の状況については、第5節で詳述する。工事影響範囲にあった遺構は、SA4001、SA5001、SA5002、SD5001、SD5002、SD5008、SF5001である(第5図5～8)。石積遺構や道跡に伴う遺構が主である。

### 21 新設雨水管設置工事

新設雨水管設置工事に伴い、立会調査を実施した。

立会調査の結果、工事影響範囲内に包含層及び遺構が含まれていなかったため、立会調査を完了した。



第3図 工事立会箇所(番号は第1表工事立会一覧の番号に対応)



1 №2 Ⅱ区 完掘状況(南東から)



5 №8 南門石積・石敷検出状況(南から)



2 №6 新設街灯部分 堆積状況(東から)



6 №9 水道管埋設部分 堆積状況(南から)



3 №7 Ⅲ区 SD3001 検出状況



7 №10 南門既設石積 掘削状況(北から)



4 №8 南門石積検出状況(南東から)



8 №10 南門既設石積 掘削状況(北東から)

第4図 工事立会1



1 №14 SF5001 検出状況(北から)



5 №20 SA5003 検出状況(西から)



2 №14 SF5001～5027 完掘状況(西から)



6 №20 地山検出(南東から)



3 №19 SF5001・SD5004 検出状況(南西から)



7 №20 SA5002 防湿シート敷設状況(南から)



4 №19 SD7001・SM7002 検出状況(北東から)



8 №20 フーチング範囲(南西から)

第5図 工事立会2

## 第5節 遺構の現地保存

### 第1項 現地保存に至る経緯

**経緯** 遺構の現地保存に至る経緯については、『中城御殿跡(首里高校内)』(沖縄県立埋蔵文化財センター2017)に記載しているもので、参照されたい。前回の調査と同様、重要な遺構が確認された際には、関係機関の協力を得て、現地保存が可能な部分があった。

**保護方法** 発掘調査において検出した遺構を保護するにあたり、当センターで実施した遺構保護事例として、伊是名村具志川島遺跡、船越原遺跡の保護方法を参考にした。両遺跡で実施された、保護砂で埋戻す方法を採用して遺構保護を実施した。

**遺構保護後の現地** 遺構保護が完了した後は、開発工事側に引き渡した。改築工事が開始されると、それに伴い掘削等を実施するが、遺構保護砂が確認された際には、連絡を受け、現地確認を行うことがあった。材質の異なる保護砂を用いることで、誤って遺構が掘削されることがなかったため、保護砂の採用は有効だったといえる。これらの事例をもとに、Ⅲ～Ⅴ区までの遺構保護については、遺構を保護砂で覆う方法を採用した。

### 第2項 遺構保護

**Ⅲ区** 東側と西側に調査区を分けて調査を実施し、東側部分が完了後、埋戻しを行い、埋戻し完了後に西側部分の調査を実施した。埋戻しは調査発生土を用いたが、遺構がある部分に関しては、保護砂を用いた。

**埋戻しの材料** 遺構を覆う部分の保護材料として、材料名：路盤材料—種類・呼び方：海砂(白砂) (以下、保護砂)を採用した。この際、塩抜きされた海砂を使用することとした(第6図)【塩分(NaCl%) 0.001 (規格・基準 0.04%以下) (一財)沖縄県建設技術センター 管理番号 201795408 平成29年4月12日付】。

**遺構保護** Ⅲ区で確認された遺構の保護は、調査区内の窪地に保護砂を充填する形で実施した。保護砂で遺構を覆った後は、調査発生土で埋戻しを行った(第7図1～3)。

**Ⅳ区** Ⅲ区で用いた保護砂を使用して遺構保護を行った。SA4001を境として北側部分から遺構保護を開始した。SA4001の根石を覆う高さまで調査区全体に保護砂を充填し、その後SA4001の北面を埋戻さないように法面を残す形で調査発生土で埋戻しを行い、SA4001の天端付近まで全体的に埋戻した段階(第7図4)で、SA4001の北面部分に保護砂を充填した(第8図1)。SA4001の南側は、全体的に保護砂を充填し、最後にSA4001の中央部分(最も残存高がある部分)に保護砂を盛る形で遺構保護を実施した。その後、調査区全体を調

査発生土で埋戻した。

**Ⅴ区** Ⅲ区と同様の保護砂(第6図)を採用した(材料名：路盤材料—種類・呼び方：海砂(白砂)【塩分(NaCl%) 0.003 (規格・基準 0.04%以下) (一財)沖縄県建設技術センター 管理番号 201809142 平成30年4月23日付】)。

**道跡(SF5001)** 西側に土糞で小堤を設け、保護砂を搬入し、東側部分は調査発生土で埋戻しを行った(第8図2)。

**校舎基礎間の遺構保護** トレンチ部分等の遺構保護は、土糞やベニヤ板等を用いて区画をつくり、その内部を保護砂で充填した(第8図3)。

**窪地の遺構** 調査によって窪地(トレンチ等も含む)となった部分の遺構は、内部を保護砂で充填する形で遺構保護を行った(第8図4・5)。

**SA5002** 土糞で周囲に小堤をつくり、その内部を保護砂で充填した(第8図6)。

**SA5004** SA5004の南側に調査発生土で小堤をつくり、その内部を保護砂で充填した(第8図7)。

**岩盤部分** 調査により岩盤を露出した部分は、保護砂や調査発生土で埋戻しを実施しなかったため、埋戻し完了時には露出している(第8図8)。

### 第3項 校舎基礎と遺構

**校舎基礎** 新校舎の基礎杭及びフーチング、梁などの配置図については、果設設課より提供していただいた。それを遺構図に重ねたのが第9～11図である。設計上、基礎杭やフーチング、梁の位置が主要な遺構にかかる場合は、関係機関と調整を行い、遺構への影響が出ない部分へ設置位置等を変更していただいた。変更が出来ない部分は、記録保存調査を実施することとなった。

遺構と校舎基礎の重ね図(見通し断面図)を第12・13図に示す。第13図には断面部を示す平面図を掲載しており、赤線は新校舎断面で、緑線が対応する遺構の断面を示している。

**道跡(SF5001等)** 校舎設計上、遺構に影響の出る部分は、記録保存調査を実施した(第14図)。このときの記録保存調査は、基礎杭やフーチングにあたる部分のみをトレンチ調査を実施した。そのため、トレンチ部以外は現地保存することができた。また、梁の部分は遺構に接触しない部分もあったため、接触しない部分はそのまま現地保存している。なお、SF5001路面については、一部基礎杭が打設されている部分がある。

**1-1'断面(第15図)** 西側部分では、立会調査時に近代の溝跡が確認できたが、新しい時代の遺構だったため、記録後に遺構を取り外した。その下部ではSF5001の路面を検出した。東側のSA5001の石積の一部が基礎

にあたるため、記録後に取り外した。SD5001の石敷等はそのまま現地保存できた。

**2-2'断面(第15図)** 梁の下部で一部、SA5001に非常に近い部分にあたるため、当該部分は防湿シートで覆い、現地保存している。

**3-3'断面(第17図)** 基礎や梁により、SA5001やSA5003、SD5002、SF5001の路面の一部が接触する部分について、記録後に掘削を行った。

**4-4'断面(第15図)** 梁にあたる部分だったが、遺構への影響はなかった。

**5-5'断面(第16図)** 西側部分は、校舎基礎にあたる部分で、SA5003の一部を掘削した。東側部分は、SD5001にあたる部分だが、石敷等が残存していない部分だった。また、梁が遺構に接触しないように、形状変更していただいた。

**6-6'断面(第16図)** 校舎基礎と梁の部分だが、遺構への影響はなかった。

**7-7'断面(第17図)** 校舎基礎と梁の部分でSA5001、SD5001、SD5008、SF5001の路面部分の一部を記録後、掘削している。

**8-8'断面(第16図)** 校舎基礎により、SA5001にあたる部分があり、記録後に掘削した。その際、基礎部分からわずかに外れる部分は防湿シートで覆い現地保存している。また、梁が遺構に接触しないように、形状変更していただいた。

**SA5002(第18図)** 石積遺構に梁があたる部分があるため、その部分を断ち割り、断面構造を記録した。

**9-9'断面(第18図)** 遺構に接触する部分もあったが、一部、梁の形状変更により、造成部分が残存している。

**10-10'見通し図(第18図)** 遺構に接触する部分は記録後に掘削している。梁に近い部分は防湿シートで覆い、現地保存している。

**SA4001(第19図)** 遺構を掘削していないが、遺構に近い部分に梁が来るため、その部分に関して防湿シートで覆い、遺構保護を実施した。



第6図 遺構保護砂



1 Ⅲ区西 保護砂埋戻し状況(北東から)



2 Ⅲ区東 保護砂埋戻し状況(南西から)



3 SA3001 保護砂埋戻し状況(南西から)



4 Ⅳ区北 保護砂埋戻し状況(北東から)

第7図 遺構保護 1



1 SA4001 埋戻し状況(保護砂+残土)(北東から)



5 SD5002 保護砂埋戻し状況(南東から)



2 SF5001 保護砂埋戻し状況(南東から)



6 SA5002 保護砂埋戻し状況(南東から)



3 V区トレンチ1 保護砂埋戻し状況(南西から)



7 SA5004 保護砂埋戻し状況(南東から)



4 V区トレンチ8 保護砂埋戻し状況(南西から)

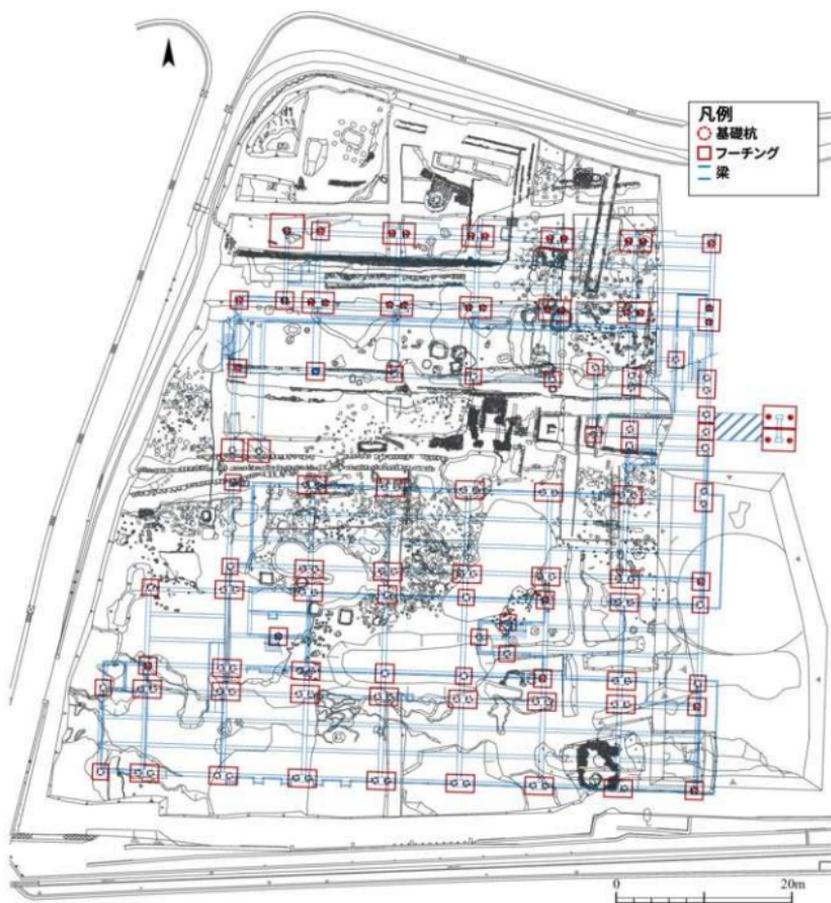


8 V区 埋戻し完了状況(南東から)

第8図 遺構保護2



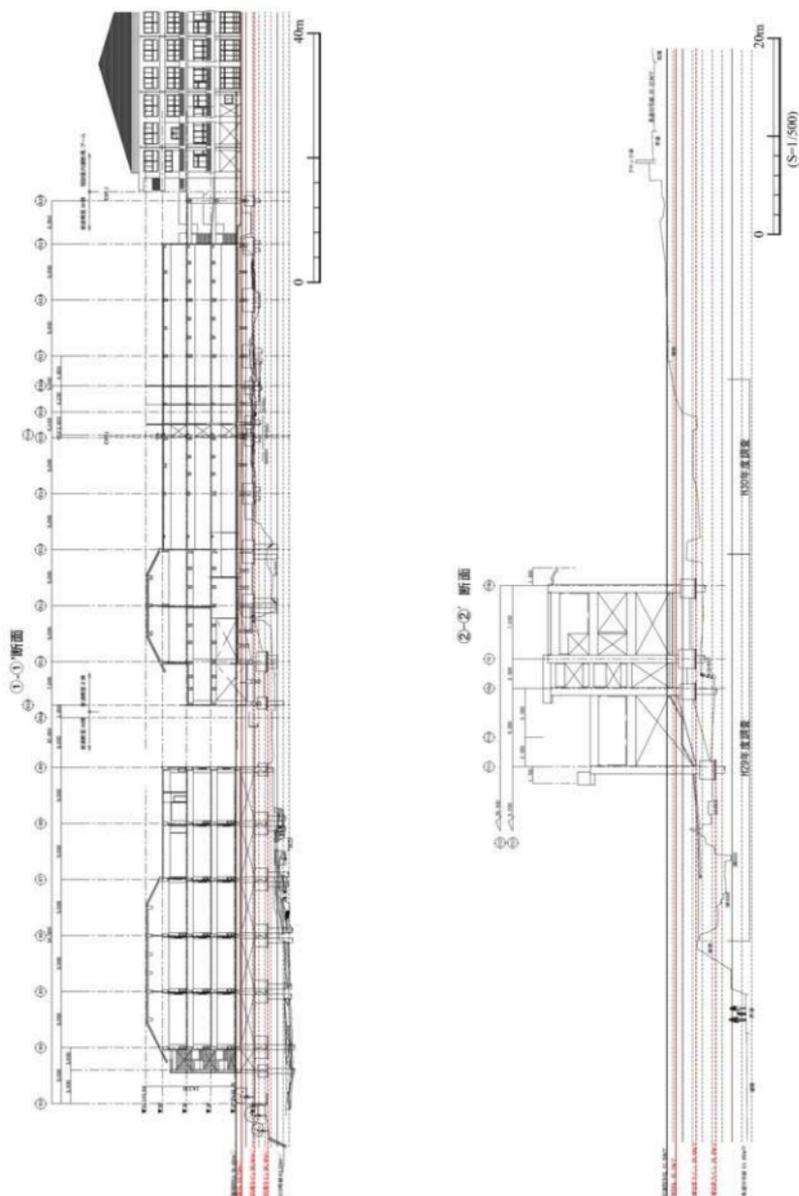
第9図 遺跡と新校舎地中梁基礎重ね図(沖縄県教育庁施設課提供図面に、遺構位置図を加えた。)



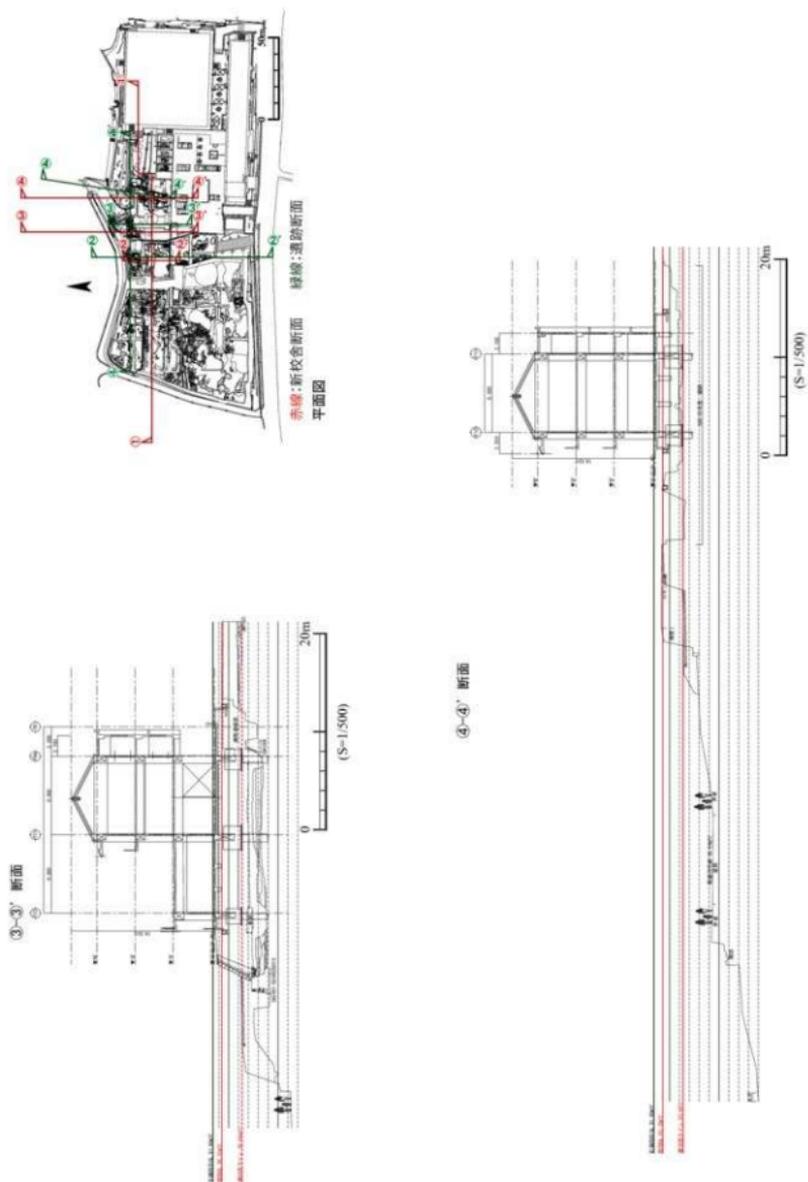
第10図 遺跡と校舎基礎重ね図(Ⅰ区)(沖縄県教育庁施設課提供図面に、遺構位置図を加えた。)



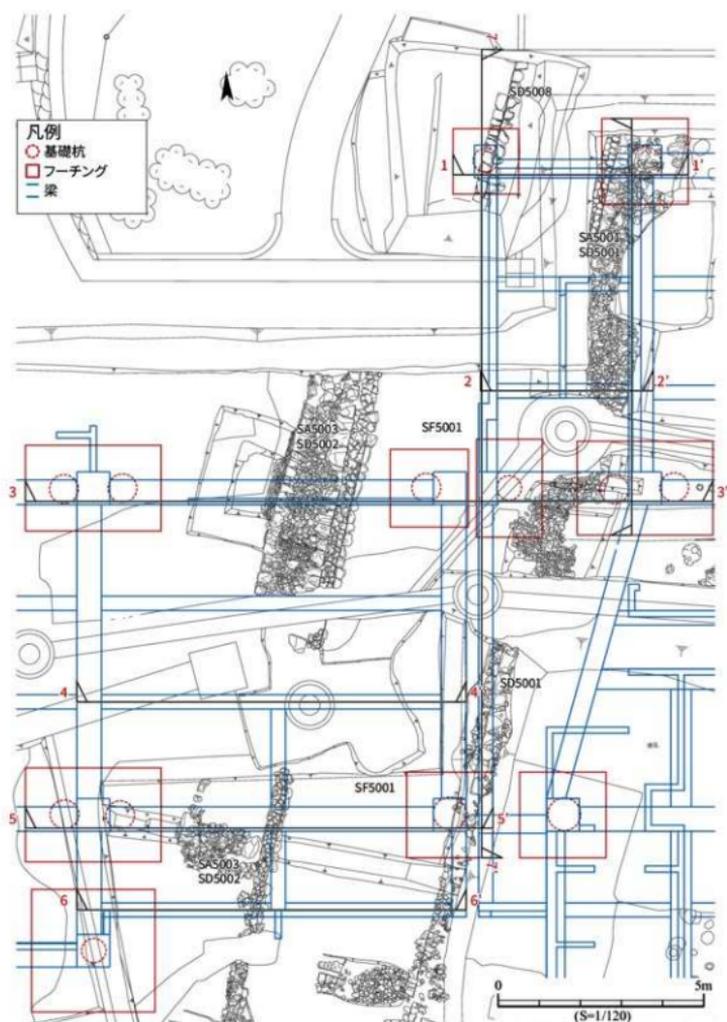
第11図 遺跡と校舎基礎重ね図(III区、IV区、V区)(沖縄県教育庁施設課提供図面に、遺構位置図を加えた。)



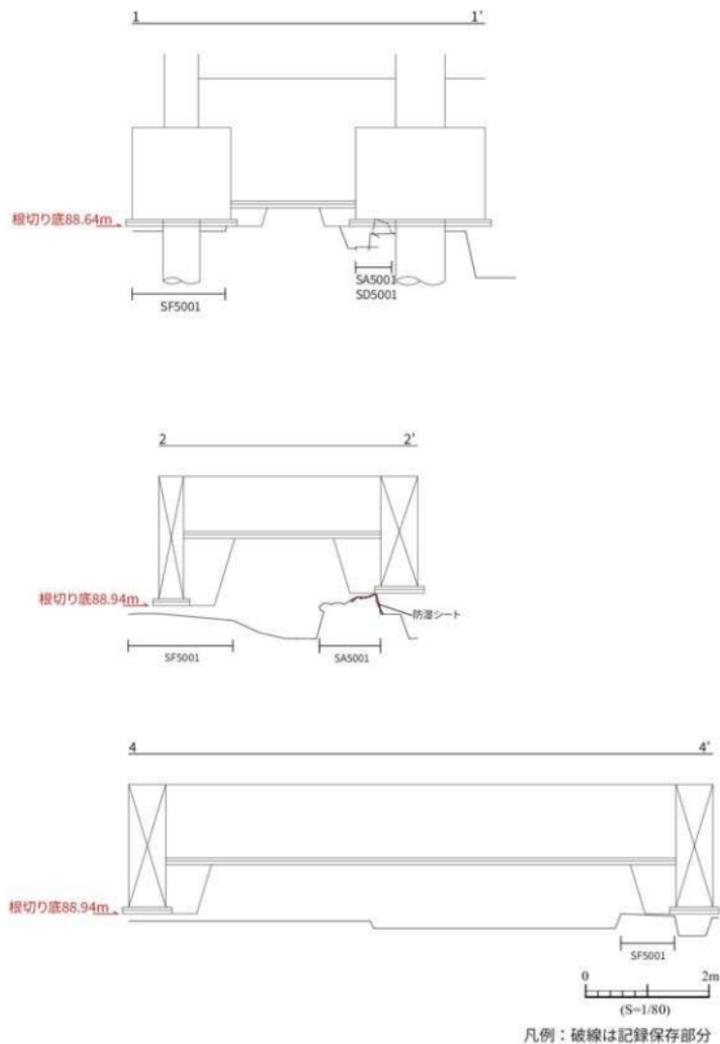
第12図 校舎断面図と遺構保護高さ1 (沖縄県教育庁施設課 提供図に遺跡断面図を加えた。)



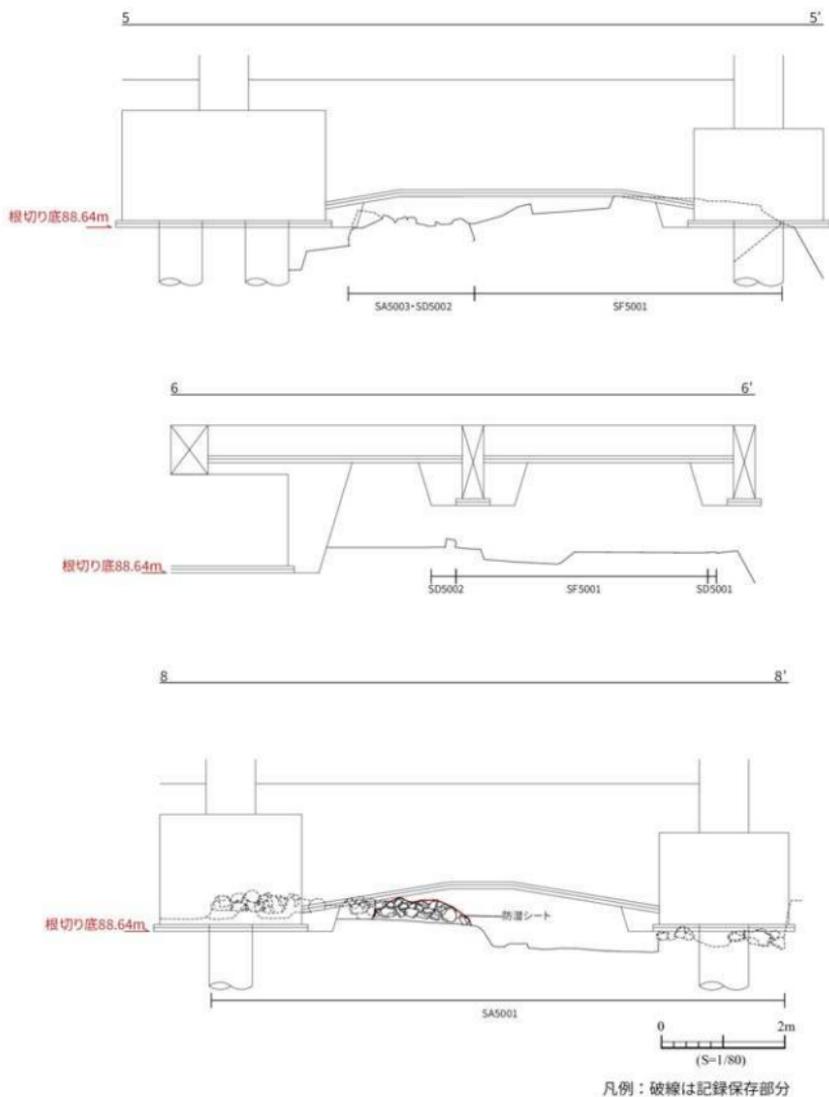
第13図 校舎断面図と遺構保護高さ2 (沖縄県教育庁施設課 提供図に遺跡断面図を加えた。)



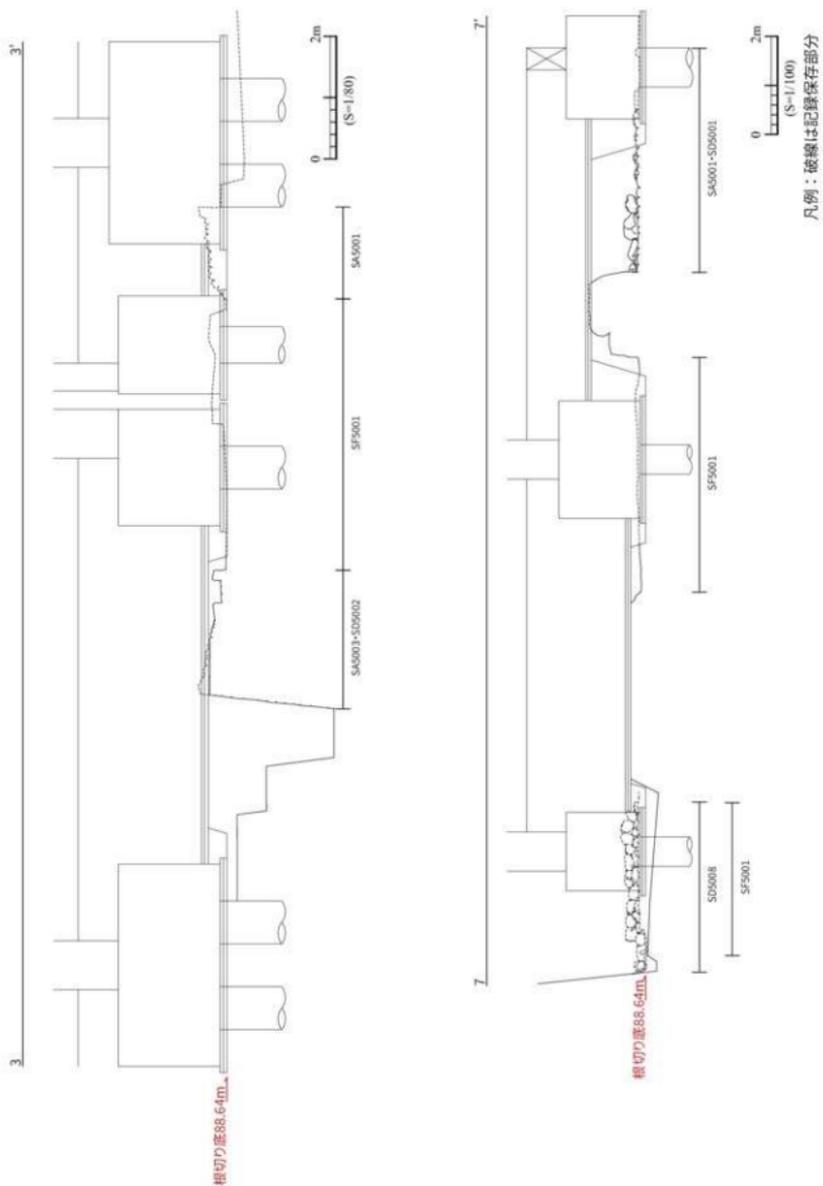
第14図 校舎基礎地中梁と遺構1（沖縄県教育庁施設課 提供図に遺構位置図を加えた。）



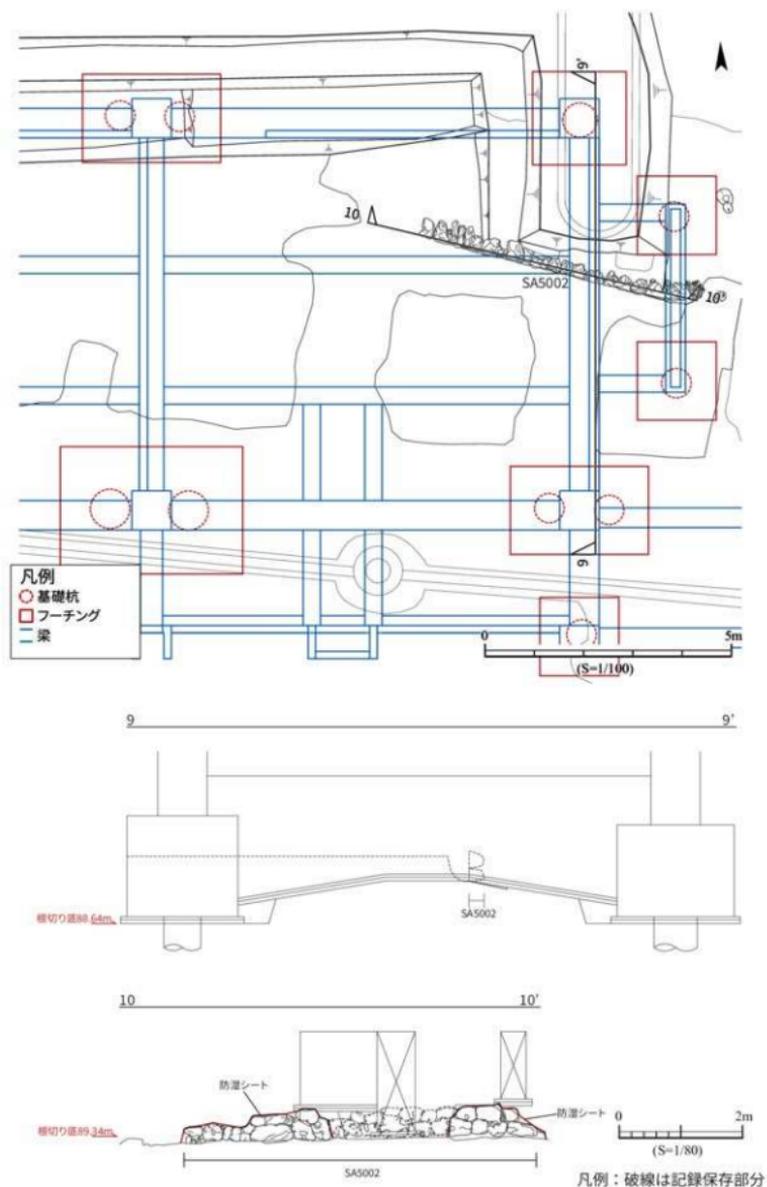
第15図 校舎基礎地中梁と遺構2（沖縄県教育庁施設課 提供図に遺跡断面図を加えた。）



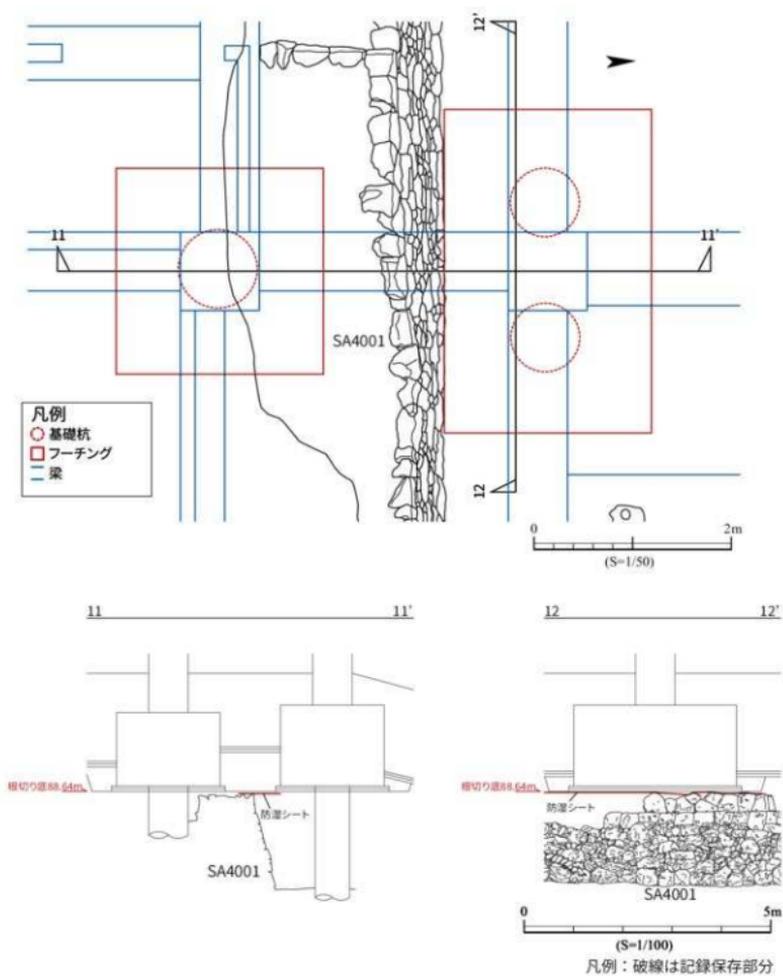
第16図 校舎基礎地中梁と遺構3 (沖縄県教育庁施設課 提供図に遺跡断面図を加えた。)



第17図 校舎基礎地中梁と遺構4（沖縄県教育庁施設課 提供図に遺跡断面図を加えた。）



第18図 校舎基礎地中梁と遺構5 (沖縄県教育庁施設課 提供図に遺跡断面図を加えた。)



第19図 校舎基礎地中梁と遺構6(沖縄県教育庁施設課 提供図に遺跡断面図を加えた。)

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

平成29・30年度の調査では、過年度から継続して発掘調査を実施している中城御殿跡に加え、櫛園跡とされる部分が対象となっている。

中城御殿は、次の琉球国王となる世子が暮らした邸宅である。名称の由来は、王子が王世子(王位継承者)になると、領地として中城間切(現在の中城村、北中城村)及び知行を下賜され、中城王子あるいは中城御殿と称されたことによる。中城御殿は1621～1640年、17世紀前半に王府の別邸である大美御殿の西側、現首里高等学校敷地内(首里真和志町)に創建された。その後、明治3(1870)年に旧県立博物館跡地(首里大町)に移転することが決まり、明治8(1875)年に移転する。ここでは、今回の調査対象となる移転する以前のの中城御殿について記す。

**遺跡の位置** 中城御殿跡及び櫛園跡は、沖縄本島南部の那覇市首里真和志町2丁目に所在し、標高約90～100mの台地縁辺部及び斜面地に位置する。

**基盤層** この基盤を構成しているのは、地質時代の第四紀更新世(180～160万年前～1万年前)に区分される琉球石灰岩で、遺跡全体に広がり確認できた。下位には、鮮新世(500万年前～160万年前)から中新世(2,300万年前～500万年前)に区分される島尻層群が堆積している。表層を成す琉球石灰岩は透水性が高く、そこに浸透した雨水は、不透水層である島尻層のクチャ(泥岩・砂岩)の面でとめられ、両者の境界から湧き出すこととなる。平成25・26年度の調査時に確認した中城御殿跡関連の、井戸や水を溜めるための遺構は、クチャ層まで掘り込まれ、現在でも水が湧き出すほど豊富な水量を誇っている。

平成29・30年度の調査では、改築工事に影響のある部分で掘削を止めたため、クチャ層まで確認した部分はない。

**遺跡地からの景観** 当該遺跡地からは、首里城跡や移転後の中城御殿跡の所在する場所に比べわずかに標高が低い位置に所在している。当遺跡が盛行していた時期には、ここから首里城を見上げるような場所だったことが想定される。

### 第2節 歴史的環境

平成29・30年度の調査では、過年度から継続して発掘調査を実施している中城御殿跡に加え、首里古地図に描かれる櫛園跡とされる部分を対象として発掘調査を実施した。

**中城御殿** 次期国王の世子館として、尚豊王代(在位1621～1640年)の崇禎年間に綾戸大道の北側に創建されたと『琉球国日記』にある(伊波普猷ほか編纂1972)。1700年代に描かれたとされる「首里古地図」をみると、東側には大美御殿、北側には金武按司の屋敷が描かれている。『中山世鑑』によると大美御殿は王府の別邸として1548年に創建され(沖縄県教育庁文化財課1983)、王家の冠婚葬祭などの行事を行う場所でもあった。金武按司は1526年に首里に移転した(金武町誌編纂委員1983)とされている。大美御殿の東側には浦添按司に関係する場所が描かれ、その北側には美里御殿、かじ木植所(櫛園)がそれぞれ描かれている。美里御殿(みさとうどろん)は、尚穆王の五男・尚格、美里王子朝規(1770年～1846年)を元祖とすると考えられていることから、1770年以降に美里御殿が所在することが想定されるが、首里古地図には、寺関係や王府関係の屋敷は詳細に描かれるが、各按司の土地については、詳細に描かれていない。

**創建時期** 中城御殿は、1621～1640年代に創建とされたことから、大美御殿や金武按司などの敷地の間に創建されたことになる。創建以前の当該地の敷地について記載のある文献史料は不明である。

関連する可能性のある史料として『李朝実録』世祖8(1462)年2月の項に済州島の梁成等が琉球に漂着した記事があり、その中で「王子は国王と同趣せず、別に他所に在り。」とある(池谷ほか2005)。首里高校敷地内を指しているかは不明だが、15世紀中頃には、王子は別の場所に屋敷があったことが考えられる。

創建年代については、『李朝実録』の記事等で15世紀中頃にはすでに中城御殿があったことと捉え、尚豊王代の崇禎年間に創建されたというのは正確ではないという意見もある(高良1996)。

**中城御殿の拡張** そのような中、「(省略)寛永中尚豊第二子、佐敷王子尚文の為に宮建されたもので、当時は規模それほど大ではなかったと見て、延宝(康熙十六年)(1677年)五月の例奇に、「中城御殿狭有之候間、玉城御殿・豊見城御殿敷地併合候様被追仰付候こと」とある。玉城・豊見城両家の屋敷を繰り入れて取り広げた意味である。…」(東恩納寛惇1950『中城殿』『南島風土記』:138頁3～8行)の項目に記載がある。このことから、中城御殿が創建された当初は、大美御殿や金武按司の屋敷のみならず、玉城・豊見城両家の屋敷に隣接していたことが想定される。その後、中城御殿の敷地を玉城・豊見城両家の屋敷地を取り入れる形で拡張したことが伺える。発掘調査の結果でも幾度かの造成を繰り返して、屋敷敷地を拡張している様子が確認されている。遺跡の堆積状況から、南から北へと拡張している様子がうかがえ

ることから、北側部分に両家の屋敷地があった可能性が高いが、それを示す遺構は明確に確認できていない。

**首里古地図** 首里古地図の情報から読み取ると、描かれた当時の中城御殿は、四方を石積に囲まれ、屋敷内に南北を区分するような形で東西に石積が描かれている。この石積には2か所石積が途切れている部分があり、一か所は道が描かれ、もう一か所は何も描かれていない。

**屋敷配置** 屋敷の外への出入りに北側に1か所、南側に1か所、東側に1か所描かれている。北側と東側は石積が途切れている表現のみだが、南側は入口を引き込むような形で石積が描かれ、東側に門の屋根のようなものが描かれている。このことから、中城御殿の中心に入るための入口は南側にあったと考えられる。その門をくぐると、一つの建物があり、それを越える宅御座(うな一)のような広場があり北側及び南側に建物が描かれている。広場の東側には建物が描かれ、階段のようなものが描かれていることから、まわりよりも高い場所に建物があったことが想定される。このことから、基壇があったことやこの部分が屋敷の中心部で正殿であったことが考えられる。この屋敷配置は首里城の御庭や北殿、南殿、正殿の立地とよく類似している。

**屋敷入口** 入口について注目すると、隣接する大美御殿と比べ、入口までの引き込み道が長く描かれる。これは高低差があり、それをスロープ状に引き込んでいることが想定される。

今回、綾門大道の一部を試掘した部分があり、那覇市文化財課の教示も得ながら綾門大道の遺構面と考えられる層を確認した。この層と平成25・26年度の調査成果を合わせると、綾門大道と中城御殿の機能面には高低差があることが判明している。

**中城御殿の移転** 明治元(1868)年に尚泰王の王子である尚典の立太子に伴い、龍潭北側に位置する大村按司、摩文仁按司、川平親方、小禄親雲上らの宅地を合わせた敷地に移転することが取り決められた。この場所の選定理由については、1868年に久米村の地理師である与儀親雲上ら3人を中国福州に派遣して風水を学ばせ、建物の配置が行われたとされている(球陽2206号 球陽研究会編1974)。選定立地から設計・施工までが計画的に行われたとされていることから、中城御殿の移転する理由のひとつとして、風水的な屋敷の立地が大きく関わっていたことが想定される。明治8(1875)年に移転した後の当該地は菓草園になり、その後、国学が置かれたとされる。

**移転後の土地利用** 中城御殿の移転の際には、使用できる資材などを移転地に搬入したことが想定される。発掘調査においても、屋敷を区画するような石積遺構は数多く発見されたが、屋敷の柱などを支える礎石などにつ

いては一部を除き、確認することが出来なかった。礎石の割れた破片石材は多く見られたが、屋敷配置を示す遺構として原位置を保持しているものではなく、屋敷の規模や広がりやを想定することは非常に困難である。

このような資材を移転先に持ち込んだと考えられるが、移転後も当該地が菓園や学校として、何らかの形で人が利用する場所として使用され続けることや、一部では沖縄県立第一中学校などの遺構が、中城御殿の石積に組み合わせる形で検出される部分も存在する。以上のことから、資材などは移転時に全て搬出されたわけではなく、一部の資材は残存しており、その後も使い続けられたと考えられる。

**植園** 中城御殿から道を挟んで東側に所在し、首里古地図には、かぢ木植所と描かれている。当該地の名称は、「球陽」に照らし合わせると植園とされていることから、誤りであると指摘されている(久手堅2000)。

蛸燭や漆器の原料となる漆を採取する植園が置かれた場所とされている。

球陽では、高瀬18(1821)年、これまで蛸燭主取の家宅で植園や桐実の醸造をしていたのを改め、この植園の一部に醸造所を設置して、製附油や蛸燭を製造した(球陽1617号 球陽研究会編1974)と記述がある。

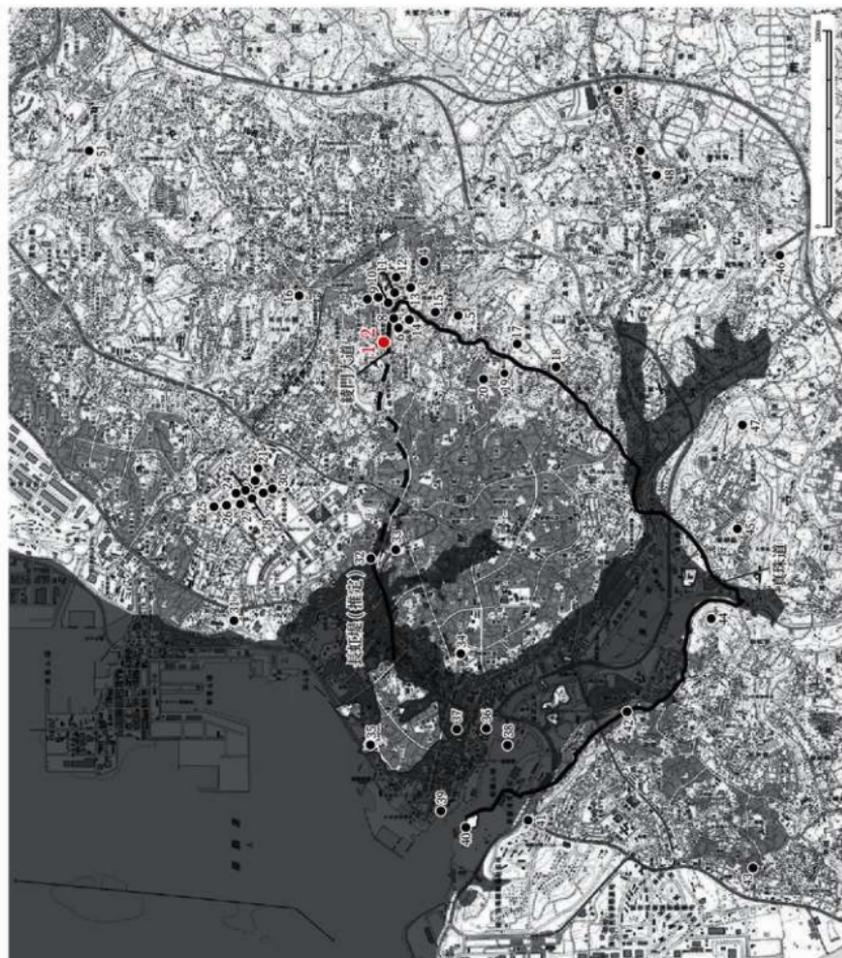
**創建時期** 創建された時期については、判然としないが、検出された遺構などから、16世紀以降には当該地が利用されていたことが伺える。

**植園に関連する遺構** 今回の調査でSM5002とした石組土坑を確認した。この土坑からは、ヤコウガイ片、シャコガイ片、チョウセンサザエ片が出土しており、これらは意図的に削取されている痕跡がある。このような遺物の出土は、首里城跡銭蔵東地区(沖縄県立埋蔵文化財センター2016)、東村跡(沖縄県立埋蔵文化財センター2017)で確認されており、蛸燭関係に使用されたと考えられている。SM5002からの貝殻片は蛸燭素材も含めた貝製品製作の痕跡だと考えられる。植園では、漆器の原料となる漆の採取に加え、貝製品製作に関する作業を行っていたと考えられる。

**首里旧真和志村跡** 首里高校敷地内の東側部分で一部発掘調査が行われ、14世紀後半から16世紀代の柱穴跡や、近世以降の石組(シーリ)の一部が確認されている(那覇市教育委員会2005)。当該部分は、浦添按司屋敷範囲内と考えられる。柱穴跡は、首里高校敷地内の全域で16世紀代頃の遺構が確認されており、当該時期の集落の広がりを検討する上で、関連性が高いと考えられる。



第20図 沖縄県の位置



31 中城跡(首里高校内)

32 中城跡(首里高校内)

33 中城跡(首里高校内)

34 中城跡(首里高校内)

35 中城跡(首里高校内)

36 中城跡(首里高校内)

37 中城跡(首里高校内)

38 中城跡(首里高校内)

39 中城跡(首里高校内)

40 中城跡(首里高校内)

41 中城跡(首里高校内)

42 中城跡(首里高校内)

43 中城跡(首里高校内)

44 中城跡(首里高校内)

45 中城跡(首里高校内)

46 中城跡(首里高校内)

47 中城跡(首里高校内)

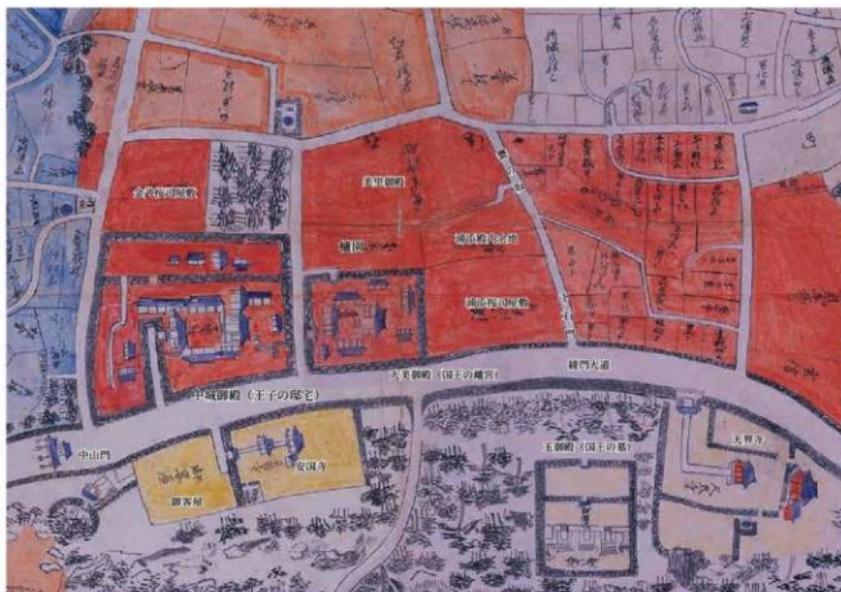
48 中城跡(首里高校内)

49 中城跡(首里高校内)

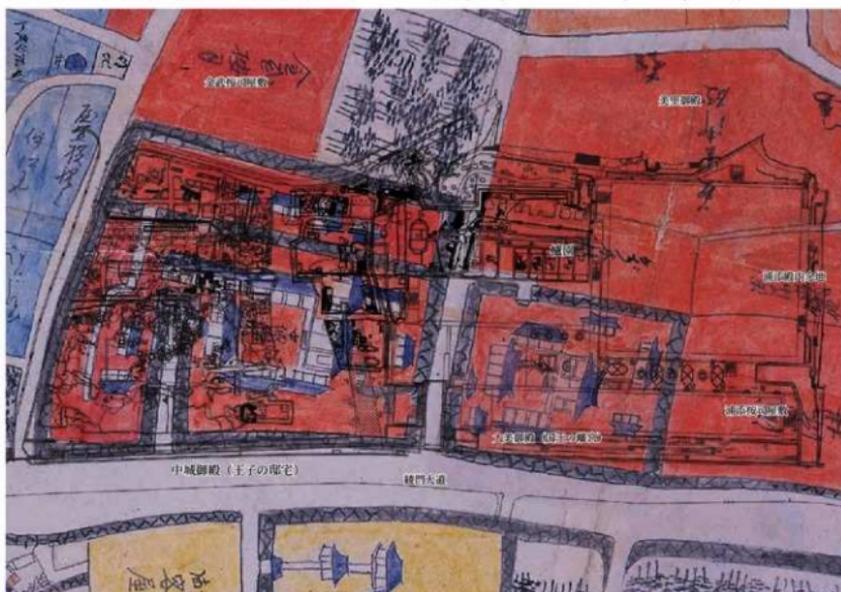
50 中城跡(首里高校内)

51 中城跡(首里高校内)

第21図 中城御殿跡(首里高校内)の位置及び周辺の遺跡(濃いトーンは概ね近世の海岸線 新島2005参照)



首里古地図 (1910年 具志氏模写図 沖縄県立図書館所蔵CCBY4.0 一部改変) <http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



首里古地図と遺構重ね図 (1910年 具志氏模写図 沖縄県立図書館所蔵CCBY4.0 一部改変) <http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

第22図 首里古地図

**首里古地図にみられる井戸** 首里古地図では、中城御殿の北側に、井戸が描かれており、この井戸は現存している(第23図)。平成25・26年度の調査で、中城御殿内には、井戸や水場関係の遺構が水場遺構(第24図)、洞穴遺構(第25図)、SS24の3か所確認された。これらの井戸や水場関連の施設は、首里古地図に描かれていない。加えて、美里御殿内と想定される場所に現存する井戸(内の井戸)(那覇市教育委員会2010)(第26図)も、首里古地図には描かれていない。

首里古地図に描かれない井戸があることについて、井戸の築造年代と首里古地図の描かれた年代が異なるため、描かれていないことを想定した(沖縄県立埋蔵文化財センター2017)。しかしながら、前述した美里御殿やその他の按司屋敷内の井戸等は基本的に描かれていないことから、屋敷内にある井戸や水場関係の施設は、首里古地図に描かれていないと考えられる。

**洞穴遺構** 平成25・26年度調査で確認した水場遺構とSS24では、明確な井戸として認識できる遺構が確認された。対して洞穴遺構では、明確な円形の遺構は確認できなかった。洞穴遺構は、クチャを掘りこみ、石積を構築した水溜施設と想定した(沖縄県立埋蔵文化財センター2017)。洞穴遺構は、地下に掘りこむ形で形成されているため、遺跡周辺に所在する指(佐)司笠樋川(サシカサヒージャー)のように、階段等で水源までおろすための構造があった可能性がある(第27図)。しかしながら、洞穴遺構周辺は、沖縄戦時の爆弾破壊痕があり、攪乱された状況で遺構等が確認できないことから、あくまで想定範囲に留まる。

**首里古地図に描かれる道路** 首里古地図に描かれる地形や道路に関しては、近世当時の道路が多く残存していることが判明している(高橋2000)。北側に現存する井戸と、確認された道跡では高低差があるが、道跡は北側に向けて緩やかに傾斜していることから、井戸がある部分まで続いていたことが想定される。



第23図 中城御殿北側にある井戸



第24図 水場遺構



第25図 洞穴遺構



第26図 内の井戸(ウチヌカエ)



第27図 指(佐)司笠樋川(サシカサヒージャー)

第2表 中城御殿跡 関連年表

西 暦	元 号 琉球 / 日本 / 中国	事 項
1547年	尚清 21/ 天文 16/ 嘉靖 26年	大美御殿着工
1548年	尚清 22/ 天文 17/ 嘉靖 27年	大美御殿竣工
1621～1640年	尚豊王代	尚豊王代 中城御殿が現県立首里高校の地に建設される。
1677年	尚貞 9/ 延宝 5/ 康熙 16年	玉城・豊見城両家の屋敷を繰り入れて敷地拡張する。
1798年	尚温 4/ 寛政 10/ 嘉慶 3年	中城御殿内に公学校(国学)を開く。
1801年	尚温 7/ 享和 1/ 嘉慶 6年	国学が龍潭近くに移転する。
1808年	尚灝 5/ 文化 5/ 嘉慶 13年	王子邸にて冊封使に「料理馳走贈」が出される。
1821年	尚灝 18/ 文政 4/ 道光 1年	県立主取の家家で榎実や桐実の醸造していたものを、 櫛園の一部に醸造所を設置して蟹附油や蠟燭を製造した。
1854年	尚泰 7/ 安政 1/ 咸豐 4年	大美御殿でペリー提督首里城訪問の際に接待する。
1864年	尚泰 17/ 元治 1/ 同治 3年	尚典(のちの中城王子)が生まれる。
1866年	尚泰 19/ 慶応 2/ 同治 5年	尚泰王が冊封をうける。 尚典が尚泰王の世子となる。
1868年	尚泰 21/ 明治 1/ 同治 7年	久米村の与儀親雲上ら3人を福州に派遣 風水を学ばせ中城御殿の風水看を行う。
1870年	尚泰 23/ 明治 3/ 同治 9年	中城御殿が龍潭北側に新しく造営されることが決まる。
1872年	尚泰 25/ 明治 5/ 同治 11年	琉球藩設置 久場川菜園を廃除し、中城旧殿の宅内にて改めて菜園を開き、栽培を行う。 按司奉行や親方奉行をこの役所に配置。
1874年	明治 7/ 同治 13年	中城御殿(現在の県立博物館跡地)竣工。
1875年	明治 8年	中城王子尚典公新築した屋敷に移る。
1879年	明治 12年	3月 鹿藩置県 首里城を明け渡し尚泰王以下中城御殿に移る。 鹿藩置県に伴い、国学は県庁の所管となる。
1880年	明治 13年	東京師範学校から教員を招聘し、教則の認可を受け、首里中学校と改称。
1887年	明治 20年	沖縄県尋常中学校と改称。
1891年	明治 24年	沖縄県尋常中学校が現在の敷地(首里高校敷地内)に移る。
1899年	明治 32年	沖縄県中学校と改称。
1901年	明治 34年	尚泰逝去し玉陵に葬られる。
1911年	明治 44年	沖縄県立第一中学校と改称。分校が独立し沖縄県立第二中学校と称した。
1925年	大正 14年	大美御殿建物が、県立第一中学校の運動場拡張に際して撤去される。
1930年	昭和 5年	沖縄県立第一中学校、鉄筋コンクリート校舎が新築落成。
1944年	昭和 19年	10月10日 米軍による空襲により旧那覇市の9割が焼失する(十・十空襲)。
1945年	昭和 20年	首里の町並みとともに沖縄第一中学校も沖縄戦により壊滅する。
1946年	昭和 21年	糸満高等学校首里分校として発足、首里高等学校として独立。
1980年	昭和 55年	創立100周年に際し校舎を改築する(元のグラウンド部分)。
2011・2012年	平成 23・24年	那覇市教育委員会(試掘)、県教育庁文化財課(造成土掘削、測量)
2013・2014年	平成 25・26年	8月 沖縄県立埋蔵文化財センターによる本調査開始。
2015年	平成 27年	首里高校敷地内の遺構について、可能な限り現地保存することが決定する。
2016年	平成 28年	管理・特別教室棟着工
2017・2018年	平成 29・30年	沖縄県立埋蔵文化財センターによる発掘調査(Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ) 管理・特別教室棟竣工
2019年	平成 31年・令和 1年	普通教室棟(西棟)着工
2020年	令和 2年	普通教室棟(西棟)竣工・普通教室棟(東棟)着工・竣工

### 第3章 発掘調査の方法

#### 第1節 発掘調査

**グリッド設定** 平成25・26年度の調査の際に、中城御殿の遺構検出状況から、1グリッド10m×10mを東西南北に合わせて設定した。この際、校舎改築にあわせて東側へ調査区が拡張していくことから、北西の部分を起点として東側のラインについては数字の1～、南側のラインはアルファベットのA～を設定した。ラインが重なる北西の部分をグリッド名とし、A-1グリッド、A-2グリッド・・・とした。

**発掘調査区** 平成25・26年度の調査時には、遺構検出状況等から、便宜的にI～VIII区まで地区分けを行った。継続して調査を実施していくなかで、調査を実施した年度毎に調査区を設定し、混乱をさける必要が生じた。そのため、平成25・26年度に実施した調査区全域は改めてI区として設定し、調査の年度や改築事に伴う調査区分けに応じて、II区以降の調査区を設定した。

**調査区毎のエリア分け** 発掘調査を実施する際には、改築工事により先行して調査に着手する部分や、既設配管等の使用状況等の要因で調査区を分ける必要があった。そのため、分けた調査区をIII区西、III区東など、あ

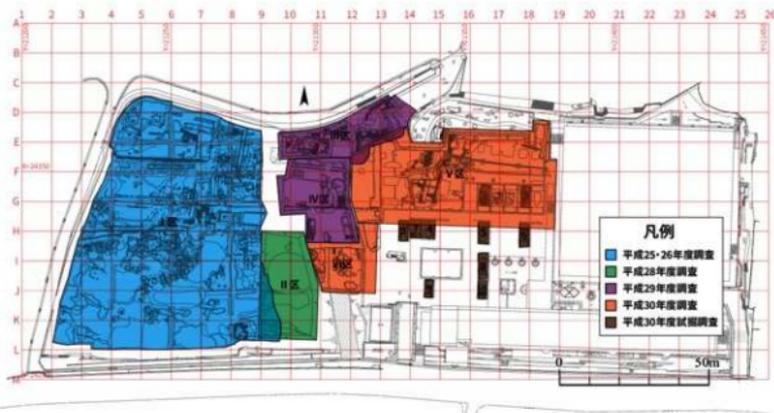
る程度の調査実施箇所がわかるように呼称しながら調査を進めた。

**層序付与方法** 層序付与は、過年度の調査を踏襲して層序付与した。層序及び調査区毎の概要については第3節・第4節で述べる。

**遺構名付与方法** 遺構は、遺構記号+数字で遺構名とした。遺構記号については第3表のとおりである。今後の調査が継続して実施されることから、III区で確認した遺構は○○(遺構記号)3001、IV区では○○(遺構記号)4001とし、遺構名で検出した調査区が判明するようにした。これは、土坑や柱穴など調査区全域で検出する遺構に対し、同じ番号を付与し、整理段階で、どの調査区の遺構か混乱するのを避けるために採用した。結果としては管理が容易で、整理作業等の際も混乱することはなかった。

**調査区をまたがって検出する遺構** 今回の報告では、中城御殿の石牆など、調査区をまたいで遺構が確認される場合が多々あった。遺構としては同一の遺構なのだが、混乱を避けるため、確認した調査区毎で遺構番号を付与した。そのため、調査成果をまとめる際には、一列の石牆でも、遺構番号が複数付与されている遺構もある。

**立会調査** 本調査の着手前や調査中に、調査区以外で改築事に伴う立会調査を実施した。立会調査の詳細は



第28図 グリッド配置図

第3表 遺構記号凡例

遺構記号	遺構種類	遺構記号	遺構種類	遺構記号	遺構種類	遺構記号	遺構種類	遺構記号	遺構種類	遺構記号	遺構種類
SA	石積	SG	築石	SM	石組土坑	SS	石敷・薄敷	SB	建物	SH	—
SN	—	ST	—	SC	—	SI	—	SO	—	SU	遺物集積
SD	溝	SJ	遺物埋設	SP	柱穴・ピット	SV	—	SE	井戸	SK	土坑
SQ	石組柱	SW	石積障壁	SP	道	SL	井・カマド	SR	石戸	SX	不明遺構

第1章第4節に記述した。

**表土の掘削** 表土層の掘削は、重機を用いて実施した。不発弾等が地中に残存している可能性もあることから、磁気探査を行った。表面探査と掘削深度50cm毎に経層探査を実施した。

**遺構の検出** 調査区によるが、掘削深度1m以内で近・現代の遺構が確認された。遺構を確認した際には、重機掘削を止め、人力掘削で遺構の調査を行った。石積等は、石積の根石前面部分を掘削し、根石設置層の確認を行った。石組土坑、土坑、柱穴等は基本的に半載を行った。半載記録を取った後、完掘した。一部完掘せず、現地保存している遺構もある。柱穴等で柱の並びが確認できるものは、その並びに沿って半載した。

今回の調査では、地中に保存可能な遺構も多かったことから、遺構の断ち割り等は、攪乱部分を用いて行い、校舎改築工事に影響の出る範囲のみで実施した。

**出土遺物の取り上げ** 調査中は、包含層出土遺物と遺構出土遺物を分けて取り上げを行った。なるべく現地で層序を付与して取り上げたと、判断が困難な遺物は、出土位置や土色などの特徴を記載しておき、調査が進む中で層序が決定した際に層序付与した。

**写真撮影** 写真撮影には、フィルムカメラ(白黒・スライド)、デジタルカメラを主に使用した。遺構検出、半載、完掘など作業工程に沿って写真撮影を行った。作業状況を示す写真や定点撮影等も適宜行った。遺構の完掘写真や調査区全体の完了写真等については、中判カメラ(白黒・スライド)も使用した。また、遺構や調査区の状況に応じて、高所作業車やドローンを用いて空撮等を行った。遺構の記録作成時には、支援業務委託業者がオルソ撮影を実施した。

## 第2節 整理等作業

**整理作業の概略** 整理等作業は、平成29年度から順次開始した。平成29・30年度は現地作業も実施していたことから、整理等作業は並行して実施した。平成30年度調査分の整理等作業は、平成31年5月から順次実施した。

平成31・令和元年度中は、遺構面の整理、出土遺物の分類及び報告書掲載遺物の選定を行った。また、実測作業も実施した。実測作業と並行して、遺物の集計作業を実施した。

令和2年度は、前年度までの作業の続きを行い、トレース作業、写真撮影を実施した。図面の作成やトレース作業等は、作図ソフト(Adobe Illustrator, Photoshop)を用いた。

上記作業で作成した図面等及び写真、文字原稿も含めて編集ソフト(Adobe InDesign)を用いてDTP印刷用

の編集を行い、すべての頁をPDFファイルとして作成した。

以下、時系列的に整理作業の流れを示す。

**出土遺物の搬入** 調査完了後、調査現場で遺物洗浄及び、コンテナ整理まで終了した状態でセンターへ搬入した。現場での遺物洗浄は、主に雨天時に実施した。調査現場での整理作業は、遺物量が多く、時間も限られていたため、効率的に行う必要があった。その際、調査員を一人配置し、情報整理しながら整理作業を進めたため、すべての作業をスムーズに行うことができた。結果として、出土遺物をセンターへ搬入後、すぐに次の作業を開始することができたため、整理作業の時間短縮につながった。

**室内での整理作業** 室内での整理作業は、注記作業から行った。注記作業はすべて手作業で実施した。

**遺物の分類・報告書記載遺物の選定** 注記作業が完了した遺物は、接合をした後分類作業を行った。分類を行う際は主に遺物種類、器形、残存部位について観察した。分類を行いながら、報告書に掲載する遺物の選定を行った。

遺物の選定基準は、遺構及び層序の年代決定の判定に用いる遺物や、遺物組成を示せるものとした。

**報告書掲載の遺構** 報告書へ掲載する遺構は、遺跡の変遷過程を示す遺構を中心に選定を行った。遺構の詳細が不明な場合でも、層序との関係性で重要な遺構は掲載することとした。掲載する遺構から出土した遺物は報告書へ掲載することとしたが、なかには、遺物が小破片で実測等が困難な遺物のみ出土している遺構もあった。この場合は、遺物の掲載は行っていない。

遺構のなかには、調査区壁面でのみ確認したものや、現地保存可能なものがあり、掘削を途中で止めたものがある。そのような遺構を掲載する場合は、検出写真等を掲載した。

**集計作業** 出土遺物は、すべて集計作業を行った。集計結果については、第5章に掲載している。集計表は、各遺構からの出土遺物をまとめたものを掲載し、自然遺物も合わせて掲載している。また、層序についてはI～IV層として細かい層序はまとめて集計し、遺構面に関連する層序は別で掲載した。

**遺構と出土遺物の検討** 遺構及び堆積土の年代観等を確認する際に、現場所見と合わせて出土遺物の照合を実施した。その際、主に中国産青花及び本土陶磁器の年代観、沖縄産施釉陶器及び無釉陶器の出土状況に加え、明朝系瓦の出土状況等を検討材料とした。

**貝類遺体** 貝類遺体は、当センター所蔵の貝類遺体サンプルを用いて同定作業を実施した。また、遺構内から人為的な割り取りを行っている貝片が多量に確認された。この貝片については、第4章第3節で述べる。

**脊椎動物遺体** 貝類遺体と同様、当センター所蔵の動物遺体サンプルを用いて同定作業を実施した。同定作業の際には、平成29年11月、平成30年3月、平成31年2月、令和2年12月に東海大学の丸山真史氏を招聘し、同定資料の確認及び検討、分析等を依頼した。

**埴瓦の分類** 今回、V区から出土事例のない埴瓦が出土しており、その遺物について所見を得るため、令和2年12月に上原静氏(沖繩国際大学)を招聘し、出土資料の確認を依頼した。この埴瓦の詳細は第4章第2節で述べる。

**実測・トレース作業** 報告書掲載遺物は実測作業を行った。トレース作業はデジタルトレースで行った。陶磁器の文様等については手書きで絵付けを行ったが、近代磁器等については遺物写真との合成作業を実施したこともある。

**写真撮影** 整理作業を行いながら遺物写真撮影を実施した。当初、図版毎に遺物を並べて撮影していたが、途中から遺物を1点ずつ撮影する方法に切り替えた。

### 第3節 層序

今回の発掘調査では、平成25・26年度の調査成果を踏まえながら、大きく4層に区別した。

- I層：現代** 首里高校に関連する造成土や攪乱層。
- II層：近代** 戦前、戦後に堆積したと考えられる層。
- III層：近世** 中城御殿、植園、道跡に関連する層。17～19世紀。
- IV層：グスク** 中城御殿が創建される以前の層。15～16世紀。

中城御殿や道などを築造するにあたり、大量の造成土が用いられ、同時期の堆積と考えられる層でも、土色や深人物等が異なった様相をしていた。そのため、検出した土層毎に、III 1層、III 2層といったように層序を付与した。そのため、III 1層とIII 10層で、層の堆積順序で新旧関係を示しているわけではない。調査中に、ほぼ同一の造成単位と判断できた場合は、III 10a層、III 10b層といったような層序付与方法も行った。

**I層** I層(現代)は、板ガラス片や近代陶磁器等が多く出土し、旧校舎に関連するコンクリート等も確認できたため、層序判断は比較的容易であった。ただ、前述したように出土地点によってその様相は様々であった。

ほとんどが造成のために持ち込まれた土で、一部では、遺跡内の土が動かされている状況も確認できた。

**II層** II層(近代)は、I層と見分けることが困難な状況だったが、板ガラス片の混入が少なくなり、石造りの遺構が見られることにより、近代に堆積した層であると判断できた部分もあった。近代期に、土を掘り返して整地している状況もあり、層序出土遺物は近世遺物のみで

占める状況等もあった。下層にあたるIII層との判断が困難な場合もあり、一部混入している可能性はある。

**III層** III層(近世)は、中城御殿や植園、道に関する造成土である。前回の調査時には、III層を造成土単位で分類することが可能だったが、今回の調査では、調査進捗と建築工事の進捗等により、調査区を分断せざるを得ない状況等があり、調査区をまたいで層序確認を行うことが非常に困難だった。そのため、調査区毎に層序付与を行い、その層の特徴等から堆積状況の並行関係を把握した。調査区毎で層序名が異なるが、相関関係については、第4・5表の通りである。

造成のために持ち込まれた土が多く、遺跡内もしくは遺跡外から持ち込まれた可能性がある。近世期に造成された土だが、持ち込む場所由来、古手の遺物が出土を占める場合もあった。また、機能時の面を確認した部分があり、この層からは機能時期の遺物と考えられるものが出土している。

**IV層** IV層(グスク)は、石灰岩礫等の混入物が少なく、暗褐色～黒褐色の層にマーヅ粒等が混入している特徴がある。この層は、地山直上に堆積しており、近世の段階で掘り返され、再度埋戻されていることもあった。機能時の面と考えられる部分があり、この層で柱穴跡を確認できる部分があった。

**地山** 地山は、明褐色の土(マーヅ)が確認できた。一部では掘り返されている部分があり、岩盤整形後、埋戻されていることも確認できた。掘り返された地山には、石灰礫が混入したり、暗褐色土が混入する等の特徴があったため、その土に関しては造成土として扱った。前回の調査では青灰色の泥岩層(クチャ)が確認できた部分もあったが、今回は確認されなかった。前回調査のような深く掘り込む井戸跡がなかったことや、遺構が現地保存可能で、泥岩層まで調査しなかったことによる。

### 第4節 調査区毎の概要

今回報告するのは、III区、IV区、V区の合計3つの調査区で確認した包含層及び遺構である。それぞれの調査区で、遺構及び機能時の面を遺構面と認識して調査を進めた。遺構面は上層から確認したものを第1遺構面として、それぞれ番号を付与した。なお、遺構面については、調査時に遺構面と認識していたが、調査中は第1遺構面など明確に番号を付与していない状況だった。そのため整理作業を進めながら、出土遺物を観察した上で遺構面の番号付与や年代観を把握した。各調査区の遺構面対照表が第4・5表で、調査区全体を通して基準となる層に色塗りを行っている。

**III区の調査** III区の調査は、調査区内に既設配管があり、調査段階においても使用されており撤去が困難なこ

とから、この配管を基準として西側と東側にかけて調査を実施した。

堆積状況から、近代～グスク時代までの時期の遺構・遺物が確認できた。そのなかでも、近世期には層序の堆積状況から大きく三時期に細分することが出来たが、出土遺物によって細かく年代を把握することは、遺物組成の変化が少なく困難な状況だった。

**Ⅲ区西** Ⅲ区の西側で近代～グスク時代までの堆積層を確認することができたため、Ⅲ区西側の南壁を基本層序とした。

客土はすべてⅠ層とし、Ⅱ層(Ⅱ6層)検出段階でSM3005を検出した。SM3005はⅠ層に削平され、Ⅱ層を掘り込んでいるため、より新しい時期(近代～近世)の遺構と考えられる。

**第1遺構面** Ⅱ6層上面。造成時に、Ⅲ4層とそれに伴う遺構を削平している。そのため、Ⅲ4層上面で検出した遺構は、天端が残存せず、Ⅱ層に覆われている部分が多い。

遺構面そのものは後世に削平されているが、第1遺構面と捉えた。第1遺構面で検出した遺構は、近世末以降の時期と考えられる。

Ⅱ6層は、Ⅲ区西の北側では、何枚かの層に細分できることが判明したが、結果としては一つの層序にまとめた。その部分でSM3008、3009等を確認している。

**第2遺構面** Ⅲ4層上面。Ⅲ4層検出時に、上部が削平されたSM3001、3002を検出した。この層を第2遺構面とした。

Ⅲ4層は、SS3004の検出状況から、Ⅲ6層の遺構面を覆う形で堆積した造成土と考えられる。

**第3遺構面** Ⅲ6層上面。石灰岩を細かく砕いた石敷遺構(SS3004)を確認したため、この層を第3遺構面とした。この第3遺構面は、削平されず、そのままⅢ4層

に覆われたものと考えられる。近世期の遺構面と考えられる。

Ⅲ6層は、下層にある石積遺構の天端が残存していない状況から、下層を削平した上で造成された層と考えることができる。

第2遺構面と第3遺構面には、層序の状況から時期差があると考えられるが、短い期間のなかでの築造が考えられ、遺物組成等も同様なため、明確な時期差を把握するのは困難だった。

**第4遺構面** Ⅳ層上面。石積遺構(SA3005)を確認した。Ⅳ層は、Ⅲ層までの様相と異なり、暗褐色で層序内に礫等の混入物が少なくなることが特徴である。Ⅳ層上面は、上層にあたるⅢ6層を造成する際に削平されている。Ⅳ層の下部で地山を検出し、地山面で柱穴跡等を確認した。

Ⅳ層は、平成25・26年度調査で確認したⅣ層の様相と同様なことから、グスク時代の層と考えられる。第4遺構面で検出した遺構は、Ⅳ層がグスク時代の時期を示しているので、近世初頭の時期と考えられる。

**第5遺構面** Ⅳ層中及び地山面。下層確認のためサブトレンチを設定した部分で確認した。Ⅳ層より下部で地山面を確認し、柱穴跡を検出した。柱穴等が機能している建物等があった面は、前述したようにⅢ6層により削平されている状況だった。

**Ⅲ区東** Ⅲ区東では、中城御殿の北側石牆(SA3001)にあたる部分を検出した。この石牆の根石部分を確認し、その部分を基本層序とした。

**第1遺構面** Ⅲ1c層及びⅢ2b層上面。SA3001の北側部分では、根石付近まで客土が多かった。掘削中の安全確保のため、一部分のみ、根石より下部の掘削を行った。その結果、SA3001の根石はⅢ2b層上に設置されていることがわかった。また、下層にあたるⅢ2f上で

第4表 遺構面対照表

Ⅲ区西				Ⅲ区東				Ⅳ区北			
遺構面	層序	年代観	備考	遺構面	層序	年代観	備考	遺構面	層序	年代観	備考
								1	I		
1	Ⅱ6	近世末～近代						2	Ⅱ7 Ⅱ10a・b Ⅱ10a1-2	近世	SA4001 機能時
2	Ⅲ4	近世	SM3001、3002 削平層					3	Ⅲ10a4・Ⅲ11b Ⅲ12・Ⅲ12b	近世	平場造成 SA4001 根石設置
				1	Ⅲ1c Ⅲ2b	近世	SA3001 根石設置	4	Ⅲ11c Ⅲ15e1-2	近世初頭?	SA4002 機能時
3	Ⅲ6	近世									
4	Ⅳ	近世初頭									
5	Ⅳ 地山	グスク		2	Ⅳ1a-d	グスク		5	地山	グスク	

石敷遺構(SS3001)を確認した。これは、石牆の根石設置の際に、地面を切土し、造成を行った上で地盤層を整える工法の痕跡と考えられる。同様の設置方法は、平成25・26年度の調査時にも確認できた。

**第2遺構面** III区東の北側で確認できたIV 1a～d層。一部分のみで確認した。

**IV区北の調査** 堆積状況から、近代からグスク時代までの遺構・遺物を確認した。近代の遺構は、首里高校の校舎関連の遺構が残存していた。近世の段階は、大きく三時期に細分できることが確認できた。

**第1遺構面** IV区の客土層を掘削すると、近代以降の首里高校に関連する遺構が確認出来た。炭層に覆われ、板ガラス片等を多く含んでいた。

**第2遺構面** 近代の遺構を掘削すると、屋敷内にあたる石積(SA4001)の天端部分を検出した。SA4001は、平成25・26年度に確認したSA2の延長部分にあたる。

SA4001は、東西方向に延びており、この遺構を挟んで北側と南側では堆積状況が異なることが確認できたため、IV区南とIV区北に分けて調査を進めた。SA4001の南側は、SA4001が機能していた時期の面を築造するための造成土(III 10層)が確認できた。クチャを造成土として使用しており、間に礫層を挟む堆積をしていた。III 10層造成時には、さらに南側にあたる部分を削平して造成されていることが確認できた。

SA4001の北側は、SA4001の根石付近まで客土が堆積している状況だったが、わずかに根石を1段覆う層が確認できた。この層からは近代磁器等が多く出土したため、調査時にはII 7層とした。根石の状況やI層に削平されている状況から、上層は機能面だった可能性があるが、削平されて残存していない。遺構面は根石周辺で確認することができた。この遺構面は、SA4001が機能していた時期よりやや古く、平場拡張及びSA4001の構築

時の面である。このことから、SA4001の南側と北側では、機能していた当時には、高低差のある構造をしていたことが考えられる。

SA4001の構築面は把握することができたが、機能時の地表面は、後世の削平等により確認できなかった。

**第3遺構面** SA4001の根石が設置されるIII 11b層及びIII 12b層を確認した。これらの層は、掘削した部分に分かれていたため、別の層序名を付したが、後に層序を検討した結果、同一層として捉えることが可能だと判断した。

SA4001構築層は、IV区の南北で広がる状況が確認できた。南側は、SA4002部分まで確認することが出来た。SA4002は、SA4001の背面を造成する際に天端が削平されている状況が確認できた。そのため、SA4001より古い遺構にあたる。SA4002は平成25・26年度調査時のSA3の延長部分にあたる。

**第4遺構面** SA4002の機能時の面はIII 11c層が考えられる。これは、SA4002の根石が埋まっている点と、西側で設けたサブトレレンチでIII 11c層上に石敷遺構を確認したためである。

SA4002を構築するにあたり、地山及び岩盤層まで掘削を行い、地盤整形を行っていることが確認できた。地盤整形した後の地山面にSA4002を設置し、III 11d及びIII 11e層で根石部分を覆っている。この地盤整形時にグスク時代の柱穴跡等を削平している。

**第5遺構面** 明確な層は第4遺構面の地盤整形時に削平されている。地山面でグスク時代の柱穴跡を確認したが、前述した地盤整形等で大きく削平を受けており、遺構の数も少ない状況だった。

**V区の調査** V区の調査は、広範囲に及び、旧校舎基礎や既設配管が多く、後世の攪乱も多かった。そのため、確認できた遺構が分散され、層序の把握が困難な部分も

第5表 遺構面対照表(つづき)

V区				V区北				I区			
遺構面	層序	年代観	備考	遺構面	層序	年代観	備考	遺構面	層序	年代観	備考
	III 17-25 III 1	近世末-	中城跡面に伴う遺構を埋戻す層								
2		近世	SS5001	1	III 7				造成2	近世1-2	水場遺構
3	III 27・III 31		SA5004 2段目機能時 SA5005 機能時								SJ 3(18世紀後半)
4	III 29・III 33・34		平場造成 SA5005 根石設置						造成4	近世2	18世紀代
				2	III 12						
5	III 36	近世初葉	SA5004当初						造成6 造成8	近世3	
6	IV 2 IV 3	グスク		3	IV 1				IV	グスク	SK51 (16世紀中葉～後半)

あった。また、V区では中城御殿、櫓園、両施設の間にある道が確認され、土層の堆積状況が記録した地点毎で異なる様相を示している。

堆積状況から近世末からグスク時代までの遺構・遺物を確認した。

**第1遺構面** 首里高校の校舎関連の土を除去すると、II層が確認できた。II層は、造成等で動かされた層である可能性が高く、中城御殿の機能が終了した際の堆積土と考えられる。この層に伴う遺構は、SD5002・5003などの排水溝跡で、後述するSF5001を削平した後に形成されていた。また、SA5003の西側に堆積しているIII 17～25層及び、SA5003東側に堆積しているIII 1層は、近世期と考えられる遺構面の上部に堆積しており、SA5003の石積を覆うように堆積しているため、これらの堆積土も中城御殿の機能が終了した際に埋戻された土であると考えられる。

**第2遺構面** SF5001及びそれに関連する遺構SD5001等が確認された。SF5001の西側にはSA5003があり、この遺構は中城御殿の東側石牆と考えられる。SA5003の根石に近い部分では、石灰岩を細かく砕いたコーラル層が確認されたことから、この層が機能時の遺構面と考えた。SF5001と中城御殿の遺構面は、約1m前後の高低差がある。中城御殿は道跡よりも低い部分に機能時の面があったことが伺える。平成25・26年度の調査成果でも、中城御殿の南側にある綾門大道より遺構面が低いことが判明している。

**第3遺構面** V区西側で確認されたIII 27層で、SA5005の根石を覆っている層。SA5005機能時の面と考えられる。北側にはSA5004があり、SA5004は上部と下部で分かれ、上部石積は下部石積より石1個分後退させて積まれている。このことから積み増ししていたことが伺える。III 27層は、下部石積を覆っており、かつ上部石積の下から2段目まで埋まっていることから、上部石積機能時の面として捉えることができる。III 27層はIV区で確認されたII 7層と同一の可能性もある。

SA5005の南側部分は、上部が削平されている状況だったがクチャによる造成土(IV区のIII 10・III 10aに相当)が確認された。

第2遺構面と第3遺構面は、調査時に確認された部分に校舎基礎等があり、直接層序で前後関係を確認することは出来なかった。

**第4遺構面** V区西側で確認されたIII 29層で、SA5005が築造される以前の平場形成のための造成土が確認された。この層上にSA5005の根石が設置されている。また、北側では前述したSA5004の下部石積がIII 33・34層に埋まっている状況なので、中城御殿全体で平場形成した痕跡が伺える。IV区のIII 12層と同一層

と考えられる。

**第5遺構面** V区北側のSA5004の下部石積と隣接するSS5010、III 36層にあたる。このような堆積状況から、SA5004は積み増し等を行いながら、長期間機能していた石牆と考えられる。

**第6遺構面** V区南側の一部と、V区北東部のIV 2・IV 3層がこれにあたり、その下層で柱穴跡等が確認できた。また、この柱穴跡を確認した面には、高低差がある部分があり、この境界に石積(SA5006)がみられることから、この時期の土地利用についても階段状に高低差があることが確認できた。

**V区北** この部分で確認できた層は、中城御殿敷地内部の体積と異なり、櫓園に関する層にあたる。

**第1遺構面** 調査区の北壁面付近でIII 7層(コーラル層)の遺構面が確認できた。これらの遺構面は、SF5001とほぼ同じ標高に位置しているため、V区の第2遺構面の時期に近いと考えられる。

**第2遺構面** III 10層下部でIII 12層(コーラル層)の遺構面が確認できた。この層は、SF5001を築造する際の造成土(III 3層)に削平されている状況だった。また、IV層上面に堆積していることから、V区の第2遺構面より古く、第6遺構面より新しい時期の遺構面と考えられる。

第1及び第2遺構面は、いずれも櫓園に伴う遺構面と考えられるが、部分的にしか確認できなかったため、全容は不明である。

**第3遺構面** 層序確認のためのサブトレンチでIV 1層を確認した。上面は削平されている状況だった。

**まとめ** V区では、中城御殿に関連する遺構を埋戻している層が確認できた(V区: III 17～25層・III 1層)。これらは中城御殿の機能が終了した後に埋められた層なので、機能終了した後の当該地は土地整形のために一部埋められたことが考えられる。他調査区では、後世の攪乱の影響で、明確に機能終了時に埋戻されたと考えられる層を確認できなかった。

一部埋めた部分の上面には、首里高校の旧校舎に伴う排水溝等が見られた。

V区で確認された道跡(SF5001)は遺構面としては上層にあたる遺構面だと考えられる。この道跡の形成状況は、IV区・V区で確認できた石積遺構SA4001及びSA5005(第65図・第66図)の形成状況と同じ様相を示しており、ほぼ同時期に築造されたこと想定できる。この石積遺構は、遺構名は異なるが調査区をまたいで確認した同一の石積遺構で、平成25・26年度調査時にもSA 2として確認しており、今回の調査成果をあわせ、中城御殿の敷地全体に東西に伸びる石積だったことが判明した。石積の根石が設置されている層(III区: III 4層、

IV区：Ⅲ10a4層・Ⅲ11b層・Ⅲ12層・Ⅲ12b層、V区：Ⅲ29層・Ⅲ33層・Ⅲ34層、I区：造成4）は、調査区全体で確認でき、既存の遺構を削平し埋戻すといった特徴があり、大規模な平場造成が行われていることが確認できた。

平場造成時に削平された遺構(SM3001)がⅢ区で確認できた。SM3001は上端が残存していない状況だが、遺構内埋土からの出土状況が良好で、概ね17世紀末頃の遺物を中心に出土している。このことから、中城御殿全体における平場造成は早くても17世紀末以降に実施されたと考えられる。造成4上面ではSJ3が確認され、18世紀後半頃の遺構と判明している。これらをふまえ、中城御殿内における大規模造成は、17世紀末以降～18世紀後半までの間に行われたことが想定される。道跡(SF5001)に接して築造されている中城御殿の東側石牆(SA5003)の機能面は、前述した東西に伸びる石積の機能面と同じ面にあたるため、中城御殿の大規模造成と同じ時期に道跡も築造されたことが考えられる。



1 ①-①IV区北西壁(東から)



2 ①-②Ⅲ区西壁(東から)



1 ①-①IV区南西壁(北東から)



3 ②-②Ⅲ区西壁(西から)



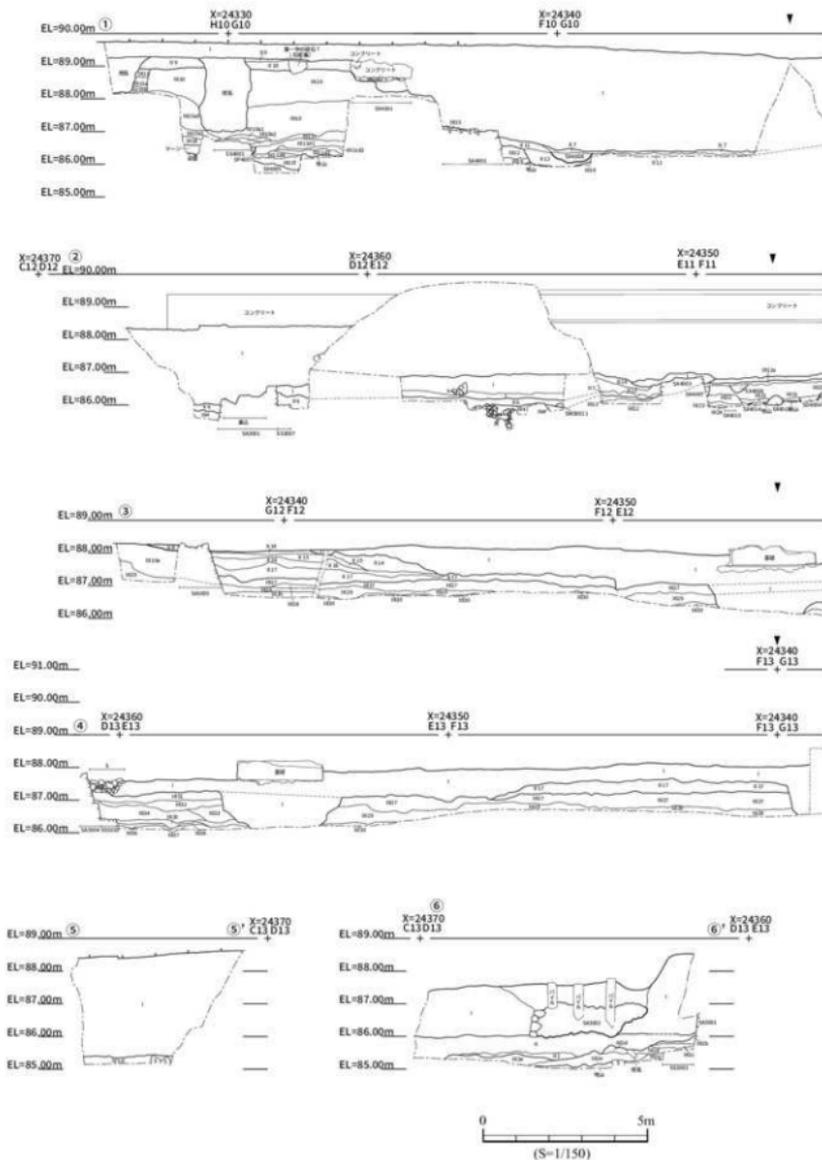
2 ①-①IV区西壁(東から)



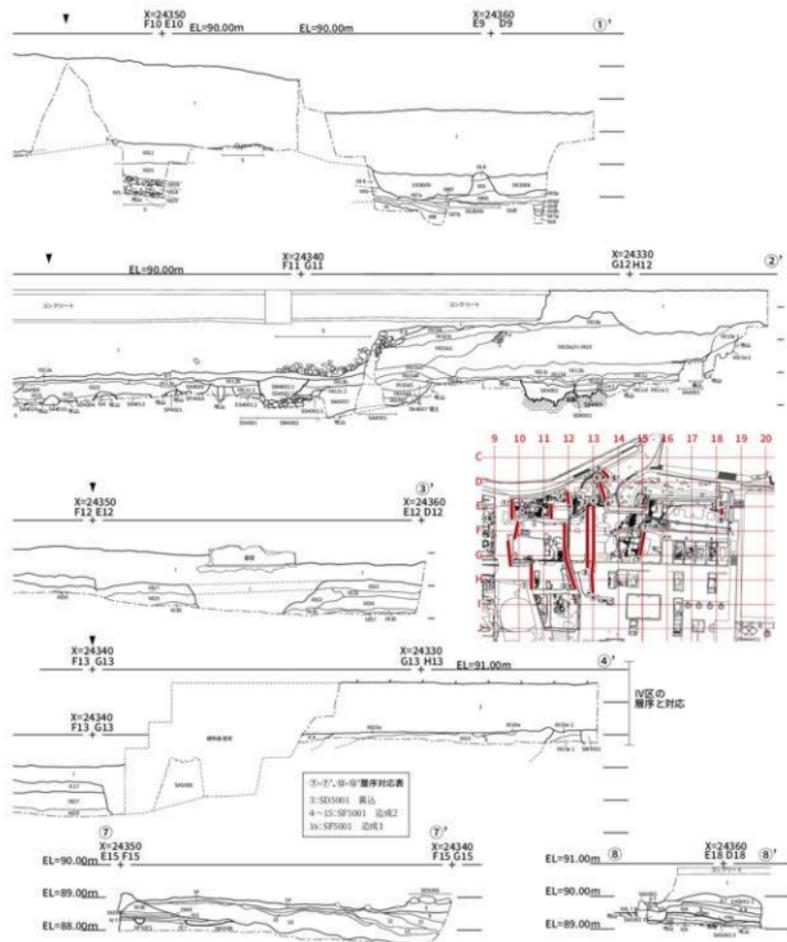
4 ②-②IV区北東壁(西から)

## 第29図 層序1

## 第30図 層序2



第31図 層序3(1)

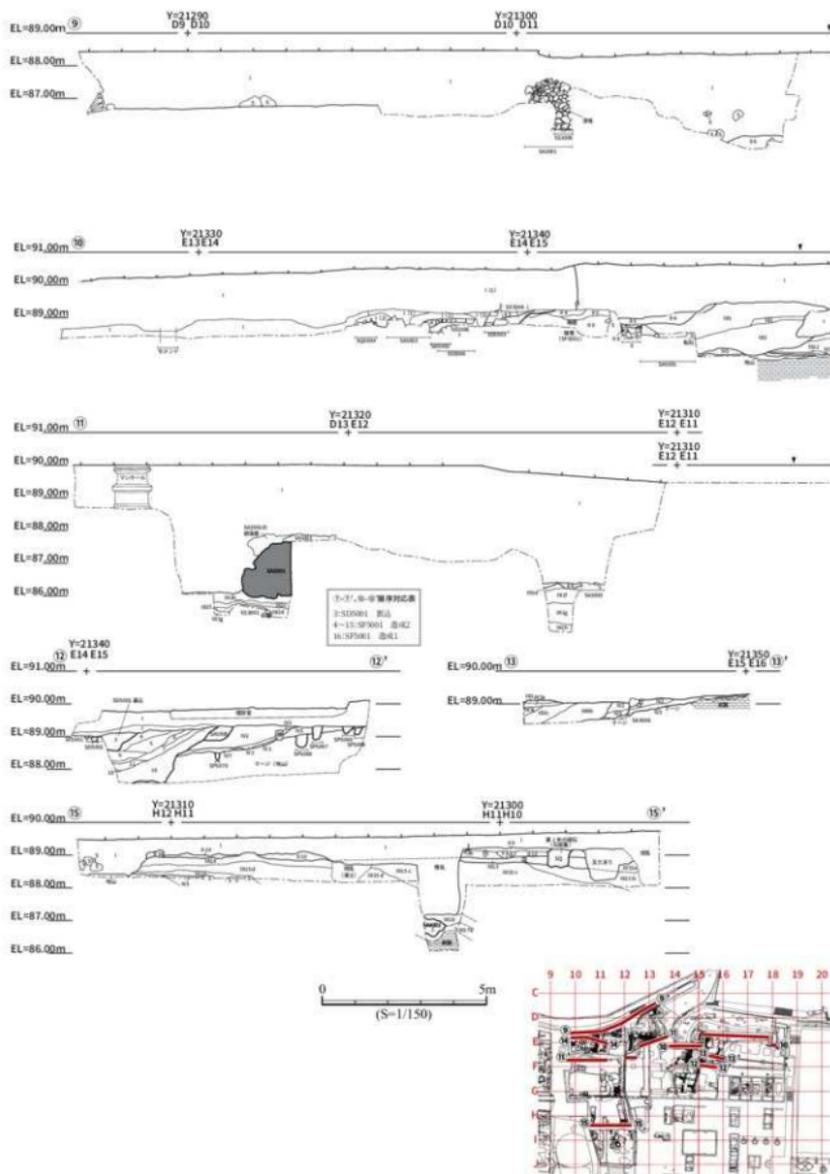


1 ②-②IV区北東壁(西から)

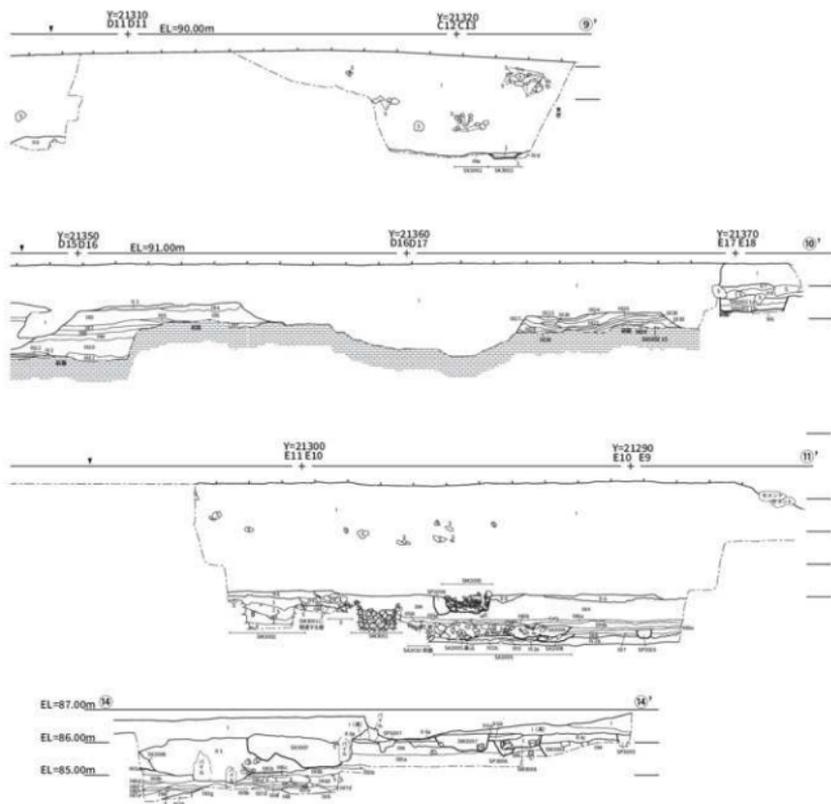


2 ②-②IV区南東壁(西から)

第32図 層序3(2)



第33図 層序4(1)



1 ②-②'IV区南東壁(西から)



2 ②-②'IV区南東壁(南西から)

第34図 層序4(2)



1 ②-②TV区南東壁(南西から)



5 ④-③V区トレンチ8 東壁(西から)



2 ③-③V区トレンチ8 西壁(東から)



6 ④-③V区トレンチ8 東壁(西から)



3 ③-③V区トレンチ8 西壁(東から)



7 ④-③V区トレンチ8 東壁(西から)



4 ③-③V区トレンチ8 西壁(東から)



8 ④-③VIII区東壁5(南西から)

第35図 層序5



1 ③-④'III区東 東壁(西から)



5 ⑨-⑩'III区西 北壁(南から)



2 ⑥-⑦'III区東 東壁(西から)



6 ⑭-⑮'V区北 北壁(南東から)



3 ⑦-⑧'V区西 西壁 6(南東から)



7 ⑩-⑪'V区北 北壁 1(南東から)



4 ⑤-⑥'V区トレンチ 7 西壁(東から)



8 ⑫-⑬'V区北 北壁(南から)

第36図 層序6



1 ⑩-⑪'Ⅲ区東 南壁(北から)



5 ⑩-⑪'Ⅴ区 北壁6(南東から)



2 ⑩-⑪'Ⅲ区東 南壁(北から)



6 ⑩-⑪'Ⅲ区西 北壁(南から)



3 ⑩-⑪'Ⅲ区西 南壁(北から)



7 ⑩-⑪'Ⅲ区西 北壁(南から)

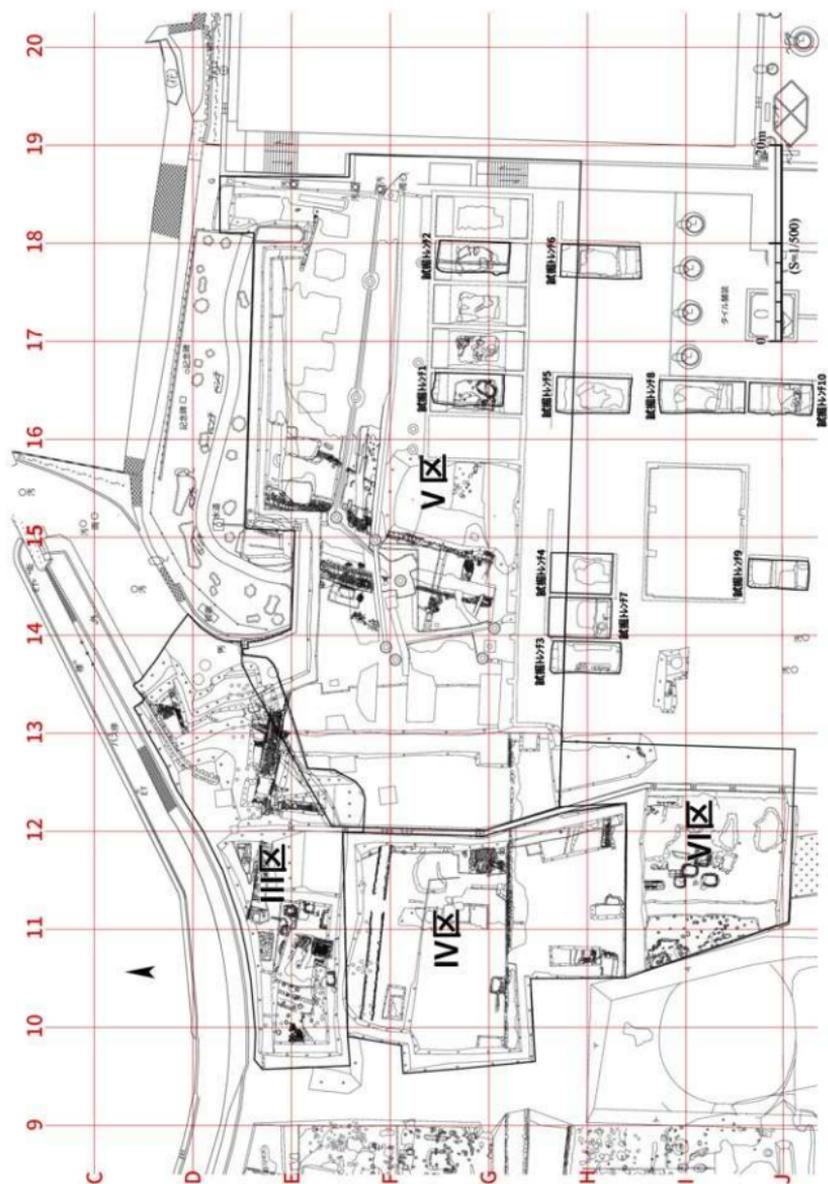


4 ⑩-⑪'Ⅴ区 北壁5(南から)

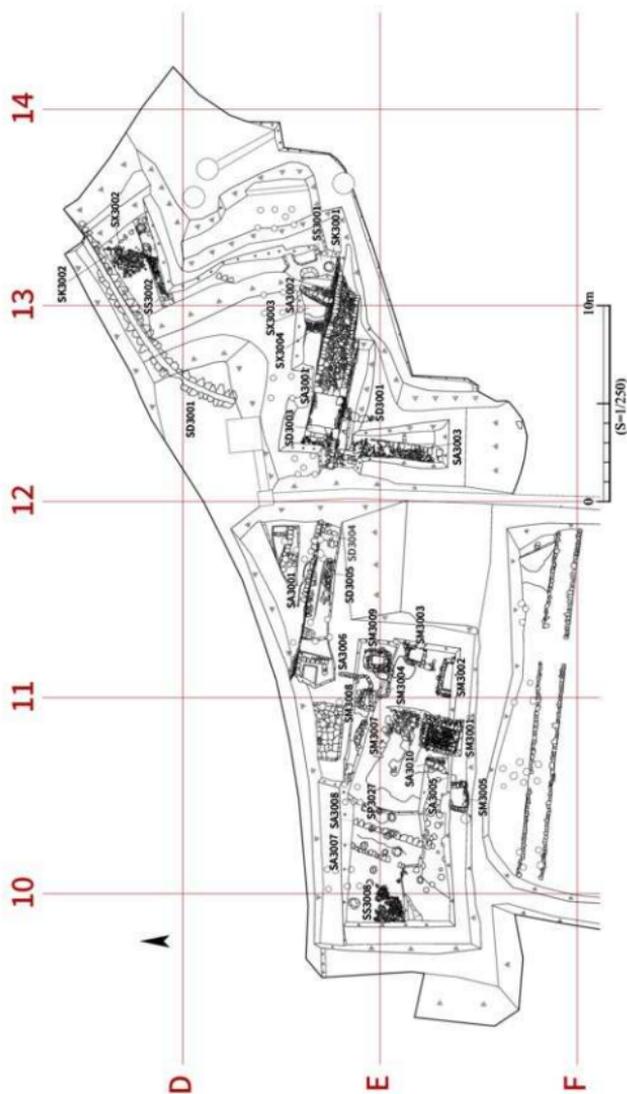


8 ⑩-⑪'Ⅳ区 南壁(北東から)

第37図 層序7



第38圖 全体図



第 39 図 川区平面図

## 第4章 発掘調査の成果

## 第1節 遺構

今回の発掘調査で確認された遺構を、調査区毎に述べる。

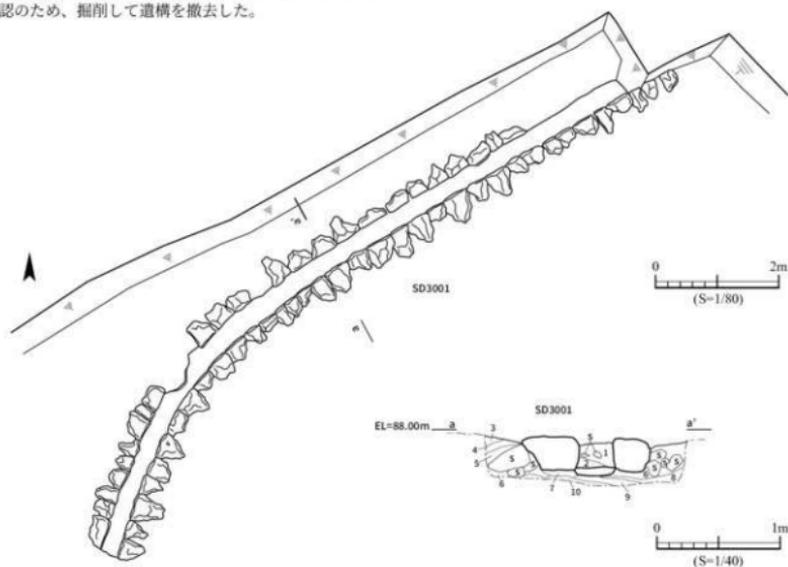
## 第1項 III区

## SD3001

I層中に確認した溝跡。溝石は1段のみ残存しており、溝床の石材には漆喰を塗り、平坦になるように整形されている。堆積状況や漆喰利用の点などから、近代以降の首里高校校舎に関連する溝跡と判断した。記録後に下層確認のため、掘削して遺構を撤去した。



第40図 SD3001 検出状況(南西から)



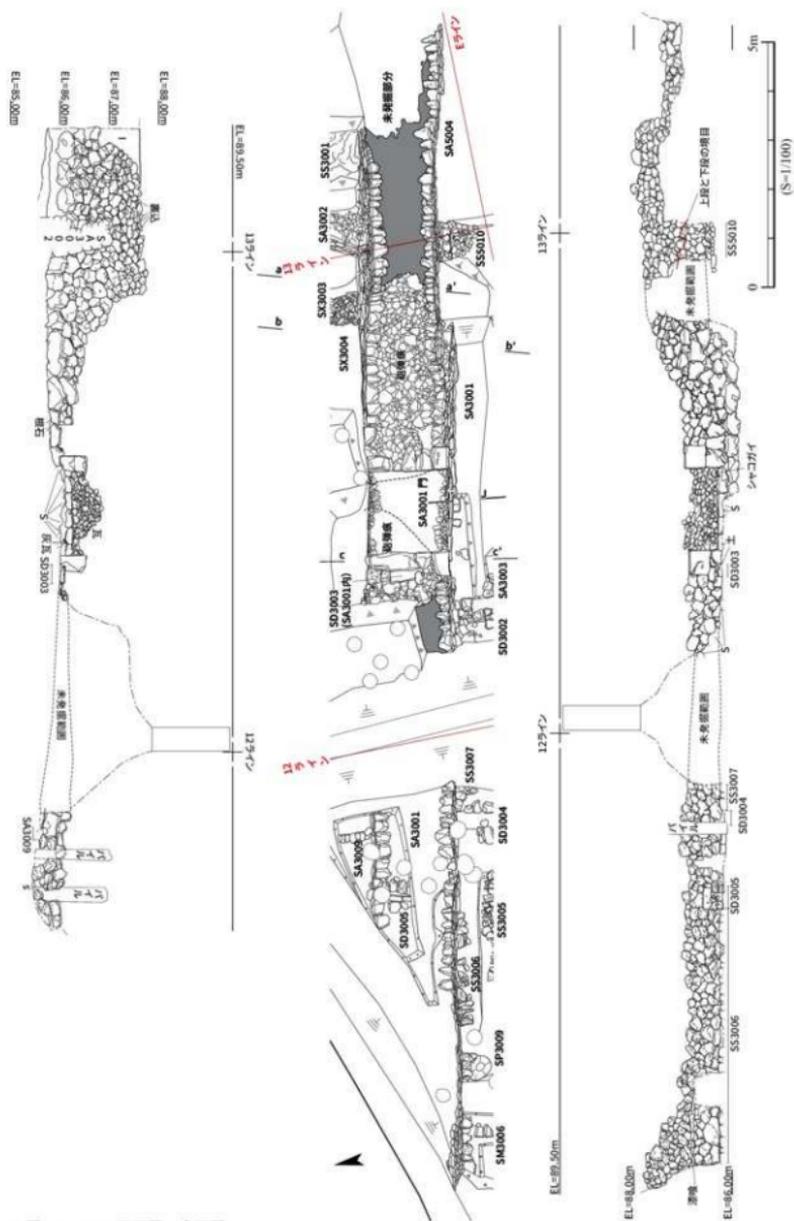
## SD3001

- 1 Hue7.5YR4/6 褐色。少量の炭・多量の石灰岩礫を含み、多量の鉄片が見られる。
- 2 Hue7.5YR4/6 褐色。砂質で炭を少量含む。
- 3 Hue10YR4/5 にぶい黄褐色。
- 4 Hue10YR5/6 黄褐色。砂質の層。
- 5 Hue2.5YR3/3 暗オリーブ褐色。ブロック状に(Hue10YR4/6)褐色が混ざる。
- 6 Hue2.5YR3/6 黄褐色。砂の層。
- 7 Hue10YR4/5 にぶい黄褐色。石灰岩の大礫・巨礫を含む。
- 8 Hue10YR4/6 褐色。(Hue7.5YR5/6)明褐色が混ざる。マージ由来の白砂粒がやや含まれ、鉄片や釘が見られる。
- 9 Hue2.5YR4/6 オリーブ褐色。マージ粒が僅かに混入し、白砂がやや入る。
- 10 Hue2.5Y4/4 オリーブ褐色。マージ粒・石灰岩の小礫を含む。

第41図 SD3001 平面図・断面図



SD3001 断面(北東から)



第42図 SA3001 平面図・立面図

## SA3001 (V区: SA5004)・SS3001

調査区北側で確認した石積遺構。Ⅲ区で確認できた根石部分はⅢ2b層上に設置されていた。根石が設置されている部分の下層には、石敷遺構としたSS3001等が確認できた。これは石灰岩の岩盤上部を整形しており、SA3001設置時に地盤整形している痕跡だと考えられる。同様の地盤整形は平成25・26年時に確認した石積(SA19)部分で確認された。

石積上部はⅠ層で覆われている状況で出土遺物はこの層からの出土が多い。石積の天端が残存している部分はなく、沖繩戦時の爆弾破裂等の影響と考えられる円形の破裂痕が確認できた。北側部分の崩落が大きいことから、着弾地点は北側と想定される。円形の破裂痕が2か所みられることから、2発以上の着弾があったと考えられる。SA3001の残存状況を見ると、破裂痕のある部分で、石積の根石から3～4段目より上部が被害を受け残存していない。残存部分は、後述するSA3001の増築後の2段目石積部分より下部にあたる。これらのことも、増築時には埋められ、地表に露出していた部分が爆弾破裂の被害にあったことによるものと考えられる。

SA3001周辺では、首里高校校舎の基礎柱等が打設されていた。ほぼ同一地点に2本打設されている部分もあり、石積裏込めや面石部分には打設が困難だったことが伺える。石積に設置された暗渠部分には基礎杭が打設されており、暗渠として空間があった状況を示している。

石積には門跡が確認でき、門内は石積裏込め石より小さい石で埋められていた。石積増築時に下層部分が埋戻されたと考えられる。門内の南東隅の最下部にはシャコガイが伏せられた状態で設置されていた。このシャコガイについては、第4章第3節で詳細を述べる。

根石は約50cm前後の石材が用いられ、1段で構成されている。それ以外の面石は約30cm前後の石材が用いられている。裏込めには石灰岩が用いられていた。

この石積が確認された地点や門跡の存在から、中城御殿の北側石牆であると判断した。

この石積が機能していたと考えられる層があり、中城御殿内側にあたる南側ではⅢ1c層に根石が設置され、その根石1段を埋めるようにⅢ1a・Ⅲ1b層があり、Ⅲ1a層上面には石敷遺構等(SS3001)があり、この門跡等が機能していた当時の層だと考えられる。

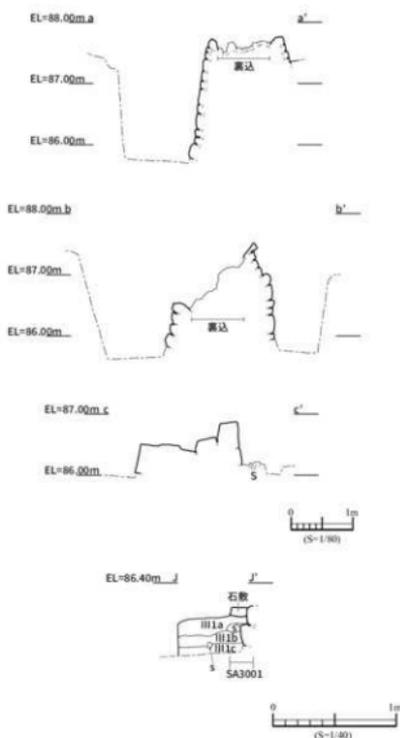
中城御殿外側にあたる北側では、根石設置Ⅲ2b層は確認できたが、機能面にあたる層は確認することが出来なかった。

石積に関連する遺構として、SD3003、SD3004、SD3005の3か所の溝跡を確認した。この溝跡は暗渠として機能していたと考えられ、雨水等を場外へ排水する機能を有していたと考えられる。

SA3001の西側部分では、石積の途中に漆喰と思われるものが塗布された部分もあることから、石積の機能面として二時期あることが伺える。Ⅲ区の調査ではこの部分はⅠ層中に含まれていたことから、明確に確認できなかったが、V区の調査で、この石積が上段と下段に分かれ、二時期にかけて利用されていたことが判明した。

## SD3003・SD3004・SD3005

SA3001内に設置された溝跡。石積より南側まで溝が延長されている状況がわずかに確認できたが、削平等されており、その構造等は不明な状況だった。SD3003は、溝内部までⅠ層が堆積している状況だったため、石積内部分には、検出時には土が堆積している状況だった。南側からみると、石がない状況でその部分に土が堆積している状況だったので、機能時には暗渠として機能していたと考えられる。



第43図 SA3001断面図

SA3002

SA3001 北面に対して垂直に構築された石積。SA3002 はⅡ層上に設置されており、根石の石が小さく、面石に用いられた石材のほうが大きい状況だった。裏込めからは本土産近代磁器が確認できた。SA3002 は北東に向けて延長されると考えられるが、延長部分は首里高校校舎基礎杭等により削平されており、確認することは出来なかった。

SA3003

SA3001 の南側で確認された石積で1段のみ確認できた。Ⅲ1e層上に設置されている。SA3001 の機能面より上層の堆積土に設置されている状況だったが、造成工事等の堆積差と考えられるため、機能時はほぼ同時期だったと考えられる。南側に延びるが、延長部分を確認することは出来なかった。

SA3005

Ⅲ区の南壁部分でのみ確認した石積。Ⅳ2層及び地山に近い部分に設置され、Ⅲ6a層により覆われており、その際に天端等や裏込めが削平されている。北側への延長については、確認できなかった。南側については、Ⅳ区の調査時に、この遺構を検出した深度までの掘削を行わなかったため、確認することが出来なかった。

北東側に向くように面石が設置されている。

SA3010

SA3005 の北東部分に隣接して確認した石積。Ⅲ7c層上に設置されており、SA3005 よりわずかに新しい。Ⅲ6a層、Ⅲ6c層に覆われる。南北へ延びるが、延長部分の掘削を行っていないので、全容は確認していない。東側に向くように面石が設置されている。

SA3006

Ⅰ層上に設置されており、隅丸形状の石積遺構。堆積状況から近代の遺構だと考えられる。付近に近代と考えられる遺構があり、それに関連する遺構だと考えられるが、全容は不明。記録後に下層確認のため、南側部分は掘削して遺構を撤去した。

SK3001

SA3001 の北側で検出した上部が削平された浅い土坑。遺構内から金属製品が出土した。SA3001 の根石が設置されているⅢ2b層上で検出したが、関連性等については不明。



第44図 SA3002 立面(東から)



第45図 SA3003 検出状況(北から)



第46図 SA3005・SA3010 検出状況(北から)



第47図 SA3006 検出状況(南東から)

## SK3002

調査区北壁付近で検出した上部が削平された浅い土坑。北側は壁面内に残存している。Ⅲa層を掘りこんで形成している。遺構完掘時には、下層に明朝系灰色瓦等が確認できた。

## SS3002

Ⅳ1d層上で確認した石敷遺構。上層にはSX3002が確認でき、下層確認のためサブレンチを設置した部分で確認した。石敷遺構としたが、石灰岩の小礫を敷き詰めたような遺構で、密に充填はされておらず、まばらな状態である。何らかの遺構面で歩道等の機能が考えられるが、広がりについては確認していない。類似する遺構は平成25・26年度調査時(SS10、SS16)にも確認している。

## SX3002

Ⅱ3層を掘削後、Ⅲ3a層とした層序中に確認した瓦列遺構である。瓦列部分は3～4枚の瓦が重なった状況だった。北東方向に列がある状態で、北西側には石灰礫や瓦片等が多く確認できた。

用途や機能については不明だが、屋敷区画等の可能性がある。

## SX3003・SX3004

SA3001の北側で確認した遺構で、石灰岩礫の小片等が多く混入した遺構。遺構保存が可能な深度だったため、検出段階で調査終了し、現地保存した。また、掘削部が狭い状況で詳細を確認することはできなかった。



第48図 SK3001 半截状況(北から)



第49図 SK3002 断面(南から)



第50図 SS3002 検出状況(東から)



第51図 SX3002 検出状況(北から)



第52図 SX3003・SX3004 検出状況(北西から)

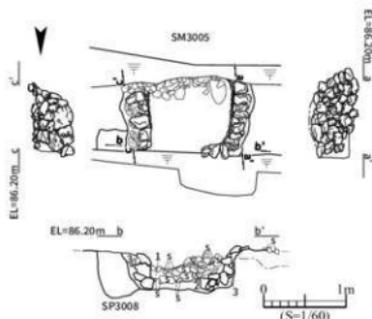
SM3005

1層掘削後に検出した石組土坑で、II 6層を掘りこんでいる。上部及び北側は削平されていた。南側は壁面に残存している。

方形と考えられ、遺構内からは明朝系瓦や沖縄産無軸陶器、本土産近代磁器が出土した。検出状況及び遺構内出土遺物から、近代以降の遺構と判断した。床面には石敷等はなかった。



第53図 SM3005半截状況(北から)



SM3005

- 1 Hue10YR3/3 暗褐色、大礫を含み、沖無が見られる。
- 2 Hue10YR3/3 暗褐色、大礫と小礫を含む。
- 3 Hue7.5YR3/3 暗褐色、大礫と小礫を含む。

第54図 SM3005平面図・立面図・断面図

SM3007

1層除去後、確認した石組土坑。上部と南側が削平されていた。遺構検出時には、石組の石は確認できなかったが、掘りこみが確認できたことから遺構と捉え、掘削したところ、石組土坑であることが判明した。

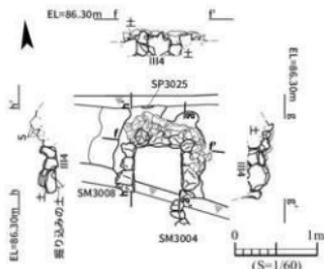
1つの石組ではなく、2つの石組が重なったような構造をしているが、残存状況から詳細を把握することは困難だった。床面に石敷等はなかった。



第55図 SM3007検出状況(南から)



第56図 SM3004・SM3008・SM3009検出状況(南から)



第57図 SM3008平面図・立面図

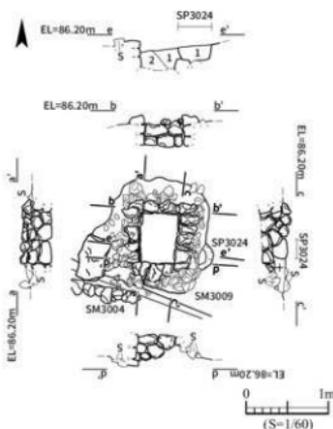
SM3008

1層除去後、確認した石組土坑で上部と南側は削平されていた。遺構の下部にはSM3004があり、削平するような形で形成されている。

## SM3009

1層除去後、確認した石組土坑で上部が削平されていた。SM3004を削平する形で形成されていた。またSM3009の南西側に大型の石灰岩が設置されているが、関連性については不明である。床面に石敷等はなかった。

半載記録をとった後、南側を断ち割って断面を確認した。面石となる石の隙間に裏込めを密に充填している状況が確認できた。石組土坑を形成するための掘りこみはわずかに確認でき、下部にいくにつれほとんど確認できない状況だった。



## SM3009

- 1 Hue10YR5/4 により黄褐色。炭を含み、瓦(赤)が見られる。
- 2 Hue10YR5/3 により黄褐色。自然遺物が多く見られる。

第58図 SM3009平面図・立面図・断面図

## SM3001

III 4層上で検出した石組土坑で、検出時には北半分は攪乱を受けていた。石組上部も削平されており、III 4層上で検出した際には、この遺構に関連するオリーブ褐色土が堆積していた。III 4層中の高さで、東側に向けて石組の石が崩れている状況だったので、III 4層堆積時に削平が行われ、II 6層堆積時に完全に覆われたと考えられる。

この遺構の構築時にはIII 6a層も掘りこんでいることが確認できるため、機能時には約1m前後の深度があったことが想定できる。

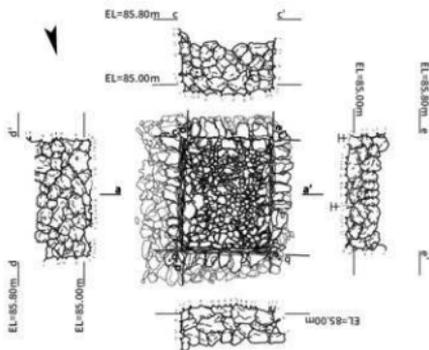
石組が残存している高さの遺構内堆積土からは、炭化物片や人工遺物、貝・骨などの自然遺物が多く得られた。石組床面は石敷になっている。レンズ状堆積しており、人為的に何度か掘り返されている状況が想定できる。部分的にはいる層(5・8・10・12)とこれらの層を覆う

層(4・6・7・9・11)と堆積度で様相が異なる状況が観察できた。このことから、掘り返したのち、水平にならずに短期間のうちに複数回行われていることが伺える。

このような何度か掘り返したような遺構は、平成25・26年度のグスク時代の遺構(SK51等)で確認できた。また、首里城跡御願門南側でシリー遺構とされた遺構でも確認されている(沖縄県立埋蔵文化財センター2010)。

以上のような状況から、有機質のものを廃棄した土坑で、何度か掻き出しを行っている遺構と判断した。

出土遺物には、中国産青花、沖縄産無釉陶器(初期沖縄産無釉陶器が主体)、煙管、瓦が見られた。



## SM3001

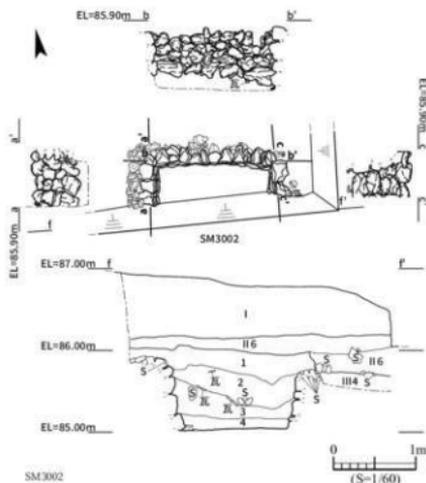
- 1 Hue10YR4/4 褐色。礫を含み、赤土色が混ざる。
- 2 Hue2.5YR4/4 オリーブ褐色。炭・マージ粒・礫を含み、瓦(赤)が見られる。
- 3 Hue10YR4/4 褐色土(Hue5YR5/3)系オリーブ色が混ざり、一部(Hue2.5YR4/4)オリーブ褐色も入り、礫が認められる。オリーブ褐色の所は炭・マージ粒が少量含まれる。
- 4 Hue2.5YR4/3 オリーブ褐色。炭を多く含む。大礫・小礫・瓦(赤・灰)、赤色の瓦などが見られる。
- 5 Hue2.5YR4/3 オリーブ褐色。砂・小礫・炭・マージ粒を含む、瓦・陶器などが見られる。
- 6 Hue2.5YR4/3 オリーブ褐色。炭・小礫を多く含む。
- 7 Hue10YR4/3 により黄褐色。礫・炭を含み、瓦や陶器が見られる。
- 8 Hue2.5Y5/4 黄褐色。礫・炭を含む。
- 9 Hue2.5Y4/4 オリーブ褐色。マージ粒・炭を含む。
- 10 Hue2.5Y4/4 オリーブ褐色。小礫・瓦・炭を含む。
- 11 Hue2.5Y5/4 黄褐色。炭が多く、砂粒・礫・少量のマージ粒を含む。
- 12 Hue2.5Y4/3 オリーブ褐色。炭が多く、マージ粒を少量含む、瓦・陶器などが見られる。
- 13 Hue2.5Y4/4 オリーブ褐色。炭が多く、少量の礫・マージ粒を含む。

第59図 SM3001平面図・立面図・断面図

## SM3002

SM3001の東側に隣接して検出した石組土坑。南側は南壁内に残存している。II 6層掘削後に確認した。石組床面には石敷等はなく、遺構内埋土もほぼ水平堆積をしていた。遺構内埋土の4層上に西側の石組最下段の石が設置されているのに対し、東側の石は4層より下部に設置されていた。石組に用いられた石材は石灰岩が中心だが、1石のみサンゴ石灰岩が用いられていた。

隣接するSM3001に比べ、人工遺物や自然遺物が少ない状況があり、床面に何もない状態であることから、石組土坑という構造は同様だが、機能には差があることが考えられる。遺構内埋土が水平堆積で短期間のうちに堆積したような状況から、中が空いた状態で機能しており、機能終了後に当遺構を埋めたことが伺える。床面を土のまま露出させている状況もあわせ、遺構内廃棄物等を溜めるのではなく、生活用水等の排水として利用したのではないかと想定している。



SM3002

- 1 Hue7.5YR4/6 褐色、礫を含み、赤色が入る。
- 2 Hue10YR4/4 褐色、小礫が含まれる。
- 3 Hue2.5Y4/4 オリーブ褐色、マージ粒・大礫・小礫が含まれ、一部瓦が見られる。
- 4 Hue2.5Y4/3 オリーブ褐色、少量の小礫が含まれる。

第60図 SM3002平面図・立面図・断面図

## SM3003

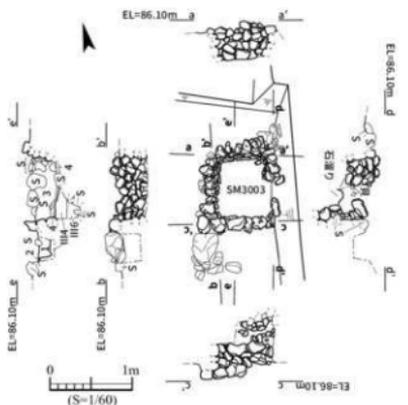
SM3002の北側に確認した石組土坑で、北側石組に一部石列が追加された遺構。II 6層掘削後に確認した。石組内の床面は明確ではないが、石灰岩礫が一面に敷かれている状況だった。遺構検出時には、遺構上部に石や石灰岩小片が敷かれて埋められているような状況が確認できた。

4層とした層では、動物骨のほかカンギクが多く確認できた。このカンギクは量が多く取り上げが困難だったため、土壌サンプルとして一括で取り上げた。

食料残渣が多く出土している特徴がある。



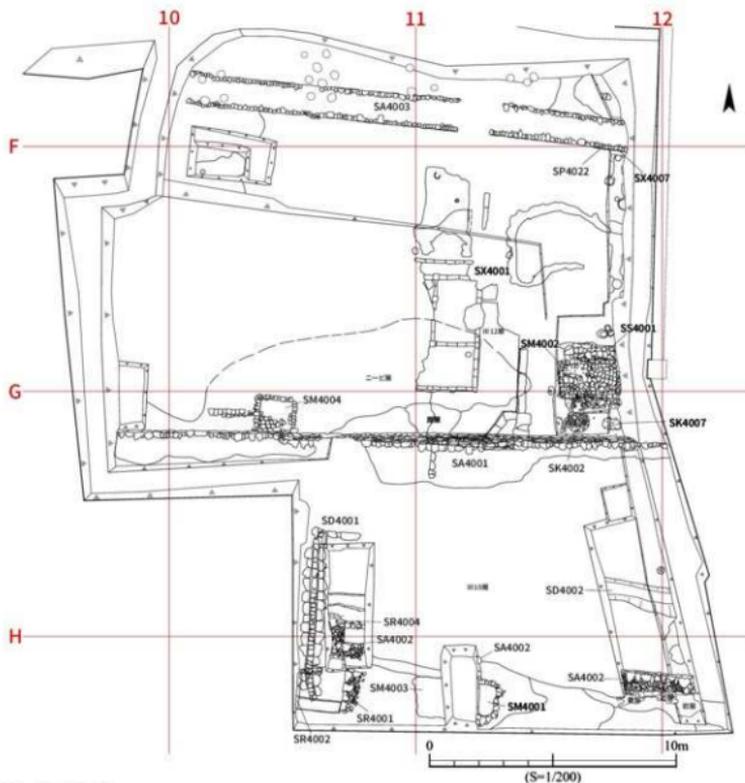
第61図 SM3003カンギク出土状況(南東から)



SM3003

- 1 Hue10YR4/4 褐色、炭を含み、機上粒・砂が入る。
- 2 Hue10YR4/3 に近い黄褐色、多量に小礫を含む。
- 3 Hue10YR4/3 に近い黄褐色、炭・機上粒・石灰の大礫を含み、ヤコウガイ・瓦(瓦)が見られる。
- 4 Hue10YR4/3 に近い黄褐色。

第62図 SM3003平面図・立面図・断面図



第63図 IV区平面図

## 第2項 IV区

## SX4001

I層掘削中に、コンクリート造りの遺構を確認した。表面にはモルタルが塗布されていた。付近には花壇跡？と思われるものも確認したが全容は不明。また、表面には焼けたような炭が全体的に堆積している状況だった。首里高校の校舎関連の遺構だと考えられる。下層調査のため、写真撮影及び測量後に掘削した。

## SD4001

I層中に確認した溝跡。III区で確認したSD3001と同様に、溝床面に石敷があり、石と石の隙間に漆喰が塗布されている状況を確認できた。

確認できた層序と、構築技法から近代以降の首里高校校舎に伴う遺構と判断した。記録後、下層調査のため掘削を実施した。



第64図 SD4001検出状況(南から)

## SA4001・(V区:SA5005)・(I区:SA2)

I層掘削後に検出した石積。当初検出した際は、方形石組かと思われたが、掘削を進めると石積であることが判明した。この石積は、IV区の東西方向に延びており、平成25・26年度に確認されたSA2の延長部分であることが判明した。SA4001の北側には、根石付近までI層が広がっていたが、南側にはクチャを主体とした造成土が確認でき、中城御殿に伴う堆積土が残存していた。遺構が埋められた状況からも、遺構が機能していた当時から、北側と南側で高低差があったことが考えられる。

根石は、南側はIII 10a4層及びIII 11b層、北側はIII 12b層上に設置されている。これらの層は、混入物や土色等は異なる状況だが、同一層として捉えられる。

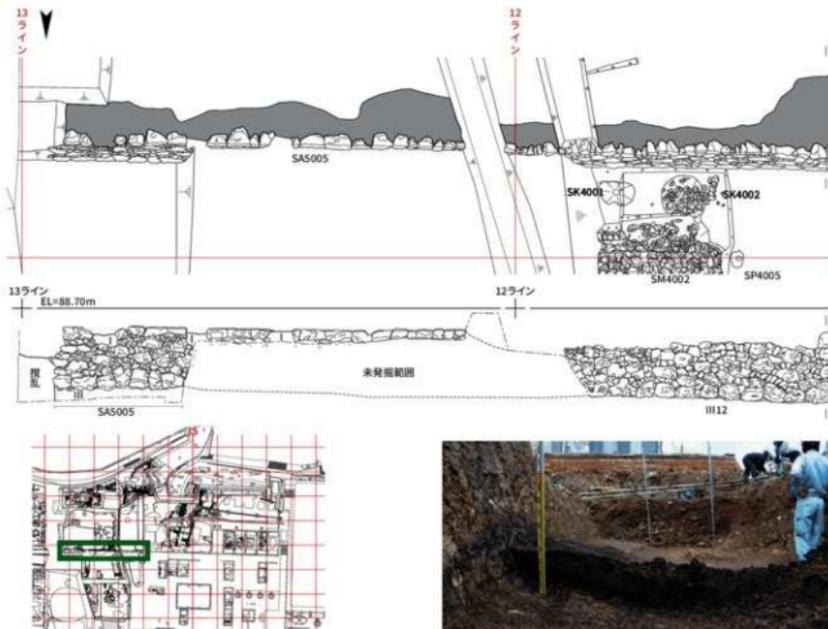
SA4001北側では、根石を1段埋める形でII 7層が堆積していた。調査中には、この層上に炭層等が確認でき、この炭層及びII 7層中から本土産近代陶磁器が出土

したため、近代以降の層と判断した。しかし、隣接するV区の調査時にも根石を1段埋める形で堆積したIII 27層とした層を確認した。IV区II 7層とV区III 27層は同一層と考えられることから、IV区で確認したII 7層についても近世頃までさかのぼる堆積土の可能性がある。近代遺物は上層からの混り込みの可能性がある。

石積は積みなおし、もしくは積み増した痕跡が確認された。天端を一度そろえた後に、石が積み込まれている部分が確認できる。

根石部分は、地形の斜面に沿って設置されているため、東側にいくにつれ設置標高がやや高くなる状況があり、天端から根石までの長さが短くなる。対して天端付近は、長方形上の面石の高さが揃うため、石積背面で平場形成することを第一に考えて設置した石積と考えられる。

この石積の特徴として、面石が人頭大の琉球石灰岩と、約40cm前後のサンゴ石灰岩を組み合わせで構築されて



SA4001 北側炭層検出状況(東から)

第65図 SA4001平面図・立面図(1)

いる。中城御殿の調査において、この石積以外は基本的に琉球石灰岩のみで構築されている。また、I区部分の石積では、一部に縦目地があり、積み直しの痕跡が確認され、この積み直しから東側(今回のIV区・V区)にかけては、琉球石灰岩とサンゴ石灰岩の2種類の石材を組み合わせて用いている。

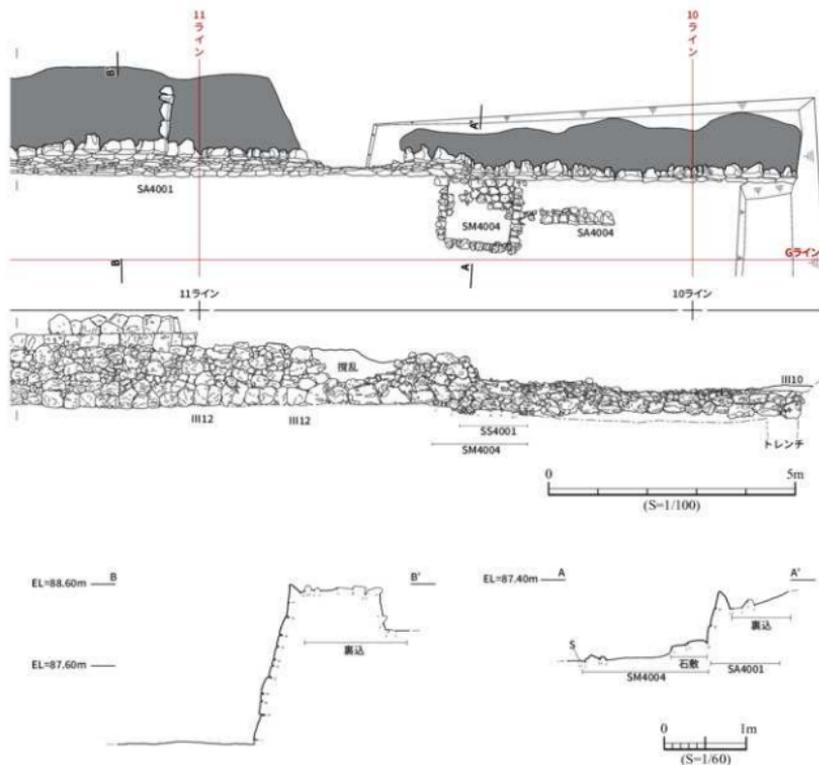
調査時には、2種類の石材の組み合わせについて、材料不足に伴う石材調達の問題、もしくは何らかの意図があり、石積の意匠表現を目的としたのではないかという議論を行った。その際、西村貞雄氏(琉球大学)、上原静氏(沖縄国際大学)に現地を確認していただいた。その結果、意匠表現を見出すことは困難だが、今後類例調査等を行うようにという助言をいただいた。首里周辺の石積遺構等で、2種類の石材を組み合わせた石積遺構について確認できなかったので、今後の課題としたい。

面石の表面には、ノミ状の工具で加工された痕跡が確

認できた。ノミの刃の横幅が約4cm前後の工具で加工されており、面石表面が平坦になるように加工しているが、加工痕跡についてはそのままの状態にしていることが確認できた。

SA4001の南側は、近世期の造成土が堆積していたが、機能時の面は残っていないかった。また、南側にはSA4002を確認しており、SA4001の構築後の造成土により削平後、埋められていることが判明した。

今回の調査の結果、建物を建築するための基礎構造として南側に平場形成するための石積と考えられる。前回調査及び今回の調査成果を合わせると、中城御殿内で東西に延びる遺構であり、かつ建物建築のための平場形成を目的としていることから、「首里古地図」に描かれている中城御殿内で東西に延びる石積にあたる可能性がある。



第66図 SA4001平面図・立面図(2)



1 SA4001 石材加工痕 1



2 SA4001 石材加工痕 2

第 67 図 SA4001 石材加工痕跡

#### SM4004

SA4001 の北側に隣接して設置された石組土坑。遺構上部の一部に石敷がされており、石組土坑の機能終了後は、埋められた状態で機能していたことが伺える。検出した深度から、現地保存が可能な遺構だったので、平面検出のみで調査を終了した。



第 68 図 SM4004 検出状況(北から)

#### SA4003

I 層掘削後に確認した石積遺構で、石牆などではなく、歩道のような機能を有していたと考えられる。歩道面は削平により確認することが出来ないが、残存部分よりやや上部が歩道面と考えられる。

同様の遺構は I 区：SA4 で確認されている。

東側では II 7 層上に設置され、西側では III 12a 層上に設置されている。II 7 層と III 12a 層はほぼ時期差がないことが想定される。II 7 層と III 12a 層は、SA4001 の機能時の面と考えられるため、同時期に使用されていた遺構と考えられる。

西側の根石がやや低く、東側にかけて高くなることから、緩やかな傾斜があったことが想定される。

SA4003 の北側では、根石より下層に II 7 層を確認し、南側では、II 7 層は石積と同じ高さに堆積していた。このことから、斜面地にこの石積を構築したことが考えられる。

#### SP4022

SA4003 の構築層より下層で確認した柱穴跡、炭が多く混入している状況だった。柱痕は確認出来なかった。

#### SX4007

SA4003 構築層の下層で確認した遺構、柱穴跡の可能性もあるが不明遺構とした。全体的に炭が多く混入しており、石灰岩礫等も入っていた。

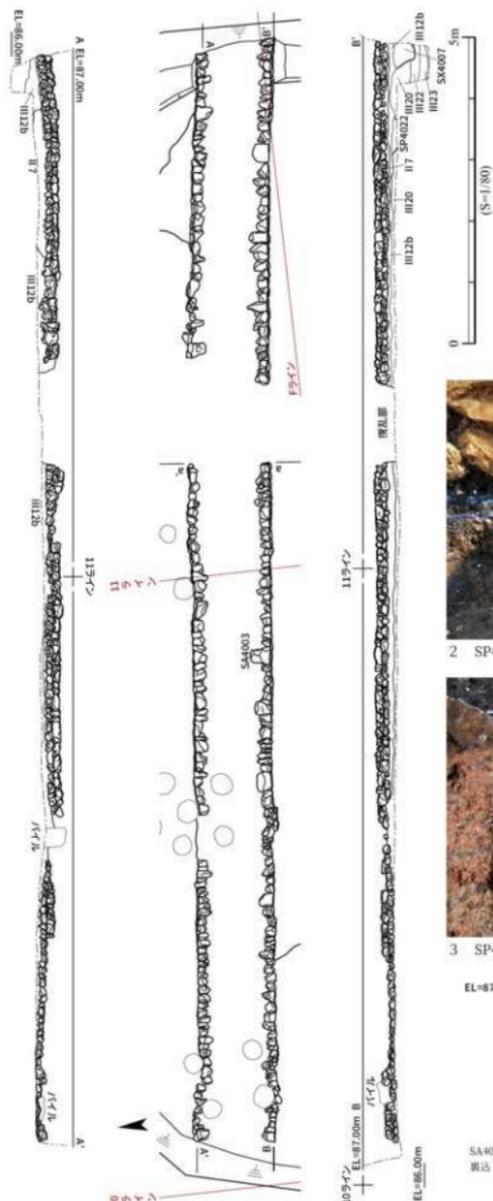


1 SA4003 検出状況(南西から)



2 SA4003 断面(東から)

第 69 図 SA4003 検出状況・断面



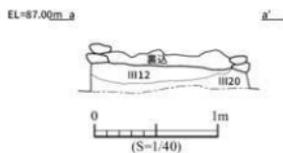
1 SX4007 検出状況(南から)



2 SP4022 検出状況(南から)



3 SP4022 半截状況(南から)



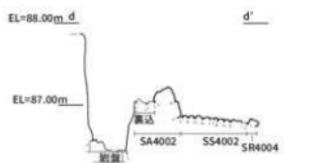
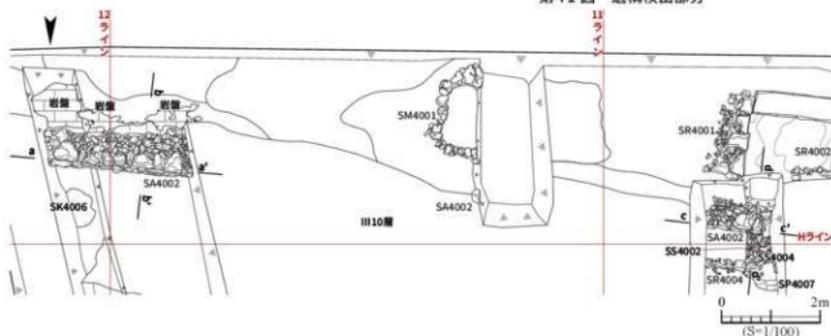
SA4003

築込 Hue10YR4/3 による黄褐色。少量の灰・多量の石灰岩層を含み、瓦(赤・灰)・貝殻・貝・青磁・青花・漆喰・沖積・沖積・河原石が混ざる。

第70図 SA4003、SP4022、SX4007 平面図・立面図・断面図・検出状況・半截状況

SA4002・(I区:SA3)・SR4004

クチャ層を主体とするIII 10a層を掘削すると確認できた石積。根石は地山とわずかにIII 11e層上に設置されていた。石積上部はIII 10a層堆積時に削平されており、石積南側には、この石積に伴う造成土が残存していた。石積に伴う造成土は、SA4001に伴う造成土とは異なる特徴を有しており、中城御殿内の調査でIV層としているグスク時代の土を主体に礫が混入する層が見られる。



0 1m  
(S-1/60)



1 SA4002 検出状況(北西から)



2 SR4004・SS4002 検出状況(北から)

第72図 SA4002・SR4004・SS4002平面図・立面図・断面図

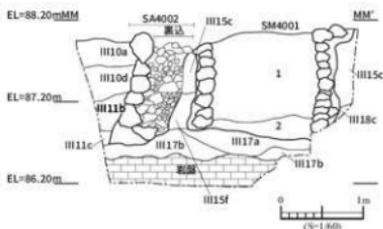
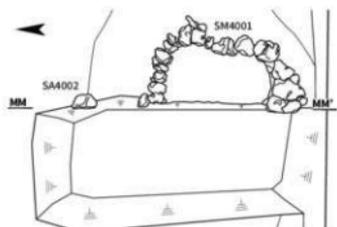
この石積構築時の造成土と考えられるため、周辺地形の改変が行われ、その発生土を用いたことが想定できる。

石積設置に伴う地盤整形の痕跡が北側で確認された。地山を掘りこんで地盤を整形し、そこで発生した土を埋戻すという工法を用いていたと考えられる。この工法は、Ⅲ区：SA3001でも確認された。

削平された石積上部と、SA4001の根石を設置した層の標高が合うことから、SA4001は構築前に中城御殿全体の石積等を削平し平場造成を行ったことが考えられる。

この石積もやや軸がずれるが、東西方向に伸びており、Ⅰ区で確認したSA3の延長部分である。西側については未調査区にあたるため、今後の調査で確認される可能性がある。

東側の一部では、南側に石敷遺構(SS4002)とそれに伴うSR4004が確認された。この石積に伴う遺構と考えられる。



SM4001

- 1 Hue10YR5/4 土に黄褐色。灰粒。多量の大礫・小礫とわずかにマージ粒を含む。貝が見られる。
- 2 Hue2.5Y4/3 オリーブ褐色。礫と少量の灰粒・マージ粒を含む。

#### SR4001・SR4002

Ⅲ15b層上で確認した2列の石列遺構。石列間には、石灰岩を細かく砕いたようなものでわずかに敷かれている状況が確認できた。北側はⅢ10層により削平されており、全容は不明だが、歩道等に関する遺構の可能性はある。

#### SM4001・SM4003

SA4002の南側にあった石組土坑で攪乱により削平を受けている状況だった。天端が残存しておらず、SA4002南側の造成土(Ⅲ15c層)を掘りこんで構築されていることから、SA4002より新しい時期の遺構と考えられる。SM4001とSM4003は中央部分が攪乱により削平されていた。両遺構を平面上でつなげると長方形形状になり、これまで確認されている石組土坑は円形もしくは正方形に近い形をしていることと、堆積状況が異なることから別遺構とした。廃棄土坑の一種だと考えられるが、全容は不明。



SM4001 断面(西から)

第74図 SM4001平面図・立面図・断面図



第73図 SR4001・4002 検出状況(北東から)



第75図 SM4003 断面(東から)

### SD4002

SA4002の北側で確認した素掘りの浅い溝跡。III 11c層を掘りこんだ状態で検出し、溝跡にはわずかに埋土が残存していたが、III 11b層の礫が多く混入している状況だった。用途等は不明。



第76図 SD4002 発掘状況(西から)

### SM4002・SS4001

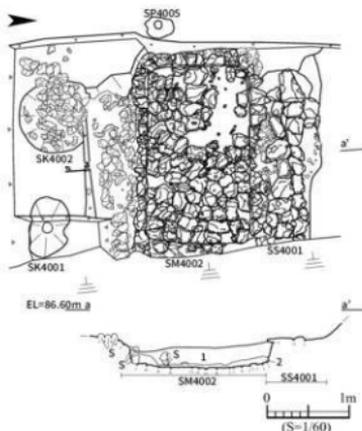
II 7層掘削後に確認した石組土坑と石敷遺構が組み合わさった遺構。当初は石組等が確認できず、素掘りの土坑と想定していたが、掘削を進めると石組土坑であることが判明した。

SK4007の一部が掘削されてSS4001が設置されている。SS4001 2層は機能時に堆積した層と考えられる。ほぼ同時期にSM4002がSS4001の中心部を掘削するように設置され、隣接している状況から、同時に利用していた可能性が高い。SM4002 2層はほぼ使用時の層と考えられ、全体的に薄く堆積している。その後、III 12b層などの大規模な造成により埋められるが、その後SM4002まで到達する深度の掘削が行われており、その部分を埋めた土をSM4002 1層とした。本来は別遺構と考えられるが、何らかの関連性が考えられることから層序付与した。

石組土坑内の石と石の隙間には漆喰が塗布されている状況が確認できた。



第77図 SM4002・SS4001 重複状況(南から)



### SM4002

- 1 Hue2.5Y4/3 オリーブ褐色、多量の大理・小礫・砂粒・炭、少量のマージ粒を含み、瓦(赤・灰)・陶磁器が多く見られる。
- 2 Hue10YR4/2 灰褐色、大礫・小礫と、少量のマージ粒を含み、瓦(灰)が見られる。

第78図 SM4002 平面図・断面図

### SK4002

SA4001の北側で確認した素掘りの土坑。III 12b層を掘りこんで形成されていた。遺構の下部は、炭等が混ざった土が堆積しており、上部には石灰岩礫のほか瓦等が混入して堆積していた。用途等は不明。

### SK4007

SA4001の北側で確認された大型の素掘り土坑。調査区壁面等まで広がっているため、全容は不明。SA4001の南側でも地山を掘りこんでいる部分があり、当初同一遺構か不明だったため、遺構名は付与していないが、III 10a 5～7層は、SK4007に伴う土層の可能性が高い。地山を掘りこみ形成され、III 12b層で埋まる状態だったため、SA4001に伴う造成以前に機能していた遺構と考えられる。



第79図 SK4007 半截状況(西から)

第3項 V区



第80図 V区平面図

## SX5005

SF5001 上で検出した石灰岩礫主体の遺構で、SD5004の溝に切られている。SD5004に関連する遺構だと考えられるが、詳細については不明。本土産近代磁器や明朝系瓦、沖縄産陶器類が出土していることから、近代頃の遺構と考えられる。



第81図 SX5005・SD5004 検出状況(北から)

## SX5006

I層中に構築された集石遺構で、方形の石灰岩があるが、密に敷き詰められている状況ではなかった。周辺に集石遺構があったことから同様の遺構と考えられたが、敷き詰められている状況やI層中の堆積ということで近代以降の不明遺構とした。



第82図 SX5006 検出状況(北から)

## SS5003・SS5004・SS5005

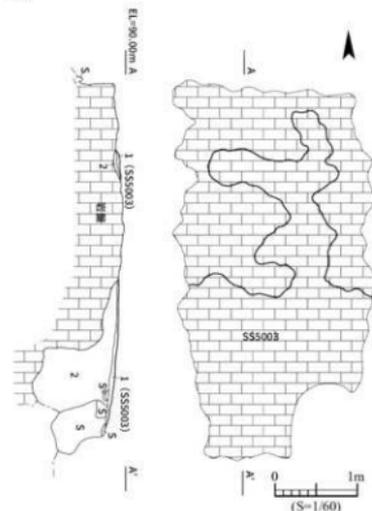
首里高校校舎基礎の間でそれぞれ確認した石敷遺構。上部は削平されている状況だった。石敷も拳大の礫があるところや、細かい石灰岩片と土がまざったような遺構だった。標高約88.8m前後で確認できたが、上部は全て首里高校の校舎基礎により削平されているため、遺構面にあたるかどうかは不明。関連遺構として北東側にあるSA5002があるが、根石が89.0m前後にあることから、遺構面はより高い標高にあったと考えられるため、上面は削平されていると考えられる。

## SX5003

トレンチ3で確認した遺構で、礎石を据えるための基礎部分の可能性がある遺構。岩盤をわずかに埋め、方形の石灰岩が設置されている。周囲には円形になるように未加工の石灰岩が配置されていた。この遺構の周囲は大きく削平されており、関連遺構等については判断としない。

## SX5007

トレンチ4のSS5005の下層から検出した溝状遺構。レンズ状の掘りこみがあるが、岩盤で途切れている状況が確認できた。SS5005の下部構造の一種の可能性はある。



## SS5003

- 1 Hue7.5YR5.8 明朝色、マージ主体で少量の灰、多量の中礫を含む。
- 2 Hue10YR4/3 に近い黄褐色、少量の灰、多量のマージ粒・大礫・中礫を含み、(Hue10YR5.8)黄褐色のマージが多く混ざる。



SS5003 検出状況(東から)

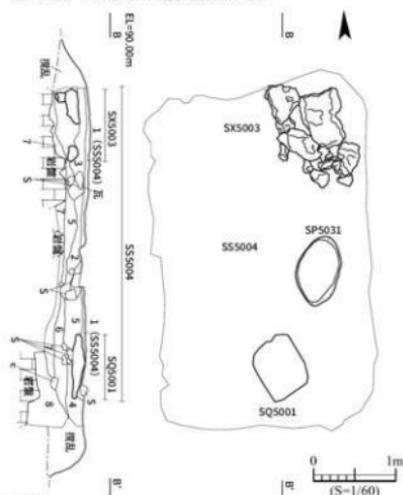
第83図 SS5003 平面図・断面図・検出状況



第84図 SS5003 半載状況(西から)



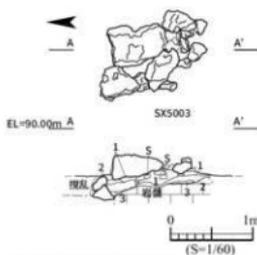
第87図 SS5004 検出状況(北から)



SS5004

- |           |                                 |       |                              |
|-----------|---------------------------------|-------|------------------------------|
| 1 Hue     | オリーブ色、礫主体。                      | 5 Hue | 10YR4/6 褐色、小礫を含む。            |
| 2 2.5Y4/4 | オリーブ色、中礫・マージ粒を含む。               | 6 Hue | 7.5YR4/6 褐色、マージ粒主体、炭・小礫を含む。  |
| 3 Hue     | 褐色、大礫・中礫を含む。                    | 7 Hue | 7.5YR4/6 褐色、マージ粒主体、大礫・中礫を含む。 |
| 4 Hue     | オリーブ色、マージ粒、中礫・2.5Y4/4 を含む、珪が入る。 | 8 Hue | 褐色、マージ粒主体、中礫・7.5YR4/6 を含む。   |

第85図 SS5004・SX5003・SP5031・SQ5001 平面図・断面図



第86図 SX5003 平面図・断面図



第88図 SS5004・SQ5001 半載状況(東から)



1 SX5003 検出状況(東から)



2 SX5003 半載状況(東から)

第89図 SX5003 検出状況・半載状況



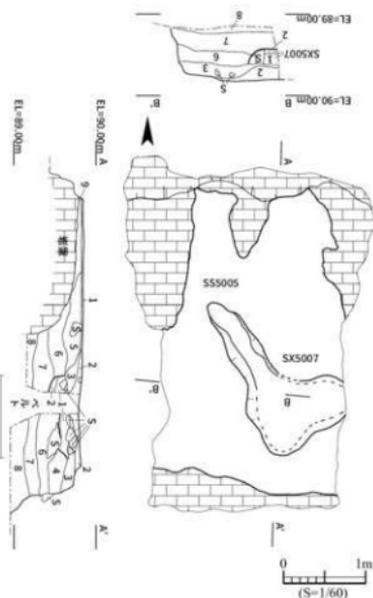
第90図 SQ5001 半截状況(南西から)



第92図 SS5005 検出状況(南から)



第93図 SX5007 検出状況(北東から)



SS5005

- 1 Hue10YR5/6 黄褐色、中礫・小礫と、少量の灰・マージ粒を含み、瓦が見られる。
- 2 Hue10YR3/1 黒色、小礫と少量の灰、マージ粒を含む、SX5002の埋土。
- 3 Hue10YR4/6 褐色、礫主体。
- 4 Hue10YR4/3 に近い黄褐色、多量の大礫・中礫・小礫を含む。
- 5 Hue10YR3/3 暗褐色、マージ粒、小礫、炭を含む。
- 6 Hue10YR5/6 黄褐色、大・小礫と、少量の灰、マージ粒を含み、瓦が見られる。
- 7 Hue7.5YR4/6 褐色、マージ主体の層で、礫を含み、Hue10YR4/2 灰黄褐色土が一部に見られる。
- 8 Hue7.5YR5/6 明褐色、マージ主体の層で、礫を含み、Hue10YR4/1 灰褐色土が一部に見られる。

SX5007

- 1 Hue10YR4/4 褐色、多量の中礫・小礫、少量のマージ粒を含み、白砂が混ざる。
- 2 Hue10YR4/6 褐色、マージ粒主体、多量の中礫・小礫を含む。
- 3 Hue10YR4/6 褐色、マージ粒主体、中礫を含む。

第91図 SS5005・SX5007 平面図・断面図

SA5002

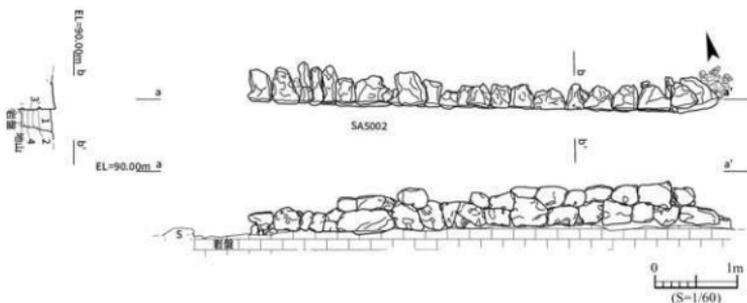
岩盤層及び一部掘削した造成土上に設置された石積遺構。SA5002の南側は岩盤が広がり、西側部分の根石は岩盤上に設置されている。SA5002北側は、グスク時代の土を掘削している状況が確認でき、東側の一部は根石設置のため、地山を掘削後、その土を埋戻して設置している。造成を行うなかで土留めとしてSA5002を構築したと考えられる。造成土中には、礫を主体とする層(III 19層)も見られ、水はけを意識した造成だったことが伺える。SA5002に伴う機能面は確認出来なかった。

SA5002は、新校舎建築に伴い一部削平されることがわかってきたため、校舎設計図をもとに、削平される部分について断ち割りを行い、背面構造を確認した。

検出した位置から、植園内の遺構と考えられるが、判然としなかった。



第94図 SA5002 検出状況(南西から)



SA5002

- 1 Hue10YR3/4 暗褐色、少量のマージ・中礫・小礫を含む。
- 2 Hue10YR4/6 褐色、少量の小礫、多量のマージブロックを含む。
- 3 Hue10YR3/4 暗褐色、少量のマージ、多量の中礫を含む、砂が混ざる。
- 4 Hue10YR3/3 暗褐色、少量のマージブロック・小礫を含む。

第95図 SA5002平面図・立面図・断面図

## SA5004・(III区：SA3001)・SS5010

III区で検出したSA3001の東側延長部分にあたり、一部重複して検出している。調査区の北端にあたるため、石積の南面の調査を実施した。

SA5004の下層確認のため、トレンチ8を設けて下層確認を行った。その結果、SA5004は積み増しの痕跡があり、上段と下段に分かれ、上段の石積は下段の石積より内側に積まれ段差がある状況が確認できた。

また、下段の石積には石敷遺構(SS5010)が伴い、下段が機能していた時期の遺構面(III 36層)を確認した。

その後の造成により、下段部分は埋められ、上段石積の下側1段を埋める形でIII 31層が堆積していた。この層は攪乱により分断されていたが、III 27層と同一層と考えられ、SA5005が機能していた際の遺構面と同一層である。

III区で確認したSA3001の漆喰塗布の高さは標高約86.5mで、SA5004の上段に関連する機能面の高さは標高約87.2mで、緩やかな傾斜がある部分で機能時の面となっている。



第96図 SA5004立面(南から)

## SA5005・(IV区：SA4001)・(I区：SA2)

I区及びIV区で確認した石積遺構の東側延長部分。この石積遺構の東側は、首里高校校舎基礎等により削平されている状況だが、より東側に延びていた可能性が高い。

III 29層上に根石が設置されている。III 29層は、IV区のIII 11b層・III 12b層と同一だと考えられる。III 29層は、SA5005を挟んで北側と南側の両側に広がっていることから、SA5005設置前には、この周辺一帯に平場造成を目的とした造成が行われていたことが想定できる。

根石下層には、一部掘りこみ等が確認できたが、石積との関連性は不明である。

根石及び天端石はサンゴ石を用いており、その間の石材は琉球石灰岩を使用しており、2種類の石材を用いている。

SA5005南側の機能面は、上部が後世の削平で残存していない状況だったので、判然としなない。



第97図 SA5005立面(南から)

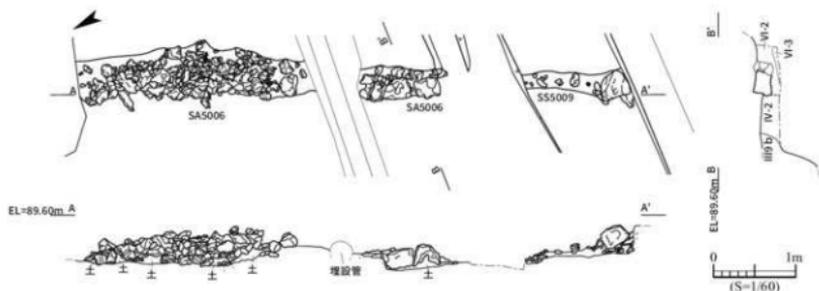
## SA5006

IV 2層上で確認した石積遺構。1段もしくは2段のみ残存している。また、面石が削平されていることもあり、断片的に残存している状況だった。

この石積を挟んで東側と西側では、グスク時代と考えられる遺構面について高低差がある状況が確認できた。このことから、グスク時代においても、このような石積などを用いて段々状の土地利用を行っていたと考えられる。



第98図 SA5006 断面(南から)



第99図 SA5006・SS5009 平面図・立面図・断面図

## SM5002

首里高校校舎基礎の間で確認された石組土坑で、地山を掘りこんで構築されていた。この遺構の上部ではSS5002が確認できた。石敷遺構としたが、下層にあたるこの遺構の土が後世の削平等により混入した状況のものを検出したと考えられる。また、SS5002及びSM5002はSM5001により切られる。

検出時、北東側部分では、貝殻片が多く確認された。その後、半截を行ったところ、北東部分で岩盤を検出し、南西部分は岩盤がない部分が掘削されていた。堆積土からは、中国産陶磁器のほか、ヤコウガイやシャコガイ等の貝類、動物骨などが出土した。出土状況から廃棄土坑と考えられる。出土遺物では、小破片や胴部片のため図化できなかったが、中国産青磁や褐釉陶器が主体を占める。しかしながら沖縄産の陶質土器が1点、混入の可能性も否めないが出土している。全体的に人工遺物が少なかった。SS5002からは中国産青磁、中国産白磁(徳化窯系)、明代の青花が出土している。これらに加え本土産陶器(薩摩系)、沖縄産無軸陶器も見られることから、新しい時期の遺物とみて18世紀代までには機能終了したことが考えられる。年代幅が16～18世紀代の遺構と考えられるが、これまでの当該地区の発掘調査成果で

は、グスク時代等の遺構ではわずかに新しい時期の遺物の混入が見られるが、遺物組成としては良好な状況で出土している。このことを考えると当該遺構が最も機能していた時期は近世段階の可能性が高い。

この遺構からは、人為的に割り取られたヤコウガイ、サラサバテイル等が出土した。このような割り取られ方は、首里城跡銭蔵東地区(沖縄県立埋蔵文化財センター2016)、東村跡(沖縄県立埋蔵文化財センター2017)で出土しているものと類似している。そのため、これらの貝殻片は両遺跡の分類を参考として分析を行った(第4章第3節参照)。分析の結果、ヤコウガイやサラサバテイルなどの貝殻片は螺鈿素材及びその他製品素材として用いられた後の残滓である可能性が高いことが判明した。また、マガキガイやタカラガイを用いた未成品等も出土している。

この遺構は、首里古地図で植園とされる部分から検出した。植園は、漆器の原料となる漆の採取する施設であったとされる(久手堅2000)。廃棄土坑中に螺鈿素材に用いられたと考えられる貝類遺体の出土から、漆器関連の製作等についても行っていたことが考えられる。また、螺鈿以外の製品製作にも関わっていた可能性が高い。



SM5002

- 1 Hue10YR4/4 褐色、中礫が混ざり、炭・マージ粒を含む。
- 2 Hue7.5YR4/6 褐色、小礫・炭粒・マージ粒を含み、1cm～5cmの貝の断片が多数に混ざる。
- 3 Hue10YR4/6 褐色、しまりが強い。小礫・マージ粒を多量含み、骨の断片が混ざる。
- 4 Hue7.5YR4/7 褐色、小礫・マージ粒を含む。
- 5 Hue7.5YR5/8 明褐色、中礫が混ざり、炭・マージ粒を含む。
- 6 Hue7.5YR4/6 褐色、多量の大礫・中礫を含む。



1 SS5002 検出状況(南から)



2 SM5002 検出状況(南から)



3 SM5002 半載状況(南東から)

第100図 SM5002 平面図・立面図・断面図 SS5002 検出状況・半載状況

## SP5032・SP5037・SP5040

SP5032、SP5037、SP5040で建物プランが組み、6本柱の建物跡だった可能性が高いが、校舎基礎等により攪乱を受けているため全容は不明。柱穴間の長さは約4mでSP5032は堆積土が1層のみで構築されており、石灰岩礫を多く含む。中国産褐釉陶器や産地不明土器等が出土している。SP5037及びSP5040は柱穴を掘る際に岩盤まで掘削している。

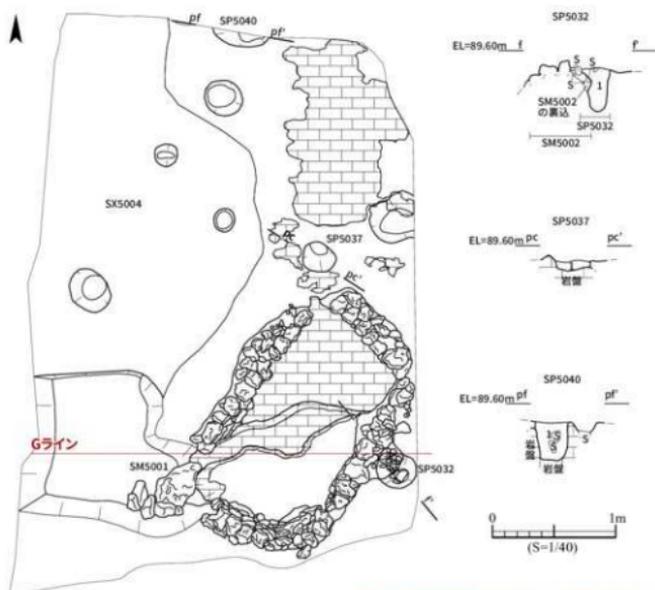
これまで中城御殿で確認されたグスク時代の柱穴はIV層とした土が柱穴内に埋まっているが、3つの柱穴は近世期の土と考えられる造成土が埋まっていた。出土遺物はグスク時代の様相を示すが、近世初期頃の遺構である可能性が高い。SP5032はSM5002に切られているので、建物跡があった場所の利用形態が変わったことが考えられる。

SX5004

トレンチ1で確認した大型土坑と考えられる遺構で、地山を掘って形成されていた。遺構内の土は、IV層に類似しているが、小礫片等が混入する状況があり、再堆積していることが考えられる。I区でも用途不明の大型土坑(SX14)を確認したが、堆積している土等が異なる状況である。SM5001により切られている状況は、SM5002と同様のため、同時期もしくは近い時期に機能していた遺構の可能性がある。土取り後の穴を埋戻されている可能性が考えられる。



第101図 SP5032・SP5037・SP5040 完掘状況(南西から)



SP5032

1 1hue10YR4/4 褐色、炭・マージ粒・小礫を少量含み、白砂が混じる。

SP5037

1 1hue10YR4/3 にぶい黄褐色、炭・マージ粒・小礫・中礫を少量含み、全体的に白砂が混じる。

SP5040

1 1hue10YR4/4 褐色、中礫・小礫・少量の炭・マージ粒を含み、砂質の上(Hue10YR5/4)と粘質の上が混ざる。



SP5032 半截状況(南西から)

第102図 SP5032、SP5037、SP5040 平面図・断面図・半截状況



第103図 SP5037半載状況(南西から)



1 SX5004 検出状況(東から)



第104図 SP5040半載状況(南から)



2 SX5004 半載状況(東から)

第105図 SX5004 検出状況・半載状況

## SD5004・SD5008

SF5001などの道跡遺構を削平して設置された溝跡。平面検出した部分は素掘りの溝で、北壁面ではこの溝上部に溝石や石敷遺構等が確認できた。また、北側延長部分では、溝石及び素掘り部分が確認できたため、素掘りの溝に、後に溝石等を設置したと考えられる。

堆積状況等から、近代頃の首里高校校舎に伴う溝跡と

考えられ、この遺構が削平しているSF5001に対して軸が同じであることから、SF5001の機能終了後の早い段階で構築されたと考えられる。

立会調査時に、北側部分でSD5004の延長部分を確認した。この際、SD5008としたが、同一遺構である。

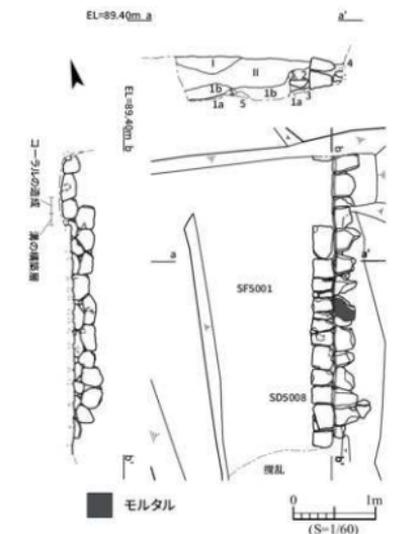


1 SD5004 検出状況(北から)

第106図 SD5004 検出状況・断面



2 SD5004 断面(北から)



SD5008

- 1a Hue10YR4/3 にぶい黄褐色、多量に中礫を含む。  
 1b Hue10YR4/2 灰黄褐色。  
 2 Hue10YR4/3 にぶい黄褐色。  
 3 Hue10YR4/4 褐色、少量の礫を含む。  
 4 Hue10YR4/3 にぶい黄褐色、大礫を含む。  
 5 Hue10YR4/3 にぶい黄褐色、少量の灰・マージル・小礫を含み、焼上粒が混ざる。



1 SD5008 検出状況(南西から)



2 SD5008 断ち割り状況(南から)

第107図 SD5008 平面図・立面図・断面図・検出状況・断ち割り状況

## SF5001・SA5001・SA5003・SD5001・SD5002・SD5006

北東方向を軸として南北に延びる道跡で、道跡に伴う溝跡や石積等が確認できた(第114図)。

道跡の西側には、SA5003とSD5002が確認でき、東側にはSA5001とSD5001が確認できた。このうちSA5003は、その位置から、中城御殿の東側石牆にあたると思われる。東側のSA5001は、植園と道の境界となる石積と考えられる。

これらの道跡の構築については、地山及び下層にあるIV層を主体としたグスク時代の層を南から北側に向けて斜めに掘削を行っていた(第36図3)。これは道跡の斜面形成のための地盤整形だと考えられる。また、掘削後には、石灰岩礫を主体とした層を構築している。これは水はけを考慮し、排水効果をもたせるための基礎構造だと考えられる。東から西側に向けて斜状に造成を行っている状況が確認できた。この造成土中には、暗褐色でIV層を主体とする造成土も確認できたことから、掘削時の発生土を利用して造成を行ったことが想定できる。大規模掘削後、石灰岩礫を埋める工法を用いていることから、石灰岩礫を主体とする基礎構造を構築することが、当該期の造成工事等において重要な工事工程だったと考えられる。

道跡及び溝石等は、一部削平されている部分もあるが、歩道面の残存状況や溝石上面が平坦になっている部分も確認できることから、ほぼ機能時の面を残していると考えられる。歩道面は石灰岩を細かく砕いたもので充填されていた。SA5001及びSA5003は、面石や裏込めが削平されている状況が確認できたことから、道跡や溝跡より高く積まれていたものが、後世に削平されたことを示している。

歩道面と考えられる部分は、石灰岩礫を細かく砕いたものを敷き詰めており、中央部分が僅かに高く、両側にかけて緩やかに傾斜している。両側には溝が設置されていることから、雨水等の排水を行うための構造だったと考えられる。

また、削平を受け、全体が判然としないが、歩道面に対して垂直方向に走る溝跡(SD5001、SD5002)が2列確認できた。この溝跡も堆積状況等から、歩道が機能していた時期と同時利用されていたことが考えられるため、歩道面に溝も有する道跡だったと考えられる。

SA5003の南側と北側の2か所に下層確認のためのトレンチ10とトレンチ14を設定した。その結果、コーラルが敷かれた遺構面を確認した。北側では標高86.8m部分で遺構面が確認でき、僅かに南側にむけて傾斜が確認できた。南側では標高88.3m部分で確認した。南側で確認したコーラル層は道形成時の造成土上で見られ

た。北側と南側で高低差があることから、南から北にかけて段差もしくは傾斜があったことが考えられる。

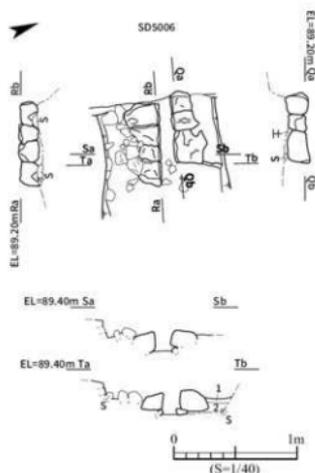
道跡と中城御殿の機能面について考えると、SA5003機能時から、道と中城御殿側の機能面は高低差があったことが考えられる。また、この遺構面に対して道跡の歩道面は標高 89.0 m前後であるため、歩道面と中城御殿内の地面には1~2 m前後の高低差があったと想定される。南側にいくにつれ、中城御殿の機能面もあがっていく状況と、前述した SA4001 の南側に建物建築のための平場形成が見られることから、中城御殿の北側部分は、道跡と高低差が大きいのが、南側になるにつれ、高低差が小さくなっていくことが考えられる。

中城御殿内の遺構面は、機能終了後に埋められている層(Ⅲ17~25層)が確認できていることから、中城御殿移転後には埋戻され、道跡と高さをそろえるような造成が行われている。

SF5001を構築する造成土中からは、中国産陶磁器、本土産陶磁器、沖繩産陶器、瓦等が出土している。歩道面からは、中国産白磁や中国産青花が出土している。加えて、沖繩産陶器や明朝系瓦の出土から18世紀以降の出土状況を示していると考えられる。

この道跡は、歩道面の年代観等から、「首里古地図」に描かれる中城御殿と植園・大美御殿の間にある道と考

えられる。この道跡を確認したことにより、中城御殿の範囲や境界が判明した。



SD5006

- 1 Hue10YR7/6 明黄褐色。少量の灰、多量の小礫を含み、塊土が固さる。
- 2 Hue10YR4/6 褐色。少量の灰、中礫、マーシ粒を含み、塊土が固さる。

第110図 SD5006平面図・立面図・断面図



第108図 SA5003西側堆積状況(北から)



第111図 V-V' SF5001堆積状況(北東から)



第109図 V-V' SA5003西側堆積状況(北から)



第112図 SF5001堆積状況(北から)

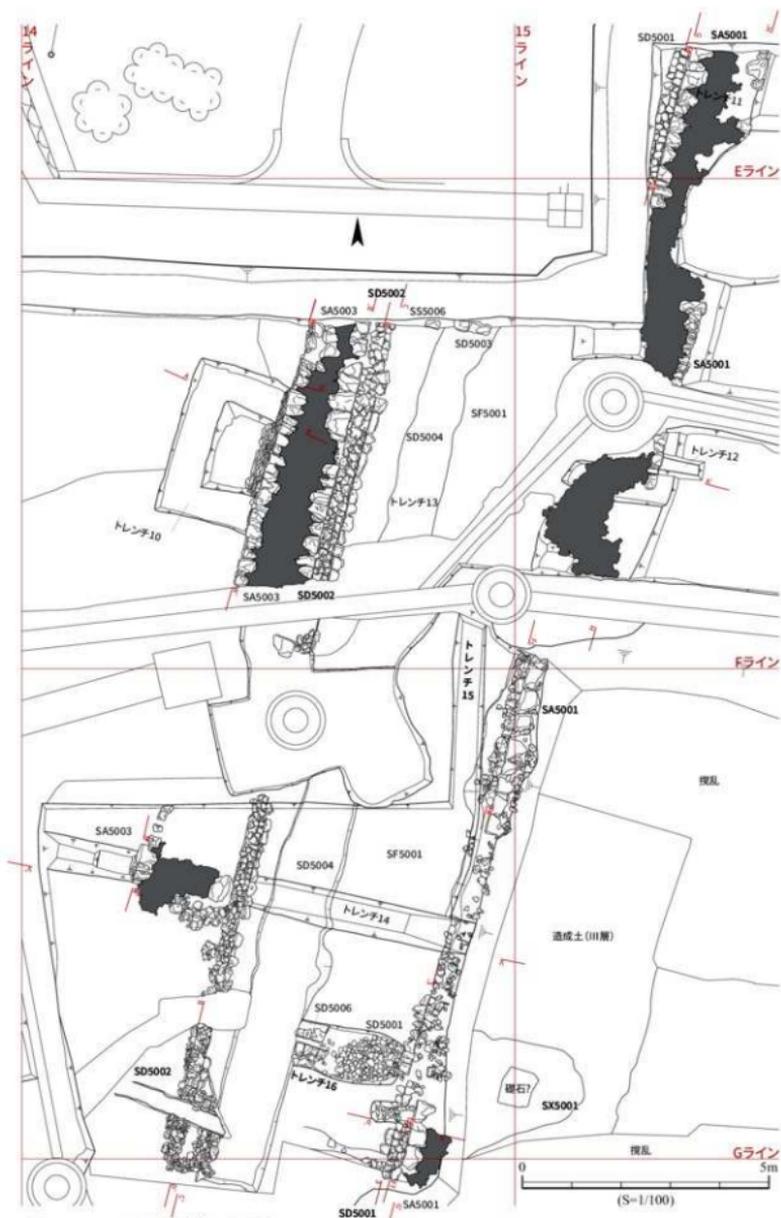


1 SF5001 北側

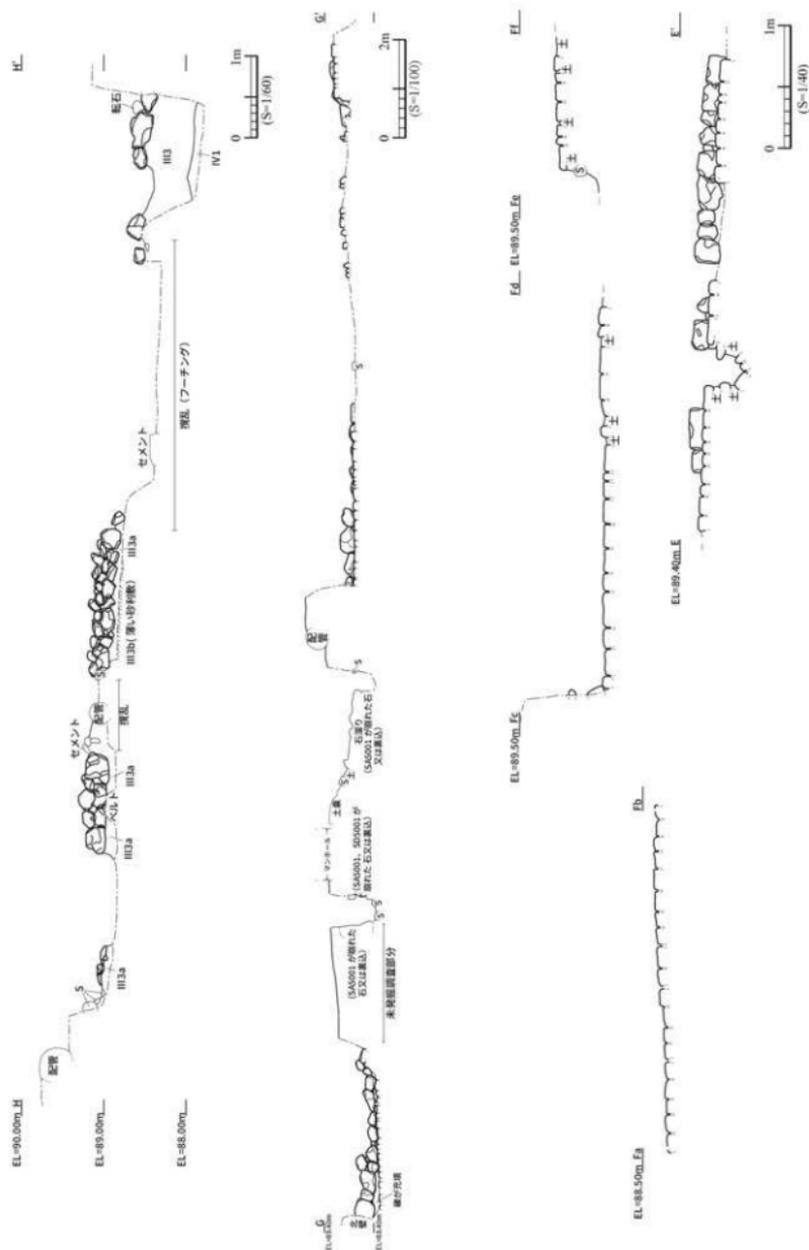


2 SF5001 南側

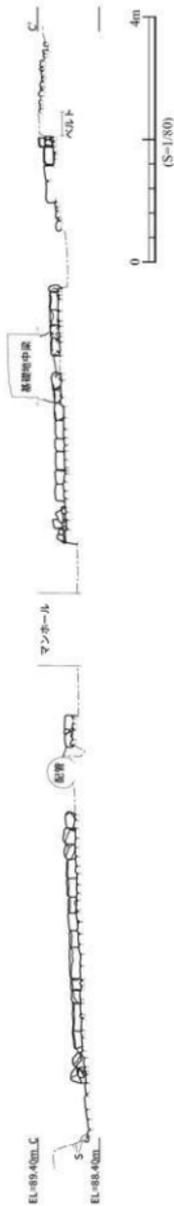
第113図 SF5001平面写真（黄色線：校舎基礎構造設置部分 青線：トレンチ設定部分を写真に加筆）



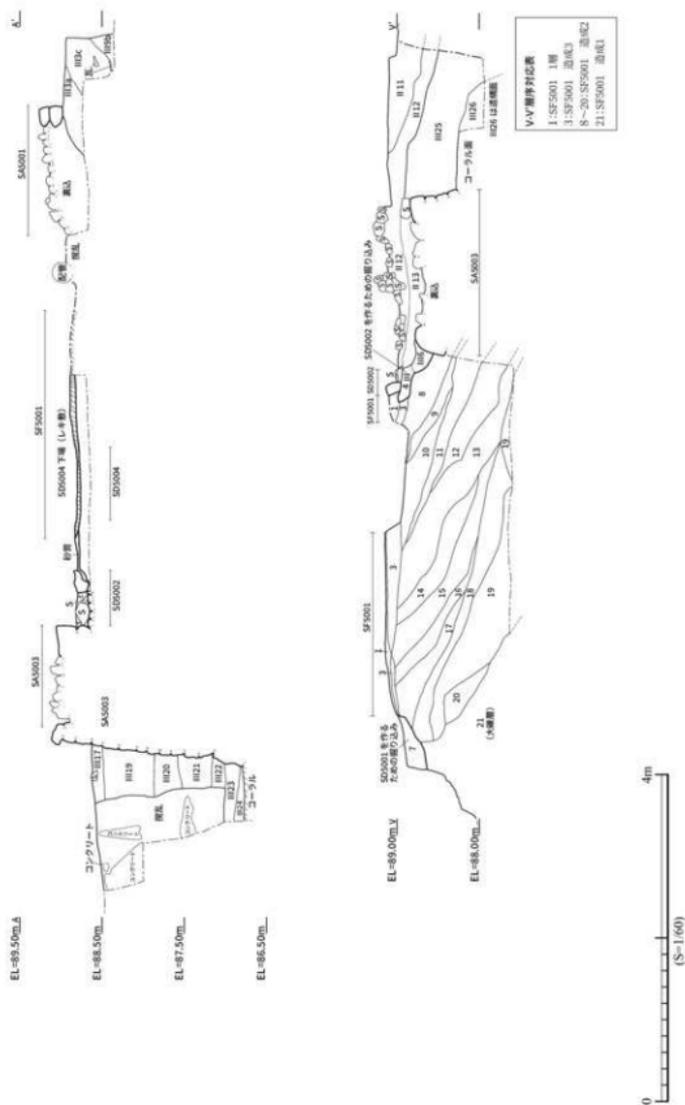
第114図 SF5001ほか関連遺構 平面図



第115図 SF5001ほか関連遺構 立面図・断面図



第116図 SF5001ほか関連遺構 立面図・断面図



第117図 SF5001ほか関連遺構 層序



1 SF5001 トレンチ完掘状況(南から)



5 トレンチ 10 完掘状況(南西から)



2 トレンチ 1 完掘状況(南から)



6 トレンチ 15 完掘状況(北東から)



3 トレンチ 2 完掘状況(南西から)



7 トレンチ 14 完掘状況(北西から)



4 トレンチ 13 完掘状況(南東から)



8 トレンチ 16 北壁(南から)

第118図 SF5001 設定トレンチ各種状況

## 第2節 遺物

### 第1項 遺物の概要・分類

本項では、遺物別に概要を述べていく。なお分類を付した遺物については分類概念を記述する。

#### 1 中国産陶磁器

中国産の陶磁器は、主体的なものとして青磁、白磁、青花、褐陶器、少数なものとしては色絵、三彩などが見られた。

**青磁** 青磁の碗・皿に関しては、沖繩出土分類(瀬戸ほか2007)に基づいて分類を行った。この分類では器形による分類を行った後、外面文様による細分を行っている。今回、外面文様が確認できるものは細分を行った。

**碗** IV類～VII類のものが出土した。

**IV類** 外底が露胎するもので、胴部は緩やかで張りがある。素地はやや軟質で灰色、釉はオリブ灰色。文様は簡蓮弁文、へら書きの草花文、内底に花文、弦文などが見られる。今回IV-0、IV-1が出土した。

**IV-0** 外面が無文のもの。口縁は外反するものが多い。IV類の中でも粗雑なもの。

**IV-1** 外面に蓮弁文を施すもの。蓮弁文に簡がほとんどないものや、輪郭が複雑になるものがある。器形は内湾しており、腰部は緩やかで張りがある。また、内底が平坦に近いものが多い。

**IV類** 口縁が玉縁状になるもので、内面胴部に型押し文様を描くものや、内底の釉を剥ぎ内面無文のものなどがある。器形がIV類に近いものやV類に近いものが見られる。

**V類** 外底を釉剥ぎするもので、高台が角形でハの字形になる。素地は堅緻で白色、釉は濃い緑色で厚く施軸される。今回、V-1～3が出土した。

**V-1** 外面に蓮弁文を施すもの。へら描きによる蓮弁文や、弁先の尖った剣先蓮弁文などがある。内面には草花文や花文を施すものが多い。

**V-2** 外面口縁部に雷文を施すもの。口縁は直口になる。文様はへら彫りや型押しで施し、へら彫りのものは高台が方形、型押しのは高台が三角形で細長くハの字状になるものが多い。

**V-3** その他文様をもつもの。一般的なものはラマ式蓮弁文。

**VI類** 外底途中までしか施軸しないものや、外底露胎になるもので、底径が小型化し厚みが増すもの。素地は精良なものや粗雑なものがあり、釉は濃い緑色である。今回VI-0、VI-1が出土した。

**VI-1** 外面に線刻蓮弁文を施すもの。弁尻が腰部下

半まで及ぶものと、及ばない簡略化されたものが見られる。

**VII類** VI類と比べると、底径は小型化し器高も低くなるもの。腰が張らず直線的に開く。

**小碗** 外底が釉剥ぎされ、へらで内外面に蓮弁文と思われる文様が施された資料が1点出土している。

**皿** IV'～VI類のものが出土している。

**IV'類** 内底を釉剥ぎする、玉縁状口縁のもの。今回、内底を釉剥ぎし、外底が露胎するものが出土した。

**V類** 外底を釉剥ぎし、釉が濃い緑色で厚く施軸されるもの。口折皿・直口皿・腰折皿などが見られる。以下、外面文様により細分を行ったもので、今回V-0、V-1が出土した。

**V-0** 外面が無文のもの。口折皿以外の器形が見られる。

**V-1** 外面に蓮弁文を施すもの。口折皿と直口皿がある。

**VI類** 高台が小型化し、器高が低くなるもの。直口皿と稜花皿が主流を占める。今回VI-0が出土した。

**VI-0** 外面が無文のもの。内底の印花文と、素地と釉が粗雑になる。稜花皿と直口皿が見られ、稜花皿は内底を釉剥ぎするものもある。

**景德鎮窯系** 景德鎮窯系の青花と同一の素地や釉で、器壁は薄く、高台は凹み、高台は逆三角形で端部を釉剥ぎするもの。菊花皿が多い。

**盤** 暮筒底のものや波状口縁で口折のもの、鐮状口縁のものが見られた。文様は蓮弁文や印花文、草花文があり、碗V類と同時期と思われる釉が厚く施軸されるものと幅広高台タイプのものが見られる。

**瓶** 胴部が丸みを帯びるものや口縁部が外反する資料が見られた。文様は蓮弁文のみ確認でき、碗V類と同時期と思われる釉が厚く施軸されるものが出土した。

**描鉢** 高台の挟りが深く、外底が平坦な資料。描目を密に施す。

**香炉** 直口口縁で外底が平坦なものや口縁部断面が方形形状になるもの、口縁部が平坦で器厚が薄いものが出土した。

**蓋** 酒会壺の大型で器厚が厚いものと、中型の壺の蓋と思われるものが出土した。

**器台** 器厚と釉が厚く、文様はへら描きで葉文と思われるものが出土した。

**合子** やや内湾し、口唇が釉剥ぎされる。文様はへら描きで不明文様のものが出土した。

**白磁** 白磁の碗・皿に関しては、森田勉(森田1982)と沖繩出土分類(瀬戸ほか2007)、大宰府分類(大宰府市2000)に基づいて分類を行った。今回はC群～F群と大

宰府IV類が出土した。

**景德鎮窯系** 皿・小皿・杯が出土している。磁器質で、釉調は灰白色、E群に入るものが多かった。

**E群** 全体に釉を掛けた後に、畳付のみ釉剥ぎするもの。器形は蓮子碗に近いものや端反皿、萼筒底の杯、菊花皿がある。今回得られた資料は、全て畳付が釉剥ぎされており、菊花皿や萼筒底の皿、杯が出土した。

#### 福建産

**大宰府IV類** 器厚が厚く、口縁部が玉縁状になるもの。胎土は灰白色、釉は黄色ないし灰色を帯びた白色で、外底が露胎するもの。

**C群** 胎土は灰色で軟質のものが多く、高台の挟り方が薄く厚手の内湾するもの。

**D群** 陶器質だが胎土のきめが細かく、底部は厚いが高台は低く、全体的に小型のもの。

**D'群** 胎土や釉調はD群と類似しているが、釉が全体に掛けられず、内底もしくは胴部途中から露胎しているもの。

**F群** 広い高台から胴部が直線的に開く直口浅めの碗。釉は青みがかったおり、内面胴部途中から露胎するものと、内底蛇の目軸割ぎするものがある。

**徳化窯系** 徳化窯系の白磁に関しては新垣力の分類(新垣2003)に基づいて判別を行った。徳化窯系のは型造りにより成形しており、器形にバリエーションが見られること、型成形の影響で粘土ジワが確認できるものが多い特徴がある。今回は碗、小碗、小皿、小杯、壺台が出土した。

**鉢** 畳付が平坦にされているもの、胴部・高台の器厚は厚いが高台内は非常に薄いものが出土した。

**壺** 口縁部が外反するものや畳付が削り調整されるもの、器厚が厚いものが出土した。

**蓮華** 口唇部が丸みを帯び、胎土が精良なものが出土した。

**蓋** 袴部が薄い小型の壺の蓋と思われるものが出土した。

**人形** 人の顔を模したものが出土した。

**青花** 青花は首里城跡銭蔵東地区の分類(沖縄県立埋蔵文化財センター2016)を参考に分類を行った。また、上記の報告書で記載されていないものについては、小野正敏(小野1982)と森毅(森1995)、沖縄出土分類(瀬戸ほか2007)の分類を基にした。

**明代** 明代の青花は景德鎮窯系のもものが主体を占め、碗、皿、杯、小杯などが確認された。

**景德鎮窯系** 景德鎮窯系は、時期で大きく3つに分けて整理し、形態などの違いにより細分されている。今回、細分に必要な器形の情報が得られるものは細

分を行った。

**碗** 分類されたものどと、明II類が多く見られた。

**I類** 小野分類のB1群や、それと文様構成が似ているもの。今回、I-1類が出土した。

**I-1類** 見込みがほぼ平坦で広く深めの端反碗で多くは小野B1群に含まれる。文様は、外面に唐草文、宝相華文、内面に雷文、四方禪文、内底に福字文などが見られる。

**明II類** 小野分類でC・D群とされるもの。やや粗雑なものも見られる。今回、II-2、II-3が出土した。

**明II-2類** 直口碗のうち、内底が平坦で広く深めの器形で、大きめの高台をもつ腰折碗。文様は、外面の上半に雲状の機帯文、下半に鎖状の唐草文、内底が十字文のものが圧倒的に多い。比較的粗雑な一群が見られる。小野分類D群にあたる。

**明II-3類** I-1類と同様の端反碗だが、外面の文様が少なく、口縁がやや厚めで、腰部は丸みを帯び、高台が小さく内底が凹む。口縁部端部の反りが70°ぐらいのものが多く口縁が稜花状のものもある。沖縄出土分類C'群にあたる。

**I群** 型押し成形されたいわゆる美蓉手タイプのもの。

**小碗** 小碗は、文様・形態ともに碗と共通点が多い。そのため、碗と同様の分類を行った。

**皿** I類~III類の資料が確認出来た。

**I類** 碗と同様の文様を持つ口径約20cmになる大型の端反皿。

**II類** 小野分類ではB1群やC群とされるもの。碗C・Dと同時期の資料で、胎土や釉調で精粗が見られる。

**II-1類** 端反皿で、口径が約9cm、約12cm、約15cmの3サイズがある。文様は外面に唐草文を描くものが多く、内底に玉取り獅子文や十字文が描かれる。小野分類B1群にあたる。

**II-2類** 萼筒底皿で、文様は外面に蕉葉文などが描かれ、内底に寿字文や花文が見られる。小野分類C群にあたる。

**III類** 碗III類とほぼ同時期と考えられる一群。器壁が非常に薄手で、文様はペンシルドローイングで描かれる。小野分類E群に相当する資料もここに入る。

**漳州窯系** 景德鎮窯系と比べると胎土が軟質で、釉・呉須が鈍いものが多く、白化粧を施すものもある。

**碗** 内底がやや膨らみ、高台が八の字状のもの。文様は寿字文が描かれる。

**皿** 内底に膨らみがあり、高台が高く土が付着する。白化粧が施されるもの。

**器種不明** 小片のため器種は判別できないもの。直口

口縁。

**清代** 景德鎮窯系、徳化窯系、産地が特定できない福建・広東系のものが見られた。

**景德鎮窯系** 器壁は薄く、胎土は堅緻でロクロ成形が多い。碗、小碗、皿、杯、小杯、瓶などが見られた。

**徳化窯系** 徳化窯系は森達也の研究(森2014)に基づいて判別した。徳化窯系は景德鎮窯系より器厚が厚いものが多く、内底の中心部がやや膨らむ。また、胎土は白色で型成形のものが多く、粘土ジワが見られる特徴がある。今回、碗、皿、杯、小杯、瓶などが出土した。

**福建・広東系** 胴部下半や底部が露胎する一群。碗は基本的に直口碗で、アラベスク風の文様を描くものがあり、内底が広く蛇の目軸刺ぎされるものが見られる。その他、福建産と考えられる資料を「福建系」とした。福建系は、福建周辺地域で作られたと考えられるが、どこか断定できなかった資料。碗や皿、杯がある。

**褐釉陶器** 今回確認された褐釉陶器は、分類を行うには残存部分が足りなかったため、分類を行わなかった。

**壺** 大型・中型・小型のものが見られ、小型のものは器厚が薄いものが多かった。器形は、口縁部が方形状のものや平坦のもの、玉縁状になるものが見られ、底部はベタ底のものが出土した。

**鉢** 小型で底部がベタ底のものと、大型で口縁部が半円状に肥厚するものが出土した。

**播鉢** 口縁部に比べると外底が小型のものと、口縁部が玉縁状の内湾するものが出土した。

#### その他陶磁器類

**色絵** 碗、小碗、皿、蓮華、水滴などが出土した。碗類や皿は口縁部が外反するものが多く見られた。

**青磁染付** 景德鎮窯系の小碗が見られ、高台が高く、外底に銘がある。

**瑠璃釉** 口縁部が大きく外反する瓶が出土した。

**三彩** 皿、水注、水滴、把手、盤などが出土した。水注は鴨形、水滴は魚形、盤は口縁部が彎状になるものが多く見られた。

**翡翠釉** 皿と小皿が出土した。器厚が薄いものが多く、口縁部が内湾するものと外反するもの、高台が逆三角形になるものが見られた。

**天目** 直口口縁の碗が1点出土した。

**褐釉染付** 器厚が薄い碗が1点出土した。

**褐釉磁器** 高台が逆三角形で、八の字状になる碗が1点出土した。

**磁器** 碗が2点出土しており、器厚が薄く釉を皸肌状にするものと、大型の直口口縁のものが見られた。

**陶器** 宜興窯系の茶器類が出土した。茶器、茶器の蓋、

茶壺などが見られ、どれも表面を丁寧に研磨されている。

#### 2 タイ産陶磁器

**褐釉陶器** 底部が萐筍底状の鉢が出土した。

**半緑土器** 外面にタタキが見られる壺と、撮み部が宝珠形の蓋が出土した。

**鉄絵** 合子の蓋と身が出土した。

#### 3 ベトナム産陶磁器

青花が得られており、器種は瓶が出土している。胎土が陶器質で生地土と釉薬の間に白化粧を施している。文様は蓮弁文が施される。

#### 4 本土産陶磁器

本土産陶磁器は、染付、色絵、陶器などがあり、産地は肥前系、備前、関西系などが確認された。また、近代(明治以降)の陶磁器も確認された。なお、肥前系の陶磁器については、九州陶磁編年(九州近世陶磁学会2000)を基に分類を行った。

#### 磁器

##### 肥前系

**III期** 1650～1690年代に焼かれたと考えられるもの。

**IV期** 1690～1780年代に焼かれたと考えられるもの。

**V期** 1780～1860年代に焼かれたと考えられるもの。

##### 染付

**碗** III期のものは、口縁部が直口の丸碗で文様が雲龍見込み荒磯文碗がある。V期のものは、口縁部が微弱な外反をし、外面胴部と内面口縁部に二重格子文を施す資料が出土した。

**皿** III期のものは、芙蓉手の大皿と思われる資料が見られ、文様は内面に区画と宝文を施す。IV期のものは、内底に白抜きで花文を施文するものと型打ち成形された波縁皿が見られる。

**瓶** 外面胴部に網目文を施すものが出土した。

**色絵** 小碗が出土しており、文様は外面に赤色の菓文と茶色の花文、黒色の線、内底に赤色の不明文様を施すものが確認された。

#### 陶器

##### 肥前系

**III期** 1650～1690年代に焼かれたと考えられるもの。

**IV期** 1690～1780年代に焼かれたと考えられるもの。

**碗** III期のものは、京焼風陶器と思われる資料がある。IV期では、緋緑釉を施したものがあり内底は蛇の目軸刺ぎ、外面底部は露胎となるものが確認された。

**皿** III期のものは、器形が胴部上端で口縁部が屈曲し口縁部が罌緑状となるもので、文様は内面口縁部に沿って象嵌の蓮弁文を施す。また、内面胴部には白土の圓線を施すものもある。IV期では、銅緑釉を施し、内底を蛇の目軸割ぎ、高台から外底を露胎とするものがある。

**薩摩系** 口縁部が逆L字状を呈する鉢が出土。

**美濃系** 鉢類の鉄絵の平向付の底部資料が出土しており、美濃地域で16世紀末頃から17世紀初頃にかけて作られたものと考えられる。底部に半環状の脚が付く。岐阜県元屋敷跡(土岐市教育委員会・(財)土岐市埋蔵文化財センター2008)の出土資料に類似している。

**備前系**

**播鉢** 頸部が「く」の字に屈曲し、底部に向かって窄まる。

**関西系**

**碗** 口縁部がやや内湾し高台径が小さく、高台先端の断面が方形状を呈する。

**播鉢** 口縁部が玉縁状を呈する。褐色釉を内面から外面胴部途中まで施釉。内面は播目を密に施し、内底部分は使用による摩滅が見られる。

**近代陶磁器** 器種は、碗、小碗、皿、急須、瓶などがあり、絵付け技法は、型紙摺り、銅板転写、ゴム版、染付がある。クロム青磁なども確認された。産地は、瀬戸・美濃系、砥部産などが確認された。陶器では、外底に不死鳥のマークと「IRONSTONE CHINA」、「14」の文字が書かれた NIKKO 社の製品と思われる洋皿が出土した。

## 5 沖縄産施釉陶器

沖縄産陶器の中で、「上焼(ジョウヤチ)」と称される一群で、器面に釉薬及び絵付けを施す製品である。器種は、碗、小碗、皿、鉢、急須などが出土した。火入れ及び火取は、沖縄の方言(佐賀県立九州陶磁文化館1998)を参照し火取(ヒトツイ)に統一した。

**碗** 生地上に白化粧後、透明釉を施し、畳付を軸割ぎ、内底を蛇の目軸割ぎするものと灰軸碗が確認された。前者は、外面胴部の文様が中国産青花の文様を模したものが出土。灰軸碗については、池田分類(池田1991)を基に分類を行った。

**灰軸碗**

**I類** フィガケ技法によって口縁部から胴部途中まで釉を施すもので内外面の底部が露胎となり、畳付及び内底に耐火土が付着するもの。

**II類** 軸掛け技法は、I類と同様で、畳付及び内底に耐火土が付着しないもの。

**VIII類** 器の内外面を異なる釉薬掛け、高台部分を

除いて全面施釉後、内底を蛇の目軸割ぎするもの。

**小碗** 生地上に白化粧後、全面に透明釉または内外面を異なる釉薬で施釉し、畳付を軸割ぎ、内底を蛇の目軸割ぎする資料がある。また、外面胴部に面取がされる資料とされない資料がある。

**皿** 口縁部を花卉状に成形する、波縁の皿などが出土。

**小杯** 灰釉を全面に施釉するが外面腰部から外底まで露胎のものも出土。

**瓶** 高台を削り出す資料と高台をスカート状に付けた資料が見られる。

**壺** いわゆる「油麩(アングガミ)」と称される、黒褐色釉を施し、肩部に耳が付く資料が出土。

**鉢** 口縁部が内湾する資料と大型の角鉢が得られた。

**鍋** 器高が低くなると思われ、口縁部に蓋受を形成する。

**香炉** 口縁断面が逆「L」字状になり、短頸で胴部が膨らみ、底部は平底で3点の脚を設ける。脚部先端が獸面になる資料がある。

**火炉** 口縁部内面に銅や急須などを置くための突起を有する。

**火取** 口縁部は直直し、腰部で「く」の字に屈曲する。口唇部が使用中の打割によって欠けたものがある。

**蓋** 急須の蓋、鍋の蓋が出土。袴部を持つ資料と持たない資料が見られる。

**急須** 全面を白化粧後に透明釉またはコバルト色の釉薬を施釉する。注口の直上とその反対側に把手を付けるための耳を有する。底部に脚を3脚設けたと思われる。

**酒器** 俗に言う「カラカラ」で、胴部が丸味を持つ資料と「く」の字に屈曲する資料が見られる。

**灯明皿** 口縁部に灯心受を有する資料が見られる。

**灯明具** 高台を有する資料が見られる。

**燭台** 口縁部が内湾し、外底面に糸切痕が残る。

## 6 初期沖縄産無釉陶器

湧田古窯跡を中心に焼成されたと考えられる資料で、高火度で焼成される器面に泥軸などが施釉される一群である。高火度で焼成されるため、胎土に白土が帯状に層をなす(上原ほか2011、新垣2013)資料が多数確認される。器種は、碗、壺、播鉢などが出土した。

**碗** 外面はナデ調整が施されており、底部は付け高台で円盤状の粘土を貼付した後に内挟りを削り出すものが確認された。

**瓶** 胴部が膨らみ、外面に黒褐色の泥釉を施す。

**壺** 外面には縄目状突帯を付ける資料がある。口縁部は外へ折り曲げた後、内側に折り返して玉縁状に成形。

**播鉢** 口縁部が肥厚帯から直直し、底部縁を面取しな

い。また、描目の間隔が空く。

**水鉢** 口縁部が内湾し、胴部に波状文を施す。

**甕** 口縁部が方形状で有頸と無頸の資料が見られる。

**香炉** 角形と筒形が見られる。円柱状やコブ状の脚を付ける。

**火炉** 口縁部が「く」の字に折れる。

**蓋** 釉薬は内外面に底から胴部に暗赤褐色の泥釉と外面の一部に自然釉が掛かり、外面胴部に貝目(二枚貝類)が付着する資料がある。

**灯明皿** 直口口縁で厚手のベタ底。口縁部付近に煤が付着する。

## 7 沖繩産無釉陶器

沖繩産陶器の中で「荒焼(アラヤチ)」と称されるもので、高火度で焼成された焼き締め陶器の一群。基本的には無釉を主体とするが、泥釉、マンガン釉が施されるものもある。確認された器種は壺、甕、鉢、瓶などとなっている。

**碗** 高台内扶が浅い厚手の碗。外面高台脇に扶りを入れる。

**瓶** 口縁部が鈎状で、胴部下位に最大径を持ち、底部は若干の上げ底。

**壺** 口縁断面が玉縁状、方形状、鈎状を呈する資料がある。

**描鉢** 口縁部に1カ所の注口を有し、口縁部断面は逆L字状で内面に描目を密に施す。また、小型の描鉢も見られ、内面の描目は間隔が空く。底部に高台が付く資料も見られる。

**水鉢** 口縁部が内湾し、断面形が舌状、玉縁状、三角形に形成する。胴部に波状文を施す。

**甕** 口縁部は方形状で短い頸部を有し、外面胴部に波状文と円突帯を施文。内底部中央は一定方向にナデ調整がある。

**火取** 胴部が筒状に立ち上がる。底部に脚が付く資料と底高台が付く資料が見られる。

**植木鉢** 口縁部が逆「L」字状。口唇部と口縁部に波状凸帯、胴部に菊花文を施す。

**鈴** 手捏ねによる成形で柄の部分が扇形を呈する。鈴口の端部が円形となる。

**人形** 人面を模した人形。

## 8 陶質土器

陶質土器は、壺屋において「アカモノ」などと呼ばれるもので、胎土は細かく、白色粒、赤色粒などを含む。器色は、橙色、浅黄褐色のものがある。焼成温度は低く、脆いものが多い。器種は、水鉢、鍋、火炉などが出土した。

**水鉢** 口縁部が内湾し、舌状や方形に形成。胴部に波状文を施す。

**鍋** 口縁部を「く」の字に外反させ、蓋受を作り、胴

部に紐状の把手を付ける。

**火炉** 畳付を浅く成形し、外面を白土による装飾をする。また、内面に種子類の圧痕が見られる資料がある。

**蓋** 袴部を有しその先端が平坦に成形される資料と撮みか逆高台形になる資料が見られる。

**急須** 底部が丸底で胴部途中から「く」の字状に屈曲し口縁部が窄まる。底部には煤が付着する。

**灯明皿** ロクロ成形で厚手のベタ底状で外底部にヘラによる線刻が見られる。口縁部には煤が付着する。

**鈴** 胴部中位から下位にかけて鈴口が残る。鈴口の端部が円形となる。

## 9 瓦質土器

器種は、植木鉢、鉢、火炉、台、脚が得られた。

**鉢** 底部に脚を有する。

**火炉** 馬蹄形焜炉の火入部と思われる資料が出土。

**植木鉢** 器厚が厚く、大型になる製品が出土。文様は外面に円筒印章による草花文。

**台** 胎土に空洞が見られ、種子類と思われる。また、器面全面に同様なものが見られる。

## 10 土器

出土した土器は、グスク土器、宮古式土器、八重山諸島産土器、産地不明の土器が得られた。器種は壺、甕、鍋、蓋が確認された。

### グスク土器

**甕** 器厚は薄く、口頸部を「く」の字に屈曲させる。内外面にナデ調整が見られる。

**鍋** 口縁部が内湾し、口唇部が舌状、平坦に成形するものが見られる。内外面に指頭痕を残す。

### 宮古式土器

**壺** 口縁部は外反し肩部で膨らみ、底部は平底となる。胎土に白砂や赤色粒が混入する。

**鍋** 口縁部は外反し無頸。外面は磨き調整がなされており、煤が付着する。

### 八重山諸島産土器

**バナリ焼** 壺が出土しており、口縁部は外反し、胴部は膨らみ、底部は丸底またはやや平底となる。胎土に石灰岩片や白砂が混入する。

**産地不明土器** 円盤状になると思われる蓋。

## 11 埴埴

碗型が出土しており、内面に銀か鉛と思われるものが付着する。

## 12 窯道具

トチンが出土。内外面は褐色に釉化する。上面に糸切痕がみられ、外底に砂が付着する。

## 13 石製品

石製品は、小杯、砥石、石像と思われる資料、文具類

(硯、石筆、石盤)が確認された。

**小杯** 内面に加工痕や調整痕が残り、外面胴部に掘り出された蓮弁文が施される。

**砥石** 砂岩製で残存する全面に研磨痕がある。

**石像** 砂岩製と思われ、表面に坊主状の2条の沈線が施される。

**硯** 全形が長方形の硯が出土した。裏面に産地・商品名、所有者名と考えられる線刻がみられる。

**石筆** 石製の筆記具。石盤と共に用いられる。

**石盤** 黒色粘板岩製の板状の文具で、表面に石筆で文字や絵を描くために用いられる。

#### 14 骨製品

骨製品は、歯ブラシ、半環状製品、ボタンが出土。

**歯ブラシ** 全面が磨かれ光沢を持っている。ブラシ部分と柄が得られている。ブラシ部分は3列23孔、背部分に2列10孔残存する資料が見られる。柄部分の資料は、腹部に文字が刻まれた資料と端部の孔に金属製の鉤が打たれた資料が得られた。

**半環状製品** イノシシまたはブタの下顎犬歯製とウシの四肢骨製のものがある。前者は、歯のエナメル質を残し、背面は研磨される。後者は、骨幹部縦方向に切痕が見られ、表面と横方向の切断面は丁寧に磨かれており光沢を持つ。また、製作途中の段階の資料(図版28-19)も得られており、近一遠位部が切断され、縦方向に分割するような切痕が見られる。

**ボタン** 全面が磨かれ光沢を持つ。断面形状が表裏平坦の資料と表面が平坦で裏面は凸面になる資料が確認された。両者とも糸通し孔が5点見られ、後者は中心の孔が貫通しない。

#### 15 貝製品

貝製品は、碁石、貝窓、貝玉が見られる。碁石は、白色の碁石で全面が磨かれており光沢を持つ。貝窓は、マドガイを方形に加工し作成。貝玉は、巻貝の螺旋部を円盤状に整形加工し玉にしたもので、出土した資料には製作途中の段階のものが見られる。貝玉については、勝連城跡のマガキガイ分類(勝連町教育委員会1990)を参考に分類を行った。

**I類** 加工する前でほぼ完形のもの。

**II類** 殻口から螺軸に沿いながら体層部を欠きとる。

**III類** 前段階同様に螺軸を中心に体層部を欠きとる。螺軸の上部が水平に加工される。

**IV類** 螺軸面と体層の打割面を水平方向に研磨し、平坦に仕上げる。

#### 16 円盤状

円盤状製品の素材は、中国産青磁、中国産青花、中国産褐陶器、沖縄産無軸陶器、陶質土器、瓦が見られる。

#### 17 煙管

煙管の雁首と吸口は陶製と金属製が見られる。分類については、首里城跡御内原北地区(以下、御内原北地区)の分類(沖縄県立埋蔵文化財センター2010)を参考にした。

##### 雁首

**陶首I類** 筒型で火皿のみでなる。瓦の再利用品が出土。

**陶首II類** 角のない丸形で、脂返しに湾曲や角が見られず首もなく全長も短い。中国産琉璃軸製の資料が出土。

**陶首III類** 六角形や八角形をはじめ直線的で角をもち、多面体形を呈する。脂返しは角をもち、首と肩が分かれにくい。沖縄産無軸陶器製が出土。

##### 吸口

**陶口I類** 小口から口付にかけて内湾する。

**陶口II類** 小口から口付までの内湾が小さく、直線的で細長い形状をしている。

**金口II類** 肩がなく、小口から口付にかけて内湾するもの。

#### 18 金属製品

金属製品は、装飾品、簪、釘、県立一中間係資料などが出土した。

**武具類** 笠幹と八双金具が出土。八双金具は首里城廣福門地区(沖縄県立埋蔵文化財センター2001)に類似あり。

**装飾品** 両端が八双で厚手のものと上部が八双で薄手のものが見られる。前者は全面無文で方孔が1カ所、小孔が8カ所見られる。後者は、表面に鍍金や魚々子、毛彫りの草花文が装飾され、2点の孔が穿たれる。

**簪** 竿本体の断面が六角形のものと同扁平で鑄を有するものが見られる。

**釘** 角釘と丸釘が出土。

**学校関係資料** 一部が欠損し折れ曲がるが、花卉中央に「中」の文字がある校章と、校章と同様の文様と文字の学生ボタンが出土。「高」の文字があるボタンも出土。

**その他** 腕時計のバックル、地下足袋のものと思われる靴、頭部に文字が掘られた鈎金具、急須の把手と思われる資料、糸抜きが出土。

#### 19 鉄製品

鉄製品は、両面から砥がれ刃部が形成される刀子、鎌の刃部、角釘と丸釘、押さえ金具が出土。

#### 20 銭貨

銭貨は中国銭、日本銭、鉄銭、無文銭が出土している。中国銭は宣和通寶、嘉定通寶または紹定通寶、洪武通寶

を確認。また、嘉定通寶または紹定通寶の背面には「一」の文字がある。日本銭は寛永通寶が見られる。寛永通寶については、時期区分がされているため『日本出土銭総覧 1996年版』(永井 1996)を参考に分類を行った。

#### 寛永通寶

**1期** 古寛永。初鑄年 1636年。「寛」の12画目と13画目の頭部が相接し、「寶」の貝画末尾が「ス」の字状になる。

**2期** 新寛永。初鑄年 1668年。「寛」の12画目と13画目の頭部が離れ、「寶」の貝画末尾が「ハ」の字状になる。背面に「文」字を持つ。

**3期** 新寛永。初鑄年 1697年。書体は2期と同様で背面が「文」以外のもの。

#### 21 玉類

勾玉と玉が出土した。勾玉は乳白青色の破片が1点確認された。玉では青色、緑色の色調のものがみられる。玉の形態分類では『中城御殿跡2』(沖縄県立埋蔵文化財センター 2010)による分類を用い、以下のタイプが確認された。

**II類** 扁平形に呈するもの。

**III類** 2つ以上の玉がコイル状に連なっているもの。

#### 22 ガラス製品

ガラス製品には瓶を主体に、皿、菓子容器と考えられるもの、シャーレなどが確認された。

**瓶** 用途別分類、色調記載には『ガラス瓶の考古学』(板井 2019)や『神山古集落』(沖縄県立埋蔵文化財センター 2019)を参考にした。ビール瓶などの酒瓶、清涼飲料瓶、牛乳瓶、調味料瓶、薬瓶、染料瓶、インク瓶等が出土している。

**皿** プレス成型された小皿片が出土した。

**菓子容器** 小杯形で、砂糖菓子詰めた「ペロペロ」と呼ばれる菓子容器(斎藤・井上 2016)に類似したものが出土した。

**その他** シャーレやランプの笠・火屋の破片、鏡、板ガラスが出土している。

#### 23 瓦類

屋瓦と埴瓦が出土した。屋瓦、埴瓦の分類は、沖縄国際大学の上原静氏による分類(上原 2011, 2013)(以下、上原分類)を基本に、御内原北地区の分類(沖縄県立埋蔵文化財センター 2013 274頁-275頁)を加えて行った。また、一部瓦類は上原静氏に実物を観察して頂き、分類の助言を頂いている。

**屋瓦** 屋瓦は高麗系瓦、明朝系瓦、大和瓦が出土した。

**高麗系瓦** 高麗造瓦技術を基に作られた還元炎焼成の瓦である。打捺具による路や羽状文が凸面にみられる。

**明朝系瓦** 中国明朝から造瓦技術が琉球へ伝わり、変

容しながら定着したとされる瓦である。軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、近代大和タイプが確認された。色調は灰色と褐色、赤色で分け、一部に褐軸・マンガン軸が掛かるものもみられる。

**軒丸瓦** 上原分類を一部簡易化して分類を行った(第119図)。瓦当文様の草花文を巨視的に観察した側視1型を「I類」、側視2型を「II類」、正視型を「III類」と設定した。以下に出土した各タイプを記す。

**I類** 草花文を巨視的にみて側視した構図で、花や茎、子葉まで全体を表現したもの。

**I-1** 中心に花芯を置いて上下左右に3対の花弁を備える。上段の花弁は兎の耳状に大きく長い。

**I-1-A** 花弁や花芯の隆起が弱く平盤的なものと、強く立体的なものがある。

**I-1-B** 花柱が付き、花弁が瓦当全体に広がる。

**I-1-II** 瓦当文様が蓮様で花柱がある。

**I-1-II-A** 花芯は柿の種形で、直上に二重線の花柱が付く。また、花芯の下位には4枚の花弁が描かれる。花弁上段の余白に菱型文様が左右一対で付けられる。

**II類** 草花文を巨視的にみて側視した構図で、花部分を強調し、その他の部分を省略したもの。

**II-1** 花弁の展開が上下で対照的に配される。

**II-III** 隅丸方形の花芯が上下にあり、表面に縦位3本の刻線を施している。花弁に多数の稜線がある。

**II-IV** 鏡餅状になった花芯と、その周りに三つ又状や三角状の花弁を配する。

**III類** 花文様が正視型をなすもの。

**III-1** 文様が菊に類似する。

**軒平瓦** 軒丸瓦と同様に上原分類を一部簡易化して分類を行った(第120図)。側視1型を「I類」、側視2型を「II類」とした。以下に出土した各タイプを記す。

**I類** 草花文を巨視的にみて側視した構図で、花や茎、子葉まで全体を表現したもの。

**I-1** 牡丹をモチーフにした文様とされ、花芯を中心に花弁が凡そ中下段に配置される。

**I-1-A** 花芯や葉の表現の違いから多くのタイプに分けられる。

**I-1-II** 花を縦断面に描いたような文様で、花芯を複数の花弁で覆う。

**I-1-III** 文様が具象的なAと抽象的なBに分けられる。

**I-1-III-A** 花文が写実的で梨の花に似る。葉は長く深い切込みがあり、茎にヒゲが一対付く。

**I-1-III-B** 花芯が二分しているようにみえるものや一つだけのもの、上部の花弁が湾曲して覆うものや、

V字状に表現されるものがある。

II類 草花文を巨視的にみて側視した構図で、花部分を強調し、その他の部分を省略したもの。

II-1 花部分は模式化され、僅かに葉で植物の造形を残すもの。

丸瓦 丸瓦は御原北地区(沖繩県立埋蔵文化財センター 2013)を基に、ヘラ描きやスタンプによる刻線や印を施す箇所で分類した。ヘラ描き・印が玉緑のみに確認されるものをA群、筒部にみられるのはB群、玉緑と筒部の両方にあるのはC群に分けた。一部、筒部に釘孔が空けられたものもみられる。

平瓦 丸瓦と同様にヘラ描き・印が確認されるものがある。凹面に桶板留紐の圧痕がみられる

近代大和タイプ 形態や胎土、色調などから大和瓦の形態を取り入れた沖繩産と考えられる瓦である。軒丸瓦は瓦当に文様がみられない。

大和瓦 日本本土で作られ、移入したと考えられる瓦である。那覇市に所在する御細工跡出土の鬼瓦(那覇市教育委員会 1991 105 頁)に類似したものが確認された。

埴瓦 埴瓦は形態から以下の8タイプに分類した。破片での出土が多く、明確なI類、V類は確認できなかった。また、赤色、褐色、灰色の色調のものがみられ、ヘラ描き印やスタンプによる刻印が一部確認される。

I類 噛み合わせタイプ。平面形が長方形で、長軸か

短軸の側面に噛み合わせの段があるもの。その他のタイプの埴に比べ厚手のものがみられる。上原分類III式相当。

II類 下駄状タイプ。平面形が長方形または三角形を呈し、下駄状の突起が付くもの。玉緑の屋根材として使われている事例がある。上原分類IV式相当。

III類 I類、II類共通特徴有タイプ。上記I類、II類の特徴はみられるが決定的違いが確認できないもの。全て破片。

IV類 平面敷きタイプ。平面形は正方形、三角形を呈する。上原分類I式相当。

V類 積み重ねタイプ。平面形が長方形を呈し、重ねて使うために造られたものと考えられる。上原分類II式相当。

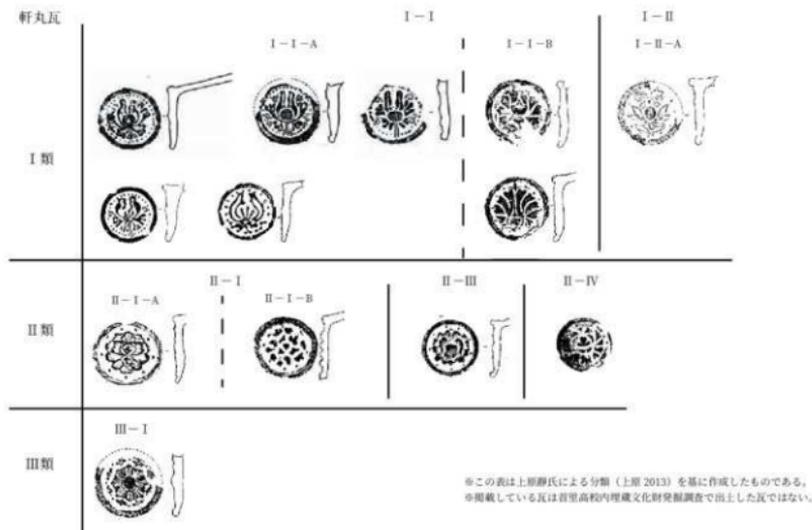
VI類 IV類、V類共通特徴有タイプ。上記IV類、V類の特徴はみられるが決定的違いが確認できないもの。全て破片。

VII類 煉瓦タイプ。概観が直方体を呈し、かなり厚手。耐火材としての使用が想定される。上原分類VI式相当。

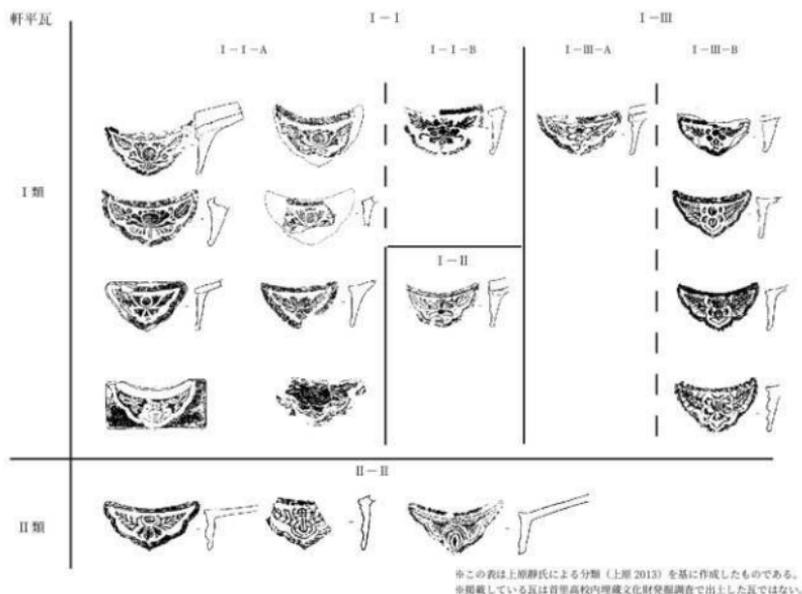
VIII類 棟瓦タイプ。想定される全形は箱冠状で、建造物の棟に用いたと考えられる。頂部は丸瓦の様な形状、側面に文様を施すものやアーチ状に整形するもの等が確認される。詳細は後述する。

第6表 埴瓦分類対照表

首里高分類		御原北〈2〉分類(2013)		上原分類(2011)	
I類	噛み合わせタイプ	I	噛み合わせタイプ	I式	形態は平板な正方形と三角形
II類	下駄状タイプ	II	下駄状タイプ	II式	平面形が長方形のいわゆる柔埴
III類	I類、II類共通特徴有タイプ	III	平面敷き用タイプ	III式	平面形が長方形の平板で、長軸か短軸の端面に階段状の噛み合わせを造形した製品
IV類	平面敷きタイプ	IV	積み重ね用タイプ	IV式	外観が下駄状の突起を有する製品
V類	積み重ねタイプ			V式	形態が方向の異なる二枚で構成され、側面に噛み合わせの段を造形する
VI類	IV類、V類共通特徴有タイプ			VI式	概観が直方体を呈し、いわゆる煉瓦として一般的に認識されるもの
VII類	煉瓦タイプ				
VIII類	棟瓦タイプ				



第119図 明朝系軒丸瓦 分類表



第120図 明朝系軒平瓦 分類表

第7表 Ⅲ区瓦当分類表 明朝系瓦

器種・色調・分類	出土地		SA		SM		SP	Ⅲ						合計									
	3001	3005	3001	3005	3008	3009	1	1	2	6	7												
		門1算出	裏込	1	1	1	1	1	6	3	4	1	1	1									
軒丸瓦	灰色	I-A													3								
		分類不可													1								
	赤色	I-B													1								
		II-B													2								
		古代大相タイプ	1												1								
褐色	I-A		1		2	1	1		2	1	2	1	3	10									
	I-B								7	1	1			14									
	II-B													1									
	分類不可				1				3	3	3	1		10									
軒平瓦	灰色	I-A		1		1									4								
		分類不可													1								
	赤色	I-B													1								
		I-A		1							3	1		1	7								
		II-B													4								
褐色	I-B													4									
	分類不可									1	2			6									
合計		2	2	1	4	1	1	1	1	2	1	28	1	4	6	2	1	2	8	1	2	1	7

第8表 Ⅳ区瓦当分類表 明朝系瓦

器種・色調・分類	出土地		SA	SK	SM	SR	Ⅳ		Ⅴ						合計									
	4003	4007	4002	4001	1	7	8	10	11	12	20	22												
		裏込	裏込	不明	1	2	1	不明	裏込	a	b	c	裏込	a	b									
軒丸	灰色	I-A														1								
		分類不可															1							
	赤色	I-B		1													1							
		II-IV															1							
		分類不可		1													4							
褐色	I-A															2								
	I-B		1													2								
	II-B			1												4								
	分類不可															13								
軒平	灰色	I-A														2								
		II-B														1								
	赤色	I-B															4							
		II-B															2							
		分類不可															2							
褐色	I-A															6								
	II-B															1								
軒五平不明	褐色	I-B		1													9							
		分類不可															1							
合計		4	1	1	1	1	35	1	4	4	1	3	2	1	2	1	4	1	7	2	1	4	1	78

第9表 Ⅴ区瓦当分類表 明朝系瓦 a

器種・色調・分類	出土地		SA	SD	15	14	15	16	17	18	SS	SS	SX	I	II				
	5003	5005	5002	5001	1	1	2	3	3	3	5001	5001	5006	5004	5007				
		裏込	裏込	裏込	下田	1	2	2	3	3	2	2	3	2	1				
軒丸	灰色	分類不可														3			
		I-A															3		
	赤色	I-B															2		
		II-A															4		
		分類不可															1		
褐色	I-A		1													7			
	I-B															7			
	II-A															1			
	分類不可															1			
軒平	灰色	I-B															1		
		分類不可															1		
	赤色	I-B															2		
		II-B															2		
		分類不可															1		
褐色	I-A															2			
	II-A															3			
軒五平不明	褐色	I-A															2		
		II-A															2		
	分類不可	I-A															5		
		I-B															6		
		II-B															1		
合計		1	1	1	2	7	2	9	3	3	1	1	1	1	1	2	3	55	4

第10表 V区瓦当分類表 明朝系瓦b

分類	出土地	II		III		IV			V			VI			合計	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
軒丸	灰色・有孔	分類不可				1		1							2	
		I-II-A														1
		I-II-B														1
		分類不可														4
	赤色	I-II-A														1
		I-II-B														6
		近代大和タイプ														1
		分類不可														1
	青色	I-II-A	2	1	1	1		2	1	1			1	1		20
		I-II-B				1	2	4	1	1		1	1	1		24
		I-II-A														2
		分類不可	1			1	2		1	1	1	1				13
軒平	灰色	I-II						1		1					2	
		分類不可													2	
		I-II-B														4
		I-II														2
	赤色	I-II														1
		分類不可														1
		I-II-A	1				1	1	1	1	1		1	1		14
		I-II														4
	青色	I-II-A														3
		I-II-B														6
		I-II						1								12
		分類不可														13
軒平・ワサツバ	I-II-A													5		
分類不可														1		
合計		3	2	2	1	1	2	1	1	3	4	1	2	1	1	63

第11表 III区埴瓦 分類表

分類	出土地	SA		SD		SM		SX		II			III			IV			合計
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16		
出類																			16
IV類																			4
V類・ヘタ抜き																			49
VI類																			14
V類・ヘタ抜き																			1
VI類																			1
分類不可																			9
合計		6	1	2	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	93

第12表 IV区埴瓦 分類表

分類	出土地	SA		SK		SK		II		III		合計
		1	2	3	4	5	6	7	8			
出類												22
IV類												1
V類・ヘタ抜き												13
VI類												2
V類・ヘタ抜き												4
VI類												1
分類不可												44
合計		2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	44

第13表 V区埴瓦 分類表 a

分類	出土地	SA		SD		SF		SP		SQ		SR		SS		SX		II		III		IV		合計
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20			
出類																								1
IV類																								2
V類・ヘタ抜き																								39
VI類・箱印																								2
VI類																								16
V類・ヘタ抜き																								1
VI類																								1
分類不可																								11
合計		1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	71

第14表 V区埴瓦 分類表 b

分類	出土地	III		IV		V		VI		VII		VIII		IX		合計
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
出類																3
IV類																148
V類・ヘタ抜き																4
VI類・箱印																1
VI類																41
V類・ヘタ抜き																2
VI類																20
分類不可																26
合計		2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	246

第15表 川区出土遺物観察一覧 a

検出番号 回収番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	高さ	底径		遺跡	層序
第121回 回収6	1	中国産青花	碗	—	口縁部	(10.4)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面部に蓮文、裏部に山水文、内面に緑部には四方蓮文。	SA3001	門1層 灰
	2	中国産青花	碗	徳化窯系	口縁部	(12.0)	—	—	胎土は灰白色でやや堅緻。青色絵と黒色絵が混入。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面に寿字文、粘土シワあり。	SA3001	門1層 灰
	3	本土産染付	皿	磁器ⅢⅣ期	口〜底面	(10)	2.35	(4.9)	胎土は灰白色で堅緻。黒色絵が混入。胎土は灰白色で内外面施釉後、裏付輪割ぎ。文様は外面に草花文。壁打り成形の高脚皿。	SA3001	門1層 灰
	4	本土産染付	皿	磁器ⅢⅣ期	底部	—	—	(4.6)	胎土は灰白色でやや堅緻。黒色絵が混入。釉は灰白色で内外面施釉後、裏付輪割ぎ。文様は外面部に寿字文、内面に白抜きで花文。	SA3001	門1層 灰
	5	本土産近代磁器	碗	—	口縁部	(11.2)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。口径口縁。文様は外面と内面に緑部にあり、外面は黄に赤で彩色。	SA3001	門1層 灰
	6	本土産近代磁器	小碗	—	口〜底面	(8.3)	4.3	3.2	胎土は白色で堅緻。釉はクロム釉で内外面全施釉。外面は高台まで釉が掛かり、外底露胎。文様は外面に飛び。	SA3001	門1層 灰
	7	本土産近代陶器	皿	—	口〜底面	(17.6)	(2.0)	(9.9)	胎土は灰白色で堅緻。釉は透明で内外面施釉。文様は内面に黄色で3本の蓮瓣。外面に赤あり。内底面のマークと「IRONSTONE CHINA」を「14」の文字。NIKKO社の底赤。	SA3001	門1層 灰
	8	沖繩産施釉陶器	碗	—	口〜底面	(13.4)	5.8	(6.6)	胎土は緑灰色で浅黄褐色でやや堅緻。白色絵が混入。釉は白化乾後、灰白色の釉を掛け、内底面に目録施す。裏付輪割ぎされ白土付着。貫入あり。蛇の目輪割ぎに白土付着。	SA3001	門1層 灰
	9	沖繩産施釉陶器	碗	—	口〜底面	(13.3)	6.05	(6.2)	胎土は灰白色で堅緻。釉は内外面に白化乾後、灰白色の釉を掛け、内底面に目録施す。裏付輪割ぎ。裏付輪割ぎ。文様は外面に寿字文、梅花文、蓮葉文を模したと思われるもの。	SA3001	門1層 灰
	10	沖繩産施釉陶器	瓶	—	底部	—	—	6.15	胎土は緑灰色でやや堅緻。青色絵が混入。釉は白化乾後、灰白色の釉を掛け、裏付輪割ぎ。ロウロ成形。外底に砂付着。	SA3001	門1層 灰
	11	本土産陶器	磁鉢	関西系	口〜底面	(28.5)	11.5	(14.8)	胎土は浅黄褐色で軟質。白色絵が混入。釉は青色で外面に口縁から底部近くまで施釉。底面露胎。内面は全面施釉。使用により内面は摩滅。裏付部分に裂みあり。	SA3001	門1層 灰
第122回 回収6	12	本土産陶器	磁鉢	関西系	口縁部	—	—	—	胎土は浅黄褐色で軟質。釉は青色で内外面に施釉。内面には磁目を密に施す。注口あり。	SA3001	門1層 灰
	13	沖繩産施釉陶器	急須	—	口縁部	(7.2)	—	—	胎土は灰白色と一部黄褐色で軟質。全面白化乾後、外面に透明釉を施す。口唇部輪割ぎ。文様は緑部に白で直し、傍字文、丸文。	SA3001	門1層 灰
	14	沖繩産施釉陶器	酒器	—	底部	—	—	(8.0)	胎土は浅黄褐色でやや軟質。釉は透明釉を外面の高台部分まで施す。文様は外面部に施す。	SA3001	門1層 灰
	15	沖繩産施釉陶器	灯明皿	—	口縁部	(10.2)	—	—	胎土は浅黄褐色で軟質。釉は内面に白化乾、透明釉を内面と外面口縁部に施す。口唇部に心口受を設ける。	SA3001	門1層 灰
	16	沖繩産施釉陶器	壺	—	口縁部	(13.4)	—	—	胎土は赤褐色で堅緻。白色絵が混入。外面は赤褐色。内面は明赤褐色を呈する。口縁を外に傾り曲げて成形。口唇部に裂みあり。	SA3001	門1層 灰
	17	沖繩産施釉陶器	水鉢	—	口縁部	(19.05)	—	—	胎土は赤褐色で堅緻。赤色絵が混入。外面は赤褐色。内面は明赤褐色を呈する。口縁を外側に傾り曲げて成形。	SA3001	門1層 灰
	18	骨製品	歯ブラシ	—	—	—	—	厚さ 0.5	残存部はブラシ部分に3列23孔。骨部分に2列10孔残存。全面磨かれており光沢を著す。	SA3001	門1層 灰
	19	金属製品	鋳り金具	—	—	縦 7.7	横 2.7	厚さ 0.2	上下両端は出八双。表面及び裏面は無文。方孔が1ヶ所。小孔が8ヶ所見られる。	SA3001	門1層 灰
	20	瓦貫	—	(新)寛永通寶	—	外径 2.3	孔径 0.6	厚さ 0.1	寛永通寶。新寛永(3期:1697年)で背面無文。	SA3001	門1層 灰
	第123回 回収6	21	本土産近代磁器	碗	瀬戸・美濃系	底部	—	—	(4.1)	胎土は白色で堅緻。釉は外面にクロム釉、内面に透明釉を施す。裏付輪割ぎ。文様は外面に白色の文様と金の絵付け。内底に彫物文。	SA3001
22		沖繩産施釉陶器	火取	—	口縁部	(10.2)	—	—	胎土は浅黄褐色で軟質。釉は内面に白化乾後、外面に透明釉を施す。口唇部は輪割ぎ。ロウロ成形。	SA3001	門裏込
23		沖繩産施釉陶器	急須	—	底部	—	—	(8.4)	胎土は緑灰色で堅緻。釉は内外面に白化乾後、透明釉を内面と外面部まで施す。円筒状の縁が1本残存しており元は3本と思われる。底面に窯割痕。	SA3001	門裏込
24		沖繩産施釉陶器	磁鉢	—	口縁部	—	—	—	胎土は赤褐色でやや堅緻。石炭粒、巻貝と思われるものが混入。内面に磁目を施す。	SA3001	門裏込
25		中国産青花	碗	徳化窯系	口縁部	(12.4)	—	—	胎土は白色で堅緻。釉は内外面に透明釉を施す。口唇部は釉が掛かる。文様は外面部に草花文、粘土シワあり。	SA3005	裏込
26		陶質土器	火鉢	—	口縁部	—	—	—	胎土は褐色で軟質。赤色絵、雲母が混入。文様は外面に白色土の面施す。	SA3005	裏込
27		貝製品	貝玉	マギキガイ 目録	—	縦 4.55	横 2.65	—	貝玉製途中の未製品。螺輪部から体層部にかけて打磨が見られる。	SA3005	裏込
28		明銅系瓦 (褐色)	軒平瓦	I-I-A	瓦当	—	—	—	瓦当中央部のみ残存。花窓は円く種子状の彫みが入り、花弁は先が円く3枚に割れる。瓦当裏は横方向にナブが施される。	SA3005	裏込
29		埴瓦	—	目録	—	—	—	厚さ 7.1	色調は表面が褐色。胎土は灰色。断面は「工」字状に残り、側面には段を成形する。下駄状突起はカギ状に整形され、側面は斜めに削られる。	SA3005	裏込
30		中国産白磁	小碗	徳化窯系	口縁部	(8.6)	—	—	胎土は白色で堅緻。釉は内外面に透明釉を施す。口唇部輪割ぎ。外面に雲形彫りの粘土シワあり。	SA3006	1層

第16表 川区出土遺物観察一覧 b

発掘番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量 (cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第123図 図版6	31	中国産青花	器種不明	漳州系	口縁部	-	-	-	胎土は灰白色で軟質。胎は外面と内面口縁部に白化層後、灰白色の釉を施す。外面胴部に不明文様。貫入あり。	SA3006	1層
	32	沖繩産無釉陶器	碗	-	底部	-	-	(6.0)	胎土は、はい赤褐色で堅緻。赤色粒が混入。畳付は平肌、ロクロ成形。	SA3006	1層
	33	瓦質土器	鉢	-	-	-	-	-	胎土は褐色で堅緻。白粒、赤色粒、黒色粒が混入。底面に粗切肌か。厚付き。	SA3006	1層
第124図 図版6	34	中国産青磁	碗	V-3類	底部	-	-	5.5	胎土は灰白色で堅緻。胎はオリブ灰色で内外面に厚く施釉。外底は蛇の目輪割き。外面胴部に唐草文、内底に印花文。	SD3001	1層
	35	本土産近代磁器	碗	瀬戸・美濃系	口縁部	(10.4)	-	-	胎土は白色で堅緻。胎は外面胴部、内面口縁部に透明釉を施す。文様は外面に色絵で茶色の3条の区画線、緑色の竹文、赤色の文様。	SD3001	1層
	36	沖繩産無釉陶器	壺	-	口縁部	(12.0)	-	-	胎土は灰白色で軟質。胎は褐色で外面口縁部から胴部にかけて施釉。内面は胴部に施釉。	SD3001	1層
	37	本土産近代磁器	小碗	瀬戸・美濃系	口~底部	(8.3)	4.75	(3.0)	胎土は白色で堅緻。内外面に透明釉を施した後、畳付輪割き。文様は外面にゴム罫による唐草文、丸文。	SD3001	2層
	38	中国産青花	碗	C'群 明正-3	口縁部	-	-	-	胎土は白色で堅緻。胎は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面胴部に草花文か。景徳鎮窯系。	SD3001	4層裏込
	39	中国産磁器	碗	-	胴部	-	-	-	胎土は白色で堅緻。胎は内面に透明釉を施す。外面は透明釉を乾肌状にし、浅黄色の釉を施す。ロクロ成形。	SD3001	4層裏込
	40	本土産磁器	碗	-	口縁部	-	-	-	胎土は灰白色でやや堅緻。胎は灰白色で内外面に施釉。全周無文。	SD3001	4層裏込
	41	沖繩産無釉陶器	壺	-	口縁部	(12.4)	-	-	胎土は暗赤褐色で堅緻。白色粒が混入。自然釉が口縁部と外面胴部に掛かる。	SD3001	4層裏込
	42	中国産青花	碗	福建・広東系	底部	-	-	7.0	胎土は淡黄褐色で軟質。黒色粒が混入。胎は灰白色で内面と外面高台途中まで施釉し、外底も施釉。内底蛇の目輪割き。文様は外面胴部に草花文。	SK3002	1層
	43	中国産青花	小碗	C'群 明正-3	口縁部	(9.6)	-	-	胎土は灰白色で堅緻。胎は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面に草花文か。景徳鎮窯系。	SM3001	1層
	44	中国産無釉陶器	壺	-	底部	-	-	6.3	胎土は灰褐色でやや軟質。石灰粒が混入。胎は褐色で外面胴部途中、内面に施釉。ロクロ成形、小型の壺。	SM3001	1層
	45	中国産無釉陶器	鉢	-	底部	-	-	(10.0)	胎土は灰褐色でやや軟質。石灰粒が混入。胎は褐色で内面及び外面胴部まで施釉。ロクロ成形。外底に砂付。	SM3001	2層
第125図 図版7	46	燈篋	-	陶首I類	腹首	幅 3.3	-	-	胎土は、はい橙褐色で軟質。赤色粒混入。明褐色瓦板用で火室内と小口に厚付き。火室内径は1.35cm。	SM3001	2層
	47	明銅系瓦(褐色)	軒丸瓦	I-1-B	瓦当	-	-	-	瓦当文様は中央部がやや不明瞭だが、花弁が瓦当全体に広がる。瓦当裏はナデが見られるが粗く凹面を呈する。	SM3001	2層
	48	初期沖繩産無釉陶器	碗	-	口~底部	(12.7)	6.6	5.05	胎土は、はい赤褐色で堅緻。白色粒と赤色粒が混入。胎は外面の一部に自然釉が掛かる。底部は付け台付。外底に片割出しの道具の跡か。	SM3001	4層
	49	初期沖繩産無釉陶器	灯明皿	-	口~底部	(11.0)	2.3	(7.2)	胎土は、はい赤褐色で堅緻。白色粒が混入。白土が肌状になる。外面に自然釉が掛かる。口縁部に厚付き。	SM3001	4層
	50	明銅系瓦(褐色)	軒丸瓦	I-1-B	瓦当	-	-	-	文様は范のズレがみられ、下段花弁が濃く、花杜も途中で途切れる。瓦当裏のナデは丁寧で、胴部は高曲する。	SM3001	4層
	51	明銅系瓦(灰色)	軒平瓦	I-1-A	瓦当	-	-	-	范バリあり。平瓦裏との接合角度は鈍角で、瓦当裏はナデが明確。	SM3001	4層
	52	明銅系瓦(褐色)	丸瓦	A	玉縁部	-	-	-	玉縁部は横位にナデによる凹線がみられ、種子状のヘラ跡きあり。筒部凸面は縦ナデが明確で、玉縁部に横位のナデを施す。	SM3001	4層
第126図 図版7	53	明銅系瓦(褐色)	丸瓦	A	玉縁部	-	-	-	玉縁部は横位にナデによる凹線がみられ、斜線へう跡きあり。筒部凸面は縦ナデが明確で、筒部寄りに漆喰が付着。	SM3001	4層
	54	本土産陶器	鉢	美濃系	底部	-	-	-	鉄粒の付着。胎土は淡黄褐色で軟質。胎は内面に灰白色の釉を施す。外面は底面露筋。内底に不明文様。底部に平肌状の跡を付ける。懸空部元星散粒に類似あり。	SM3001	6層
	55	初期沖繩産無釉陶器	灯明皿	-	口~底部	(7.8)	2.3	(4.0)	胎土は、はい赤褐色で堅緻。白土が肌状になる。内外面に自然釉が掛かる。外面にケズリ調整痕あり。口縁部に厚付き。	SM3001	6層
	56	明銅系瓦(褐色)	丸瓦	A	玉縁部	-	-	-	玉縁部は横位にナデによる凹線がみられ、筒部に十字のへう跡きあり。筒部凸面は縦ナデ、玉縁部に横位のナデを明確に施す。	SM3001	6層
	57	中国産青花	碗	C'群 明正-3	口縁部	(9.9)	-	-	胎土は白色で堅緻。胎は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面に花鳥文、タタ、ペンシルドローイング。景徳鎮窯系。	SM3001	7層
第127図 図版7	58	明銅系瓦(褐色)	丸瓦	A	玉縁~筒部	-	-	-	玉縁部は横位1本のへう跡き。筒部凸面は縦位、玉縁部に横位のナデ。筒部凸面と上部に正方形の凹み。広端部を面取り整形。	SM3001	7層
	59	明銅系瓦(褐色)	丸瓦	A	玉縁部	-	-	-	玉縁部は横位にナデによる凹線がみられ、斜線に凹線のへう跡き。筒部凸面玉縁部に横位のナデを施す。	SM3001	9層
	60	中国産青花	皿	E群 明正	口~底部	(11.9)	2.7	(6.7)	胎土は灰白色で堅緻。胎は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付輪割き。文様は内面口縁部に四方文、内底に草文か。畳付に砂付き。内底に露筋あり。景徳鎮窯系。	SM3001	11層

第17表 川区出土遺物観察一覧 c

発掘番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第127図 図版7	61	初期沖繩産 無胎陶器	灯明皿	—	完形	10.25	2.5	6.4	自然釉が外面に掛かる。底部はベタ底。口縁部の一部に煤付着。	SM3001	11層
	62	燂管	—	陶管1期	扉首	幅 3.05	高さ 3.95	—	胎土は灰褐色で軟質。明粥系瓦の転用で火部に煤付着。小口外縁は1.09cm。	SM3001	11層
	63	明粥系瓦(褐色)	丸瓦	A	玉縁部	—	—	—	玉縁部は横位にナデによる凹線がみられ、Z字状のへら跡もあり。玉縁部全面に布直毛織へり。	SM3001	11層
第128図 図版7	64	中国産青花	碗	C'群 明日-3	口縁部	(12.2)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面胴部に草花文、内面口縁部に四方梵文、景徳鎮窯系。	SM3001	13層
	65	中国産青花	碗	D群 明日-2	底部	—	—	(4.4)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、書付輪跡あり。文様は内底に十字文、タミ塗り、ペンシルドローイング。景徳鎮窯系。	SM3001	13層
	66	中国産青花	皿	E群 明日	口縁部	—	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は内面口縁部に四方梵文、景徳鎮窯系。	SM3001	13層
	67	中国産天目	碗	—	口~底部	11.6	6.5	4.0	胎土は灰白色と一部淡黄褐色で堅緻。黒色粒が混入。釉は黒褐色で外面を胴部途中、内面全面施釉。ロクロ成形。	SM3001	13層
	68	初期沖繩産 無胎陶器	灯明皿	—	口~底部	(9.9)	2.6	(6.0)	胎土は、赤褐色で堅緻。白色土が混入する。自然釉が内外面に掛かる。口縁部の一部に煤付着。	SM3001	13層
	69	明粥系瓦(褐色)	軒平瓦	I-1-B	瓦当	—	—	—	凹ベリあり。文様は花卉が瓦当全体に広がる。	SM3001	13層
	70	中国産青磁	碗	VI類	口縁部	—	—	—	胎土は灰白色で堅緻。黒色粒と白色粒が混入。釉はオリーブ灰色で内外面施釉。文様は外面に線刻蓮華文、蓮華葉系。	SM3002	1層
	71	中国産青花	碗	—	口縁部	(12.4)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は内外面の口縁部に2本の蓮線。	SM3002	1層
	72	中国産青磁	皿	V類	口縁部	(11.4)	—	—	胎土は灰白色でやや堅緻。黒色粒が混入。釉は灰オリーブ色で内外面施釉。文様は外面に線刻蓮華文、蓮華葉系。	SM3002	3層
	73	中国産青花	皿	景徳鎮窯系	口~底部	(15.2)	4.9	(9.0)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、口唇部と書付輪跡あり。文様は外面に草花文、内面に草花文と菊枝文、ロクロ成形。外面一部に白い斑点あり。書付に煤付着。	SM3002	3層
74	初期沖繩産 無胎陶器	火鉢	—	口縁部	—	—	—	胎土は自然釉が掛かる。内面露出。凹線は「C」の字状に折れ、口縁部は少し気を通りように開かれている。	SM3002	3層	
75	中国産白磁	皿	E群	底部	—	—	(11.0)	胎土は灰白色で堅緻。黒色粒が混入。釉は白色で施釉後、書付輪跡あり。書付に砂付着。景徳鎮窯系。	SM3002	4層	
76	中国産白磁	灯明皿	D'群	口縁部	—	—	—	胎土は灰白色でやや堅緻。黒色粒が混入。釉は灰白色で内面施釉後、口唇部輪跡あり。外面は露出。ロクロ成形。福建産。	SM3002	4層	
77	中国産青花	碗	I群	口縁部	(12.0)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面に山形蓮華文内に宝珠。内面に山形蓮華文内に杏枝文。型により口縁部を輪花形に成形。景徳鎮窯系。	SM3002	4層	
78	中国産青花	皿	徳化窯系	口~底部	(16.0)	3.25	(9.4)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、書付輪跡あり。文様は外面胴部に暗刻された宝文、内面胴部に草花文、内底に折枝文。粘土シワあり。	SM3005	1層	
79	本土産近代磁器	小碗	—	口~底部	8.4	4.45	3.4	胎土は白色で堅緻。釉は全面に透明釉を施釉後、書付輪跡あり。口縁。文様は外面胴部に草花文、内底に不明文様。	SM3005	1層	
80	沖繩産施釉陶器	碗	—	口~底部	(13.8)	6.3	6.5	胎土は淡黄褐色で軟質。釉は全面白化粧後、透明釉を施釉。内底に目録跡あり。書付輪跡あり。内底に書付に刺土上付着。	SM3005	1層	
81	沖繩産施釉陶器	小碗	—	口~底部	(8.6)	5.4	(3.6)	胎土は灰褐色で軟質。釉は全面白化粧後、透明釉を施釉。書付輪跡あり。外面胴部は凹取り。書付に刺土上付着。	SM3005	1層	
82	沖繩産施釉陶器	火鉢	—	口~底部	10.4	8.6	7.2	胎土は淡黄褐色で軟質。釉は全面白化粧後、透明釉を口唇部を除く外面全体に施釉後、書付輪跡あり。	SM3005	1層	
83	沖繩産施釉陶器	急須	—	口~底部	(6.83)	(7.7)	(6.4)	胎土は灰白色で堅緻。釉は透明釉を外面胴部途中、内面は全面に施釉。蓋の受け口を輪跡あり。蓋の受け口に凹線あり。	SM3005	1層	
84	沖繩産施釉陶器	酒器	—	底部	—	—	(7.6)	胎土は淡黄褐色で軟質。釉は褐色で外面胴部から高台部にかける。	SM3005	1層	
85	沖繩産無胎陶器	瓶	—	口~底部	(6.85)	(19.4)	(12.0)	胎土は赤褐色で堅緻。黒色粒、白色粒が混入。外面胴部に4葉の蓮線。	SM3005	1層	
86	陶質土器	蓋	—	胴~唇部	底径 (9.6)	—	柄径 (7.0)	胎土は淡黄褐色で軟質。赤色粒、雲母が混入。唇部の先端が平ら面に成形される。外面の一部に煤付着。	SM3005	1層	
87	陶質土器	急須	—	口~底部	8.2	12.05	17.6	胎土は淡黄褐色で軟質。雲母、白色粒が混入。外面は底部から胴部中段まで煤付着。	SM3005	1層	
88	瓦質土器	火鉢	—	口~底部	—	—	—	胎土は淡黄褐色と明赤褐色でやや軟質。貝類、種子粒、赤色粒、白色粒、雲母が混入。口唇部から口縁内部に煤付着。	SM3005	1層	
89	明粥系瓦(褐色)	軒平瓦	I-III-A	瓦当	—	—	—	瓦当文様の裏に切れ込みがみられる。平瓦部との接合角度は鈍角で、瓦裏はナデが明粥。	SM3005	1層	
第131図 図版8	90	明粥系瓦(赤色)	丸瓦	B	玉縁~端部	—	—	—	完形。玉縁部に布直毛織へり。筒部全面は縦位のナデが明粥に残り、玉縁部に斜線1本のへら跡あり。漆喰が明粥部を塗りつぶすように付着。	SM3005	1層

第18表 川区出土遺物観察一覧 d

発掘番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(m)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第131図 図版8	91	明銅系瓦(赤色)	丸瓦	B	玉縁へ端部	—	—	—	筒部凸面は縦位、玉縁側に段差が出来るほどの横位のナデを施す。×字のへう縁きか筒部凸面上部にあられる。	SM3005	1層
	92	明銅系瓦(赤色)	平瓦	—	広端一扶端部	—	—	—	凸面の横紋縦筋圧痕が4個あり、扶端部に横位に1条の布糸織り痕がみられる。凸面に格子状に浅い沈跡がみられる。	SM3005	1層
第132図 図版8	93	明銅系瓦(褐色)	平瓦	—	広端一扶端部	—	—	—	凸面に十字に沈跡、漆喰が上部の両側面に付着する。凸面に横紋縦筋圧痕が6個、扶端部に横位に1条の布糸織り痕がみられる。	SM3005	1層
	94	明銅系瓦(褐色)	平瓦	—	広端一扶端部	—	—	—	扶端面から凹面上部にかけてマンガン酸鉄付着。凸面には僅かに漆喰が付着する。	SM3005	1層
第133図 図版9	95	中国産青花	碗	徳化窯系	口縁部	(15.2)	—	—	胎土は灰白色で堅緻、釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面に寿字文。	SM3005	2層
	96	沖繩産施釉陶器	皿	—	口縁部	—	—	—	胎土は灰白色で軟質。釉は灰オレンジ色で内外面に施釉。文様は内外面彫刻にイッタン。	SM3005	2層
	97	円筒状製品	—	—	—	縦 7.75	横 8.2	厚さ 2.25	中国産青磁碗の底部を加工し、内外面からの打割。	SM3005	2層
	98	中国産青花	碗	福建・広東系	底部	—	—	(5.8)	胎土は灰白色と一部黄褐色で軟質。釉は灰白色で外面胴部まで施釉。底面露胎。	SM3007	1層
	99	本土産磁器	袋物	—	底部	—	—	4.2	胎土は灰白色で堅緻。釉は外面に褐色釉を施釉後、畳付輪跡を、畳付に砂付着。	SM3008	1層
	100	沖繩産施釉陶器	碗	—	口一底部	(8.8)	5.9	(4.2)	胎土は灰白色で堅緻。釉は褐色釉で内外面に施釉後、畳付輪跡を。	SM3008	1層
	101	明銅系瓦(灰色)	丸瓦	A	玉縁部	—	—	—	玉縁部に斜筋3本を重ねたへう縁き。筒部凸面は玉縁側に横位のナデ。凸面に横位1条の布糸織り痕。	SM3008	1層
	102	中国産青花	小杯	徳化窯系	底部	—	—	(2.6)	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉後、畳付輪跡を。外底に鉄跡あり。	SM3009	2層
	103	中国産青花	碗	福建・広東系	口縁部	(11.7)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で外面、内面口縁部から胴部途中まで施釉。文様は外面に花文、風文。	SM3009	新割田4層
	104	中国産青花	皿	B1群 明1-1	口一底部	(11.0)	2.7	(5.2)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付輪跡を。付着。文様は外面部に草花透草文、内底に草花文。胴部に乳あり。景徳窯系。	SM3009	新割田4層
105	中国産青磁	碗	VI群	口縁部	—	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉はオレンジ色でやや厚く施釉される。文様は外面にへう縁きによる輪の狭い縦筋透草文。	SM3009	底面	
106	中国産青花	碗	景徳窯系	口縁部	(10.6)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面に草花文。	SX3004	層不明	
107	中国産青花	碗	福建・広東系	底部	—	—	(7.4)	胎土は灰白色で軟質。釉は灰白色で外面施釉後、畳付輪跡を。内面は胴部途中から内底が露胎。文様は外面彫刻に草花文。外面胴部部に鉄跡あり。	SX3004	層不明	
108	中国産色絵	碗	—	口縁部	—	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面胴部に赤色で花文。	SX3004	層不明	
109	中国産色絵	碗	—	底部	—	—	(4.9)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付輪跡を。文様は外面胴部に緑色でラマ式透草文。外底に顔内に鉄跡あり。	SX3004	層不明	
110	中国産色絵	漆華	—	—	—	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は柄の内面に赤色の文様。	SX3004	層不明	
111	本土産染付	瓶	肥前系	胴部	—	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で外面と内面胴部途中まで施釉。文様は外面彫刻に新日文。	SX3004	層不明	
112	本土産色絵	小碗	—	口縁部	(8.0)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は内面に赤色の文様と茶色の花文か、外面に口縁部の彫刻。	SX3004	層不明	
113	本土産色絵	小碗	—	底部	—	—	(2.85)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、畳付輪跡を。文様は外面に赤色の果文、黒色の縦、内底に赤色の文様。	SX3004	層不明	
114	本土産近代磁器	碗	砥部産	口一底部	(13.6)	6.25	5.0	胎土は灰白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、畳付輪跡を。文様は帯形罫り外で外面胴部に花鳥草文、内面口縁部に五弁花文。内底に長足文か。内底5ヶ所に目録あり。	SX3004	層不明	
115	本土産近代磁器	皿	—	口縁部	—	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は内外面に施釉後、口内面から内面口縁部を施釉する。文様は外面に蓮文、幾何学文。	SX3004	層不明	
116	沖繩産施釉陶器	碗	—	口一底部	(13.2)	6.05	(6.4)	胎土は黄褐色で軟質。釉は全面白化粧後、透明釉を施釉。内底底の目録跡を。畳付輪跡を。文様は外面胴部に丸文、内底及び畳付に新火土付着。	SX3004	層不明	
117	沖繩産施釉陶器	碗	—	底部	—	—	(6.7)	胎土は黄褐色で軟質。釉は外面の一部を除く全面に白化粧後、透明釉を施釉。内底底の目録跡を。畳付輪跡を。文様は外面胴部に縦筋の文様。内底及び畳付に耐火土付着。	SX3004	層不明	
118	沖繩産施釉陶器	小碗	—	口一底部	(8.6)	4.5	3.8	胎土は黄褐色で軟質。釉は全面白化粧後、透明釉を施釉。内底底の目録跡を。畳付輪跡を。内底及び畳付に耐火土付着。	SX3004	層不明	
119	沖繩産施釉陶器	火取	—	底部	—	—	(6.8)	胎土は褐色で軟質。釉は外面胴部に密に施釉。外面胴部から底部及び内底は露胎。	SX3004	層不明	
120	沖繩産施釉陶器	部杯	—	口一底部	(27.8)	11.9	(10.6)	胎土は明赤褐色で中軟質。内面に指目を密に施し、口縁部をラマ式露胎。外面は口縁が露胎。	SX3004	層不明	

第19表 川区出土遺物観察一覧 e

発掘番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺物	層序
第136図 図版9	121	中国産青磁	皿	VI-0期	口~底部	13.6	3.5	(6.2)	胎土は明褐色でやや軟質、白色粒が混入。輪はオリーブ灰色で内外全面施釉、外底輪跡多。文様は内面胴部にへらで唐草文、内底縁部内へらで花文、垂流泉系。	1層	
	122	中国産青磁染付	小碗	景徳鎮窯系	底部	-	-	(3.7)	胎土は白色で堅緻。輪は明褐色で内外全面施釉、費付輪跡多。外底に泥あり。	1層	
	123	中国産青磁染付	小碗	景徳鎮窯系	底部	-	-	(4.0)	胎土は灰白色でやや堅緻。黒色粒が混入。輪は明褐色で内外全面施釉、費付輪跡多。文様は内面胴部にへらで唐草文、内底縁部内へらで花文、垂流泉系。	1層	
	124	中国産白磁	小碗	徳化窯系	口~底部	(8.6)	4.0	(4.8)	胎土は白色で堅緻。黒色粒が混入。輪は白色で内外全面施釉、口唇部輪跡多。粘土シワあり。	1層	
	125	中国産白磁	小皿	徳化窯系	口~底部	(8.0)	1.9	(5.6)	胎土は灰白色で堅緻。輪は灰白色で内面と外面口縁部から胴部まで施釉。口唇部口前を外底は露胎。粘土シワあり。口縁部に泥みあり。	1層	
	126	中国産白磁	小杯	徳化窯系	口~底部	4.3	2.9 2.7	2.0	胎土は白色で堅緻。輪は灰白色で内外全面施釉、費付輪跡多。粘土シワあり。内底に砂付着。	1層	
	127	中国産白磁	鉢	福建系	底部	-	-	7.8	胎土は浅黄褐色で軟質。暗褐色粒子が混入。輪は灰オリーブ色で、内面と外面の胴部途中まで施釉し、輪が垂れる。泥入あり。目影あり。	1層	
	128	本土産近代磁器	蓋	-	胴~均部	直径 (27.8)	-	半径 (21.4)	胎土は黄褐色で硬質だが粗い。白色粒が混入。輪は灰白色で外面施釉、内面露胎。内面に指の痕み。	1層	
	129	中国産白磁	蓮華	-	-	-	-	-	胎土は白色でやや堅緻。輪は灰白色で、内外全面施釉。	1層	
	130	中国産青花	碗	-	口縁部	(13.4)	-	-	胎土は灰白色で堅緻。暗色粒が混入。輪は明褐色で内外全面施釉。文様は外面に唐草文。	1層	
	131	中国産青花	碗	徳化窯系	口縁部	(23.0)	-	-	胎土は白色でやや堅緻。輪は明褐色で内外全面施釉。文様は外面に草花文か。	1層	
	132	中国産青花	小碗	景徳鎮窯系	口縁部	-	-	-	胎土は白色で堅緻。輪は明褐色で内外全面施釉。文様は内外面ともに区画文、芙蓉手。	1層	
	第137図 図版10	133	中国産青花	皿	-	口縁部	-	-	-	胎土は白色でやや堅緻。輪は明褐色で内外面に施釉。文様は外面に唐文、内面に六宝文か。泥入あり。	1層
134		中国産青花	皿	徳化窯系	底部	-	-	(11.4)	胎土は白色で堅緻。輪は明褐色で内外面に施釉。費付輪跡多。文様は内面に折枝文、外底に唐草あり。内底中央が窪かに施す。	1層	
135		中国産青花	皿	B1器 明目1	底部	-	-	(7.1)	胎土は灰白色で堅緻。輪は明褐色で内外面に施釉。費付輪跡多。文様は外面胴部に唐草文、内底に取獅子文、景徳鎮窯系。	1層	
136		中国産青花	瓶	景徳鎮窯系	胴部	-	-	-	胎土は灰白色で堅緻。輪は明褐色で内外面に施釉。文様は外面に唐草文。	1層	
137		中国産青花	鉢	福建・広東系	底部	-	-	(11.2)	胎土は灰白色でやや堅緻。輪は明褐色で内外面に施釉。内底泥の目輪跡多。費付輪跡多。文様は外面胴部に宝文、高白地に雲あり。	1層	
138		中国産褐釉陶器	壺	-	口縁部	(8.5)	-	-	小型の壺。胎土は黄褐色でやや軟質。石英粒が混入。輪は褐色で外面から内面口縁部に施釉。口唇部輪跡多。	1層	
139		中国産褐釉陶器	碗	-	胴部	-	-	-	胎土は灰白色で堅緻。輪は外面に黄褐色。内面に明褐色色輪を施す。内底に2条の圈線。	1層	
140		中国産褐釉陶器	碗	-	底部	-	-	(4.6)	胎土は灰白色で堅緻。輪は外面に褐色。内面に灰白色輪を施す。外底の中心が露胎。	1層	
141		中国産陶器	茶壺	宜興窯系	口縁部	(13.0)	-	-	円筒状の茶壺か。胎土はふいふ赤褐色で堅緻。内外面に黄泥を施す。口タロ成形。	1層	
142		中国産陶器	茶壺	宜興窯系	胴部	-	-	-	茶壺か。胎土はふいふ赤褐色で堅緻。内外面に黄泥を施す。縦位に2条の沈線。内面に縦位に指痕の調整痕。	1層	
143	中国産陶器	茶壺	宜興窯系	底部	-	-	(4.5)	胎土はふいふ赤褐色で堅緻。内外面に黄泥を施す。底部は碇筋状。	1層		
第138図 図版10	144	本土産染付	碗	磁器陶 器期	口~底部	(14.0)	7.15	5.4	胎土は白色でやや堅緻。輪は明褐色で内外面に施釉。費付輪跡多。文様は外面胴部に唐草文、内底に彫刻された葉巻文。全面に細かな泥入が見られる。	1層	
	145	本土産陶器	碗	陶器陶 器IV期	口~底部	(11.4)	8.0	4.7	胎土は灰白色で軟質。輪は黄褐色で内外面に施釉。費付輪跡多。費付に砂付着。全面に泥入あり。	1層	
	146	本土産陶器	皿	-	底部	-	-	(5.2)	胎土は灰白色で軟質。輪は黄褐色で内外面に施釉。内底泥の目輪跡多。費付輪跡多。文様は内面胴部に唐草文。	1層	
	147	本土産陶器	器種不明	-	底部	-	-	(7.6)	水注か。胎土は灰白色で軟質。輪は透明釉を内面と外面胴部まで施す。底部露胎。底部は碇筋状。	1層	
	148	本土産近代磁器	鉢	-	口~底部	(19.0)	5.7	9.0	胎土は白色で堅緻。輪は明褐色で内外面に施釉。費付輪跡多。外底泥の目輪跡多。文様は壺腹帯りで内外面に青海波、花文、内底に流水文か。底の目形彫行。	1層	
	149	沖縄産施釉陶器	碗	池田類型	底部	-	-	(6.0)	胎土は浅黄褐色で軟質。輪は外面胴部に褐色。内面は白化粧施。明オリーブ灰色を施す。見込み泥の目輪跡多。費付に耐灰土付着。外底に黄褐色「外底、か」。	1層	
	150	沖縄産施釉陶器	皿	-	口~底部	(13.4)	3.95	(7.8)	波線の皿。胎土は灰白色で軟質。輪は黄褐色を全面施釉。費付輪跡多。	1層	

第20表 川区出土遺物観察一覧 f

検出番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(m)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第138図 図版10	151	沖縄産施釉陶器	瓶	—	底部	—	—	7.0	胎土は黄褐色で軟質。釉は外面製部途中まで白化後、透明釉を外底まで施釉し、貫付輪割ぎ。内面黒釉。文様は外面に草文。	—	1層
	152	沖縄産施釉陶器	瓶	—	底部	—	—	(5.2)	胎土は褐色で軟質。釉は外面に褐色釉を施後、貫付輪割ぎ。内面黒釉。	—	1層
	153	沖縄産施釉陶器	鉢	—	底部	—	—	(10.0)	胎土は白く褐色で軟質。釉は内面に白化前後、外外面に透明釉を施し、貫付輪割ぎ。内底底の目跡あり。文様は外面製部に白土の網毛目跡。内面黒部に黒文。	—	1層
	154	沖縄産施釉陶器	香炉	—	口～底部	(20.4)	(11.4)	(11.6)	胎土は白く赤褐色で硬質。釉は黒褐色で口部部から外面製部まで施釉。外底と内面黒釉。胎の断面は断面(獅子か)。	—	1層
	155	沖縄産施釉陶器	火取	—	底部	—	—	(8.8)	胎土は黄褐色で軟質。釉は外面製部に褐色釉を施後、内面及び外面製部から外底まで施釉。外面製部に耳が取れた跡あり。高台部に頸付あり。	—	1層
第139図 図版10	156	沖縄産施釉陶器	蓋	—	胴～持部	底径 (12.0)	—	持径 (10.1)	胎土は灰白色でやや軟質。釉は全面に白化前後、透明釉を外面から順に施釉。外面製部に印による「唐明」の文字あり。	—	1層
	157	沖縄産施釉陶器	蓋	—	胴	—	—	胴径 6.0	胎土は黄褐色で軟質。釉は外面に褐色釉を施後、蓋の上部を輪割ぎ。内面黒釉。蓋の断面は逆「ハ」の字状。蓋みに頸付あり。	—	1層
	158	沖縄産施釉陶器	急須	—	口～底部	(8.3)	12.0	9.4	胎土は黄褐色で軟質。釉は内外面に白化前後、外面は口縁部から腹部までコバルト釉。内面は透明釉を施後、口縁から口縁内側を輪割ぎ。注口接着部分に7個の孔を穿つ。胎土は灰白色と赤褐色で軟質。右丸形。黒色粒が混入し口土状になる。口縁部は外側に折れ、断面は三角形。外面製部に格子状のタタキあり。	—	1層
	159	中国産施釉陶器	壺	—	口縁部	(27.2)	—	—	胎土は赤褐色で硬質。白色粒と鉄粒に白色の上が入り。釉は黒褐色で外面と内面口縁部から口縁部下まで施釉。文様は外面製部に3条の波状文。ロクロ成形。	—	1層
第140図 図版10	160	初期沖縄産 無釉陶器	水鉢	—	口縁部	(16.8)	—	—	胎土は赤褐色で硬質。白色粒と鉄粒に白色の上が入り。釉は黒褐色で外面と内面口縁部から口縁部下まで施釉。文様は外面製部に3条の波状文。ロクロ成形。	—	1層
	161	沖縄産無釉陶器	碗	—	底部	—	—	(5.0)	胎土は赤褐色でやや軟質。白色粒が混入。外底に×状の沈着あり。貫付部に頸付あり。	—	1層
	162	沖縄産無釉陶器	壺	—	口縁部	(12.6)	—	—	胎土は赤褐色で硬質。黒色粒と白色粒が混入。口縁部断面が円状。ロクロ成形。	—	1層
	163	沖縄産無釉陶器	横水鉢	—	口縁部	—	—	—	胎土は赤褐色でやや硬質。黒色粒と白色粒が混入。文様は外面製部に線刻で菊文。外面口縁部と口縁部に波状凸帯あり。	—	1層
	164	沖縄産無釉陶器	火取	—	口縁部	(17.8)	—	—	胎土は赤褐色でやや硬質。黒色粒が混入。釉は黒褐色で外面と内面口縁部の一部に施される。文様は外面口縁部と製部に2条ずつの波線。内面口縁部下に不明な文様。	—	1層
	165	沖縄産無釉陶器	火取	—	底部	—	—	(7.8)	胎土は赤褐色でやや硬質。黒色粒が混入。内外面に自然釉が掛かり。外面に黒褐色釉が垂れる。ロクロ成形。	—	1層
	166	沖縄産無釉陶器	火取	—	底部	—	—	(15.0)	胎土は赤褐色でやや硬質。白色粒が混入。文様は外面製部に沈着が1条引かれる。ロクロ成形。	—	1層
	167	埴輪	陶型	—	口縁部	—	—	—	胎土は黒褐色で軟質。重さは2.0g。内面に顔かぶと思われるものが付着。	—	1層
168	石製品	硯	—	ほぼ完形	縦 13.8	横 5.8	厚さ 1.9	黒色粘板岩製。平面形は長方形。断面は垂直で、右側面に「三内興部城跡」、左側面に「興部城跡」の線刻。	—	1層	
第141図 図版11	169	貝製品	碁石	—	—	縦 2.2	横 1.9	厚さ 0.45	白色の碁石。一部欠落。	—	1層
	170	骨製品	平腹状製品	—	—	縦残存 (4.25)	横残存 (0.9)	厚さ (0.3)	黄のエンメル質を残し、背面は研磨される。インシシ/ブタの下顎大歯か。	—	1層
	171	骨製品	歯ブラシ	—	柄	縦残存 (5.45)	横 1.0	厚さ 0.65	表面に光沢あり。「EXTRA」の文字が刻まれている。	—	1層
	172	骨製品	歯ブラシ	—	柄	縦残存 (4.3)	横 1.3	厚さ 0.7	柄の端部。金属製の銀が打たれる。一部欠落。	—	1層
	173	燗管	陶首目類	燗管	—	—	—	—	沖縄産無釉陶器。胎土は赤褐色でやや硬質。釉は褐色で内外面施釉。燗付筒。長さ3.8cm、火皿外径1.9cm、内径1.2cm、小口外径1.6cm、内径1.1cm。	—	1層
	174	燗管	陶首目類	燗管	—	—	—	—	中国産磁器陶器。胎土は白色でやや硬質。釉は磁器釉で外面と火皿を施釉。小口外径1.25cm、内径0.85cm。	—	1層
	175	燗管	金口目類	燗口	—	—	—	—	金属製。内面に石灰質付着。長さ4.45cm、口付外径0.7cm、内径0.3cm、小口外径0.9cm、内径0.85cm。	—	1層
	176	金属製品	簪	—	完形	縦 12.95	横 0.5	厚さ 0.3	平本体が断面六角形。	—	1層
	177	金属製品	校章	—	—	縦残存 (3.15)	横残存 (2.15)	厚さ 0.3	一部欠損し、折り曲がっている。花卉の中央に「中」の文字。沖縄県立第一中学校の校章か。	—	1層
	178	金属製品	ボタン	—	—	縦 2.15	横 2.15	厚さ 0.4	五弁花の中央に「中」という文字。沖縄県立第一中学校のものか。	—	1層
	179	銭貨	(新)寛永通貨	—	外径	2.50	孔径 0.5	厚さ 0.14	寛永通貨。新寛永(3期:1697年)。背面無文。	—	1層
	180	銭貨	—	永業通貨	—	外径 2.50	孔径 0.6～0.62	厚さ 0.13	永業通貨(約辨:1405年)。背面無文。	—	1層

第21表 川区出土遺物観察一覧 g

発掘番号 調査番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置		
						口径	器高	底径		遺構	層序	
第141回 調査11	181	銭貨	—	□定通口	—	—	—	厚さ 0.13	「□定通口」と背面の「一」という文字が確認できる。鑑定通貨(初録1208年)か結定通貨(初録1228年)と考えられる。		1層	
	182	銭貨	—	無文銭	—	外径 2.10	孔径 0.7	厚さ 0.1	無文銭。		1層	
	183	銭貨	—	(新)寛永通寶	—	—	—	厚さ 0.14	「寛永通口」と背面の「文」という文字が確認できる。新寛永(2期:1668年)。		1層	
	184	銭貨	—	無文銭	—	外径 2.80	孔径 0.68	厚さ 0.18	鉄製の無文銭。		1層	
第142回 調査11	185	明銅系瓦(赤色)	軒丸瓦	Ⅱ-Ⅲ	瓦当	—	—	—	凹バリあり。文様はやや不明瞭。瓦当裏はナダが粗く、凹凸面を呈する。		1層	
	186	明銅系瓦(青色)	軒丸瓦	I-1-A	瓦当	—	—	—	文様は明瞭。瓦当裏はナダが粗く、凹凸面を呈し、上部に長方形の窪みがある。		1層	
	187	明銅系瓦(灰色)	軒平瓦	—	瓦当	—	—	—	瓦当上辺を除き、側面が青緑の。他の軒平瓦にもみられる文様だが、それを囲む外縁が瓦当上辺に無い。		1層	
	188	明銅系瓦(赤色)	軒平瓦	I-Ⅲ-B	瓦当	—	—	—	凹バリあり。瓦当裏に削痕が2条。		1層	
第143回 調査11	189	大和瓦	段瓦	—	—	—	—	—	鬼瓦の一種か。色調は表面がいぶし調。胎土は灰色。平面形は透き色をう顕化する。御銀工所跡に類似あり。		1層	
	190	大和瓦	段瓦	—	—	—	—	—	色調は表面は黒色。胎土は灰色。全形不詳。表面は2条の沈線有りの面と、狭しの面に段差がある。裏面は指ナされ、凹凸を呈す。		1層	
	191	磚瓦	—	IV類	—	—	—	厚さ 4.3	色調は灰色。平面形は三角形を想定。裏面は粗い。		1層	
第144回 調査11	192	中国産白磁	磁	—	底部	—	—	(8.5)	胎土は灰白色で堅緻。釉は緑灰色で外面製部。内面は製部から底部まで施釉。高台及び外縁部。内面はクロロ結が顕著に現れる。		Ⅱ1層	
	193	燗貫	—	陶口I類	吸口	—	—	—	沖繩産無釉陶器製。胎土は灰白色でやや軟質。釉は浅黄灰色で外面全面に施釉。小口径径1.3cm、内径1.0cm。		Ⅱ1層	
	194	金属製品	釘	—	定形	縦 2.8	横 0.2	頭部 0.6	—	丸釘。		Ⅱ1層
	195	銭貨	—	(新)寛永通寶	—	外径 2.25	孔径 0.61	厚さ 0.13	寛永通寶。新寛永(3期:1697年)で背面無文。		Ⅱ1層	
	196	磚瓦	—	—	—	—	—	厚さ 3.4	色調は灰褐色。表面に欠けたスタンプ印がみられ、膠縁内に「大」の字を記すタイプか。		Ⅱ1層	
	197	磚瓦	—	Ⅲ類	—	—	—	厚さ 3.1	色調は灰色。端面に階段状の段差。		Ⅱ3層	
	198	中国産青磁	碗	V-2類	口縁部	(19.6)	—	—	—	胎土は灰白色でやや軟質。釉は灰オリーブ色で内外面に施釉。文様は内外面に空押しされた雷文帯。内面に草花文。細かな貫入が見られる。		Ⅱ6層
	199	中国産磁器	碗	—	口縁部	(15.0)	—	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉後、口唇部輪削す。ロクロ成形。		Ⅱ6層
	200	中国産陶器	茶壺	宜興窯系	注口	—	—	—	—	胎土はよび赤褐色で堅緻。白色粒が混入する。外面に茶渋を施す。		Ⅱ6層
	201	本土産染付	小杯	—	口縁部	(4.4)	—	—	—	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉。文様は外面製部に草文。		Ⅱ6層
	202	沖繩産無釉陶器	灯明皿	—	口~底部	(11.0)	2.85	(5.3)	—	胎土はよび赤褐色で堅緻。赤色粒が混入。外面製部の一部に白黒粒が浮かぶ。口縁部に覆けず。		Ⅱ6層
203	燗貫	—	陶口Ⅲ類	燗貫	—	—	—	—	沖繩産無釉陶器製。胎土はよび赤褐色で堅緻。釉は外面に黒褐色釉を施す。火面外径1.75cm、内径1.2cm。		Ⅱ6層	
204	金属製品	笠形	—	定形	縦 0.95	横 3.7	厚さ 0.4	—	両端が尖り気味で薄手。		Ⅱ6層	
205	銭貨	—	無文銭	—	外径 1.80	孔径 0.9~1.0	厚さ 0.1	—	周りが明らた、薄くなる。		Ⅱ6層	
第145回 調査11	206	鉄製品	釘	—	定形	縦 3.8	最大径 0.7	最小径 0.4	—	断面方形の角釘。頭部を一方へ折る。		Ⅲ1c層
	207	中国産色絵	皿	景徳鎮窯系	口~底部	(14.4)	3.15	(7.4)	—	胎土は灰白色でやや軟質。釉は灰白色で内外面に施釉後、器行輪削す。文様は外面製部に雷文帯。内底に不明文様。		Ⅲ2c層
	208	鉄製品	押さえ金具	—	—	縦 3.6	横 2.2	厚さ 0.25	—	上下両端を並行に造る。小孔を穿つ。断面形が湾曲する。		Ⅲ2d層
	209	中国産青磁	碗	V-2類	口縁部	—	—	—	—	胎土は灰白色でやや軟質。釉は明オリーブ灰色で内外面に施釉。文様は外面にヘラ描きの雷文帯。細かな貫入が見られる。		Ⅲ4層
	210	中国産青磁	碗	—	製部	—	—	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は明オリーブ灰色で内外面に施釉。文様は外面に蓮弁文。		Ⅲ4層

※銭貨:欠損している部分の銭文は□で示した。

※釘(鉄製品):実測した部分の法量を記載した。

第22表 川区出土遺物観察一覧 h

発掘番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量 (cm)			観察事項	出土位置		
						口径	器高	底径		遺構	層序	
第145図 図版11	211	中国産青磁	青砂	—	口~底部	(15.0)	5.2	(6.6)	胎土は淡黄色で軟質。釉は灰白色で外面は口縁部から高台脇、内面は内底を全く完全に施釉後、一部輪削す。底部に釉の痕あり。被熱を受ける。	Ⅲ	4層	
	212	初期冲縄産 黒胎陶器	蓋	—	胴~底部	幅径	8.1	4.1	底径 19.6	胎土はぶい赤褐色で堅緻。赤褐色粒が混入。白土が帯状になる。釉は外面に花から胴部に赤褐色の花輪。外縁の一部に自然釉が掛かる。外面製部に目付二枚具付付着。	Ⅲ	4層
	213	金属製品	器種不明	—	—	—	横	1.0	厚さ 0.4	長軸が湾曲し短軸断面が三角形状。	Ⅲ	4層
	214	中国産青花	皿	漳州窯系	底部	—	—	—	(8.0)	胎土は灰白色で堅緻。釉は全面白化釉後、明緑色釉を施釉。器付輪削す。文様は内底に草花文、輪廓部を飾きタテ塗り、ペンシルドローイング。費付に砂付着。外底に輪削付着。	Ⅲ	6a層
第146図 図版12	215	中国産三彩	水注	—	胴部	—	—	—	—	鴨形水注の尾の部分か。胎土は淡黄色で軟質。釉は外面に緑色、茶色、黄色の輪帯を施す。内面にナメ調整。	Ⅲ	6a層
	216	金属製品	八双金具	—	定形	縦	1.9	—	厚さ 0.15	左右両端が丸八、文様は魚々子を密に施し、毛彫の菊唐草文。孔は2カ所に穿たれており方形。鍛造か。首里城唐福門地区に類似あり。	Ⅲ	6a層
	217	中国産青磁	漆鉢	—	底部	—	—	—	(5.6)	胎土は淡黄色で軟質。釉は明オリブ色で外面製部途中まで施釉。胴部と内面露胎。内面に顔目を密に施す。	Ⅲ	6b層
	218	中国産白磁	壺	—	口縁部	—	—	—	—	胎土は灰白色堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。ロクロ成形。	Ⅲ	6b層
	219	丹塗状製品	—	—	定形	縦	6.2	横 6.2	厚さ 1.4	明銅系瓦を加工。胎土は明黄褐色で軟質。赤色粒が混入。内外面からの打痕。	Ⅲ	6b層
第147図 図版12	220	中国産青磁	碗	V類	底部	—	—	—	(7.6)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明オリブ灰色で内外面に施釉後、外底輪削す。文様は見込みに沈彫。貫入が見られる。	Ⅲ	6d層
	221	中国産青花	杯	福建系	口縁部	(6.8)	—	—	—	胎土は白灰色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面に草文。	Ⅲ	6d層
	222	中国産磁胎釉	瓶	景徳鎮窯系	口縁部	(7.4)	—	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は外面に磁胎釉。内面は灰白色釉を施釉。	Ⅲ	6d層
	223	明銅系瓦(褐色)	軒丸瓦	I-I-A	瓦当	—	—	—	—	范バリあり。文様は花卉・珠文が不明瞭。瓦当裏はナゲが粗く、凹凸面を呈する。	Ⅲ	6e層
	224	明銅系瓦(灰色)	軒丸瓦	I-I-A	瓦当	—	—	—	—	范バリあり。瓦当は瓦部に文様を逆さに模か。花芯が不明瞭。瓦当裏は横位のナゲが目立つ。	Ⅲ	6e層
	225	銭貨	—	無文銭	—	外径 1.40	孔径 0.65	厚さ 0.1	—	周りが明らね。内側の孔の角に小孔か。	Ⅲ	6f層
	226	中国産白磁	皿	D群	口~底部	(8.6)	2.4	(4.4)	—	胎土は灰白色で軟質。釉は淡黄色で全面に施釉。後り高台。	Ⅲ	7a層
	227	金属製品	簪	—	定形	縦	8.5	横 0.45	厚さ 0.2	カブが小型の球状。ムディが縦状。半は扁平で縁を持つ。	IV	1a層
	228	中国産青磁	壺	—	底部	—	—	—	(10.0)	胎土は灰白色で堅緻。釉はオリブ灰色で全面に施釉。文様は内底に花文。内面製部に磨蝕跡あり。	IV	2a層
	図版22	229	ガラス製品	瓶	薬瓶	口~底部	1.6	6.1	2.65 1.5	—	目薬瓶。色調は無色系。いかり肩で胴部に縦溝。エンボスは胴部に「夢天堂」「大目薬」。	SA3001
図版22	230	金属製品	幹	—	—	—	—	—	—	地下足袋のものと思われる。上部を欠き、糸を通すための孔が2カ所残存。裏面に「新スポンジ」のエンボスあり。	SK3002	1層
	231	金属製品	幹	—	定形	縦	2.0	横 2.25	厚さ 0.1	地下足袋のものと思われる。糸を通すための孔が4カ所。裏面に「新スポンジ」のエンボスあり。	SK3002	1層
	232	金属製品	幹	—	定形	縦	2.0	横 2.25	厚さ 0.1	地下足袋のものと思われる。糸を通すための孔が4カ所。裏面に「新スポンジ」のエンボスあり。	SK3002	1層
	233	中国産三彩	水注	—	胴部	—	—	—	—	鳥形水注の胴部分。胎土は淡黄色で石黒色。黒色粒が混入。釉は白化釉後、緑色の輪帯を僅かに黄色の輪。内面に磨蝕のナゲ調整。	1層	
234	金属製品	バックル	—	定形	—	—	—	—	—	腕時計のバックルか。平面観は方形状。青銅付着。	1層	
図版22	235	ガラス製品	瓶	インク瓶	口~底部	2.2	4.7	6.3 5.15	—	色調は青色系。胴部はひし形を呈する。首部は歪み。胴部にかけて金型の合わせ目が見立つ。	1層	
	236	ガラス製品	瓶	インク瓶	口~底部	2.9	5.5	4.6	—	色調は無色系。胴部が円筒形。全体的に磨れて滑化している。	1層	
	237	ガラス製品	瓶	インク瓶	口~底部	2.25	5.7	5.1	—	色調は無色系。滑らかな円筒状に胴部は成型。胴部に山と雲のような模様。底部に三角形のエンボス。	1層	
	238	ガラス製品	瓶	インク瓶	口~底部	2.3	4.3	5.15	—	色調は無色系。内部にインクが残り、紫色を呈する。胴部が円形で、口縁にかけて環状状に成型。	1層	
	239	ガラス製品	瓶	薬瓶	口~底部	1.65	4.1	2.0	—	色調は茶色系。小型の瓶で、胴部断面が円形。口縁内側に磨れているため、具輪が用いられていたと考えられる。	1層	
	240	ガラス製品	瓶	薬瓶	口~底部	1.4	5.2	2.0	—	色調は無色系。首部がいかり肩で胴部断面が円形。	1層	

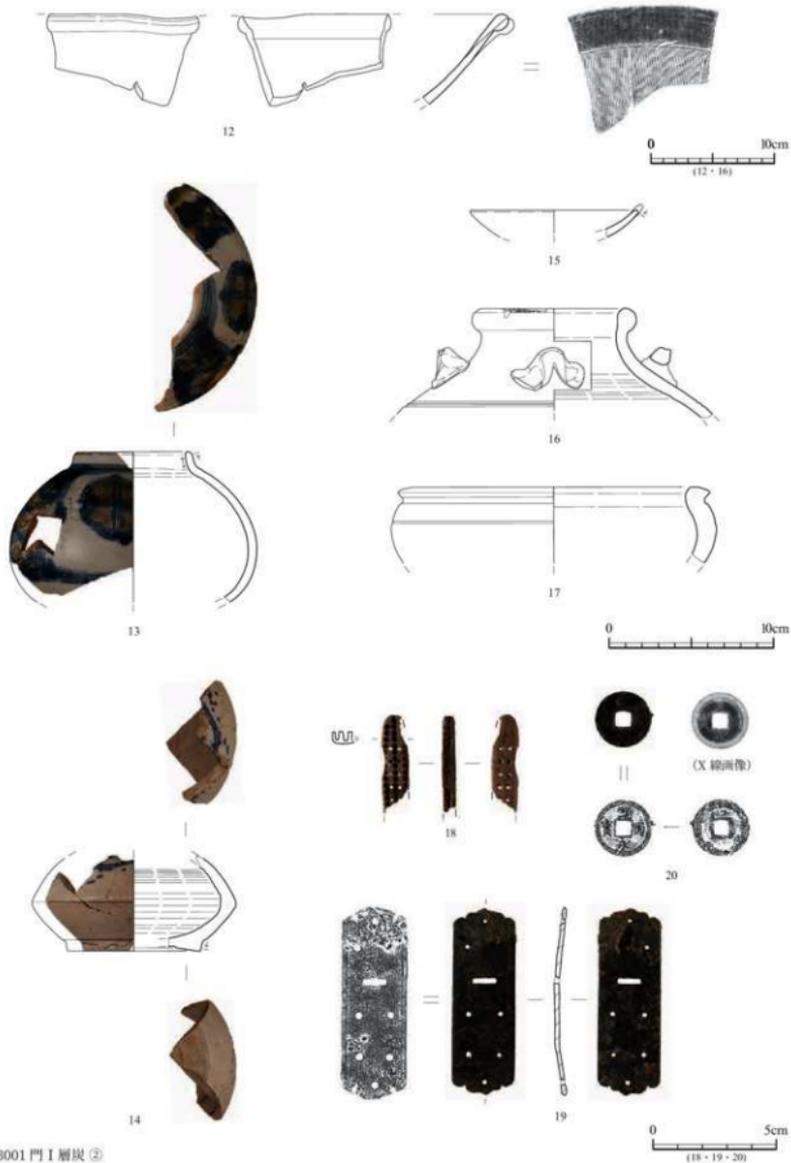
第23表 川区出土遺物観察一覧 i

発掘番号 調査番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
同収 22	241	ガラス製品	瓶	薬瓶	口縁部	3.1	—	—	色調は青色系。口径で塞がれたままの口縁部片。焼熱によるものか、変形している。		I 層
	242	ガラス製品	瓶	染料瓶	口～底部	1.3	7.05	2.95 1.55	色調はコバルト色系、いかり肩で胴部横断長方形。胴部に「志らが赤毛染 ナイス」、底部に「T.M.」のエンボス。		I 層
	243	ガラス製品	瓶	染料瓶	口～底部	1.45	6.6	2.35 1.6	色調は無色系。いかり肩で胴部横断長方形。胴部に「志らが赤毛染 ナイス」、底部に「T.M.」のエンボス。		I 層
	244	ガラス製品	瓶子容器?	—	口～底部	(3.2)	1.45	(1.75)	瓶子瓶の一種か。色調は無色系。小杯形で高台が付き。縦位の筋が走る。		I 層
	245	ガラス製品	瓶	調味料瓶	口～底部	1.9	8.1	3.85	色調は無色系。スクリュー枠で胴部横断面方形。底部に「S & B」「YX」「24」のエンボス。		I 層
	246	ガラス製品	瓶	—	口～底部	(10.6)	2.1	(6.8)	プレス技法によって作られた蓋と考えられる。色調は青色系。外面を水玉模様で覆い、それに草の模様加わる。口唇部は鋭利。		I 層
	247	ガラス製品	瓶	牛乳瓶	口縁部	2.8	—	—	色調は無色系。スクリュー枠で口縁から胴部にかけて合わせ目が残る。「蒸気消」のエンボスを胴部に確認できる。		I 層
	248	ガラス製品	瓶	薬瓶	口～底部	1.6	7.8	2.1	色調は無色系。首部が長く、胴部横断面円形。胴部に「エヌ コチヌメ丁製」「本村製會」のエンボス。		II 1 層
同収 22	249	中国産三彩	水注	—	把手	—	—	—	胎土は淡黄色で粗い。石英粒が混ざる。断面方形状。白化経後、緑色の釉を全面に施釉。無文。		III 6d 層
	250	中国産三彩	水注	—	把手	—	—	—	胎土は淡黄色で粗い。断面三角形状。白化経後、緑色の釉を全面に施釉。無文。		III 6d 層



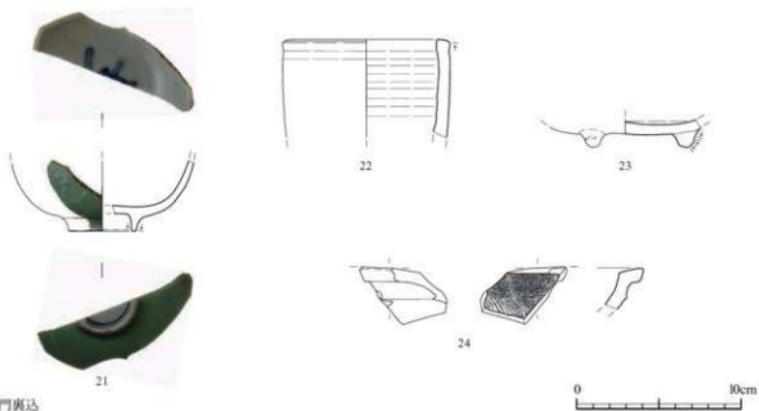
SA3001 門 I 層灰 ①

第 121 図 Ⅲ区の出土遺物 1

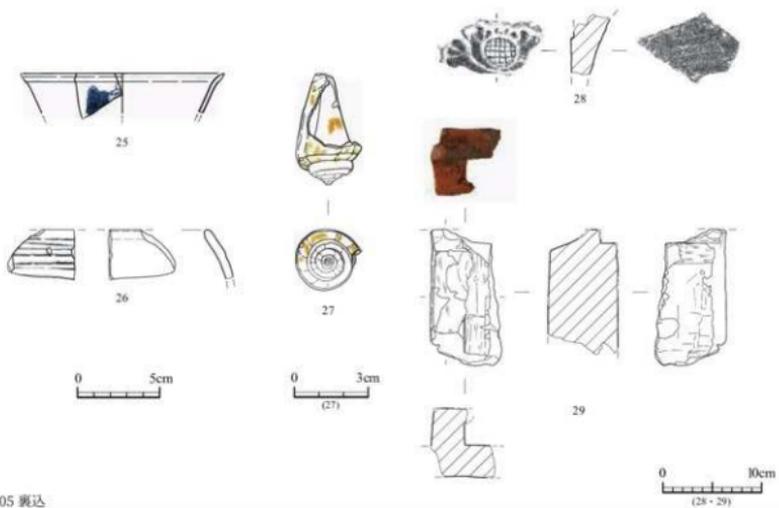


SA3001 門 I 層 ②

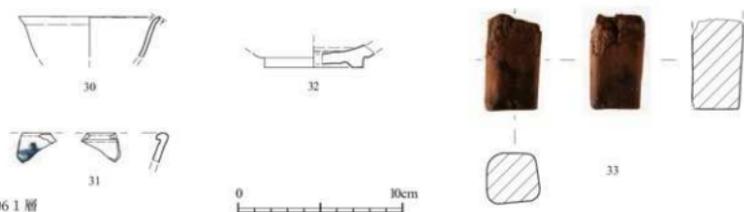
第 122 図 Ⅲ区の出土遺物 2



SA3001 門裏込

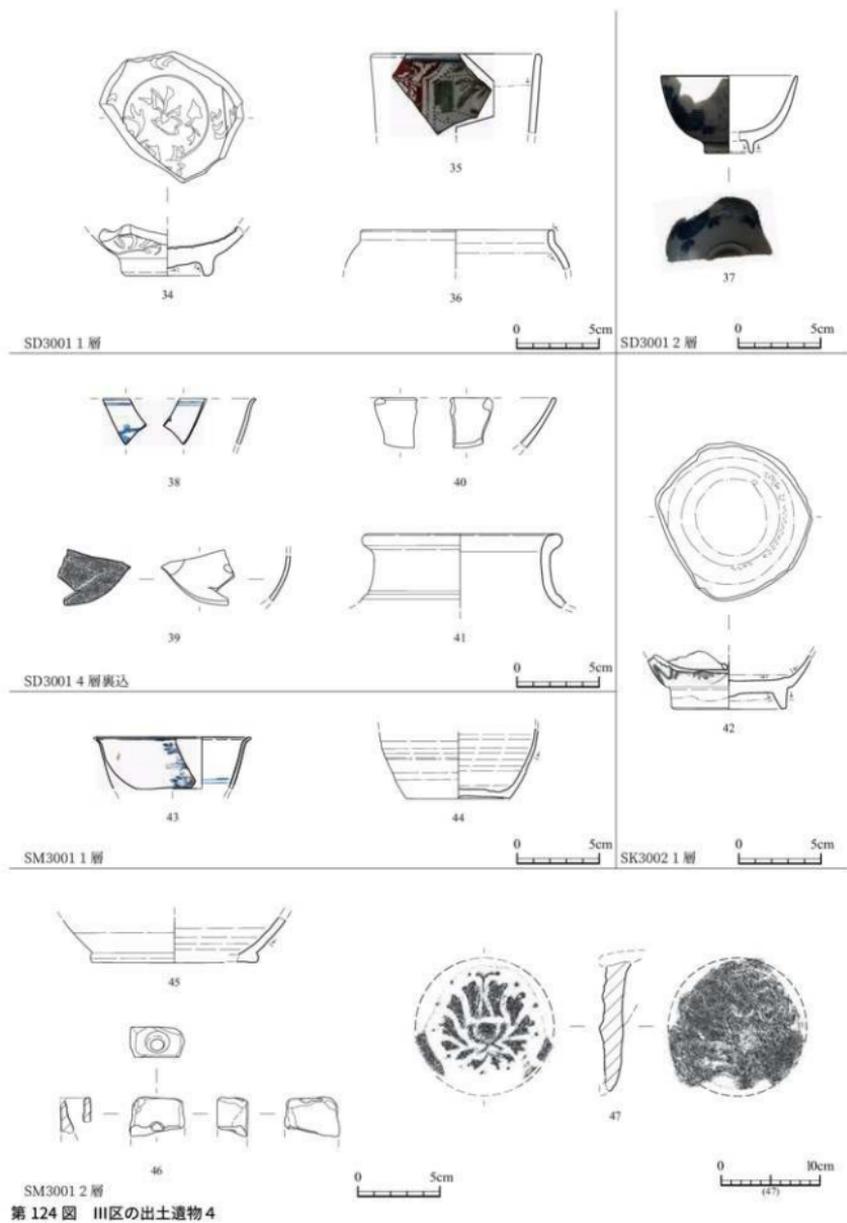


SA3005 裏込

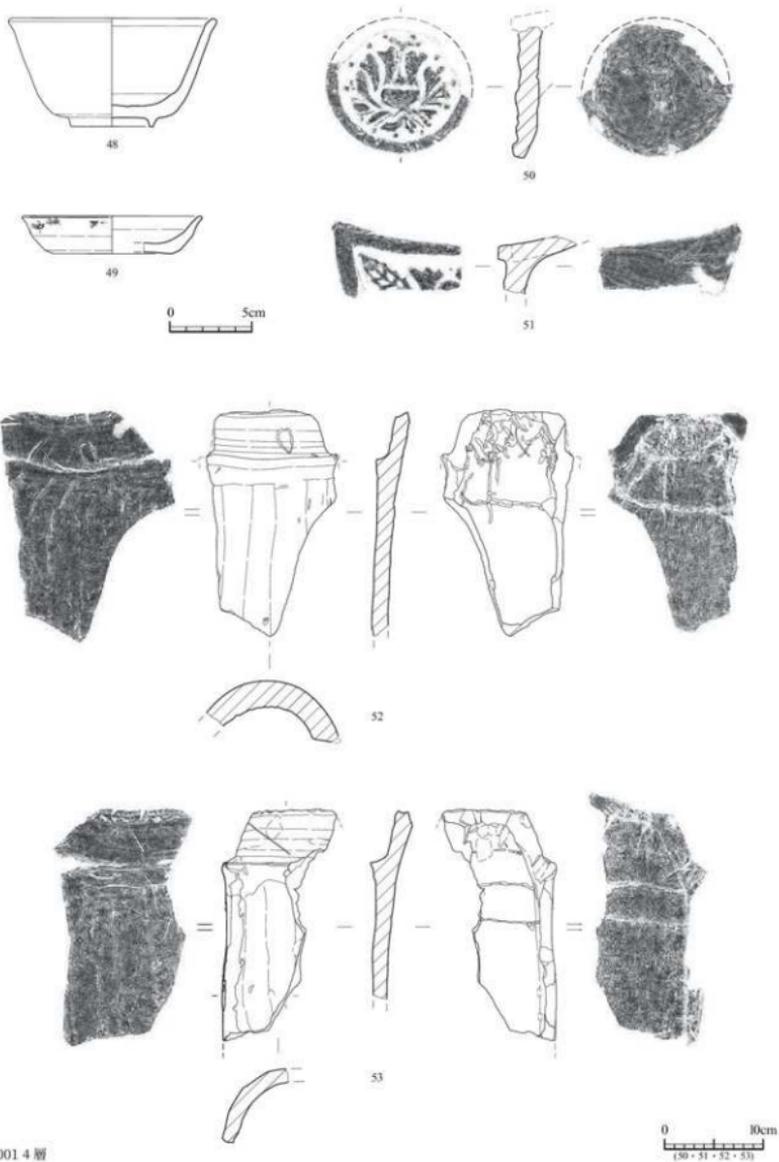


SA3006 1層

第123図 III区の出土遺物3



第 124 図 川区の出土遺物 4

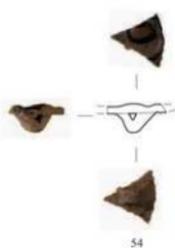


SM3001 4層

第125図 III区の出土遺物5



56



54



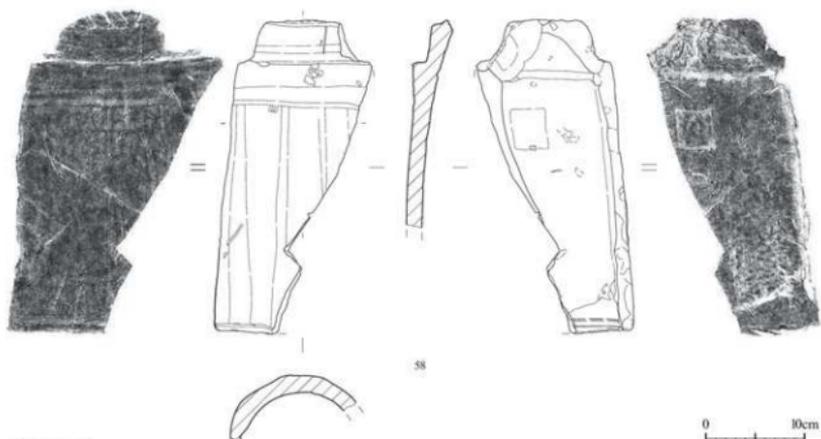
55



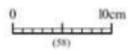
57



SM3001 6層

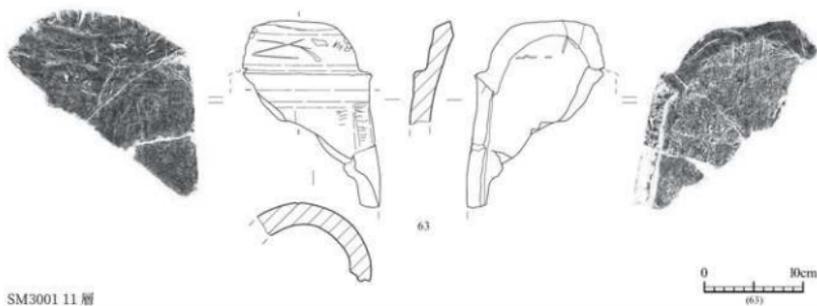
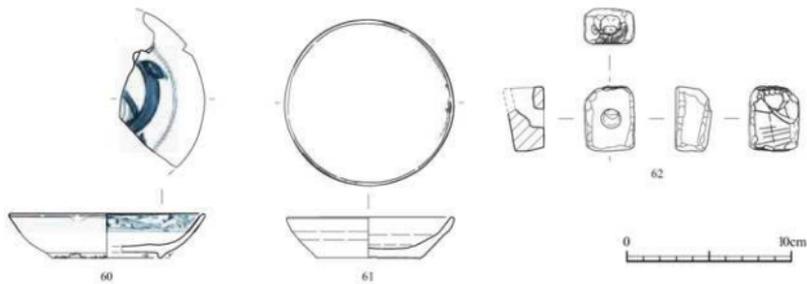
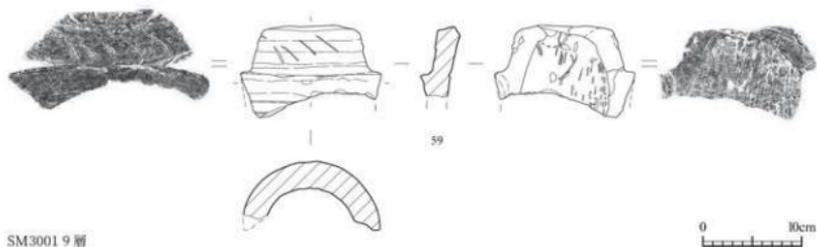


58

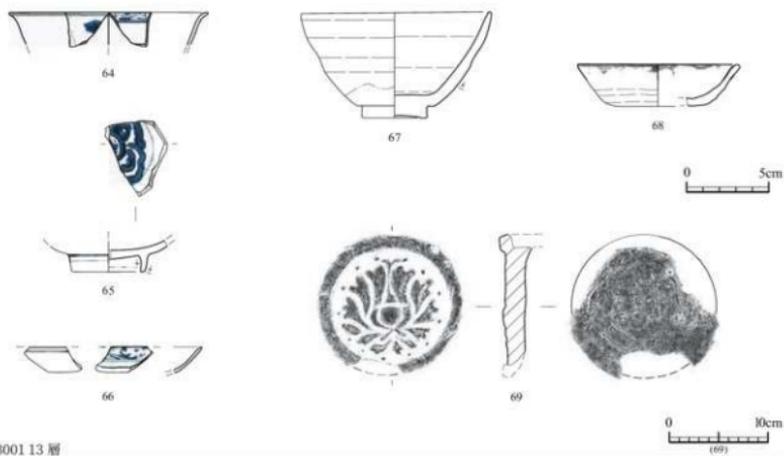


SM3001 7層

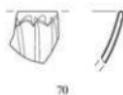
第 126 図 Ⅲ区の出土遺物 6



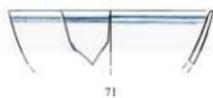
第127図 Ⅲ区の出土遺物7



SM3001 13層



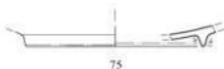
70



71



SM3002 1層



75



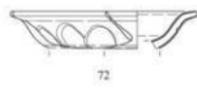
76



77



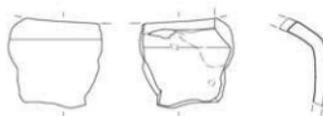
SM3002 4層



72



73



74



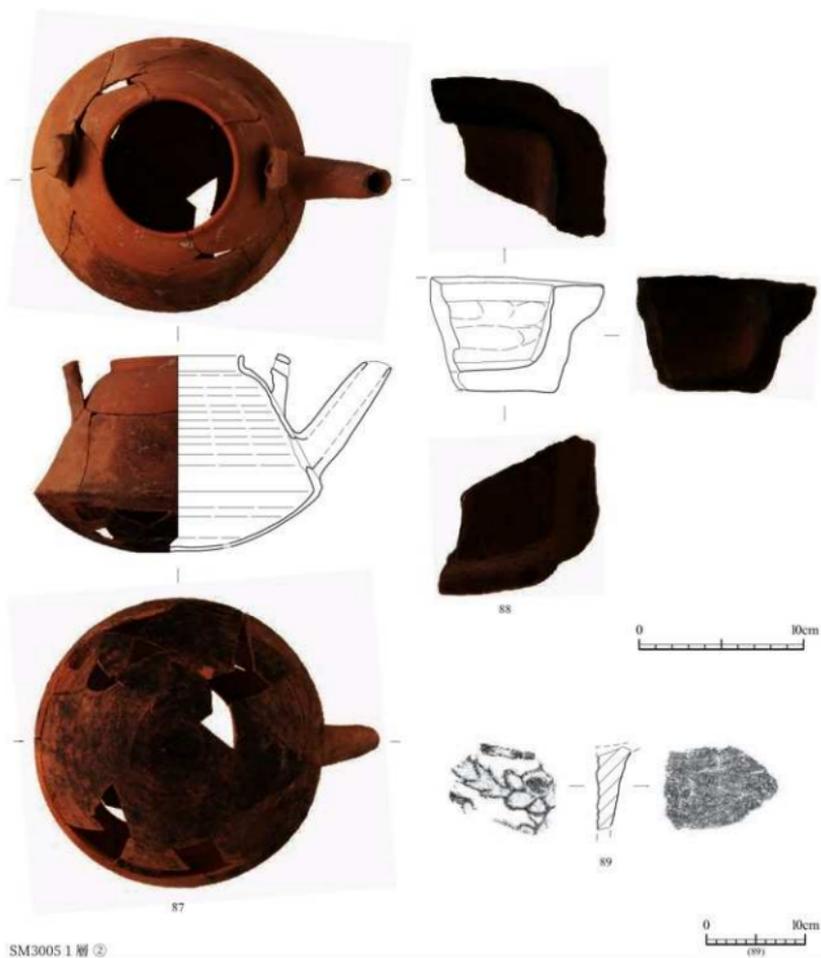
SM3002 3層

第128図 Ⅲ区の出土遺物8



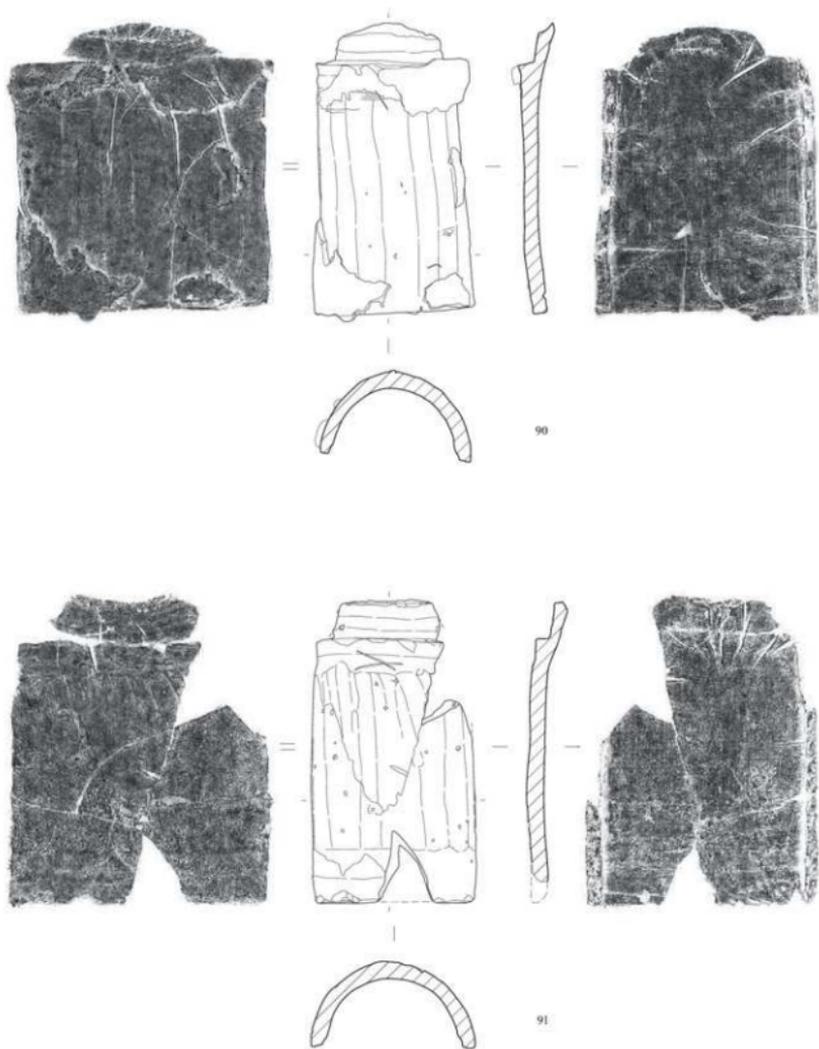
SM3005 1層①

第129図 Ⅲ区の出土遺物9



SM3005 1層②

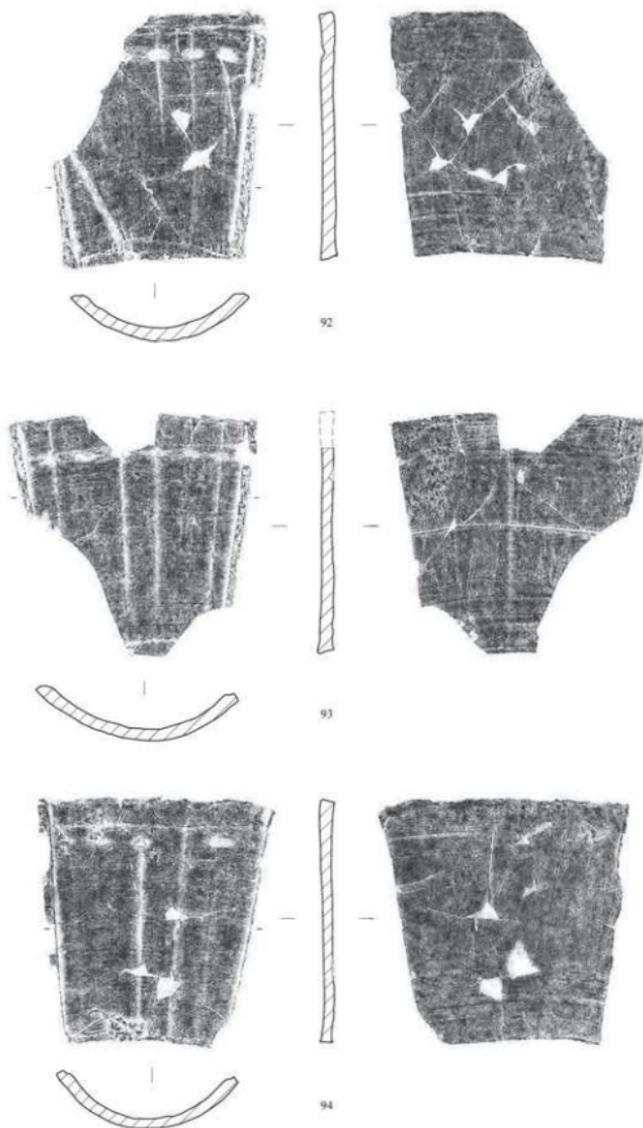
第130図 Ⅲ区の出土遺物10



SM3005 1層 ③

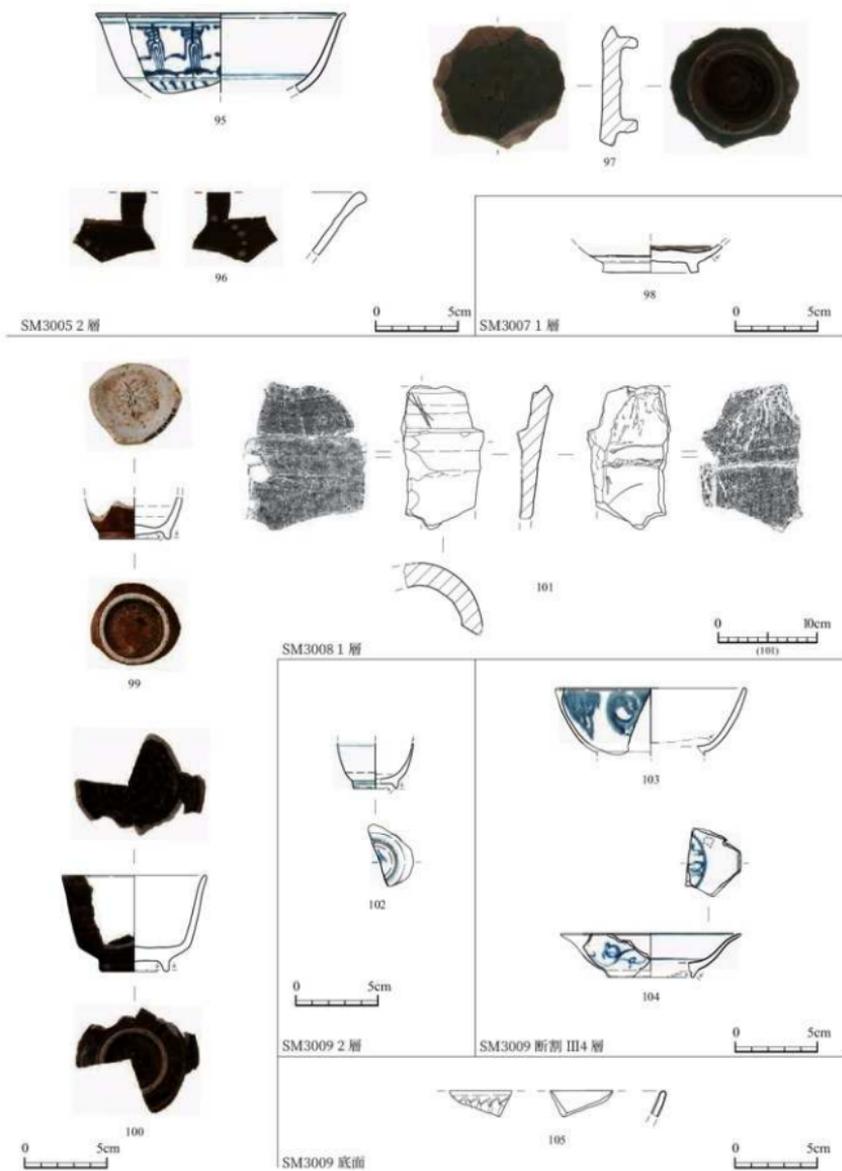
0 10cm

第131図 Ⅲ区の出土遺物11

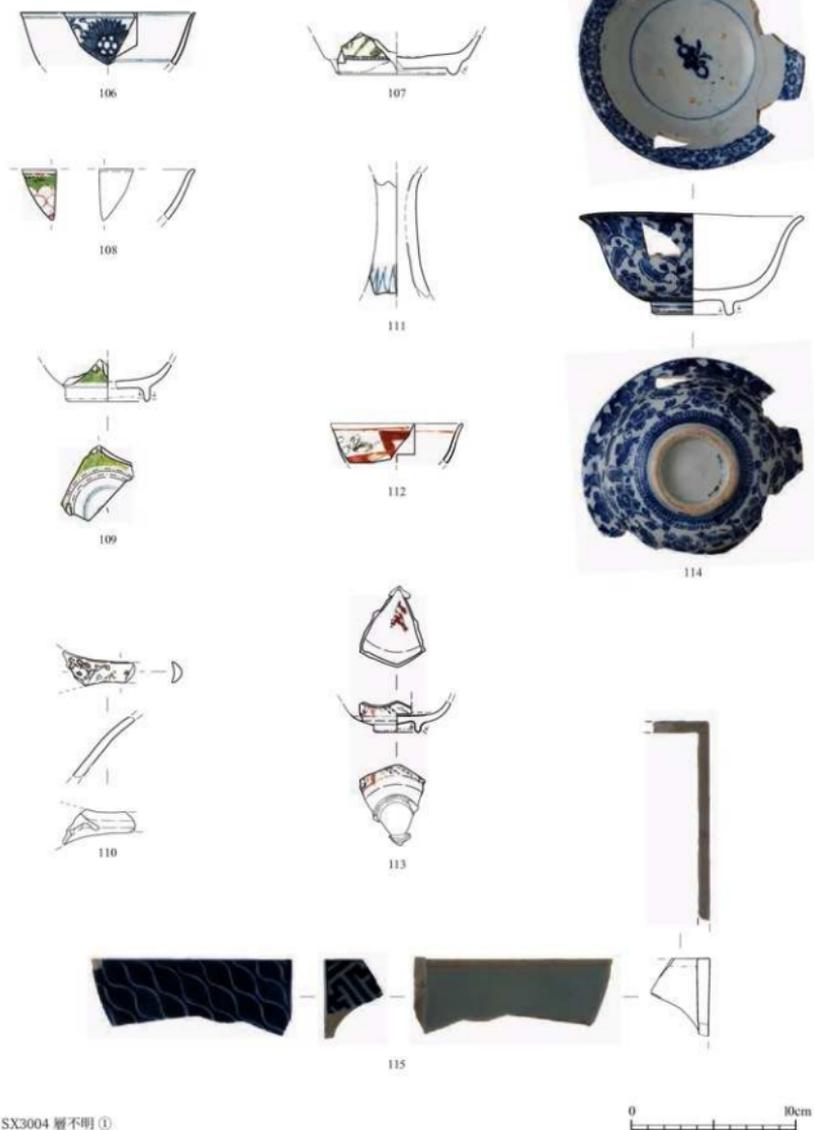


SM3005 1層④

第132図 Ⅲ区の出土遺物12

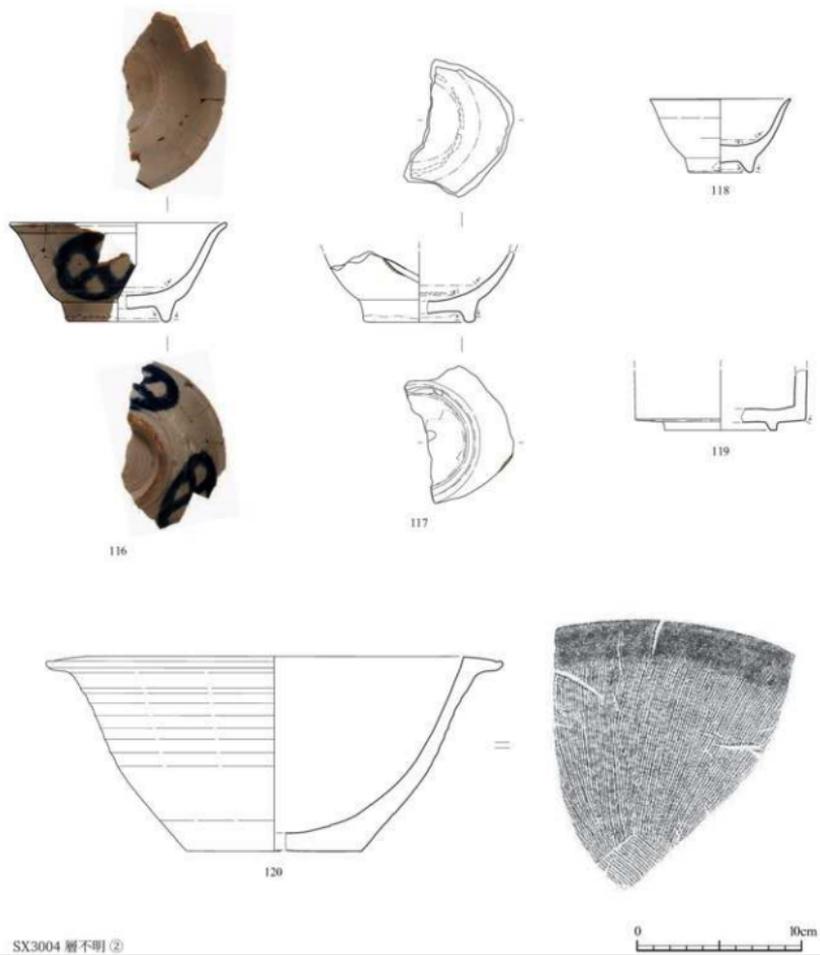


第133図 Ⅲ区の出土遺物13

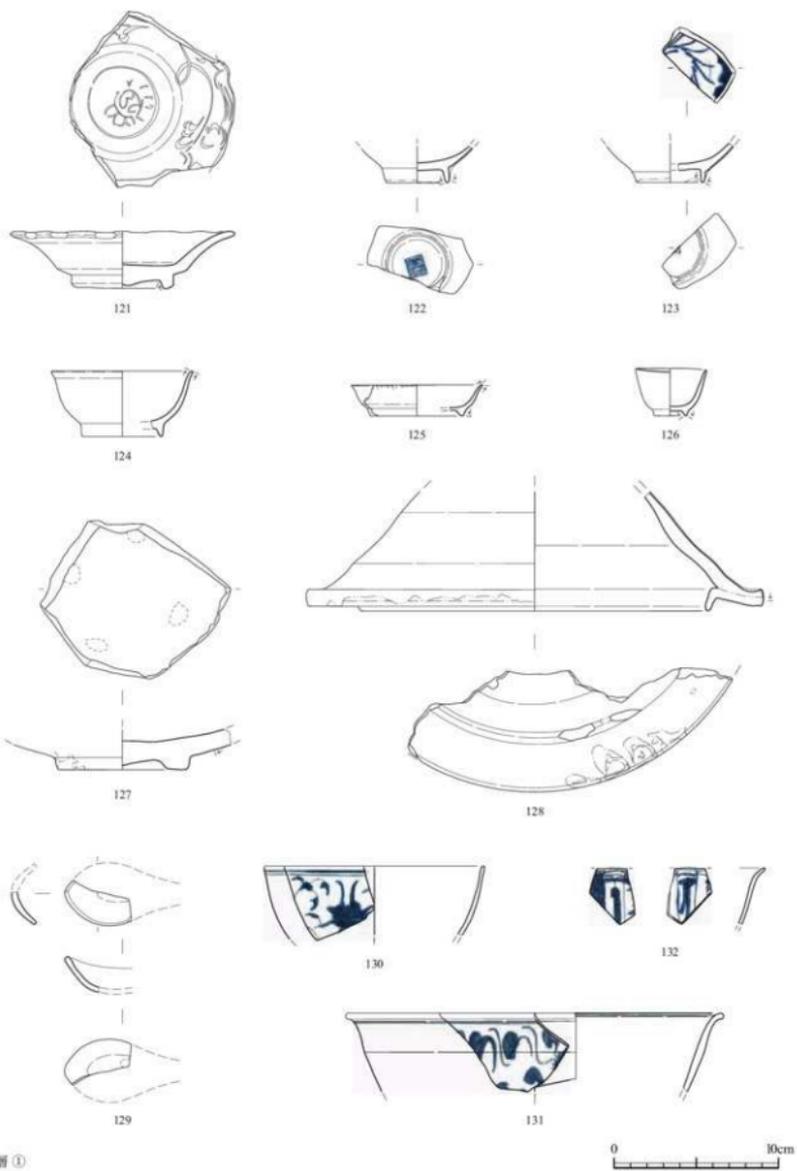


SX3004 層不明 ①

第134図 Ⅲ区の出土遺物14

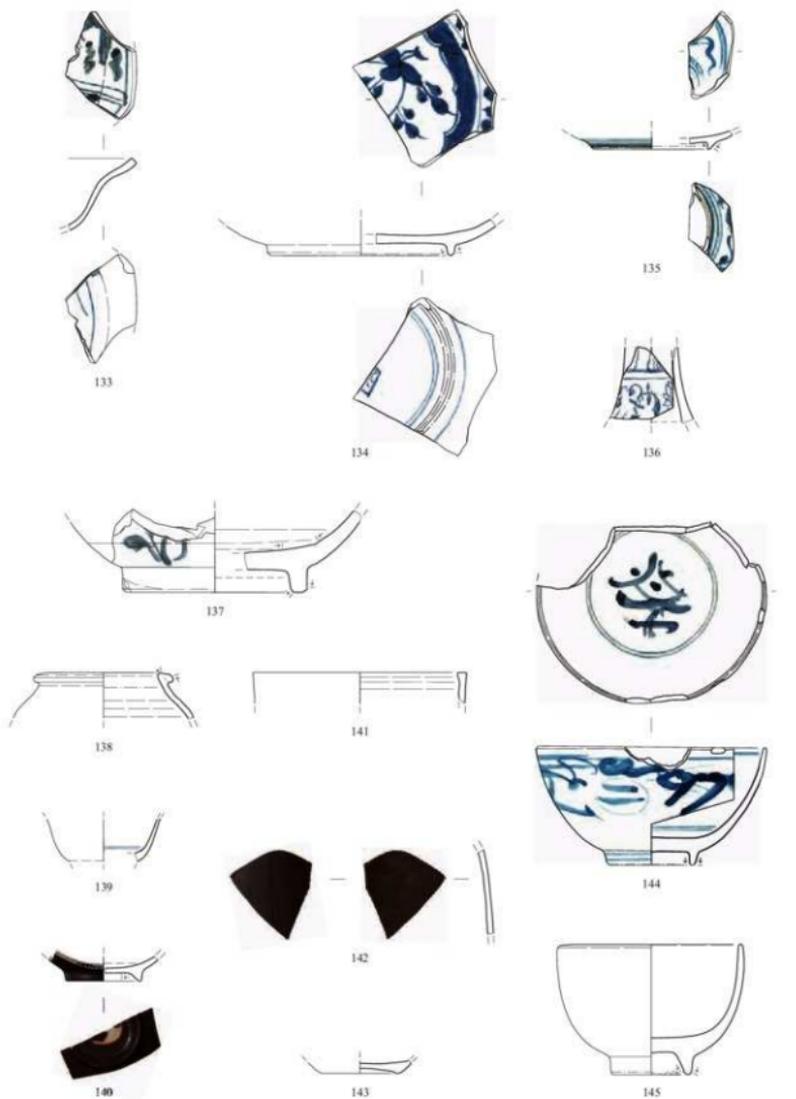


第 135 図 III区の出土遺物 15

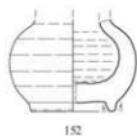
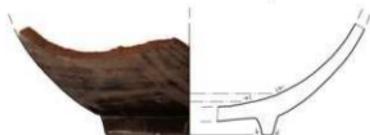
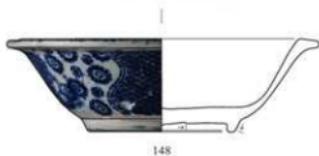
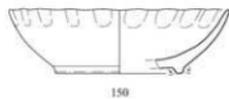
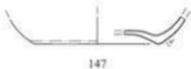
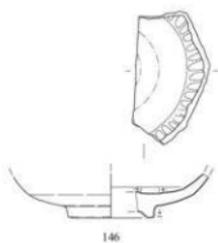


I層①

第136図 川区の出土遺物16



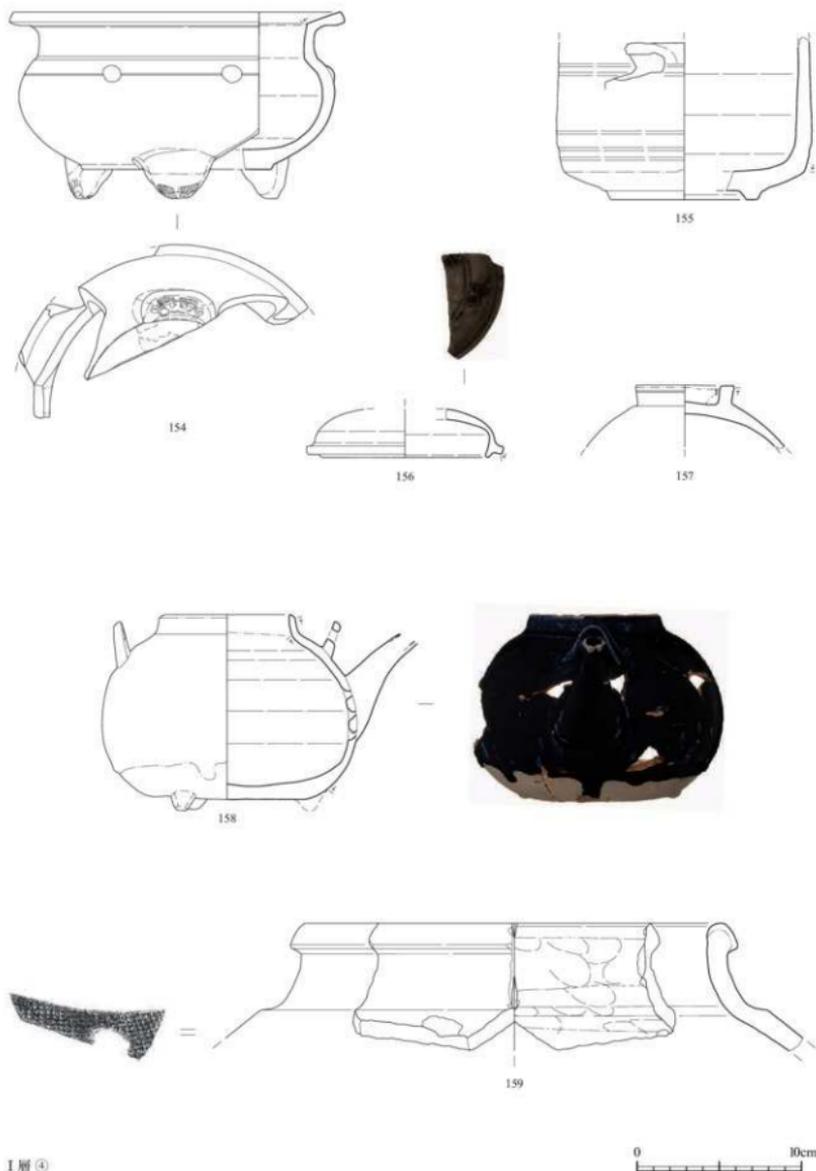
I層②  
第137図 III区の出土遺物 17



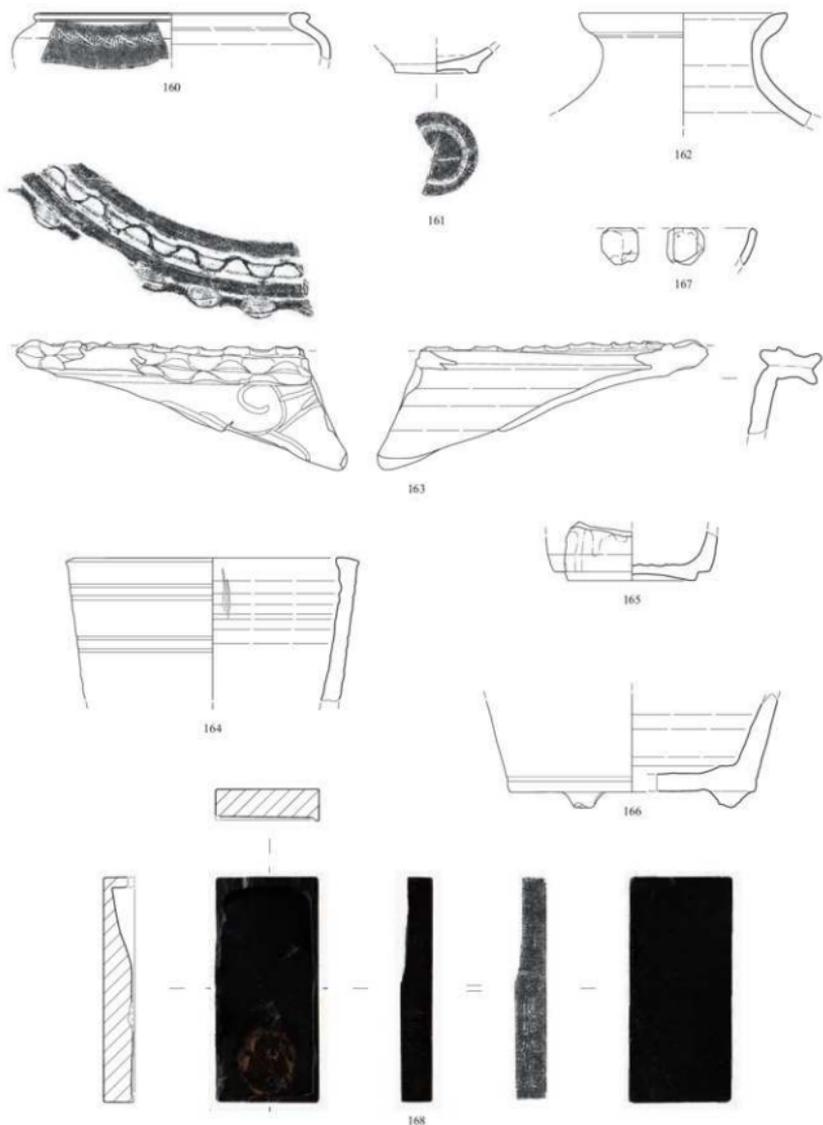
I層③



第138図 Ⅲ区の出土遺物18

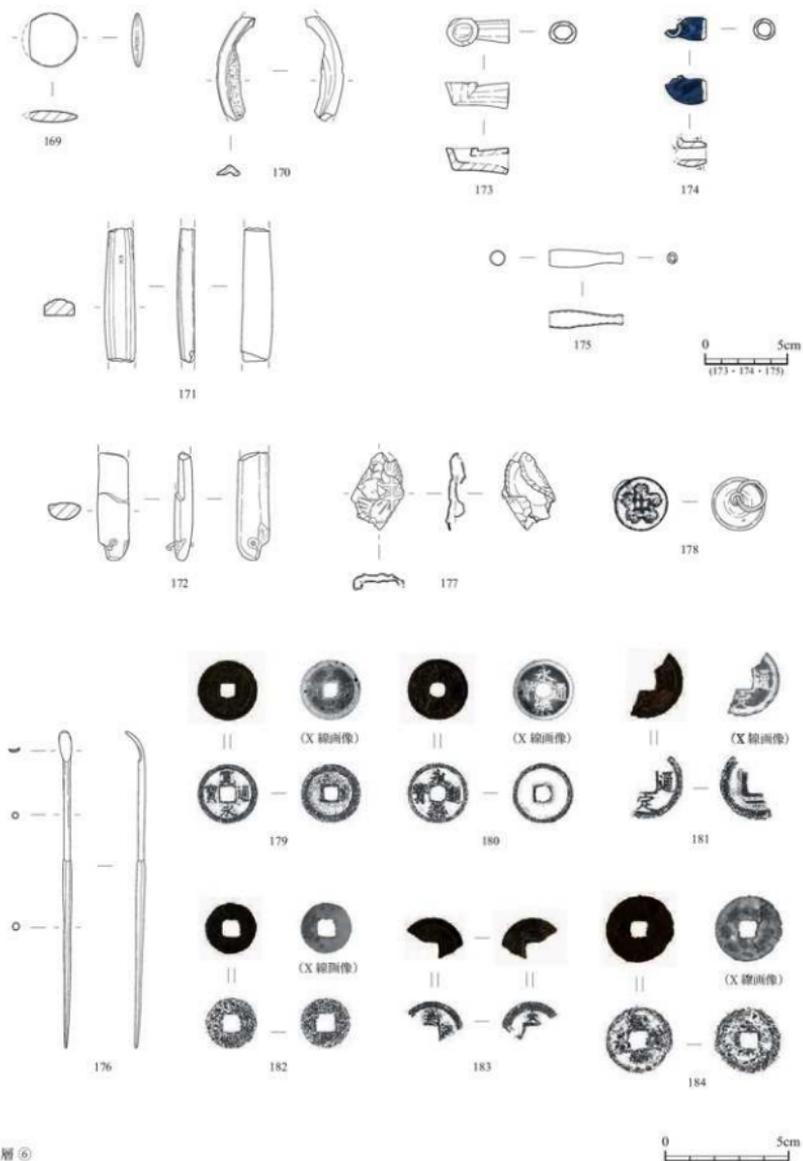


第139図 III区の出土遺物19

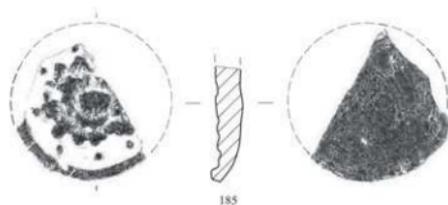


I層③

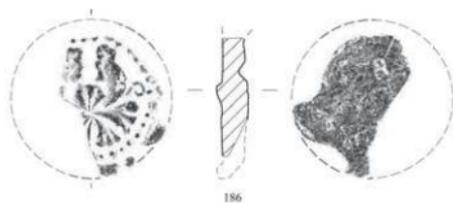
第140図 III区の出土遺物 20



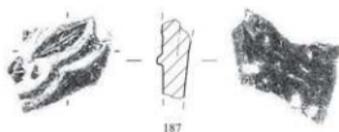
第141図 III区の出土遺物21



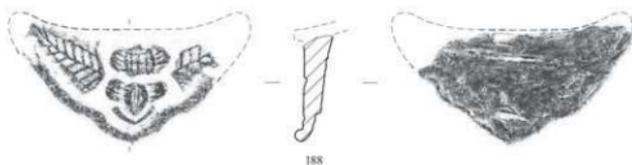
185



186



187

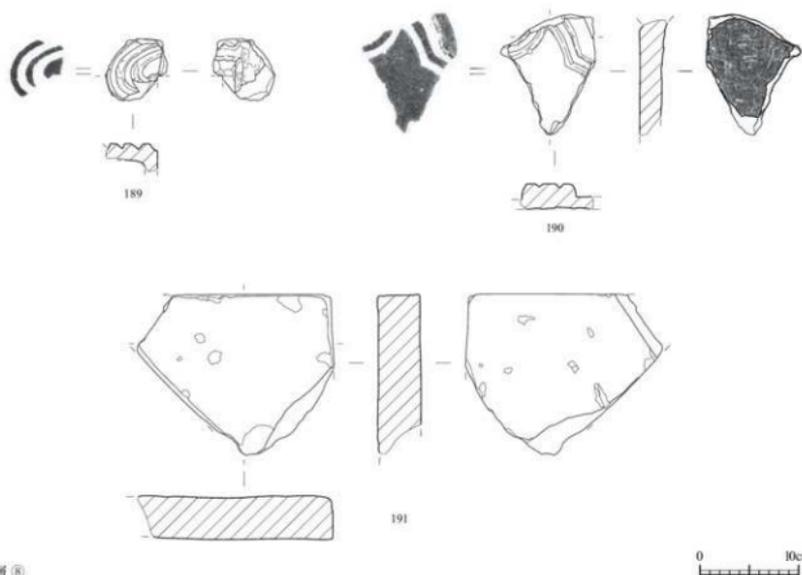


188

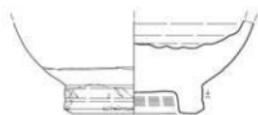
I層②



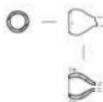
第142図 III区の出土遺物22



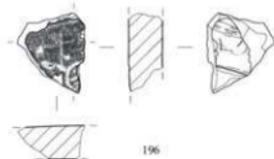
第143図 III区の出土遺物23



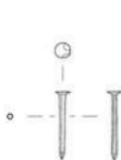
192



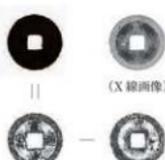
193



196



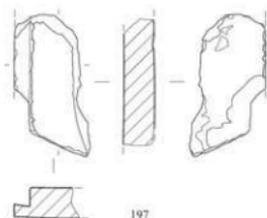
194



195



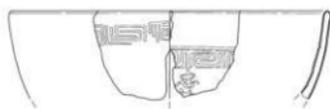
II 1層



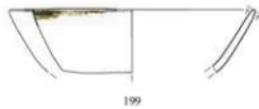
197



II 3層



198



199



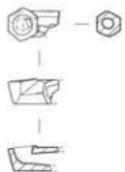
200



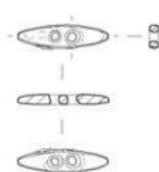
201



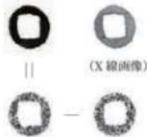
202



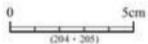
203



204

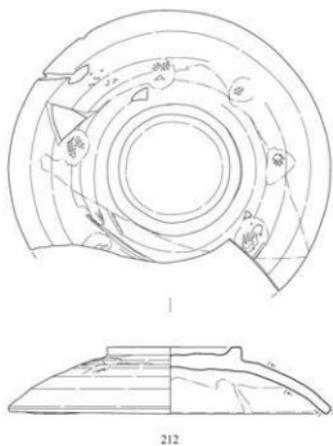
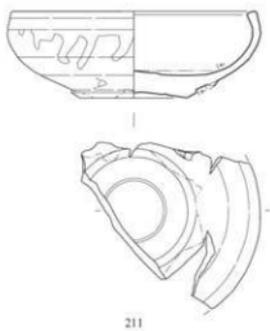
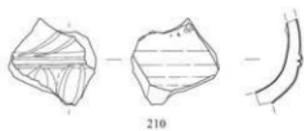
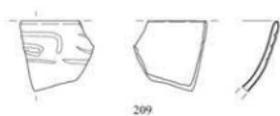
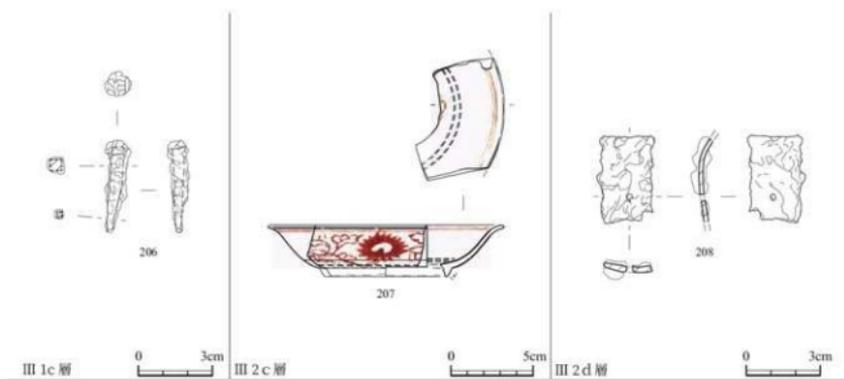


205

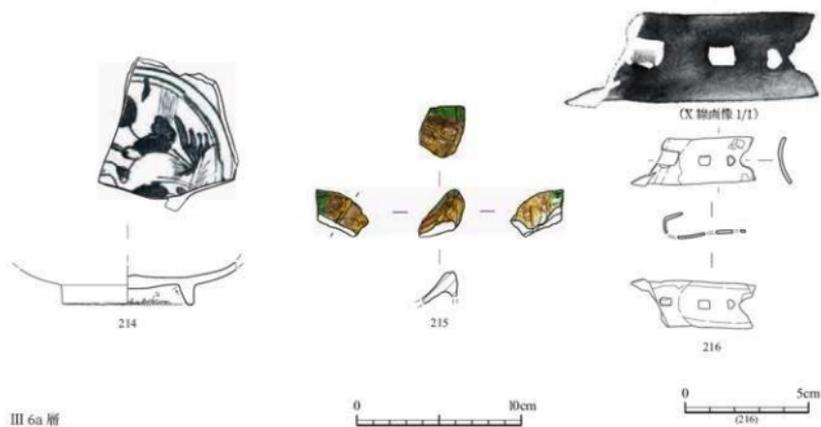


II 6層

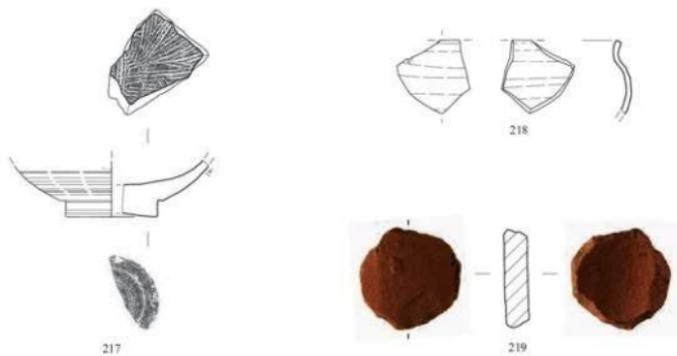
第144図 川区の出土遺物24



III 4層  
第145図 III区の出土遺物25

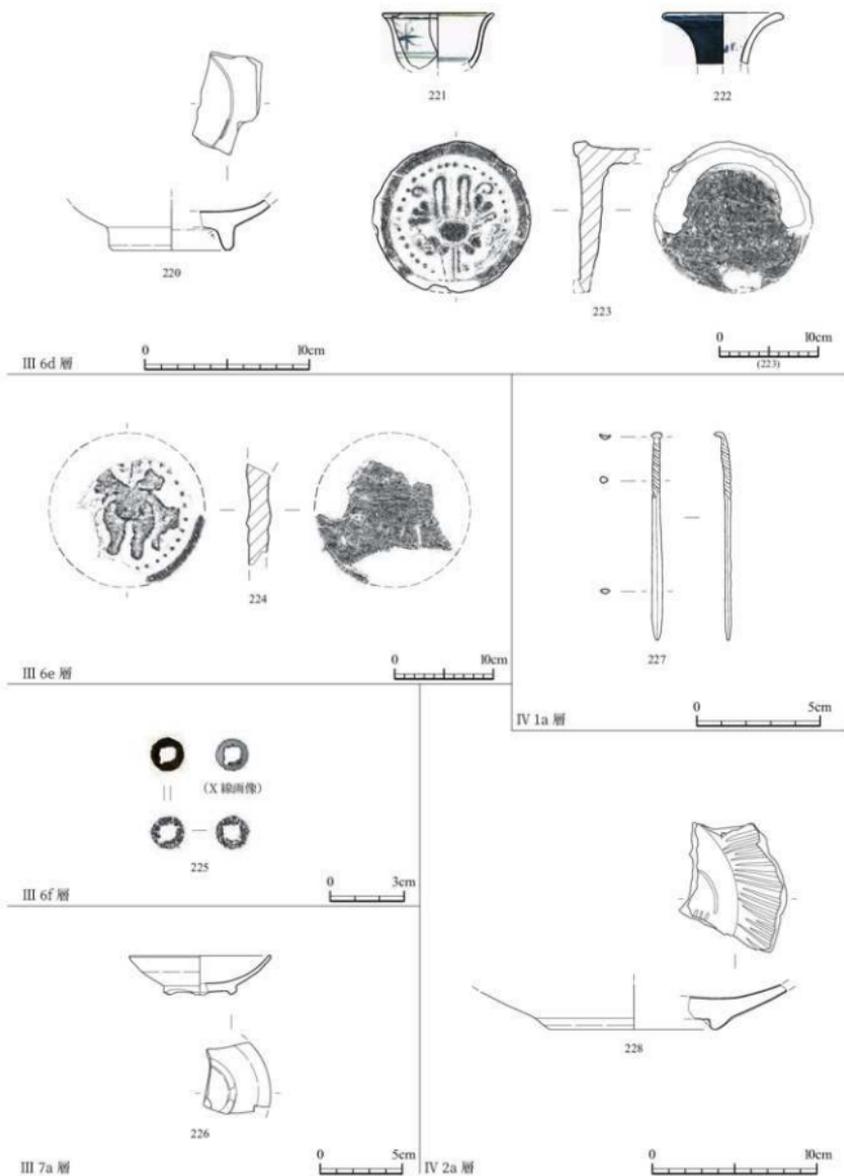


III 6a 層



III 6b 層

第 146 図 III 区の出土遺物 26



第147図 III区の出土遺物 27

第24表 IV区出土遺物観察一覧 a

発掘番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第148図 図版12	1	本土産受付	鏡	磁器陶 V期	口縁部	(9.2)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。胎は灰白色で内外面に施釉。文様は外面と内面口縁部に二重輪文。	SA4003	裏込
	2	鉄製品	釘	—	定形	縦径 (3.7)	最大径 0.7	最小径 0.65	角釘。頭部を一方へ折る。	SA4003	裏込
	3	骨製品	ボタン	—	定形	縦 1.4	横 1.4	厚さ 0.3	糸通し孔が5点穿孔。両面磨かれており光沢を持つ。表面の孔は大きく、裏面の孔は小さい。	SA4003	裏込
	4	金属製品	鈎金具	—	定形	縦 1.75	横 2.25	厚さ 0.2	基部の先端をカギ状に折る。頭部に「ニホシ」の文字。	SD4001	1層
	5	金属製品	把手	—	定形	—	—	厚さ 0.2	急須の把手か。断面形は円形。両端をカギ状に折る。	SD4001	1層
	6	初期沖縄産 無釉陶器	楕鉢	—	底部	—	—	(11.4)	胎土は明赤褐色で堅緻。石英粒、黒色粒が混入し、白土は粒状になる。内面に5条1組の筋目を施し、内底が使用により摩滅。外底に巻目筋の圧痕。	SD4002	層不明
	7	中国産青磁	合子?	—	口縁部	—	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉はオリーブ灰色で内外面施釉後、口縁部施釉。文様は外面割部へ横線による不明文様。	SK4002	2層
	8	中国産青花	鏡	福建・広東系	底部	—	—	(6.8)	胎土は灰白色でやや堅緻。白色粒が混入。釉は明緑灰色で内外面割部まで施釉。内底と底部は露胎。文様は外面割部で不明文様。	SK4007	層不明
	9	本土産陶器	皿	陶器Ⅲ期	底部	—	—	(4.6)	胎土は淡黄色でやや軟質。釉は淡黄色で内外面に施釉後、畳付跡あり。畳付と内底に砂目あり。	SK4007	層不明
	10	沖縄産施釉陶器	鉢	—	胴部	—	—	—	胎土は淡黄色でやや軟質。釉は淡黄色で内外面に施釉。文様は内面に葉文。	SK4007	層不明
第149図 図版12	11	中国産白磁	小碗	徳化窯系	底部	—	—	(3.6)	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で内外面施釉後、畳付跡あり。畳付に砂目あり。	SM4002	1層
	12	中国産白磁	鉢	福建系	底部	—	—	(13.4)	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で内外面施釉後、畳付跡あり。	SM4002	1層
	13	中国産青花	鏡	徳化窯系	胴部	—	—	—	胎土は灰白色でやや軟質。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様は外面に梅花文と蓮葉文。	SM4002	1層
	14	中国産色絵	小碗	景徳鎮窯系	口縁部	(6.6)	—	—	胎土は白色で堅緻。釉は透明で内外面施釉後、内面の口縁部施釉。文様は外面に草花文。	SM4002	1層
	15	沖縄産施釉陶器	鏡	池田II期	底部	—	—	(6.8)	胎土は淡黄色でやや軟質。黒色粒が混入。釉は灰白色で内外面の割部まで施釉。内底と底部は露胎。口縁部成形。	SM4002	1層
	16	沖縄産施釉陶器	鏡	—	底部	—	—	—	胎土は褐色でやや軟質。白色粒が混入。口縁部成形。外底に磨きあり。	SM4002	1層
	17	沖縄産施釉陶器	小碗	—	底部	—	—	(3.9)	胎土は淡黄色でやや軟質。黒色粒が混入。釉は部分で外面に褐色の釉を全面施釉後、畳付跡あり。内面は白化粧後、透明釉を施す。内底に砂目跡あり。	SM4002	1層
	18	沖縄産施釉陶器	鉢	—	底部	—	—	6.5	胎土は淡黄色で褐色色でやや軟質。白色粒が混入。釉は黒褐色で内外面割部まで施釉。内底と底部は露胎。内底には渦巻状の窯痕跡あり。外底に砂目あり。	SM4002	1層
	19	初期沖縄産 無釉陶器	碗	—	口縁部	(18.6)	—	—	胎土は赤褐色で軟質。白色粒と褐色粒が混入。白土が粒状になる。釉は黒褐色で内外面に施す。口縁部は外へ折り曲げられ、内面に砂目状に成形。	SM4002	1層
	20	初期沖縄産 無釉陶器	蓋	—	胴~底部	底径 (12.9)	—	—	胎土は褐色で軟質。白色粒が混入。釉は黒褐色で外面施釉中まで施かる。口縁部成形。	SM4002	1層
第150図 図版13	21	沖縄産無釉陶器	楕鉢	—	口~底部	(31.2)	15.0	(11.8)	胎土は赤褐色でやや軟質。黒色粒と白色粒が混入。口縁部は口縁部下方の内底まで施されている。注口あり。	SM4002	1層
	22	沖縄産無釉陶器	楕鉢	—	底部	—	—	(10.7)	胎土は赤褐色でやや軟質。褐色粒と白色粒が混入。釉は褐色で外面に施かる。高台は貼付け。	SM4002	1層
	23	沖縄産無釉陶器	灯明皿	—	口~底部	(10.0)	2.2	(4.3)	胎土は赤褐色でやや軟質。黒色粒が混入。内外面ともに口縁部磨き。口縁部に保存者。	SM4002	1層
	24	陶質土器	火鉢	—	底部	—	—	(13.9)	胎土は赤褐色でやや軟質。白色粒と黒色粒が混入。文様は外面に白土を規則的に置き取り横線文にしたもの。口縁部成形。釉は褐色で外面に施かる。高台は貼付け。	SM4002	1層
	25	中国産白磁	鏡	徳化窯系	底部	—	—	(5.2)	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で内外面施釉後、畳付跡あり。畳付に砂目あり。	SM4002	2層
	26	沖縄産施釉陶器	小碗	—	口~底部	(9.2)	4.6	(4.0)	胎土は淡黄色でやや軟質。釉は部分で、外面暗褐色の釉を全面施釉後、底部露胎。内面に淡黄色を施釉後、内底に砂目跡あり。内面口縁部は施釉あり。	SM4002	2層
	27	沖縄産無釉陶器	人形	—	—	—	—	—	ヒト形の顔か。胎土は明赤褐色で堅緻。白色粒が混入。目は貼付けで、立体的に成形。裏面に指痕あり。	SM4002	2層
	28	中国産陶器	碗	—	胴部	—	—	—	胎土は淡黄色でやや軟質。白色粒と赤褐色粒が混入。釉は褐色で外面の文様を備えた後に施す。内面露胎。文様は草花文。	SM4003	1層
	29	中国産青花	鏡	B1I群 明1-1	口縁部	(11.8)	—	—	胎土は灰白色でやや軟質。釉は明緑灰色で内外面施釉後、口縁部施釉。文様は外面に草花文。景徳鎮窯系。	SR4001	2層
	30	鉄製品	釘	—	—	縦 5.0	最大径 0.6	最小径 0.4	角釘か。断面円形か。全体の錆跡が著しく、形状不明。	SB4001	4層

\*釘(鉄製品): 実測した部分の法量を記載した。

第25表 IV区出土遺物観察一覧 b

検出番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量 (cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第150図 図版13	31	ベトナム産青花	瓶	—	胴部	—	—	—	胎土は灰白色でやや軟質。釉は透明で外面白化層後、内外面施釉。文様は蓮弁文か。縁溝が入られる。	SH4001	6層
	32	中国産青磁	碗	VI-1類	口縁部	(13.2)	—	—	胎土は灰白色でやや硬質。白色粒が混入。釉はオリーブ灰色で内外面に施釉。文様は外面に施えられた襷目蓮弁文。	—	1層
	33	中国産青磁	碗	IV類	底部	—	—	(5.2)	胎土は灰白色でやや硬質。釉は明オリーブ灰色で内外面に施釉。裏付から外底露出。文様は内底に蓮文。	—	1層
	34	中国産青磁	皿	IV類	底部	—	—	4.2	胎土は灰白色でやや硬質。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、内底露出。裏付から外底露出。	—	1層
	35	中国産青磁	香炉	—	口縁部	6.0	—	—	胎土は白色で硬質。釉は明オリーブ灰色で外面と内面口縁部に施釉。	—	1層
	36	中国産青磁	蓋	—	胴部	—	—	—	酒倉形の蓋。胎土は白色で硬質。釉はオリーブ灰色を外面に厚く施釉。内面は灰白色釉を施釉。文様は外面にヘラ掻きによる蓮弁文。	—	1層
	37	中国産青磁	器台	—	底部	—	—	(15.4)	胎土は灰白色で硬質。釉はオリーブ灰色で内外面に厚く施釉後、外底露出。文様は外面胴部にヘラ掻きの蓮文か。	—	1層
第151図 図版13	38	中国産白磁	小皿	景德鎮窯系	口-底部	(10.2)	1.9	(5.2)	胎土は白色で硬質。釉は灰白色で内外面に施釉後、裏付露出。内底に印の丸文。	—	1層
	39	中国産青花	碗	徳化窯系	口-底部	(15.0)	6.7	(8.0)	胎土は白色で硬質。釉は明緑灰色で内外面に施釉。裏付露出。文様は外面に折枝文、内底に不明文様。	—	1層
	40	中国産青花	碗	景德鎮窯系	底部	—	—	(4.4)	胎土は白色で硬質。釉は明緑灰色で内外面に施釉。裏付露出。文様はベンシンドローイングで外面に如意雲頭草文、外底に露あり。	—	1層
	41	中国産青花	小碗	景德鎮窯系	底部	—	—	(3.9)	胎土は白色で硬質。釉は明緑灰色で内外面に施釉。裏付露出。文様は外面に雲芝文、内底に木の葉文、外底に露あり。	—	1層
	42	中国産青花	皿	徳化窯系	口-底部	12.65	2.8	6.8	胎土は白色で硬質。釉は明緑灰色で内外面に施釉。裏付露出。文様は外面に胎化した室文、内面は胎内面に人物文、内面のなか所に雲頭草文。	—	1層
	43	中国産青花	皿	徳化窯系	底部	—	—	(11.2)	胎土は白色で硬質。釉は明緑灰色で内外面に施釉。裏付露出。文様は内底に唐草文。	—	1層
	44	中国産青花	皿	景德鎮窯系	底部	—	—	(8.8)	胎土は白色で硬質。釉は明緑灰色で内外面に施釉。裏付露出。文様は内面に首字文と素戔嗚尊草文。外底に露あり。	—	1層
	45	中国産青花	鉢	—	口縁部	(8.8)	—	—	胎土は白色で硬質。釉は明緑灰色で内外面に施釉。外面に不明文様。八角形を呈す。	—	1層
	46	中国産三彩	水盂	—	胴部	—	—	—	魚形水盂か。胎土は灰白色で軟質。石灰粒、赤色粒が混入。釉は外面胴部に緑色の釉と黄色の釉。内面に魚頭のナツメ調整。	—	1層
第152図 図版13	47	中国産陶器	茶壺	宜興窯系	底部	—	—	(6.0)	胎土は明赤褐色と黄褐色で軟質。白色粒が混入。外面は磨かれて欠片を持つ。底部は基筒形状。	—	1層
	48	木土産陶器	小碗	陶器風田期	口-底部	(7.8)	4.3	(3.0)	京焼風の型面か。胎土は白色で軟質。釉は灰白色で内外面に施釉後、裏付露出。全面に細かな貫入。	—	1層
	49	木土産陶器	皿	陶器風田期	口縁部	—	—	—	胎土は濃い褐色で軟質。白色粒が混入。釉は褐色で内外面に施釉。文様は内面口縁部に象嵌の蓮弁文か。	—	1層
	50	木土産陶器	圓鉢	備前系	底部	—	—	(14.3)	胎土は赤褐色で硬質。白色粒が混入。内面に6条1筋の部目を露す。	—	1層
	51	沖縄産無釉陶器	小碗	池田器類	底部	—	—	(4.0)	胎土は黄褐色で軟質。釉は外面に黒褐色釉を高台部まで施釉。内面に灰白色釉を施釉後、内底に目録跡。外底に墨書「西」の文字。	—	1層
	52	沖縄産無釉陶器	火取	—	底部	—	—	(6.7)	胎土は濃い褐色で軟質。白色粒が混入。釉は褐色で外面腹部まで施釉。底部と内面露出。外底に墨書あり。	—	1層
	53	沖縄産無釉陶器	蓋	—	胴-持部	底径 5.9	2.95	持径 4.2	54の蓋か。胎土は灰白色で硬質。釉は外面全面に透明釉を施釉。内面露出。	—	1層
	54	沖縄産無釉陶器	急須	—	口-底部	5.4	7.05	6.4	53の身か。胎土は灰白色で硬質。釉は透明釉を外面腹部まで施釉。内面に透明釉を全面に施釉後、口縁部露出。注口口の積敷部分に孔を2ヶ所穿つ。	—	1層
	55	初期沖縄産無釉陶器	費	—	口縁部	(28.0)	—	—	胎土は濃い赤褐色で硬質。石灰粒が混入。白土が混入になる。口縁部の一部と外面胴部に自然釉が塗られる。外面胴部に縄目状の突起を1条施す。	—	1層
	56	初期沖縄産無釉陶器	蓋	—	胴-持部	底径 (13.1)	—	持径 (9.4)	胎土は濃い赤褐色で硬質。黒色粒、赤色粒が混入。持部に自然釉が塗られる。	—	1層
第153図 図版13	57	沖縄産無釉陶器	費	—	口-底部	41.8	71.0	26.0	胎土は赤褐色でやや硬質。白色粒、赤色粒が混入。文様は外面胴部に2条の波線内に8条の波線。口文突起。かまぼこ状突起。内底中央部は一定方向にナツメ調整が施される。	—	1層
	58	沖縄産無釉陶器	鉢	—	—	—	—	—	胎土は明赤褐色でやや硬質。釉の部分に粗織した孔を穿つ。内面上部に直径約1.2cmの土球が貼まる。	—	1層
	59	石製品	小杯	—	口縁部	—	—	—	外面胴部に彫り出された蓮弁文か。内面に加工・調整時の線状痕が横位に走る。	—	1層
	60	石製品	石盤	—	—	縦径存 (11.2)	横径存 (8.65)	厚さ 0.45	黒色板状岩質。表面共に丁寧に磨かれ、端部は厚さが薄くなる。	—	1層

第26表 IV区出土遺物観察一覧 c

発掘番号 調査番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第153回 調査13	61	石製品	硯	—	ほぼ完形	縦 9.0	横 4.13	厚さ 1.3	黄緑色頁岩製。小型の長方形。基部・縁に褐色の朱墨のようなものが付着。裏面は上部に「阿」の捺刷。その下から隅丸方形に窪む。		1層
	62	石製品	硯	—	ほぼ完形	縦 13.35	横 7.4	厚さ 2.3	黒色粘板岩製。長方形で縁の殆どが欠損している。裏面は平直で上下左右の縁に直線の捺刷し、右上に「二改正」と書き記す。		1層
	63	石製品	硯	—	ほぼ完形	縦 14.8	横 7.3	厚さ 2.0	赤色頁岩製。長方形。裏面は隅丸方形に深く凹み、その中央に「赤蘭関？」の捺刷あり。		1層
	64	貝製品	貝窓	—	破片	—	—	—	マドガイの縁辺部。貝窓材を切り取った際の加工痕が1辺残存。		1層
	65	円盤状製品	—	—	—	縦 1.85	横 2.0	厚さ 0.3	陶質土器を加工。内外面から打削。		1層
	66	円盤状製品	—	—	—	縦 1.9	横 1.8	厚さ 0.4	陶質土器を加工。内外面から打削。		1層
第154回 調査14	67	円盤状製品	—	—	—	縦 2.4	横 2.4	厚さ 0.45	中国産青花の碗の胴部を加工。内外面から打削。		1層
	68	円盤状製品	—	—	—	縦 5.75	横 5.65	厚さ 2.05	中国産青磁の碗の底部を加工。元あったひび割れを利用して打削。周縁部分は研磨される。		1層
	69	金属製品	簪	—	カブヘ平	縦残存 (5.5)	横 0.35	厚さ 0.2	平本体の断面が六角形。		1層
	70	銭貨	—	(古)寛永通寶	—	外径 2.4	孔径 0.45	厚さ 0.1	寛口通寶。古寛永(1期:1636年)。「寛」の文字の左右に小孔あり。		1層
71	明細系瓦(赤色)	丸瓦	—	玉縁部	—	—	—	筒部上部に5mmの孔を穿ち、その周囲に捺刷が見える。		1層	
72	埴瓦	—	IV類	—	縦残存 (16.4)	横残存 (14.3)	厚さ 4.25	表面は灰色。胎土中央部にはふいば色を呈す。表面は滑面になるが、僅かに凹凸。製作時のものか弧状の捺刷がある。底面は平しい。		1層	
第155回 調査14	73	中国産青磁	小碗	—	底部	—	—	(3.6)	胎土は灰白色でやや堅緻。輪はオリーブ灰色で内外面に施軸後。外縁輪削ぎ。文様は内外面胴部にへっ抜きによる蓮花文か。		II7層
	74	中国産白磁	小碗	徳化窯系	口~底部	(9.4)	4.25	(4.8)	胎土は白色で堅緻。輪は透明釉を内外面に施軸後、口唇部輪削ぎ。型成形時の粘土シワあり。		II7層
	75	中国産青花	碗	徳化窯系	口縁部	—	—	—	胎土は白色でやや堅緻。輪は明緑灰色で内外面施軸。文様は外面に人物文。		II7層
	76	中国産青花	皿	徳化窯系	口縁部	(14.6)	—	—	胎土は白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面施軸。文様は内面に火災足株文。		II7層
	77	中国産青花	小杯	徳化窯系	底部	—	—	2.35	胎土は灰白色でやや堅緻。輪は明緑灰色で内面と外面骨付まで施軸後。骨付輪削ぎ。外縁輪削ぎ。文様は外面に不明文様。内底面内に黄魚文。		II7層
	78	本土産陶器	碗	陶器興 瓦期	底部	—	—	(4.0)	胎土は灰白色で堅緻。輪は外面胴部に黒線軸。内面全面に灰黄色釉を施軸。外面底部露胎。		II7層
	79	沖繩産施軸陶器	碗	池田II類	口~底部	(13.1)	7.3	(6.8)	胎土は淡黄色で堅緻。輪は灰オリーブ色で内外面の口縁部から胴部縁部まで施軸。内底、底部露胎。		II7層
	80	沖繩産施軸陶器	鉢	—	口縁部	(11.4)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。輪は灰白色で内外面に施軸後。口唇部から口縁内面に施軸露胎。		II7層
	81	沖繩産施軸陶器	香炉	—	底部	—	—	(13.0)	胎土は灰白色で堅緻。輪は灰白色で内外面に施軸。器の上面が露胎。底面に器が1本残存しており元は3本あったと思われる。全面に彫かな貫入が見られる。		II7層
	82	沖繩産施軸陶器	火鉢	—	口縁部	(11.8)	—	—	胎土は淡黄色で堅緻。白色粒が混入。輪は褐色で外面口縁から胴部に施軸。内面露胎。外面胴部に藍色の区画文。袴部に刺火土付着。		II7層
83	沖繩産施軸陶器	蓋	—	縁~袴部	底径 (9.1)	3.6	持径 (6.2)	胎土は黄褐色で軟質。輪は全面白化粧後。透明釉を外面底面まで施軸。文様は外面胴部に淡緑色の区画文。袴部に刺火土付着。		II7層	
84	初期沖繩産 無軸陶器	灯明皿	—	口縁部	(8.6)	—	—	胎土は褐色やや堅緻。白色粒が混入。外面胴部にクズリ調整刷。口縁部に厚付着。		II7層	
85	瓦質土器	台	—	底部	—	—	—	胎土は明褐色で軟質。石英粒、赤色粒が混入。上面、側面、底面に種子の圧痕あり。		II7層	
86	円盤状製品	—	—	—	縦残存 (3.7)	横 5.6	厚さ 0.9	中国産青花の皿の底部を加工。内外面から打削。		II7層	
87	樽管	吸口	陶口II類	完形	—	—	—	沖繩産施軸陶器製。胎土は灰白色で堅緻。輪は透明釉を全面に施軸。長さ3.1cm、吸口外径0.85cm、内径0.3cm、小口外径1.45cm、内径1.05cm。		II7層	
88	鉄製品	刀子	—	—	縦残存 (2.2)	横残存 (5.0)	厚さ 1.0	刀子の中央部。両面から研がれ刃部を成形。全面錆に覆われる。		II7層	
第156回 調査14	89	中国産施軸陶器	器鉢	—	底部	—	—	(9.3)	胎土はふいば色でやや堅緻。石英粒が混入。外面胴部から底部、内面に露胎。内面に10条1筋の区画文を施す。		II8層
	90	金属製品	糸巻き	—	完形	縦 4.05	横 0.6	厚さ 0.2	軸部の先端が刃状に成形。		III10層

◎銭貨:欠損している部分の銭文は□で示した。

第27表 IV区出土遺物観察一覧 d

発掘番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(m)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第156図 図版14	91	鉄貨	—	(新)寛永通寶	—	外径 2.5	孔径 0.4	厚さ 0.25	2枚重なる。ともに新寛永(3期:1697年)。	III	10層
	92	鉄貨	—	宣和通寶	—	外径 2.8	孔径 0.6	厚さ 0.18	宣和通寶(初編1119年)。背面無文。	III	10層
	93	中国産青花	碗	福建系	底部	—	—	(6.0)	胎土は灰白色で堅緻。藍色粒が混入。釉は明緑灰色で貫付釉面。文様は内底に不明文様。貫付に砂状物。貫入あり。	III	10a層
	94	中国産青花	鉢	—	口縁部	(5.8)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。文様はペンシルドローイングで外面に松文と草文。	III	10a層
	95	中国産陶磁器	壺	—	口縁部	—	—	—	胎土は淡黄色でやや堅緻。白色粒が混入。釉は褐色で外面口縁部、内面に施釉。注ぎ口あり。	III	10a層
	96	本土産陶器	皿	陶器ⅢⅠ期	口縁部	(37.4)	—	—	胎土は灰褐色で軟質。白色粒が混入。釉は褐色で内外面に施釉。文様は内面口縁部に白土の線飾と研毛模様。	III	10a層
	97	本土産陶器	皿	陶器ⅢⅣ期	底部	—	—	(6.6)	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑灰色を外面施釉。内面全面に施釉後、内底の目録跡。高台から外底露出。	III	10a層
	98	本土産陶器	皿	陶器ⅢⅠ期	底部	—	—	(4.1)	胎土は淡黄色でやや軟質。白色粒と黒色粒が混入。釉は灰白色で外面は高台部まで。内面は全面施釉。貫付から外底露出。文様は内底に浮彫による不明文様。	III	10a層
	99	沖繩産陶磁器	火取	—	口～底部	(10.8)	8.4	(7.0)	胎土は淡黄色でやや軟質。釉は褐色で口縁内側から外面部まで施釉。文様は外面部に丸形の蓮文か。外面部に磨痕あり。	III	10a層
100	沖繩産陶磁器	灯明皿	—	口～底部	(9.9)	2.0	(5.0)	胎土は褐色で軟質。白色粒と赤色粒が混入。外底部にへらによる線痕あり。口縁部に傷付着。	III	10a層	
101	宮古式土器	壺	—	口縁部	—	—	—	胎土に白色粒、赤色粒が混入。内外面部に磨痕。内面胴部にナメ調整痕あり。	III	10a層	
102	貝製品	碁石	—	ほぼ方形	縦 2.2	横 2.2	厚さ 0.4	貝製の碁石。全面磨かれ光沢を持つ。	III	10a層	
103	明陶系瓦(灰色)	平瓦	—	筒部	—	—	—	凸面に、圓錐に「大」の字とその下に「二」字を重ねたタイプの彫印を施す。	III	10a層	
104	沖繩産陶磁器	磁鉢	—	口～底部	(10.3)	4.0	(3.4)	小型の磁鉢。胎土は灰白色で堅緻。内面に4葉1組の蓮目模様を施す。	III	10a1層	
105	初期沖繩産陶磁器	磁鉢	—	底部	—	—	(9.6)	胎土は灰褐色で堅緻。石灰粒と赤色粒が混入。白土が凝状になる。釉は外面胴部に施釉を施し、一部自然釉が掛かる。内面に蓮目模様を施す。外面胴部に雲母の粒が混入。	III	10a3層	
106	初期沖繩産陶磁器	壺	—	口縁部	(16.0)	—	—	胎土は灰褐色で堅緻。石灰粒が混入。釉は内外面に自然釉が掛かる。口縁部は外へ張り出た後、内側に折り返して成形。	III	10a7層	
107	本土産陶器	碗	関西系	口～底部	(13.6)	4.7	(4.6)	胎土は灰白色でやや軟質。釉は淡黄色で内面から外面部まで施釉。底部露出。全面に細かな貫入がみられる。	III	10b層	
108	瓦質土器	鉢	—	底部	—	—	—	胎土は灰色で軟質。石灰粒と雲母が混入。内外面の器面は黒褐色を呈する。	III	10b層	
109	貝製品	碁石	—	定形	縦 2.15	横 2.15	厚さ 0.45	貝製の碁石。全面磨かれ光沢を持つ。	III	11層	
110	中国産青磁	蓋	—	胴～持部	—	—	持径 (14.6)	酒会帯の蓋。胎土は灰白色で堅緻。釉はオリーブ灰色で外面に厚く施釉。文様は外面にへら掻きによる磨痕。	III	11b層	
111	本土産染付	皿	磁器ⅢⅠ期	口縁部	(42.2)	—	—	美善手風。胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は内面に区画と草文。外面に不明文様。	III	11b層	
112	初期沖繩産陶磁器	碗	—	口縁部	(13.4)	—	—	胎土は灰褐色で堅緻。白色粒が混入。内外面に自然釉が掛かる。	III	11b層	
113	陶質土器	火鉢	—	口縁部	—	胴径 (18.5)	—	胎土は褐色で軟質。雲母と赤色粒が混入。口縁部に傷付着。内面胴部に種子型の仕掛け。	III	11b層	
114	石製品	碁石	—	破片	縦残存 (2.4)	横残存 (4.8)	厚さ 2.95 4.05	砂岩製。残存する4面に研磨痕あり。	III	11b層	
115	中国産色絵	水盂	—	—	—	—	—	鳥形の水盂か。胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を外面に施釉。内面露出。外面に線割で羽を描き、緑色の絵付。成形は上部と下部を合わせる。	III	11c層	
116	宮古式土器	壺	—	口縁部	(21.7)	—	—	胎土に白色粒、赤色粒が混入。内外面部に磨痕。内面にナメ調整痕あり。	III	11c層	
117	燈管	燭台	陶器ⅢⅠ期	—	—	—	—	外側産陶磁器製。胎土は灰褐色で堅緻。小口外径1.75cm、内径1.1cm。	III	11c層	
118	金属製品	飾り金具	—	定形	縦 (2.4)	横 3.05	厚さ 0.05	上面は丸れ面になるが八入。文様は鳥の字を裏に施し、毛彫りの草花文。鍍金が施される。2点の孔が穿たれる。裏面滑か。	III	11c層	
119	石製品	石像か	—	—	縦残存 (7.4)	横残存 (4.35)	厚さ (1.8)	砂岩製。表面に2条の沈線が施される。	III	11c層底	
120	金属製品	釘	—	定形	縦 2.9	径 0.25	頭部	0.5	内釘。頭部を一方へ折る。	III	11e層

第28表 IV区出土遺物観察一覧 e

検出番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置		
						口径	器高	底径		遺構	層序	
第159図 図版15	121	本土産陶器	皿	陶器Ⅷ Ⅷ類	口縁部	(37.6)	—	—	胎土は白〜黄褐色で軟質。白色粉が混入。釉は褐色で内外面に施釉。文様は内面口縁部に白土上の面線。	Ⅲ12層		
	122	沖繩産施釉陶器	鉢	—	口縁部	(20.5)	—	—	胎土は灰青色で堅緻。白色粉が混入。釉は外面胴部と内面口縁部に褐色釉。内面胴部に灰白色釉を施釉。内面口縁部を施釉せず。	Ⅲ12層		
	123	沖繩産施釉陶器	火取	—	底部	—	—	(9.8)	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で外面に施釉。外面底部と内面露胎。文様は外面胴部に黒文。外底に火薬による文字が。	Ⅲ12層		
	124	燈管	磁石	陶管Ⅰ類	—	—	—	高さ 2.5 3.4	—	明濁系瓦(灰色)を転用。火取と底面に埋付。火薬内径1.2cm、小口外径0.9cm。	Ⅲ12層	
	125	明濁系瓦(褐色)	軒平瓦	I-III-B	瓦当	—	—	—	—	形バリエーションあり。瓦当文様は全体的に厚薄する。瓦当裏はナデが丁寧。平瓦部凹面に瓦当と平瓦部の接合部境界が明確に見える。	Ⅲ12層	
第160図 図版15	126	中国産青磁	瓶	—	口縁部	(6.0)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉はオリーブ灰色で内外面に厚く施釉。文様は口唇部に鉄画文。	Ⅲ12a層		
	127	中国産青花	小杯	—	口縁部	(5.0)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面に梵字文。	Ⅲ12b層		
	128	銭貨	—	□式通寶	—	外径 2.2	—	厚さ 0.13	(4.3)	洪武通寶(初铸1368年)か。背面無文。	Ⅲ15d層	
	129	中国産白磁	皿	D群	底部	—	—	—	—	胎土は灰白色で軟質。釉は淡黄色で全面に施釉。持ち高台。	Ⅲ15e 2層	
	130	ベトナム産青花	瓶	—	胴部	—	—	—	—	胎土は灰白色でやや軟質。黒色粉が混入。釉は透明で外面白化粧後、内外面に施釉。文様は蓮弁文が。	Ⅲ15e 2層	
	131	中国産青磁	皿	V類	口縁部	—	—	—	—	胎土は灰白色でやや堅緻。釉はオリーブ灰色で内外面に厚く施釉。口縁内面及び唇部にヘラ掘りの磨き文。	Ⅲ20層	
	132	中国産青花	碗	D群 明II-2	口縁部	—	—	—	—	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は外面口縁部に淡青文。胴部にアラベスク文。景徳鎮窯系。	Ⅲ20層	
	133	鉄製品	釘	—	—	残存 (4.8)	最大径 0.8	最小径 0.55	—	角釘。頭部を一方へ折る。全面錆に覆われる。	Ⅲ20層	
	134	鉄製品	鎌	—	刃部	—	—	—	—	鎌の刃部。全面錆に覆われる。	層不明	
	図版22	135	本土産近代磁器	小碗	瀬戸・美濃系	口〜底部	8.6	3.85	3.3	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、覆付釉施す。文様は内外面に施釉。内底にハリ痕あり。口蓋。	1層	
136		本土産近代磁器	小碗	瀬戸・美濃系	口〜底部	8.8	3.7	3.2	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、覆付釉施す。文様は内外面に雲文。	1層		
137		本土産近代磁器	小碗	瀬戸・美濃系	口〜底部	8.7	3.6	2.6	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、覆付釉施す。文様はボム岡による染色体文。	1層		
138		本土産近代磁器	皿	瀬戸・美濃系	口〜底部	(10.6)	1.85	(6.6)	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、覆付釉施す。内面に空紙器の文様。	1層		
139		本土産近代磁器	杯	瀬戸・美濃系	口〜底部	6.4	4.35	3.0	胎土は白色で堅緻。釉は外面口縁部から高台までクロム釉を施釉。内面と外面高台内に透明釉を施釉。覆付釉施す。文様は外面胴部に松文。	1層		
140		本土産近代磁器	瓶	—	口縁部	—	—	—	—	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉。	1層	
141		本土産近代磁器	鉢	—	口〜底部	(11.4) (8.6)	6.2	11.4 8.6	—	蓋付きの鉢。胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、口縁内面及び覆付を施釉する。口唇部施す。外面胴部に刷毛転写による花文。	1層	
142		本土産近代磁器	鉢	瀬戸・美濃系	口〜底部	10.6	8.0	6.8	—	143の身。胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、口縁内面及び覆付を施す。外面胴部に刷毛転写による文様。	1層	
143		本土産近代磁器	蓋	瀬戸・美濃系	兜形	底径 11.0	3.0	持径 9.9	—	142の蓋。胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉後、唇部を施す。外面に刷毛転写による文様。	1層	
144		本土産近代磁器	急須	瀬戸・美濃系	口〜底部	7.1	6.7	6.5	—	胎土は白色で堅緻。釉はクロム釉が外面口縁部から胴部。透明釉が内面全面に施釉。口唇部施す。底部落胎。文様は外面胴部に松文。口口の接合部分に凡至10点穿す。	1層	
145	本土産近代磁器	急須	—	底部	—	—	—	6.5	胎土は白色で堅緻。釉は透明釉を内外面に施釉。底部落胎。外面胴部と把手に刷毛転写による文様。	1層		
146	沖繩産施釉陶器	壺	—	口縁部	(5.3)	—	—	—	油煮。胎土は明黄褐色でやや軟質。釉は黒褐色で内外面に施釉後、口唇部施す。	1層		
147	沖繩産施釉陶器	壺	—	底部	—	—	—	(11.4)	油煮。胎土は明黄褐色でやや軟質。釉は黒褐色で内外面に施釉。内底露胎。高台露胎。外底に砂付着。	1層		
148	沖繩産施釉陶器	鉢	—	口〜底部	(22.2)	10.0	(8.4)	—	胎土は黄褐色でやや軟質。釉は外面に褐色釉。内面は白化粧後に透明釉を施釉。内底の目録施す。覆付釉施す。内底と覆付に耐火土付着。	1層		
149	沖繩産施釉陶器	鉢	—	底部	—	—	—	(11.2)	胎土は黄褐色でやや軟質。釉は外面に褐色釉。内面は白化粧後に透明釉を施釉。内底の目録施す。覆付釉施す。内底に耐火土付着。	1層		
150	沖繩産施釉陶器	楕円鉢	—	口〜底部	—	—	—	—	胎土は黄褐色でやや軟質。白色粉が混入。釉は褐色で内外面に施釉。外底の一部を施す。底部に孔が2カ所穿たれており1カ所は膠泥により埋められる。	1層		

※銭貨：欠損している部分の銭文は□で示した。

※釘(鉄製品)：実測した部分の法量を記した。

第29表 IV区出土遺物観察一覧 f

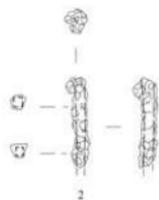
発掘番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(m)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
図版 22	151	沖繩産施釉陶器	鍋	—	口縁部	(13.6)	—	—	152の身。胎土は灰青色でやや軟質。釉は外面に灰オリーブ色釉を口縁から胴部まで施釉。内面は白化粧後に透明釉を施釉。口唇部釉割き。文様は外面に鉄絵と磁絵による松文。		1層
	152	沖繩産施釉陶器	蓋	—	胴～底部	底径 (13.2)	—	—	151の蓋。胎土は灰青色でやや軟質。釉は外面に灰オリーブ色釉を胴部に施釉。内面は白化粧後に透明釉を施釉。底部露胎。文様は外面胴部に鉄絵と磁絵による松文。		1層
	153	沖繩産施釉陶器	火取	—	口～底部	11.0	8.7	7.8	胎土は浅黄褐色でやや軟質。釉は全面白化粧後に外面全面透明釉を施釉。胴部と唇部釉割き。口唇部にコバルト釉を塗布。口縁部は灰落とし時の打割が見られる。		1層
	154	石製品	石筆	—	—	縦残存 (7.4)	—	厚さ 0.65	滑石?製。加工・調整時の線状痕が縦位に走る。両端部が丸みを帯びるように厚薄。		1層
	155	石製品	石筆	—	—	縦残存 (3.9)	—	厚さ 0.73	滑石?製。加工・調整時の線状痕が縦位に走る。片方の端部はほぼ一直線に裁断されている。		1層
	156	石製品	石筆	—	—	縦残存 (3.7)	—	厚さ 0.58	滑石?製。加工・調整時の線状痕が縦位に走る。		1層
図版 22	157	ガラス製品	瓶	薬瓶	底部	—	—	6.9	色調はコバルト色系。肩部はいかり肩で、胴部横断面円形。		1層
図版 22	158	本土産近代磁器	皿	瀬戸・美濃系	口～底部	10.8	2.1	6.4	胎土は白色で堅緻。釉は内面から外面高台までクロム釉を施釉。高台内に透明釉を施釉。唇部釉割き。文様は内底に鉄文。磁絵による物。		II 7層



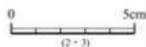
1



3



2



SA4003 裏込



(X線画像)



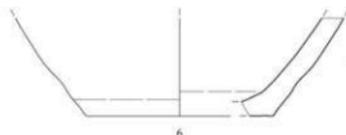
4



5



SD4001 1層



6



SD4002 層不明



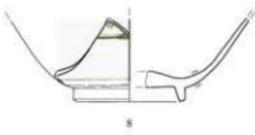
7

SK4002 2層

第148図 IV区の出土遺物1



8



8



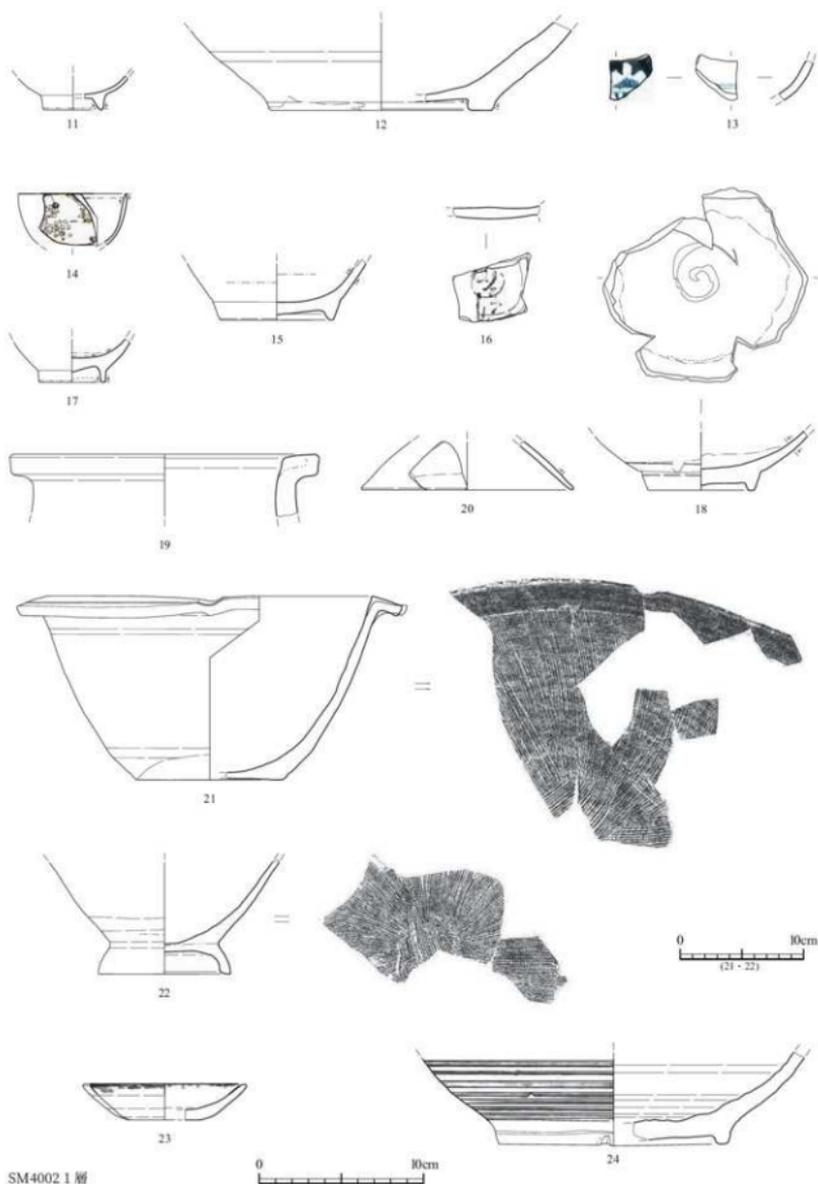
9



10

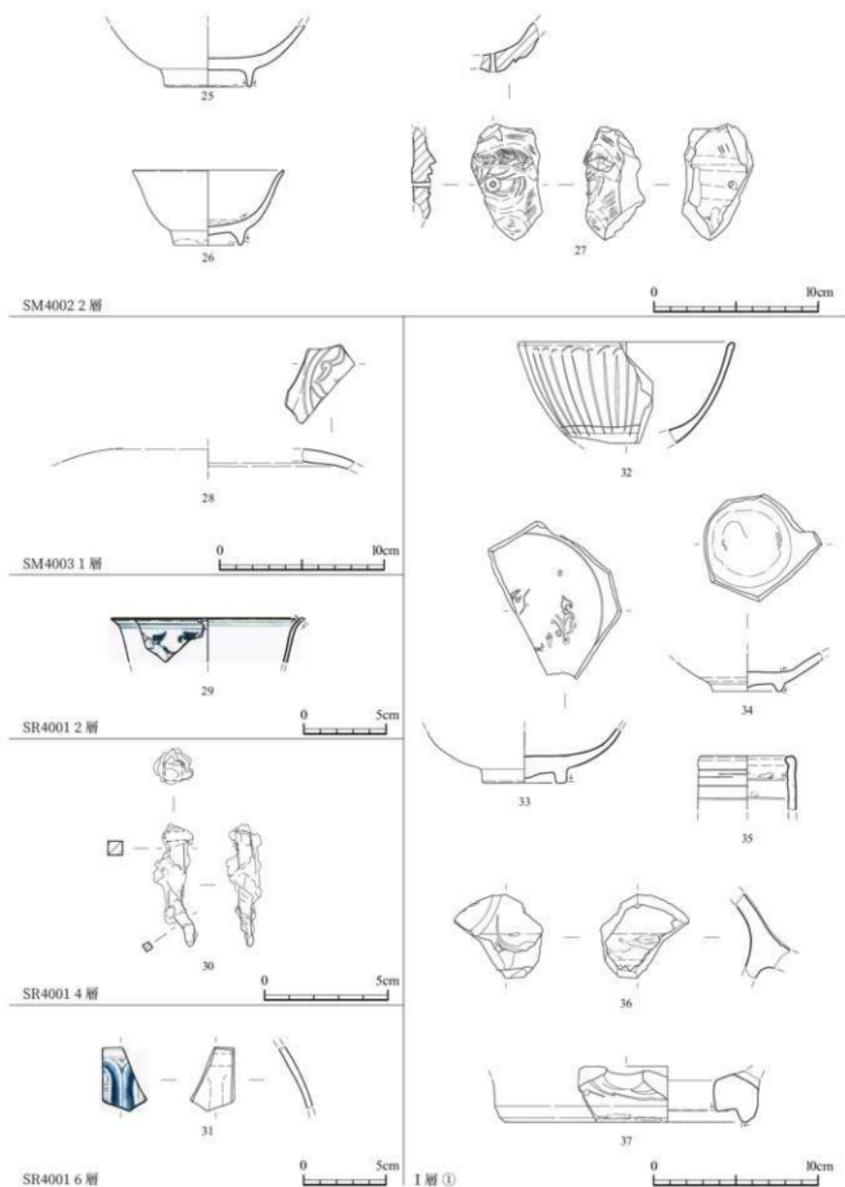


SK4007 層不明

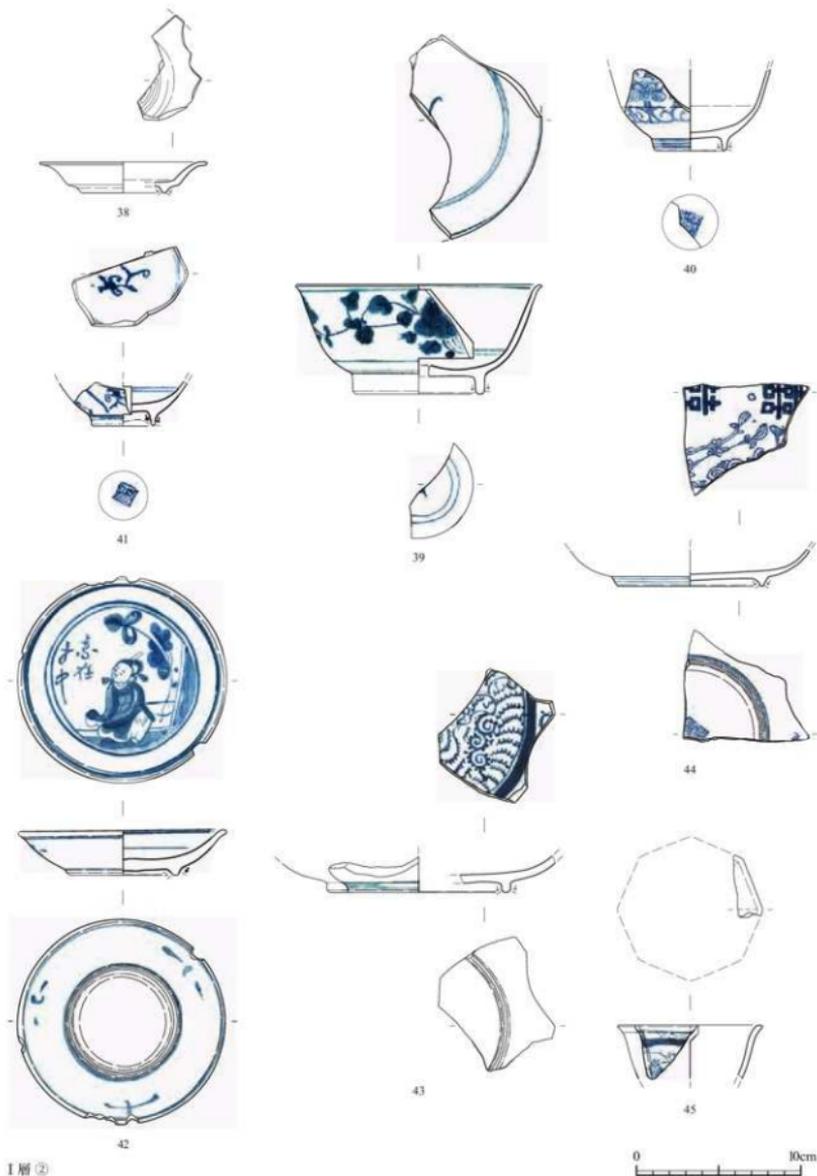


SM4002 1層

第149図 IV区の出土遺物2

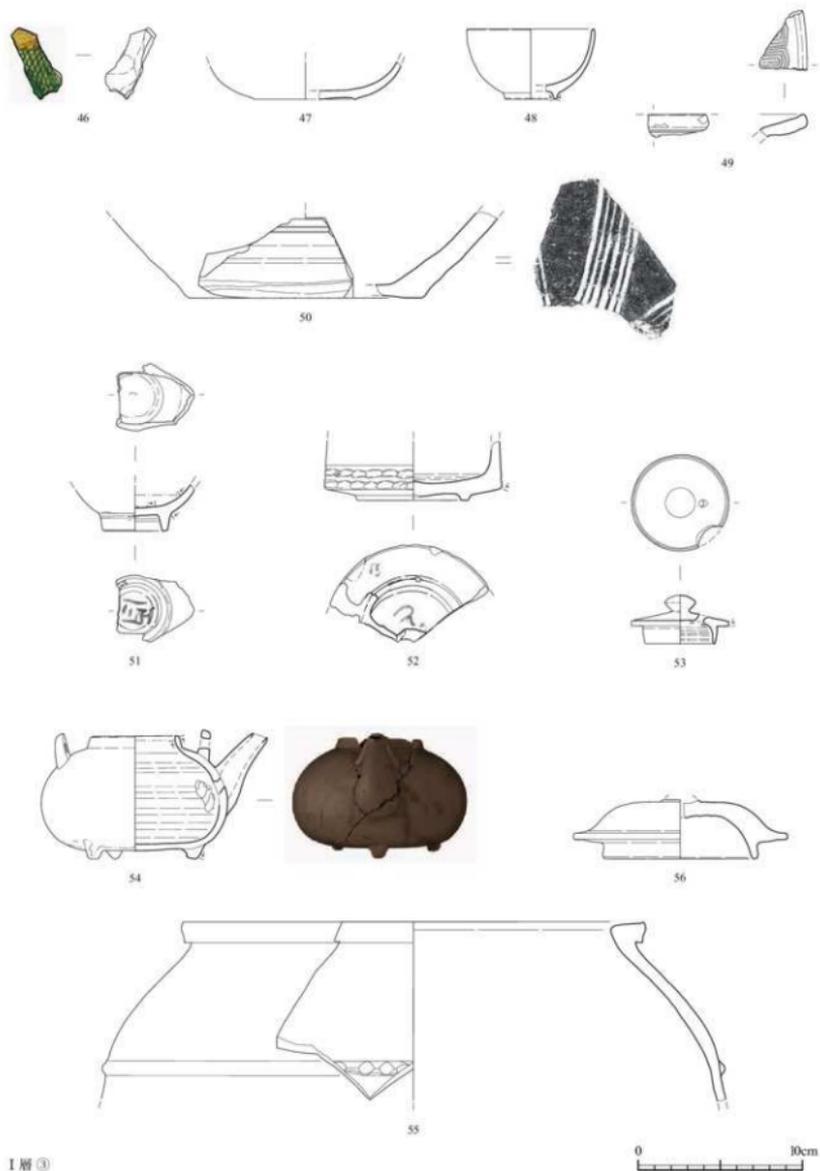


第150図 IV区の出土遺物3



I層②

第151図 IV区の出土遺物4

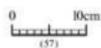


I層③

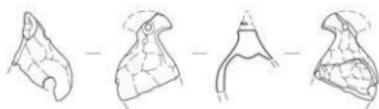
第152図 IV区の出土遺物5



57



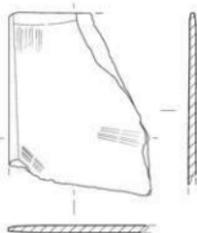
(57)



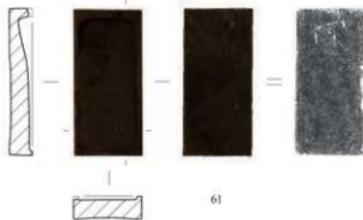
58



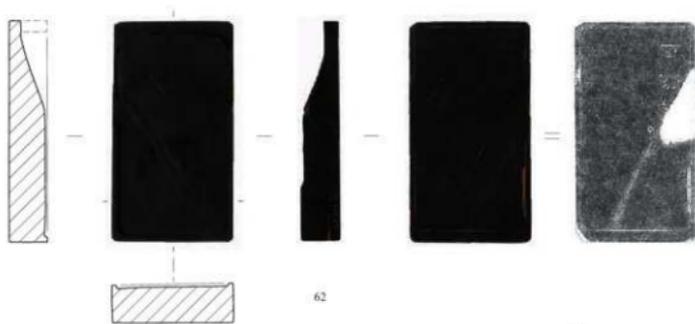
59



60



61

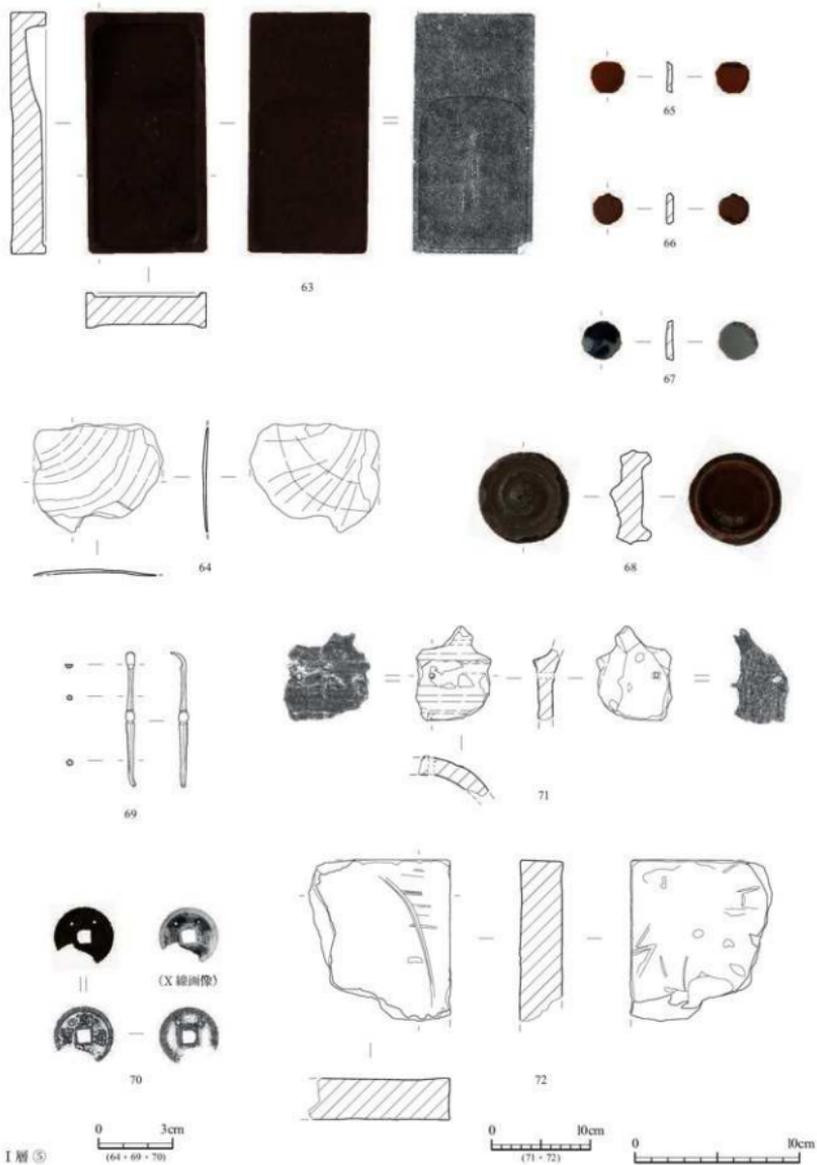


62

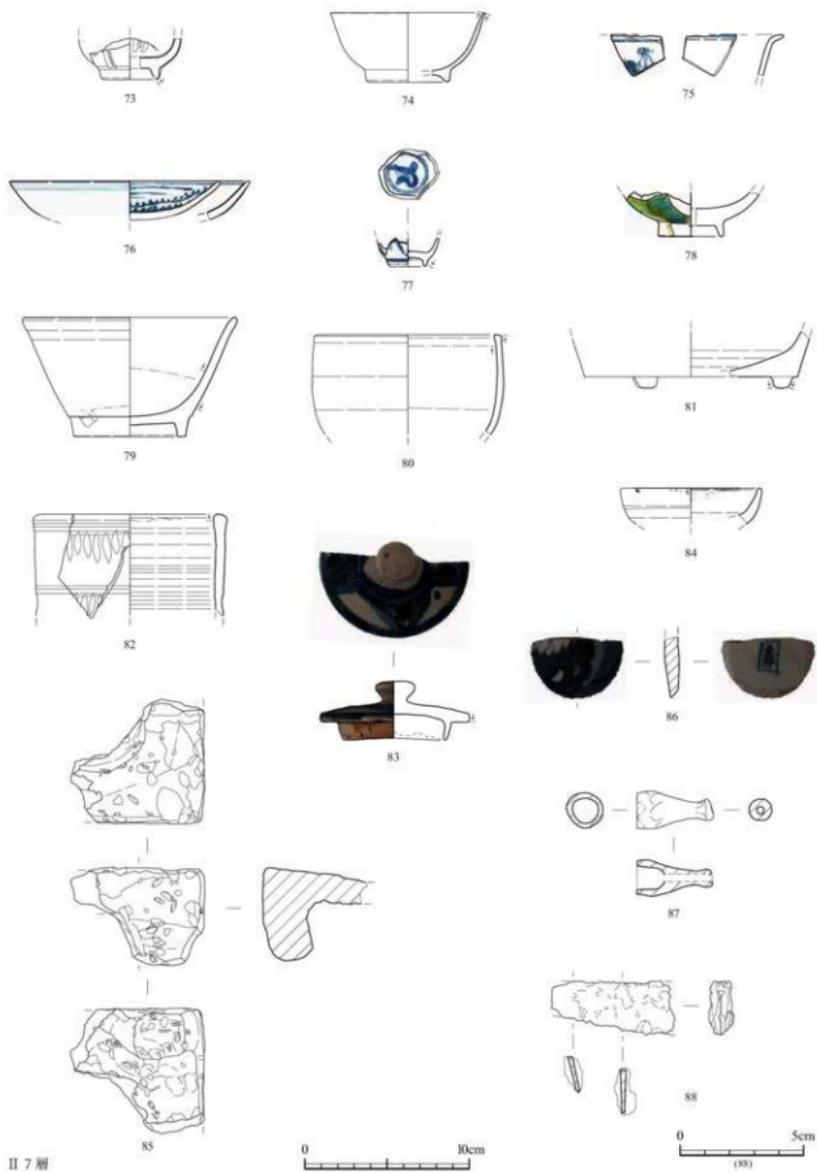
I層④



第153図 IV区の出土遺物6

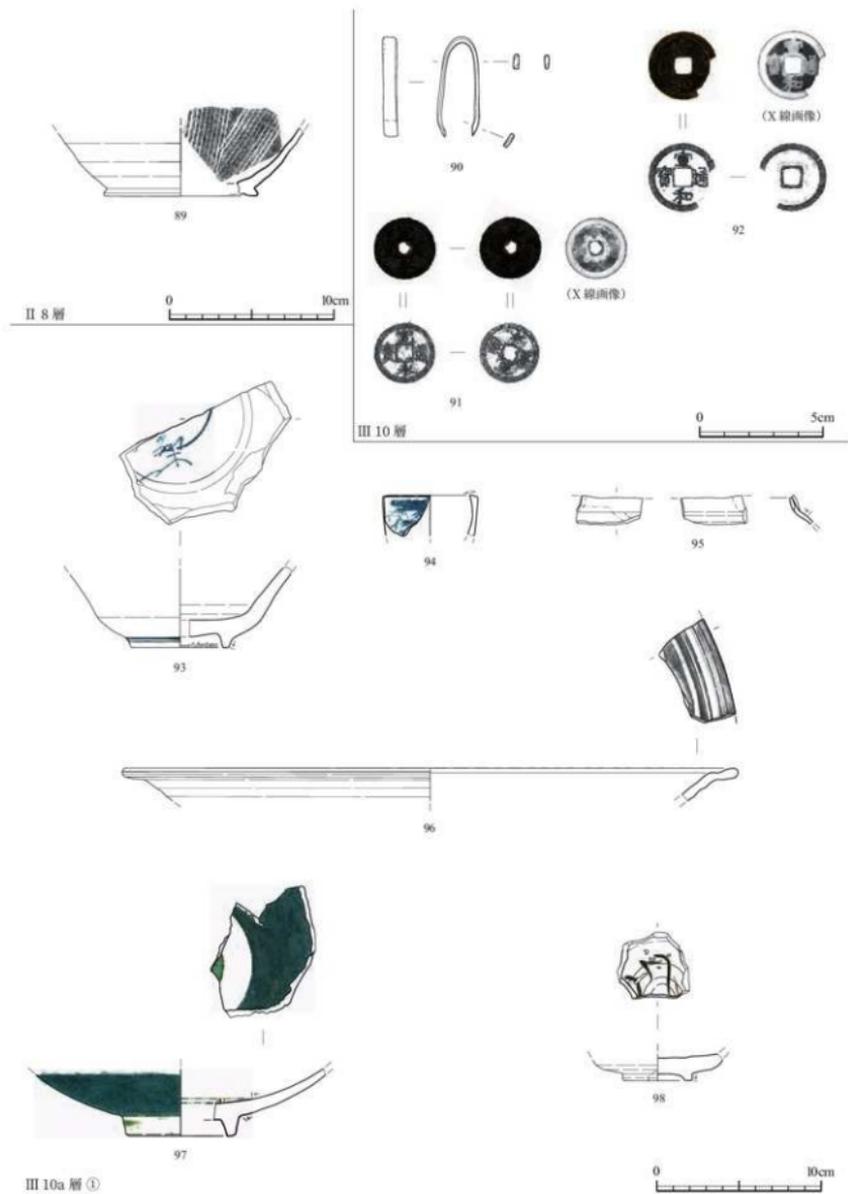


第154図 IV区の出土遺物7



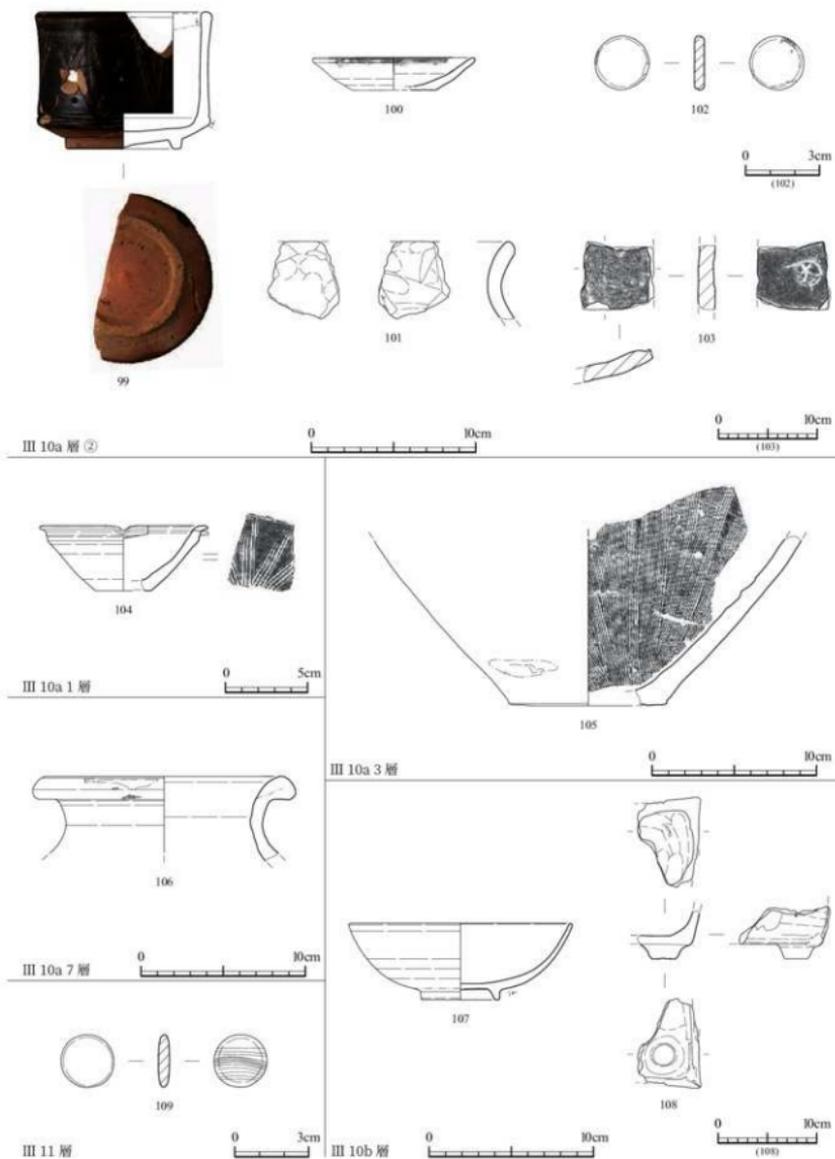
II 7 層

第155図 IV区の出土遺物8

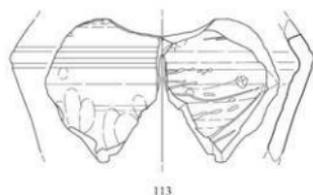
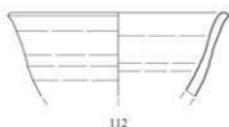
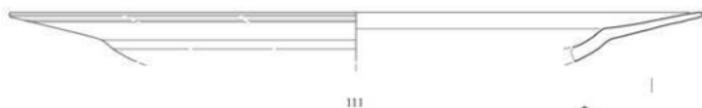


III 10a層①

第156図 IV区の出土遺物9



第 157 図 IV区の出土遺物 10



III 11b層



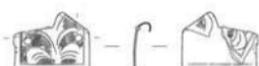
115



117



116



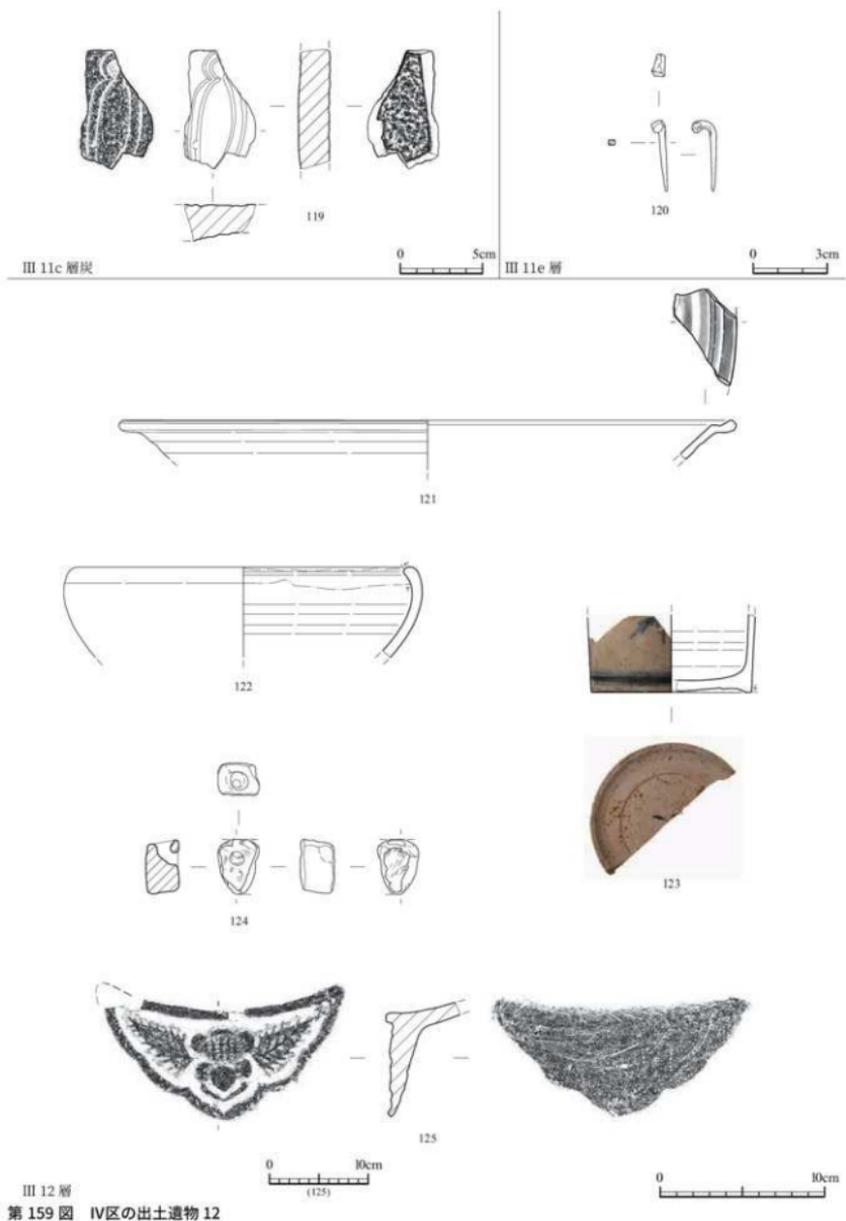
118

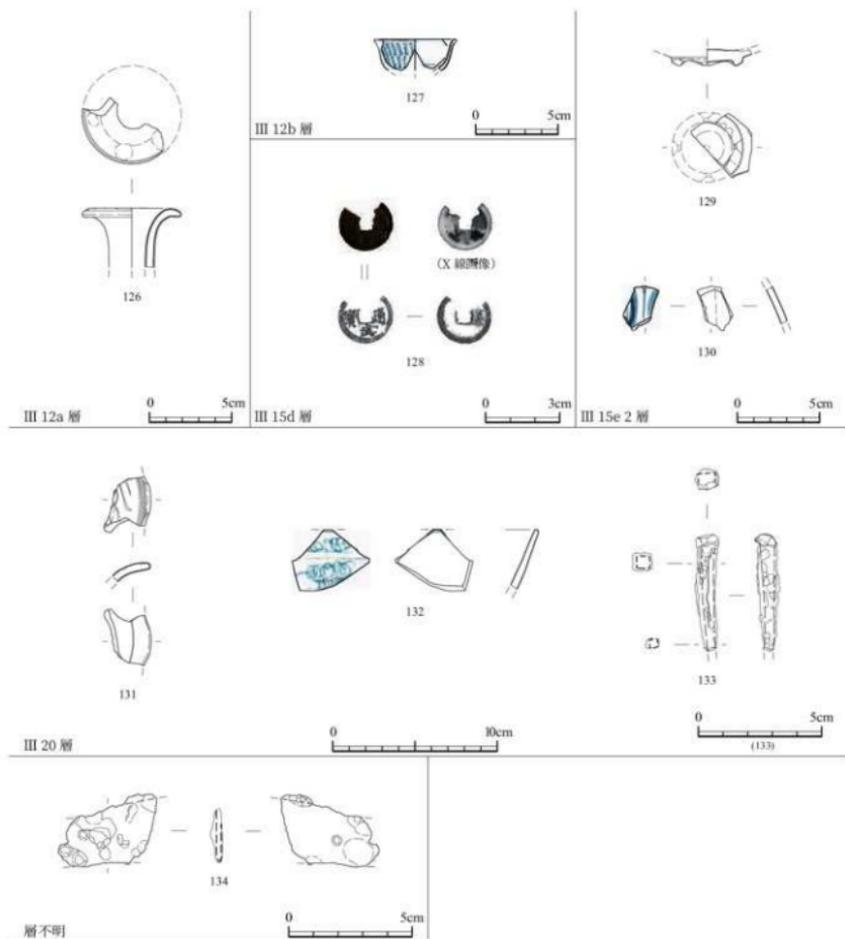
III 11c層



(115・118)

第158図 IV区の出土遺物11





第 160 図 IV区の出土遺物 13

第30表 V区出土遺物観察一覧 a

検出番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置		
						口径	高さ	底径		遺跡	層序	
第161図 図版15	1	中国産青花	皿	景德鎮窯系	口縁部	—	—	—	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。文様は内面口縁部に不明文様、外面口縁部に花文、ベンシンドローイング。	トレ6 SA5002		
	2	陶質土器	鈴	—	—	—	—	—	胎土は褐色で軟質。白色粒、黒色粒、雲母が見え、胴部中央から下位にかけて鈴口を持つ。	SA5002	1層	
	3	中国産白磁	人形	—	—	—	—	—	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で外面全面に施釉。人の顔が透らる。	SA5002	3層	
	4	中国産青花	碗	福建系	底部	—	—	(7.2)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。雲母を施す。文様は外面腹部にラマ式蓮華文、内底に草花文、外底に鉄斑あり。	SA5004	裏込焼出	
	5	沖繩産施釉陶器	小杯	—	口～底部	(5.0)	(2.55)	(2.2)	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は灰白色で外面口縁部から胴部まで、内面は全面に施釉。外面底面磨光。	SA5004	焼出	
	6	中国産色絵	小皿	徳化窯系	口縁部	(8.2)	—	—	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉。口縁部から内面口縁部を施す。文様は外面腹部に青色の草花文。	SA5005	南	クチャ層
	7	本土産染付	碗	磁器岡田期	口縁部	(12.0)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉。文様は外面腹部に山水文。	SA5005	南	クチャ層
	8	沖繩産施釉陶器	小皿	—	口～底部	(9.2)	4.65	3.8	胎土は灰黄色でやや軟質。釉は厚分で外面に施釉。内面は白化粧後に透明釉を施す。雲母を施す。内底に目輪あり。雲母と内底に耐火土上付着。	SA5005	南	クチャ層
	9	沖繩産施釉陶器	火鉢	—	口縁部	(13.8)	—	—	胎土は灰黄色で堅緻。釉は黄褐色で内外面に施釉。文様は外面腹部に垂珠の花文。	SA5005	南	クチャ層
	10	初期沖繩産 無釉陶器	壺	—	胴部	—	—	—	胎土はよい非褐色で堅緻。白色粒、赤色粒、石灰が見え、釉は外面に黒褐色の泥釉を施す。文様は胴部に沈線。	SA5005	南	クチャ層
11	初期沖繩産 無釉陶器	水鉢	—	口縁部	(14.0)	—	—	胎土はよい非褐色で堅緻。赤色粒が見え。外面口縁部から口縁部の一部に自然釉が掛かる。文様は3条1層の波状が2段施される。	SA5005	南	クチャ層	
12	初期沖繩産 無釉陶器	人形小	—	—	—	—	—	胎土は灰黄色で軟質。白色粒、石灰が見え。土上が粒状になる。釉は褐色で外面に施す。内面に調整痕あり。	SA5005	南	クチャ～ 裏込焼	
13	中国産施釉陶器	壺	—	底部	—	—	—	胎土は褐色でやや堅緻。黒色粒、石灰が見え。釉は褐色で内外面に施す。	トレ13 SF5001	造成 2・3		
14	中国産三彩	水皿	龍橋部	—	—	—	—	胎土は褐色でやや軟質。石灰が見え。釉は外面口縁部から縁部まで施す。花紋部分は黄色で一部緑色。内面は滑らかに調整痕あり。	トレ13 SF5001	造成 2・3		
15	明銅系瓦(灰色)	軒丸瓦	—	玉縁部	—	—	—	瓦当は欠損。大きめの玉縁で打孔あり。玉縁と両部端を面取。凸面両部上端に僅かに漆痕あり。	トレ13 SF5001	造成 2・3		
16	中国産白磁	碗	—	口～底部	(14.5)	4.25	(6.0)	胎土は灰白色でやや軟質。釉はオリーブ灰色で内外面の口縁部から胴部まで施す。外面底面と内底磨光。	トレ14 SF5001	造成 2		
17	中国産白磁	皿	王群	口～底部	(11.2)	2.2	(6.2)	胎土は灰白色でやや軟質。釉は灰白色で内外面に施釉。雲母を施す。雲母に砂を付着。	トレ14 SF5001	造成 2		
18	中国産青花	皿	C群 明日-2	口～底部	(10.0)	2.8	3.2	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で外面口縁部から胴部まで施す。外面腹部に波状文。文様は外面に波状文と葉文、内底に磨光された花文。	トレ14 SF5001	造成 2		
19	タイ産鉄絵	合子	—	蓋	(9.9)	—	—	胎土は灰色でやや軟質。白色粒、黒色粒が見え。釉は外面に透明釉を施す。底面を施す。外面に草花文。	トレ14 SF5001	造成 2		
20	石製品	香炉	—	底部	—	—	—	ヤング石製。長軸の側面は弧状になる。短軸の側面はほぼ直線に立ち上がる。外面に粒状。内面は平らで底が見られる。	トレ14 SF5001	造成 2		
21	磚瓦	—	IV期	—	—	—	厚さ 4.05	表面は滑面で、ヘラ掻きのある側面を合わせて明非褐色で塗す。裏面は粗く、胎土と同じく色調は褐色をなす。ヘラ掻きは間隔を置いて同じく塗すを2条。	トレ14 SF5001	造成 2		
22	中国産白磁	壺	—	底部	—	—	(5.9)	胎土はやや堅緻。釉は灰白色で内面と外面胴部まで施す。外面底面磨光。クワコ痕あり。	トレ14 SF5001	造成 2 戻		
23	タイ産鉄絵	合子	—	口縁部	(8.4)	—	—	合子の身。胎土は浅黄色で軟質。黒色粒が見え。釉は灰白色で外面と内面に施す。口縁部を施す。内面の一部が磨光。文様は外面に格子文と雲紋。	トレ14 SF5001	造成 2 戻		
24	土器	壺	—	口縁部	(13.4)	—	—	胎土は石灰質。白粉が見え。内面腹部に磨光調整。内外面口縁部に滑石。外面口縁部と胴部下半に煤着。パナマ磨き。	トレ14 SF5001	造成 2 戻		
25	中国産青磁	蓋	—	胴～持部	底径 (16.6)	—	持径 (14.4)	酒会酌の蓋。胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明オリーブ灰色で外面腹部に施す。	トレ14 SF5001	造成 2・3		
26	中国産白磁	灯明皿	D群	口～底部	(8.8)	2.25	(4.4)	胎土は浅黄色で軟質。釉は灰白色で内面から外面口縁部まで施す。外面腹部に磨光。内面は磨光。以下磨光。口縁部を施す。口縁部に煤着あり。	トレ14 SF5001	造成 2・3		
27	中国産色絵	皿	景德鎮窯系	口縁部	(13.0)	—	—	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施す。文様は内面腹部に唐字文、草花文。	トレ14 SF5001	造成 2・3		
28	中国産施釉陶器	部鉢	—	口縁部	—	—	—	胎土はよい非褐色でやや軟質。石灰が見え。釉は褐色で口縁部から外面に施す。内面腹部は磨光。内面に僅かに煤が掛る。	トレ14 SF5001	造成 2・3		
29	中国産白磁	皿	—	口縁部	(16.5)	—	—	胎土は浅黄色で軟質。黒色粒が見え。釉は灰白色で内外面に施す。口縁部を波状に成形。	トレ15 SF5001	造成 2・3		
30	中国産青花	碗	C群 明日-3	口縁部	(15.0)	—	—	胎土は灰白色でやや堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施す。先行西壁文様は外面に磨光。	先行西壁 SF5001	造成 SD5001		

第31表 V区出土遺物観察一覧 b

発掘区画 図記番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第164区 図記16	31	貝製品	貝玉	マナギガイ I類	—	縦 5.2	横 3.1	—	貝玉製作中の未製品。ほぼ完成。	トレ6 SL5001	検出
	32	産地不明土器	蓋	—	—	(22.3)	—	—	胎土は黄褐色で軟質、赤色粒が混入。内面に種子類の圧痕が。	トレ1 SM4502	1層
	33	貝製品	貝玉	マナギガイ II類	—	縦 2.05	横 2.7	—	貝玉製作中の未製品。体部跡に打割が見られ、磨輪上部を本平に加工。	トレ1 SM4502	3層
	34	中国産青磁	碗	V類	底部	—	—	(6.7)	胎土は灰白色で堅緻。輪はオリーブ灰色で内外面に厚く塗布。外底輪削ぎ。文様は内外面胴部にへら書きによる唐草文。内底に印文文。	トレ1 SP5038	1層
	35	貝製品	貝玉	マナギガイ IV類	—	縦 1.4	横 2.3	—	貝玉製作中の未製品。磨輪面と体部の打割面を水平方向に研磨。	トレ1 SS5002	1層
第165区 図記16	36	高麗系瓦	平瓦	—	筒部	—	—	—	凸面に「発四年高麗瓦匠造」と思われる銘を磨写して重なるように打割。跡の下に引状文。凹面には赤切筋と有目筋。断面に切込み面が残る。	トレ1 SX3004	1層
	37	円盤状製品	—	—	—	縦 7.2	横 7.1	厚さ 2.1	中国産青磁碗の底部を加工。内外面からの打割。	トレ1 SX3004	中底
	38	本土産近代磁器	皿	—	底部	—	—	(8.0)	胎土は白色で堅緻。輪は内外面に透明釉を施施。外底凹面以外を乾の自動削ぎ。文様は内面に雲龍図りによる文様。外底面に目形用凸台。	SX5005	
	39	骨製品	ボタン	—	完形	縦 1.5	横 1.5	厚さ 0.3	表面は平坦。裏面は凸面になる。全面磨きさらし光沢を持つ。中央部に5点の孔を穿つが、中心の孔は貫通していない。	トレ14 SX5007	1層
	40	中国産青磁	皿	V-0類	口~底部	(13.2)	3.7	(6.8)	胎土は灰白色と一部淡黄色と明褐色でやや軟質。白色粒が混入。輪はオリーブ灰色で内面と外底の一部まで厚く塗布。外底の中央は磨輪。		1層
	41	中国産青磁	盤	—	口~底部	(30.2)	5.5	(14.0)	胎土は灰白色で堅緻。輪はオリーブ灰色で内外面塗後、費付輪削ぎ。文様は外面に唐草文。内面は口縁部下に2条の波状文。胴部から内底にかけて唐花文。内面に唐草文。		1層
	42	中国産白磁	湯台	徳化窯系	底部	—	—	(3.4)	胎土は白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面に塗後、外底輪削ぎ。		1層
	43	中国産青花	皿	景徳鎮窯系	底部	—	—	—	胎土は灰白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面に塗後。文様は内面に山水文。		1層
	44	中国産青花	皿	B 1群 II-1	底部	—	—	(6.0)	胎土は白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面塗後、費付輪削ぎ。文様は外面に不明文様。内面に草花文か。景徳鎮窯系。		1層
	45	中国産青花	皿	徳化窯系	底部	—	—	(7.1)	胎土は白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面塗後、費付輪削ぎ。文様は内面に草花文と花卉文。外底に不明文様。		1層
第166区 図記17	46	中国産青花	文 五郎 皿類	底部	—	—	(5.4)	—	胎土は白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面塗後、費付輪削ぎ。文様は外面に不明文様。内面に鳳凰文と草花文か。外底に「官徳門口」の跡あり。「官徳年造」か。景徳鎮窯系。		1層
	47	中国産青花	杯	景徳鎮窯系	口縁部	(5.6)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面塗後。文様は外面に不明文様。		1層
	48	中国産青花	杯	—	口縁部	(5.4)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面塗後、口縁。文様は外面に山水文。		1層
	49	中国産青花	小杯	景徳鎮窯系	底部	—	—	(1.5)	胎土は灰白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面塗後されるが、劣化が見られる。文様は外面に唐草文と篆文。		1層
	50	中国産青花	瓶	景徳鎮窯系	口縁部	(6.0)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面塗後。文様は外面に唐草文。		1層
	51	中国産青花	瓶	景徳鎮窯系	胴部	—	—	—	胎土は白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面塗後。文様は外面に唐草文か。中段に双蓮文、下段に唐草文。		1層
	52	中国産青花	馬上杯	漳州窯系	底部	—	—	(3.7)	胎土は黄褐色で軟質。白色粒が混入。輪は明緑灰色で外面胴部塗後、費付から外底磨削。高台内面に一部輪が掛かる。文様は外面に不明文様。		1層
	53	中国産色絵	碗	徳化窯系	口縁部	(11.0)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面塗後。文様は外面に赤色で磨部を唐草文。胴部に淡青色と青色(又は面分)で描かれた胡蝶文。口縁部に唐草文。		1層
	54	中国産三彩	盤	—	口縁部	—	—	—	胎土は黄褐色で軟質。褐色粒と白色粒が混入。輪は緑釉で白化粧後に内外面塗後。		1層
	55	中国産陶輪陶器	壺	—	口縁部	(19.0)	—	—	胎土は白、黄褐色で軟質。黒褐色粒と白色粒が混入。輪は褐色で内外面塗後。口縁部は磨り付けにより平直。		1層
56	中国産陶輪陶器	壺	—	口縁部	(12.9)	—	—	胎土は赤褐色と一部赤色でやや堅緻。白色粒が多量に混入。輪は褐色で内外面塗後。		1層	
57	中国産陶輪陶器	壺	—	口縁部	(16.6)	—	—	胎土は明褐色でやや軟質。白色粒が混入。白土が筋状になる。磨輪。外面に格子状の叩き痕あり。		1層	
58	中国産陶輪陶器	壺	—	口縁部	(9.2)	—	—	胎土は黒褐色でやや軟質。白色粒が混入。輪は褐色で外面と内面口縁部まで塗後。内面胴部は磨輪。		1層	
59	中国産陶輪陶器	壺	—	口縁部	(10.4)	—	—	胎土は灰白色でやや軟質。白色粒が混入。輪は褐色で外面と内面口縁部まで塗後。内面胴部は磨輪。		1層	
60	中国産陶輪陶器	壺	—	底部	—	—	(14.5)	胎土は灰白色と一部褐色でやや堅緻。白色粒と黒色粒が混入。輪は褐色で内面と外面胴部まで塗後。外底磨削。		1層	

※46：欠損している部分の文様は□で示した。

第32表 V区出土遺物観察一覧c

検出番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(m)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第166図 図版17	61	タイ産平縁土器	蓋	—	縁	—	3.85	—	胎土は黒灰色と一部灰白色と浅黄褐色で軟質。白色粒と黒色粒が混入。		1層
	62	西洋陶器	皿	—	底部	—	—	—	胎土は白色で堅緻。胎は透明で内外面施釉。外底に星のマークと「Super」の文字。		1層
	63	本土産染付	皿	細器ⅢV期	口〜底部	(15.2)	4.0	(8.8)	胎土は灰白色でやや軟質。胎は灰白色で内外面施釉。文様は外面に唐草文、内面は区画と山文。		1層
	64	本土産色絵	碗	Ⅲ期	口縁部	(9.0)	—	—	胎土は灰白色でやや軟質。胎は透明で内外面施釉。文様は外面に口縁部と胴部に銅緑絵で太い線。胴部内は銅緑絵と赤色の不明文様。		1層
第167図 図版17	65	本土産陶器	碗	陶器ⅢⅣ期	口縁部	(11.0)	—	—	胎土は浅黄色でやや軟質。黒色粒が混入。胎は外面に銅緑絵、内面に灰白色釉を施す。		1層
	66	本土産陶器	碗	陶器ⅢⅣ期	底部	—	—	(4.4)	胎土は灰白色でやや堅緻。胎は白色で内外面施釉。費付に砂付着。		1層
	67	本土産陶器	碗	陶器ⅢⅣ期	底部	—	—	(4.2)	胎土は灰白色でやや軟質。褐色粒と黒色粒が混入。胎は外面に銅緑絵を高台途中まで施釉。内面に灰白色釉を施す。底面露胎。		1層
	68	本土産陶器	碗	陶器ⅢⅣ期	底部	—	—	(3.4)	胎土は灰白色でやや軟質。胎は透明で内面と外面側面まで施釉。底面露胎。貫入あり。		1層
	69	本土産陶器	皿	陶器ⅢⅣ〜Ⅴ期	底部	—	—	(12.7)	胎土は赤灰色でやや軟質。黒色粒が混入。胎は外面に白っぽい赤褐色。内面に透明と緑黄色を施す。底面露胎。文様は内面に白土で4葉の蓮輪と縦目文、鉄粒の草花文。		1層
	70	本土産陶器	鉢	慶應系	口縁部	(32.0)	—	—	胎土は暗赤灰色と赤色で、白色粒と明褐色粒が混入。胎は黒色で内外面施釉。口唇部目録あり。		1層
	71	本土産陶器	磁鉢	備前系	口縁部	(26.8)	—	—	胎土は白っぽい赤褐色でやや堅緻。白色粒が混入。		1層
	72	沖縄産施釉陶器	碗	—	口〜底部	(13.8)	6.7	(6.8)	胎土は浅黄褐色でやや軟質。白色粒と黒色粒が混入。胎は全面白化粧後、透明釉を施釉。費付輪跡。内底乾の目録跡。外底の輪跡が欠けが混入。文様は外面に草花文。		1層
	73	沖縄産施釉陶器	碗	池田I類	底部	—	—	(6.7)	胎土は灰白色で堅緻。黒色粒が混入。胎は明オリブ色で内外面側面まで施釉。内底と底面露胎。内底と外底に砂付着。		1層
	74	沖縄産施釉陶器	小碗	—	口〜底部	(8.5)	4.45	(3.9)	胎土は白っぽい黄褐色でやや軟質。白色粒と黒色粒が混入。胎は底を除く全面に白化粧後、透明釉を施釉。費付輪跡。内底乾の目録跡。貫入あり。		1層
	75	沖縄産施釉陶器	小碗	—	底部	—	—	(4.0)	胎土は黒灰色と一部浅黄褐色でやや軟質。黒色粒が混入。胎は全面白化粧後、透明釉を施釉。費付輪跡。外面露胎。内底乾の目録跡。貫入あり。		1層
	76	沖縄産施釉陶器	皿	—	口縁部	(13.2)	—	—	胎土は灰白色で一部浅黄色でやや軟質。黒色粒が混入。胎はオリブ灰色で内外面ともに胴部途中まで施釉。		1層
	77	沖縄産施釉陶器	小杯	—	口〜底部	(4.8)	2.6	2.2	胎土は灰白色で堅緻。黒色粒が混入。胎は透明釉を内面と外面高台まで施釉。高台の一部と底面露胎。		1層
	78	沖縄産施釉陶器	盃	—	底部	(2.7)	—	—	胎土は灰白色と一部黄褐色でやや軟質。黒色粒が混入。胎は灰白色で内面に施釉。外面露胎。		1層
	79	沖縄産施釉陶器	瓶	—	口縁部	(3.4)	—	—	胎土は灰赤色でやや軟質。白色粒と黒色粒が混入。胎は口縁内側から外面側面に黒褐色。胴部からオリブ褐色の釉を施す。内面露胎。		1層
80	沖縄産施釉陶器	鉢	—	底部	—	—	(8.3)	胎土は灰白色でやや軟質。白色粒と黒色粒が混入。胎は内面に白化粧後に灰白色釉を。外面は黒褐色釉を施釉。費付輪跡。内底乾の目録跡あり。内底に赤い斑の痕あり。		1層	
81	沖縄産施釉陶器	火取	—	底部	—	—	(7.9)	胎土は浅黄褐色で堅緻。黒色粒が混入。胎は褐色で浅緑色を引いた外面側面まで施釉。底面と内面露胎。内底に外面に刻線文。外底に墨書あり。		1層	
82	沖縄産施釉陶器	灯明具	—	底部	—	—	(6.1)	胎土は白っぽい褐色でやや軟質。白色粒が混入。胎は灰オリブ色で内面と外面側面途中まで施釉。外底露胎。内底に目録あり。		1層	
第168図 図版17	83	初期沖縄産 黒釉陶器	瓶	—	底部	—	—	—	胎土は暗赤褐色で堅緻。浅黄褐色粒と白色粒が混入。胎は黒褐色で外面と内面の一部に塗かる。		1層
	84	初期沖縄産 黒釉陶器	磁鉢	—	口縁部	(26.8)	—	—	胎土は暗赤褐色で堅緻。白色粒が混入。胎は暗赤色で外面に塗かる。口縁成形。		1層
	85	初期沖縄産 黒釉陶器	水鉢	—	口縁部	(23.0)	—	—	胎土は赤褐色で堅緻。白色粒が混入。胎は自然釉が外面に塗かる。文様は外面側面に2〜4葉1組の蓮文。		1層
	86	初期沖縄産 黒釉陶器	甕	—	口縁部	—	—	—	胎土は白っぽい赤褐色で堅緻。白色粒、赤色粒が混入。胎は内外面に自然釉を施す。文様は外面口縁部に波状変形。胴部に縦目状変形文。		1層
	87	初期沖縄産 黒釉陶器	香炉	—	底部	—	—	—	胎土は灰赤と赤褐色でやや堅緻。白色粒が混入。白土が暗状になる。胎は浅黄色で外面施釉。脚を成形する際の芯と厚みのある部分。割れにより内底と胴部面が確認できる。		1層
	88	初期沖縄産 黒釉陶器	香炉	—	底部	—	—	(11.4)	胎土は暗赤褐色でやや軟質。白色粒が混入。脚の付け根に顕著なナメ調整あり。口縁成形。		1層
	89	初期沖縄産 黒釉陶器	灯明皿	—	口〜底部	(10.2)	3.05	(3.9)	胎土は白っぽい赤褐色で堅緻。白色粒、赤色粒が混入。胎は外面側面の一部に自然釉が塗かる。		1層
90	沖縄産黒釉陶器	甕	—	口縁部	(21.9)	—	—	胎土は白っぽい赤褐色で堅緻。黒色粒が混入。胎は外面口縁部が胴部の一部に自然釉が塗かる。		1層	

第33表 V区出土遺物観察一覧 d

検出番号 採取番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	高さ	底径		遺跡	層序
第169回 採取17	91	沖繩産無釉陶器	鉢鉢	—	口縁部	(26.0)	—	—	胎土は赤色でやや軟質、白色粒が混入。掻目を密に施す。		I層
	92	沖繩産無釉陶器	水鉢	—	口縁部	(26.4)	—	—	胎土は赤褐色でやや軟質、白色粒が混入。輪はにぶい赤褐色で外面胴部途中まで磨かる。文様は口縁部に8〜9条組の波状文。		I層
	93	沖繩産無釉陶器	甕	—	口縁部	(47.0)	—	—	胎土は赤褐色と一部赤褐色と黒褐色でやや軟質、白色粒が混入。自然釉が内面の一部に磨かる。文様は外面胴部に不明文様。		I層
	94	陶質土器	水鉢	—	口縁部	(14.8)	—	—	胎土は灰色と一部褐色でやや軟質、白色粒を混入。文様は胴部に4〜6条1組の波状文。		I層
	95	陶質土器	甕	—	口縁部	(25.0)	—	—	胎土はにぶい褐色で軟質、雲母、赤色粒が混入。外面口縁部に覆付着。		I層
	96	石製品	器種不明	—	—	縦 5.15	横 4.35	厚さ 3.0	孔は自然にできたものだが、孔の周りは人為的に磨かれて		I層
	97	石製品	石臼	—	—	(34.4)	—	—	下臼と受け皿が一体化したもので、上臼との接地面は平面だが、前面は凹凸が見られる。		I層
	98	骨製品	歯ブラシ	—	柄	縦残存 (5.4)	横 1.05	厚さ 0.4	牛骨製。断面に孔が穿たれる。「TRADE T.M.M」の文字、「T.N」はひし形の断面内にかかれて、「M」は「MAR」が書かれていたと思われる。		I層
	99	骨製品	平盤状製品	—	—	縦残存 (2.55)	横 3.5	厚さ 0.6	ウシの四肢骨の骨幹部を使用。表面と短軸の切断面は磨かれ光沢を持つ。長軸の切断面にノコギリの切断痕が見える。		I層
	100	円盤状製品	—	—	—	縦 7.05	横残存 (5.4)	厚さ 1.55	中国産青磁の皿の底部を加工。内外面から打割。		I層
101	円盤状製品	—	—	—	縦 2.9	横 2.6	厚さ 0.6	中国産陶輪陶器製。内外面から打割。		I層	
102	円盤状製品	—	—	—	縦 2.9	横 2.85	厚さ 0.4	沖繩産陶輪陶器製。内外面から打割。		I層	
103	円盤状製品	—	—	—	縦 6.95	横 7.6	厚さ 1.75	沖繩産無釉陶器製。内外面から打割。		I層	
第170回 採取18	104	瓦貫	—	(古)寛永通寶	—	外径 2.5	孔径 0.56	厚さ 0.14	寛永通寶。古寛永(1期:1636年)。背面無文。		I層
	105	瓦貫	—	(新)寛永通寶	—	外径 2.32	孔径 0.62	厚さ 0.13	寛永通寶。新寛永(3期:1697年)。背面無文。		I層
	106	瓦貫	—	朝鮮通寶	—	外径 2.4	孔径 0.55	厚さ 0.21	朝鮮通寶(切鋳:1423年)。背面無文。		I層
	107	玉類	玉	貝類	—	外径 0.45	高さ 0.32	孔径 0.13	色調は緑色。表面は細かいつま状を呈す。		I層
	108	窯道具	トチン	—	—	—	4.1	6.2	胎土は灰色で軟質。内外面は褐色に酸化する。上面に糸切痕あり。外底に砂付着。		I層
	109	高麗系瓦	平瓦	—	筒部	—	—	—	凸面に交差して垂なるように羽状打捺文が施される。凹面に糸切り痕と有目痕が見える。		I層
	110	高麗系瓦	平瓦	—	筒部	—	—	—	凸面に「癸酉年高麗瓦匠造」と思われる捺と、羽状文を垂なるように打捺する。凹面に糸切り痕と有目痕、側面に切込み面が見える。		I層
	111	明朝系瓦(褐色)	軒丸瓦	I—1—A	瓦当	—	—	—	筒バリエが顯著で、丸瓦部がずれて瓦当に接合されている。瓦当裏はナデによる凹凸がみられる。		I層
	112	明朝系瓦(灰色)	丸瓦	A	玉縁部	—	—	—	玉縁に縦径3本、横径1本のへう掻きを施す。玉縁側面、上面も縦取りされ、玉縁側面は断面形状になる。		I層
	113	明朝系瓦	平瓦	—	広端部	—	—	—	横貫・向面貫。色調は表面が灰色。胎土はにぶい赤褐色を呈する。凸面はナデによる横位の線状痕、凹面に5列の横板痕屈折痕が見える。		I層
114	埴瓦	—	VII類	—	—	—	厚さ 10.0	全体的に灰色を呈する。どの面も粗目で、胎土に白砂を多く含む。		I層	
第172回 採取18	115	初期沖繩産無釉陶器	香炉	—	口〜底部	—	10.1	—	胎土は黒褐色と一部暗赤褐色でやや軟質、白色粒と黒色粒が混入。白土が磨状になる。内面胴部と外底の部に付け根にナデ痕あり。		II層
	116	初期沖繩産無釉陶器	蓋	—	底部	底径 (10.2)	—	—	胎土はにぶい赤褐色で軟質、白色粒が混入。白土が磨状になる。ロウ成痕。		II層
	117	中国産白磁	皿	D群	口〜底部	—	—	—	胎土は黄褐色で軟質、白色粒が混入。輪は灰白色で内外面を施す。外面一部磨削。残り高白。内底に葉形の痕。	トレ14 西	II層
	118	中国産青磁	碗	VII類	底部	—	—	4.6	胎土は灰白色で軟質。輪は明オリブ灰色で内面と外面高白内側まで磨削。外底磨削。文様は内面に印花文、印花文の中心に「徳」という文字。		II 2層
	119	円盤状製品	—	—	—	縦 7.6	横 6.1	厚さ 1.1	中国産青磁の碗の底部を加工。内外面から打割。筒縁部分は一部研磨される。		II 2層
120	中国産青磁	皿	—	底部	—	—	(6.6)	胎土は灰白色でやや硬質。白色粒が混入。輪は明オリブ灰色で内面と外面高白まで磨削。底部磨削。		II 3層	

第34表 V区出土遺物観察一覧 e

発掘番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(m)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第172図 図版18	121	中国産白磁	皿	E群	口～底部	(13.2)	2.9	(7.7)	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で内外面施釉後、復行輪削ぎ、景徳鎮窯系。		Ⅱ3層
	122	中国産三彩	水注	—	胴部	—	—	—	胎土は灰黄色でやや軟質。白色粒が混入。釉は灰白色釉、緑釉、黄釉で外面施釉。外面露胎。胎形三彩で、釉を彩色するよりに緑釉と黄釉を施す。		Ⅱ3層
	123	タイ産陶磁器	鉢	—	底部	—	—	(9.4)	胎土は灰白色でやや軟質。白色粒、黒色粒が混入。釉は黒褐色で外面に銅源塗中、内面は全面に施釉。底径は景徳鎮鉢。		Ⅱ3層
	124	本土産陶器	皿	陶器田期	底部	—	—	6.6	胎土は白色で軟質。黒色粒が混入。釉は内面緑釉、外面透明釉を内面と外面塗中まで施釉後、内底足の輪削ぎ、底面露胎。内底に目肌あり。		Ⅱ3層
	125	沖縄産陶磁器	皿	—	底部	—	—	(5.2)	胎土は灰白色と一部灰黄色でやや軟質。黒色粒が混入。釉は灰白色で外面銅源塗中まで施釉。内底と底面露胎。また内底の一部に釉が垂れる。		Ⅱ3層
	126	玉類	玉	Ⅱ期	—	外径 0.4	高さ 0.2	孔径 0.2	色調は緑色。孔が大きい。らせん状の彫が明瞭に観察できる。		Ⅱ3層
第173図 図版18	127	沖縄産陶磁器	小杯	—	口～底部	(5.4)	2.9	(2.4)	胎土は灰白色でやや軟質。白色粒が混入。釉は透明で内面と外面銅源まで施釉。一部高台に釉が垂れる。底面露胎。		Ⅱ3層 下
	128	金属製品	簪	—	竿部	縦残存 (5.3)	—	厚さ 0.35	竿は四角柱。		Ⅱ3層 下
	129	中国産青磁	碗	VII期	口縁部	—	—	—	胎土は灰白色でやや軟質。釉はオリーブ灰色で内外面施釉。文様は外面に波状文に退化した雷文。		Ⅱ3c層
	130	中国産青花	小杯	徳化窯系	底部	—	—	(1.9)	胎土は灰白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉後、復行輪削ぎ。復行に砂付着。		Ⅱ3c層
	131	玉類	玉	Ⅱ期	—	外径 0.35	高さ 0.4	孔径 0.15	色調は緑色。短いバネ状を呈する。巻き付けた技法で製作されたと考えられる。		Ⅱ3c層
	132	陶質土器	鉢	—	底部	—	—	(7.8)	胎土は灰褐色と褐色でやや軟質。白色粒が混入。外底に糸切肌あり。		Ⅱ4層
	133	中国産白磁	小碗	徳化窯系	底部	—	—	(4.0)	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で内外面施釉後、復行輪削ぎ、復行に砂付着。		Ⅱ6層 Ⅱ4層
	134	中国産白磁	皿	E群	口～底部	(8.1)	2.0	(4.4)	胎土は灰白色でやや軟質。釉は明緑色で内外面に施釉後、復行輪削ぎ。口縁、菊花趾。		Ⅱ6層 Ⅱ4層
	135	陶質土器	蓋	—	蓋	縦径 (5.9)	—	—	胎土は褐色で軟質。白色粒が混入。		Ⅱ6層 Ⅱ4層
	136	沖縄産陶磁器	燗白	—	口～底部	(5.2)	5.6	5.2	胎土は褐色で堅緻。釉は褐色で外底を除く全面に施釉。外底に糸切肌。		Ⅱ6層
	137	陶質土器	水鉢	—	口縁部	(20.4)	—	—	胎土は褐色で軟質。雲母、赤色粒が混入。文様は外面に口縁部に3～4本の波状文。		Ⅱ8層
	138	中国産陶磁器	鉢	—	口縁部	(39.4)	—	—	胎土は灰黄色でやや軟質。石雲粒、黒色粒が混入。釉は黒褐色で内面と外面に施釉。一部口縁内から外面にかけて露胎。		Ⅱ10層 下九層
	139	中国産青磁	盤	—	口縁部	(19.4)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉はオリーブ灰色で内外面を厚く施釉。		Ⅱ層
	140	中国産青花	杯	徳化窯系	口～底部	(5.6)	4.6	(2.7)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉。復行輪削ぎ。文様は外面に草花文。		Ⅱ層
141	中国産白磁	碗	F群	口縁部	(12.0)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。釉は灰白色で外面と内面銅源塗中まで施釉。内面銅源塗中から露胎。		Ⅱ8層 Ⅱ層	
第174図 図版19	142	中国産青磁	碗	VI～I期	口縁部	(13.2)	—	—	胎土は灰白色と一部赤褐色でやや軟質。釉は明緑灰色で内外面に施釉。高台内面明緑灰色を施釉。復行輪削ぎ。菊花趾。		Ⅱ11層 Ⅱ層
	143	中国産青磁	皿	景徳鎮窯系	口～底部	(12.7)	2.85	(6.0)	胎土は灰白色でやや軟質。釉は明緑灰色で内外面に施釉。高台内面明緑灰色を施釉。復行輪削ぎ。菊花趾。		Ⅱ11層 Ⅱ層
	144	中国産色絵	皿	景徳鎮窯系	底部	—	—	—	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で内外面施釉後、復行輪削ぎ。文様は外面赤色で不明文様。内面赤色と明緑灰色。釉はオリーブ灰色で不明文様。		Ⅱ11層 Ⅱ層
	145	明陶系瓦(褐色)	丸瓦	A	玉縁部	—	—	—	玉縁上横面に2条のへら筋き。凸面の玉縁と凹面上部にナデによる横位の凹線がみられる。凹面に糸切肌あり。		Ⅱ11層 Ⅱ層
	146	中国産青磁	香炉	—	口縁部	(12.6)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。黒色粒が混入。釉はオリーブ灰色で口縁内から外面に施釉。内面口縁部下は露胎。		Ⅱ1層
	147	中国産白磁	碗	—	口縁部	(12.2)	—	—	胎土は灰白色。一部に赤褐色でやや軟質。白色粒が混入。釉は明緑灰色で内外面口縁部から銅源塗中まで施釉。		Ⅱ1層
148	中国産青花	皿	景徳鎮窯系	底部	—	—	—	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面に施釉。以下露胎。文様は外面に不明文様。外底に「〇成〇製」という銘あり。「大明成化年製」あり。		Ⅱ1層	
149	中国産青磁	皿	—	口縁部	—	—	—	胎土は灰白色で軟質。黒色粒が混入。釉は黄褐色で内外面に施釉しているが、内面の一部は剥離が見られる。		Ⅱ1層	
150	初期沖縄産 黒胎陶器	部鉢	—	口縁部	—	—	—	胎土は赤褐色と一部赤褐色でやや軟質。白色粒が混入。白土が堅状になる。釉は暗赤褐色で外面に施釉。窪目は4条1組。		Ⅱ1層	

第35表 V区出土遺物観察一覧 f

発掘番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第174図 図版19	151	石製品	石球	—	完形	縦 4.8	横 5.1	—	砂質製の石球。いびつな球形を呈す。焼痕あり。		Ⅲ1層
	152	玉類	玉	皿類	—	外径 0.35	高さ 0.4	孔径 0.2	色調は青色。短いフォルムを呈する。らせん状の筋が明確に観察できる。垂き付け技法で製作されたと考えられる。		Ⅲ1層
第175図 図版19	153	明楽系瓦(褐色)	軒丸瓦	I-1-A	瓦当	—	—	—	形バリエーションあり。瓦当割れ面より、丸瓦部の接合部が露出。瓦当裏はナズにより割れ凸を呈し、手彫も残る。		Ⅲ1層
	154	明楽系瓦(褐色)	軒丸瓦	I-1-B	瓦当	—	—	—	瓦当文様が明確に残る。瓦当裏にはやや斜位に2条の彫痕。		Ⅲ1層
	155	明楽系瓦(灰色)	丸瓦	A	玉縁部	—	—	—	玉縁に十字のへう掻き印が施され、凹面に皺の多い布目肌。		Ⅲ1層
	156	明楽系瓦(褐色)	丸瓦	A	玉縁部	—	—	—	玉縁に縦位4本のへう掻き印あり。凹面に横位1条の布糸縋り筋。		Ⅲ1層
第176図 図版19	157	考古式土器	甕	—	口縁部	—	—	—	胎土に白砂、赤色粒が混入。外面胴部と内面口縁部を磨き調整。	トレ6	Ⅲ1層
	158	中国産青花	碗	D群 明II-2	口~底部	(12.7)	6.0	(5.6)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、書付軸割ぎ。文様は外面口縁部に波文・胴部に如意雲文・内底に不明文様。景徳鎮窯系。		Ⅲ2層
	159	中国産青花	碗	D群 明II-2	底部	—	—	(5.2)	胎土は灰白色と一部褐色でやや堅緻。白色粒が混入。釉はオリーブ灰色で内外面施釉後、書付軸割ぎ。文様は外面に不明文様・内面に花文状で、景徳鎮窯系。		Ⅲ2層
	160	中国産青花	陶碗	D群 明II-2	底部	—	—	(5.6)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、書付軸割ぎ。文様は外面胴部と内底に乳点文。		Ⅲ3層
	161	中国産青花	皿	B1群 明I-1	底部	—	—	(10.0)	胎土は淡黄色でやや軟質。釉は明緑灰色で内外面施釉後、書付軸割ぎ。文様は内面胴部に玉取舞子文。景徳鎮窯系。		Ⅲ3層
	162	中国産青花	皿	玉群 明II類	底部	—	—	(8.9)	胎土は白色で堅緻。釉は明緑灰色で内外面施釉後、書付軸割ぎ。文様は内外面に草文文。外底に鉄あり。景徳鎮窯系。		Ⅲ3層
	163	中国産青花	瓶	徳化窯系	底部	—	—	(6.8)	胎土は灰白色でやや軟質。釉は明緑灰色で外面胴部に施釉。外面底部と内面胴部。文様は外面胴部に不明文様。		Ⅲ3層
	164	中国産磁器軸	小皿	—	口縁部	—	—	—	胎土は灰白色でやや軟質。釉は全面白化前後に軟質釉を施したと思われるが、外面胴部の一部のみが残る。器用は筒状で、外面に立体的な花文を成形。		Ⅲ3層
	165	明楽系瓦(褐色)	軒平瓦	I-III-A	瓦当	—	—	—	瓦当裏に斜状のナズ痕。割れ面から瓦当と平瓦部の接合部が確認できる。		Ⅲ3層
	166	明楽系瓦(褐色)	丸瓦	—	玉縁~端部	—	—	—	音名古窯系の瓦と考えられる。凸面、凹面共に建割り筋。胎土は白が膠状になり、石炭粒を含む。凹面は布目肌が残る。端部は面取り整形。		Ⅲ3層
第177図 図版19	167	中国産色絵	碗	福建系	口~底部	(17.2)	6.2	(6.4)	胎土は灰白色でやや軟質。釉は灰白色で内面から外面高台まで施釉。書付から外底露出。文様は外面に草花文。内底に不明文様。		Ⅲ3a層
	168	中国産色絵	皿	徳化窯系	底部	—	—	—	胎土は白色で堅緻。釉は灰白色で内外面に施釉。文様は内底に赤色と緑色の文様。外底に鉄あり。		Ⅲ3a層
	169	本土産陶器	蓋	関西系	胴~底部	底径 (17.2)	—	—	胎土は浅黄褐色と一部褐色で軟質。黒色粒と白色粒が混入。釉はオリーブ灰色で白化粧釉。内外面施釉。底部軸割ぎ。空豆成形。		Ⅲ3a層
	170	瓦質土器	楠木鉢	—	胴部	—	—	—	胎土は白色と青褐色のサンドクォーツ状で軟質。白色粒、赤色粒、黒色粒が混入。外面に草花文。		Ⅲ3a層
	171	骨製品	器種不明	—	—	縦残存 (6.0)	横 3.0	高さ 2.15	ワシの中足骨の骨幹部を使用。前面は斜め方向に研磨し平面にする。後面は横方向に研磨し平面にする。溝・窪位部に切断筋が認められる。		Ⅲ3a層
	172	明楽系瓦(褐色)	丸瓦	—	胴部	—	—	—	釘孔が空けられ、それを取った胎土が一部凹みに残る。凹面には布目肌が残るが、ナズ消しが2条ほどみられる。割れ面が平らに整形。		Ⅲ3a層
第178図 図版19	173	明楽系瓦(灰色)	平瓦	—	胴部	—	—	—	凸面に斜線を1条。凹面に布目肌。		Ⅲ3a層
	174	中国産白磁	杯	E群	口~底部	(8.5)	2.15	(4.1)	胎土は灰白色でやや軟質。釉は白色で内外面に施釉後、書付軸割ぎ。内底乾の目輪割ぎ。底部唇付底文。景徳鎮窯系。		Ⅲ3c層
	175	中国産白磁	灯明皿	D群	口~底部	(8.5)	2.15	(4.1)	胎土は灰白色でやや軟質。釉は灰白色で内面に施釉。口唇部から外面は露出。口縁部に保存筋。		Ⅲ3c層
	176	明楽系瓦(褐色)	平瓦	—	胴部	—	—	—	凸面に「X」字のへう掻き印を施す。凹面に布目肌。胎土の黒色粒が目立つ。		Ⅲ3c層
	177	明楽系瓦(褐色)	丸瓦	A	玉縁部	—	—	—	玉縁に「X」字のへう掻き印。凸面高台玉縁部は横位のナズが施される。		Ⅲ3c層
	178	鉄貨	—	(新)寛永通寶	—	外径 2.4	孔径 0.6	厚さ 0.1	寛永通寶。新寛永(3期:1697年)。背面無文。		Ⅲ4層
	179	中国産青磁	皿	V類	口~底部	(12.2)	3.2	(5.4)	胎土は青みがかった灰白色で堅緻。釉は灰オリーブ色で内外面施釉。文様は外面にへう掻きによる蓮弁文。外底に胎土目肌。		Ⅲ5層
	180	玉類	勾玉	—	尾部	—	—	厚さ 0.9	まだらの乳白青色を呈する。気泡を含む。		Ⅲ5層

第36表 V区出土遺物観察一覧 g

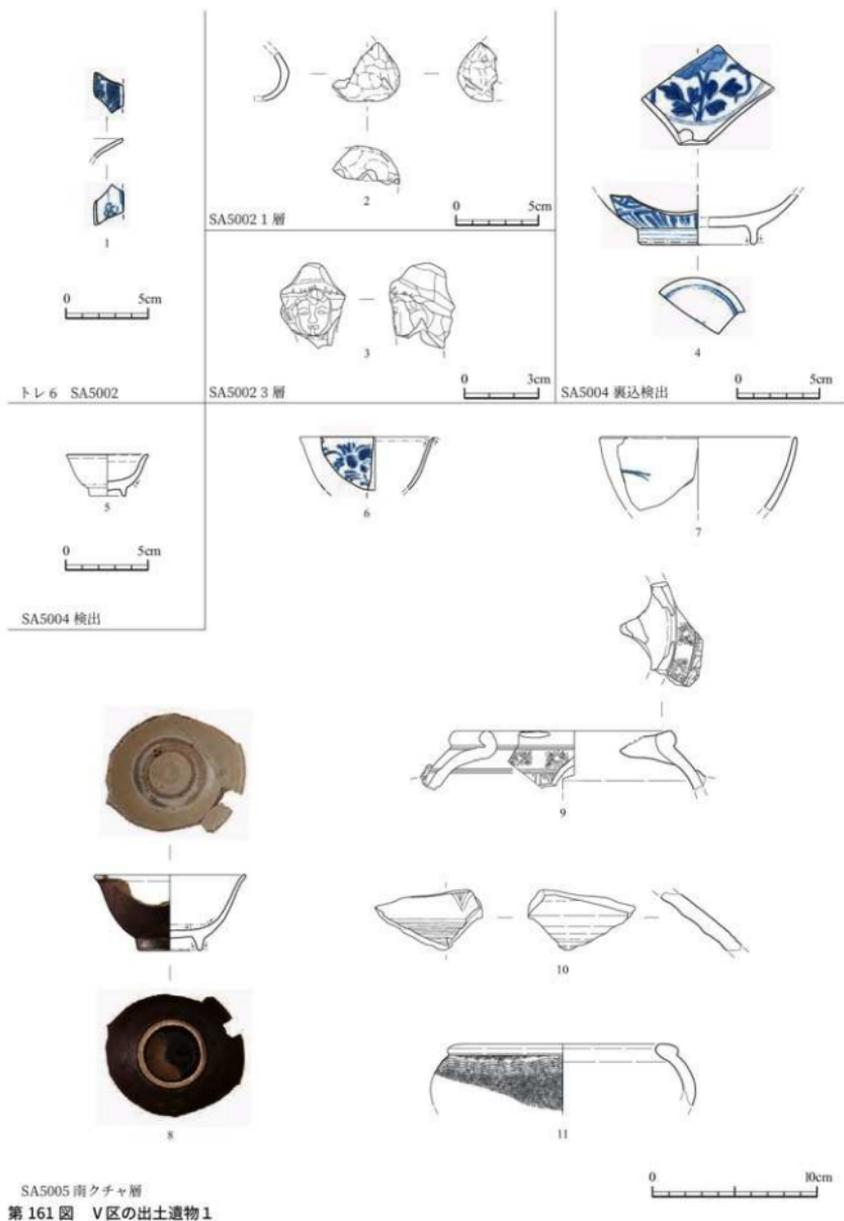
検出番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(m)			観察事項	出土位置		
						口径	器高	底径		遺構	層序	
第178図 図版19	181	中国産青花	皿	B1群 明I-1	口-底部	(21.2)	4.4	(12.2)	胎土は灰白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面に施輪。復付輪跡あり。文様は外面胴部に唐草文、内面口縁部に四方唐文、内底に五枚蓮子文。景徳鎮窯系。		Ⅲ7層	
	182	中国産色絵	皿	—	口縁部	—	—	—	胎土は灰白色で軟質。輪は外面に緑色釉、内面に透明釉を施輪。内面に貫入あり。		Ⅲ7層	
	183	中国産青磁	碗	V類	口縁部	(15.0)	—	—	胎土は灰白色で堅緻。輪はオリーブ灰色で内外面に厚く施輪。文様は外面口縁部にへう掻きによる唐文帯。胴部に唐草文、内面胴部へう掻きの花文。		Ⅲ8層	
	184	中国産青花	小杯	景徳鎮窯系	口-底部	(4.6)	3.4	(2.2)	胎土は白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面に施輪後、復付輪跡あり。文様は外面胴部に動物文。	トレ6	Ⅲ9a層	
第179図 図版20	185	中国産白磁	碗	大宰府IV類	口縁部	—	—	—	胎土は灰白色でやや堅緻。輪は灰白色で内外面に施輪。		Ⅲ9b層	
	186	中国産青花	碗	B1群 明I-1	口縁部	(12.8)	—	—	胎土は灰白色でやや堅緻。輪は明緑灰色で内外面に施輪。文様は外面胴部に高伏唐草文、内面口縁部に四方唐文。		Ⅲ9b層	
	187	中国産青花	碗	徳化窯系	口縁部	(18.0)	—	—	胎土は白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面に施輪。文様は外面胴部に草花文、内面口縁部に四方唐文。粘土シワあり。		Ⅲ9b層	
	188	中国産青花	小碗	景徳鎮窯系	口-底部	(10.6)	4.6	(5.2)	胎土は白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面に施輪後、復付輪跡あり。文様は外面胴部に唐草文、内底に折枝文。		Ⅲ9b層	
	189	中国産青花	皿	徳化窯系	口-底部	(10.2)	2.3	(6.2)	胎土は白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面に施輪後、復付輪跡あり。文様は内底に折枝文。底面が薄均化後、粘土シワあり。内底中央が窪みに繋がる。		Ⅲ9b層	
	190	本土産陶器	甌鉢	畿内系	口縁部	(29.8)	—	—	胎土は明赤褐色でやや軟質。白色粒、赤色粒が混入。内面胴部に窪みを施す。		Ⅲ9b層	
	191	瓦質土器	台	—	底部	—	—	—	胎土は褐色で軟質。白色粒、赤色粒が混入。種子類のものと思われる空洞が見られる。		Ⅲ9b層	
	192	明陶系瓦(褐色)	軒平瓦	I-III	瓦当	—	—	—	外周縁下縁端が突起状に成型される。瓦当文様の花弁が明瞭に残る。内面に布目紋。		Ⅲ9b層	
	第180図 図版20	193	明陶系瓦(褐色)	丸瓦	—	玉縁部	—	—	—	玉縁と筒部側面面を面取り。筒部に打孔が空き、津液が付着。		Ⅲ9b層
194		磚瓦	—	IV類	—	—	—	厚さ3.9	側面。下面は灰色を呈するが、使用による摩滅により黒色の粘土が表出している。下面は粗い。		Ⅲ9b層	
195		瓦質	—	(新)寛永通寶	—	外径2.4	孔径0.6	厚さ0.13	寛永通寶。新寛永(3期:1697年)。背面無文。		Ⅲ14層	
196		中国産白磁	蓋	福建系	胴-袴部	底径14.8	—	袴径12.5	—	蓋の蓋か。胎土は灰白色でやや堅緻。輪は灰白色で外面底面に施輪。蓋面内面から胴部にかけて薄施。	トレ10	Ⅲ17層
197		中国産磁器類	皿	—	底部	—	—	(6.8)	胎土は灰白色でやや堅緻。輪は磁草輪で内外面に施輪。外底の一部露出。	トレ10	Ⅲ17層	
198		宮古式土器	甕or鍋	—	口縁部	—	—	—	—	器面は褐色を呈し、胎土に白砂、暗赤色粒が混入。口縁部内面から外面胴部にかけてへう掻き調整。外面に泡頭痕あり。外面胴部に厚付着。	トレ10	Ⅲ19層
199		中国産青磁	瓶	—	胴部	—	—	—	—	胎土は灰白色でやや堅緻。輪はオリーブ灰色で内外面に厚く施輪。文様は外面にへう掻きによる唐草文。	トレ10	Ⅲ20層
第181図 図版20	200	磚瓦	—	Ⅲ類	—	—	—	厚さ4.6	表面は灰褐色。胎土中央はオリーブ灰色を呈する。裏面は製作時の木枠痕が、本目状の線がはしる。	トレ14	Ⅲ25層	
	201	磚瓦	—	IV類	—	—	—	厚さ3.3	表面は黄灰色を呈する。胎土は中央が灰色。外縁は灰白色を呈する。裏面は滑面だが、僅かに窪み。端面に噛み合ひ合わせの段差あり。	トレ14	Ⅲ25層	
	202	中国産青磁	盤	—	口縁部	—	—	—	—	胎土は灰白色でやや堅緻。輪は明緑灰色で内外面に施輪。口縁は焼化。細い高台タイプの盤。	トレ8	Ⅲ27層
	203	中国産青花	碗	徳化窯系	口縁部	(14.0)	—	—	—	胎土は白色で堅緻。輪は明緑灰色で内外面に施輪。文様は外面胴部に唐草文。粘土シワあり。	トレ8	Ⅲ27層
	204	中国産青花	碗	漳州窯系	底部	—	—	(4.2)	—	胎土は黄褐色で軟質。輪は内外面に灰白色釉を施輪。復付輪跡あり。文様は内底に唐草文。	トレ8	Ⅲ27層
	205	中国産青花	皿	福建系	口縁部	(20.0)	—	—	—	胎土は灰白色でやや堅緻。輪は明緑灰色で内外面に施輪。文様は内面胴部に下明文様あり。	トレ8	Ⅲ27層
	206	中国産陶器類	甕	—	口縁部	(10.4)	—	—	—	胎土は灰黄褐色でやや軟質。白色粒、赤色粒、黒色粒が混入。輪は褐色で内外面に施輪。	トレ8	Ⅲ27層
	207	中国産陶器	蓋	宜楽窯系	胴-袴部	底径(5.6)	—	袴径(4.8)	—	急須の蓋か。胎土はよい赤褐色で堅緻。外面は滑らかな光沢を持つ。	トレ8	Ⅲ27層
	208	瓦質	—	元祐通寶	—	外径2.5	孔径0.6	厚さ0.1	—	元祐通寶(初铸年1086年)。背面無文。	トレ8	Ⅲ27層
	209	中国産施輪陶器	碗	池田I類	口-底部	(13.1)	5.7	(6.5)	—	胎土は灰白色で堅緻。輪はオリーブ灰色で内外面口縁部から胴部途中まで施輪。復付と内底に耐久上付着。	トレ8	Ⅲ30層
第182図 図版20	210	磚瓦	—	IV類	—	—	—	厚さ3.5	色調は全体的に褐色を呈す。裏面は粗いが、角が面取りしたかのように濡れている。	トレ8	Ⅲ34層	

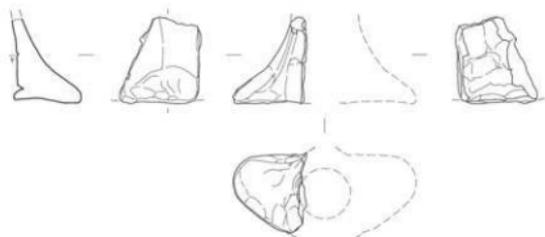
第37表 V区出土遺物観察一覧 h

発掘番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第182図 図版20	211	磚瓦	—	IV類	—	—	—	厚さ 4.4	表面は灰黄色、胎土は灰色を呈する。表面に網線に「大」の字のスタンプ刻印を施し、積位の傷がつく。	トレ8	Ⅲ34層
	212	沖繩産施釉陶器	装物	—	底部	—	—	(6.8)	胎土は淡黄色でやや軟質。内外面露胎。外面部から高台にかけて斜線紋が残る。	先行	Ⅲ・IV層
	213	中国産青磁	碗	IV類	口縁部	18.1	—	—	胎土は灰色でやや硬脆。白色粒が混入。輪は内外面にオリーブ灰色を施胎。		IV2層
	214	中国産白磁	皿	D群	底部	—	—	3.6	胎土は灰白色でやや硬脆。輪は灰白色で内面と外面部まで施胎。底部露胎。		IV2層
	215	グスク土器	鍋	—	口縁部	—	—	—	胎土に白色粒を混入。外面に指頭刺。内面にナメ調整。		IV2層
	216	中国産青磁	碗	V-1類	口縁部	(17.8)	—	—	胎土は灰白色で硬脆。輪はオリーブ灰色で内外面に厚く施胎。文様は外面部に網線に墨線。胴部にへう掛きの蓮弁文、内面胴部にへう掛きの唐草文。		IV3層
	217	中国産青磁	皿	V-1類	口縁部	(12.7)	—	—	胎土は灰白色でやや硬脆。輪はオリーブ灰色で内外面に施胎。文様は外面胴部にへう掛きの蓮弁文。		IV3層
	218	中国産白磁	碗	C群	口縁部	(14.6)	—	—	胎土は灰白色でやや硬脆。輪は灰白色で外面部と内底の墨線を引いた後、内面と外面部部途中まで施胎。外面部下半は露胎。文様は外面部と内底に1条の墨線。		IV3層
	219	グスク土器	甕	—	口縁部	—	—	—	胎土に白色粒、石英粒、雲母が混入。内外面にナメ調整。		IV3層
	220	グスク土器	鍋	—	口縁部	(15.8)	—	—	胎土に白色粒、赤色粒が混入。内外面に指頭刺あり。		IV3層
	221	高麗系瓦	平瓦	—	筒部	—	—	—	凸面に羽状打痕文様。凹面に糸切り痕と布目紋が残る。		IV3層
	222	タイ産半線土器	壺	—	胴部	—	—	—	胎土は灰白色で表面は橙色、赤色粒、黒色粒が混入。外面に甲子目あり。	トレ7	IV6層
図版22	223	中国産三彩	盤	—	口縁部	—	—	—	胎土は淡黄褐色で軟質。黒色粒が混入。輪は緑色で内面に白化粧後、全面に施胎。		1層
	224	中国産三彩	水注	—	胴部	—	—	—	胎土は灰白色で軟質。黒色粒が混入。輪は外面部に白化粧後、緑色輪と黄色輪を施胎。内面に縦方向にナメ調整。		1層
	225	本土産近代磁器	碗	—	口縁部	(5.9)	—	—	胎土は白色で硬脆。輪は透明釉を内外面に施胎。文様は外面に色絵による不明文様。		1層
	226	本土産近代磁器	碗	磁器産	底部	—	—	4.8	胎土は白色で硬脆。輪は透明釉を内外面に施胎後、覆付釉滑ぎ。外面部に空紙筋りの唐草文。内底に目四角あり。		1層
	227	本土産近代磁器	碗	磁器産	底部	—	—	4.9	胎土は白色で硬脆。輪は透明釉を内外面に施胎後、覆付釉滑ぎ。外面部に空紙筋りの文様。内底に松竹梅文。内底に目四角あり。		1層
	228	本土産近代磁器	小碗	—	口～底部	(8.8)	4.4	(3.2)	胎土は白色で硬脆。輪は透明釉を内外面に施胎後、覆付釉滑ぎ。外面部に不明文様。		1層
	229	本土産近代磁器	小碗	瀬戸・美濃系	口～底部	(7.8)	4.1	3.3	胎土は白色で硬脆。輪はクロム輪を内外面に施胎。底部露胎。外面部に飛び刺。		1層
	230	本土産近代磁器	小碗	瀬戸・美濃系	口～底部	(9.2)	4.7	(3.4)	胎土は白色で硬脆。輪を内外面に施胎後、覆付釉滑ぎ。文様は外面部に銅板転写による草花文。		1層
	231	本土産近代磁器	小碗	瀬戸・美濃系	口～底部	(8.8)	4.0	3.5	胎土は白色で硬脆。輪はクロム輪を内外面に施胎。底部露胎。外面部に飛び刺。		1層
	232	本土産近代磁器	小碗	—	口～底部	(8.8)	4.8	3.5	胎土は白色で硬脆。輪は透明釉を内外面に施胎後、覆付釉滑ぎ。		1層
	233	本土産近代磁器	小碗	—	口縁部	(6.8)	—	—	胎土は白色で硬脆。輪は透明釉を内外面に施胎。文様は外面部にゴム河の花文。		1層
	234	本土産近代磁器	小碗	瀬戸・美濃系	口縁部	(8.4)	—	—	胎土は白色で硬脆。輪は透明釉を内外面に施胎。文様は外面部に銅板転写による草花文。		1層
235	本土産近代磁器	小碗	—	底部	—	—	2.9	胎土は白色で硬脆。輪は透明釉を内外面に施胎。文様は内底に色絵による草花文。		1層	
236	本土産近代磁器	筒碗	—	口～底部	(6.8)	7.1	4.5	胎土は白色で硬脆。輪は透明釉を内外面に施胎後、覆付釉滑ぎ。文様は外面部に色絵による草花文。		1層	
237	本土産近代磁器	皿	—	口～底部	(26.8)	3.2	(17.6)	胎土は白色で硬脆。輪は透明釉を内外面に施胎後、覆付釉滑ぎ。文様は内面に銅板転写の風凰文。外面に不明文様。		1層	
238	本土産近代磁器	皿	—	底部	—	—	(8.2)	胎土は白色で硬脆。輪は透明釉を内外面に施胎。文様は内面に空紙筋りによる文様。外底に目四角あり。		1層	
239	金属製品	ピンセット	—	—	—	—	—	ミニサイズのストッパー付きピンセットか。2つのパーツで構成される。先端内側は滑り止めの筋目あり。		1層	
図版22	240	ガラス製品	シャーレ	—	口～底	(6.6)	1.3	(6.6)	黒色系。内面に磨きで磨化する。0.5～5mm台の気泡を含む。		1層

第38表 V区出土遺物観察一覧i

発掘番号 図版番号	番号	種類	器種	分類	部位	法量(m)			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
図版22	241	ガラス製品	瓶	インク瓶	口～底部	2.1	4.6	3.3	色調は黒色系。胴部横断面方形で、底面に円形の窪み、内部に窪かにインク付着。		I層
図版22	242	金属製品	ボタン	—	—	縦 2.2	横 2.2	厚さ 0.3	中央に「真」の文字。沖縄県立首里高等学校のものか。		I層
	243	金属製品	ボタン	—	—	縦 2.4	横 2.3	厚さ 0.4	中央に五弁花文。		II 3a層
	244	中国産三彩	水注	—	胴部	—	—	—	胎上は灰白色で軟質、黒色粒が混入。胎は外面胴部に白化粧後、緑色輪と黄色輪を施す。内面に縦方向にナデ調整。		III 3c層





12

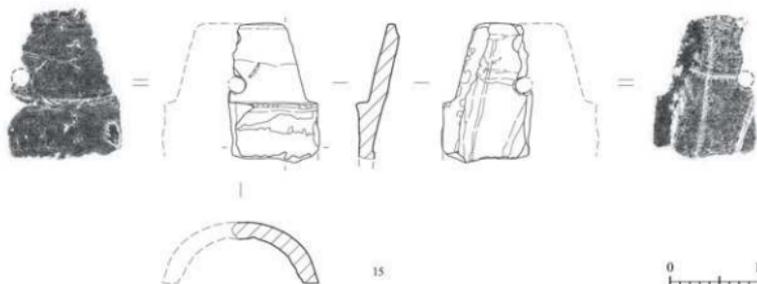
SA5005 南クチャ〜裏込層



13



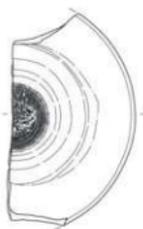
14



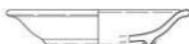
15



トレ 13 SF5001 造成 2・3



16



17



19



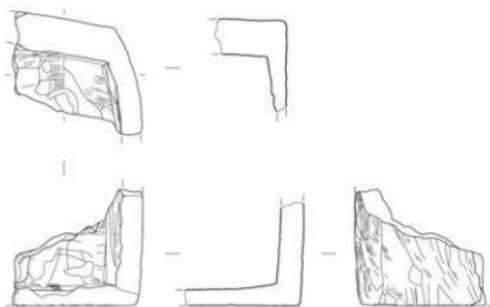
トレ 14 SF5001 造成 2 ①



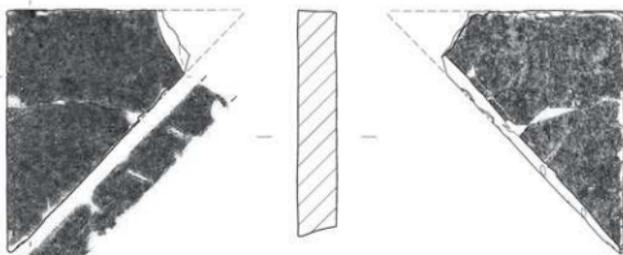
18



第 162 図 V 区の出土遺物 2



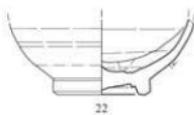
20



21



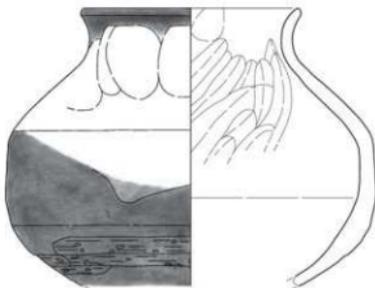
トレ 14 SF5001 造成 2 ②



22



23

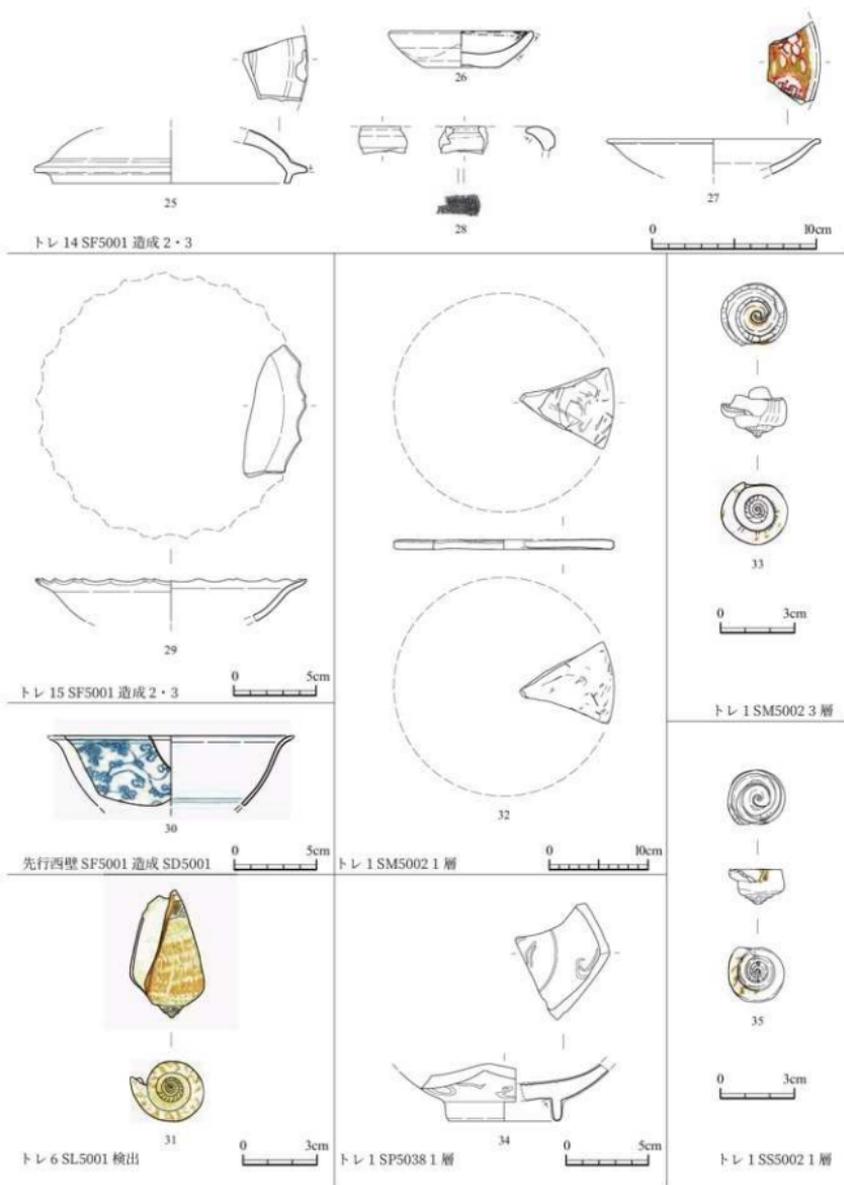


24

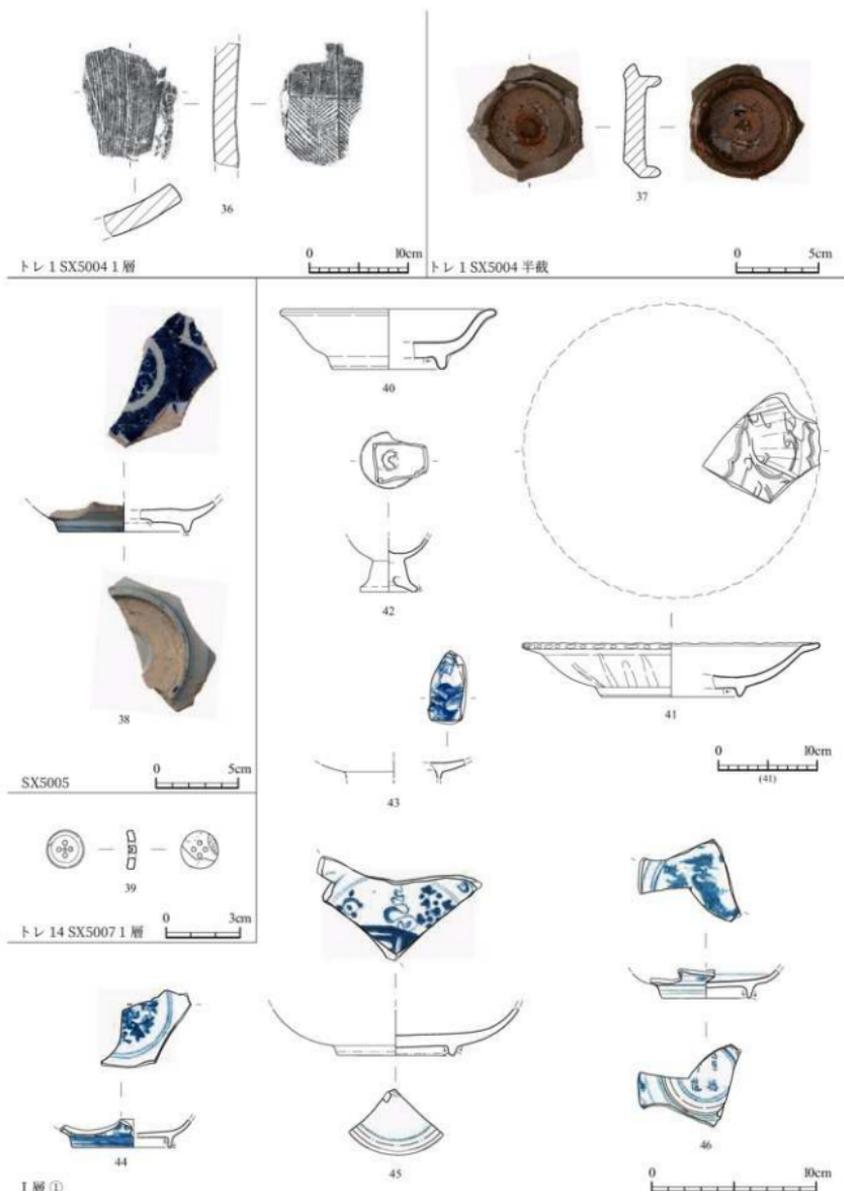


トレ 14 SF5001 造成 2 炭

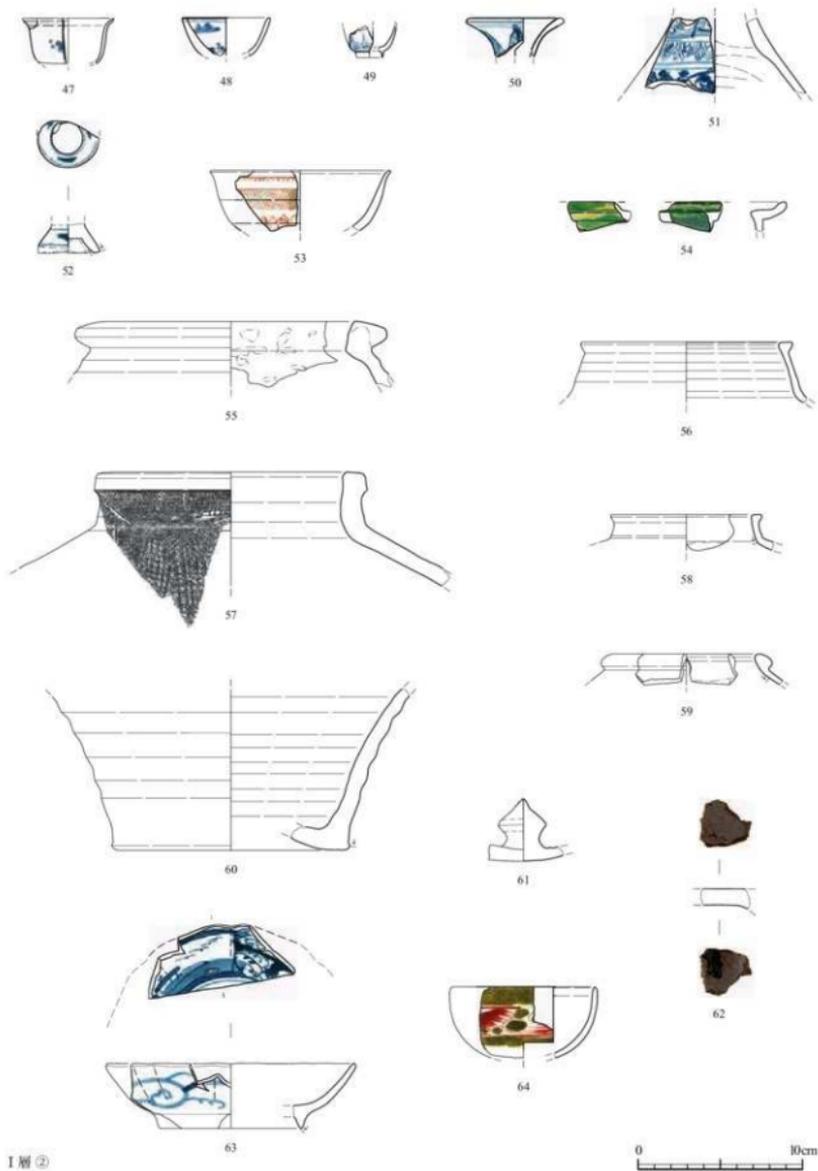
第 163 図 V 区の出土遺物 3



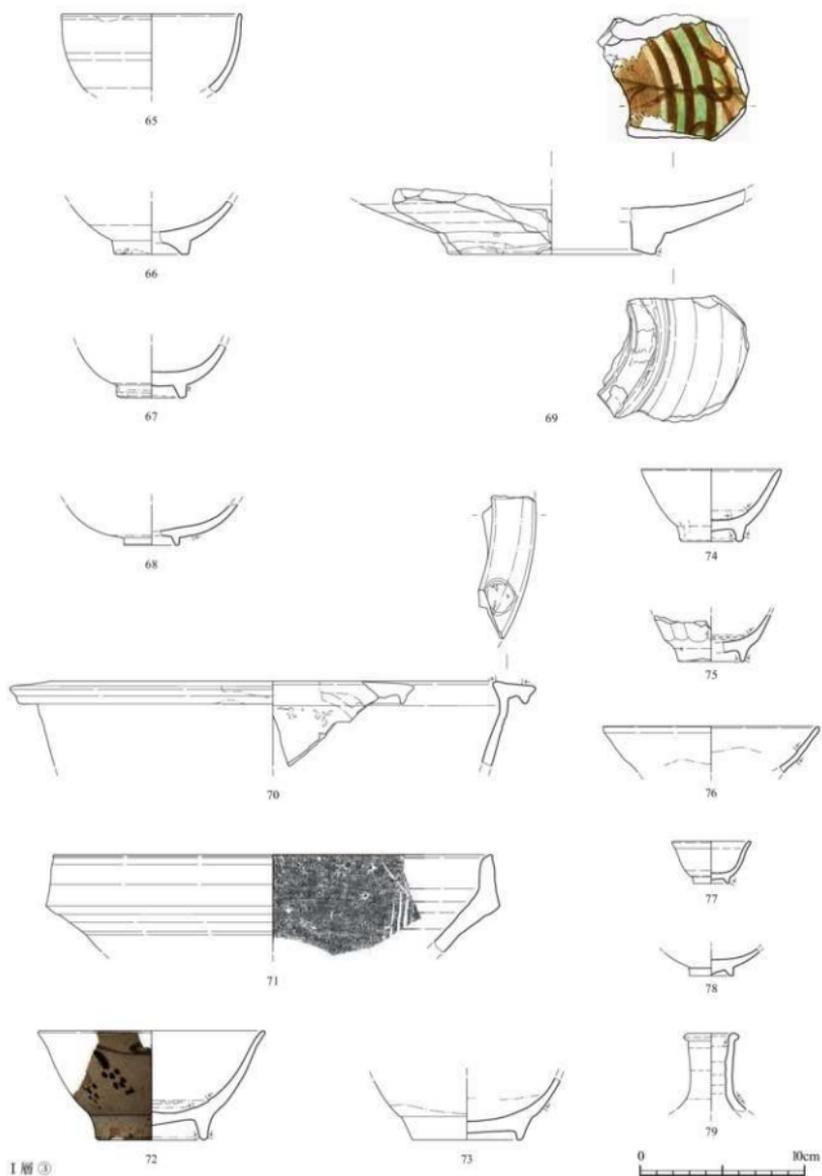
第 164 図 V 区の出土遺物 4



第 165 図 V 区の出土遺物 5

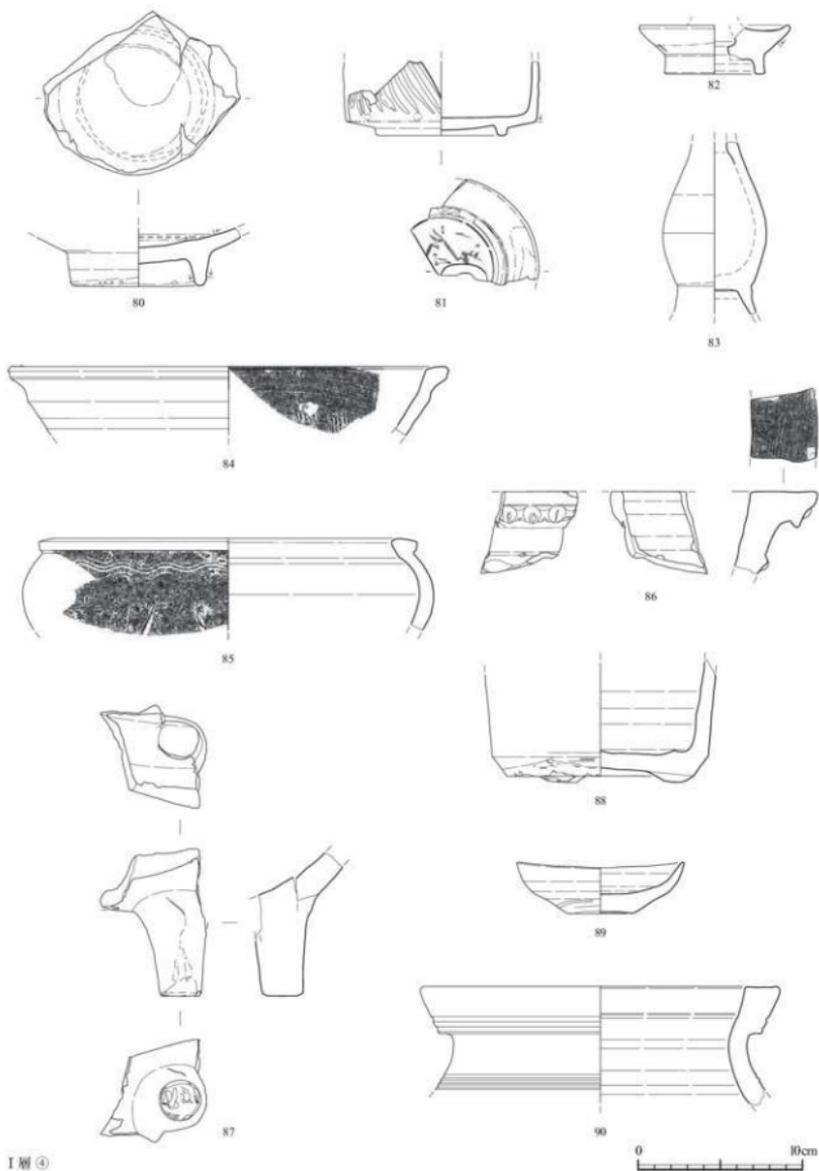


第166図 V区の出土遺物6



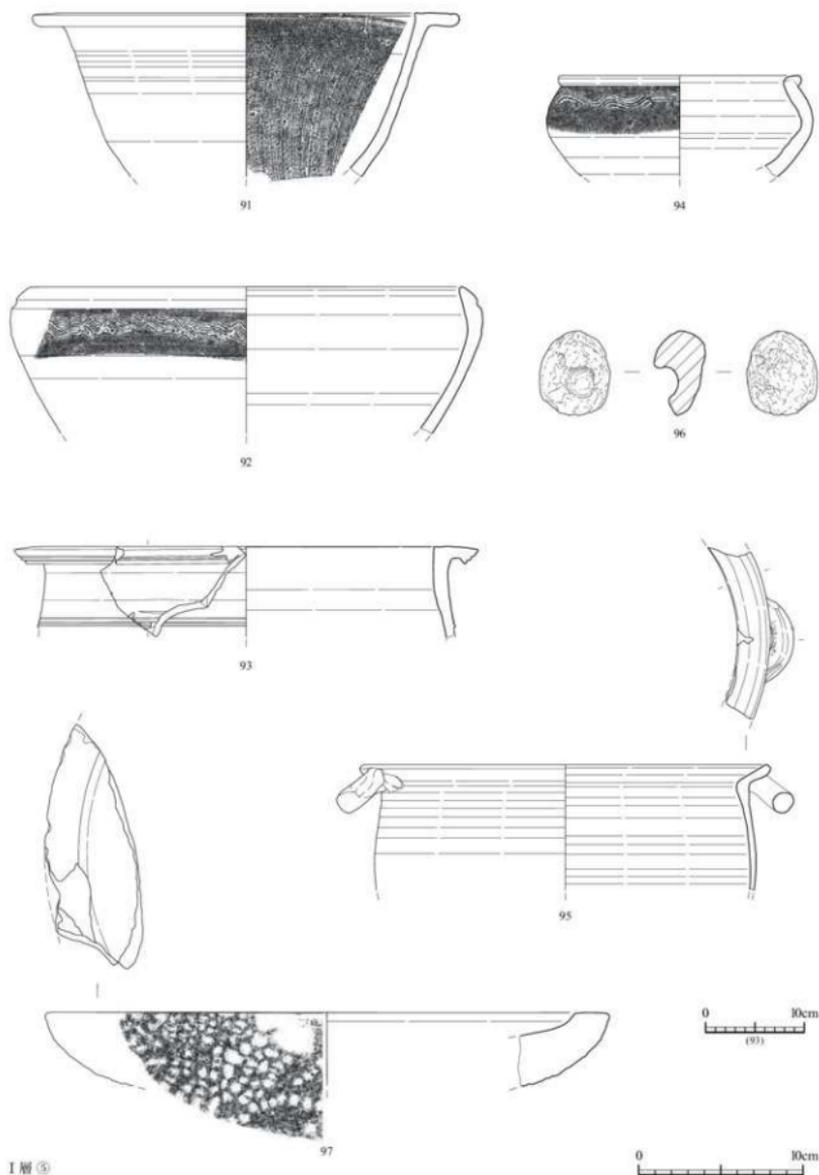
I層③

第167図 V区の出土遺物7

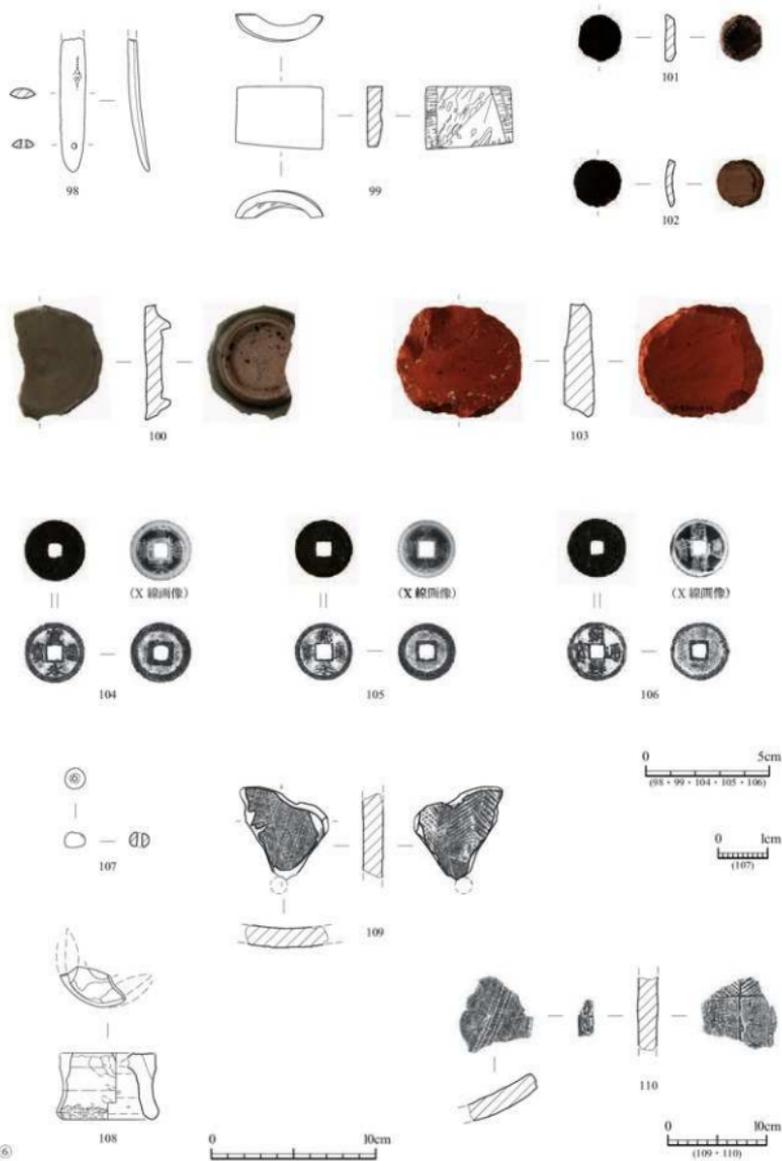


I層④

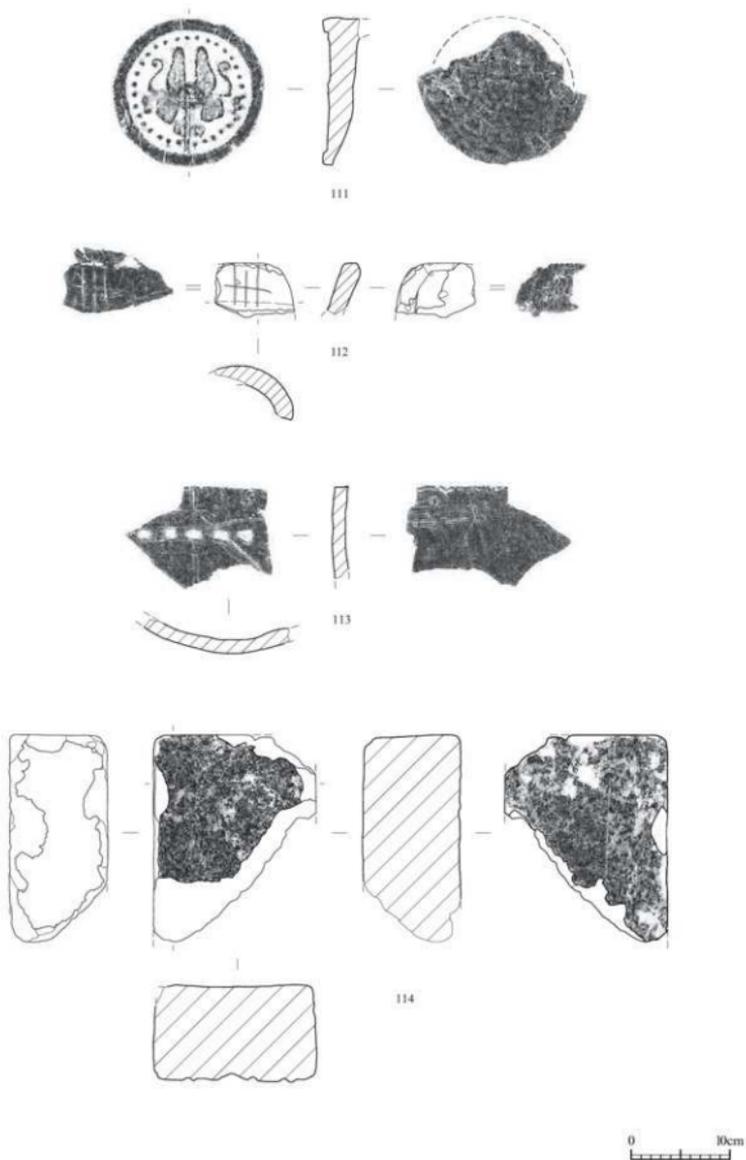
第168図 V区の出土遺物8



第169図 V区の出土遺物9

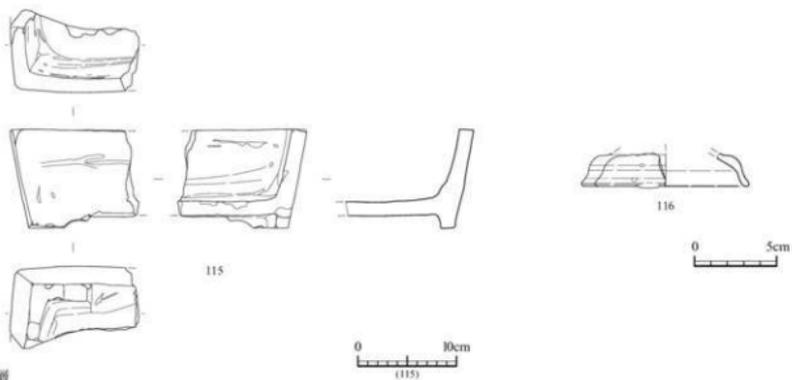


第170図 V区の出土遺物10

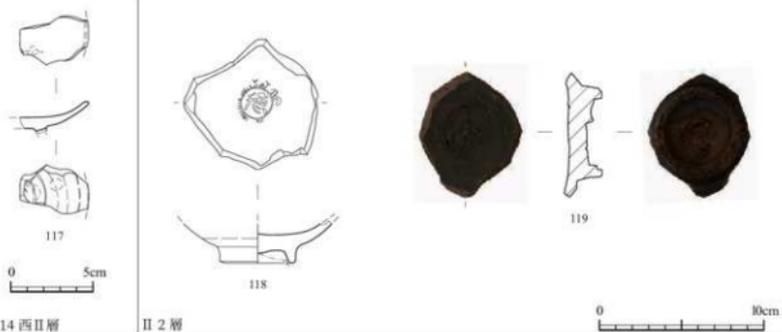


I層②

第171図 V区の出土遺物11

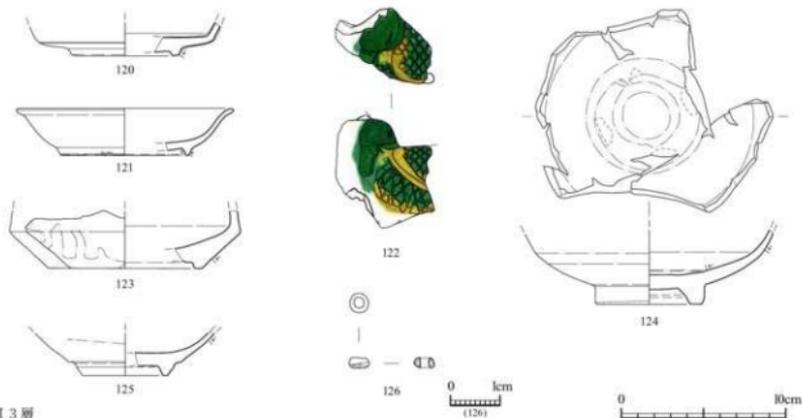


II層



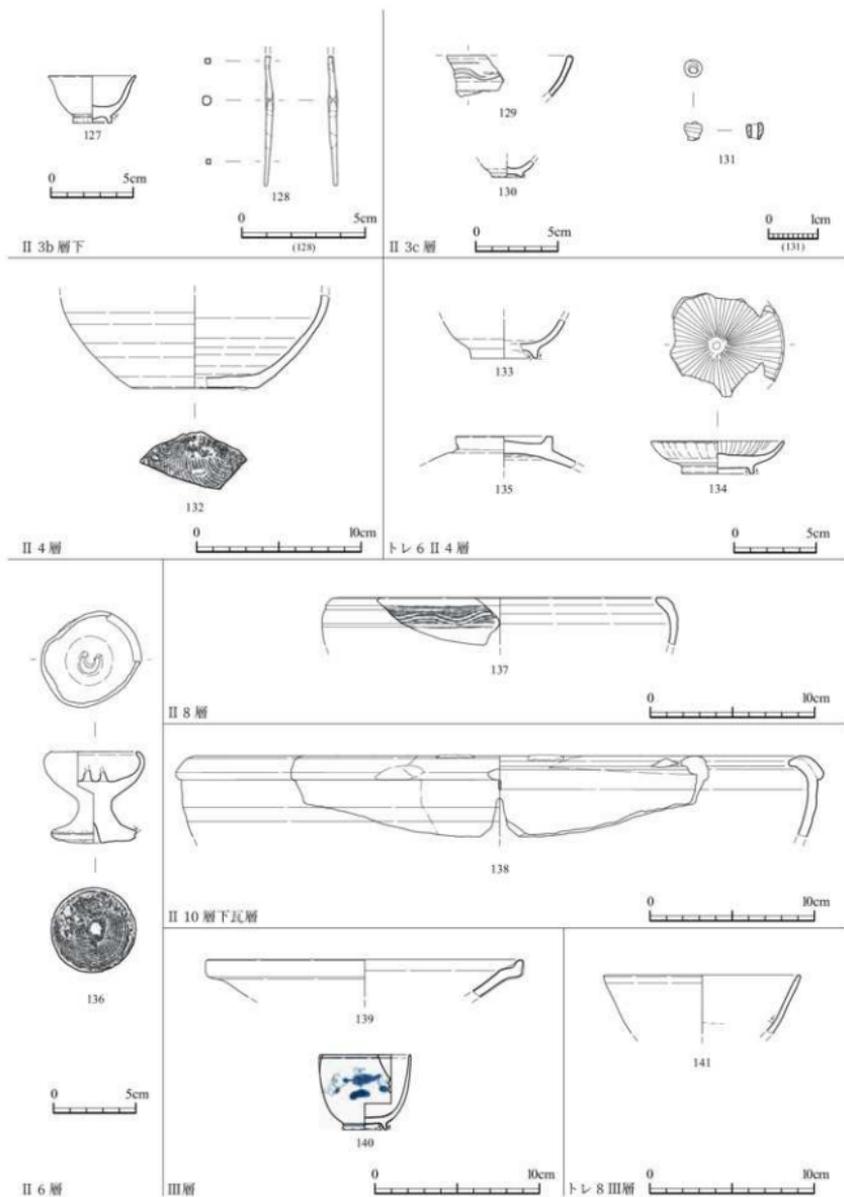
トレ 14 西II層

II 2層

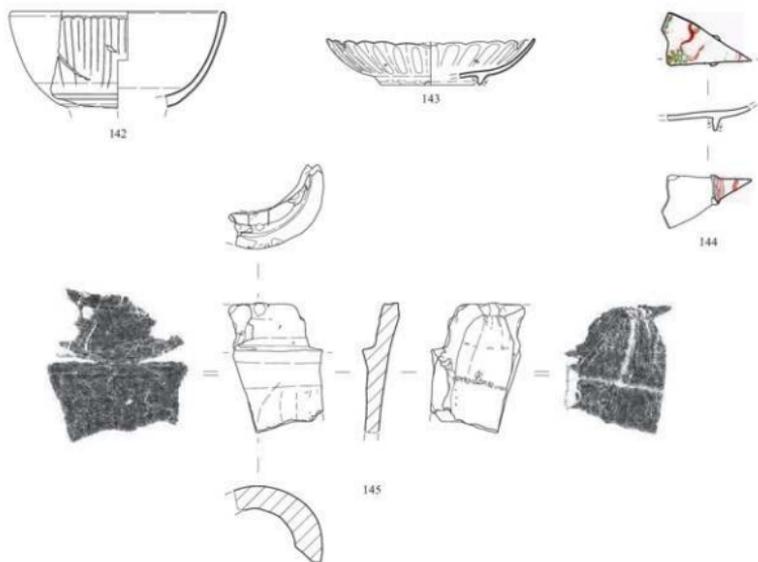


II 3層

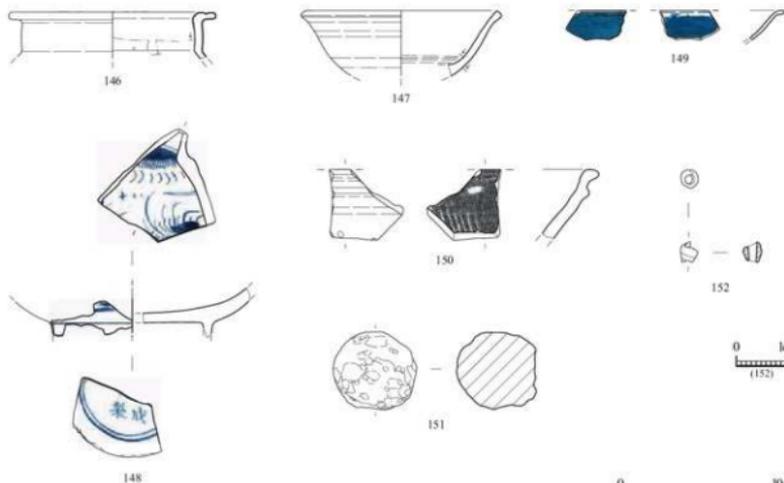
第 172 図 V 区の出土遺物 12



第173図 V区の出土遺物13

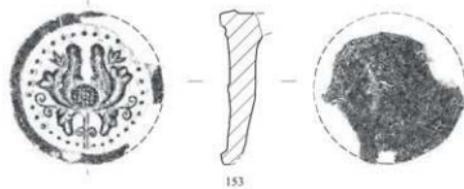


トレ11 III層

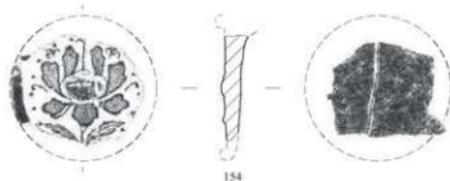


III 1層

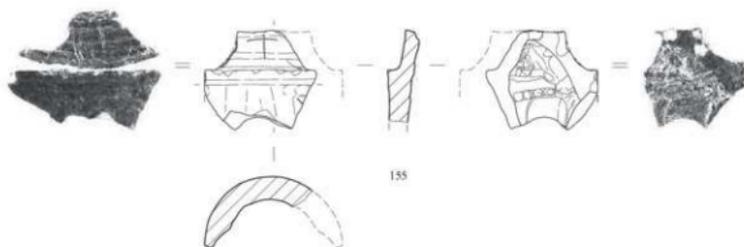
第174図 V区の出土遺物14



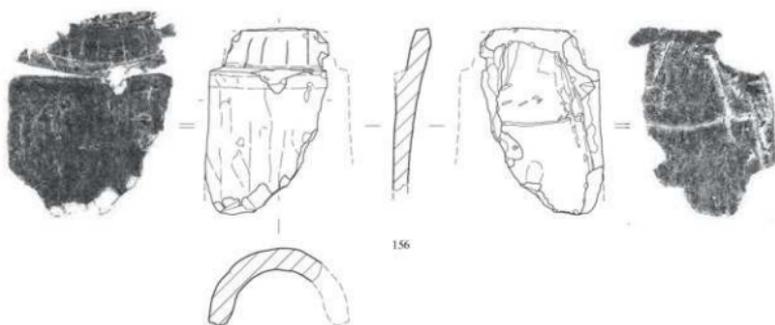
153



154



155

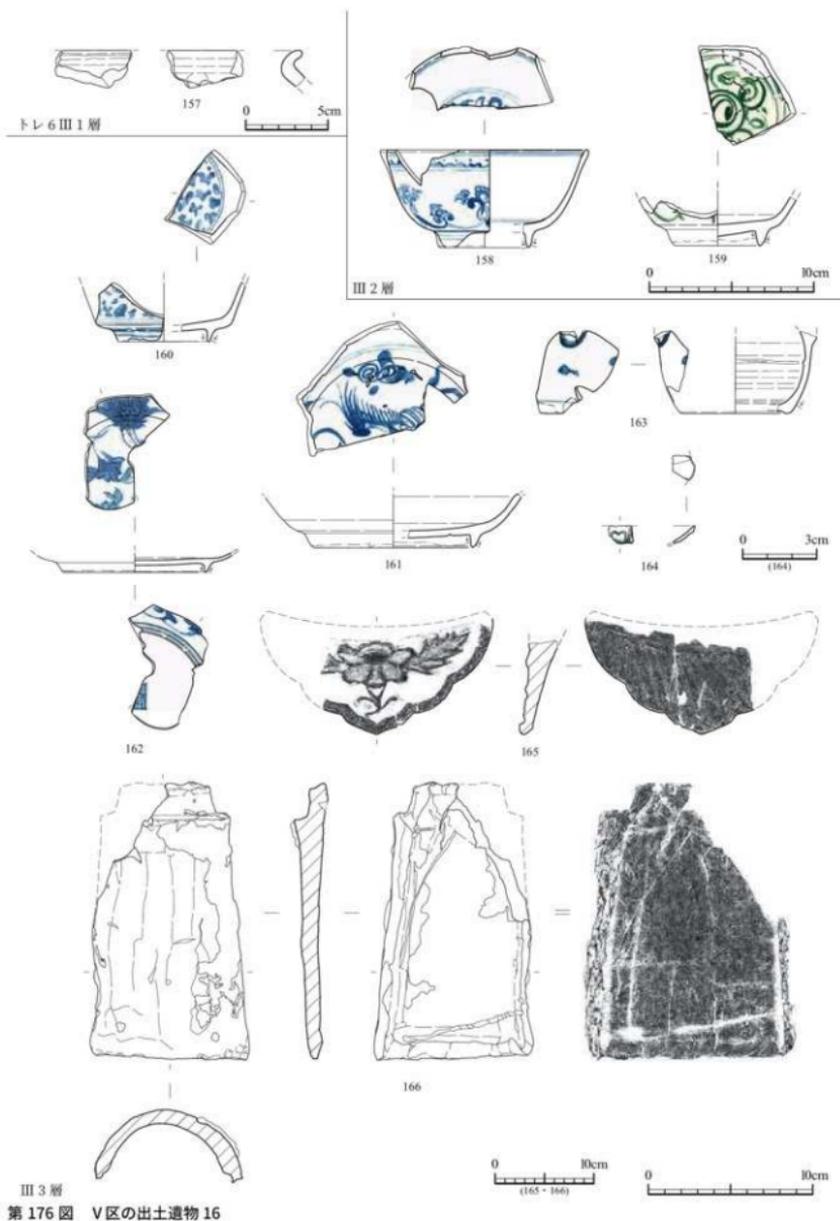


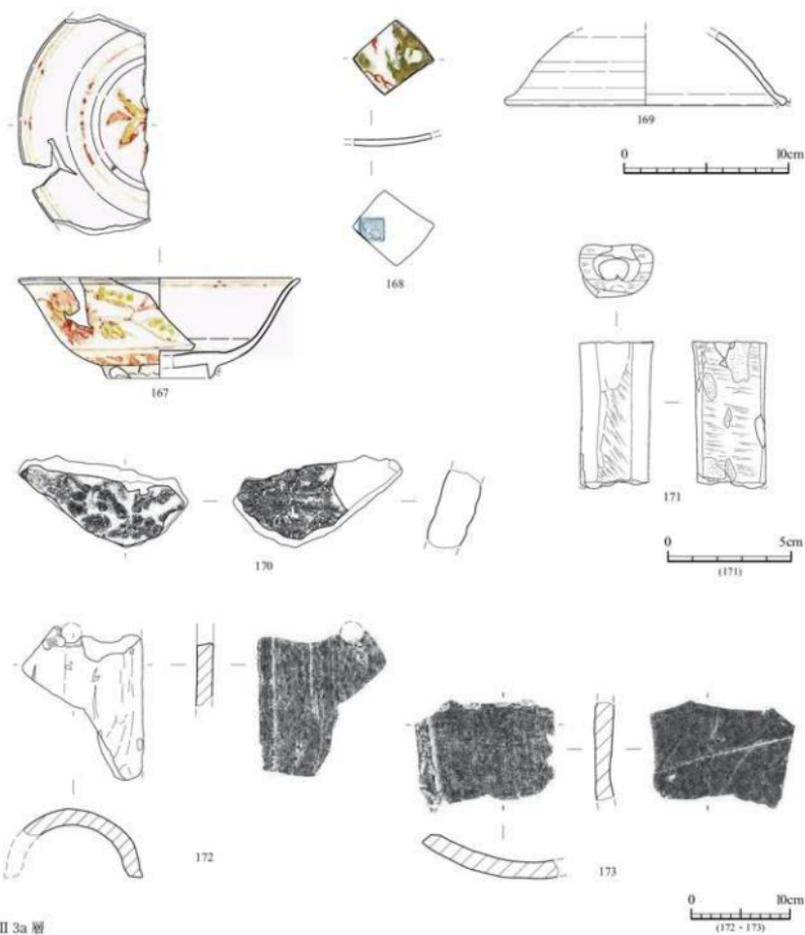
156

III 1 層 ②



第 175 図 V 区の出土遺物 15

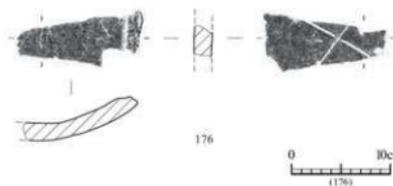




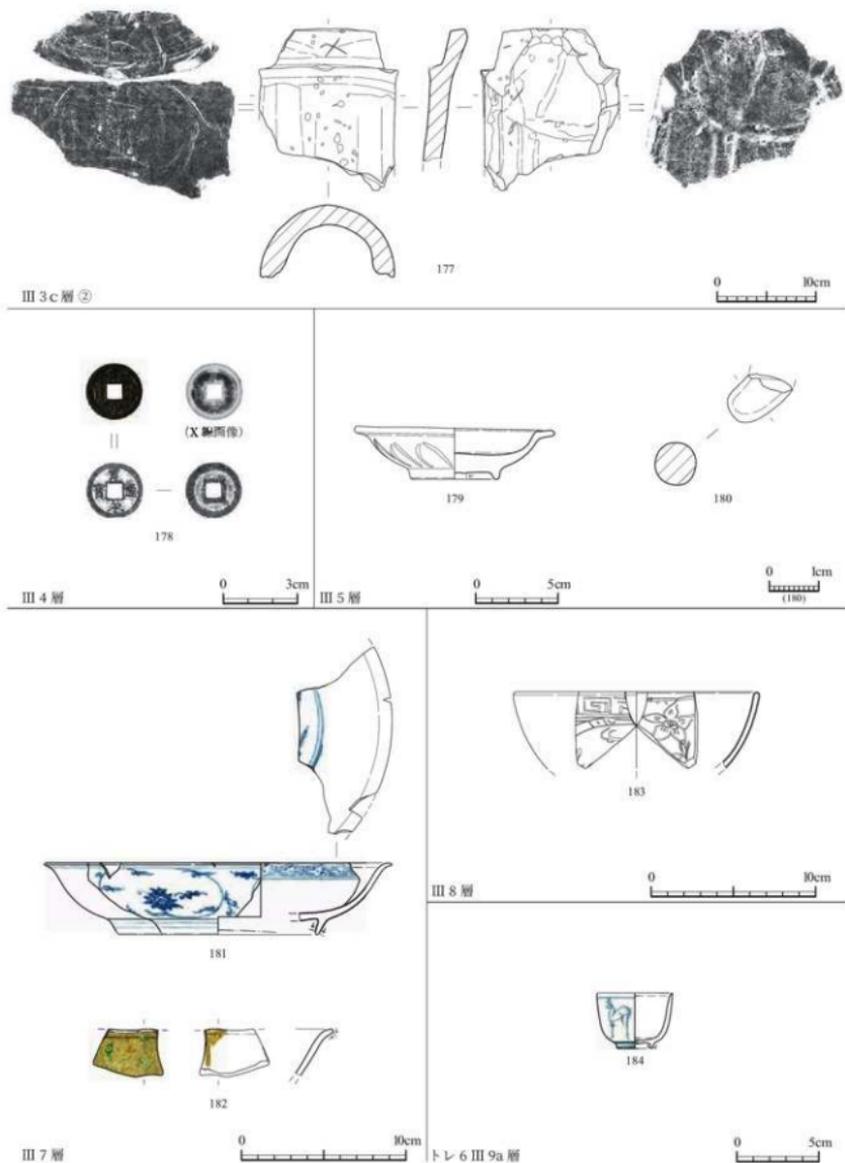
III 3a 層



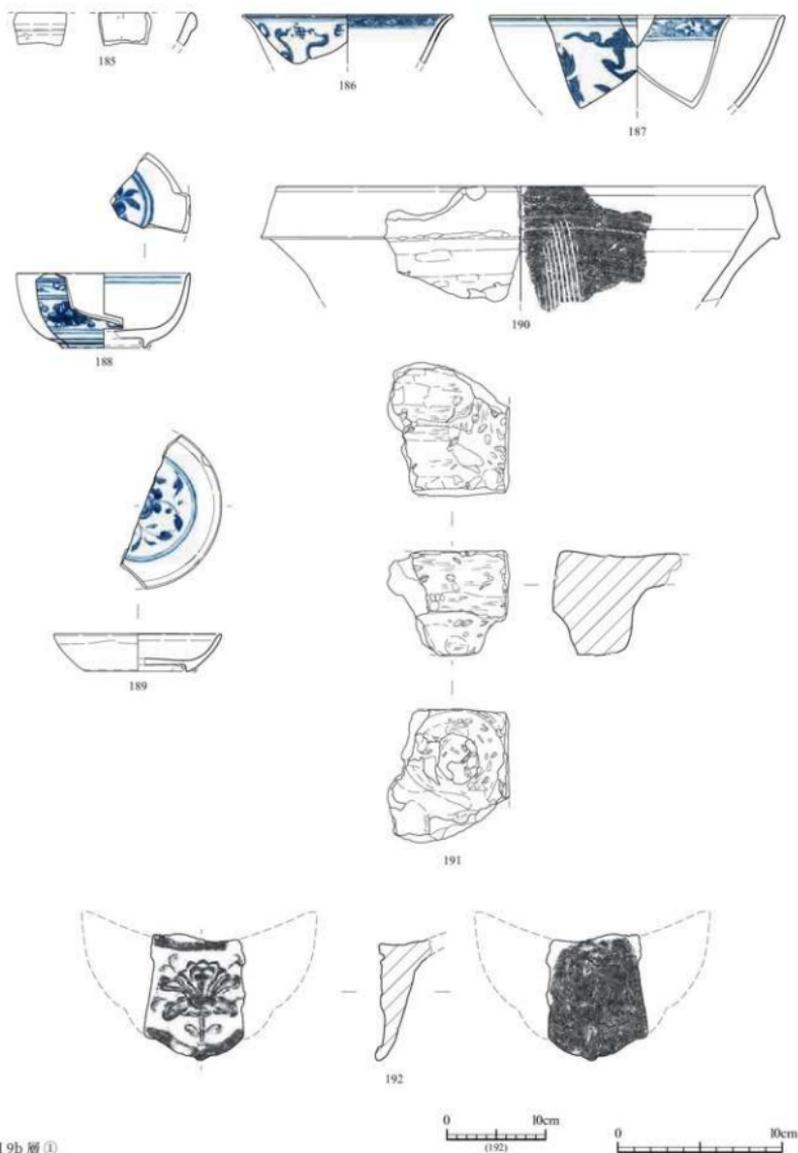
III 3c 層 ①



第177図 V区の出土遺物17

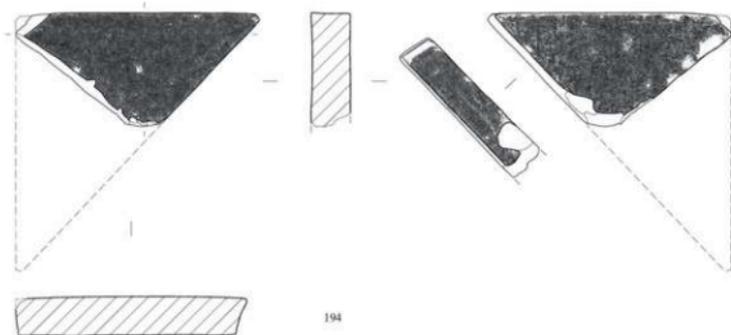
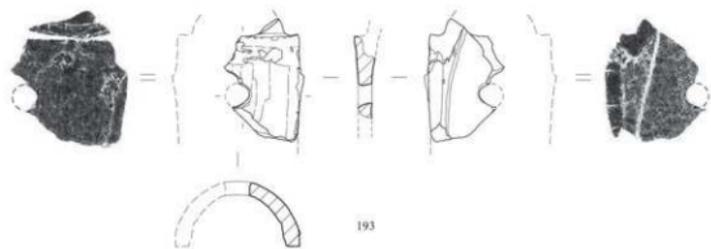


第178図 V区の出土遺物18

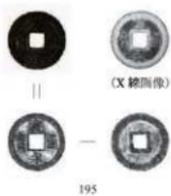


III 9b 層 ①

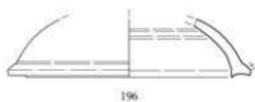
第 179 図 V 区の出土遺物 19



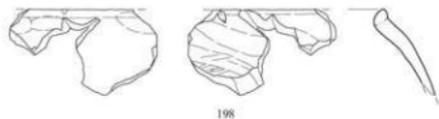
III 9b 層 ②



III 14 層



トレ 10 III 17 層

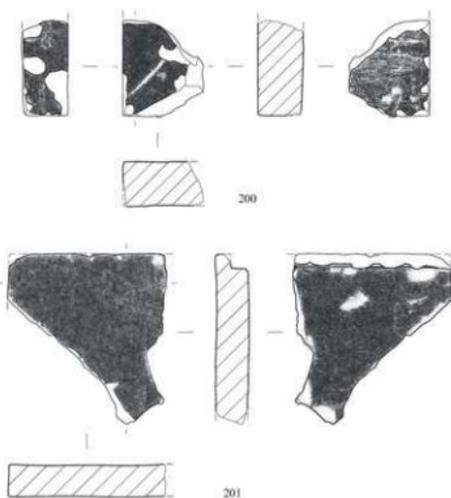


トレ 10 III 19 層



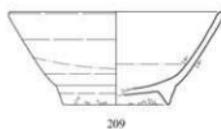
トレ 10 III 20 層

第 180 図 V 区の出土遺物 20



トレ14 西 III 25 層

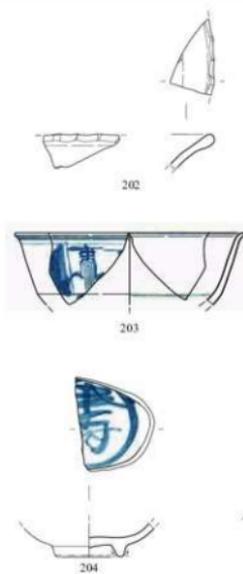
0 10cm



209

トレ8 III 30 層

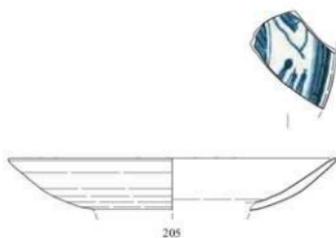
0 5cm



202

203

204



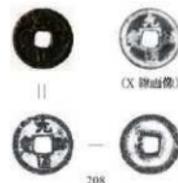
205



206



207

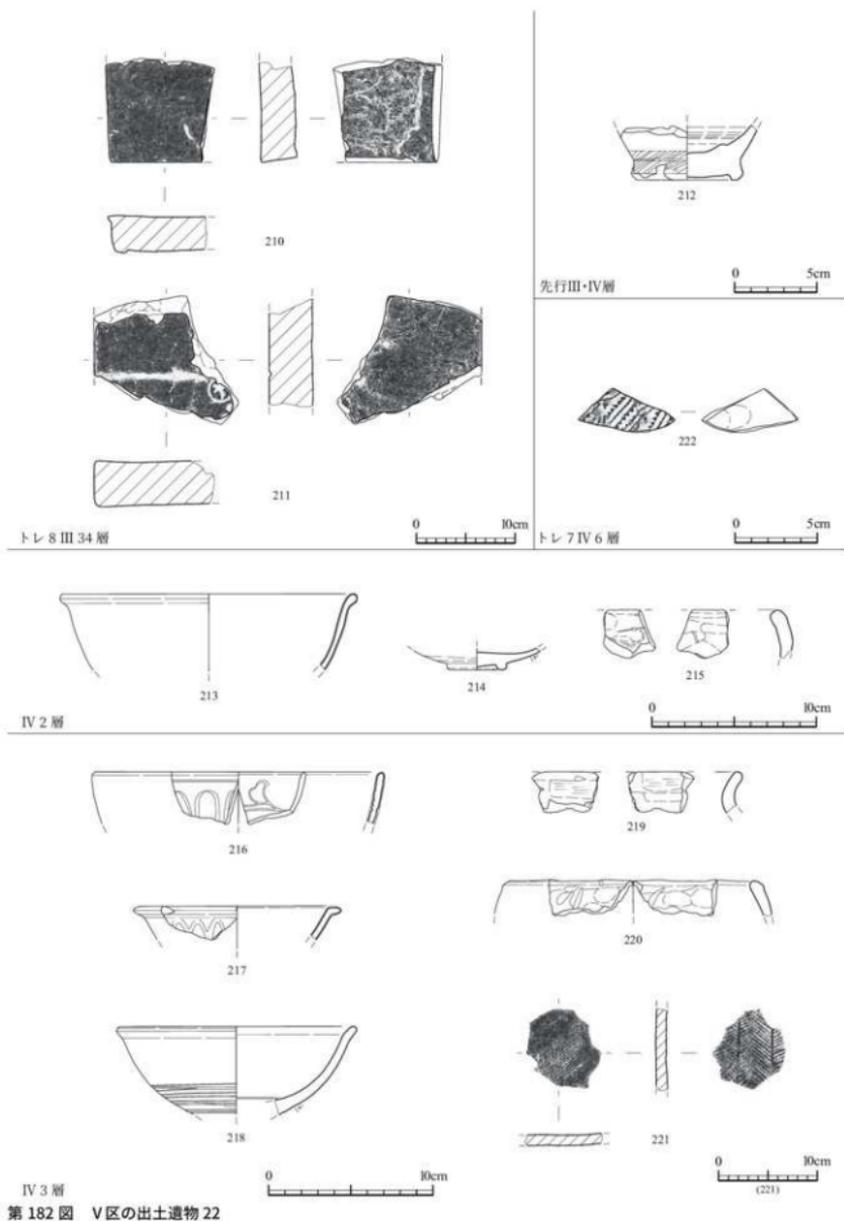


208

0 3cm  
(208)

トレ8 III 27 層

第181図 V区の出土遺物21



## 第2項 埴瓦Ⅷ類

埴瓦の分類のⅧ類について記す。平成25・26年度に実施した中城御殿跡(首里高校内)の調査で出土した軒平瓦(沖縄県立埋蔵文化財センター2017第14図13)と酷似した遺物が複数出土した。これらは完形品ではないが、後述の特徴から共通形態の埴瓦の一種と推察した。この埴瓦には県内で報告されている何れの系統の瓦にみられない特徴が確認されたため、本報告書では他の瓦類と項目を分けて報告する。

Ⅷ類は建造物の棟に葺かれる「棟瓦」としての用途を想定している。想定した完形品の部位をA、B、Cに分け、A部は頂部、C部は側面部、B部はAとCの間の平坦部とした。内外面の呼称は丸瓦や雁振瓦を参考に、外側を凸面、布目痕の残る内側を凹面とした。文様の有無によって有文タイプと無文タイプに大別し、更に有文タイプはⅠ類、Ⅱ類の2つ、無文タイプはⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類の3つに細分した。ただし、A部のみ資料は有文、無文どのタイプの一部か判然としないため、この分類は適応していない。また、有文・無文どちらにも分けられない特徴をもつものが1点確認されたが、それは「その他」とした。

各種破片にほぼ共通している特徴には、明朝系瓦をはじめとする屋瓦と比較して厚手であること、有文・無文タイプ共に凹面に布目痕があり、A部からC部に至る形状が緩やかな階段状を成していることが挙げられる。

想定される形態的特徴から、棟瓦の一種である丸棧二重箱冠瓦(坪井197722頁)に似たものと考えられる。色調は表面が灰色や褐色を呈するものが多い。

各種概要は以下のようになる。

**有文タイプ** 何れもC部に珠文を内包する左巻き三つ巴文が施される。C部上端に緑が付き、未確認であるものの破損具合から下部にも緑があった可能性がある。

**有文Ⅰ類** 明瞭な三つ巴文がC部正面観中央部寄りに付される。凹面に浅い抉りを施す。

**有文Ⅱ類** 有文Ⅰ類と比較して段差が低く難な三つ巴文がC部正面観右寄りに付される。明確に残存していないが、複数文様を施していた痕跡があるものもみられる。

**無文タイプ** 文様を施さないもの。

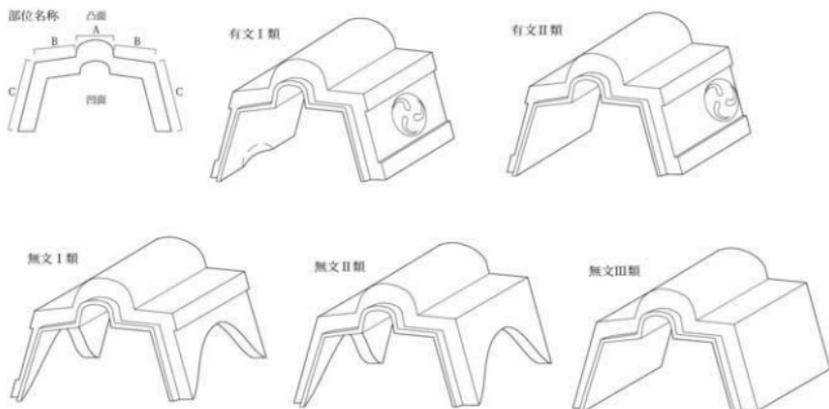
**無文Ⅰ類** C部上面に緑が付き、下端はアーチ状に整形されていたと想定される。

**無文Ⅱ類** C部に緑や文様が無く、下端をアーチ状に整形していたと想定される。

**無文Ⅲ類** C部に緑や文様が無く、下端が平坦で直線的に整形される。C部凹面の下部は布目痕がみられない。

**その他** 有文、無文いずれかに分類はできないが、厚手で緑のような造形が確認される。

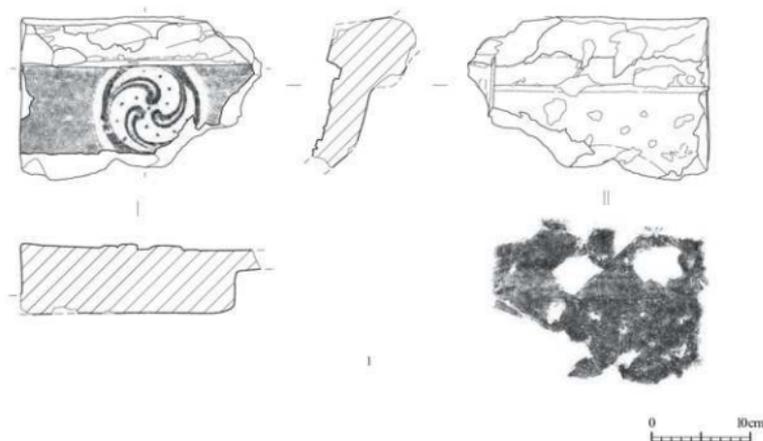
本報告では、先に述べた平成25・26年度に実施した中城御殿跡(首里高校内)の調査で出土した軒平瓦(第184図1)も、再度観察を行い併せて報告する。



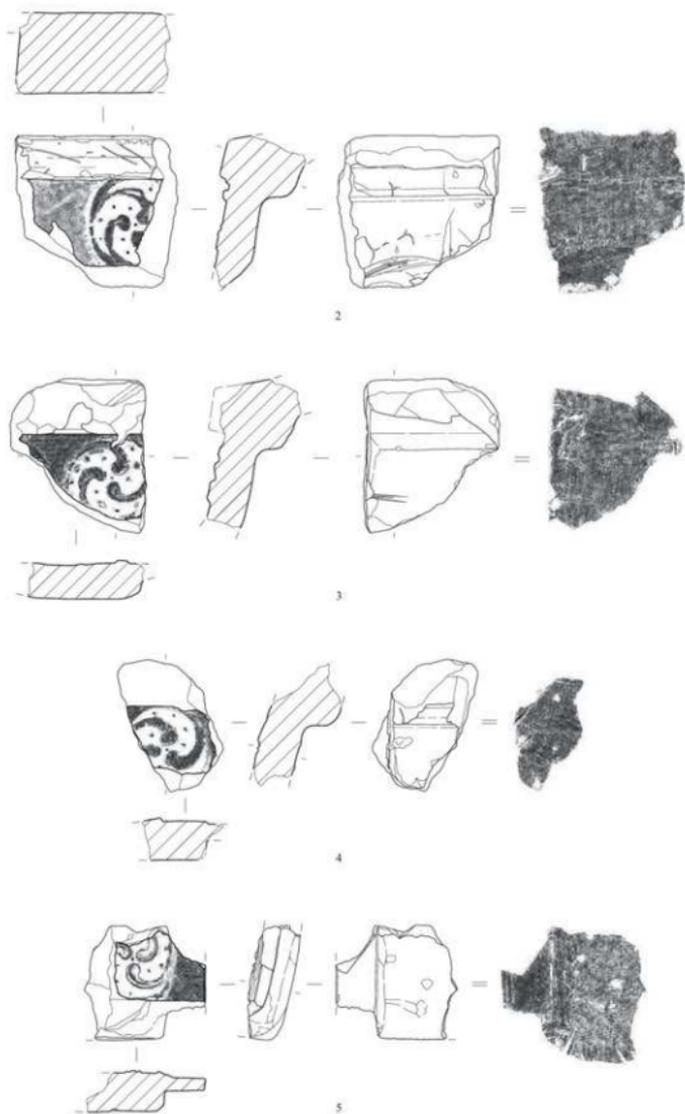
第183図 埴瓦Ⅷ類 模式図

第39表 埴瓦Ⅷ類観察一覧

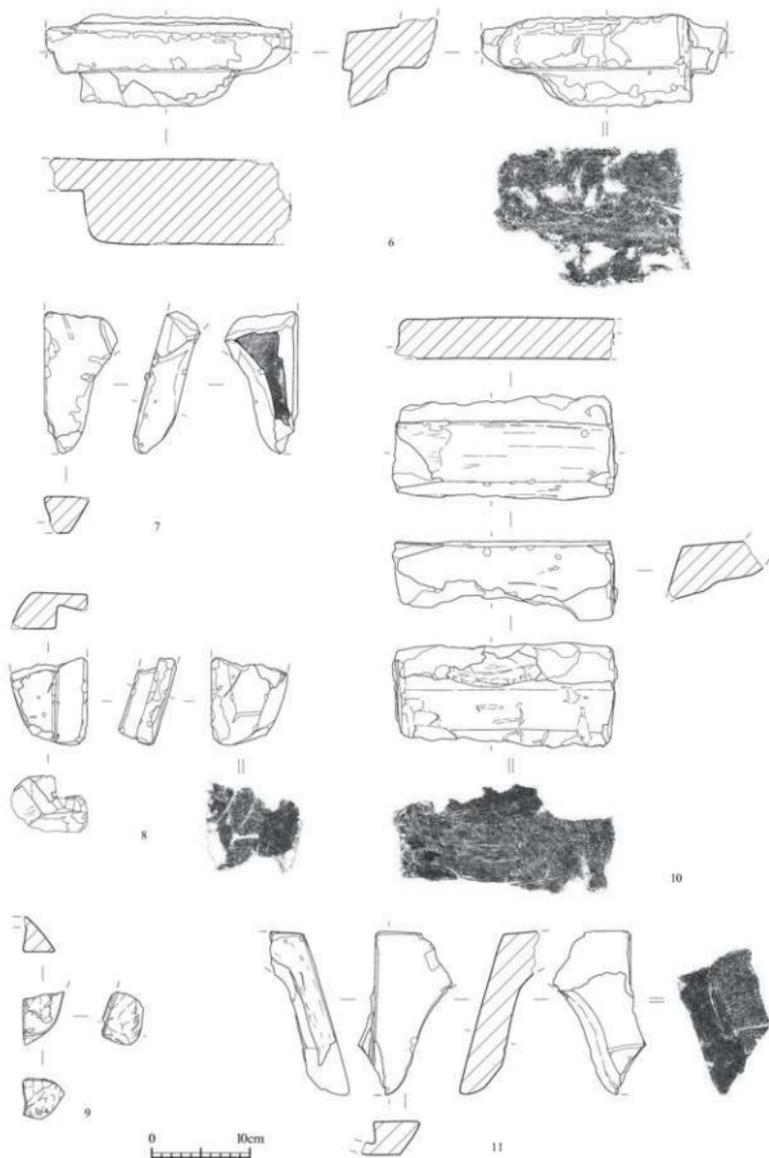
検出番号 図版番号	番号	種類	分類	部位	法量(cm)			観察事項	出土位置	
					口径	器高	底径		遺構	層序
第184図 図版21	1	埴瓦	Ⅷ類 有文Ⅰ	B～C部	-	-	-	灰色を呈する。凸面C部中央に珠文13点を内包する左巻き三つ巴文を配する。凹面に摩滅した布目紋が全体的にみられ、下端は緩やかな曲面の造形。両側端部には噛み合わせの段差が一部残る。	I区 SG-2	
	2	埴瓦	Ⅷ類 有文Ⅰ	B～C部	-	-	-	灰色を呈する。凸面C部に珠文(残存8点)を内包する左巻き三つ巴文を施す。凹面は段差を伴い、C部下端に緩やかな曲面の伏りを施す。伏りの箇所以外は布目紋が残る。	V区トレ 145F5001	造成2・3層
	3	埴瓦	Ⅷ類 有文Ⅱ	B～C部	-	-	-	褐色を呈する。凸面C部に珠文(残存12点)を内包する左巻き三つ巴文を施す。三つ巴文の左側に僅かな盛り上がりがあり、別に文様があった可能性がある。凹面には布目紋が残る。	IV区	I層
第185図 図版21	4	埴瓦	Ⅷ類 有文Ⅱ	B～C部	-	-	-	褐色を呈する。凸面C部に珠文(残存7点)を内包する左巻き三つ巴文を施す。凹面に段を成形し、全面に布目紋が残る。	V区トレ 135F5001	I層
	5	埴瓦	Ⅷ類 有文Ⅱ	C部	-	-	-	褐色を呈する。凸面C部に珠文(残存8点)を内包する左巻き三つ巴文を施す。また、三つ巴文はC部端部に寄る。凹面に布目紋が残る。	V区トレ 135F5001	造成2・3層
第186図 図版21	6	埴瓦	Ⅷ類 無文Ⅰ	B～C部	-	-	-	褐色を呈する。凸面C部上部に縁が付き、側面部には噛み合わせの段差が残る。C部両側面下部は欠損しているが、元はアーチ状の造形が想定される。凹面には布目紋が残る。	III区	III 6d層
	7	埴瓦	Ⅷ類 無文Ⅰ もしくはⅡ	C部	-	-	-	灰色を呈する。凸面C部は全体的に平用に整形され、中央に金属粒が付着する。凹面に布目紋が残る。下端から上部にかけて流らかな曲面に整形される。	V区	III 2層
	8	埴瓦	Ⅷ類 無文Ⅰ もしくはⅡ	C部	-	-	-	灰色を呈する。C部下平片。側面に噛み合わせの段差があり、凹面に布目紋が残る。	V区	III 3 c層
	9	埴瓦	Ⅷ類 無文Ⅰ もしくはⅡ	C部	-	-	-	灰色を呈する。C部下平片。凸面に漆喰が付着。	V区	III 3 a層
	10	埴瓦	Ⅷ類 無文Ⅱ	B～C部	-	-	-	灰色を呈する。凸面BとC部は平用に整形され、両側端部に噛み合わせの段差を残す。C部下端やや中央を曲面に伏せる整形がされる。凹面に布目紋が残る。	V区	III 3 a層
	11	埴瓦	Ⅷ類 無文Ⅱ	B～C部	-	-	-	灰色を呈する。凸面C部は平用。側面に噛み合わせの段差が僅かに残る。凹面に布目紋が残る。下端から流らかな曲面を築くように整形。	V区	III 3 c層
	12	埴瓦	Ⅷ類 無文Ⅱ もしくはⅢ	A～C部	-	-	-	褐色を呈する。凸面A部は曲面に整形。BとC部は平用平面になる。凹面は緩やかな段になり、布目紋が残る。	V区トレ 135F5001	I層
	13	埴瓦	Ⅷ類 無文Ⅱ もしくはⅢ	B～C部	-	-	-	灰色を呈する。B部とC部が合わさる角と考えられる。噛み合わせの段差が明確に残る。	V区トレ 145F5001	造成2・3層
	14	埴瓦	Ⅷ類 無文Ⅱ	B～C部	-	-	-	褐色を呈する。凸面は平用なB部から屈折して、C部も下部まで平用に整形する。C部下端は直線的に造形され、凹面はC部下部を除いて布目紋が残る。	IV区	III 20層
	15	埴瓦	Ⅷ類 その他	-	-	-	-	褐色を呈する。全形想定不可。有文タイプ。無文Ⅰにみられるような縁が残る。それに略三角形に破損した部位が直角に接合する。裏面には緩やかな曲面の造形がみられる。	V区トレ 135F5001	造成2・3層
	16	埴瓦	Ⅷ類	A部	-	-	-	灰色を呈する。厚手で平円状に造形される。雙面押のものか、細い筋がみられる。凹面に布目紋が残る。	V区トレ 14区	III 25層
17	埴瓦	Ⅷ類	A～B部	-	-	-	灰色を呈する。A部は平円状に成形され、凸面B部は平明面が鋭くと想定される。凹面は布目紋が残るが、一部ナシ溝がみられる。	V区トレ 14区	II層	



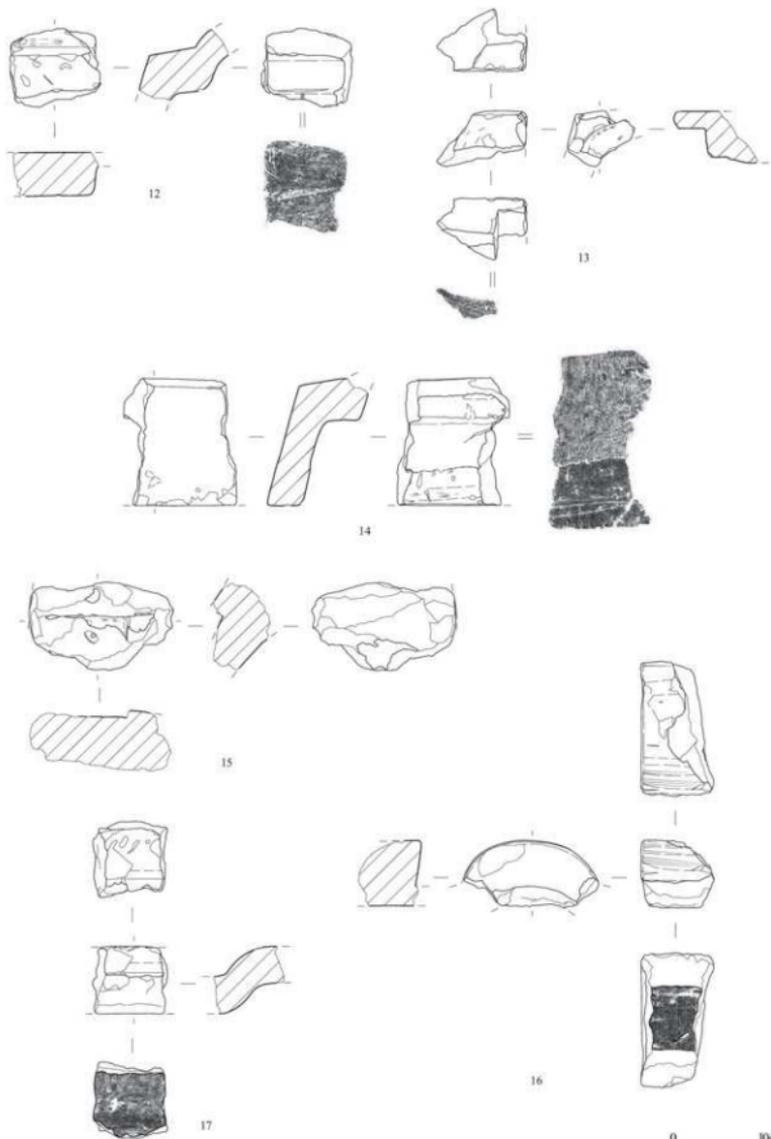
第184図 埴瓦Ⅷ類1



第 185 図 埴瓦Ⅶ類 2



第186図 埴瓦Ⅷ類3



第 187 図 埴瓦Ⅷ類 4

## 第3節 自然遺物

## 第1項 脊椎動物遺体

今回の発掘調査で得られた脊椎動物遺体については、当センター所蔵の現生標本を参考にして同定作業を行った。加えて、丸山真史氏(東海大学)に同定作業中に調査指導をしていただいた。

分析資料はすべて発掘現場で取り上げられた資料(ピックアップ資料)である。一部の遺構では土壌サンプル採取の際に、サンプル内に脊椎動物遺体の混入が確認されたが、土壌サンプルについては洗浄作業等を実施することが出来ていないので、反映していないデータとなる。

今回の発掘調査では、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類が確認された(第40表)。

同定資料に関しては、同定標本数(NISP)で示しており、最小個体数については算出していない。また、イヌ?などの同定判断が困難な資料に関しては、各遺構の集計

第40表 脊椎動物遺体種類一覧

軟骨魚綱	CHONDRICTHYES
サメ類	Lamniformes
エイ目	Rajiformes
硬骨魚綱	OSTEICTHYES
ダツ科	Belontiidae
ボラ科	Mugilidae
カマス科	Sphyraenidae
ハタ科	Serranidae
アジ科	Carangidae
タチウオ科	Trichiuridae
シイラ属	Coryphaena
フエダイ科	Lutjanidae
クロダイ属	Acanthopagrus
タイ科	Sparidae
ヨコシマクロダイ	Monotaxis grandoculis
フエフキダイ科	Lethrinidae
ベラ科	Labridae
ブダイ科	Scaridae
ニザダイ科	Acanthuridae
アイゴ科	iganidae
モンガラカワハギ科	Balistidae
爬虫綱	REPTILIA
ウミガメ類	Cheloniidae
鳥綱	AVES
カモ類	Anatidae (small)
ニワトリ	Gallus gallus
哺乳綱	MAMMALIA
ネズミ科	Muridae
イヌ	Canis familiaris
ネコ	Felis catus
ウマ	Equus ferus
ウシ/ウマ	Bos taurus/Equus ferus
ブタ	Sus scrofa domesticus
イノシシ/ブタ	Sus scrofa/S. s.domesticus
ヤギ	Capra hircus
ウシ	Bos taurus
イルカ	Delphinidae
ジュゴン	Dugong dugong

表には記載しているが、地区毎集計表やグラフデータからは省いている。例外として、ブタ?、イノシシ/ブタ?はイノシシ/ブタとして集計した。ウシ?、ウマ?、ウシ/ウマ?はウシ/ウマとして集計した。

**魚類** 種同定に用いる部位を主に顎骨、前上顎骨、歯骨、角骨、方骨を基本的な対象とし、必要に応じて擬頭骨、舌顎骨、口蓋骨、上顎頭骨、下顎頭骨、棘などを加えた。大型魚種と思われる椎骨等も見られたが、サメ類以外に関しては椎骨での同定作業は行わなかった。

**爬虫類** III区及びV区で出土している。

**鳥類** ニワトリは烏口骨、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、手根中手骨、大腸骨、脛足根骨、足根中足骨を同定した。

カモ科の可能性のある資料も得られている。また、鳥類に属し、同定が困難な資料についてはトリとして報告する。

**哺乳類** イノシシ/ブタとしたものが最も多く出土しており、それに類するが同定が困難な資料をイノシシ/ブタ?として集計した。ウシ、ウマも同様でどちらかに属するものはウシ/ウマとした。今回の調査では、イノシシ/ブタ、ウシ、ウマ、ウシ/ウマの遺体が主体を占めている。

第41表 脊椎動物遺体 出土数

種類	地区	III区 破片数	IV区 破片数	V区 破片数
魚類		231	261	1754
爬虫類		1	0	1
鳥類		47	48	96
哺乳類		1050	552	1785
合計		1329	861	3636

第42表 魚類 同定標本数(NISP)

種類	地区	III区 (N = 113)	IV区 (N = 91)	V区 (N = 856)
サメ類		13	5	8
エイ目		0	0	2
ダツ科		0	0	16
ボラ科		0	0	1
カマス科		0	0	1
ハタ科		8	12	187
アジ科		13	4	36
タチウオ科		0	0	2
シイラ科		0	0	6
フエダイ科		1	3	14
クロダイ属		2	1	22
タイ科		8	6	17
フエフキダイ科		50	37	280
ベラ科		6	13	65
ブダイ科		12	9	166
ニザダイ科		0	1	14
アイゴ科		0	0	4
モンガラカワハギ科		0	0	15
合計		113	91	856

その他、イヌ、ネコ、ヤギ、ネズミ科に属するものが出土している。

骨長計測は、鳥類・哺乳類で実施し、計測は丸山真史氏に行っていた。対象部位・計測位置はDriessh1976に従っている。

**出土遺体群の概要** 包含層からの出土が多いが、遺構に伴い出土した資料もある。

魚類椎骨や部位不明破片も合わせて集計したものが第41表である。調査区全体の同定標本数では、III～V地区で鳥類及び哺乳類の比率が5割以上を占める状況となっている(第188図)。

V区では哺乳類の出土が最も多く5割を超える状況となるが、魚類の出土も多い。出土数において哺乳類が主体を占める状況については、首里城地区内の出土様相とは異なる可能性が高い。しかしながら、遺構の土壌サンプルの水洗選別を実施しておらず小型魚類の資料は算出してないため、若干の変動がおこる可能性はある。

次に、出土した種類ごとに述べる。

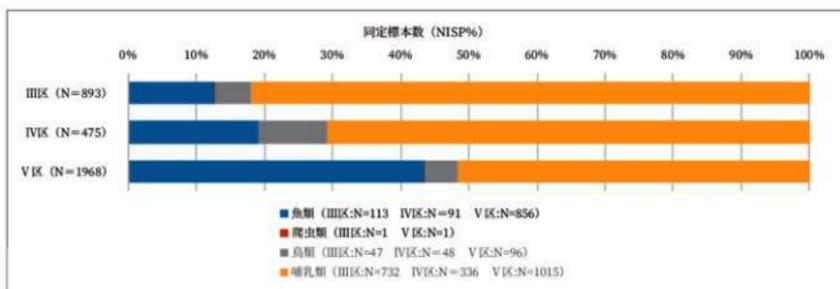
**魚類**(第42表・第189図) サメ類(ネズミザメ科)、エイ目、ダツ科、ボラ科、カマス科、ハタ科、アジ科、タチウオ科、シイラ科、フェダイ科、クロダイ属、タイ科、フエキダイ科、ベラ科、ブダイ科、ニザダイ科、アイ

ゴ科、モンガラカワハギ科が見られる。特にV区から多く出土している状況が確認できた。

**III区** 少数ではあるが石組土坑(SM)とした遺構からまとまって出土している状況がある。これらの石組土坑は、SM3001の年代観から17世紀前半～後半と考えられる近世期の遺構である。この遺構からは、フエキダイ科、ブダイ科の資料が得られている。近い時期の類例として首里城跡御内原北地区のシーリ遺構がある。このシーリ遺構では土壌の水洗選別によって微細骨資料とともに、トビウオ科やアジ科小型種などの分類群が得られている状況も考えると、今回の遺構からも検出される可能性は高い。

**IV区** 包含層からの出土が中心となるが、遺構内からも出土している。

**V区** 包含層及び遺構内から出土しており、特にSM5002及びSF5001構築時の造成土から多く出土している(第43表・第190図)。SM5002は、ヤコウガイ殻などが多く得られている遺構だが、魚骨の出土数も多い。同定標本数ではブダイ科が最も多く、次いで、アジ科、フエキダイ科と続く。ハタ科、ダツ科なども出土しており、III区の石組土坑に比べ、多くの種類が確認されている。これらは食料残渣と考えられる。



第188図 脊椎動物遺体 同定標本数(NISP%)



第189図 魚類 同定標本数(NISP%)

SF5001は、中城御殿跡と植園跡の間で確認した道跡である。構築時期は近世期であるが、造成に用いられた土はグスク期の土の可能性が非常に高いため、SF5001構築層出土魚骨は近世期より古い時期の様相を示していると考えられる。フエフキダイ科、ブダイ科、ハタ科、ペラ科が多くみられる。

**爬虫類** ウミガメと考えられる資料がⅢ区のⅡ層から得られている。Ⅴ区からは、カメ類と考えられる資料がSF5001から得られている。

**鳥類(第44表)** ニワトリ、カモ科?、トリが得られている。

**Ⅲ区** 遺構内でまとまって出土するのは少数であるが、SM3001～3003の石組土坑内から出土している。

**Ⅳ区** 包含層からの出土が中心となるが、わずかに遺構内からも出土している。

**Ⅴ区** 包含層及び遺構内から出土している。魚骨と同様に、SM5002及びSF5001構築層からの出土が主体を占める。

**哺乳類(第45表・第191図)** ネズミ科、イヌ、ネコ、ウマ、ウシ/ウマ、ブタ、イノシシ/ブタ、ヤギ、ウシ、ジュゴン?が得られている。

全体を通して、イノシシ/ブタが主体を占め、次いでウシ、ウシ/ウマとなる。食用として持ち込まれたものが多いと考えられる。

**Ⅲ区** SM3001～3003でまとまって出土しており、遺構内出土でもイノシシ/ブタが主体を占めている。

**Ⅳ区** 包含層からの出土が中心となるが、わずかに遺構内からも出土している。

**Ⅴ区** 包含層及び遺構内から出土している。SM5002では魚骨等の出土が多かったが、哺乳類の出土は少なかった。少数ながら、ウシが見られた。

SF5001構築層からは、多くの動物骨が出土しているが、イノシシ/ブタが主体を占める。次いでウシの出土が多い。ウシ/ウマも見られ、ネコやヤギも得られている。

次に少数出土事例資料の概要を述べる。

#### ネズミ科

**Ⅲ区** SM3001で1点、Ⅲ層から2点出土している。

Ⅳ区及びⅤ区からの出土はなかった。

#### イヌ

**Ⅲ区** I層で3点、Ⅲ2c層から1点出土しており、SA3001構築層にあたる近世期の造成土中からの出土である。イヌに属する可能性のあるものがSM3006から1点、Ⅲ層から1点出土している。

**Ⅳ区** すべてI層及びⅢ層から出土している。

**Ⅴ区** すべてI層からの出土である。

第43表 Ⅴ区 遺構出土魚類 同定標本数(NISP)

種類	遺構	SM5002 (N=115)	SF5001造成土 (N=493)
エイ目		2	0
ダツ科		10	4
ボラ科		0	1
カマス科		1	0
ハタ科		12	102
アジ科		15	8
タチウオ科		2	0
シイラ科		0	6
フエダイ科		6	6
クロダイ属		9	5
タイ科		3	6
フエフキダイ科		15	184
ペラ科		8	38
ブダイ科		31	106
ニザダイ科		1	10
アイゴ科		0	3
モンガラカワハギ科		0	14
合計		115	493

第44表 鳥類 同定標本数(NISP)

種類	Ⅲ区 (N=47)	Ⅳ区 (N=48)	Ⅴ区 (N=96)
ニワトリ	36	43	77
ニワトリ?	0	0	12
カモ科?	1	0	0
トリ	10	5	7
合計	47	48	96

第45表 哺乳類 同定標本数(NISP)

種類	Ⅲ区 (N=732)	Ⅳ区 (N=336)	Ⅴ区 (N=1015)
ネズミ科	3	0	0
イヌ	4	10	4
ネコ	6	5	4
ウマ	16	27	39
ウシ/ウマ	90	46	95
ブタ	1	3	0
イノシシ/ブタ	534	212	669
ヤギ	19	8	23
ウシ	59	25	180
ジュゴン?	0	0	1
合計	732	336	1015

第46表 Ⅲ区 遺構出土哺乳類 同定標本数(NISP)

種類	Ⅲ区 (N=38)	Ⅳ区 (N=5)	Ⅴ区 (N=119)
ネズミ科	1	0	0
ウマ	1	0	0
ウシ/ウマ	2	0	4
イノシシ/ブタ	33	4	115
ヤギ	1	0	0
ウシ	0	1	0
合計	38	5	119

第47表 Ⅴ区 遺構出土哺乳類 同定標本数(NISP)

種類	遺構	SM5002 (N=15)	SF5001造成 (N=335)
ネコ		0	1
ウマ		1	2
ウシ/ウマ		1	15
イノシシ/ブタ		2	277
ヤギ		0	3
ウシ		11	37
合計		15	335

## ネコ

Ⅲ区 SX3001から2点、他はⅠ～Ⅲ層で出土している。ネコに属すると考えられるものがSM3008から1点出土している。

Ⅳ区 Ⅰ層及びⅢ層から出土している。

Ⅴ区 SF5001の構築層から1点、他はⅠ層及びⅡ層からの出土である。

## ブタ

Ⅲ区 Ⅰ層からの出土。どのような経緯で出土したかは不明。

Ⅳ区 ブタ及びブタと同一可能な資料はSK4007から1点、他はⅠ層及びⅢ層から出土している。

Ⅴ区からの出土はなかった。

## ヤギ

Ⅲ区 SM3001で1点、SX3004から1点出土している。他はⅠ～Ⅲ層から出土している。遺構外出土の資料にはカットマークやチョップマークが確認できるものもあり、食用とされた可能性がある。Ⅲ層出土のものも多いため、近世期頃には持ち込まれていた可能性が高い。

Ⅳ区 すべてⅠ～Ⅲ層で出土している。

Ⅴ区 SF5001構築層のなかでも黒味の強い層から出土している。他はⅠ～Ⅲ層で出土しており、Ⅳ層でも1点確認できた。

## ジュゴン/イルカ類

Ⅳ区 イルカ類に属する可能性のあるものがⅠ層から1点出土している。

Ⅴ区 ジュゴン?がSP5032内から1点出土している。

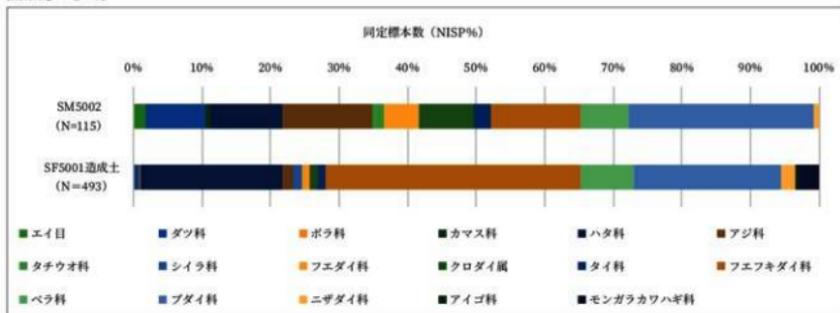
Ⅰ区の遺構 平成25・26年度に実施した調査の際に、魚骨及び動物骨が多く出土した遺構が多くあった。その中でも特徴的なSK22、SK51、SK59の遺構について、改めて集計作業を行った(第48表・第192図)。

SK22 イノシシ/ブタの出土が多く、次いでウシ/ウマ、ウシ、ウマが出土している。

SK51 出土数が最も多い土坑。特にイノシシ/ブタの出土が多く、次いでウシが多い。ウマも一定数出土している。

SK59 イノシシ/ブタが多く、ウマ、ウシが次いで多く出土している。

3つの遺構から出土する動物骨では、イノシシ/ブタにカットマークが見られ、ウマにも確認できる。ウシは打ち割りされている資料もあった。他にも、螺旋状剥片なども見られることから、ほとんどの資料が食料残渣と考えられる。



第190図 V区 遺構出土書類 同定標本数(NISP%)



第191図 哺乳類 同定標本数(NISP%)

**まとめ** 今回の発掘調査では、様々な脊椎動物遺体が出土しているが、全体的な組成では、鳥類・哺乳類が多く出土し、魚類が少ない傾向が見られた。この傾向は、首里城内の発掘調査成果とはやや異なるため、食性利用もしくは廃棄方法が違っていた可能性が高い。

魚類については、フェエキダイ科が最も多く、ハタ科、ブダイ科、ペラ科の出土が見られた。これらの魚種利用は首里城地区と類似している傾向があるが、フェエキダイ科が最も多い点で、やや異なる可能性がある。

III区の廃棄土坑(SM)に伴う魚骨は、フェエキダイ科とタイ科、ブダイ科であった。他魚種については椎骨等の同定不可資料に混ざっている可能性もあるが、今回確認できなかった。出土量としては少量にとどまることも特徴といえる。

V区では、SM5002とSF5001構築層でまとめて出土が確認された。SM5002では様々な魚種が確認できた。SF5001構築層では、ハタ科、フェエキダイ科、ペラ科、ブダイ科が主体を占める状況が確認できた。

鳥類では、III～V区をとおしてニワトリが多く確認でき、食用に用いられたものと考えられる。

哺乳類では、III～V区をとおして、イノシシ/ブタが

主体を占める。それ以外では、ウシ、ウマ、ウシ/ウマが多い状況が確認できた。これらはおそらく家畜類で構成されていると考えられる。首里城内での調査成果で、哺乳類が確認されているものでは、イノシシ/ブタが多いという特徴は共通している。

イスやネコがIII層から出土しており、近頃頃には飼育等がされていたと考えられるが、出土数も少ないことから検討が必要である。

ヤギはIII層から出土しており、わずかではあるが、SF5001構築層からも出土している。出土資料の中にはカットマークなどの人為的解体痕がみられた。グスク期の土を造成に用いた土中から出土が認められるため、食用とされ、その残滓が造成土中に混入していた可能性が考えられる。

第48表 I区 遺構出土哺乳類 同定標本数(NISP)

種類	遺構	SK22 (N = 100)	SK51 (N = 391)	SK59 (N = 108)
ウマ		2	42	16
ウシ/ウマ		4	16	7
イノシシ/ブタ		91	241	70
ウシ		3	92	15
合計		100	391	108



第192図 I区 遺構出土哺乳類 同定標本数(NISP%)

第49表 I区鳥類・哺乳類集計表 a

SK22

分類	部位	残存状況	成長	加工	観察	左	右	一	計	
ニワトリ? / ウズラ?	手組中手骨	ほぼ完形	—	—	—		2		2	
ウマ	肋骨	骨幹部	—	切頭?	—			1	1	
	肋骨(木脚骨)	—	—	—	—			1	1	
ウシ / ウマ	肋骨	骨幹部	—	—	—			2	2	
	肋骨骨	—	—	—	—			1	1	
イノシシ / ブタ	大腿骨	遠位部	未結合(遠位端)	—	—		1		1	
	上腕骨	上顎体 d113	d113 未検出	—	—	1			1	
	上顎骨	上顎体 d12	—	—	—		1		1	
	遊離歯(上顎)	d12	—	—	—	1			1	
	椎骨(軸椎)	—	—	未結合	—	—			1	1
		—	—	—	—	—			1	1
	椎骨(頸椎)	破片	—	—	—	—			2	2
		—	—	未結合	—	—			2	2
		—	—	—	切頭	—			1	1
	椎骨(頸椎?)	破片	—	—	—			1	1	
	椎骨(頸椎)	棘突起	—	—	—			1	1	
	椎骨(頸椎)	—	—	—	—	—			1	1
	椎骨(尾椎)	—	—	—	—	—			2	2
	椎骨	—	—	—	—	—			2	2
	肋骨	近位端	—	—	—	—	1			1
		近位端-遠位部	—	切頭?	—	—	1	1		2
		近位端-骨幹部	—	—	—	—	1	1		2
		近位部	—	—	—	—	1	1		2
		近位部-遠位部	—	切頭?	—	—		1		1
		骨幹部	—	切断	—	—		1		1
		—	—	—	—	—	1		7	8
		近位部	—	—	—	—			1	1
	肩甲骨	骨幹部	—	—	—	—			1	1
		骨幹部-遠位部	未結合(遠位端)	切頭?	—	—		1		1
		骨幹部-遠位端	—	切頭?	—	—	1			1
		遠位部	未結合(遠位端)	—	—	—	1			1
	上腕骨	近位部-遠位部	未結合(近・遠位端)	切頭? 切頭?	—	1			1	
椎骨	近位端-骨幹部	—	—	—	—	1			1	
	近位部-遠位端	未結合(近・遠位端)	—	—	—	1	1		1	
	近位部-骨幹部	未結合?(近位端)	—	—	—		1		1	
	骨幹部	—	—	—	—			1	1	
	近位端-遠位部	—	切頭?	—	—		1		1	
	近位端-骨幹部	—	—	—	—		1		1	
尺骨	近位部	—	—	—	—	1			1	
	—	—	—	—	—	2			3	
	近位部-骨幹部	未結合(近位端)	切頭?	—	—	1			1	
	遠位端	未結合(遠位端)	—	—	—		1		1	
手組骨(中間)	—	—	—	—		1		1		
手組骨	橈骨	—	—	—	—	1			1	
	尺骨	—	—	—	—	1			1	
中手骨(III)	—	—	—	—	1			1		
中手骨(IV)	ほぼ完形	—	—	—	—	1	1		2	
中手骨(V)	近位端-遠位部	未結合(遠位端)	—	—	—	1			1	
中手骨(V)	ほぼ完形	—	—	—	—		1		1	
寛骨	腸骨	—	未結合	—	—	1			1	
	腸骨-坐骨	—	—	—	—	1			1	
	坐骨	未結合	—	—	—	1	1		2	
	—	—	—	—	—		1		1	
大腿骨	近位骨端(破片)	未結合(近位端)	—	—	—	1			1	
	近位部-遠位部	未結合(近・遠位端)	切頭?	—	—	1			1	
	—	未結合(近位端)	切頭?	—	—	1	1		2	
	遠位端	未結合(遠位端)	—	—	—		1		1	
膝蓋骨	—	—	—	—		1		1		
脛骨	ほぼ完形	—	—	切頭?	—		1		1	
	近位端	未結合(近位端)	—	—	—		1		1	
	近位部-遠位端	—	切頭?	—	—		1		1	
	近位部-遠位部	未結合(近・遠位端)	—	—	—	1			1	

第50表 I区鳥類・哺乳類集計表 b

SK22 (つづき)

分類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	—	計
イノシシ/ブタ	脛骨	近位部-遠位部	未癒合(遠位端)				1		1
		遠位端	—	螺旋状割片			1		1
	腓骨	完形	—					1	1
		骨幹部	—				2		
	距骨	—	—				1		1
	踵骨	—	—				1		1
	足根骨(IV)	—	—				1		1
	中足骨(IV)	近位端-遠位部	—				1		1
	中足骨(V)	近位端-遠位部	未癒合(遠位端)				1		1
	指骨(基節骨)	完形	—					1	1
ウシ	椎骨(胸椎?)	椎体	—					3	1
	中手骨	骨幹部	—	打ち崩り				1	1
	膝蓋骨	ほぼ完形	—			1			1
不明	—	—					2	2	
合 計						34	36	34	104

SK51

分類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	—	計	
ウマ	下顎骨	結合部	—	打ち崩り?			1		1	
		近位部	—				2		2	
	肋骨	近位部-遠位部	—	カサネ			1			1
		近位部-骨幹部	—		カサネ			2	2	4
		骨幹部	—					1		1
			—		カサネ				13	13
	仙骨	—	—			1	2	7	10	
	肩甲骨	骨幹部	—	—				1		1
		骨幹部-遠位端	—		叩切, カサネ		1			1
	橈骨	骨幹部	—		螺旋状割片, カサネ		1			1
			—		カサネ			1		1
	寛骨	寛骨臼付近	—		打ち崩り				1	1
	寛骨臼-坐骨	—	—		カサネ			1		1
大腿骨	遠位端	未癒合(遠位端)					1		1	
脛骨	近位部-遠位部	—	カサネ			1			1	
指骨(末節骨)	—	—						1	1	
ウマ?	肋骨	骨幹部	—					5	5	
		骨幹部-遠位部	—	カサネ				1		1
ウシ/ウマ	椎骨(胸椎)	破片	—					3	3	
	椎骨(胸椎?)	—	幼獣?					1	1	
	椎骨(胸椎)	棘突起	幼獣?	カサネ				1	1	
	椎骨(胸椎?)	棘突起	—					1	1	
肋骨	骨幹部	—	—					2	2	
	遠位部	—	—					1	1	
イノシシ/ブタ	頭頂骨	前頭骨	未癒合			1	1		2	
		側頭骨	未癒合			1			1	
	頭蓋骨	頭頂骨+後頭骨	未癒合		カサネ		1			1
			未癒合		叩切			1		1
		後頭骨(頭蓋骨突起)	未癒合				1			1
	上顎骨	上顎体 sP2dP3dP4M1	M2 未萌出				1			1
		上顎体 sP2dP4M1	M1 咬痕はほとんどなし					1		1
		上顎体	—				1			1
	下顎骨	下顎体 sP2dP3dP4M1	M2 未萌出				1			1
		下顎体 /M1	P4M2 未萌出					1		1
		下顎体 /M1M2	M3 未萌出					1		1
		歯突起	—					1		1
		歯槽溝	臼歯	—					1	1
		椎骨(腰椎)	—	—					1	1
		椎骨(胸椎)	棘突起	—	カサネ				2	2
	椎骨(胸椎?)	棘突起	—						7	7
		—	未癒合						3	3
椎骨(胸椎)	棘突起	—	—	カサネ				1	1	
		—	未癒合					1	1	
	棘突起	—	—	カサネ				1	1	
		—	未癒合						1	1
椎骨(胸椎)	棘突起	—						1	1	
	—	未癒合						1	1	
不明	—	—						1	1	
	—	未癒合						3	3	

第51表 I区鳥類・哺乳類集計表c

SK51 (つづき)

分類	部位	現存状況	成長	加工	調査	左	右	—	計	
イノシシノブタ	樞骨(腹椎?)	棘突起	—					1	1	
	樞骨	—	未癒合					1	1	
	樞骨(山椎)	—	未癒合					1	1	
	樞骨(尾椎)	—	—					1	1	
	肋骨	破片	—					1	1	
	肋骨(第1)	近位端	—			2			2	
	肋骨	近位端	—	—	切断		1			1
							2	1		3
							1			1
					ホトテマ?		1			1
						3			3	
						10	16		26	
近位端-遠位部		—	—	—	ホトテマ?		1			1
							1			1
							3			3
近位端-骨幹部		—	—	—	ホトテマ?				2	
							1			1
近位部		—	—	—	—				3	
								7		
近位部-遠位部		—	—	—	—		2			2
								1		
近位部-骨幹部		—	—	—	—			3		3
								2	1	
骨幹部	—	—	—	—			1		1	
							1			1
骨幹部	—	—	—	—			1		1	
							1			1
骨幹部	—	—	—	—			1		1	
							1			1
骨幹部	—	—	—	—			1		1	
							1			1
骨幹部-遠位部	—	—	—	—		5	7		35	
							1			1
遠位部	—	—	—	—		1			1	
							1			1
肩甲骨	近位部	—	—	—		1			1	
							1			1
	近位部-遠位端	—	—	—	—		1	1		1
								1		
	骨幹部	—	—	—	—		1			1
								1		
	骨幹部-遠位部	—	—	—	—		1			1
								1		
	骨幹部-遠位端	—	—	—	—			1		1
								1		
前縁	—	—	—	—			1		1	
							1	1		2
後縁	—	—	—	—		2	2		4	
							1			1
遠位端	—	—	—	—		1	1		2	
							1			1
上腕骨	近位部	—	未癒合(近位端)	—		1			1	
							1			1
	近位部	—	—	未癒合(近位端)	—		1			1
								1		
	近位部-遠位部	—	—	未癒合(近位端)	—		1			1
								1		
	近位部-遠位端	—	—	未癒合(近・遠位端)	—			1		1
								1		
	近位部-骨幹部	—	—	未癒合(近位端)	—		1			1
								1		
骨幹部	—	—	—	—			1		1	
							1			1
橈骨	—	—	未癒合(遠位端)	—		1			1	
							1			1
尺骨	—	—	未癒合(近位端)	—		1	1		2	
							2			2
中手骨(III)	—	—	未癒合(遠位端)	—			1		1	
							1			1
中手骨(IV)	—	—	未癒合(遠位端)	—			1		1	
							1			1
寛骨	肩骨	—	未癒合	—		1			1	
							1			1
	肩骨-坐骨	—	—	—	—			1		1
								1		
	肩骨-寛骨白	—	—	—	—		1			1
								1	1	
	寛骨臼付近	—	—	未癒合	—			1		1
								1		
	坐骨	—	—	未癒合	—		1			1
								1		
大腿骨	—	—	未癒合	—		2			2	
							1			1
近位部-遠位部	—	—	未癒合(近・遠位端)	—		1			1	
							1			1

第52表 I区鳥類・哺乳類集計表 d

SK51 (つづき)

分類	部位	保存状況	成長	加工	測定	左	右	—	計	
イノシシ/ブタ	大腸骨	近位部・遠位部	—	カット			1		1	
		骨幹部	小さい、幼獣					1	1	
		骨幹部・遠位部	未癒合(遠位端)					1	1	
			—					1	1	
		遠位部	未癒合(遠位端)		カット		1		1	
		遠位端	未癒合(遠位端)				1		1	
	膝蓋骨	ほぼ完成	—					1	1	
		近位端	未癒合(近位端)					1	1	
	脛骨	近位端・骨幹部	未癒合(近位端)		カット			1	1	
		近位部	未癒合(近位端)				1		1	
		近位部・遠位端	未癒合(近位端)		内側剪断			1	1	
		近位部・遠位部	未癒合(近・遠位端)		カット		1		1	
			—				1		1	
		近位部・骨幹部	未癒合(近位端)					1	1	
		骨幹部	—					1	1	
		骨幹部・遠位部	未癒合(遠位端)		叩切			1	1	
	脛骨?	遠位部?	未癒合(近位端)				(右?) 1		1	
	腓骨	近位部・遠位部	未癒合(遠位端)					1	1	
		骨幹部	—					1	2	
距骨	ほぼ完成	—					2	2		
踵骨	ほぼ完成	—					1	1		
イノシシ/ブタ?	中足骨(III)	近位部・遠位部	未癒合(遠位端)			1	1	2		
	中足骨(IV)	近位部・遠位部	未癒合(遠位端)				3	3		
	指骨(基節骨)	ほぼ完成	—				1	1		
	近位部・遠位部	未癒合(近位端)				1		1		
ウシ	肩甲骨?	骨幹部	—					(不明) 1	1	
	肩蓋骨	側頭骨(脛骨突起)	—	カット			1	1		
	下顎骨	下顎枝(前位)	—	打ち折り			1	1		
	椎骨(軸椎)	—	—	叩切				1	1	
	椎骨(胸椎)	—	—					2	2	
	椎骨(胸椎)	棘突起	—	カット				2	2	
	肋骨	近位端	—		カット		1		1	
		近位端・遠位部	—		カット			1	1	
		近位端・骨幹部	—		切断, カット		1	1	2	
		近位部	—		切断		1		1	
		近位部・遠位部	—		カット			1	1	
		近位部・骨幹部	—		カット		1		1	
			—		カット				6	6
		骨幹部	—		カット?				1	1
		骨幹部・遠位部	—		カット				10	10
		遠位部	—						1	1
	肩甲骨	近位部・骨幹部	—					1	1	
		骨幹部	—				1		1	
		棘突	—						1	1
		上腕骨	近位部・遠位端	未癒合(近位端)		カット		1	1	
腕骨		骨幹部・遠位部	未癒合(遠位端)		螺旋状剥片, カット		1	1		
遠位端		—		打ち折り			1	1		
手根骨(II+III)		—	—				1	1		
手根骨(中間)		—	—				1	1		
手根骨(IV)		—	—		カット			1	1	
		—					1	1		
手根骨	橈側	—					1	1		
	尺側	—				1		1		
	近位端	—		螺旋状剥片		1	1	2		
	近位端・骨幹部	—		螺旋状剥片, カット		1		1		
中手骨	遠位端	未癒合(遠位端)		打ち折り			1	1		
	遠位部	—		螺旋状剥片		1	1	2		
大腸骨	遠位部	未癒合(遠位端)		螺旋状剥片, カット		1		1		
	遠位部	—		螺旋状剥片		1		1		
距骨	遠位端	—		螺旋状剥片		1		1		
	破片	—		螺旋状剥片			2	2		

第53表 I区鳥類・哺乳類集計表 e

SK51 (つづき)

分類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	—	計	
ウシ	趾骨	—	—	—	—		1		1	
	踵骨	—	未癒合	—	—	1			1	
			—	ホトトギ	—	1	1		2	
			—	—	—	1	1		2	
	足脛骨(IV)	—	—	—	—	1			1	
	足脛骨(IV+中心)	—	—	—	—		2		2	
	中足骨	近位端-骨幹部	—	—	螺旋状剥片	—	1			1
		近位端-骨幹部 1/2 平切	—	—	螺旋状剥片, 打ち痕あり	—		1		1
		骨幹部-遠位端	—	—	螺旋状剥片	—	1			2
		遠位端	—	—	螺旋状剥片	—		(右?) 1		1
		破片	—	—	螺旋状剥片	—	1			1
	中手骨/中足骨	遠位端	未癒合?(遠位端)	—	—			1		1
	指骨(基節骨)	完形	—	—	ホトトギ	—		1		1
		近位部-遠位部	—	—	—	—	3	2		5
		近位部-遠位端	—	—	—	—		1		1
		—	—	—	—	—		1		1
	指骨(中節骨)	完形	—	—	叩切	1			1	
指骨(末節骨)	完形	—	—	—	3	3		6		
ウシ?	趾骨	近位部	—	ホトトギ?	—		1		1	
合 計						100	150	140	391	

SK59

分類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	—	計		
ウマ	頭蓋骨	断頭骨	—	—	—	1			1		
	趾骨	近位部-遠位部	—	—	—		1			1	
		近位部-骨幹部	—	—	ホトトギ	—		1		1	
	手根骨(III)	—	—	—	—	1			1		
	手根骨(IV)	—	—	—	—		1		1		
	中手骨(II+III+IV)	近位端-骨幹部	—	—	—		1		1		
	中手骨(III)	完形	—	—	ホトトギ	—	1		1		
	大腸骨	近位部-骨幹部	未癒合(近位端)	—	ホトトギ	—	1			1	
		遠位部	未癒合(遠位端)	—	ホトトギ	—	1			1	
	脛骨	近位部-遠位端	未癒合(遠位端)	—	ホトトギ	—	1			1	
	腓骨	完形	—	—	—	1			1		
	踵骨	完形	—	—	—	1			1		
	指骨(基節骨)	骨幹部-遠位端	—	—	ホトトギ, 打ち痕あり	—		1		1	
	指骨(中節骨)	—	—	—	—	—		1		1	
	指骨(末節骨)	—	老齢?	—	骨病変?	—		1		1	
	ウシ/ウマ	橈骨(胸椎)	轉突起	—	ホトトギ	—		1		1	
		趾骨	近位部	—	—	—		1		1	
イノシシ/ブタ	上顎骨	上顎体/dP3dP4M1	M1 やや咬耗	—	—		1		1		
	遊離歯(上顎)	M2	M3 未萌出	—	—		1		1		
	下顎骨	下顎内	—	—	—	—		1		1	
		関節突起	—	—	—	—		1		1	
	遊離歯(下顎)	C	—	—	—	1			1		
	椎骨(胸椎)	—	—	未癒合	—			2	2		
	椎骨(胸椎)	—	—	未癒合	—			1	1		
	椎骨(胸椎)	—	未癒合(前後椎体)	切断	—			1	1		
	イノシシ/ブタ	椎骨(胸椎)	—	—	ホトトギ	—		1		1	
			—	—	—	—		1		1	
		趾骨	近位部-遠位部	—	—	—	—	2			2
			近位部-骨幹部	—	—	ホトトギ	—	2			2
			近位部	—	—	—	—		3		3
			近位部-遠位部	—	—	ホトトギ	—	1			1
			近位部-骨幹部	—	—	—	—	1	3		4
		趾骨	骨幹部	仕磨~老齢(老齢より?)	—	ホトトギ	—			1	1
				—	—	ホトトギ	—			3	3
—			—	—	—				1	1	
—	—		—	—		1			1		
遠位部	—		—	—	—			1	1		
肩甲骨	骨幹部-遠位端	—	—	—	—	1			1		
上腕骨	近位骨端(破片)	未癒合(近位端)	—	—	—	1	1		2		
	近位部	未癒合?(遠位端)	—	—	—		1		1		

第54表 I区鳥類・哺乳類集計表 f

SK59 (つづき)

分類	部位	残存状況	成長	加工	網皮	左			個数	
						左	右	—		
イノシシ/ブタ	上顎骨	近位部・遠位端	未癒合(近位端)	ホトホト?			1		1	
		骨幹部・遠位部	未癒合(遠位端)	ホトホト?		2			2	
		遠位部	未癒合(遠位端)	ホトホト?		1			1	
	横骨	近位部・骨幹部	未癒合(近位端)			1			1	
	横骨・尺骨	ほぼ完成	横骨・尺骨も癒合				1		1	
	中手骨(III)	ほぼ完成	—				1		1	
		近位端・骨幹部	—				1		1	
	中手骨(IV)	近位端・遠位部	未癒合(遠位端)				2		2	
		ほぼ完成(一部欠損)	—				1		1	
	寛骨	腸骨	未癒合				1		1	
		腸骨・坐骨	—				1	1	2	
		寛骨臼付面	—					1	1	
		近位部・遠位部	未癒合(近・遠位端)	ホトホト?		1			1	
	大腿骨	—	—					1	1	
		骨幹部	—					1	1	
		骨幹部・遠位部	未癒合(遠位端)				1		1	
	脛骨	近位部	未癒合(近位端)				1		1	
		骨幹部	—				1	1	2	
	腓骨	近位端	—				1		1	
		骨幹部	—		ホトホト?		1		1	
距骨	—	—		ホトホト?			1	1		
中足骨(IV)	ほぼ完成	—				1		1		
不明	—	—						1	1	
ウシ	遊離歯(上顎)	P4	咬耗かなり進む			1			1	
	近位部・骨幹部	—	—	切断?			1		1	
		近位部・骨幹部	—	—	DP		1			1
	肋骨	—	—	ホトホト?					1	1
		骨幹部	—	—					1	1
	横骨・尺骨	近位端・骨幹部	—	螺旋状割片, ホトホト?			1			1
		近位部・遠位部	—	ホトホト?			1			1
	寛骨	腸骨	—			1			1	
	大腿骨	近位部・遠位端	未癒合(近・遠位端)	ホトホト?			1			1
		遠位端	未癒合(遠位端)	ホトホト?			1			1
		—	—	螺旋状割片, ホトホト?				1		1
	脛骨	近位骨端(破片)	未癒合(近位端)	ホトホト?			1			1
		近位部・骨幹部	未癒合(近位端)				1			1
	足脛骨(IV+中心)	—	—			1			1	
	中手骨/中足骨	遠位端	—						1	1
	合 計						37	41	30	108

第55表 I区イノシシ/ブタ臼歯計測値(mm)

遺構	部位	顎骨	左/右		左					右				
			部分	P4	dP2	dP3	dP4	M1	dP2	dP3	dP4	M1	M2	
SK51	上顎骨	上	長	8.1	9.5	10.1	11.8	7.9	×	10.2	13			
			幅	4.3	—	9.1	11.5	4.2	×	9.1	11.5			
	遊離歯	下	長	6.3	8.6	14.4	12.4					13.3	15.4	
			幅	3.2	4	7.1	8.6					9.3	11.9	
SK59	上顎骨	上	咬耗指数	—	—	d	c			10.2	11.1	12.5		
			長							7.3	9.3	12.1		
	遊離歯	下	長										16.7	
			幅											14.2
	下顎骨	下	長									11.6		
			幅									8.8		
	咬耗指数										c~d			

第56表 I区ウシ臼歯計測値(mm)

遺構	部位	顎骨	左/右	
			部分	P4
SK59	遊離歯	上	長	17.8
			幅	19

第57表 Ⅲ区魚類出土状況

SA3001

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
フエフキダイ科	前上顎骨		1			1
	歯骨	1				1
種不明	未分類				5	5
合計		1	1	0	5	7

SA3006

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
ハタ科	主上顎骨		1			1
フエフキダイ科	歯骨				1	1
合計		0	1	0	1	2

SM3001

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
フエフキダイ科	神経頭蓋骨(破片)			1		1
	歯骨				1	1
	前上顎骨	1				1
	歯骨		1			1
	上顎蓋骨		1			1
	後頭蓋骨		1			1
ブダイ科	舌顎骨		1			1
種不明	神経頭蓋骨(破片)			1		1
	上顎蓋骨	1				1
	未分類				8	8
合計		2	4	2	9	17

SM3002

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
種不明	未分類				3	3

SM3003

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
フエフキダイ科	上顎蓋骨	1	1			2
種不明	神経頭蓋骨(破片)			1		1
	前上顎骨		1			1
	舌顎骨	1	1			2
	尾骨				1	1
	未分類				7	7
合計		2	3	1	8	14

SM3006

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
タイ科	歯骨				1	1
種不明	未分類				2	2
合計		0	0	0	3	3

SM3007

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
フエフキダイ科	口蓋骨	1				1

SM3008

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
種不明	未分類				1	1

SP3027

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
タイ科	角骨		1			1

SX3001

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
フエフキダイ科	歯骨				1	1
種不明	未分類				1	1
合計		0	0	0	2	2

SX3005

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
ハタ科	主上顎骨		1			1

層序

分類	出土地			
	I期	II期	III期	IV期
サメ類	13			
ハタ科			5	1
アジ科	6		7	
フエフキダイ科	1			
クロダイ属	1			1
タイ科	1		3	2
フエフキダイ科	12	3	18	4
ベラ科	1	1	4	
ブダイ科	1	1	6	3
種不明	20	9	37	18
合計	56	14	80	29

第58表 IV区魚類出土状況

SK4006

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
ハタ科	口蓋骨	1				1
	歯骨		1			1
	方骨		1			1
アジ科	横骨				1	1
	角骨	1	1			2
フエダイ科	左上顎骨		1			1
	口蓋骨	1				1
フエフキダイ科	神経歯蓋骨(破片)			1		1
	横骨				4	4
	左上顎骨	1				1
	前鰓蓋骨	1				1
	尾骨			1	1	1
ベラ科 (シロクラベラ)	横骨				6	6
	口蓋骨	1				1
	角骨	1				1
	舌顎骨	1				1
ベラ科	尾舌骨			1	1	1
	上腹鰓骨		1			1
ブダイ科	方骨		1			1
	舌顎骨	1				1
	主鰓蓋骨		1			1
種不明	神経歯蓋骨(破片)			1		1
	横骨				3	3
	舌顎骨	1				1
	主鰓蓋骨	1				1
	尾骨			2	2	2
	尾節棒状骨			1	1	1
	未分類				89	89
	合計		9	9	2	108

SM4002

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
フエダイ科	舌顎骨	1				1
タイ科	歯骨		1			1
フエフキダイ科	横骨				2	2
種不明	歯骨	1				1
合計		2	1	0	2	5

SM4003

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
種不明	横骨				1	1

SR4001

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
アジ科	角骨		1			1
種不明	未分類				3	3
合計		0	1	0	3	4

SR4005

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
ベラ科 (シロクラベラ)	歯骨	1				1
種不明	未分類				1	1
合計		1	0	0	1	2

順序

分類	出土地		
	I期	II期	III期
サメ類	1		4
ハタ科	2		7
アジ科			
フエダイ科			
クロダイ属			1
タイ科		2	3
フエフキダイ科	2	2	23
ベラ科			1
ブダイ科	1		5
ニギダイ科			1
種不明	6	2	58
合計	12	6	103

第59表 V区魚類出土状況 a

SA5002

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
ハタ科	横骨				1	1
	主上顎骨	1				1
	口蓋骨	1				1
	歯骨	1				1
	方骨	1				1
	主鰓蓋骨		1			1
	腹鰭骨	1				1
アジ科	横骨				1	1
クロダイ属	横骨				1	1
	前上顎骨	1				1
フエキダイ科	横骨				1	1
	前上顎骨	1	1			2
	主上顎骨	1				1
	角骨		1			1
	方骨		1			1
	主鰓蓋骨		1			1
	上腹鰭骨	1				1
ペラ科 (シロクラペラ)	角骨		1			1
ブダイ科	横骨				3	3
	前上顎骨		2			2
ニギダイ科	横骨				1	1
	舌顎骨	1				1
	橋脚				1	1
種不明	上腹鰭骨		1			1
	未分類				24	24
合 計		9	10	0	33	52

SA5005

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
ハタ科	腹鰭骨		1			1
フエキダイ科	横骨				1	1
	前上顎骨	1				1
種不明	未分類				1	1
合 計		1	1	0	2	4

SD5002

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
フエキダイ科	前上顎骨		1			1
	方骨	1				1
合 計		1	1	0	0	2

SD5004

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
フエキダイ科	横骨				1	1
	前上顎骨	1				1
ブダイ科	横骨				1	1
種不明	神経鰓蓋骨(鏡片)			1		1
	横骨				1	1
	未分類				2	2
合 計		1	0	1	5	7

SF5001

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
ダツ科	前上顎骨	1	1			2
	歯骨		1			1
	上顎歯骨		1			1
ボラ科	主鰓蓋骨	1				1
ハタ科	横骨				3	3
	横骨				25	25
	前上顎骨	2	4			6
	主上顎骨	7	5			12
	口蓋骨	1				1
	歯骨	1	4			5
	角骨	1	2			3
	方骨	1	2			3
	舌顎骨	2	5			7
	前鰓蓋骨	4	1			5
	主鰓蓋骨	2	2			4
	角舌骨	3	4			7
	上腹鰭骨	4	2			6
腹鰭骨	5	10			15	
アジ科	横骨				5	5
	主鰓蓋骨	1				1
	角舌骨	1				1
	上腹鰭骨		1			1
アジ科?	横骨				3	3
シイラ科	横骨				5	5
	前上顎骨	1				1
シイラ科?	歯骨	1				1
フエキダイ科	横骨				2	2
	前上顎骨		1			1
	角骨	2				2
クロダイ属	角舌骨	1				1
	前上顎骨	2				2
タチ科	歯骨	1	2			3
	横骨				4	4
フエキダイ科 (ヨコシマクロダイ)	前鰓蓋骨	1				1
	上腹鰭骨	1				1
フエキダイ科	横骨				4	4
	腹鰭骨(鏡片)				4	4
	横骨				50	50
	前上顎骨	8	16			24
	主上顎骨	9	4			13
	口蓋骨	9	7			16
	歯骨	3	6	2		11
	歯			1		1
	角骨	5	6			11
	方骨	1	1			2
舌顎骨	2	9			11	

第60表 V区魚類出土状況 b

SF5001 (つづき)

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
フエフキダイ科	前鰓蓋骨	4	10			14
	主鰓蓋骨	1	3			4
	角舌骨	3	1			4
	上腹鰓骨	2				2
	腹鰓骨		2			2
	尾骨			9	9	
	尾厚棒状骨			1	1	
ペラ科 (シロクラペラ)	標骨				5	5
	前上顎骨	6	2			8
	主上顎骨	1				1
	歯骨	3	1			4
	上顎鰓骨	1				1
	基鰓骨	3				3
ペラ科	標骨			11	11	
	前上顎骨		1			1
	歯骨	1	1			2
	下顎鰓骨			1	1	
	上腹鰓骨		1			1
ブダイ科	標骨				30	30
	前上顎骨	9	12			21
	主上顎骨	4				4
	歯骨	6	5			11
	方骨	2	1			3
	下顎鰓骨			2	2	
	舌顎骨	4	5			9
	前鰓蓋骨	9				9
	主鰓蓋骨	3	4			7
	尾舌骨			2	2	
	上腹鰓骨	1	1			2
	尾骨			4	4	
	尾厚棒状骨			2	2	
ニオダイ科	標骨				4	4
	舌顎骨		1			1
	主鰓蓋骨	2	1			3
	腹鰓骨	1				1
	基鰓骨			1		1
アイゴ科	神経鰓蓋骨(鱗片)		1			1
	標骨			2	2	
モンガラ カワハギ科	尾舌骨		3	3		
	第1背鰓棘		7	7		
	担鰓骨		4	4		
種不明	神経鰓蓋骨(鱗片)			53	53	
	標骨			2	2	
	標骨			12	12	
	前上顎骨	2				2
	主上顎骨			1		1

SF5001 (つづき)

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
種不明	口蓋骨	1	1	1		3
	歯骨	2	1			3
	角骨			1		1
	舌顎骨				1	1
	前鰓蓋骨	2	1	4		7
	主鰓蓋骨		2	1		3
	角舌骨	2				2
	尾舌骨				1	1
	上腹鰓骨			3		3
	腹鰓骨		2			2
	基鰓骨			1		1
	尾骨				4	4
	未分類					434
軟甲類(カニ)	不動指	1				1
合計		155	163	21	694	1033

SK5001

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
種不明	未分類					1
合計						1

SK5004

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
ハタ科	歯骨		1			1
アジ科	標骨				1	1
タイ科	前上顎骨	1				1
フエフキダイ科	前上顎骨	1				1
	口蓋骨		1			1
	歯骨	1				1
ブダイ科	標骨				1	1
種不明	未分類				3	3
合計		3	2	0	5	10

SM5002

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
エイ目	標骨				2	2
ダツ科	前上顎骨	3	5			8
	歯骨	2				2
カマス科 (オニカマス?)	歯骨?	(左?)1				1
	口蓋骨	1				1
ハタ科	歯骨	1	2			3
	角骨	2				2
	方骨	2				2
	舌顎骨	1				1
	前鰓蓋骨	2				2
	腹鰓骨		1			1
アジ科	標骨				15	15
タチウオ科	歯骨	1	1			2
タチウオ科?	前上顎骨/歯骨			1		1
フエダイ科	前上顎骨	1	3			4

第61表 V区魚類出土状況c

SM5002 (つづき)

分類	部位	左/右		不明	一	計	
		左	右				
フエダイ科	歯骨		1			1	
	角舌骨		1			1	
クロダイ属	前上顎骨		3			3	
	主上顎骨		1			1	
	歯骨	3	1			4	
	角骨		1			1	
タイ科	標骨				1	1	
	口蓋骨	1				1	
	主眼蓋骨	1				1	
フエキダイ科	標骨				8	8	
	前上顎骨	1				1	
	歯骨		1			1	
	角骨		1			1	
	前眼蓋骨	1				1	
	主眼蓋骨	1				1	
	上眼蓋骨	1	1			2	
	前上顎骨	2	1			3	
ベラ科 (シロクラベラ)	歯骨	1	1			2	
	上眼蓋骨		1			1	
	下眼蓋骨			2		2	
	標骨				1	1	
ブダイ科	前上顎骨	5	4			9	
	歯骨	4	2			6	
	上眼蓋骨	5	3			8	
	下眼蓋骨				5	5	
	主眼蓋骨	1				1	
	尾骨				1	1	
	標骨				1	1	
ニザダイ科	神経眼蓋骨(破片)			16		16	
	標骨				5	5	
種不明	歯骨	2				2	
	歯			1		1	
	方骨	1	1			2	
	前眼蓋骨	1				1	
	主眼蓋骨	1	1			2	
	角舌骨		1			1	
	眼蓋骨			1		1	
	未分類				64	64	
	合計		49	36	21	105	211

SP5032

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
アジ科	標骨				3	3
	標骨				1	1
種不明	標骨				1	1
	未分類				3	3
合計		0	0	0	7	7

SP5044

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
種不明	未分類				1	1
	未分類				1	1

SP5065

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
ハタ科	角舌骨			1		1
	角舌骨			1		1

SS5002

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
アジ科	標骨				1	1
	歯骨		1			1
種不明	未分類				4	4
	未分類				4	4
合計		0	1	0	5	6

SS5004

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
ハタ科	眼蓋骨		1			1
	主眼蓋骨		1			1
合計		2	1	0	0	3

SX5001

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
ハタ科	歯骨		1			1
	歯骨		1			1
クロダイ属	歯骨		1			1
	標骨				1	1
ベラ科	標骨				1	1
	尾骨				1	1
種不明	未分類				3	3
	未分類				3	3
合計		1	1	0	6	8

SX5005

分類	部位	左/右		不明	一	計
		左	右			
フエキダイ科 (ヨコシマクロダイ)	前上顎骨		1			1
	主上顎骨			1		1
種不明	未分類				2	2
	未分類				2	2
合計		0	1	1	2	4

順序

分類	出土地	I層	II層	III層	IV層
サメ類		2	5	1	
ダツ科		1	1		
ハタ科		8	8	43	2
ハタ科?			1	4	
アジ科		3	1	2	1
フエダイ科		1	1		
クロダイ属		2	3		
タイ科		2	1	4	
フエキダイ科		11	15	34	2
ベラ科		2	3	10	1
ブダイ科		3	7	12	
アイゴ科		1			
モンガラカワハギ科		1			
種不明		49	61	88	8
軟甲類(カニ)		1			
合計		82	108	202	14

第62表 Ⅲ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 a

SA3001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ	上腕骨	遠位部	—	加工	—	—	1	—	—	1
種不明	脛骨	骨幹部	—	—	—	—	—	1	—	1
	部位不明	破片	—	—	—	—	—	—	6	6
合 計						0	1	1	6	8

SA3006

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ニワトリ	上腕骨	骨幹部	—	—	—	—	—	1	—	1
	大腿骨	近位端	—	—	—	—	—	1	—	1
		遠位端	—	—	—	—	—	—	1	—
	中足骨	骨幹部	—	—	—	—	1	—	—	1
ウシ/ウマ	蹠骨	白濁	—	—	—	—	—	2	—	2
種不明	部位不明	破片	—	—	—	—	—	—	1	1
合 計						0	1	5	1	7

SA3008

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	破片	—	—	—	—	—	—	1	1

SD3001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	破片	—	—	—	—	—	—	1	1

SK3001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウマ	蹠骨(上型)	P2	未出土	—	—	—	1	—	—	1
	肋骨	骨幹部	—	—	—	—	—	1	—	1
イノシシ/ブタ	大腿骨	遠位骨端のみ	未癒合(遠位端)	—	—	—	1	—	—	1
	脛骨	近位部	—	—	—	—	1	—	—	1
イノシシ/ブタ?	椎骨	椎体板	—	—	—	—	—	—	1	1
ウシ	踵骨	近位骨端のみ	—	—	—	1	—	—	—	1
種不明	部位不明	破片	—	—	—	—	—	—	5	5
合 計						1	3	1	6	11

SK3002

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ	肋骨	近位部-骨幹部	—	—	—	1	—	—	—	1

SM3001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計	
ニワトリ	椎骨	完形	—	—	—	—	1	—	—	1	
	尺骨	近位部-骨幹部	—	—	—	1	—	—	—	1	
ネズミ	大腿骨	骨幹部-遠位端	—	—	—	1	—	—	—	1	
	大腿骨	近位部-遠位部	—	—	—	—	1	—	—	1	
ウマ	中手骨	骨幹部-遠位端	—	—	—	—	1	—	—	1	
	肋骨	骨幹部	—	—	—	—	—	1	—	1	
ウシ/ウマ	部位不明	破片	—	—	—	—	—	—	1	1	
イノシシ/ブタ	蹠骨	頭頂骨+前頭骨	—	—	—	1	—	—	—	1	
		頭頂骨	—	—	—	1	—	—	—	1	
		破片	—	—	—	—	—	1	—	—	1
	下顎骨	下顎体 P2P3	—	—	—	—	1	—	—	—	1
		下顎体 P3	—	—	—	—	—	1	—	—	1
		下顎体 M1	—	—	—	—	—	1	—	—	1
		下顎体 M2 M3	—	—	—	—	1	—	—	—	1
		下顎角	—	—	—	—	—	1	—	—	1
		破片	—	—	—	—	—	—	5	—	5
		破片	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	蹠骨	d13	—	—	—	—	1	—	—	—	1
		l1	—	—	—	—	1	1	—	—	2
		l2	—	—	—	—	1	2	—	—	3
		l3	—	—	—	—	—	1	—	—	1
		C	—	—	—	—	1	—	—	—	1
	上腕骨	<M3>	未出土	—	—	—	—	1	—	—	1
		近位端-遠位端	—	—	—	—	—	2	—	—	2
骨幹部		—	—	—	—	—	1	1	—	2	
近位部		未癒合(近位端)	—	—	—	—	2	—	—	2	
骨幹部-遠位端		—	—	—	—	1	—	—	—	1	
寛骨	坐骨	—	—	—	—	1	—	—	—	1	
	中足骨(IV)	近位端-遠位部	—	—	—	—	1	—	—	1	
	肋骨	骨幹部	—	—	—	—	—	2	—	2	
ヤギ	中手骨	近位端-遠位部	未癒合(遠位端)	—	—	1	—	—	—	1	
種不明	上腕骨	骨幹部	—	—	—	—	1	—	—	1	
	大腿骨	近位端	—	—	—	1	—	—	—	1	
	部位不明	破片	—	—	—	—	—	—	7	7	
合 計						13	19	10	8	50	

第 63 表 Ⅲ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 b

SM3002

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ニワトリ	鳥口骨	近位部-遠位部	—	—	—	1				1
	上腕骨	完形	—	—	—	1	1			2
	尺骨	近位部	—	—	—		1			1
イノシシ/ブタ	頰蓋骨	後頭骨	未結合	—	—			1		1
	薦椎南(下型)	d12	—	—	—	1				1
	椎骨(胸椎)	棘突起	—	—	—				1	1
	中手骨(Ⅲ)	近位部	—	—	—		1			1
ウシ	脛骨?	破片	—	—	—			1		1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				2	2
合 計						3	3	2	3	11

SM3003

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計	
ニワトリ	肩甲骨	近位端	—	—	—	1				1	
	距足根骨	近位部	—	—	—		1			1	
トリ	距足根骨	骨幹部-遠位部	—	—	—		1			1	
ウシ/ウマ	寛骨	破片	—	—	—			1		1	
	部位不明	破片	—	—	—			3		3	
イノシシ/ブタ	頰蓋骨	頭頂骨	—	—	—			1		1	
		側頭骨+後頭骨	—	—	—	1				1	
		側頭骨	—	—	—			2			2
		咽骨	—	—	—	1					1
		咽骨(棘突起)	—	—	—			1			1
		後頭骨(前静脈突起)	—	—	—			2			2
	肋骨	破片	—	—	—	—			1		1
		上顎骨	上顎体 P3	—	—	—			1		1
		薦椎南(上型)	C	—	—	—			1		1
		下顎骨	下顎枝	—	—	—	1				1
		椎骨(胸椎)	完形	—	—	—				1	1
		椎骨(胸椎)	完形	—	—	—				1	1
		椎骨(胸椎)	椎体	—	—	—				4	4
		椎骨(胸椎)	棘突起	—	—	—				1	1
		椎骨(胸椎)	破片	—	—	—				1	1
		椎骨(胸椎)	完形	—	—	—				1	1
		椎骨(胸椎)	ほぼ完形	—	—	—				1	1
		椎骨(胸椎)	棘突起	—	—	—				5	5
		椎骨(胸椎)	破片	—	—	—				1	1
		椎骨(胸椎)	ほぼ完形	—	—	—				1	1
肋骨	椎体	—	—	—	—			5		5	
	近位端	—	—	—	—	2				2	
	近位端-遠位部	—	—	—	—		1			1	
	近位端-骨幹部	—	—	—	—	1	2			3	
	骨幹部	—	—	—	—			1		1	
	骨幹部	—	—	—	—	2	2	34		38	
	肩甲骨	骨幹部-遠位端	—	—	—			1		1	
	尺骨	近位部	—	—	—			1		1	
	寛骨	胸骨-坐骨	—	—	—	—	1	1			2
		寛骨臼付面	—	—	—	—		1			1
大腸骨	坐骨	坐骨	—	—	—			1		1	
	ほぼ完形	未結合(近・遠位端)	—	—	—	1				1	
	近位骨端のみ	未結合(近位端)	—	—	—			1		1	
	近位部-遠位端	未結合(近・遠位端)	—	—	—		1			1	
	遠位骨端のみ	未結合(遠位端)	—	—	—	2				2	
	頰蓋骨	完形	—	—	—	1				1	
	近位骨端のみ	未結合(近位端)	—	—	—	1				1	
	脛骨	近位端	未結合(近位端)	—	—	—	1	1		2	
	脛骨	近位部	—	—	—	—		1		1	
	脛骨	完形	—	—	—	—	1			1	
中足骨(Ⅲ)	近位端-遠位部	未結合(遠位端)	—	—	—		1		1		
イノシシ/ブタ?	頰蓋骨	破片	—	—	—			3		3	
	椎骨?	破片	—	—	—				2	2	
	部位不明	破片	—	—	—				12	12	
種不明	椎骨	椎体	—	—	—				1	1	
	部位不明	破片	—	—	—				9	9	
合 計						19	20	46	47	132	

第64表 Ⅲ区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表c

SM3005

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ?	肋骨	骨幹部	—	—	—			1		1

SM3006

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イヌ?	中手骨	完形	幼?	—	—		1			1
イノシシ/ブタ	肋骨	近位端-骨幹部	—	—	—		1			1
合 計						0	2	0	0	2

SM3007

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ	椎骨(腰椎)	棘突起	—	—	—				1	1
	肋骨	近位部	—	—	—	1				1
	肩甲骨	骨幹部	—	—	—	1				1
	部位不明	破片	—	—	—				1	1
合 計						2	0	0	2	4

SM3008

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ	大腸骨	骨幹部	—	—	—		1			1
	肩胛骨	頭頂骨	—	—	—		1			1
		破片	—	—	—				4	
	椎骨(腰椎)	破片	—	—	—				1	1
	肋骨	骨幹部	—	—	—			2		2
	肩甲骨	骨幹部	—	—	—	1				1
	肩甲骨	破片	—	—	—			1		1
	上腕骨	遠位部	—	—	—	1				1
	椎骨	骨幹部・遠位部	未癒合(遠位端)	—	—	—		1		
部位不明	破片	—	—	—				2	2	
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1
合 計						2	3	7	4	16

SM3009

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ	肋骨	近位端-骨幹部	—	—	—	1				1

SP3001

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウシ	部位不明	破片	—	—	—				1	1

SP3009

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウシ	遊離歯(下顎)	P4	—	—	—		1			1

SP3010

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1

SP3011

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1

SP3018

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウマ	遊離歯(下顎)	P3/P4	—	—	—		1			1
イノシシ/ブタ	遊離歯(下顎)	C	—	—	—		1			1
合 計						0	2	0	0	2

SP3024

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ?	肋骨	骨幹部	—	—	—		1			1
イノシシ/ブタ?	肩甲骨	破片	—	—	—			1		1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				2	2
合 計						0	0	2	2	4

第 65 表 III区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 d

SP3027

種別	部位	保存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウマ?	肋骨	骨幹部	—	—	—			1		1
	中手/中足骨	骨幹部	—	—	—			1		1
イノシシ/ブタ	椎骨	遠位部	未癒合(遠位端)	—	—		1			1
イノシシ/ブタ?	肋骨	骨幹部	—	—	—			1		1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				2	2
合 計						0	1	3	2	6

SS3002

種別	部位	保存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウシ	肋骨	骨幹部	—	—	—		1			1

SS3004

種別	部位	保存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウシ/ウマ	部位不明	破片	—	—	—				2	2
イノシシ/ブタ	下顎骨	下顎内	—	—	—	1	1			2
	肋骨	骨幹部	—	—	—			1		1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1
合 計						1	1	1	3	6

SX3001

種別	部位	保存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ネコ	椎骨	骨幹部	—	—	—	1				1
	寛骨	胸骨-寛骨臼	—	—	—		1			1
イノシシ/ブタ	上顎骨	上顎体 /P4 M1 M2	—	—	—		1			1
	椎骨	近位部-遠位部	未癒合(遠位端)	かたやぶ	—	1				1
	寛骨	胸骨	—	—	—		1			1
	部位不明	骨幹部	—	—	—			1		1
イノシシ/ブタ?	肋骨	骨幹部	—	—	—			1		1
	部位不明	破片	未癒合	—	—				1	1
ウシ	部位不明	破片	—	—	—				1	1
	部位不明	骨幹部	—	—	—			1		1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				5	5
合 計						1	4	3	8	16

SX3003

種別	部位	保存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ	大腸骨	近位部-遠位部	—	—	—	1				1

SX3004

種別	部位	保存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ヤギ	蓋腱(下顎)	M3	—	—	—	1				1

SX3005

種別	部位	保存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
トリ	肋骨	骨幹部	—	—	—			2		2
イノシシ/ブタ	中手/中足骨(III/IV)	骨幹部	—	—	—			1		1
種不明	部位不明	破片	—	—	—			6		6
合 計						0	0	9	0	9

SX3006

種別	部位	保存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウシ/ウマ	部位不明	破片	—	—	—				1	1

順序

(つづき)

種別	出土地				種別	出土地			
	I層	II層	III層	IV層		I層	II層	III層	IV層
ウミガメ?		1			ウシ/ウマ?	1	9		
ニワトリ	12	7	4		ブタ	1			
カヤク?	1				イノシシ/ブタ	147	38	98	12
トリ	3	2	2		イノシシ/ブタ?	1	23	15	4
ネズミ科			2		ヤギ	7	2	8	
イヌ	3		1		ヤギ?	2	1	3	
イヌ?		1			ウシ	13	1	36	3
ネコ	1	1	2		ウシ?	1			
ウマ	5	1	6	1	種不明	18	113	109	13
ウマ?			2		合 計	253	201	312	35
ウシ/ウマ	37	2	23	2					

第66表 IV区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 a

SA4003

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1

SD4001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	骨幹部	—	—	—			1		1

SD4002

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ	中手骨(IV)	近位端-骨幹部	—	—	—		1			1
	中手/中足骨	近位端-骨幹部	—	—	—			1		1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1
合 計						0	1	1	1	3

SK4001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ニワトリ	上腕骨	近位部-遠位端	—	—	—		1			1

SK4002

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1

SK4006

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
トリ	部位不明	骨幹部	—	—	—		1			1
イノシシ/ブタ	椎骨(胸椎)	棘突起	未癒合	—	—				1	1
	椎骨(腰椎)	棘突起	—	—	—				1	1
	横骨	近位端-遠位部	未癒合(遠位端)	—	—	1				1
イノシシ/ブタ?	肋骨	骨幹部	—	—	—			1		1
種不明	部位不明	骨幹部	—	—	—			1		1
		破片	—	—	—				5	5
合 計						1	0	8	2	11

SK4007

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ブタ	上腕骨	近位部-遠位端	—	—	滑車上孔磨損	1				1
イノシシ/ブタ	大腸骨	近位部-骨幹部	未癒合(近位端)	—	—		1			1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1
合 計						1	1	0	1	3

SM4002

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ニワトリ	中手骨	近位端-遠位端	—	—	—	1				1
トリ	大腸骨	遠位部	—	—	—		1			1
ウシ/ウマ	部位不明	破片	—	—	—				2	2
イノシシ/ブタ	頭蓋骨	頬骨側頭突起	—	—	—	1				1
	遊離歯(下顎)	P3	—	—	—		1			1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				5	5
合 計						3	1	0	7	11

第 67 表 IV区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 b

SM4003

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウシ	遊離歯(下顎)	dm4	—	—	—	1				1

SP4008

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ	遊離歯(下顎)	I2	—	—	—	1				1

SR4001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ	大腿骨	骨幹部-遠位部	—	0x1x-?	—	1				1
種不明	肋骨	破片	—	—	—			1		1
	部位不明	破片	—	—	—				1	1
合 計						1	0	1	1	3

SR4005

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	骨幹部	—	—	—			1		1
		破片	—	—	—				3	3
合 計						0	0	1	3	4

SS4001

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	破片	—	—	—			1		1

SX4007

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ	椎骨(頸椎)	破片	—	—	—				2	2
種不明	部位不明	破片	—	—	—				3	3
合 計						0	0	0	5	5

層序

種類	出土地	I層	II層	III層	IV層	層不明
ニワトリ		10	1	30		
トリ				3		
イヌ		6		4		
ネコ		1		4		
ウマ		21		6		
ウマ?		1		3		
ウシ/ウマ		15	5	17		1
ブタ		1		1		
ブタ?				3		
イノシシ/ブタ		38	10	134	3	3
イノシシ/ブタ?				8		
ヤギ		2	3	3		
ヤギ?				1		
ウシ		3		20		1
ウシ?		1		1		
イルカ?		1				
種不明		44	12	131		1
合計		144	31	369	3	6

第68表 V区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 a

SA5001

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ	上顎骨	骨幹部	—	—	縦線状剥片, チャゲマ?		1			1

SA5002

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計	
トリ	部位不明	骨幹部	—	—				1		1	
ウシ/ウマ	部位不明	破片	—	—					5	5	
イノシシ/ブタ	肋骨	五位端	—	ホトト?		1				1	
		五位部	—	チャゲマ?, ホトト?			1			1	
	肩甲骨	破片	—	—				1			1
		遠位部	—	—			1				1
	脛骨	五位部・遠位部	—	—	ホトト?			1			1
		骨幹部	—	—	縦線状剥片		1				1
部位不明	骨幹部・遠位部	—	—	—			1			1	
ウシ	部位不明	破片	—	—					4	4	
種不明	肋骨	破片	—	—	ホトト?				2	2	
	部位不明	破片	—	—					12	12	
合 計							3	3	4	21	31

SA5005

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計	
ニワトリ	大腿骨	五位部	未癒合(五位端)	—		1				1	
イノシシ/ブタ	脛骨	五位部	—	—		1				1	
ウシ	中足骨	—	—	—				1		1	
種不明	部位不明	破片	—	—					6	6	
		破片	—	—					6	9	
合 計							2	0	1	6	9

SA5006

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計	
ニワトリ	中手骨(Ⅱ)	五位部・骨幹部	—	—						1	
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	遠位部	—	—		1				1	
種不明	部位不明	骨幹部	—	—				1		1	
		骨幹部	—	—					1	0	3
合 計							2	0	1	0	3

SD5001

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計	
ウシ	部位不明	破片	—	—					1	1	
種不明	部位不明	破片	—	—					1	1	
		破片	—	—					2	2	
合 計							0	0	0	2	2

SD5002

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計	
イノシシ/ブタ	下顎骨	下顎体(破片)	—	—				1		1	
	櫛骨(頸椎)	椎体	—	—					1		1
		肋骨	五位端	—	—		1				1
	肋骨	骨幹部	—	—	—				1		1
		上腕骨	骨幹部・遠位部	—	ホトト?					1	1
	ウシ	部位不明	中手骨(Ⅳ)	完形	—			1			1
寛骨			破片	—	—				1		1
種不明	部位不明	破片	—	—					1	1	
		破片	—	—					3	3	
合 計							1	2	3	5	11

SD5004

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計	
イノシシ/ブタ	遊離歯(下顎)	M3	—	—			1			1	
	肋骨	完形	—	ホトト?		1				1	
	種不明	部位不明	破片	—	—					9	9
破片			—	—					9	11	
合 計							1	1	0	9	11

SF5001

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計	
カメ類?	脛骨/肋骨?	骨幹部	—	—				1		1	
		破片(頸椎)	破片	—	—					1	1
ニワトリ?	鳥口骨	五位端・骨幹部	—	—		1				1	
		五位部・骨幹部	—	—			1			1	
	上腕骨	遠位端	—	—			1				1
		五位部	—	—				1			1
	大腿骨	遠位端	—	—				2			2
		完形	—	—					1		1
ニワトリ?	脛足骨	骨幹部	—	—				1		1	
		五位部	—	—			1				1
	五位部・遠位部	—	—			1					1
		五位部・遠位部	—	—				1			1
	脛足骨	骨幹部	—	—			1	2			3
		骨幹部・遠位部	—	—			1				1
	中足骨	骨幹部・遠位部	—	—	ホトト?		1				1
遠位部		未癒合(遠位端)幼?	—	—					1	1	
遠位端		—	—					2		2	
ニワトリ?	脛足骨?	遠位端	—	—				1		1	
		破片	—	—					1		1
ニワトリ?	脛足骨	破片	—	—					1	1	
		骨幹部	—	—					1		1

第69表 V区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 b

SF5001 (つづき)

種類	部位	残存状況	成員	加工	病変	左	右	不明	—	計	
ニワトリ?	部位不明	骨幹部	—	—				2		2	
		破片	—	—					1	1	
ネコ	尺骨	近位端・骨幹部	—	—		1				1	
ウマ	肋骨	骨幹部	—	骨折				1		1	
		中手骨(IV)	近位端	—	—		1			1	
ウシ/ウマ	椎骨	椎体板	—	—					1	1	
		椎骨(胸椎)	棘突起	—	—				1	1	
		椎骨(尾椎)	椎体	—	—				1	1	
		肋骨	骨幹部	—	骨折			2			2
ウシ/ウマ?	部位不明	破片	—	—			2		2		
イノシシ/ブタ	頭蓋骨	頭頂骨+前頭骨+側頭骨+頬骨/M3	—	頭蓋平載			1			1	
		頭頂骨+後頭骨	—	—	1					1	
		側頭骨	—	—		1				1	
		側頭骨?	—	—				5		5	
		後頭骨	—	—		1			2	3	
		上顎骨	上顎体 dm2dm3dm4	幼	—			1			1
		上顎体 I1	未磨出	—		1				1	
		上顎体 M2M3	未磨出	—			1			1	
	下顎骨	下顎体+下顎内 dm3dm4M1	幼? 幼	骨折			1				1
			幼	—			1				1
		下顎体 dm3M1	幼	—		1					1
		下顎体+下顎内 M3	—	—			1				1
		下顎体	—	骨折			1				1
		下顎内	—	—			3				3
		関節突起	—	—			1			1	
	遊離歯(下顎)	I1	—	—		1		1		2	
	椎骨(頸椎)	椎骨	完形	—	—					1	1
		椎骨(胸椎)	ほぼ完形	—	—					1	1
	椎骨(胸椎)	ほぼ完形	—	—						1	1
		椎体	—	—						2	2
		棘突起	—	—						9	9
	椎骨(腰椎)	ほぼ完形	—	—						1	1
		椎体	—	—						1	1
		棘突起	—	—						3	3
	椎骨	破片	—	—						1	1
		椎体	—	—						1	1
		椎体板	—	—						4	4
		棘突起	—	—						3	3
		破片	—	—						4	4
	肋骨	破片	—	—						1	1
	肋骨	ほぼ完形	—	—			1	2			3
		近位端	—	—				1			1
		近位端・遠位部	—	—			3				3
		近位端・骨幹部	—	—				7			7
		近位部	—	—				1			1
		近位部・遠位部	—	—					7		7
		近位部・骨幹部	幼?	骨折			1				1
			—	—			13	6			19
		骨幹部	—	—				1	49		50
		破片	—	—						1	1
	肩甲骨	骨幹部	—	—			4				4
		骨幹部・遠位部	—	—				1			1
		骨幹部・遠位端	—	—			1				1
		遠位端	—	—			1	1			2
	上腕骨	近位部	—	—			1				1
		近位部・遠位部	未磨合(近・遠位端)	骨折				1			1
		近位部・骨幹部	—	離断状破片, 骨折			2				2
骨幹部・遠位部		未磨合(遠位端)幼?	—			1				1	
骨幹部・遠位端		—	骨折				1			1	
遠位部		未磨合(遠位端)	骨折			1				1	

第70表 V区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表c

SF5001 (つづき)

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
上腕骨	遠位部	—	—	—	—	1				1
	ほぼ完形	—	—	—	—		1			1
	近位端	—	—	—	—		1			1
	近位端-遠位部	未癒合(遠位端)	—	—	—		1			1
	遠位部	—	—	—	—		1			1
	骨幹部	—	—	—	—	1				1
	近位部-遠位部	未癒合(近・遠位端)幼?	—	—	—	1	1			2
	遠位部-骨幹部	未癒合(遠位端)幼?	—	—	—		1			1
	骨幹部	幼?	—	—	—			1		1
	遠位部	未癒合(遠位端)幼	—	—	—		1			1
尺骨	ほぼ完形	—	—	—	—		1			1
	近位端-骨幹部	—	—	—	—	1				1
	近位部-遠位端	未癒合(近位端)	—	—	—	1	1			2
	近位部-遠位部	—	—	—	—	2				2
	近位部-骨幹部	未癒合(近位端)	—	—	—		1			1
	骨幹部	—	—	—	—		1			1
	骨幹部-遠位端	—	—	—	—	1	1			2
	完形	—	—	—	—	1				1
	中手骨(IV?)	—	—	—	—			右?1		1
	中手骨(V)	近位部-遠位部	未癒合(遠位端)幼?	—	—	—	1			1
腕骨	腕骨	—	—	—	—	1	1			2
	腕骨-寛骨臼	—	—	—	—		1			1
	—	—	—	—	—		1			1
	寛骨臼付近	—	—	—	—		1			1
	寛骨臼-坐骨	幼?	—	—	—	1				1
	坐骨	—	—	—	—	1				1
	坐骨	—	—	—	—	1				1
	近位端-骨幹部	—	—	—	—	1				1
	近位部	—	—	—	—		2			2
	近位部-遠位端	未癒合(遠位端)	—	—	—		1			1
大腸骨	近位部-遠位部	未癒合(遠位端)	—	—	—	1	1			2
	—	幼?	—	—	—	1				1
	—	—	—	—	—		1			1
	近位部-骨幹部	—	—	—	—		1			1
	骨幹部-遠位部	未癒合(遠位端)	—	—	—	1				1
	骨幹部-遠位端	—	—	—	—		1			1
	骨幹部	—	—	—	—	1				1
	遠位部	未癒合(遠位端)	—	—	—		1			1
	遠位骨端のみ	—	—	—	—	3	1			4
	大腸骨?	遠位部	—	—	—	1				1
踵骨	ほぼ完形	—	—	—	—		1			1
	完形	—	—	—	—		1			1
	近位端	未癒合(近位端)	—	—	—		1			1
	近位端-骨幹部	—	—	—	—		1			1
	近位部	未癒合(近位端)	—	—	—		2			2
	—	幼?	—	—	—		1			1
	近位部-遠位部	未癒合(遠位端)	—	—	—		1			1
	—	—	—	—	—		1			1
	近位部-骨幹部	未癒合(近位端)	—	—	—		1			1
	骨幹部	—	—	—	—	1				1
脛骨	骨幹部-遠位部	未癒合(遠位端)	—	—	—		1			1
	遠位部	—	—	—	—	2				2
	遠位部	—	—	—	—		1	1		2
	遠位端	—	—	—	—	1				1
	破片	—	—	—	—			1		1
	近位部-遠位端	—	—	—	—	病変?	1			1
	骨幹部-遠位部	幼	—	—	—	1				1
	遠位端	—	—	—	—		1			1
	—	—	—	—	—		1			1
	—	—	—	—	—		1			1
腓骨	ほぼ完形	—	—	—	—		1			1
	近位骨端のみ	—	—	—	—		1			1
	近位部-遠位端	未癒合(近位端)	—	—	—	2	1			3
中足骨(III)	近位部-遠位部	未癒合(遠位端)	—	—	—	1				1
	—	—	—	—	—	2				2

第71表 V区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表d

SF5001 (つづき)

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計	
イノシシ/ブタ	中足骨(III)	骨幹部-遠位部	未癒合(遠位端)	—	—	1				1	
	中足骨(IV)	ほぼ完形	—	—	—		1			1	
	近位端-遠位部	未癒合(遠位端)	—	—	—	1	2			3	
	中手/中足骨	骨幹部	—	—	—			1		1	
	指骨(基節骨)	完形	—	—	—	1	1			2	
	指骨(中節骨)	完形	—	—	—		1			1	
	指骨(末節骨)	完形	—	—	—			1		1	
	指骨(末節骨)	完形	—	—	—	2				2	
	部位不明	骨幹部	—	—	—				1		1
	イノシシ/ブタ?	歯槽歯(上顎)	C?	—	—	—			2		2
ヤギ	肋骨	近位部-骨幹部	—	—	—		1			1	
	骨幹部	—	—	—	—			2		2	
クシ	頭蓋骨	頭蓋骨	—	カッタ?	—		1			1	
	破片	—	—	—	—			3		3	
	歯槽歯(上顎)	I2	—	—	—				1	1	
	歯槽歯(下顎)	M1/M2	—	—	—	1				1	
	歯槽歯(下顎)	M2/M3	—	—	—	1	1			2	
	椎骨(胸椎)	椎体	—	—	—				1	1	
	椎骨(胸椎)	椎体	—	—	—				1	1	
	椎骨(腰椎)	近位端	—	—	—	1				1	
	肋骨	近位部	—	カッタ?	—		1	1		2	
	骨幹部	—	—	—	—			1		1	
クシ	橈骨	骨幹部-遠位端	—	カッタ?	—		1			1	
	尺骨	骨幹部	—	カッタ?	—	1				1	
	手根骨(橈側)	完形	—	—	—		1			1	
	手根骨(中間)	完形	—	—	—		1			1	
	中手骨	近位端	—	—	—	1				1	
	近位骨端のみ	—	—	—	—				1	1	
	大腸骨	遠位骨端のみ	—	カッタ?	—	1				1	
	近位部-遠位部	—	—	—	—	1				1	
	距骨	破片	—	—	—			1		1	
	足根骨(IV)	中心(完形)	—	—	—	1				1	
指骨(基節骨)	近位端-遠位部	—	—	—		1			1		
指骨(種子骨)	完形	—	—	—			1		1		
部位不明	破片	—	—	—				2	2		
種不明	頭蓋骨	破片	—	カッタ?	—		1			1	
	上顎骨?	上顎体(破片)	—	—	—			1		1	
	下顎骨?	破片	—	—	—			4		4	
	胸骨(前状突起)	ほぼ完形	—	—	—				1	1	
	椎骨	椎体	—	—	—				3	3	
	破片	—	—	—	—				6	6	
	骨幹部	—	—	—	—			3		3	
	部位不明	破片	—	—	—				2	2	
	破片	—	—	—	—				2	2	
	破片	—	—	—	—				100	100	
合 計						108	105	107	164	484	

SK5002

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	破片	—	カッタ?	—				1	1

SK5004

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
クシ	歯槽歯(下顎)	M3	—	—	—					1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				9	9
合 計						1	0	0	9	10

SM5001

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ニワトリ	中足骨	骨幹部	♂	—	—		1			1
種不明	部位不明	破片	—	—	—				1	1
合 計						0	1	0	1	2

SM5002

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計	
ニワトリ	椎骨(胸椎)	破片	—	—	—				1	1	
	上腕骨	近位端-遠位部	—	—	—		1			1	
	尺骨	近位端-骨幹部	—	—	—	1				1	
	近位部-遠位部	—	—	—	—				1	1	
	距足根骨	近位部-骨幹部	未癒合(近位端)幼鳥	—	—	—		1			1
	骨幹部-遠位部	—	—	—	—			1		1	
中足骨	骨幹部-遠位端	♂	—	—	—		1			1	
トリ	部位不明	破片	—	—	—				1	1	
クマ	肋骨	骨幹部	—	—	—			1		1	
ウマ?	肋骨	近位部	—	—	—	1				1	
イノシシ/ブタ	肋骨	破片	—	—	—				1	1	
	寛骨	寛骨臼付面	—	—	—	1				1	

第72表 V区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 e

SM5002 (つづき)

種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウシ	肋骨	骨幹部	—	h/h-T				6		6
		遠位骨端のみ	—	—		1				1
	脛骨	骨幹部	—	h/h-T						1
		遠位骨端のみ	坊?	—	—		1			
	足根骨	末骨	坊?	—	—		1			
種不明	部位不明	破片	—	—					1	1
	椎骨(胸椎)	椎体	—	—					1	1
	肋骨	骨幹部	—	—					2	2
	部位不明	破片	—	h/h-T					4	4
									34	34
		合計				8	4	8	44	64
SP5001										
種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ	肋骨	破片	—	—				1		1
SP5032										
種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ジュゴン?	肋骨?	破片	—	—					1	1
種不明	部位不明	破片	—	—					1	1
		合計				0	0	0	2	2
SP5044										
種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	頭蓋骨	顔面骨(歯体?)	—	—		1	1			2
	部位不明	破片	—	—					1	1
		合計				1	1	0	1	3
SP5045										
種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ニワトリ	大腿骨	遠位部	—	—		1	3			4
SP5062										
種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
種不明	部位不明	破片	—	—					1	1
SP5065										
種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ニワトリ	尺骨	骨幹部	—	—		1				1
		骨幹部・遠位端	—	—			1			1
イノシシ/ブタ	遊離歯(下顎)	I3	—	—		1				1
		合計				2	1	0	0	3
SP5079										
種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ウマ	指骨(中節骨)	遠位端	—	—			1			1
		近位端	—	h/h-T						1
種不明	部位不明	破片	—	—					16	16
		合計				0	2	0	16	18
SS5002										
種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
ニワトリ	大腿骨	骨幹部	—	—				1		1
ウシ/ウマ	肋骨	骨幹部	—	—				1		1
種不明	部位不明	破片	—	—					4	4
		合計				0	0	2	4	6
SS5004										
種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ	上腕骨	遠位部	—	—			1			1
SS5005										
種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ	遊離歯(下顎)	I3	—	—			1			1
種不明	部位不明	破片	—	—					2	2
		合計				0	1	0	2	3
SS5007										
種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ	肋骨	骨幹部	—	—						1
		遠位骨端(破片)	—	—		1				1
	椎骨	骨幹部	—	—		1				1
ウシ	大腿骨	骨幹部・遠位部	未癒合(遠位端)	—			1			1
		骨幹部	—	h/h-T						1
種不明	部位不明	破片	—	—					4	4
		合計				1	3	0	4	8
SX5001										
種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ	大腿骨	遠位骨端(破片)	—	—				1		1
種不明	部位不明	破片	—	—					3	3
		合計				0	0	1	3	4
SX5002										
種別	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	—	計
イノシシ/ブタ	遊離歯(上顎)	C	—	—			1			1
		骨幹部	—	h/h-T						1
		合計				0	2	0	0	2

第73表 V区鳥類・哺乳類・爬虫類集計表 f

SX5004

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	-	計
ウマ	距骨	完形	-	-		1				1
イノシシ/ブタ	上顎骨	上顎体 P4M1M2M3	-	-		1				1
ウシ	肋骨	骨幹部	-	-				1		1
種不明	部位不明	破片	-	-					22	22
合 計						2	0	1	22	25

SX5005

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	左	右	不明	-	計
イノシシ/ブタ	歯槽歯(下顎)	I2	-	-		1				1
	椎骨(頸椎)	椎体	-	-					1	1
	椎骨	破片	-	-					1	1
	肋骨	骨幹部	-	-				1		1
	中手骨(V)	(ほぼ完形)	-	-		1				1
	距骨	近位部	-	-			1			1
種不明	部位不明	破片	-	-					4	4
合 計						3	0	1	6	10

順序

種類	出土地	I期	II期	III期	IV期
ニワトリ		14	8	14	2
ニワトリ?		6	1		
トリ		2	2	1	
イス		4			
ネコ		1	2		
ネコ?			1		
ウマ		18		13	2
ウマ?		1			
ウシ/ウマ		28	13	23	4
ウシ/ウマ?		2		1	
イノシシ/ブタ		125	62	154	8
イノシシ/ブタ?		1			
ヤギ		10	3	6	1
ヤギ?		2		1	
ウシ		44	13	60	7
ウシ?		1			
種不明		178	93	200	30
合計		437	198	473	54

第74表 III区ウマ臼歯計測値(mm)

遺構	部位	顎骨	左/右		
			部分	左	
I層	遊離歯	上	長	P2	P4
			高		27.2
			幅		24.8
III 6e層	遊離歯	下	高		61.01以上
			長	29.6	
			幅	12.9	
			高	53.3以上	

第75表 III区鳥類上腕骨計測値(mm)

遺構	種類	残存状況	左/右	GL	Bp	Bd
SM3002 3層	ニワトリ	完形	左	82.5	24.7	19.5
		完形	右	75.9	20.7	16.6

第76表 III区哺乳類四肢骨計測値(mm)

遺構	種類	部位	残存状況	左/右	Bp	Bd
SM3001 4層	ウマ	中手骨	骨幹部・遠位端	右		41.4
I層	ウシ	橈骨	近位端・骨幹部	左	86.3	

第81表 V区ウマ臼歯計測値(mm)

遺構	部位	顎骨	左/右		
			部分	左	
I層	遊離歯	上	高	P3	49.8
			長		23.9
			幅		15
		下	高		40.7
			長	24.5	
			幅	13.2	
III 9b層	遊離歯	下	高		41.9

第82表 V区ニワトリ肢骨計測値(mm)

遺構	種類	部位	残存状況	左/右	GL	GLI	GLm	GB	Bp	Bd	SD	SDO	DPA	Did
SP5065	尺骨	骨幹部	遠位端	右										9.3
H 14 SF5001 造成2 戻	大腿骨	完形	近位端・遠位端	右	72.6				14.4	14.3				
				左					13				13.9	
H 1 SM5002 3層	中足骨	骨幹部・遠位端	右							17.1				

第83表 V区イヌ四肢骨計測値(mm)

遺構	部位	残存状況	左/右	GL	GLI	GLm	GB	Bp	Bd	SD	SDO	DPA	Did
I層	橈骨	近位端・近位部	右					16					

第84表 V区ネコ四肢骨計測値(mm)

遺構	部位	残存状況	左/右	GL	GLI	GLm	GB	Bp	Bd	SD	SDO	DPA	Did
H 14 SF5001 造成2	尺骨	近位端・骨幹部	右							9.3			10.5

第85表 V区ウマ四肢骨計測値(mm)

遺構	部位	残存状況	左/右	GL	GLI	GLm	GB	Bp	Bd	SD	SDO	DPA	Did
III 3a層	橈骨	近位端	左					72.5					

第86表 V区イノシシ/ブタ四肢骨計測値(mm)

遺構	部位	残存状況	左/右	GL	GLI	GLm	GB	Bp	Bd	SD	SDO	DPA	Did
I層	橈骨	完形	右	124.7						29.2	16.3		
H 14 SF5001 造成2 戻	橈骨	近位端・遠位部	右					24.1					
H 14 SF5001 造成2	尺骨	ほぼ完形	右	163.2							24.8	30	
H 14 SF5001 造成2 戻	橈骨	完形	右	174.3				43.7	24.2				
H 8 III 27層	橈骨	近位部・遠位端	左						23.2				
SD5004 2層	腓骨	完形	左	152.6									
H 14 SF5001 造成2 戻	距骨	完形	右		34.3	32.2							

第87表 V区ウシ四肢骨計測値(mm)

遺構	部位	残存状況	左/右	GL	GLI	GLm	GB	Bp	Bd	SD	SDO	DPA	Did
H 14 SF5001 造成2+3	橈骨	骨幹部・遠位端	右							85.3			
I層	尺骨	近位部・骨幹部	右									54	
III 9b層	尺骨	近位端・骨幹部	左								53.9	66.1	
H 10 III 17層	中手骨	近位端・遠位部	右					60.7					
I層	距骨	完形	左		60.5	58.8	40.9						
H 6 III 1層	踵骨	完形	左	143.4			49						

第77表 IV区ウマ臼歯計測値(mm)

遺構	部位	顎骨	左/右			
			部分	左	右	
III 10層	遊離歯	上	長	P3/P4	P3/P4	
			高		26.1	26.5
			幅		25.3	25.9
			高		38	53.8

第78表 IV区鳥類中手骨計測値(mm)

遺構	種類	残存状況	左/右	GL	Bp	Bd
SM4002 2層	ニワトリ	近位端・遠位端	左	30.4		

第79表 IV区哺乳類計測値(mm)

遺構	種類	部位	残存状況	左/右	DPA	SDO
I層	ウマ	尺骨	近位端・近位部	右	58.1	44.1

第80表 IV区哺乳類四肢骨計測値(mm)

遺構	種類	部位	残存状況	左/右	Bp	Bd
I層	ウマ	中手骨	近位部・遠位部	右		43.4
			中足骨	遠位端	左	

## 第2項 貝類遺体

今回の発掘調査で得られた貝類遺体については、当センター所蔵の貝類標本を参考にして同定作業を行った。分析資料はすべて発掘現場で取り上げられた資料（ピックアップ資料）である。また、調査中に遺構内から大量に貝類遺体や動物骨等が出土し、取り上げ作業が困難な場合もあった。その際は、土ごと取り上げ、土壌サンプル資料として扱った。土壌サンプルについては洗浄作業等を実施することが出来ず、その数量は含んでいないため、暫定的な資料となる。

今回の調査では、貝類遺体45科125種が確認された。各地区で最小個体数が10点以上得られている貝類について述べる。貝種（生息地）出土点数で示す。調査区毎の出土点数は最小個体数(MNI)で示している。

## Ⅲ区

**巻貝** サラサバテイル (I-4-a) 21点、ヤコウガイ (I-4-a) 99点 (内: 蓋60点)、チョウセンサザエ (I-3-a) 136点 (内: 蓋30点)、カンギク (II-1-b) 33点 (内: 蓋3点)、オハグロガイ (II-2-c) 10点、マガキガイ (I-2-c) 93点

**二枚貝** ウラキツギガイ (II-2-c) 57点、イソハマグリ (I-1-c) 13点、アラスジケマン (III-1-c) 278点、ホソスジイナミ (II-1-c) 11点、ハマグリ科の一種 (II-2-c) 23点、ダテオキシジミ (III-1-c) 21点

## 第89表 Ⅲ区石組土坑(SM) 巻貝出土数(NISP)

科名	貝種名	SM						生息地
		3001	3002	3003	3005	3008	3009	
ニシキウズ科	サラサバテイル				2			I-4-a
	ヤコウガイ	1		8				I-4-a
リュウテン科	ヤコウガイの蓋	1	2	6		1		I-4-a
	チョウセンサザエ	1	1	2	1	1		I-3-a
	チョウセンサザエの蓋		1			2		I-3-a
	カンギク			7				II-1-b
	カンギクの蓋					1		II-1-b
アマオブネ科	アマオブネ					1		I-1-b
スイショウガイ科	マガキガイ	1						I-2-c
	クモガイ					1		I-2-c
タカラガイ科	タカラガイ科不明	1						I-2-c
イモガイ科	イモガイ科不明						1	
	巻貝不明		1					
合計		5	5	23	3	7	1	

## 第90表 Ⅲ区石組土坑(SM) 二枚貝出土数(NISP)

科名	貝種名	SM							生息地
		3001	3002	3003	3005	3007	3008	3009	
ツキガイ科	ウラキツギガイ							2	II-2-c
ザルガイ科	リュウキュウザル			1					II-2-c
	カワラガイ				1				II-2-c
シャコガイ科	シャコガイ科不明							2	
チドリマスオ科	イソハマグリ	1						2	I-1-c
シジミ科	シレナシジミ		1						I-1-a
	アラスジケマン	3	6	39		9	5	6	III-1-c
	ホソスジイナミ			3		1			II-1-c
	ユウカゲハマグリ	1							II-2-c
	ハマグリ科の一種				2			1	2
	ダテオキシジミ			3				1	III-1-c
	二枚貝不明		1					1	
合計		5	8	48	1	10	13	9	

## 第88表 貝類の生息場所類型

大区分		底質等
I	外洋-サンゴ礁域	a 岩礁
II	内湾-転石域	b 転石
III	河口干潟-マングローブ域	c 砂/泥
IV	淡水域	d 河川礫底
V	陸域	f 植物上
VI	その他	
小区分		
0	潮間帯上部	5 止水
	I-0 ノッチ	6 流水
	II-0 マングローブ	7 林内
1	潮間帯中・下部	8 林内・林縁部
2	亜潮間帯上縁部	9 林縁部
	I-2 イノ内	10 海浜部
3	干瀬	11 打ち上げ物
4	礁斜面	12 化石

## Ⅳ区

**巻貝** サラサバテイル (I-4-a) 17点、ヤコウガイ (I-4-a) 59点 (内: 蓋34点)、チョウセンサザエ (I-3-a) 189点 (内: 蓋49点)、マガキガイ (I-2-c) 61点

**二枚貝** ウラキツギガイ (II-2-c) 73点、アラスジケマン (III-1-c) 152点、ハマグリ科の一種 (II-2-c) 37点、ダテオキシジミ (III-1-c) 15点



第 193 図 III区石組土坑(SM) 巻貝出土数(NISP)



第 194 図 III区石組土坑(SM) 二枚貝出土数(NISP)



第 195 図 V区石組土坑(SM) 貝類出土数(NISP%)

第 91 表 V区石組土坑(SM) 貝類出土数(NISP)

貝種名	遺構	出土数(NISP)	
		SM5002	SS5002
ヤコウガイ殻		28	0
ヤコウガイ破片		60	10
チョウセンサザエ		1	5
サラサバテイラ		5	16
ギンタカハマ		0	0
マガキガイ		6	5
タカラガイ		19	3
ヤコウガイの蓋		7	8
チョウセンサザエの蓋		0	0
合計		126	47

V区

巻貝 サラサバテイラ (I-4-a)46点、ヤコウガイ (I-4-a)205点 (内:蓋120点)、チョウセンサザエ

(I-3-a)186点 (内:蓋18点)、カンギク (II-1-b)434点 (内:蓋1点)、オノツノガイ (I-2-c)12点、イワ (ウミナ) カニモリ (II-1-b)266点、オハグロガイ (II-2-c)27点、マガキガイ (I-2-c)188点、ハナヒラダカラ (I-1-a)12点、ハナマルユキ (I-3-a)18点、オキナワヤマタニシ (V-8)18点

二枚貝 ウラキツキガイ (II-2-c)45点、イソハマグリ (I-1-c)21点、リュウキュウシラトリ (II-1-c)11点、アラスジケマン (III-1-c)1476点、ホソスジイナミ (II-1-c)26点、スダレハマグリ (II-2-c)110点、ハマグリ的一种 (II-2-c)59点、ダテオキシジミ (III-1-c)17点

上記のように、各地区での出土状況を見るとほとんど

が共通しているが、出土数の異なる貝類遺体も見られる。

#### Ⅲ区石組土坑内貝類

**巻貝** ヤコウガイやカンギク、チョウセンサザエが出土しており、SM3003からの出土が多い(第89表・第193図)。

**二枚貝** アラスジケマンの出土が多く、SM3003からの出土が多い(第90表・第194図)。

#### 人為的割り取りのみられる貝類

今回出土した貝類遺体のうち、ヤコウガイ、チョウセンサザエ、サラサバテイラなどは、首里城跡銭蔵東地区(以下、銭蔵東地区)や東村跡で出土した螺細細工に用いられたとされる貝の割り方に類似していた。そのため、この2遺跡の分析方法を参考に、分析を試みた。加えて、マガキガイとタカラガイについても人為的な加工の痕跡がみられた。マガキガイについては、貝玉の製作工程と考えられている勝連城跡(うるま市教育委員会1990)の分析を参考にした。

今回、殻片の計測については実施することが出来なかった。

下記で述べる貝類遺体については、破片数の数量が重要となってくるので、最小個体数(MNI)ではなく、同定標本数(NISP)で示している。

**ヤコウガイ** ヤコウガイの割れ方をもとに第198・199図のように分類を行った。殻をⅠ～Ⅳ類、破片になった状態のものをA～Fまで分類を行った。分類については、銭蔵東地区及び東村跡の分類を参考にした。

殻部分については、Ⅰ～Ⅳ類まで分類したが、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類の出土数が8点と出土割合全体の1割に満たず、Ⅲ-①類～Ⅲ-③類と分類したものは153点で9割以上

を占める。この傾向は、銭蔵東地区及び東村跡と同様である。

Ⅲ-①類～Ⅲ-③類の内訳をみると、Ⅲ-③類が最も多く73点、次いでⅢ-①類が60点となり、Ⅲ-②類が20点で最も少ない。この傾向は東村跡に類似する。破片になった状態のものについては、合計458点でⅢ区113点、Ⅳ区74点、Ⅴ区271点で、Ⅴ区からの出土が多い。Ⅲ区及びⅤ区では、人為的痕跡のみられる破片資料が多い傾向にあるが、Ⅳ区では人為的痕跡の見られない破片や不明破片が多い状況が確認できる。

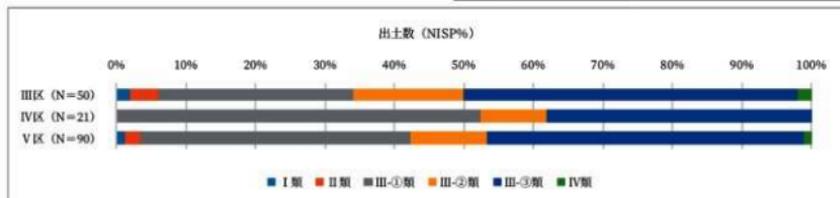
出土地点でみると、各地区で遺構及び包含層から出土しており、包含層からの出土量が多いが、Ⅴ区ではSM5002でⅢ類に分類したものが27点とまとまって出土している。

第92表 ヤコウガイ殻 出土数

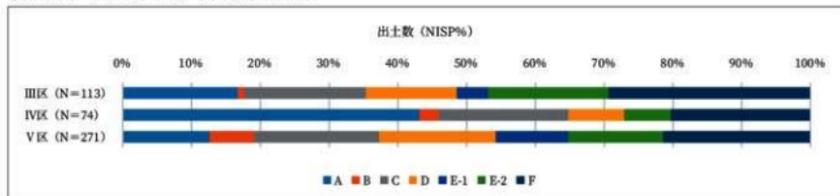
地区	Ⅲ区 (N=50)	Ⅳ区 (N=21)	Ⅴ区 (N=90)
Ⅰ類	1	0	1
Ⅱ類	2	0	2
Ⅲ-①類	14	11	35
Ⅲ-②類	8	2	10
Ⅲ-③類	24	8	41
Ⅳ類	1	0	1
合計	50	21	90

第93表 ヤコウガイ殻破片 出土数

地区	Ⅲ区 (N=113)	Ⅳ区 (N=74)	Ⅴ区 (N=271)
A	19	32	34
B	1	2	18
C	20	14	49
D	15	6	46
E-1	5	0	29
E-2	20	5	37
F	33	15	58
合計	113	74	271



第196図 ヤコウガイ殻 出土数(NISP%)



第197図 ヤコウガイ殻破片 出土数(NISP%)



I類 体層全体を残すもの（いわゆる完形）



III-①類 体層を大きく欠損し、螺塔を残すもの



II類 殻口から体層中央部まで欠損するもの



III-②類 体層を大きく欠損し、螺塔及び螺髯、臍盤を残すもの

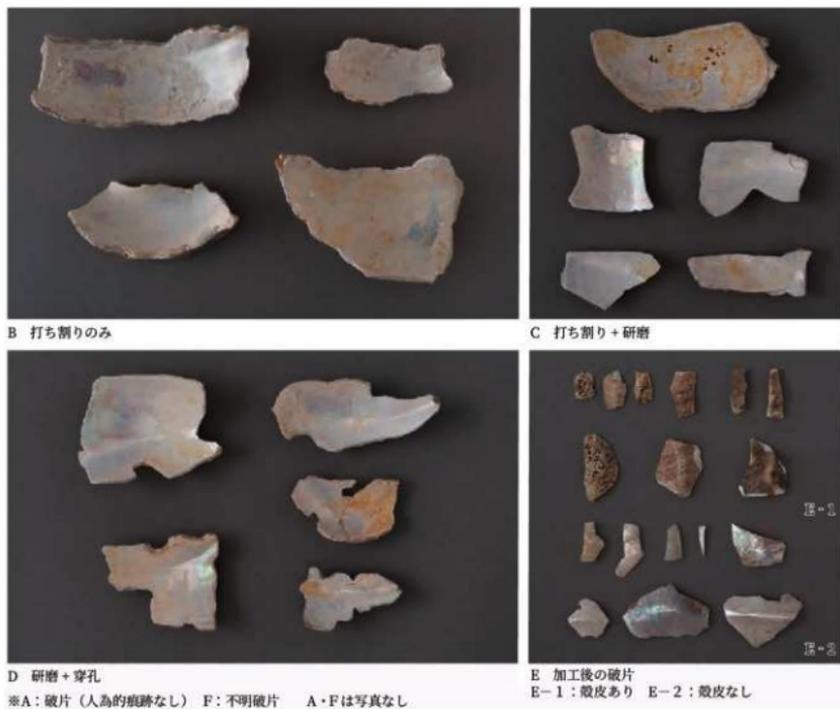


IV類 体層途中を欠損するもの



III-③類 体層を大きく欠損し、軸唇、臍盤を残すもの

第198図 ヤコウガイ殻 分類



B 打ち割りのみ

C 打ち割り+研磨

D 研磨+穿孔

E 加工後の破片

※A:破片(人為的痕跡なし) F:不明破片 A・Fは写真なし

E-1:殻皮あり E-2:殻皮なし

第199図 ヤコウガイ殻破片分類

破片になった状態のものについても、V区のSM5002で60点出土している。

今回確認されたヤコウガイの殻には、人為的な切断痕や、穿孔の痕跡等がみられ、何らかの素材として利用していることが確認できた。殻サイズの計測を行っていないため、どれくらいの大きさのヤコウガイが持ち込まれたのか不明だが、用途としては銭蔵東地区や東村跡出土と同様に、螺細素材に用いられた可能性があると考えられる。

また、体層片が大きく残るB及びCとしたものが一定数出土しており、貝匙等を製作する用途もあったと思われるので、何種類かの製作用途が考えられる。

**ヤコウガイ蓋** 完形及び破片も含めて365点出土し、ヤコウガイの貝殻片は619点出土している。ヤコウガイ殻片がまとまって出土しているSM5002をみても、貝殻片88点に対し蓋は7点と、蓋より貝殻片の出土の

方が多い。このことは銭蔵東地区と同様の傾向を示している。

**チョウセンサザエ** チョウセンサザエも多く確認されたため、残存部位毎に第201図のように分類を行った。

全体の出土量でみるとI類(完形)が最も多く135点出土している。次いでII類が77点出土している。V類(殻頂部)としたものは、55点出土しており全体の割合のなかでは11%にとどまる。

地区別でみると、V区での出土量が最も多く他地区に比べ、V類(殻頂部)及び体層片であるVII-①類、VII-②類が僅かに多い傾向がある。螺塔部分と体層部分を切り離して利用していた可能性がある。

出土地点でみると、包含層に伴って出土しているものが多く、遺構に伴って出土しているものは僅かである。V区のSM5002からは完形が1点、SM5002上部のSS5002からは、破片資料が5点出土している。

今回の調査では、殻頂部分の残存率が1/4以下にあたるV類としたものは、殻頂部分を残すものなかでも最も少なかった。また、II類とした有孔があるものの出土が多いことが確認できた。小破片となった資料も確認できていることから、銭蔵東地区と同様に螺鈿素材に利用されたもののほか、別用途として体層部分を利用するための割り取りが行われていた可能性がある。

チョウセンサザエが多く出土し、人為的加工の痕跡が確認されている遺跡として、地域や時代が異なるが、宮古島アラフ遺跡(アラフ遺跡発掘調査団2017)、伊江島ナガラ原第三貝塚(伊江村教育委員会2017)がある。

アラフ遺跡では、体層下部片を意図的に割り取り、製品化している状況が想定されており、割り取り工程として体層部に有孔があるものがある。この体層部に有孔がある状態のものが、今回の出土品と類似しているが、製品として用いた体層下部片がアラフ遺跡では多く出土しているのに対し、今回の調査では見られないことから用途が異なると考えられる。

ナガラ原第三貝塚では、チョウセンサザエを打ち欠いた製品が出土し、そのなかでも打ち欠いたあとに残るつば部に、明瞭な摩耗痕があるとしている。同様な破片資料等や摩耗痕のあるものが今回の調査では確認できなかったため、用途が異なることが考えられる。

**サラサバテイラ** 残存度から第202図のように分類した。

I類(完形)は、殻頂部が残存している67点中、5点のみであった。また、殻頂部が残存し、体層が欠損していくなかでほぼ殻頂のみが残存するIII類の出土が多く、破片資料にあたるIV類は遺構の出土量が多いことから、体層部を外して利用していた痕跡が伺える。

地区別でみると、III区では52点出土しており、IV類～V類といった破片資料が多い。V区では、III類とした体層部分が割取られ、殻頂部分が残存しているものが多く、殻口部や体層片が多い傾向がある。

出土地点でみると、包含層に伴って出土しているものがほとんどだが、V区のSM5002から5点、SS5002から16点とまとめて出土している状況が確認できる。

銭蔵東地区や東村跡と同様に体層部分を割り取り、小破片に加工していく状況が確認できた。今回確認したサラサバテイラについても螺鈿素材としての可能性が考えられる。

**ギンタカハマ** 残存度からサラサバテイラで用いた分類と同様に実施した。

完形は出土しておらず、殻頂が残存するII類及びIII類が12点出土している。体層部を割り取ったと考えられる破片である。

出土地点でみると、包含層に伴って出土しているものがほとんどである。

**マガキガイ** 合計342点出土している。独楽状製品とされることも多い(沖縄県教育委員会1994)。一方、殻頂を加工した貝玉の未成品とする見方がある(勝連町教育委員会1990・那覇市教育委員会2012)。今回出土したマガキガイをみると、螺軸部を残存させて独楽状になるものではなく、螺軸を加工していく過程の製品と考えられるため、貝玉作成途中の未製品であると考えた。

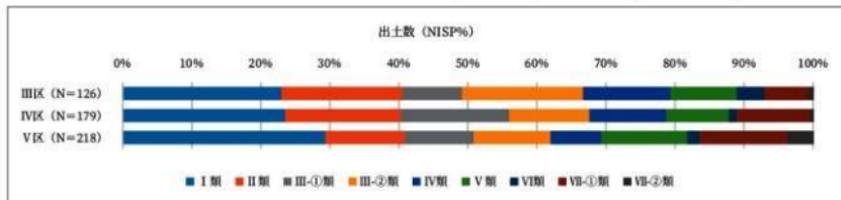
勝連城跡出土製品の分類を参考に第97表・第204図のように分類した。

II類としたものが最も多く、268点出土している。次いで完形のI類が38点と多く、螺軸部分が欠損していくIII類が35点出土している。螺軸部をすべて欠損し、その部分を磨削しているIV類が1点出土し、完成品と考えられるV類は1点も出土していない。

出土地点をみると、包含層に伴って出土しているものが主であるが、V区のSM5002から6点、SS5002から5点とまとめて出土している。

第94表 チョウセンサザエ 出土数(NISP)

地区	III区 (N=126)	IV区 (N=179)	V区 (N=218)
I類	29	42	64
II類	22	30	25
III-①類	11	28	22
III-②類	22	21	24
IV類	16	20	16
V類	12	16	27
VI類	5	2	4
VII-①類	8	19	28
VII-②類	1	1	8
合計	126	179	218



第200図 チョウセンサザエ 出土数(NISP%)



I類 完形

II類 殻頂あり、体層が欠損し有孔状



III-①類 殻口部分のみ欠損

III-②類 体層中央まで欠損



IV類 殻頂及び体層が欠損

V類 殻頂のみ



VI類 その他

VII-①類 破片(殻皮あり)

VII-②類 破片(殻皮なし)

第201図 チョウセンサザエ 分類



I類 完形

II類 下層部が割取られるもの



III類 下層部の割り取りが進み、体層部まで及ぶもの



IV-①類 体層部の破片



IV-②類 下層部の破片



V-①類 破片（殻皮あり）



V-②類 破片（殻皮なし）

第202図 サラサバテイラ 分類

第95表 サラサバテイル 出土数

地区 分類	III区 (N=52)	IV区 (N=28)	V区 (N=103)
I類	1	0	4
II類	6	7	9
III類	7	7	26
IV-①類	3	1	18
IV-②類	14	7	29
V-①類	9	3	4
V-②類	12	3	13
合計	52	28	103

第96表 ギンタカハマ 出土数

地区 分類	III区 (N=5)	IV区 (N=4)	V区 (N=14)
I類	0	0	0
II類	4	2	2
III類	1	1	2
IV-①類	0	0	2
IV-②類	0	1	1
V-①類	0	0	5
V-②類	0	0	0
VI類	0	0	2
合計	5	4	14



第203図 サラサバテイル 出土数(NISP%)



II類  
※V類の出土はなし

第204図 マガキガイ 分類

第97表 マガキガイ 分類

分類	完形
I類	完形
II類	螺軸に沿って体層部を欠損
III類	螺軸まで欠損
IV類	螺軸面及び体層面を水平方向に研磨
V類	螺軸と殻頂部が欠損、両面を研磨して穿孔

**タカラガイ** 背面を剥ぎ取りしている状況が何えるものが出土しており、残存部位で4通りに分類した。

A類(背面部)が14点、B類(下半部)が11点、C類(破片)24点、D類(完形)36点が出土している。人為的に剥ぎ取った痕跡が見られることから何らかの製品の製作工程中の遺物と考えた。



A 背面部

B 下半部

※C:破片 D:完形 C・Dは写真なし

第205図 タカラガイ 分類

第98表 タカラガイ 分類

地区 分類	III区 (N=18)	IV区 (N=14)	V区 (N=53)
A類	1	0	13
B類	3	2	6
C類	4	3	17
D類	10	9	17
合計	18	14	53

出土地点でみると、V区のSM5002からの出土が主体を占める。

**SM5002**について V区で検出した石組土坑で、遺構検出前には石敷遺構(SS5002)が確認できた。遺構の詳細については第4章第1節で述べた通りである。SS5002を掘削するとSM5002が検出できた。このSS5002も貝殻片等が多く含まれており、SM5002の遺構内埋土が多く含まれていたためと考えられる。

貝類遺体については、他遺構では5点以下という出土だったが、第91表のとおり、SM5002でまとまった出土があった。

人為的加工の痕跡のある貝類遺体のうち、ヤコウガイ殻片が特に多く出土し、サラサバテイルやタカラガイ等が出土しているなか、チョウセンサザエは出土が少ない

状況だった。チョウセンサザエについては殻の割り取り方についても銭蔵東地区や東村跡と様相が異なっている。

#### SA3001 門跡のシャコガイ

SA3001の門跡部分で、門が埋戻されている状況が確認でき、その部分の南東隅の最下層にシャコガイが伏せられて設置されていた(第206図)。シャコガイは、沖繩の民俗事例から魔除けなどの意味をもつといわれている(上江洲 1973)。大型シャコガイの配置については、銭蔵東地区での発掘調査事例で特異な出土様式として述べられている(黒住 2016)。この門は、一部を埋めた後、使用され続けた可能性があり、継続して使用するためシャコガイを配置し、何らかの意味を込めたものと考えられる。

**まとめ** 今回の調査で得られたヤコウガイ、チョウセンサザエ、サラサバテイル、ギンタカハマについては、人為的な割り取りの痕跡や加工痕跡がある小破片の存在から螺鈿素材としての利用が考えられる。また、ヤコウガイは体層片が大きく残る部分もあるため、螺鈿素材のみでなく貝匙等の製品素材としての用途があったことも考えられる。チョウセンサザエにおいても完形に近い状態で有孔部が残るものも多く存在することから、体層部片を利用するための割り取りと考えられ、こちらも螺鈿素材以外に、食料残滓や他製品素材等に用いられたと考えられる。銭蔵東地区及び東村跡との比較を中心として分析を行い、共通する事項が多い一方で、一部では異なる様相を示すものもあった。

これらの貝類遺体がまとまって出土した遺構 SM5002 は、貝製品製作に関連する遺構と考えられる。この遺構は、首里古地図で植園跡とされる部分から検出しており、漆を採取していたとされる場所で確認したことは、植園の機能を知るうえで重要だと考えられる。

SM5002は出土遺物等から16世紀以降～18世紀までの幅広い年代観があるが、近世期の遺構にあたり、銭蔵東地区及び東村跡の15世紀後半～16世紀前半のものより新しい段階のものと考えられる。



第206図 設置されたシャコガイ(SA3001門跡)

## 第4節 人骨

今回の発掘調査で、Ⅲ区から1点、Ⅴ区から4点出土している。部位別でみると永久歯4本、上腕骨が1点出土している。

今回人骨が出土したのは、すべて包含層からの出土である。グスク期の包含層(Ⅳ3層)から出土しているものもある。今回出土した資料は、すべて成人の永久歯と考えられる(第99表)。

個別に観察すると、Ⅰ層出土の永久歯(第207図№1)は、激しい齲蝕で、抜歯した可能性もある。

首里城跡御内原北地区で検出されたシーリ遺構から、永久歯の出土例がある(沖縄県立埋蔵文化財センター2010)。シーリ遺構から検出された成人の永久歯は女官達のもの想定され、生活ゴミと同様に廃棄されていることから、抜けた歯を大切にする意識がなかったとされている。生活ゴミとして廃棄したかは不明だが、造成土や他目的で堆積した土中に単独で混入している状況は、首里城跡御内原北地区シーリ遺構で出土した永久歯と同様の扱いだったことが考えられる。

右上腕骨は、近世期の包含層から出土しているが、混入した経緯等は不明である。

第99表 人骨出土一覧

No	部位	出土地区	層位	観察所見
1	下顎右第1臼歯	Ⅲ区	Ⅰ	歯根部分まで齲蝕の影響。
2	上顎側切歯	Ⅴ区	Ⅱ3c	エナメル質減形成。
3	上顎右小白歯	Ⅴ区	Ⅳ3 C	2段階の齲蝕。
4	上顎右第3臼歯	Ⅴ区	Ⅳ3	齲蝕の可能性有。
5	右上腕骨	Ⅴ区	Ⅲ	近位部一部位部



第207図 出土人骨 歯

第100表 川区ギンタカハマ  
般の欠損状況による分類

分類	Ⅰ		Ⅱ		合計
	SA 3001	SR 3001	I	II	
Ⅰ類			2	2	4
Ⅱ類			2	2	4
合計	1	2	2	2	5

第101表 川区サラサバテラ 般の欠損状況による分類

分類	Ⅰ		Ⅱ					Ⅲ								合計	
	SA 3001	SR 3001	I	II	1a	4	5a	6	a	b	c	d	e	f	7a		8
Ⅰ類			2	1	1												
Ⅱ類			2	1													
Ⅲ類			2	1													
Ⅳ類			1	1	1	4	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	14
Ⅴ類			9														9
Ⅵ類			12														12
合計	3	1	7	1	3	3	4	1	1	2	1	1	1	1	1	1	52

第102表 川区ヤコウガイ 般の欠損状況による分類

分類	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		合計
	SA 3001	SR 3001	I	II	1	2	3	4	
Ⅰ類			1	1					2
Ⅱ類			1	1					2
Ⅲ類			1	1					2
Ⅳ類			1	1					2
合計	1	1	1	1	0	0	0	0	4
Ⅴ以上Ⅵ			1	1	4	2			8
Ⅶ未満Ⅷ			2						2
合計	0	0	2	0	1	2	4	2	10

第103表 川区ヤコウガイ 破片出土状況

分類	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		合計
	SA 3001	SR 3001	I	II	1	2	3	4	
A			9	4	2	1	3		19
B			1	3	1	4	1	1	10
C			1	12	1	1	1		15
D			1	2		3			6
E			1	3	1	1			6
F			1	13	1	1			16
G			1	7	6	15	1	1	21
合計	2	7	6	49	14	16	11	4	113

第104表 川区チョウセンサザエ 般の欠損状況による分類

分類	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		合計
	SA 3001	SR 3001	I	II	1	2	3	4	
Ⅰ類			2	2					4
Ⅱ類			2						2
Ⅲ類			1	1					2
Ⅳ類			2	1					3
Ⅴ類			1	1					2
Ⅵ類			1						1
Ⅶ類			1						1
Ⅷ類			1						1
合計	8	2	10	0	1	1	1	1	16

第105表 川区マガキガイ 般の欠損状況による分類

分類	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		合計
	SA 3001	SR 3001	I	II	1	2	3	4	
Ⅰ類			1	1					2
Ⅱ類			1	1					2
Ⅲ類			1	1					2
Ⅳ類			1	1					2
合計	1	1	1	1	0	0	0	0	4

第106表 川区タカラガイ科 貝製品

分類	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		合計
	SA 3001	SR 3001	I	II	1	2	3	4	
A			1	1					2
B			1	1					2
C			1	1					2
D			1	1					2
合計	0	0	4	4	0	0	0	0	8

第107表 IV区ギンタカハマ  
般の欠損状況による分類

分類	Ⅰ		Ⅱ		合計
	I	II	13	14	
Ⅰ類			1	1	2
Ⅱ類			1	1	2
Ⅲ類			1	1	2
Ⅳ類			1	1	2
合計	2	1	1	1	4

第108表 IV区サラサバテラ 般の欠損状況による分類

分類	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		合計
	SA 4003	SR 4003	I	II	10	11	
Ⅰ類			4	1	1	1	7
Ⅱ類			4	1	1	1	7
Ⅲ類			1	1	1	1	4
Ⅳ類			1	1	1	1	4
Ⅴ類			1	1	1	1	4
Ⅵ類			1	1	1	1	4
Ⅶ類			1	1	1	1	4
Ⅷ類			1	1	1	1	4
合計	1	6	5	1	2	1	15

第109表 IV区ヤコウガイ 般の欠損状況による分類

分類	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		合計
	SM 4003	SR 4001	I	II	10	11	12	13	
Ⅰ類			1	1					2
Ⅱ類			1	1					2
Ⅲ類			1	1					2
Ⅳ類			1	1					2
合計	2	0	0	0	0	0	0	0	4
Ⅴ以上Ⅵ			1	1	1	1	1	1	5
Ⅶ未満Ⅷ			1	1	1	1	1	1	5
合計	1	1	2	2	2	2	2	2	10





第125表 Ⅲ区巻貝出土状況 a

SA3001

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数	
スイショウガイ科	オハダロガイ	Ⅱ-2-c		1	1	1	
イモガイ科	アンボンクロナメ	I-2-c			1	1	
	イモガイ科不明			1		1	
合計				0	2	2	3

SA3005

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
オニノツノガイ科	クワノミカニモリ	I-1-b	1			1
イトマキボラ科	イトマキボラ	I-2-a			1	1
合計			1	0	1	2

SK3001

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ-1-b	1			1

SM3002

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
巻貝不明					1	1

SM3003

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ-1-b	5	1	1	6

SM3008

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
リュウテン科	カンギクの蓋	Ⅱ-1-b	1			1
アマオブネ科	アマオブネ	I-1-b	1			1
スイショウガイ科	クモガイ	I-2-c			1	1
合計			2	0	1	3

SM3009

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
イモガイ科	イモガイ科不明				1	1

SP3010

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ-1-b	1	1	1	1
エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ-1-c	1			1
合計			1	1	1	2

SP3024

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
ニシキウズ科	ニシキウズ	I-2-a			1	1

SP3027

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
オニノツノガイ科	イワ(ウミナ)カニモリ	Ⅱ-1-b			1	1

SS3004

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
スイショウガイ科	オハダロガイ	Ⅱ-2-c	1			1

SX3003

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
イトマキボラ科	イトマキボラ	I-2-a	1			1

SX3005

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
リュウテン科	カンギク	Ⅱ-1-b	1			1
スイショウガイ科	オハダロガイ	Ⅱ-2-c	1			1
イトマキボラ科	イトマキボラ	I-2-a	1			1
トウダカワニナ科	スダクワニナ	Ⅳ-6	1			1
合計			4	0	0	4

※完形と殻頂の数を見した合計を個体数とした。(破片でのみ出土した貝種については、最少個体数「1」として数えた)

I層

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数	
ニシキウズ科	ニシキウズ	I-2-a	4	1	2	5	
リュウテン科	カンギク	Ⅱ-1-b	2			1	2
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	I-2-c	1			1	
	イワ(ウミナ)カニモリ	Ⅱ-1-b		1		1	
ヘナタリ科	カワアイ	Ⅲ-1-c				1	1
	センニンガイ	Ⅲ-0-c	1				
スイショウガイ科	オハダロガイ	Ⅱ-2-c	7			1	7
	ムカシタモト	I-2-c	1			1	
ヤツシロガイ科	クモガイ	I-2-c		1		1	
	スクミウスラガイ	I-2-c	1			1	
フジツガイ科	ホウガイ	I-4-a				2	1
アッキガイ科	ツノレイシ	I-3-a	1			1	
	シラタモガイ	I-3-a	2			2	
オニコブシ科	コオニコブシ	I-3-a	1			1	
	イトマキボラ	I-2-a	5			1	5
イトマキボラ科	ヒメイトマキボラ	I-2-b	1			1	
	ナゴイトマキボラ	I-2-a		1		1	
イモガイ科	ナンヨウクロミナシ	I-2-c	1			1	
	サヤガタイモ	I-1-a	1			1	
	アカシマミナシ	I-2-c			1	1	
	ヤナギシボリイモ	I-2-a	2			2	
	イモガイ科不明				1	1	
合計			31	3	11	39	

II層

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数	
リュウテン科	カンギク	Ⅱ-1-b	3			3	
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	I-2-c		2		2	
	イワ(ウミナ)カニモリ	Ⅱ-1-b	1			1	
ヘナタリ科	センニンガイ	Ⅲ-0-c				1	1
スイショウガイ科	スイショウガイ科不明					1	1
巻貝不明						1	1
合計			4	2	3	9	

III層

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数	
ニシキウズ科	ニシキウズ	I-2-a	1			1	
	オキナワシシダタイ	Ⅱ-1-b	1			1	
	ニシキウズ科不明					1	1
リュウテン科	カンギク	Ⅱ-1-b	10	5	2	15	
	カンギクの蓋	Ⅱ-1-b	1			1	
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	I-2-c	2	2	1	4	
	コオニノツノガイ	I-2-a	1			1	
オニノツノガイ科	イワ(ウミナ)カニモリ	Ⅱ-1-b	2	4	1	6	
	クワノミカニモリ	I-1-b	1	3	1	4	
スイショウガイ科	クモガイ	I-2-c		1	1	1	
ヤツシロガイ科	スクミウスラガイ	I-2-c	1			1	
アッキガイ科	ウネレイシダマシ	I-1-b				1	1
	ツノレイシ	I-3-a	3			3	
オニコブシ科	シラタモガイ	I-3-a	1			1	
	コオニコブシ	I-3-a	5			5	
イトマキボラ科	イトマキボラ	I-3-a	1			1	
イモガイ科	ヤナギシボリイモ	I-2-a				2	1
	イモガイ科不明					1	1
合計			30	15	11	49	

第126表 III区巻貝出土状況 b

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
ニシキウズ科	ニシキウズ	I-2-a	1			1
リュウナン科	カンギク	II-1-b	1			1
	カンギクの蓋	II-1-b		1		1
オニツノガイ科	イワ(伊)カニモリ	II-1-b	1			1
スイショウガイ科	タモガイ	I-2-c	1			1
オニコブシ科	オニコブシ科不明			1		1
イモガイ科	マダライモ	I-1-a	1			1
トウダカワニナ科	スダカワニナ	IV-6	1			1
巻貝不明					1	1
合計			3	2	4	9

第127表 IV区巻貝出土状況 a

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
ニシキウズ科	ムラサキウズ	I-3-a	1			1
イトマキボウ科	イトマキボウ	I-2-a	2			2
イモガイ科	キヌカツギイモ	I-2-a	1			1
合計			4	0	0	4
SK4001						
科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
リュウナン科	カンギク	II-1-b	1			1
SK4006						
科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
トウダカワニナ科	スダカワニナ	IV-6	1			1
SR4001						
科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
リュウナン科	カンギク	II-1-b		1		1
オニツノガイ科	イワ(伊)カニモリ	II-1-b	1			1
オニコブシ科	オニコブシ	I-3-a	1			1
合計			2	0	1	3

## I層

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
ニシキウズ科	ニシキウズ	I-2-a	1			1
リュウナン科	カンギク	II-1-b	1			1
アマオガネ科	オオマルアマオガネ	I-1-b	1			1
オニツノガイ科	オニツノガイ	I-2-c	5	2	5	5
	イワ(伊)カニモリ	II-1-b	1			1
スイショウガイ科	ホジマダカ	I-2-c	1			1
アツギガイ科	シラタモガイ	I-3-a	1			1
	イトマキボウ	I-2-a	4			4
イトマキボウ科	ヒメイトマキボウ	I-2-b	1	1	1	1
	ナガイトマキボウ	I-2-a	1			1
	ゴマフイモ	I-2-c	1			1
イモガイ科	オナジマイマイ科	I-2-c	1			1
	オナジマイマイ科	V-9	1			1
合計			6	1	0	7
SA5003						
科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
スイショウガイ科	オハダロガイ	II-2-c	1			1
イトマキボウ科	イトマキボウ	I-2-a	1			1
合計			2	0	0	2

## II層

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
オニツノガイ科	クワノミカニモリ	I-1-b	1			1
スイショウガイ科	オハダロガイ	II-2-c	1			1
イトマキボウ科	イトマキボウ	I-2-a	3			3
イモガイ科	ゴマフイモ	I-2-c	1			1
巻貝不明					1	1
合計			5	0	2	7

第128表 IV区巻貝出土状況 b

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
ニシキウズ科	ニシキウズ	I-2-a	1			1
	ムラサキウズ	I-3-a	1			1
リュウナン科	カンギク	II-1-b	4	2	4	2
	オニツノガイ	I-2-c	1	2	3	3
オニツノガイ科	コダツツガイ	III-1-c	1			1
	イワ(伊)カニモリ	II-1-b	1	1	2	2
	クワノミカニモリ	I-1-b	2	1	3	3
スイショウガイ科	オハダロガイ	II-2-c	2			2
スズメガイ科	カワフドリ	I-3-a	1			1
オキニシ科	オキニシ	I-3-a	1	2	1	2
アツギガイ科	ツノレシ	I-3-a	1			1
	シラタモガイ	I-3-a	1			1
オニコブシ科	オニコブシ	I-3-a	2			2
エゾバイ科	シマベッコウバイ	II-1-c	3			3
イトマキボウ科	ヒメイトマキボウ	I-2-b	1			1
	ナシヨウクロミナシ	II-2-c	1			1
	クロアホドキ	I-2-c			1	1
	マダライモ	I-1-a	3			3
イモガイ科	サヤガタイモ	I-1-a	2			2
	ヤナギシロイモ	I-2-a	1	1	2	2
	キヌカツギイモ	I-2-a	1			1
	イモガイ科不明				1	1
合計			31	6	8	38

## IV層

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
オニコブシ科	オニコブシ	I-3-a	1			1
層不明						
科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
オニコブシ科	オニコブシ	I-3-a	1			1

第129表 V区巻貝出土状況 a

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
リュウナン科	カンギク	II-1-b	1			1
オニツノガイ科	オニツノガイ	I-2-c	1			1
スイショウガイ科	オハダロガイ	II-2-c	1			1
オニコブシ科	オニコブシ	I-3-a	1			1
イトマキボウ科	イトマキボウ	I-2-a	1			1
イモガイ科	ヤナギシロイモ	I-2-a	1			1
オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	V-9	1			1
合計			6	1	0	7

## SA5003

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
スイショウガイ科	オハダロガイ	II-2-c	1			1
イトマキボウ科	イトマキボウ	I-2-a	1			1
合計			2	0	0	2

## SA5005

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
リュウナン科	カンギク	II-1-b	1			1
ヘナタリ科	センシロガイ	III-0-c	3			3
イトマキボウ科	イトマキボウ	I-2-a	1			1
イモガイ科	イモガイ科不明		1			1
合計			6	0	0	6

## SD5002

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
ユキノカサ科	リュウケウノアシ	I-1-a	1			1
リュウナン科	カンギク	II-1-b	11			11
アマオガネ科	マルアマオガネ	II-1-b	1			1
合計			13	0	0	13

## SD5004

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個体数
スイショウガイ科	オハダロガイ	II-2-c	1			1

※完形と殻頂の数を見した合計を個体数とした。(破片でのみ出土した貝種については、最少個体数「1」として数えた)

第130表 V区巻貝出土状況b

SF5001

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
ニシキウズ科	ニシキウズ	I-2-a	1			1
リュウテン科	カンギク	II-1-b	350	2	2	352
アマオブネ科	アマオブネ	I-1-b	4			4
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	I-2-c	1			1
	メオニノツノガイ	I-4-c	1			1
	タワノミカニモリ	I-1-b	1			1
スイショウガイ科	オハダゴガイ	II-2-c	10	1		11
ツツガイ科	ガンゼキボラ	I-4-a	1			1
	ツノレイシ	I-3-a	2			2
エゾバイ科	シマベッコウバイ	II-1-c	2			2
イトマキボタ科	イトマキボタ	I-2-a	1			1
イモガイ科	アカシマミナシ	I-2-c	1			1
巻貝不明				2		1
合計			372	6	4	379

SK5004

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
アマオブネ科	コシダカアマガイ	I-1-b	1			1

SM5001

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
イトマキボタ科	ヒメイトマキボラ	I-2-b		1		1

SM5002

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
リュウテン科	カンギク	II-1-b	3	2	1	5
オニノツノガイ科	イワ(タビ)カニモリ	II-1-b	2			2
スイショウガイ科	オハダゴガイ	II-2-c	1			1
ナンバハママイマイ科	シュリマイマイ	V-8			1	1
合計			6	2	2	9

SP5032

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
リュウテン科	カンギク	II-1-b	2			2
オニノツノガイ科	イワ(タビ)カニモリ	II-1-b	2			2
合計			4	0	0	4

SP5062

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
リュウテン科	カンギク	II-1-b	1			1
オニノツノガイ科	イワ(タビ)カニモリ	II-1-b	1			1
タワノミカニモリ		I-1-b	1			1
合計			0	3	0	3

SP5065

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
リュウテン科	カンギク	II-1-b	1			1

SP5079

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
オニノツノガイ科	イワ(タビ)カニモリ	II-1-b	9	6	3	15

SS5002

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
ニシキウズ科	ムラサキウズ	I-3-a	1			1

SS5005

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
スイショウガイ科	オハダゴガイ	II-2-c	2			2

SS5007

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
ニシキウズ科	ニシキウズ	I-2-a			1	1

SX5001

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
リュウテン科	カンギク	II-1-b	1	1	1	1

※完形と殻頂の数を足した合計を個体数とした。(破片でのみ出土した貝種については、最少個体数「1」として数えた)

SX5002

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
スイショウガイ科	オハダゴガイ	II-2-c	3			3

SX5004

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
リュウテン科	カンギク	II-1-b	1			1
アマオブネ科	アマオブネ	I-1-b	1			1
オニノツノガイ科	オニノツノガイ科不明					1
ツツガイ科		I-2-a	1			1
イモガイ科	ヤキガイイモ	I-1-a	1			1
合計			3	1	1	5

SX5005

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
オニコブシ科	オニコブシ	I-3-a	1			1

I層

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
ツツノ科	オオベッコウガサ	I-1-a			1	1

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
ニシキウズ科	ニシキウズ	I-2-a		2	2	2
リュウテン科	カンギク	II-1-b	17	2	1	19

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
アマオブネ科	アマオブネ	I-1-b	2			2

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
アマオブネ科	ニシキアマオブネ	I-1-c	1			1

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	I-2-c	6	2	6	14
	イワ(タビ)カニモリ	II-1-b	3			3

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
オニノツノガイ科	タワノミカニモリ	I-1-b	1			1
	ナガタケノコカニモリ	I-1-c	1			1

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
ゴマフナ科	ゴマフナ	I-0-a	1			1

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
ヘナタリ科	フトヘナタリ	III-0-d				1

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
オハダゴガイ科	オハダゴガイ	II-2-c	1	3	4	4

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
スイショウガイ科	タモガイ	I-2-c	1			1

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
タマガイ科	リスガイ	I-2-c	1			1

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
オキニシ科	オキニシ	I-3-a	1			1

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
アマオイガイ科	アマオイガイ	I-3-a	1			1

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
ツツガイ科	ツノレイシ	I-3-a	3			3

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
リュウテン科	シラクモガイ	I-3-a	1			1

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
オニコブシ科	オニコブシ	I-3-a	1			1

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
イトマキボタ科	イトマキボラ	I-2-a	2	1		3

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
イトマキボタ科	サンヨウタロミナシ	II-2-c	1			1

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
イモガイ科	マダライモ	I-1-a	1			1

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
イモガイ科	ニキガイモ	I-2-c	1			1

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
イモガイ科	ヤキイモ	I-2-c	1			1
	ヤナギシボレイモ	I-2-a	3			3
	アジロイモ	II-2-c	1			1
	イモガイ科不明		1	1		2

科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
タケノコガイ科	キタケノコガイ	IV				1
ヤマタニシ科	ヤマタニシ	V-8	3			3
巻貝不明						2
合計			106	93	211	203

第131表 V区巻貝出土状況c

II層						
科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
リュウナン科	カンギク	II-1-b	6	1	1	7
	カンギクの蓋	II-1-b	1			1
オニツノガイ科	イワ(伊)カニモリ	II-1-b	3	1		4
	クワノミカニモリ	I-1-b		1		1
ウミナシ科	リュウキウウミナシ	II-1-c		1		1
ヘナタリ科	カワアイ	III-1-c			1	1
スイショウガイ科	オハダログイ	II-2-c	1	1	2	2
アッキガイ科	シラクモガイ	I-3-a	1			1
オニコブシ科	コオニコブシ	I-3-a	1			1
エゾバイ科	シマベッコウバイ	II-1-c		2		2
イモガイ科	マダライモ	I-1-a	1			1
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	V-8		1		1
ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	V-8			1	1
オナジマイマイ科	バンダナマイマイ	V-8			2	1
数貝不明						1
合 計			16	6	8	26

III層						
科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
ニシキウズ科	ニシキウズ	I-2-a	3			2
	ニシキウズ科不明				1	1
リュウナン科	カンギク	II-1-b	5	2	3	7
オニツノガイ科	オニツノガイ	I-2-c		2		2
	イワ(伊)カニモリ	II-1-b		1		1
スイショウガイ科	オハダログイ	II-2-c	1			1
	ムカシタモト	I-2-c		1		1
	タモガイ	I-2-c		1		1
アッキガイ科	ガンゼキボラ	I-4-a	1			1
	ツノレイシ	I-3-a	1			1
エゾバイ科	シラクモガイ	I-3-a	2			2
	シマベッコウバイ	II-1-c	1			1
イトマキボラ科	チトセボラ	I-2-c			1	1
	マダライモ	I-1-a	1			1
	サヤガタイモ	I-1-a		1		1
	ジュズカケサヤガタイモ	I-1-a	1			1
	ヤナゴシボライモ	I-2-a	1			1
イモガイ科不明				1		1
トウガタカワニシ科	スガカワニシ	IV-6	1			1
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	V-8	12	2	2	14
オナジマイマイ科	オキナワスカワマイマイ	V-9	1		2	1
合 計			30	12	11	44

IV層						
科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	個対数
ニシキウズ科	ニシキウズ	I-2-a	1			1
リュウナン科	カンギク	II-1-b	16	8	20	24
オニツノガイ科	オニツノガイ	I-2-c		2		2
	イワ(伊)カニモリ	II-1-b	26	212	237	238
スイショウガイ科	スイショウガイ科不明				1	1
オキニシ科	オキニシ	I-3-a	1			1
アッキガイ科	ウネレイシダマン	I-1-b	1			1
	ツノレイシ	I-3-a	1			1
エゾバイ科	シマベッコウバイ	II-1-c	2			2
イモガイ科	ナンヨウクロミナシ	II-2-c	1			1
合 計			49	222	258	272

※完形と殻頂の数を見した合計を個体数とした。(破片でのみ出土した貝種については、最少個体数「1」として数えた)

第132表 Ⅲ区二枚貝・ウニ綱出土状況 a

SA3001

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ジャコガイ科	ヒレジャコ	I-2-c					1	1

SA3005

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	1	1				1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	9	7			1	9
	イオウハマグリ	Ⅱ-1-c			1			1
	ハマグリ科の一種	Ⅱ-2-c					1	1
合計			10	9	0	2	0	12

SA3006

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
アネガイ科	エガイ	I-1-a	1					1
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c			1			1
ジャコガイ科	ジャコガイ科不明						1	1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c					1	1
合計			1	1	1	0	1	4

SA3007

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	2					2

SA3008

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c			3			3
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	2	2				2
合計			2	5	0	0	0	5

SK3001

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	1					1

SK3002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c			1			1

SM3001

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
チドリマスオ科	イソハマグリ	I-1-c			1			1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	1	1			1	1
	ユウカガハマグリ	Ⅱ-2-c			1			1
合計			1	2	1	0	1	3

SM3002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
シジミ科	シレテシジミ	I-1-a	1					1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	4	2				4
二枚貝不明								1
合計			5	2	0	0	1	6

SM3003

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ザルガイ科	リュウキュウザル	Ⅱ-2-c	1					1
	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	21	13			3	2
	ホソジイナミ	Ⅱ-1-c	1	2				2
	ハマグリ科の一種	Ⅱ-2-c	1		1			2
	ダチオキシジミ	Ⅲ-1-c	3					3
合計			26	16	1	3	2	29

SM3005

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ-2-c	1					1

SM3007

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	4	5				5
	ホソジイナミ	Ⅱ-1-c	1					1
合計			5	5	0	0	0	6

SM3008

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	1	1				1
ジャコガイ科	ジャコガイ科不明							2
チドリマスオ科	イソハマグリ	I-1-c	1	1				1
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	2	3				3
	ハマグリ科の一種	Ⅱ-2-c	1					1
二枚貝不明								1
合計			5	5	0	0	3	8

SM3009

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	2	4				4
	ハマグリ科の一種	Ⅱ-2-c			2			2
	ダチオキシジミ	Ⅲ-1-c	1					1
合計			3	6	0	0	0	7

SP3002

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	1					1

SP3010

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	1					1

SP3018

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
ジャコガイ科	ジャコガイ科不明							2

SP3023

科名	貝種名	生息地	完形		殻頂		破片	個体数
			L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	1					1

※完形と殻頂の右回土・左回土を区別して、多い方を個体数とした。(破片でのみ出土した貝種については、最小個体数「1」と数えた)

第133表 Ⅲ区二枚貝・ウニ綱出土状況b

SP3024

科名	貝種名	生息地	完形			殻頂			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	1						1	
	ハマグリ的一种	Ⅱ-2-c	1						1	
	ダテオキシジミ	Ⅲ-1-c						1	1	
二枚貝不明								1	1	
合計			2	0	0	0	2	4		

SP3027

科名	貝種名	生息地	完形			殻頂			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	2						2	

SS3002

科名	貝種名	生息地	完形			殻頂			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ-1-c	1						1	

SS3004

科名	貝種名	生息地	完形			殻頂			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	2						2	

SX3001

科名	貝種名	生息地	完形			殻頂			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	1	1					1	

SX3004

科名	貝種名	生息地	完形			殻頂			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツギガイ	Ⅱ-2-c			1				1	

SX3005

科名	貝種名	生息地	完形			殻頂			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツギガイ	Ⅱ-2-c	1						1	
ザルガイ科	リュウキュウザル	Ⅱ-2-c	1						1	
シャコガイ科	シャコガイ科不明							1	1	
バカガイ科	リュウキュウバカガイ	Ⅱ-2-c						1	1	
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c			1				1	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	6	2	2	1			8	
合計			7	3	3	1	2	13		

I層

科名	貝種名	生息地	完形			殻頂			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツギガイ	Ⅱ-2-c	13	15					15	
シャコガイ科	ヒメシャコ	Ⅰ-2-a	1					1	1	
	ヒレシャコ	Ⅰ-2-c						4	1	
	オオシラナミ(分母)	Ⅰ-2-a						1	1	
	シャコガイ科不明						1	13	1	
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c	2	4					4	
イソシジミ科	マスオガイ	Ⅱ-1-c	1	2					2	
マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ-1-c	1	2					2	
	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	28	26	6	4	6	34		
	ホソズジイナミ	Ⅱ-1-c	4	3					4	
	ユウカゲハマグリ	Ⅱ-2-c	1						1	
	マルオミナエシ	Ⅰ-2-a						1	1	
	ハネマツカゼ	Ⅰ-1-c	1					1	1	
	ハマグリ的一种	Ⅱ-2-c	3	4	3	2	4	6		

※完形と殻頂の右同士・左同士を見ても、多い方を個体数とした。(破片でのみ出土した貝種については、最小個体数「1」と数えた)

I層(つづき)

科名	貝種名	生息地	完形			殻頂			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
マルスダレガイ科	ダテオキシジミ	Ⅲ-1-c	9	7	1	4		4	10	
	二枚貝不明								2	1
合計			62	65	10	7	38	85		

II層

科名	貝種名	生息地	完形			殻頂			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツギガイ	Ⅱ-2-c	3	6					6	
ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ-2-c	1						1	
シャコガイ科	ヒメシャコ	Ⅰ-2-a	1						1	
	オオシラナミ(分母)	Ⅰ-2-a	1					1	1	
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c	2	2					2	
シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ-1-a	1	2					2	
マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ-1-c	1						1	
	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	26	20	1	2	2	27		
	ホソズジイナミ	Ⅱ-1-c	1						1	
	イオウハマグリ	Ⅱ-1-c	1						1	
	ハマグリ的一种	Ⅱ-2-c	1	2				1	2	
	ダテオキシジミ	Ⅲ-1-c	2	2				4		
合計			37	36	1	4	4	49		

III層

科名	貝種名	生息地	完形			殻頂			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
ツキガイ科	エガイ	Ⅰ-1-a	1						1	
ツキガイ科	ウラキツギガイ	Ⅱ-2-c	25	23			2	2	25	
	ツキガイ科不明								1	1
ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ-2-c	1		1				1	
シャコガイ科	ヒメシャコ	Ⅰ-2-a	1						1	
	ヒレシャコ	Ⅰ-2-c			1				1	
	シャコガイ科不明								3	1
バカガイ科	リュウキュウバカガイ	Ⅱ-2-c	1					1	1	
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c	4	1					4	
ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅱ-1-c	1						1	
シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ-1-a	1	2	2	1			3	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	115	104	20	15	9	135		
	ホソズジイナミ	Ⅱ-1-c	2	1					3	
	ユウカゲハマグリ	Ⅱ-2-c	2	1					2	
	オキノカガミ	Ⅱ-2-c	2	1	1				3	
	スダレハマグリ	Ⅱ-2-c	2	1				1	2	
	イオウハマグリ	Ⅱ-1-c	2	2					2	
	ハマグリ的一种	Ⅱ-2-c	4	1	4	1	1	8		
	ダテオキシジミ	Ⅲ-1-c	1	1				2		
	二枚貝印象化石		1	1					1	
	二枚貝不明								7	1
合計			161	141	29	22	26	200		

IV層

科名	貝種名	生息地	完形			殻頂			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
ウミギク科	メンガイ的一种		1	1					2	
ツキガイ科	ウラキツギガイ	Ⅱ-2-c	2						1	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	10	10			2	2	12	
合計			11	13	0	2	2	15		

第134表 IV区二枚貝・ウニ綱出土状況

科名	貝種名	生息地	完形			破損			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラシジケマン	Ⅲ-1-c	1						1	
SD4002										

科名	貝種名	生息地	完形			破損			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	1						1	
マルスダレガイ科	アラシジケマン	Ⅲ-1-c	2						2	
マルスダレガイ科	ホソスジイナミ	Ⅱ-1-c	1						1	
合計										

科名	貝種名	生息地	完形			破損			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	2	1	2				4	
シャコガイ科	シャコガイ科不明					1			1	
マルスダレガイ科	アラシジケマン	Ⅲ-1-c	1						1	
合計										

科名	貝種名	生息地	完形			破損			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
シャコガイ科	シャコガイ科不明								1	
シジミ科	シレンナジミ	I-1-a							1	
マルスダレガイ科	ホソスジイナミ	Ⅱ-1-c	1						1	
合計										

科名	貝種名	生息地	完形			破損			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
ツキガイ科	ツキガイ	I-2-c							1	
SM4002										

科名	貝種名	生息地	完形			破損			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
マルスダレガイ科	ハマグリ科一種	Ⅱ-2-c	1						1	
二枚貝不明						1			1	
合計										

科名	貝種名	生息地	完形			破損			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
シャコガイ科	オオシラナミ(分群)	I-2-a							1	
マルスダレガイ科	アラシジケマン	Ⅲ-1-c	6	5					6	
マルスダレガイ科	ホソスジイナミ	Ⅱ-1-c	1						1	
マルスダレガイ科	ハマグリ科一種	Ⅱ-2-c	1						1	
合計										

科名	貝種名	生息地	完形			破損			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラシジケマン	Ⅲ-1-c	1						1	
SP4007										

科名	貝種名	生息地	完形			破損			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c							1	
マルスダレガイ科	アラシジケマン	Ⅲ-1-c							1	
マルスダレガイ科	ハマグリ科一種	Ⅱ-2-c							1	
合計										

科名	貝種名	生息地	完形			破損			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	2	1					2	
シャコガイ科	オオシラナミ(分群)	I-2-a							1	
マルスダレガイ科	アラシジケマン	Ⅲ-1-c	7	6					8	
マルスダレガイ科	ホソスジイナミ	Ⅱ-1-c	1						1	
合計										

科名	貝種名	生息地	完形			破損			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラシジケマン	Ⅲ-1-c	1	1					1	
SX4007										

科名	貝種名	生息地	完形			破損			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラシジケマン	Ⅲ-1-c							1	
合計										

科名	貝種名	生息地	完形			破損			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
マルスダレガイ科	アラシジケマン	Ⅲ-1-c	1						1	
マルスダレガイ科	ホソスジイナミ	Ⅱ-1-c	1	1					1	
合計										

科名	貝種名	生息地	完形			破損			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	5	5					5	
ザルガイ科	カワザガイ	Ⅱ-2-c	1						1	
ツキガイ科	ヒレシヤコ	I-2-c							1	
ツキガイ科	オオシラナミ(分群)	I-2-a							1	
ツキガイ科	シャコガイ科不明								3	
チドリマスオ科	イソハマグリ	I-1-c	1						1	
ツキガイ科	シレンナジミ	I-1-a							3	
ツキガイ科	スノメガイ	Ⅲ-1-c	4	4					4	
マルスダレガイ科	アラシジケマン	Ⅲ-1-c	14	19	2	3			22	
マルスダレガイ科	ハマグリ科一種	Ⅱ-2-c	7	5					7	
マルスダレガイ科	ダチオホシジミ	Ⅲ-1-c	5	3					5	
合計										

科名	貝種名	生息地	完形			破損			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
ツキガイ科	リュウキュウサルボオ	Ⅱ-2-c	1						1	
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	1	4					4	
ツキガイ科	ヒレシヤコ	I-2-c							1	
ツキガイ科	オオシラナミ(分群)	I-2-a							2	
ツキガイ科	シャコガイ科不明								1	
チドリマスオ科	イソハマグリ	I-1-c	1						1	
ツキガイ科	スノメガイ	Ⅲ-1-c							2	
マルスダレガイ科	アラシジケマン	Ⅲ-1-c	1	4					4	
マルスダレガイ科	ホソスジイナミ	Ⅱ-1-c	1						1	
マルスダレガイ科	ハマグリ科一種	Ⅱ-2-c	1						1	
マルスダレガイ科	ダチオホシジミ	Ⅲ-1-c	1						1	
合計										

科名	貝種名	生息地	完形			破損			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
ツキガイ科	エガイ	I-1-a	1						1	
ツキガイ科	ソメツクリ	Ⅱ-2-c	1						1	
ツキガイ科	メンゴイ科一種		1						1	
ツキガイ科	オハダロガイ	I-1-a							1	
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	52	49	2	1			54	
ツキガイ科	ヒメツクリ	I-2-c	1	2					2	
ツキガイ科	シロザル	I-4-a	1						1	
ツキガイ科	リュウキュウザル	Ⅱ-2-c	1						1	
ツキガイ科	カワザガイ	Ⅱ-2-c	3	2	2				5	
ツキガイ科	ヒメシヤコ	I-2-a	1	1					2	
ツキガイ科	ヒレシヤコ	I-2-c	1	1					2	
ツキガイ科	オオシラナミ(分群)	I-2-a	1						1	
ツキガイ科	オオシラナミ(分群)	I-2-a							1	
ツキガイ科	シャコガイ科不明								2	
チドリマスオ科	イソハマグリ	I-1-c	2	3					3	
ツキガイ科	リュウキュウミノコ	I-1-c	1						1	
ツキガイ科	リュウキュウマスオ	Ⅱ-1-c	1						1	
ツキガイ科	シレンナジミ	I-1-a	6	1	2	1			8	
ツキガイ科	スノメガイ	Ⅲ-1-c	1	1					2	
マルスダレガイ科	アラシジケマン	Ⅲ-1-c	85	88	16	9			101	
マルスダレガイ科	ホソスジイナミ	Ⅱ-1-c	5	4					5	
マルスダレガイ科	スダレハマグリ	Ⅱ-2-c	2	2	1				3	
マルスダレガイ科	イソハマグリ	Ⅱ-1-c	3	5	6				6	
マルスダレガイ科	ハマグリ科一種	Ⅱ-2-c	23	6	3	5			26	
マルスダレガイ科	ダチオホシジミ	Ⅲ-1-c	6	6	3	3			9	
ナガウニ科	ハイブウニ	I-3-a							1	
合計										

科名	貝種名	生息地	完形			破損			破片	個体数
			L	R	L	R	L	R		
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c							2	
マルスダレガイ科	アラシジケマン	Ⅲ-1-c	2	1					2	
合計										

※完形と破損の右同士・左同士を見て、多い方を個体数とした。(破片でのみ出土した貝種については、最小個体数「1」と数えた)

第135表 V区二枚貝・ウニ綱出土状況 a

SA5001

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
マルスダレガイ科	スダレハマグリ	Ⅱ-2-c	1					1	
SA5002									
科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
フネガイ科	リュウキュウサルボオ	Ⅱ-2-c	1					1	
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	1					1	
ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ-2-c	1					1	
シジミ科	シテナシジミ	Ⅰ-1-a						1	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	7	6	2	1	1	9	
	ホフジシナミ	Ⅱ-1-c				1		1	
	ユウカガハマグリ	Ⅱ-2-c				2		2	
	ハマグリ科の一種	Ⅱ-2-c	1	2	1			3	
	合計		8	10	7	1	1	19	

SA5005

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
ツキガイ科	クチベニツキガイ	Ⅰ-2-c	1					1	
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	1	4				4	
ジャコガイ科	ジャコガイ科不明					1	1	1	
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c	2			2		2	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	1	2	1			2	
マルスダレガイ科	ハマグリ科の一種	Ⅱ-2-c	1	1	1			2	
合計			3	9	1	1	1	12	

SA5006

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	1					1	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	1					1	
合計			1	1	0	0	0	2	

SD5001

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
フネガイ科	リュウキュウサルボオ	Ⅱ-2-c	1					1	

SD5002

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	32	31		1	32		
	ホフジシナミ	Ⅱ-1-c	2	1				2	
	スダレハマグリ	Ⅱ-2-c	2					2	
	ダチオキシジミ	Ⅲ-1-c	1					1	
二枚貝不明					1			1	
合計			34	35	0	1	1	38	

SD5004

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
ウミギク科	メンガイ科の一種					1		1	
ニュウコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅱ-1-c	1					1	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	13	8				11	
マルスダレガイ科	スダレハマグリ	Ⅱ-2-c	3	1				3	
合計			15	9	1	0	0	16	

SF5001

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ-1-a	2	1				2	
イサキガイ科	イサキガイ科不明					1	1	1	
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	2					2	
ザルガイ科	リュウキュウサルボオ	Ⅱ-2-c	1					1	
ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ-2-c	1					1	
ジャコガイ科	オオシラナミ(卵?)	Ⅰ-2-a	1	1				1	
ジャコガイ科	ジャコガイ科不明					1	1	1	
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c	1	1				1	
ニュウコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅱ-1-c	1	2		1	2	2	
イソシジミ科	マスオガイ	Ⅱ-1-c	1					1	
シジミ科	シテナシジミ	Ⅰ-1-a				1	1	1	
マルスダレガイ科	ダチメオガイ	Ⅱ-1-c						1	
	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	909	883	9	11	6	918	
	ホフジシナミ	Ⅱ-1-c	11	11				11	
	ユウカガハマグリ	Ⅱ-2-c	1	1				1	
	ヒメオドリ	Ⅱ-2-c	3	2				3	
	スダレハマグリ	Ⅱ-2-c	90	84	1	1	5	91	
イオウハマグリ	Ⅱ-1-c	4	4				4		
ハマグリ科の一種	Ⅱ-2-c	3	1				4		
マルスダレガイ科	ダチオキシジミ	Ⅲ-1-c	3	5	1	2	7		
マルスダレガイ科	マルスダレガイ科不明		2	1				2	
二枚貝不明						2	1	2	
合計			1034	998	13	14	16	1057	

※完形と破片の右同士・左同士を見て、多い方を個体数とした。(破片でのみ出土した貝種については、最小個体数「1」と数えた)

SK5001

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c				1		1	

SK5002

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c	1					1	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c				1	1	1	
合計			0	1	0	1	1	2	

SK5004

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
ウミギク科	メンガイ科の一種					1		1	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	5	5	1	1	6	6	
マルスダレガイ科	ホフジシナミ	Ⅱ-1-c	1					1	
マルスダレガイ科	ハマグリ科の一種	Ⅱ-2-c	1	1				1	
合計			3	7	1	1	0	9	

SL5001

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
イガイ科	リュウキュウセバシガイ	Ⅰ-1-a	1					1	
ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ-1-a	1					1	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	1	2				2	
マルスダレガイ科	スダレハマグリ	Ⅱ-2-c	1					1	
二枚貝不明								1	
合計			3	3	0	0	1	6	

SM5001

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c				1		1	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	1					1	
マルスダレガイ科	ハマグリ科の一種	Ⅱ-2-c				1		1	
合計			1	0	1	1	0	3	

SM5002

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
ツキガイ科	ヒメツキガイ	Ⅰ-2-c	1					1	
キタザル科	キタザル科不明					2	1	1	
ジャコガイ科	ヒレシヤコ	Ⅰ-2-c				1	4	1	
チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c	1	2		2	4	1	
ワジノハナガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅰ-1-c	1					1	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	13	13	4	3	17	17	
マルスダレガイ科	イオウハマグリ	Ⅱ-1-c	1					1	
マルスダレガイ科	ハマグリ科の一種	Ⅱ-2-c	1	1		1	2	2	
二枚貝不明								2	
合計			16	21	5	6	9	33	

SP5001

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
二枚貝不明								1	

SP5032

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c				1	2	2	
マルスダレガイ科	ハマグリ科の一種	Ⅱ-2-c				1	1	1	
合計			0	0	1	2	1	3	

SP5040

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	1	1				1	

SP5041

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	1	1				1	

SP5062

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	2	1				1	

SP5065

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	2	1				3	

SP5074

科名	貝種名	生息地	完形			破片			個対数
			L	R	L R	L	R	L R	
二枚貝不明								2	



## 第5章 総括

### 概要

今回の発掘調査では、中城御殿跡、植園跡、両遺跡の間に遺跡を確認した。近世期中城御殿の遺構を中心として、グスク時代の遺構や近・現代の遺構が残存する複合遺跡ということが判明した。

確認した主な遺構は、中城御殿北側石牆(SA3001、SA5004)、中城御殿東側石牆(SA5003)、中城御殿屋敷内石積(SA4001、SA5005)、廃棄土坑(SM群)、遺跡及び付随する排水溝跡(SF5001、SD5001・SD5002)、植園跡に関連する廃棄土坑(SM5002)、中城御殿創建当初と考えられる石積(SA4002)、中城御殿創建以前の遺構(柱穴跡)である。

これらの遺構は、大量の造成土により削平、もしくは造成後に構築された状況が確認できた。

造成土は遺跡内もしくは周辺地からの持ち込みと考えられ、古い時代の遺物で占められる場合もあり、造成土単体では年代設定を行うには検討を要するものが多い。しかしながら、造成層の前後にある遺構内埋土からの出土遺物の状況を見ると、時期設定が可能な遺構がいくつか確認された。このような出土状況から、造成の順序や遺構の廃棄過程を想定することができた。

今回の発掘調査成果は過年度調査成果と同様、遺構の検出状況と造成土の堆積状況により判明した。

**時期決定基準となる遺構** 出土状況が良好な遺構があり、年代観を決定するための基準遺構とした。

**SM3001** III区で確認したSM3001は廃棄土坑と考えられ、中国産陶磁器、初期沖繩産無軸陶器、明朝系瓦が主に出土している。種類毎にみると中国産青花では、碗が明II-2類、II-3類、皿は明III類が出土している。これらの陶磁器の出土組成としては、15世紀後半～16世紀後半の様相を示す(瀬戸2010)。沖繩産の無軸陶器では、初期沖繩産無軸陶器とされる一群が確認されている。これらは、17世紀前半～中葉の年代観を示す(新垣2013)。明朝系瓦では、軒丸瓦で灰色のI-I-A、褐色のI-I-BとIII-I、軒平瓦では灰色のI-I-Aタイプが確認された。これらは、灰色瓦生産開始時期と想定される16世紀後半から灰色瓦と赤色瓦の交替期に当たる17世紀後半～18世紀前半に該当すると考えられる(沖繩県立埋蔵文化財センター2013 233頁～241頁)。明朝系瓦は、首里城跡内原北地区で第7期とされる出土瓦と同様のものが出土しており、第7期は17世紀前半頃に位置付けられている(沖繩県立埋蔵文化財センター2013)。これら3種の遺物組成をみると、陶磁器類では16世紀後半～17世紀中葉頃のものが出土し、

明朝系瓦は主に17世紀前半～18世紀前半までのものが出土している。SM3001の廃棄年代はこれらを考慮し、17世紀末頃と捉えた。

**SM3002** 中国産青磁V・VI類、中国産白磁E群、D'群が出土しており、15世紀後半～16世紀前半頃の様相を示している。中国産青花ではI群が出土しており、16世紀末～17世紀初頭のものが出土している。これらの資料に、SM3001と同様の初期沖繩産無軸陶器や明朝系瓦が出土している状況なので、廃棄年代はSM3001と同一時期として考えられる。

**SM3001・SA3002と造成土** 両遺構は、III4層とした造成土に遺構の一部が削平された後、覆われていた状況で検出した。そのため、III4層を造成した際に機能終了したことが考えられる。III4層はIII区の調査で確認された造成土で、IV区(III10a・III11b・III12・III12b)、V区(III29・III33・III34)の調査時にも、それぞれIII4層と同一層と考えられる層を確認した。これらの層は中城御殿の敷地範囲内に広がり、下層にあたる遺構を削平、もしくは覆うような形で堆積している。このことから、中城御殿敷地内で大規模に造成した際の造成土と考えられ、敷地内で平場形成を行っていたことが考えられる。

**I区(平成25・26年度調査)** III～V区で確認された上記造成土と同一層と考えられるのが、造成4とした層で、調査区全体に広がっていた造成土である。造成4の上面ではSJ3(18世紀後半)が確認されていることから、中城御殿の大規模造成は、17世紀末～18世紀後半までの間に行われたことが想定される。造成4に対応する層を今回の調査でも確認できたため、過年度調査で確認した遺構との相対関係が明らかになった(第4表・第5表)。**過年度調査成果との照合** 今回の発掘調査で、17世紀末頃に廃棄された遺構(SM3001・SA3002)と造成の痕跡を確認することが出来た。過年度の調査では年代観が把握できる遺構として、SK51(16世紀中葉～後半)、SJ3(18世紀後半)が確認されている。これらの遺構は、造成土と相関関係にあり、16世紀中葉から18世紀後半までの3時期の遺構及び造成土が確認されたことになる。

過年度の調査では、下記の時期区分を行ったが、この時期区分は、今回調査の成果を合わせても妥当性があると考えられる。

近世1(18世紀末～中城御殿移転まで)

近世2(18世紀代)

近世3(中城御殿創建～17世紀代)

グスク1・2(15～16世紀代)

今回の調査では主に近世2段階の時期を示す遺構及び造成土を確認した。以下、確認した遺構の各時期の様相を示す。

## グスク時代

**概要** グスク時代の遺構は主に柱穴跡や石積が確認された。遺構内埋土や包含層の出土遺物から、15～16世紀頃の遺構と考えられる(第208図)。

**柱穴跡** グスク時代と考えられる層を確認した部分は、下層確認地点など一部分に限られる状況だったため、明確な建物跡を確認することは出来なかった。柱穴跡が確認できた部分では、遺構密度が高い状況で分布しており、頻繁な建物建て替えが想定される。

**SA5006** V区で確認した南北軸に延びる石積遺構で、この石積を挟んで東側と西側で、当時の機能面に高低差があることが判明した。断片的に残存している遺構だったが、当時の土地利用を考える上で重要な遺構である。

**SF5001を挟んだ東側と西側** 18世紀代に築造されたSF5001は、築造段階でグスク時代の包含層を削平している状況が確認できた。18世紀代以前には、一連の空間だったものが、SF5001築造段階に分断され、土地の利用状況が変化しと考えられる。

**出土遺物** グスク期にあたる遺物は、IV層から中国産青磁等の陶磁器類が得られている。また、敷地内造成の際にこれらの層が掘り起こされ、造成土中に混入している状況も確認できた。近世期にあたる遺物と遺構内で共

伴している事例も多いことから、遺物そのものの使用期間は長期間にわたることが考えられる。

自然遺物も確認され、魚類ではハタ科やフエキダイ科が得られている。哺乳類では、ウシ/ウマ、イノシシ/ブタ類の家畜関連資料が見られ、食用等に用いられたことが考えられる。貝類では、IV層からアラスジケマンが多く見られた。

**小結** 今回の調査では、グスク時代に関する遺構について確認した部分が限られている。これらの遺構は、近世期の遺構の下層に存在し、現地保存できた遺構の下部にあたる部分が多かったためと考えられる。確認した部分での遺構密度の高さを考えれば、未確認部分にもグスク時代の遺構や包含層が広く残存しているものと考えられる。

I区の調査とあわせると、16世紀段階では当該地が生活域として利用されていたことが判明している。また、出土遺物が多く得られた廃棄土坑(SK51)があり、中国産青磁や青花等の陶磁器類に加え、県内で出土事例の少ないガラス製品が出土している。これらの廃棄物には、首里城の各地区で出土する陶磁器と類似する種類や組成のものが出土している。そのため、廃棄土坑から出土した遺物は、王府関連施設からの廃棄物の可能性があり、隣接していたとされる大美御殿からの廃棄物と想定される。もう一つの可能性として、遺構内出土遺物の様相が、



第208図 グスク時代の遺構

首里城各地区の出土状況と類似していることから、中城御殿の前身となる屋敷が当該地にあり、そこからの廃棄物だった可能性もある。『李朝実録』世祖8(1462)年の記事によると、「王子は国王と同処せず、別に他所に在り。」(池谷ほか 2005)とあることから、15世紀中頃にはすでに王子が生活する屋敷が別の場所にあったことが伺える。これらについては、直接的な遺構等を確認することができなかったため今後の課題である。

## 近世

**概要** 近世の遺構及び造成土は調査区全体で最も多く確認された。これらの遺構は、中城御殿跡、植園跡、両遺跡の間にある道跡の遺構である。ここでは、過年度の調査成果(Ⅰ区)も合わせて報告する。

**中城御殿跡** 今回の発掘調査では、北側石牆(SA3001・SA5004)と石牆内に設置された門跡、東側石牆(SA5003)、屋敷内の石積(SA2・SA4001・SA5005)、廃棄土坑群(SM3001～SM3009)などが確認された。

中城御殿の敷地内造成を目的とした造成層(Ⅲ区:Ⅲ4層、Ⅳ区:Ⅲ10a・Ⅲ11b・Ⅲ12b・Ⅲ12、Ⅴ区:Ⅲ29・Ⅲ33・Ⅲ34)も確認している。この造成層はⅠ区の造成4に相当する。造成時期は、Ⅲ区で確認したSM3001の年代観から、17世紀末以降と考えられる。この造成層を境にして下層の遺構を近世前期、上層の遺構を近世後期と捉えた。下層遺構は16世紀～17世紀末頃、上層遺構は17世紀末～18世紀前半頃のものと考えられる。Ⅰ区の成果と合わせると、下層の遺構は「近世3」、上層の遺構は「近世1・近世2」に相当する。これらの遺構を第209図、第210図で示す。

### 近世前期の遺構

**SA4002** SA4001築造するため中城御殿内を大規模造成した際に、上部が削平され埋められた石積遺構である。この石積はⅠ区で確認されたSA3の延長部分にあたる。前述したように17世紀末～18世紀後半までに行われた造成により埋められているため、少なくとも18世紀より古い遺構であることから、中城御殿が創建された当初期の遺構である可能性が高い。石積構築にあたり、岩盤整形を行っていることも判明した。この遺構は、当時の石積構築方法を示すとともに、中城御殿が改築された痕跡を示している。

**廃棄土坑(SM群)** Ⅲ区で確認された廃棄土坑(SM3001～SM3003)は、中城御殿内の廃棄物がまとめられた場所と考えられる。特にこの3基の遺構は隣接した遺構だったが、遺構内埋土の堆積状況と、出土遺物に差がある状況だった。SM3001は、炭や廃棄物が多く、何度が掻き出した痕跡もあったことから、有機質のものや生活雑器などが廃棄され、遺構内が充填される

と、掻き出されて繰り返し利用されたものと考えられる。SM3002は埋土が水平堆積しており、使用終了後に短期間で埋められた状況だったため、機能時には遺構内があった状態だったことが考えられる。機能時の状況と床面に敷石等がない状況から、生活用水等を排水するための遺構だと考えられる。SM3003は、SM3001やSM3002に比べ小規模の廃棄土坑だった。遺構内からは、貝や動物骨などの自然遺物が多く見られた。これらの状況から食料残滓等を廃棄する土坑であった可能性が高い。

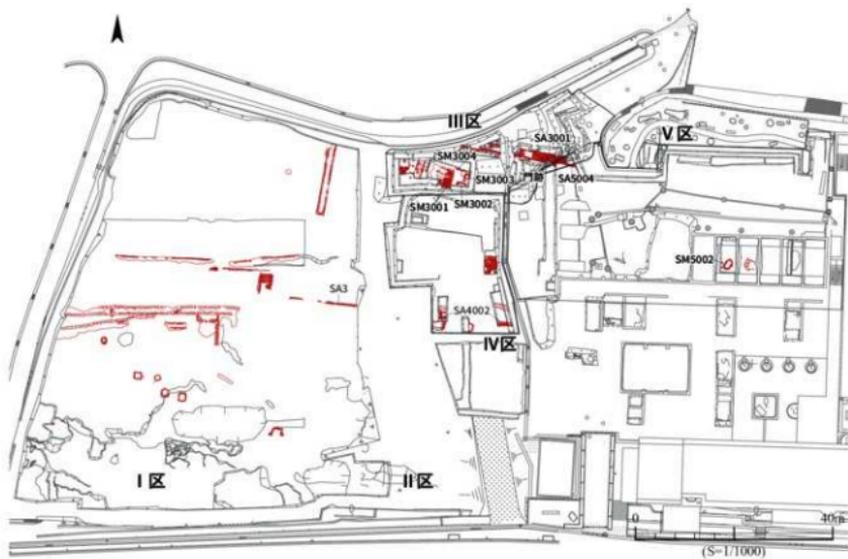
以上のように、SM3001～SM3003は、それぞれで機能が異なることが想定でき、廃棄物の種類によって使い分け、分別を行っていた可能性が高い。SM3004もSM3001～SM3003と同時期に利用された遺構だと考えられるが、現地保存可能な遺構だったので、掘削等は行わなかった。

SM3007～SM3009は、SM3001～SM3003が設置されていた造成土より、新しい造成土に設置されているため時期差がある。後世の削平を大きく受けているものや、出土遺物が少ない状況だが、利用方法としてはSM3001等と同様に廃棄土坑だと考えられる。

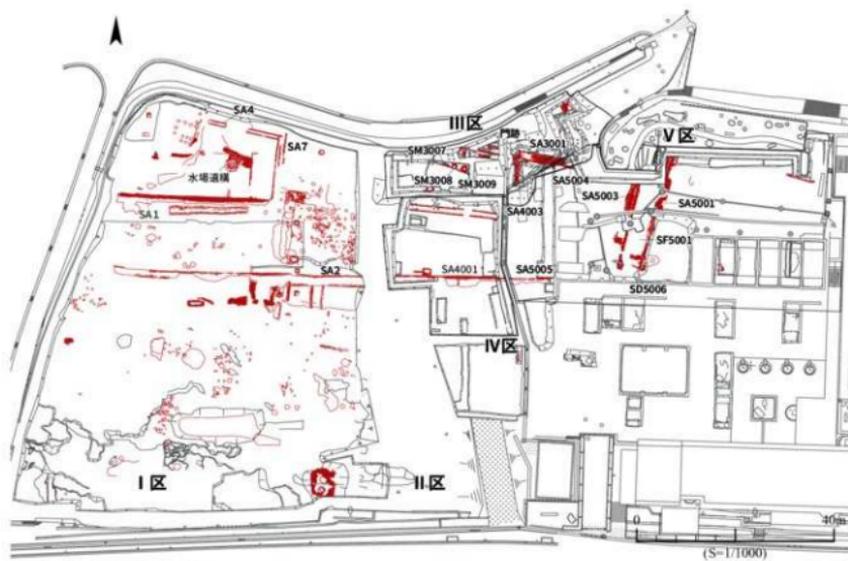
これらの廃棄土坑群が確認された部分は、中城御殿の北側部分にあたる。中城御殿の改築により、一旦廃棄土坑(SM3001～SM3004)は埋められたが、同じ場所に再び廃棄土坑(SM3007～SM3009)が設置され利用されていることから、改築前後で同じ土地利用のされ方されている。生活に伴う廃棄物等が集約されることから、北側部分は中城御殿内における裏の空間にあたる部分だったということが考えられる。

**中城御殿の北側石牆(SA3001・SA5004)** 石積内で段差がある部分があり、当初石積と増築石積の2時期で構築されていた。構築にあたり、増築石積部分の機能面は、Ⅲ27・Ⅲ31層と判断できた。この層はⅢ29層より上層にあたることから、敷地内造成にあわせて石積増築が行われたことが考えられる。

SA3001は、近世前期から後期にかけて機能していた石積と考えられ、門にあたる部分も確認された。門の部分は小礫で埋められている状況だった。また南東端の最下部にはシャコガイ(1枚)が伏せられた状態で配置されていた。この門は、SA3001の石積増築時に下部が埋められた可能性が高い。門跡部分の上部は沖繩戦の爆弾により破壊され、残存していない状況だったため、石積増築後の状況について把握することは困難だが、近世後期の段階にも継続して門として利用されていた可能性が高い。門としての機能が継続し、人の往来が行われるため、埋めた部分にシャコガイを配置したことが考えられる。シャコガイは二枚(1個体)セットとしてムヌキムン(魔除けの意)とされている(上江洲 1973)。今回の状



第209図 近世前期の遺構



第210図 近世後期の遺構

況をみると、二枚(1個体)でなくても魔除け等の意味をもたせていたことが考えられる。この門跡部分は現地保存の対象となったので、シャコガイ部分も含め掘削を行わなかった。今後掘削する際には、門を埋める小礫からの遺物出土状況を観察し、埋められた年代を把握するとともに、配置されたシャコガイの内側に何らかの埋納物がいないか確認する必要がある。

爆弾の被害を免れた部分の石積が一定の高さで残存していたことから、敷地造成によって地中にあった部分は、爆弾の被害を受けず残存していたことが想定される。このような状況から中城御殿北側石積は、中城御殿が移転した後も、敷地内の石積として機能が継続し、沖繩戦時に露出していたものが被害を受けたと考えられる。石積を破壊した爆弾の種類を特定することは困難だが、I区部分から多くの不発弾が発見されており、不発弾には米国製75mm榴弾砲、米国製5インチ砲弾、米国製250kg爆弾等があった。陸上戦闘による榴弾、海上からの艦砲射撃、戦間機からの空爆のいずれかにより破壊されたことが考えられる。

これまでの調査で、中城御殿内で石積遺構が確認されているが、石積に暗渠が併設されているものは、この北側石積のみである。確認できた部分でも3か所(SD3003・SD3004・SD3005)あることから、屋敷内部から外部へ雨水等を排水する役割もっていたことが考えられる。**中城御殿の東側石積(SA5003)** 遺跡の東側部分で確認した石積で、北側部分では2m以上の高さがあり、南側に行くにつれ石積の高さが低くなっている。この石積の高さに合わせるようにして、根石付近には当時の機能面と考えられるコーラルが敷かれた面が確認できた。

この石積の東側には、SF5001とした遺跡が隣接しており、排水溝も設置されていた。

南側部分では、遺跡に伴う造成土層の上部に石積やコーラルが敷かれた面が確認できたことから、道を築造後、同時期頃に構築されたと考えられる。

**中城御殿内の石積(SA4001・SA5005)** 石積遺構は、それぞれⅢ1b層、Ⅲ12層、Ⅲ29層に根石が設置されている状況から、敷地内造成後に構築された石積ということが考えられる。

SA4001・SA5005は、I区で確認したSA2の延長部分にあたり、中城御殿敷地内で東西軸に延びる石積である。

石積面石部分には、琉球石灰岩とサンゴ石灰岩の2種類の石材が用いられている。2種類の石材を用いて石積を構築する事例はあまり見られないため、今後事例調査が必要である。2種類の石材を用いた理由については、色調や材質の差による意匠表現、または材料調達時の石材供給によって2種類の石材を用いたことが考えられる。

石積背面に大規模な造成(Ⅲ10層等)が行われていることから、この石積を土留擁壁とし、その背面に平場を形成することを目的とした遺構であると考えられる。

設置された根石の標高は、西から東に行くにつれ高くなっていく状況があった。これは斜面地形に沿って根石を設置していったことによるものと考えられる。東側端部分は校舎基礎により残存していない状況だったが、西から東に向けて地形に合わせて石積を設置し、石積上端を揃える構築方法だったことが考えられる。

この石積を境にして南北で高低差のある屋敷配置だったことが造成土の状況から判明した。南側については、I区調査時にも覆乱が多く詳細が不明な状況だった。北側はSA4001の根石を一段覆う高さで堆積していた層(Ⅱ7層)があり、この層の上面が当時の機能面だった可能性があり、屋敷全体が平坦な屋敷構造ではなく段差をもつ屋敷配置だったことが判明した。

第211図は、中城御殿の北側部分の調査で判明した遺構面の標高を示した図である。屋敷跡を示す遺構等は確認出来なかったが、基礎構造としての造成土や構築面は現地に残存しているため、残存部の標高をもとに示している。当時の地表面は示した標高よりわずかに高いことが考えられる。平場形成の造成土をもとに検討しているが、将来この部分を調査することがあれば、現地保存した範囲内に屋敷関連の遺構がないか注意しながら実施する必要がある。

第212図は標高をもとに屋敷内の段差構造を示した模式図である。SA4001の南北で段差構造があるだけでなく、北側部分にもいくつか段差があり、それぞれ平場が確認できる。I区部分の水場遺構部分は標高が最も低く、この部分に降りるためのスロープ状に傾斜した石積遺構(SA4・SA7)が確認されていることから、屋敷内に高低差があり、スロープ等を利用して敷地内を移動していたことを示している。

**首里古地図に描かれる中城御殿内の石積** 18世紀代に描かれたとされる「首里古地図」には、屋敷内で東西に延びる石積が描かれている。I区調査時に、SA1がこの石積にあたる可能性があるとしたが、石積が途中で途切れ、判断が困難なことから今後の検討課題としていた。

今回の調査成果を合わせると、SA1より南側にある石積(SA2・SA4001・SA5005)が中城御殿全体の東西軸に広がっていることが判明した。中城御殿の敷地内を大規模に造成した後に築造された石積で、構築年代は17世紀末以降と考えられる。この石積を境にして南北に高低差が存在し、加えて北側にはより細かい段差構造があったことが判明した。

以上のことから、「首里古地図」に描かれる東西の石



第 211 図 近世後期の遺構面標高



第 212 図 近世後期の屋敷内段差構造

積は、当初想定していた石積(SA1)よりも南側にあったと捉えることができる。

**首里古地図と調査成果** 中城御殿の北側と東側の石牆、道跡を確認したことにより、中城御殿の敷地範囲が明確になるとともに、「首里古地図」と現地を確認した遺構について検討することが可能になった。

発掘調査では、建物跡を示す直接的な遺構を確認することが出来なかった。これは、建物構造として柱穴等の地面を掘り込む柱構造ではなく、礎石建ての建物だったことに由来し、これら地表面に露出している部分は、後世に撤去されたことが考えられる。建物跡を確認することは出来なかったが、建物建築時の基礎構造を示す造成土や造成土の土留めや段差構造をつくる石積遺構を確認することが出来た。

**南北の高低差** 「首里古地図」に描かれる東西の石積を境にして屋敷内では高低差があり、南側部分が高い部分にあたり、主要建物を配置するための造成工事が行われていたことが考えられる。

**北側の屋敷配置** 北側部分は、南側より低い位置にあり、細かい段差構造を有している。「首里古地図」に描かれる4棟の建物をみると、最も東側の建物は東西方向を軸にしている。これはSA4003の東西軸と関連しており、隣にある南北軸の建物は、I区のSA7の南北軸と関連している可能性が高い。残りの西側にある2棟の東西軸に伴う石積は、SA1の軸と関連している可能性がある。

**北側石牆(SA3001)** 増築の痕跡があり、当初築造時は、地盤整形を行ったのちに根石が設置され構築されていた。17世紀末以降の敷地内造成に伴い積み増しが行われたSA3001の南側の中城御殿にあたる部分には、石敷遺構(SS5010)が伴う。

**北側の門** SA3001内の門跡は、「首里古地図」の北側石牆に描かれる門の部分にあたる。この門跡は、17世紀末ごろに一部が埋められるが、門としての機能は継続していた可能性が高い。

**東側石牆(SA5003)** 道跡(SF5001)と隣接し、中城御殿と道の境界線となっている。北側は石積の高さが高く、南側にいくにつれ地形に沿って低くなる状況が確認できた。道跡の造成土の上部に位置しており、道跡の造成後に設置されている。この石積自体に増築の痕跡は確認出来なかった。道跡の造成に伴い、既存の石積を撤去して新たに設置した可能性もあるが、下層部分は今回の調査では現地保存の対象だったため、確認していない。

**道跡(SF5001)** 道の歩道面は石灰岩を細かく砕いたものが充填されており、石畳ではなかった。両脇には排水溝を設け、一部には歩道内部に暗渠(SD5006)があった可能性もある。

南側から北側へ向けて緩やかに傾斜しており、傾斜が急ではないことから、歩道面を石畳にしなかったと考えられる。これは沖縄県歴史の道調査の結果とも一致している(當真1985)。

現地を確認した遺構と「首里古地図」を照らし合わせた際に、絵図という2次元的情報に、屋敷内の高低差や段差構造などの3次元的情報を加えることにより、中城御殿内の様相を詳細に把握することができた。屋敷内の縮尺や石積のわずかな向きといった差はあるものの、調査で得られた考古学的情報からみても、「首里古地図」に描かれる情報の精度が高いことが改めて伺える。

**植園跡** 植園跡は、蝟蝟や漆器の原料となる漆を採取する場所とされ、19世紀には醸造所を設置したとされる(球陽1617号 球陽研究会編1974)。

当該部分は後世の擾乱が多く、遺構や包含層はほとんど残存していない状況だった。旧校舎の地中梁の間にわずかに遺構や包含層が残存している部分があり、そこから石組土坑(SM5002)を検出した。この遺構からは多量の貝殻片が見られた。これらの破片はヤコウガイ殻破片を含む貝片で、首里城跡銭蔵東地区や東村跡と同様、螺鈿関連の遺物が混入している可能性があったため、詳細な分析を行った(第4章第3節第2項参照)。その結果、螺鈿に用いるための貝殻加工の痕跡に加え、それ以外の製品を製作するための加工痕跡も見られたことから、螺鈿や貝製品製作に関連するものが廃棄された土坑ということが判明した。

類似遺跡として、本遺跡周辺の御園工所跡がある。発掘調査によって貝簀に使用されたヤコウガイや金工関係の遺物が確認され、貝製品や金属製品などを加工する総合製作所だったとされている(那覇市教育委員会1991)。植園跡においても、貝製品を製作するような工施設が設置されていたと考えられる。

今回の調査より、植園跡で行われていた作業について確認することができたのは、重要な調査成果といえる。

## 近代

近代の遺構として、戦前の首里高校に関連する遺構が確認された。SA3006、SD3001、SD4001、SX4001、SX5005、SX5006があたる。排水溝や、校舎の痕跡がみられている。SX5005は、排水溝もしくは道跡と考えられるが、近世のSF5001と軸が同じで一部掘削を行い利用している部分もあった。

**出土遺物** 首里高校に関連すると思われるガラス製品や校章のあるボタン等が出土している。I区の調査で出土したインク瓶なども出土しており、学校内で利用されていたことが伺える。

## 遺構の現地保存

**経緯** 首里高校の校舎改築は遺構保存が可能な部分があり、校舎改築に関連する工事の際に、県教育庁文化財課及び埋蔵文化財センターの立会調査や遺構保護に関する調整等を関係機関と実施してきた。詳細は第1章第4節及び第5節で述べたとおりである。

**関係機関との情報共有** 改築工事の際、地中の遺構等に影響が発生する可能性がある場合、立会調査を実施した。この立会調査を行うにあたり、県教育庁文化財課と埋蔵文化財センターは、改築工事定例会(毎週開催)に出席し、工事の進捗や遺構に影響が発生する工事箇所の計画等を工事関係者と情報共有することができた。今後も関係機関と調整を行い、このような形で工事と埋蔵文化財についてお互いに情報共有を行うことで、埋蔵文化財の保護につながるのと同時に、工事計画への影響も少なくなる事が考えられる。

**立会調査** 立会調査は既設電柱の撤去や新設、基礎梁の撤去、根切工事、汚水桝新設等、多くの工事に伴い実施した。

**遺構保護** 遺構保護の材料には、工事掘削の際に確認しやすいことに加え、地中で十分に充填できることから保護砂を用いて実施した。現地保存可能な遺構上部には保護砂が覆われている状態になっている。

**SF5001** 新校舎の基礎梁等の部分について記録保存調査を実施した。その結果、道の構築状況や遺構の前後関係について把握することができた。一部の遺構は現地保存が可能な部分があり、基礎梁の形状変更等の対応を行っていただき、現地保存に向けた対応ができた。

**SA5002** 基礎梁がかかる部分があったため、石積を断り割り、内部構造を確認した。また、校舎基礎に近い部分で現地保存する部分は、防湿シートで覆いながら遺構保護を行った。防湿シートは、他部分でも使用している。

## 総括

今回の発掘調査で、中城御殿の屋敷構造について把握することができた。屋敷内には元々の地形に由来した段差構造があり、屋敷内を平坦にするまで造成していないことが判明した。また、「首里古地図」に描かれている石積や屋敷の向きは、これらの段差構造による建物配置を表現していることが考えられる。

中城御殿は明治8(1875)年の移転に際して、久米村の地理師を中国福州まで派遣して風水を学ばせた後、移転場所を選定したとされている(球陽2206号 球陽研究会編1974)。移転の背景には、風水をもとにした場所選定があったとされるが、段差構造をもつ敷地範囲とい

う立地条件もあり、御殿内部での移動や土地の利便性の面も考慮して、移転したことも考えられる。移転後の中城御殿に関連する遺構や遺構面の標高は97m～98mの間で確認されており、北西部にある庭園や上之御殿以外の部分は平屋構造の屋敷だったことが判明している(沖縄県立埋蔵文化財センター2010a、2011、2012b、2018)。敷地内の構造が段差構造から平屋構造に変わっていることが伺える。

中城御殿の敷地内で東西に伸びる石積SA2、SA4001、SA5005は、17世紀末以降に築造されており、「首里古地図」に描かれる屋敷内部の石積にあたる可能性が高い。

植園跡では、螺鈿や貝製品加工のための工房施設等に伴う廃棄土坑を確認することが出来た。

道跡は地表面に露出していないことから、いままでも確認されていなかったが、今回の発掘調査により道の場所が判明し、歩道面の状況等も確認することができた。この道跡を造る際の基礎工事についても把握することができた。これらの設置工事は17世紀末以降に行われたと考えられ、道の造成や中城御殿内で大きく敷地造成が行われ、当該地周辺を含めて広く造成したことが考えられる。

このような調査成果から、中城御殿の変遷過程のみならず、首里地域の形成過程についても検討することができると重要な成果が確認できた。これらに関連する遺構の一部は、新校舎の地中に現地保存することが出来た。今後、中城御殿の取り扱いが決定した際には、重要な遺構として保護すると同時に、掘削を行っていない部分の確認調査等を実施していくこととした。

第 137 表 Ⅲ区出土遺物点数表 a

遺物	出土遺物										(獣骨)・<魚骨>・貝類遺体		
SA3001	中青磁	1	中白磁	4	中青花	18	中色磁	2	中三彩	-	中陶磁	9	(イノシシ/ブタ、種不明) <フエフキダイ科、種不明> ギンタカハマ、サラサバシライ、ヤコウガイ、チョウセンサザエ、オハダゴライ、 アンボンクロサメ、イモガイ科不明、ヒレシヤコ
	タイ陶	-	他陶磁	-	本磁	6	本陶	8	近陶磁	56	沖施	204	
	初沖無	3	沖無	90	陶土	39	土器	4	円盤	4	金属製品	5	
	骨・貝類	1	ガラス	42	石製品	4	瓦	7	青銅	4	その他	11	
SA3002	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色磁	-	中三彩	-	中陶磁	-	
	タイ陶	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	1	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	1	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	1	その他	-	
SA3003	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色磁	-	中三彩	-	中陶磁	-	
	タイ陶	-	他陶磁	1	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	1	
SA3005	中青磁	1	中白磁	-	中青花	2	中色磁	-	中三彩	-	中陶磁	-	チョウセンサザエ、タワノミコニモリ、マガキガイ、イトマキボラ、ウラクツキガイ、 アラスジケマン、イネウハマツライ、ハマグリ的一種
	タイ陶	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	2	沖無	-	陶土	1	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	1	ガラス	-	石製品	-	瓦	15	青銅	-	その他	5	
SA3006	中青磁	1	中白磁	1	中青花	4	中色磁	-	中三彩	-	中陶磁	1	(ニワトリ、ウシ/ウマ、種不明) <ハタ科、フエフキダイ科> チョウセンサザエの遺、マガキガイ、エガイ、ウラクツキガイ、シャコガイ科不明、 アラスジケマン
	タイ陶	-	他陶磁	-	本磁	1	本陶	4	近陶磁	-	沖施	10	
	初沖無	-	沖無	8	陶土	3	土器	1	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	4	青銅	-	その他	6	
SA3007	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色磁	1	中三彩	-	中陶磁	-	アラスジケマン
	タイ陶	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	2	青銅	-	その他	1	
SA3008	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色磁	-	中三彩	-	中陶磁	-	(種不明) チョウセンサザエの遺、マガキガイ、ウラクツキガイ、アラスジケマン
	タイ陶	-	他陶磁	1	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	1	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	4	青銅	-	その他	-	
SA3009	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色磁	-	中三彩	-	中陶磁	-	
	タイ陶	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	1	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	2	青銅	-	その他	-	
SD3001	中青磁	2	中白磁	-	中青花	2	中色磁	-	中三彩	-	中陶磁	-	(種不明) ヤコウガイ
	タイ陶	-	他陶磁	1	本磁	4	本陶	1	近陶磁	9	沖施	5	
	初沖無	1	沖無	3	陶土	2	土器	1	円盤	-	金属製品	2	
	骨・貝類	-	ガラス	4	石製品	-	瓦	1	青銅	1	その他	2	
SD3003	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色磁	-	中三彩	-	中陶磁	-	
	タイ陶	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	1	青銅	-	その他	-	

※凡例—中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付 中白磁：中国産白磁 中青花：中国産青花 中色磁：中国産色磁 中三彩：中国産三彩・中国産三彩 中陶磁：中国産陶磁陶器  
タイ陶：タイ産陶磁陶器 他陶磁：中国産陶磁陶器・中国産青磁陶器・中国産天目・中国産陶磁染付・中国産陶磁陶器・中国産陶磁器・ベトナム産白磁・ベトナム産青花・  
タイ産色磁 本磁：本土産磁器 本土産青磁 本土産染付 本土産色磁 本陶：本土産陶器 磁押焼 磁面焼 近陶磁：近代陶磁 沖施：沖施産陶磁陶器  
初沖無：初期沖無産陶磁陶器 沖無：初期産陶磁陶器 陶土：陶瓦土器 土器：タイ産土器土器・瓦質土器・土器・変成不明土器 円盤：円盤産製品 金属製品：鉄製品・  
金属製品 骨・貝類：骨製品・貝製品 ガラス：ガラス製品 石製品：各種石製品 瓦：高麗瓦、明瓦系(瓦・平・近代大和タイプ)・大和瓦 青銅：青銅製品(銭貨含む)  
その他：埋輪・石村・磨石・石輪・磨石・鉄環・玉・ボタン・プラスチック製品・硝子・マンガン・瑪瓦・瑪瓦・乾電池・炭 (獣骨)・<魚骨>・貝類については出土層を記載。

第138表 川区出土遺物点数表 b

遺構	出土遺物										(贗貨)・<偽貨>・貝類遺体		
SK3001	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中廻轉	-	(ウマ、イノシシ/ブタ、イノシシ/ブタ?、ウシ、種不明) カンギク、マガキガイ、アラスジケマン
	タイ瓶	1	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖焼	-	
	初沖焼	-	沖焼	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	4	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	3	青銅	-	その他	-	
SK3002	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中廻轉	-	(イノシシ/ブタ) チョウセンサザエ、ウラネツギガイ
	タイ瓶	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖焼	-	
	初沖焼	-	沖焼	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	9	青銅	-	その他	-	
SM3001	中青磁	5	中白磁	1	中青花	10	中色絵	-	中三彩	-	中廻轉	5	(ニワトリ、ネズミ、ウマ、ウシ/ウマ、イノシシ/ブタ、イノシシ/ブタ?、ヤギ、種不明) <フエフキダイ料、種不明> ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、マガキガイ、タカラガイ科不明、 イソハマグリ、アラスジケマン、ウエカイハマグリ
	タイ瓶	2	他陶磁	1	本磁	-	本陶	2	近陶磁	-	沖焼	-	
	初沖焼	11	沖焼	3	陶土	-	土器	4	円盤	-	金属製品	2	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	304	青銅	-	その他	11	
SK3002	中青磁	4	中白磁	3	中青花	6	中色絵	-	中三彩	-	中廻轉	1	(ニワトリ、イノシシ/ブタ、ウシ、種不明) <種不明> ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、巻貝不明、シレンシジミ、 アラスジケマン、二枚貝不明
	タイ瓶	1	他陶磁	-	本磁	-	本陶	1	近陶磁	-	沖焼	-	
	初沖焼	2	沖焼	1	陶土	1	土器	1	円盤	-	金属製品	1	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	17	青銅	-	その他	9	
SM3003	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中廻轉	1	(ニワトリ、トリ、ウシ/ウマ、イノシシ/ブタ、イノシシ/ブタ?、種不明) <フエフキダイ料、種不明> ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、カンギク、リュウキュウザル、 アラスジケマン、ネソズジイナニ、ハマグリの一部、タケオキシジミ
	タイ瓶	1	他陶磁	-	本磁	-	本陶	2	近陶磁	-	沖焼	-	
	初沖焼	-	沖焼	1	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	1	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	1	瓦	9	青銅	-	その他	2	
SM3004	中青磁	3	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中廻轉	-	(イノシシ/ブタ?) サラサバテイラ、チョウセンサザエ、カワラガイ
	タイ瓶	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖焼	-	
	初沖焼	-	沖焼	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SM3005	中青磁	2	中白磁	-	中青花	10	中色絵	-	中三彩	-	中廻轉	1	(イノシシ/ブタ?) サラサバテイラ、チョウセンサザエ、カワラガイ
	タイ瓶	-	他陶磁	1	本磁	-	本陶	3	近陶磁	4	沖焼	56	
	初沖焼	-	沖焼	14	陶土	37	土器	4	円盤	3	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	1	石製品	-	瓦	197	青銅	1	その他	5	
SM3006	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中廻轉	-	(イヌ?、イノシシ/ブタ) <タイ料、種不明>
	タイ瓶	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖焼	-	
	初沖焼	-	沖焼	-	陶土	-	土器	1	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SM3007	中青磁	3	中白磁	2	中青花	3	中色絵	-	中三彩	-	中廻轉	-	(イノシシ/ブタ) <フエフキダイ料> アラスジケマン、ネソズジイナニ
	タイ瓶	1	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖焼	-	
	初沖焼	1	沖焼	-	陶土	-	土器	2	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	13	青銅	-	その他	-	
SM3008	中青磁	2	中白磁	1	中青花	3	中色絵	-	中三彩	-	中廻轉	1	(ネコ?、イノシシ/ブタ、種不明) <種不明> ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギクの蓋、アマオブネ、 タモガイ、ウラネツギガイ、シヤコガイ科不明、イソハマグリ、アラスジケマン、 ハマグリの一部、二枚貝不明
	タイ瓶	-	他陶磁	-	本磁	1	本陶	-	近陶磁	-	沖焼	2	
	初沖焼	1	沖焼	-	陶土	-	土器	2	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	57	青銅	-	その他	1	

※凡例 中青磁：中国産青磁、中国産青磁染付 中白磁：中国産白磁 中青花：中国産青花 中色絵：中国産色絵 中三彩：中国産三彩 中国産三彩 中廻轉：中国産廻轉陶器  
タイ瓶：タイ産廻轉陶器 他陶磁：中国産他陶磁、中国産磁器類、中国産天目、中国産磁器類、中国産陶磁器、ベトナム産白磁、ベトナム産青花、  
タイ産鉄胎 本磁：本土産磁器、本土産青磁、本土産染付、本土産色絵 本陶：本土産陶器、錢磨地、磁器地 近陶磁：近代磁器、近代陶器 沖焼：沖焼産他陶磁器  
初沖焼、初沖焼産他陶磁器 沖焼：沖焼産他陶磁器 陶土：陶器土器 土器：土器 土器  
金属製品：武器類、貨幣類、貝類、骨製品、ガラス製品、石製品、各種石製品 瓦：高麗瓦、明洞瓦(丸・平・近代大相ノイフ)、大和瓦、青銅：青銅製品(銅貨含む)  
その他：土器・石材・滑石類・燧石・鉄器・玉・ボタン・プラスチック製品・硝子・マンガン・瑪瓦・瑪・煉瓦・乾電池・炭 (贗貨)・<偽貨>・貝類については上欄を参照

第 139 表 川区出土遺物点数表 c

遺構	出土遺物										(獣骨)・<魚骨>・貝類遺体	
SM3009	中青磁 3	中白磁 1	中青花 7	中色絵	-	中三彩	-	中陶磁	-			
	タイ瓶	-	他陶磁 1	本磁	1	本陶	-	近陶磁	-	沖焼 1	(イノシシ/ブタ)	
	初沖無	1	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	イセガイ科不明、アラスジケマン、ハマグリ科の一種、ダテオキシジミ
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦 8	青銅	-	その他	1	
SF3001	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中陶磁	-
	タイ瓶	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖焼	-
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	1
SF3002	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中陶磁	-
	タイ瓶	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖焼	-
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	1
SF3009	中青磁	-	中白磁	-	中青花 2	中色絵	-	中三彩	-	中陶磁	1	
	タイ瓶	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁 3	沖焼	2	
	初沖無	-	沖無 3	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦 12	青銅	-	その他	2	
SF3010	中青磁 2	中白磁	中青花	中色絵	-	中三彩	-	中陶磁	-			
	タイ瓶	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖焼	-
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	1
SF3011	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中陶磁	-
	タイ瓶	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖焼	-
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	1
SF3012	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中陶磁	-
	タイ瓶	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖焼	-
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅 1	その他	-	
SF3018	中青磁 1	中白磁	中青花	中色絵	-	中三彩	-	中陶磁	-			
	タイ瓶	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖焼	-
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦 18	青銅	-	その他	4	
SF3023	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中陶磁	-
	タイ瓶	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖焼	-
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦 1	青銅	-	その他	-	
SF3024	中青磁	-	中白磁	-	中青花 1	中色絵	-	中三彩	-	中陶磁	1	
	タイ瓶	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖焼	2
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦 1	青銅	-	その他	2	

※凡例一中青磁：中国産青磁、中国産青磁染付 中白磁：中国産白磁 中青花：中国産青花 中色絵：中国産色絵 中三彩：中国産三彩、中国産黄三彩 中陶磁：中国産陶磁器  
 タイ瓶：タイ産陶磁器 他陶磁：中国産陶磁器、中国産磁器、中国産天目、中国産陶磁器、中国産陶磁器、中国産陶磁器、ベトナム産白磁、ベトナム産青花、  
 タイ産鉄胎 本磁：本土産磁器、本土産青磁、本土産染付、本土産色絵 本陶：本土産陶器、鏡面焼、備前焼 近陶磁：近代磁器、近代陶器 沖焼：沖焼産陶磁器  
 初沖無、初沖無産無釉陶器 沖無：沖焼産無釉陶器 陶土：陶瓦 土器：タイ産土器、土器、瓦瓦 土器、土器、産地不明土器 円盤：円盤状製品、金属製品、漆製品、  
 金属製品、骨・貝類：骨製品、貝製品、ガラス：ガラス製品、石製品：各種石製品 瓦：瓦製品、明瓦瓦(瓦・平、近代大形瓦イブ)、大和瓦、青銅：青銅製品(鏡裏含む)  
 その他：用土・石材・滑石・磨玉・鉄器・玉・ボタン・プラスチック製品・銅子・マンガシ、瑪瓦・埴瓦・埴瓦・乾電池・炭(獣骨)・<魚骨>・貝類については上層を掲載。







第 143 表 IV区出土遺物点数表 b

遺構	出土遺物										(獣骨)・<骨片>・貝類遺体		
SM4003	中青磁	6	中白磁	-	中青花	1	中色磁	-	中三彩	-	中陶磁	5	(ウシ) <種不明> ヤコウガイの蓋、ハマグリ、オオシラナミ(シラナミ)、アラシジケマン、 ホソシジナミ、ハマグリ的一种
	タイ磁	1	他陶磁	-	本磁	-	本陶	1	近陶磁	-	沖隆	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	1	その他	3	
SF4002	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色磁	-	中三彩	-	中陶磁	-	アラシジケマン
	タイ磁	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖隆	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SF4003	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色磁	-	中三彩	-	中陶磁	1	
	タイ磁	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖隆	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SF4005	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色磁	-	中三彩	-	中陶磁	-	
	タイ磁	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖隆	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	1	その他	-	
SF4007	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色磁	-	中三彩	-	中陶磁	-	ウラキツキガイ、アラシジケマン、ハマグリ的一种
	タイ磁	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖隆	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SF4008	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色磁	-	中三彩	-	中陶磁	-	(イノシシ/ブタ)
	タイ磁	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖隆	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SR4001	中青磁	9	中白磁	-	中青花	3	中色磁	-	中三彩	1	中陶磁	5	(イノシシ/ブタ、種不明) <アジ科、種不明> ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンザエスの瓶、カンギク、 イワ(ウミニナ)カニモリ、マギキガイ、コオニコブシ、ウラキツキガイ、 オオシラナミ(シラナミ)、アラシジケマン、ホソシジナミ
	タイ磁	1	他陶磁	1	本磁	-	本陶	1	近陶磁	-	沖隆	1	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	3	円盤	-	金属製品	1	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	23	青銅	-	その他	-	
SR4005	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色磁	-	中三彩	-	中陶磁	1	(種不明) <ベタ科(シロクラベタ)、種不明> アラシジケマン
	タイ磁	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖隆	-	
	初沖無	1	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	
SS4001	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色磁	1	中三彩	-	中陶磁	-	(種不明)
	タイ磁	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖隆	2	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	1	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	1	青銅	-	その他	-	

※凡例—中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付 中白磁：中国産白磁 中青花：中国産青花 中色磁：中国産中色磁 中三彩：中国産中三彩 中陶磁：中国産陶磁  
タイ磁：タイ産陶磁 他陶磁：中国産磁器・中国産磁器・中国産磁器・中国産磁器・中国産磁器・中国産磁器・中国産磁器・中国産磁器・中国産磁器・中国産磁器  
初沖無：初期沖隆産無釉磁器 沖無：沖隆産無釉磁器 陶土：陶器土器 土器：土器 土器  
円盤：円盤状製品 金属製品：鉄製品・金属製品 骨・貝類：骨製品・貝製品 ガラス：ガラス製品 石製品：各種石製品 瓦：瓦製品・明瓦石(瓦・甲、近代大形タイプ)  
青銅：青銅製品(鉄含む) その他：瑠璃・石・燧石・鉄滓・玉・ボタン・プラスチック製品・埴瓦・埴瓦・埴瓦・埴瓦 (獣骨)・<骨片>・貝類については出土層を掲載

第 144 表 IV区出土遺物点数表 c

遺構		出土遺物							(附片)・<魚骨>・貝類遺体			
SX4001	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中彫輪	-
	タイ期	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖隆	1
	初沖隆	-	沖隆	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-
	骨・貝類	-	ガラス	4	石製品	-	瓦	3	青銅	-	その他	-
SX4007	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中彫輪	-
	タイ期	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖隆	1
	初沖隆	-	沖隆	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-
SX4010	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中彫輪	1
	タイ期	-	他陶磁	-	本磁	1	本陶	-	近陶磁	-	沖隆	-
	初沖隆	-	沖隆	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	2	青銅	-	その他	-
SX4016	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中彫輪	-
	タイ期	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖隆	-
	初沖隆	-	沖隆	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-
I 層	中青磁	110	中白磁	46	中青花	191	中色絵	7	中三彩	3	中彫輪	153
	タイ期	36	他陶磁	8	本磁	24	本陶	36	近陶磁	158	沖隆	477
	初沖隆	55	沖隆	257	陶土	117	土器	22	円盤	17	金属製品	13
	骨・貝類	1	ガラス	65	石製品	13	瓦	407	青銅	20	その他	41
II 層	中青磁	22	中白磁	12	中青花	85	中色絵	3	中三彩	1	中彫輪	23
	タイ期	2	他陶磁	3	本磁	11	本陶	15	近陶磁	36	沖隆	319
	初沖隆	16	沖隆	133	陶土	78	土器	9	円盤	15	金属製品	9
	骨・貝類	-	ガラス	23	石製品	1	瓦	121	青銅	5	その他	29
III 層	中青磁	17	中白磁	8	中青花	78	中色絵	3	中三彩	1	中彫輪	18
	タイ期	1	他陶磁	3	本磁	9	本陶	12	近陶磁	34	沖隆	288
	初沖隆	12	沖隆	98	陶土	72	土器	8	円盤	15	金属製品	9
	骨・貝類	-	ガラス	23	石製品	1	瓦	95	青銅	5	その他	21

※凡例一中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付 中白磁：中国産白磁 中青花：中国産青花 中色絵：中国産色絵 中三彩：中国産三彩 中彫輪：中国産彫輪陶器  
タイ期：タイ産彫輪陶器 他陶磁：中国産磁器・中国産磁器・中国産磁器・中国産磁器・中国産磁器・中国産磁器・中国産磁器・中国産磁器・中国産磁器  
初沖隆：初期沖隆産無釉陶器 沖隆：沖隆産無釉陶器 陶土：陶質土器 土器：土器 瓦：瓦 円盤：円盤 金属製品：金属製品 鉄製品：鉄製品 骨・貝類：骨製品、貝製品 ガラス：ガラス製品 石製品：各種石製品 瓦：瓦 磁器：磁器(丸・平・近代大形イブ) 青銅：青銅製品(銭貨含む) その他：増巻・石・燧石・鉄片・玉・ボタン・プラスチック製品・増瓦・増瓦・増瓦・増瓦(附片)・<魚骨>・貝類については土器と併記

第 145 表 IV区出土遺物点数表 d

遺構	出土遺物										(備考)・<魚骨>・貝類遺体		
III層	中青磁	198	中白磁	81	中青花	302	中色絵	10	中三彩	5	中期輪	165	(ニワトリ、トリ、イヌ、ネコ、ウマ、ウマ?、ウシ/ウマ、ブタ、ブタ?、イノシシ/ブタ、イノシシ/ブタ?、ヤギ、ヤギ?、ウシ、ウシ?、種不明)・<木製、ハタタキ、アゴダイ風、タイル、フエキダイ料、ベタ料、ブタ料、ニゴダイ料、種不明>
	タイ瓦	26	他陶磁	13	本磁	66	本陶	100	近陶磁	11	沖塗	261	ニキウズ、ムラサキウズ、ギンタカハ、サササハチイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサゼエ、チョウセンサゼエの蓋、カンギク、オニノツガイ、コガツノズエ、イワ(ウニ?)カニモリ、クワニカニモリ、オホログガイ、マガキガイ、カワナドリ、ハビビラダカラ、キイロダカラ、ハナマルユキ、オキニシ、ツノレシ、シラクモガイ、ココニコサシ、シマベッコウバ、ヒメイトマキボラ、ナンゴククロシナシ、タロフモトキ、マダライモ、サヤガタイモ、キヤクシヨリイモ、ヌヌカウイモ、イモダ(種不明)、エダ、シメツクリ、メダガイの一種、オホログガイ、ウラキキガイ、ヒメツキガイ、シロゾル、リュウキュウソム、カワラガイ、ヒメシヤコ、ヒレシヤコ、オオシラナミ(シラナミ)、シヤコガイ料不明、イソハマダリ、リュウキュウタミノコ、リュウキュウマヌオ、シラナシジミ、ヌメガイ、アラシジケマン、ホソシイナシ、ヌダレハマダリ、イオウハマダリ、ハマダリの一部、ダテオキシジミ、パイロウエ
	初沖無	160	沖無	154	陶土	79	土器	44	円盤	18	金属製品	15	
	骨・貝類	2	ガラス	-	石製品	4	瓦	1101	青銅	15	その他	83	
III 10層	中青磁	17	中白磁	8	中青花	17	中色絵	2	中三彩	1	中期輪	9	(ニワトリ、ウマ、ウシ/ウマ、イノシシ/ブタ、イノシシ/ブタ?、ウシ、種不明)・<ハタタキ、フエキダイ料、ブタ料、種不明>
	タイ瓦	-	他陶磁	1	本磁	2	本陶	3	近陶磁	-	沖塗	15	サササハチイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサゼエ、チョウセンサゼエの蓋、カンギク、コガツノズエ、イワ(ウニ?)カニモリ、クワニカニモリ、マガキガイ、ハナマルユキ、シマベッコウバ、サヤガタイモ、ウラキキガイ、イソハマダリ、アラシジケマン、イオウハマダリ、ハマダリの一部、ダテオキシジミ
	初沖無	14	沖無	6	陶土	1	土器	2	円盤	-	金属製品	3	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	117	青銅	3	その他	4	
III 11層	中青磁	7	中白磁	9	中青花	11	中色絵	1	中三彩	-	中期輪	4	(トリ、イノシシ/ブタ、イノシシ/ブタ?、種不明)・<フエキダイ料、種不明>
	タイ瓦	-	他陶磁	1	本磁	14	本陶	17	近陶磁	1	沖塗	-	サササハチイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサゼエ、チョウセンサゼエの蓋、キイロダカラ、ウラキキガイ、イソハマダリ、シラナシジミ、ヌメガイ、アラシジケマン、ハマダリの一部、ダテオキシジミ
	初沖無	13	沖無	1	陶土	1	土器	1	円盤	1	金属製品	1	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	1	瓦	235	青銅	-	その他	4	
III 11c層	中青磁	21	中白磁	12	中青花	42	中色絵	2	中三彩	1	中期輪	12	(ニワトリ、イヌ、ウマ、ウシ/ウマ、イノシシ/ブタ、イノシシ/ブタ?、ウシ、種不明)・<ハタタキ、タイル、フエキダイ料、種不明>
	タイ瓦	-	他陶磁	-	本磁	9	本陶	24	近陶磁	3	沖塗	2	サササハチイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサゼエ、チョウセンサゼエの蓋、オニノツガイ、イワ(ウニ?)カニモリ、ハナビラダカラ、ハナマルユキ、シラクモガイ、シマベッコウバ、ヒメイトマキボラ、ヤナギサボリイモ、ウラキキガイ、ヒメツキガイ、カワラガイ、ヒメシヤコ、ヒレシヤコ、オオシラナミ(シラナミ)、アラシジケマン、ホソシイナシ、ハマダリの一部、ダテオキシジミ
	初沖無	19	沖無	3	陶土	-	土器	6	円盤	3	金属製品	1	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	1	瓦	105	青銅	3	その他	7	
III 12b層	中青磁	2	中白磁	1	中青花	8	中色絵	1	中三彩	-	中期輪	6	
	タイ瓦	-	他陶磁	1	本磁	1	本陶	-	近陶磁	-	沖塗	8	(ニワトリ、ウシ/ウマ、イノシシ/ブタ、種不明)・<チョウセンサゼエ、マガキガイ>
	初沖無	9	沖無	4	陶土	4	土器	1	円盤	1	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	5	青銅	-	その他	3	
IV層	中青磁	3	中白磁	1	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中期輪	1	(イノシシ/ブタ)・ヤコウガイ、マガキガイ、ココニコサシ、ウラキツキガイ、アラシジケマン
	タイ瓦	-	他陶磁	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖塗	-	
	初沖無	-	沖無	-	陶土	-	土器	-	円盤	-	金属製品	-	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	1	
層不明	中青磁	9	中白磁	1	中青花	7	中色絵	1	中三彩	-	中期輪	3	
	タイ瓦	1	他陶磁	-	本磁	1	本陶	2	近陶磁	1	沖塗	17	(ウシ/ウマ、イノシシ/ブタ、ウシ、種不明)・<チョウセンサゼエの蓋、オニコサシ、ウラキツキガイ、アラシジケマン>
	初沖無	2	沖無	1	陶土	3	土器	1	円盤	-	金属製品	1	
	骨・貝類	-	ガラス	-	石製品	-	瓦	1	青銅	2	その他	2	

※凡例→中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付 中白磁：中国産白磁 中青花：中国産青花 中色絵：中国産色絵 中三彩：中国産中三彩 中期輪：中国産中期輪陶器  
 タイ瓦：タイ産焼陶器 他陶磁：中国産磁器・中国産磁器・中国産磁器・中国産磁器・ベトナム産青花・ベトナム産色絵・タイ産色絵・産地不明陶磁器 本磁：本土産磁器・本土産染付・本土産色絵 本陶：本土産陶器・産地不明 近陶磁：近代陶磁器 沖塗：沖塗産焼陶磁器  
 初沖無：初期不明陶磁器・沖無：沖無産焼陶磁器 陶土：陶器土器 土器：土器 土器  
 円盤：円盤状製品 金属製品：鉄製品・金属製品 骨・貝類：骨製品・貝製品 ガラス：ガラス製品 石製品：各種石製品 瓦：瓦製品・明瓦(瓦)・近代大瓦(タイル) 青銅：青銅製品(鉄貨含む) その他：珪瑁・石・檀香・鉄蹄・玉・ボタン・プラスチック製品・瑪瑙・瑪瑙・瑪瑙・瑪瑙・瑪瑙 (備考)・<魚骨>・貝類については出土層を掲載

第146表 V区出土遺物点数表 a

遺構		出土遺物										(獣骨)・<魚骨>・貝類遺体			
SA5001	中青磁	1	中白磁	-	中青花	9	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	-	タイ瓶	-	イノシシ(ブタ) スズレハマグリ
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	13	初沖無	-	
	沖無	6	陶土	3	土器	-	カムイ模	-	円盤	1	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	1	瓦	9	青銅	-	その他	1					
SA5002	中青磁	14	中白磁	3	中青花	8	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	28	タイ瓶	8	トトリ、ウシ/ウマ、イノシシ/ブタ、ウシ、種不明) ハタ科、アジ科、クロダマ属、フェウキダイト、ハラ科(シロクラハラ)、 ブダイ科、ニゾダイト科、種不明) ヤコウガイイ、ヤコウガイの遺、チョウセンサザエ、カンボク、 オホノツノガイイ、オハダロガイイ、マガキガイイ、コオニコブシ、 イトマキボラ、ヤナギシボリエイ、オキナウウスカワマイマイ、 リュウキュウサルボオ、ウラキツガイイ、カワラガイイ、シレナシジミ、 アラスジタマン、ホソシジナシ、ユウカダハマグリ、ハマダリ科一種
	他陶磁	2	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	1	沖施	20	初沖無	-	
	沖無	8	陶土	12	土器	19	カムイ模	-	円盤	3	金属製	2	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	2	青銅	-	その他	4					
SA5003	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	-	タイ瓶	-	ヤコウガイイ、オハダロガイイ、イトマキボラ。
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	1	沖施	1	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	3	青銅	1	その他	1					
SA5004	中青磁	1	中白磁	-	中青花	3	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	7	タイ瓶	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	3	沖施	6	初沖無	1	
	沖無	4	陶土	-	土器	1	カムイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SA5005	中青磁	5	中白磁	8	中青花	32	中色絵	1	中三彩	-	中規輪	13	タイ瓶	1	ニワトリ、イノシシ/ブタ、ウシ、種不明) ハタ科、フェウキダイト科、種不明) ヤコウガイイ、ヤコウガイの遺、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、 カンボク、センシユガイイ、マガキガイイ、イトマキボラ、イモガイ科不明、 タチベニツノガイイ、ウラキツガイイ、シロコガイ科不明、イソハマグリ、 アラスジタマン、ハマダリ科一種
	他陶磁	3	西洋陶	-	本磁	4	本陶	-	近陶磁	1	沖施	84	初沖無	15	
	沖無	45	陶土	27	土器	2	カムイ模	-	円盤	4	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	2	石製品	1	瓦	119	青銅	1	その他	5					
SA5006	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	-	タイ瓶	-	ニワトリ、イノシシ/ブタ、種不明) チョウセンサザエ、ウラキツガイイ、アラスジタマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SD5001	中青磁	-	中白磁	-	中青花	3	中色絵	-	中三彩	1	中規輪	-	タイ瓶	-	(ウシ、種不明) サラサバダイア、リュウキュウサルボオ
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	16	初沖無	-	
	沖無	3	陶土	4	土器	1	カムイ模	-	円盤	1	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	3	青銅	-	その他	-					
SD5002	中青磁	3	中白磁	1	中青花	4	中色絵	1	中三彩	-	中規輪	4	タイ瓶	-	イノシシ/ブタ、ウシ、種不明) フェウキダイト科、ハラ科) リュウキュウノアシ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、 チョウセンサザエの蓋、カンボク、マルマアオガキ、 アラスジタマン、ホソシジナシ、スズレハマグリ、 ダチオキシジミ、二枚貝不明
	他陶磁	1	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	8	初沖無	1	
	沖無	1	陶土	-	土器	1	カムイ模	-	円盤	1	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	1	石製品	-	瓦	10	青銅	1	その他	3					
SD5004	中青磁	5	中白磁	3	中青花	10	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	7	タイ瓶	-	イノシシ/ブタ、種不明) フェウキダイト科、ブダイ科、種不明) ヤコウガイイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、 オハダロガイイ、マガキガイイ、メンガイイ科一種、リュウキュウシラトリ、 アラスジタマン、スズレハマグリ
	他陶磁	2	西洋陶	-	本磁	2	本陶	1	近陶磁	1	沖施	67	初沖無	8	
	沖無	23	陶土	13	土器	1	カムイ模	-	円盤	1	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	9	青銅	1	その他	5					

◎凡例 中青磁：中国産青磁、中国産青磁染付 中白磁：中国産白磁 中青花：中国産青花 中色絵：中国産色絵 中三彩：中国産三彩、中国産青三彩 中規輪：中国産規輪陶器  
タイ瓶：タイ産規輪陶器 他陶磁：中国産磁器類、中国産磁器染付、中国産磁器類、中国産天目、中国産磁器類、中国産磁器類、中国産陶器、中国産加飾陶器  
タイ産磁器：産地不明陶器類 西洋陶：西洋陶磁器 本磁：本土産磁器、本土産染付、本土産色絵 本陶：本土産陶器、磁器類、備前焼 近陶磁：近代磁器、近代陶器  
沖無：沖積産地無陶器 初沖無：初期沖積産地無陶器 貝類：沖積産地無陶器類 陶土：陶質土器 土器：タイ産土器、瓦質土器、土器(産地不明)土器  
円盤：円盤状製品 金属製：鉄製品、金属製品 骨・貝製：骨製品、ガラス：ガラス製品 石製品：各種石製品 瓦：瓦類系、明粥系(丸・平・近代大和タイプ)  
青銅：青銅製品(鉄質含む) その他：漆類・漆道具、石材、木製品、磨管・磨片、写玉・玉・ボタン、プラスチック製品、土質・二次加工品、硝子・磚瓦・磚・煉瓦、  
近代タイル・軽石・炭 (獣骨)・<魚骨>・貝類については出土種を掲載。



第148表 V区出土遺物点数表 c

遺構	出土遺物										(獣骨)・<魚骨>・貝類遺体				
SM5002	中青磁	2	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	26	タイ瓶	13	ニワトリ、トリ、ウマ、ウマウ、イノシシ(ブタ、ウシ、種不明)・ ヘビ目、ダツ科、カマス科、ハタ科、アジ科、タチウオ科、タチオオ科ウ、 フエダイ科、クロダイ属、タイ科、フエフキダイ科、ハナ科(シロクラベラ)、 ブダイ科、ニギギダイ科、種不明) ササキバウイ、ヤコウガイ、ヤコウガイの遺、ショウセンサザメ、ホン ゾク、イワ(ウミニナ)カニモリ、オハダロガイ、マガキガイ、キイロダカラ、 ハナマルキ、タカラガイ科不明、シュリマイイ、ヒメツキガイ、キョ ザル科不明、ヒレシヤコ、シャコガイ科不明、イソハマグリ、リュウキュウ ナミノコ、アラスジケマン、イオウハマグリ、ハマグリの一属、二枚貝不明
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	1	土器	7	カムイ焼	-	円盤	1	金属製	5	骨・貝製	1	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	2	青銅	-	その他	3	-	-	-	-	
SP5001	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	-	タイ瓶	-	(イノシシ(ブタ) 二枚貝不明)
	他陶磁	1	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	3	初沖無	-	
	沖無	1	陶土	2	土器	1	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	-	-	-	-	
SP5004	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	-	タイ瓶	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	1	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	-	-	-	-	
SP5027	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	-	タイ瓶	-	ヤコウガイ
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	-	-	-	-	
SP5031	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	-	タイ瓶	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	4	初沖無	-	
	沖無	1	陶土	3	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	1	青銅	-	その他	-	-	-	-	-	
SP5032	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	8	タイ瓶	-	(ジュゴン?、種不明) メアジ科、種不明) ヤコウガイの遺、カンギク、イワ(ウミニナ)カニモリ、マガキガイ、 ハナヒラタカウ、アラスジケマン、ハマグリの一属
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	2	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	1	-	-	-	-	
SP5038	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	-	タイ瓶	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	-	-	-	-	
SP5039	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	1	タイ瓶	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	-	-	-	-	
SP5040	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	1	タイ瓶	-	ヤコウガイ、アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	-	-	-	-	

◎凡例 中青磁：中国産青磁、中国産青磁染付 中白磁：中国産白磁 中青花：中国産青花 中色絵：中国産色絵 中三彩：中国産三彩 中国産青三彩 中国産赤三彩 中規輪：中国産規輪陶器  
タイ瓶：タイ産規輪陶器 他陶磁：中国産磁器、中国産磁器染付、中国産磁器、中国産天目、中国産規輪磁器、中国産陶器、中国産無釉陶器、  
タイ産鉄絵、産地不明陶磁器 西洋陶：西洋陶器 本磁：本土産磁器、本土産染付、本土産色絵 本陶：本土産陶器、磁器、備前焼 近陶磁：近代陶磁  
沖施：海産産物陶磁器 初沖無：初期海産産物陶磁器 沖無：中期産物陶磁器 陶土：陶器用土 土器：タイ産平盤土器、瓦製土器、土器(産地不明)土器  
円盤：円盤状製品 金属製：鉄製品、金属製品 骨・貝製：骨製品、貝製品 ガラス：ガラス製品 石製品：各種石製品 瓦：瓦製品、明楽系(丸、平、近代大和タイプ)  
青銅：青銅製品(鉄質含む) その他：磁器、窯道具、石材、木製品、磨器、鉄片、写玉、玉・ボタン、プラスチック製品、土質、二次加工品、硝子、磚瓦・磚瓦、  
近代タイル・軽石・炭 (獣骨)・<魚骨>・貝類については出土種を掲載。

第 149 表 V 区出土遺物点数表 d

遺構	出土遺物										(獣骨)・<魚骨>・貝類遺体				
SF5011	中青磁	-	中白磁	1	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	-	タイ瓶	-	アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	1	近陶磁	-	沖施	3	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カミイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	8	青銅	-	その他	3					
SF5044	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	-	タイ瓶	-	(種不明) <種不明>
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カミイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SF5045	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	-	タイ瓶	-	(ニワトリ)
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カミイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SF5048	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	-	タイ瓶	-	タカラガイ科不明
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カミイ模	1	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SF5062	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	3	タイ瓶	-	(種不明) ヤコウガイ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、イワ(ウミニナ)カニモリ、 クラノミカニモリ、マダネガイ、ハナビラマカサ、ハママルスネ、 アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	1	カミイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	1	その他	6					
SF5065	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	1	タイ瓶	-	(ニワトリ、イノシシ(ブタ) イハタ科) ヤコウガイの蓋、カンギク、アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	1	カミイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	5	青銅	-	その他	-					
SF5073	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	1	タイ瓶	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カミイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SF5074	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	-	タイ瓶	-	二枚貝不明
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カミイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SF5079	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	-	タイ瓶	-	(ウマ、種不明) イワ(ウミニナ)カニモリ、アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カミイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					
SF5085	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	-	タイ瓶	-	アラスジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カミイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-					

※凡例—中青磁：中国産青磁、中国産青磁染付 中白磁：中国産白磁 中青花：中国産青花 中色絵：中国産色絵 中三彩：中国産三彩、中国産素三彩 中規輪：中国産規輪陶器  
 タイ瓶：タイ産規輪陶器 他陶磁：中国産磁器、中国産磁器染付、中国産磁器、中国産天目、中国産規輪磁器、中国産陶器、中国産無釉陶器、  
 タイ産磁器、産地不明陶磁器 西洋陶：西洋陶器 本磁：本土産磁器、本土産染付、本土産色絵 本陶：本土産陶器、徳焼、瀬戸焼、備前焼、近陶磁：近代磁器、近代陶器  
 沖施：冲縄産無釉陶器 初沖無：初期冲縄産無釉陶器 沖無：冲縄産無釉陶器 陶土：陶器土器 土器：タイ産土器、土器、産地不明土器  
 円盤：円盤状物品 金属製：鉄製品、金属製品 骨・貝製：骨製品、貝製品 ガラス：ガラス製品 石製品：各種石製品 瓦：高麗瓦、明瓦系(瓦、平、近代大蛇タイプ)  
 青銅：青銅製品(鉄質含む) その他：磁器、陶器、石材、木製品、漆器、象牙、玉・ボタン、プラスチック製品、土質、二次加工品、硝子、磚瓦、磚瓦、  
 近代タイル、軽石、炭 (獣骨)・<魚骨>・貝類については出土種を記載。

第150表 V区出土遺物点数表 e

遺種	出土遺物										(獣骨)・<魚骨>・貝類遺体				
SQ5005	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	1	タイ瓶	-	ヤコウガイ、スノメガイ
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	11	初沖無	-	
	沖無	5	陶土	3	土器	-	カムイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	2	青銅	-	その他	1	-	-	-	-	
SQ5006	中青磁	-	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	-	タイ瓶	-	ヤコウガイ、スノメガイ
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	1	
	沖無	3	陶土	-	土器	-	カムイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	5	青銅	-	その他	-	-	-	-	-	
SS5001	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	1	タイ瓶	1	ヤコウガイ、スノメガイ
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	1	その他	-	-	-	-	-	
SS5002	中青磁	5	中白磁	1	中青花	2	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	34	タイ瓶	6	ニワトリ、ウシ/ウマ、種不明) シジリ科、種不明) ムラサキウズ、オウサバチイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの遺、 チョウセンサザエ、マガキガイ、ハナヒラダカラ、オオシラナシ(シラナシ)、 シャコガイ科不明、シテナジシ、アラシジケマン、ハマグリ的一种、 二枚貝印象化石、二枚貝不明
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	1	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	2	陶土	-	土器	7	カムイ模	-	円盤	1	金属製	1	骨・貝製	1	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	2	青銅	-	その他	6	-	-	-	-	
SS5003	中青磁	-	中白磁	-	中青花	2	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	2	タイ瓶	-	チョウセンサザエ
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	8	初沖無	-	
	沖無	1	陶土	-	土器	1	カムイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	-	-	-	-	
SS5004	中青磁	1	中白磁	-	中青花	8	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	2	タイ瓶	-	イノシシ/ブタ) スハタ科、種不明) イハタ科、フエキガイ科) ウラキツギガイ、二枚貝印象化石
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	1	近陶磁	2	沖施	38	初沖無	1	
	沖無	12	陶土	11	土器	-	カムイ模	-	円盤	3	金属製	5	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	15	青銅	-	その他	9	-	-	-	-	
SS5005	中青磁	4	中白磁	2	中青花	4	中色絵	2	中三彩	-	中規輪	4	タイ瓶	2	イノシシ/ブタ、種不明) ヤコウガイの遺、オハグロガイ、シャコガイ科不明
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	1	本陶	-	近陶磁	2	沖施	50	初沖無	2	
	沖無	15	陶土	11	土器	1	カムイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	1	石製品	-	瓦	7	青銅	1	その他	3	-	-	-	-	
SS5007	中青磁	1	中白磁	2	中青花	5	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	1	タイ瓶	-	イノシシ/ブタ、ウシ、種不明) ニシキウズ、モンタカハマ、ヤコウガイ、シャコガイ科不明、イソハマグリ、 アラシジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	1	初沖無	6	
	沖無	-	陶土	1	土器	-	カムイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	187	青銅	-	その他	11	-	-	-	-	
SX5001	中青磁	1	中白磁	-	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	8	タイ瓶	1	イノシシ/ブタ、種不明) スハタ科、ウラギイ模、ペリ科、種不明) ヤコウガイの遺、オハグロガイの遺、カンキウ、マガキガイ、ハナヒラダカラ、 ハナマルスネ、ウラキツギガイ、シャコガイ科不明、アラシジケマン
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖施	-	初沖無	-	
	沖無	-	陶土	-	土器	-	カムイ模	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	6	-	-	-	-	
SX5002	中青磁	2	中白磁	-	中青花	6	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	5	タイ瓶	1	イノシシ/ブタ) チョウセンサザエ、オハグロガイ、ニッコウガイ科不明
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	1	本陶	-	近陶磁	3	沖施	43	初沖無	-	
	沖無	9	陶土	19	土器	1	カムイ模	-	円盤	2	金属製	1	骨・貝製	-	
	ガラス	1	石製品	-	瓦	6	青銅	2	その他	3	-	-	-	-	

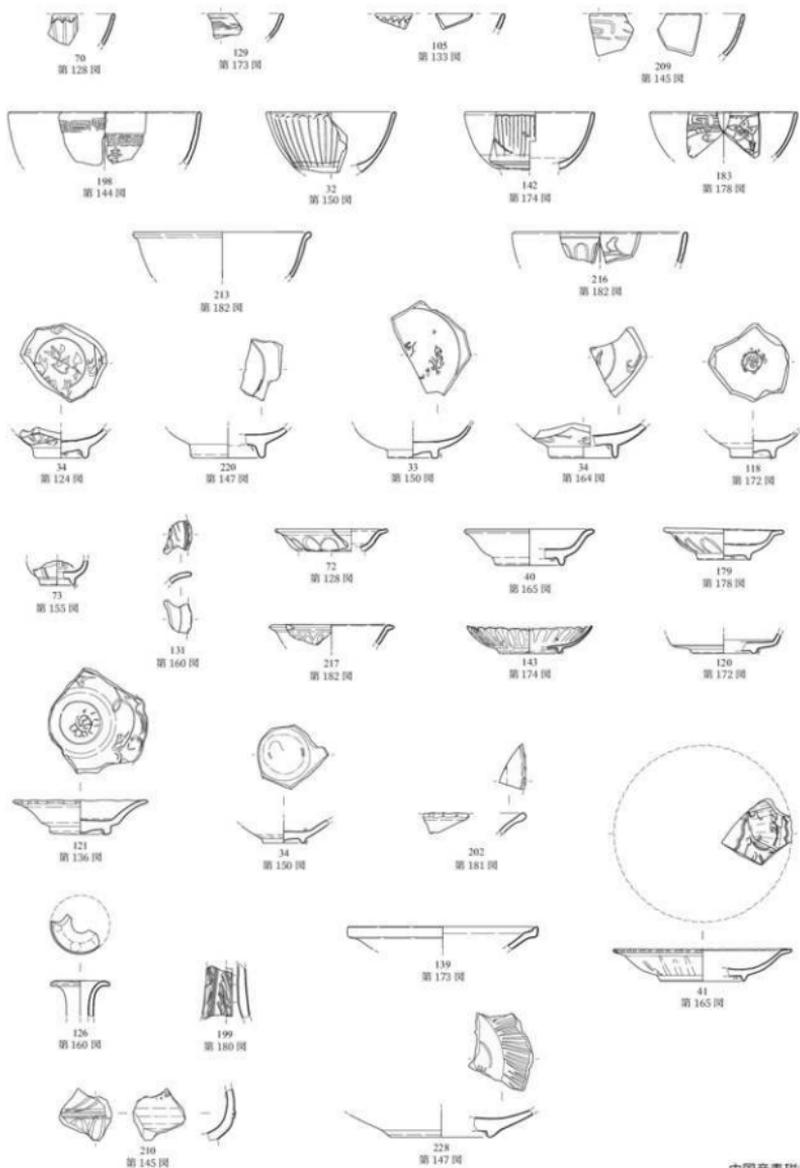
◎凡例 中青磁：中国産青磁、中国産青磁染付 中白磁：中国産白磁 中青花：中国産青花 中色絵：中国産色絵 中三彩：中国産三彩、中国産素三彩 中規輪：中国産規輪陶器  
タイ瓶：タイ産規輪陶器 他陶磁：中国産磁器、中国産磁器染付、中国産磁器、中国産天目、中国産磁器、中国産磁器組器、中国産磁器、中国産無釉陶器、  
タイ産磁器、産地不明陶器 西洋陶：西洋陶器 本磁：本土産磁器、本土産染付、本土産色絵 本陶：本土産陶器、焼酎焼、備前焼 近陶磁：近代磁器、近代陶器  
沖無：沖無産無釉磁器 初沖無：初期沖無産無釉磁器 沖無：沖無産無釉陶器 陶土：陶器土部 土器：土器 土器：土器 産地不明土器  
円盤：円盤状製品 金属製：鉄製品、金属製品 骨・貝製：骨製品、貝製品 ガラス：ガラス製品 石製品：各種石製品 瓦：瓦葺系、明礬系(丸・平・近代大和タイプ)  
青銅：青銅製品(鉄質含む) その他：硝瑠璃・漆器、石材、木製品、骨製、鉄洋、写玉・玉・ボタン、プラスチック製品、土質、二次加工品、硝子・唐瓦・磚瓦・磚瓦、  
近代タイル・軽石・炭 (獣骨)・<魚骨>・貝類については出土種を記載。

第 151 表 V 区出土遺物点数表 f

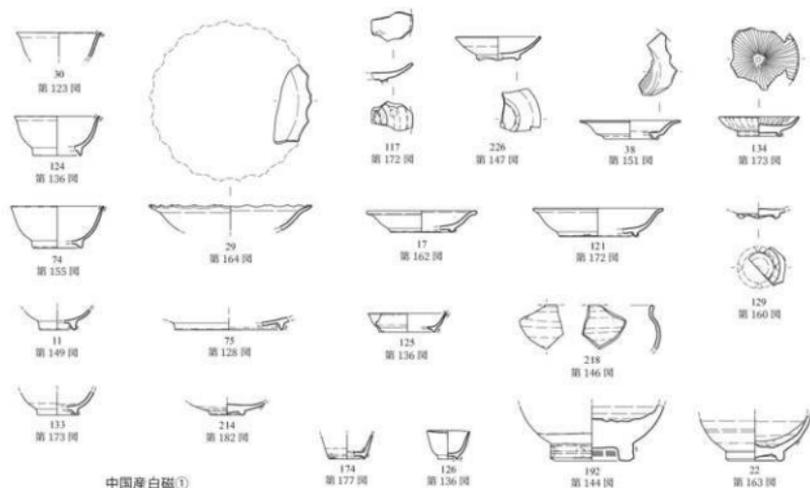
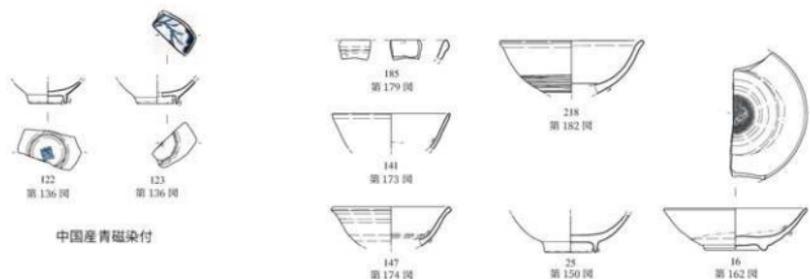
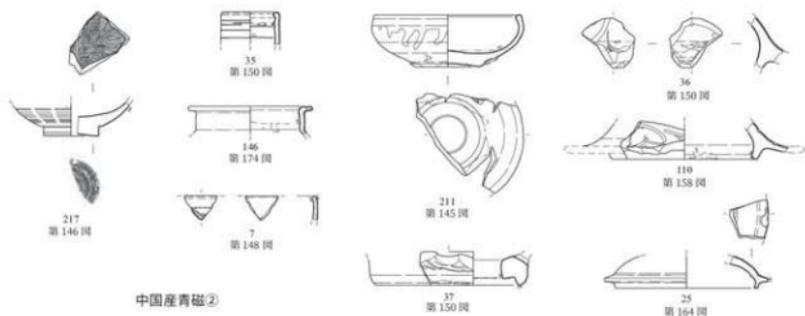
遺構		出土遺物										〈数値〉・〈魚骨〉・貝類遺体			
SX5003	中青磁	-	中白磁	-	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	2	タイ期	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	1	沖焼	2	初沖無	-	
	沖焼	2	陶土	-	土器	-	カミイ焼	-	円盤	-	金属製	-	骨・貝製	-	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	-	青銅	-	その他	-	/				
SX5004	中青磁	21	中白磁	4	中青花	-	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	2	タイ期	1	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖焼	1	初沖無	-	ウマ、イノシシ/ブタ、ウシ、種不明)
	沖焼	-	陶土	-	土器	1	カミイ焼	-	円盤	1	金属製	-	骨・貝製	-	ウマ、イノシシ/ブタ、ウシ、種不明) ウラネキギイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、オニコブシ、 コガシゼキ、サカガタイモ、カキの一種、カワラガイ、シレナジシ、 アラスジケマン、ホソスジイナニ、二枚貝不明
	ガラス	-	石製品	-	瓦	1	青銅	-	その他	3	/				
SX5005	中青磁	15	中白磁	4	中青花	22	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	16	タイ期	3	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	2	近陶磁	4	沖焼	67	初沖無	5	イノシシ/ブタ、種不明) ウラネキギイ(ヨコシマクロガイ)、種不明)
	沖焼	22	陶土	22	土器	3	カミイ焼	-	円盤	2	金属製	1	骨・貝製	-	ウラネキギイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、オニコブシ、 ウラネキギイ、イソハマグリ、アラスジケマン、ホソスジイナニ、 ハマグリ的一种、ダネオキシジミ
	ガラス	1	石製品	-	瓦	16	青銅	-	その他	9	/				
SX5007	中青磁	-	中白磁	1	中青花	1	中色絵	-	中三彩	-	中規輪	1	タイ期	-	
	他陶磁	-	西洋陶	-	本磁	-	本陶	-	近陶磁	-	沖焼	4	初沖無	-	
	沖焼	1	陶土	1	土器	-	カミイ焼	-	円盤	-	金属製	2	骨・貝製	1	
	ガラス	-	石製品	-	瓦	1	青銅	-	その他	1	/				
I 層	中青磁	347	中白磁	164	中青花	525	中色絵	23	中三彩	7	中規輪	465	タイ期	103	(ニワトリ、ニワトリ?、トリ、イヌ、ネコ、ウマ、ウマ?、ウシ/ウマ、 ウシ/ウマ?、イノシシ/ブタ、イノシシ/ブタ?、ヤギ、ヤギ?、ウシ、ウシ? 種不明)
	他陶磁	18	西洋陶	1	本磁	25	本陶	64	近陶磁	259	沖焼	1526	初沖無	224	キヌメ類、ダツ料、ハタ料、アジ料、タイ料、フエフキダイ料、ペラ料、 ブダイ料、種不明、軟甲類(カニ)
	沖焼	623	陶土	422	土器	45	カミイ焼	1	円盤	80	金属製	28	骨・貝製	2	オオベッコウガサ、ニシキウス、ギンタカハマ、サササハナイイ、ヤコウ ガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カシ ダク、アマオボネ、ニシキアオボネ、オニノノボイ、イワ(ウミユナ) カニモリ、タワノミカニモリ、ナガタケノコカニモリ、ゴマノヒナ、フ ト ヘナタリ、オハダロガイ、マダラガイ、クモガイ、ホシダカウ、コモンダ カウ、ハナヒツダカウ、ハナマルユキ、オホカウイ科不明、リスガイ、オ キキシ、アカイダシイシ、ツルイシ、シラケガイイ、オニコブシ、イ ト マキボラ、ナンヨウクロミナシ、マダライモ、ユキダシモ、ヤキイモ、ヤ ナキシロイモ、アジロイモ、イモガイ科不明、キタケノコガイ、オキナ クマヤカニシ、魚貝不明、カサガイ、ハニガイ、ハイガイ、イダヤガイ、 メンガイの一種、カキの一種、ウラネキギイ、シロネ、リュウキュウ ザル、ヒレシヤコ、オオシラネシ(シラネ)、イソハマグリ、マヌカガイ、 シレナジシ、ヌメガイ、アラスジケマン、イソノカミ、スダレハマ グリ、ハマグリ的一种、ダネオキシジミ、二枚貝印酸化石、二枚貝不明
	ガラス	40	石製品	7	瓦	721	青銅	24	その他	145	/				
II 層	中青磁	49	中白磁	53	中青花	169	中色絵	8	中三彩	1	中規輪	83	タイ期	11	(ニワトリ、ニワトリ?、トリ、ネコ、ネコ?、ウシ/ウマ、 イノシシ/ブタ、ヤギ、ウシ、種不明)
	他陶磁	4	西洋陶	-	本磁	4	本陶	16	近陶磁	33	沖焼	444	初沖無	47	キヌメ類、ダツ料、ハタ料、ハタ料?、アジ料、フエダ料、クロダシ製、 タイ料、フエフキダイ料、ペラ料、ブダイ料、アヒコ料、 モンガラカワハナギ、種不明)
	沖焼	146	陶土	213	土器	16	カミイ焼	-	円盤	21	金属製	9	骨・貝製	-	ギンタカハマ、サササハナイイ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、 チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カシダク、カシダクの蓋、 イワ(ウミユナ)カニモリ、タワノミカニモリ、リュウキュウウミユナ、カ ワ ヅイ、オハダロガイ、マダラガイ、ハナマルユキ、オホカウイ科不明、 シラケモガイ、コオニコブシ、シマベッコウバ、マダライモ、オキナ クマヤカニシ、シラネイモイ、ハナシラケイモイ、魚貝不明、エダ? ウラネキギイ、カワラガイ、ヒレシヤコ、イソハマグリ、リュウキュウ ウマオ、シレナジシ、アラスジケマン、ホソスジイナニ、ユウカダハマ グリ、ヒメアサリ、スダレハマグリ、ハマグリ的一种、ダネオキシジミ、 二枚貝不明、ハイブリ
	ガラス	10	石製品	5	瓦	241	青銅	9	その他	50	/				

※凡例：中青磁：中国産青磁・中国産青磁染付 中白磁：中国産白磁 中青花：中国産青花 中色絵：中国産色絵 中三彩：中国産三彩・中国産三彩 中規輪：中国産規輪陶器  
タイ期：タイ産規輪陶器 他陶磁：中国産磁器・中国産磁器染付・中国産磁器・中国産天目・中国産磁器・中国産磁器・中国産陶器・中国産陶器・中国産陶器  
タイ産磁器・産地不明陶器 西洋陶：西洋陶器 本磁：本土産磁器・本土産染付・本土産色絵 本陶：本土産陶器・産地不明磁器 近陶磁：近代磁器・近代陶器  
沖焼：中国産産地不明 初沖無：初期沖焼産地不明 沖焼：中国産産地不明 陶土：陶器土 土器：中国産産地不明 瓦：瓦 青銅：青銅製品 金属製：金属製品 骨・貝製：骨製品 ガラス：ガラス製品 石製品：石製品 各種製品：瓦・高麗紙・明頭石(瓦・平・近代大粒タイフ)  
青銅：青銅製品(銭貨含む) その他：印璽・瓦葺き・石材・木製品・磨盤・鉄片・瓦玉・玉・ボタン・プラスチック製品・土管・二次加工品・樹子・燻土・燻瓦・燻瓦  
近代タイル・軽石・炭 (数値)・〈魚骨〉・貝類については上欄を参照。

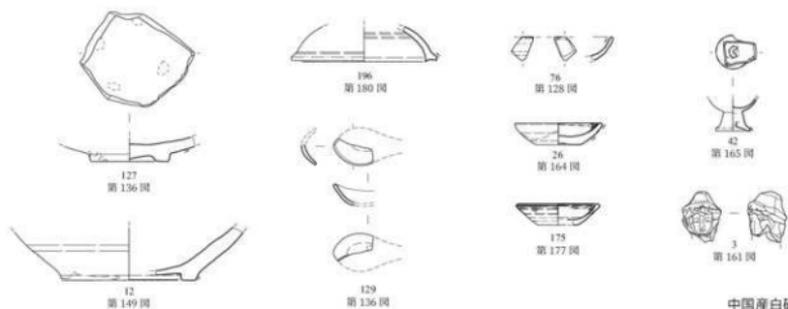




第 213 图 出土遺物一覽 1



第214図 出土遺物一覽2



第 215 图 出土遺物一覽 3



中国産青花②

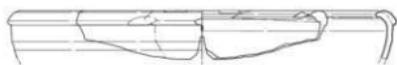
第216図 出土遺物一覽4



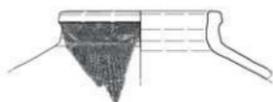
第 217 图 出土遺物一覽 5



第218図 出土遺物一覧6



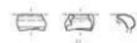
138  
第 173 図



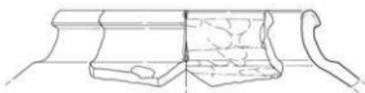
57  
第 166 図



45  
第 124 図



11  
28  
第 164 図



159  
第 139 図



89  
第 156 図



28  
第 150 図



44  
第 124 図



95  
第 156 図



13  
第 162 図



60  
第 166 図



138  
第 137 図

中国産裨袖陶器



55  
第 166 図



31  
第 150 図



23  
第 163 図



19  
第 162 図

タイ産鉄絵



56  
第 166 図



130  
第 160 図

ベトナム産青花



123  
第 172 図

タイ産裨袖陶器



58  
第 166 図



59  
第 166 図

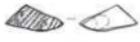


206  
第 181 図



62  
第 166 図

西洋陶器



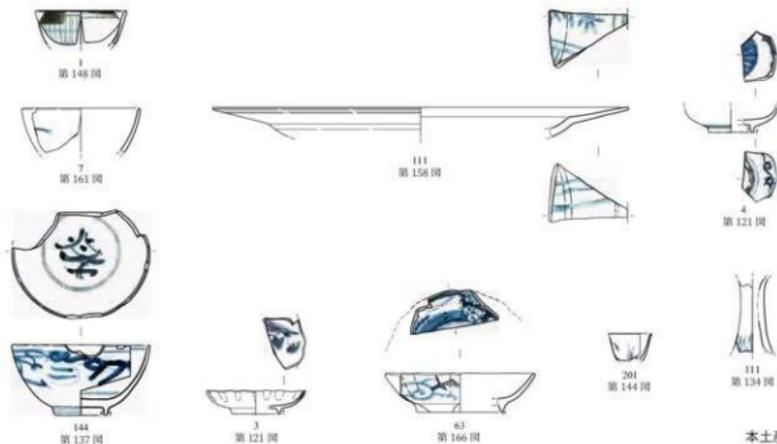
222  
第 182 図



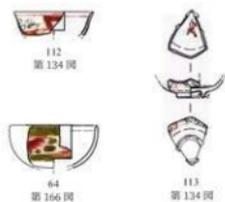
61  
第 166 図

タイ産半練土器

第 219 図 出土遺物一覽 7



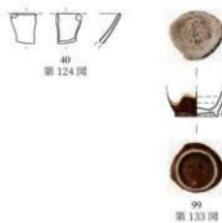
本土産染付



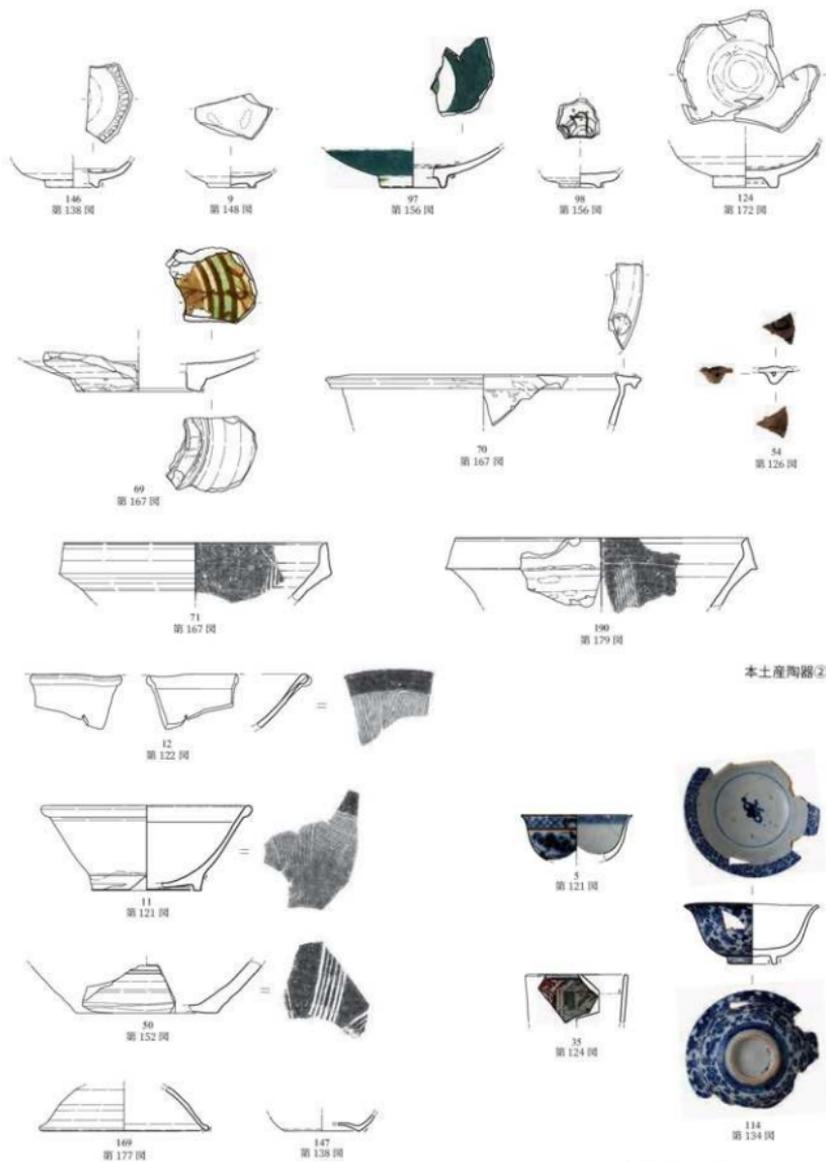
本土産色絵



本土産陶器①



本土産磁器



第221回 出土遺物一覽9

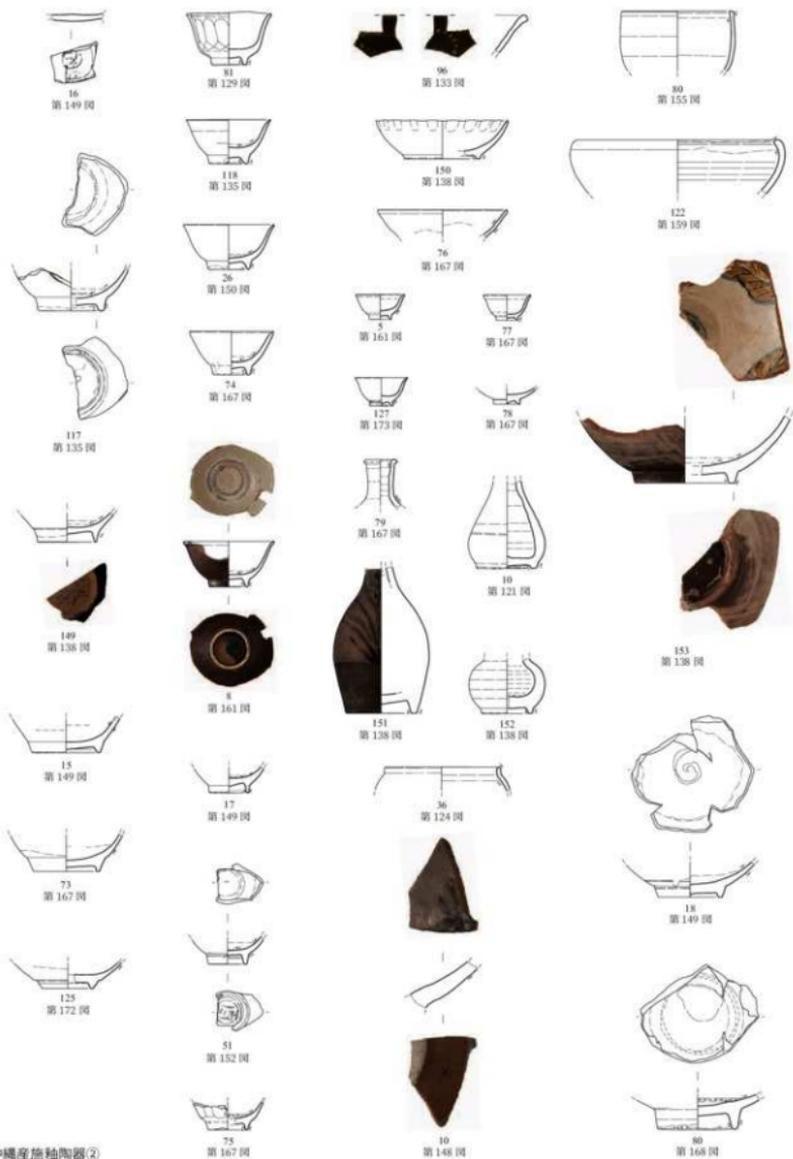
本土産近代磁器①



本土産近代磁器②

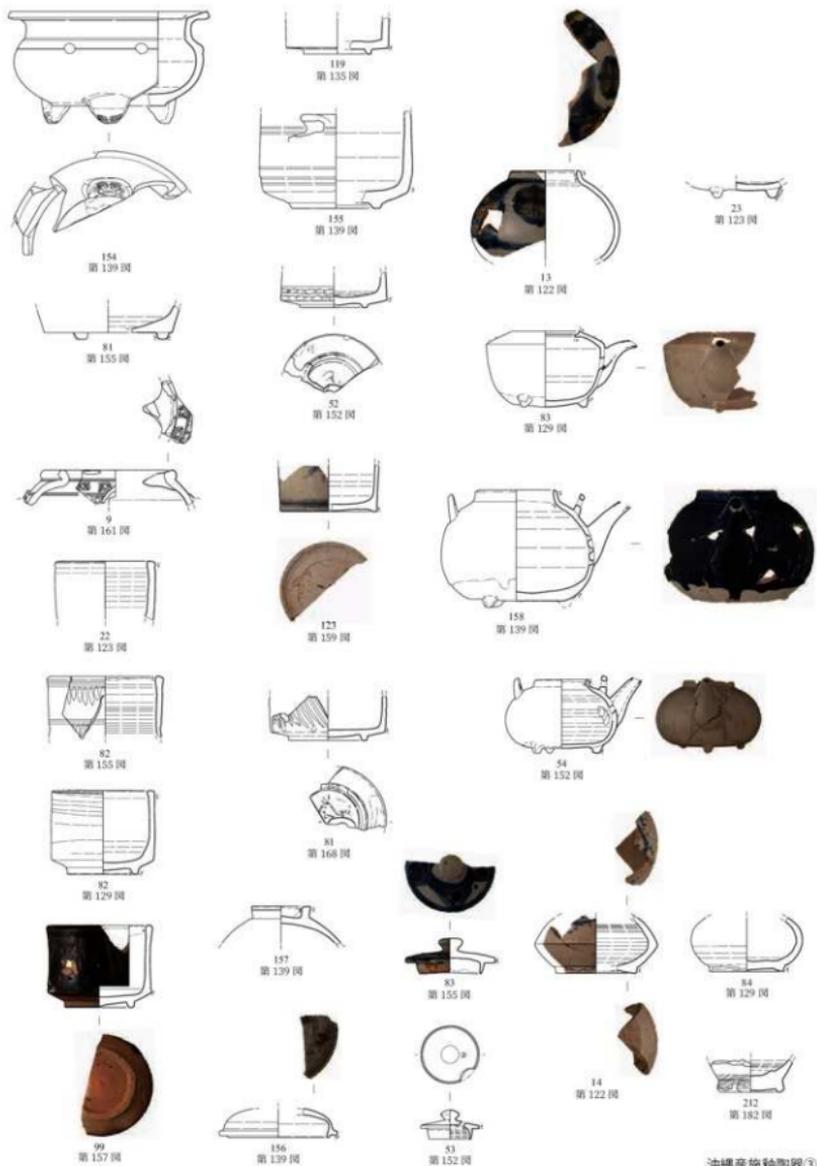


第 222 図 出土遺物一覽 10



沖繩産施釉陶器②

第 223 図 出土遺物一覽 11



第224図 出土遺物一覽12



15  
第122回



136  
第173回



82  
第168回



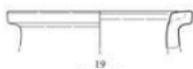
沖繩産施釉陶器④



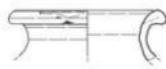
112  
第158回



48  
第125回



19  
第149回



106  
第157回



10  
第161回



83  
第168回



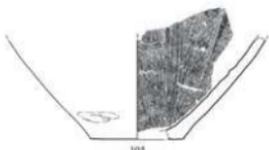
190  
第174回



84  
第168回



6  
第148回



105  
第157回



160  
第140回



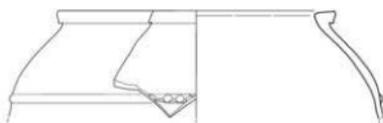
11  
第161回



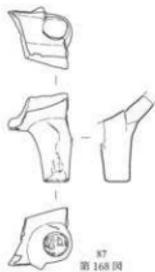
85  
第168回



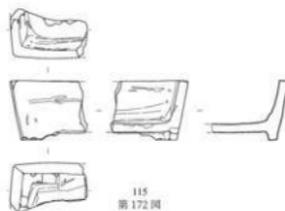
86  
第168回



55  
第152回



87  
第168回



115  
第172回

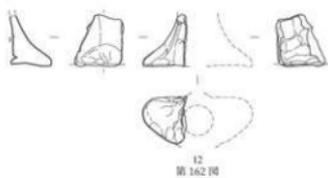
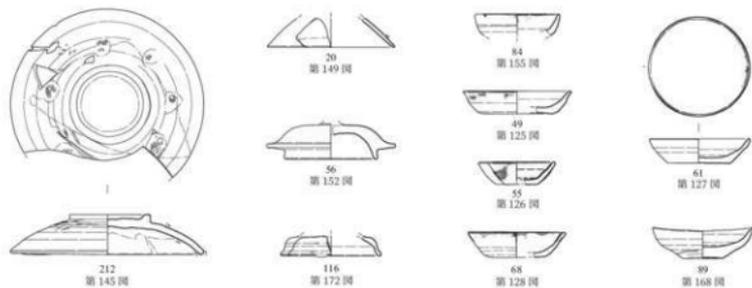


88  
第168回

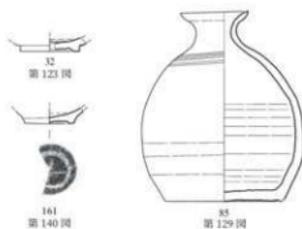


74  
第128回

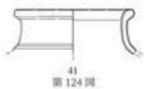
初期沖繩産無釉陶器①



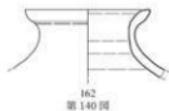
初期沖縄産無軸陶器②



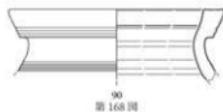
16  
第122回



41  
第124回



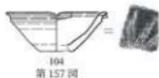
162  
第140回



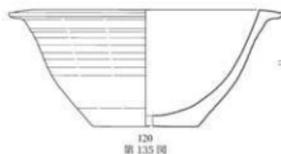
90  
第168回



24  
第123回



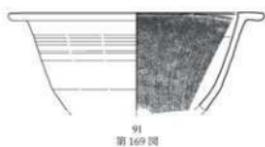
104  
第157回



120  
第135回



21  
第149回

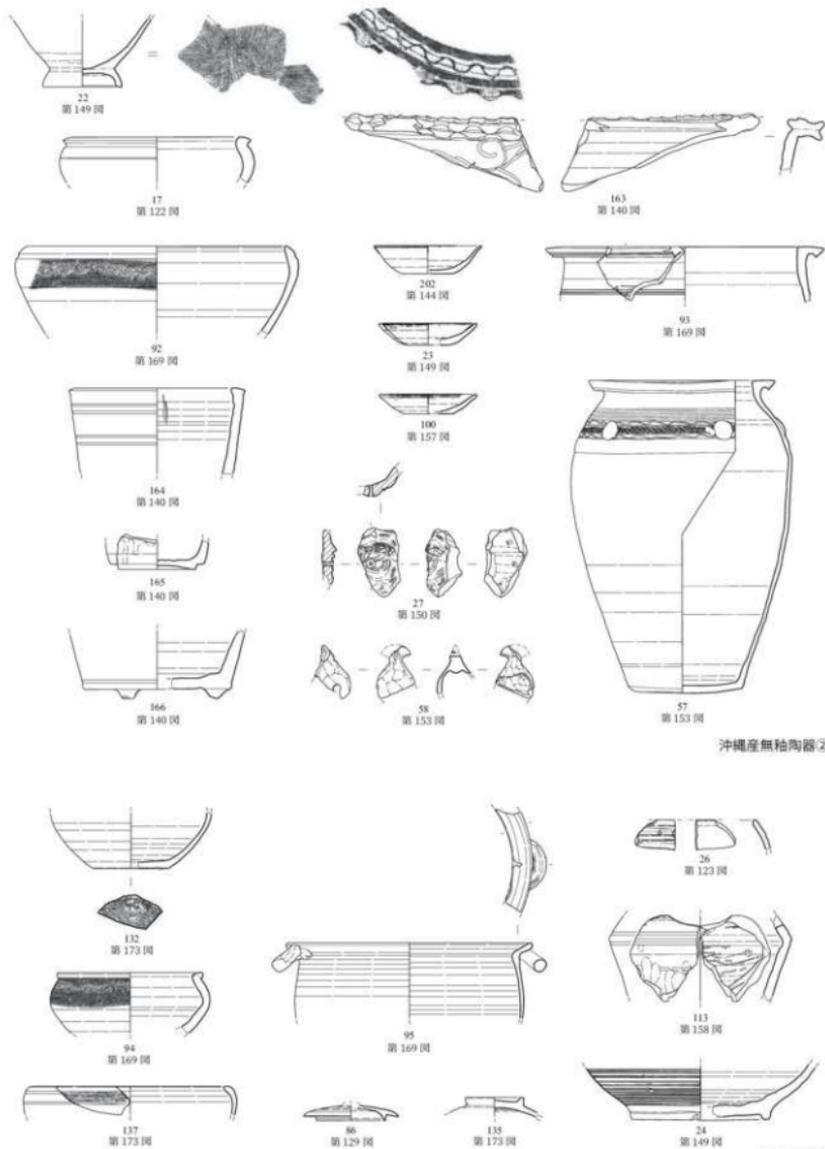


91  
第169回



沖縄産無軸陶器①

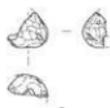
第226図 出土遺物一覽14



第227回 出土遺物一覽15

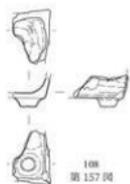


87  
第130図



2  
第161図

陶質土器②



108  
第157図



170  
第177図



88  
第130図



33  
第125図

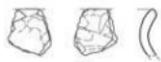


85  
第155図



191  
第179図

瓦質土器



101  
第157図



157  
第176図



215  
第182図



219  
第182図



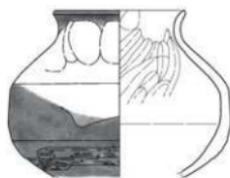
198  
第180図



116  
第158図



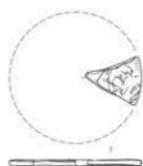
220  
第182図



24  
第163図

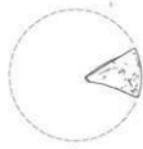
土器

第228図 出土遺物一覽16



32  
第 164 图

産地不明土器



147  
第 140 图

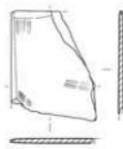
埴埴



79  
第 153 图



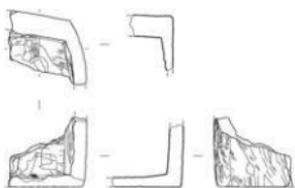
169  
第 141 图



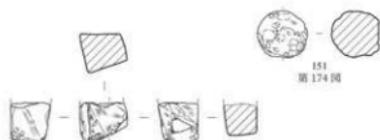
60  
第 153 图



97  
第 169 图



20  
第 163 图



151  
第 174 图



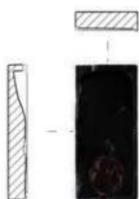
114  
第 158 图



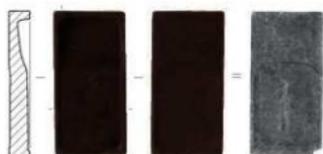
119  
第 159 图



96  
第 169 图



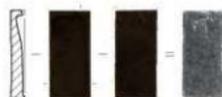
148  
第 140 图



63  
第 154 图



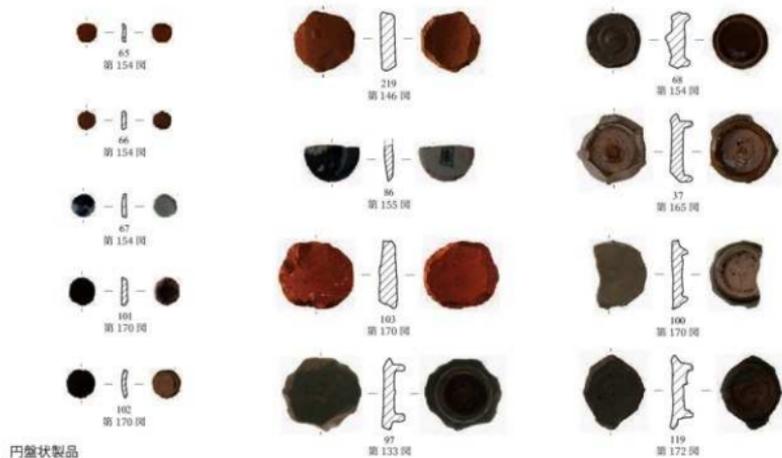
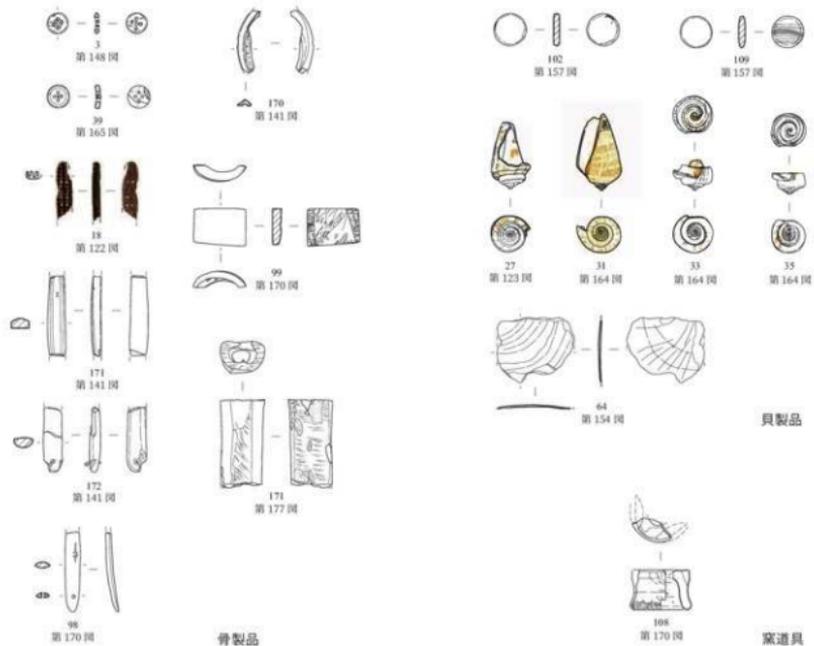
62  
第 153 图



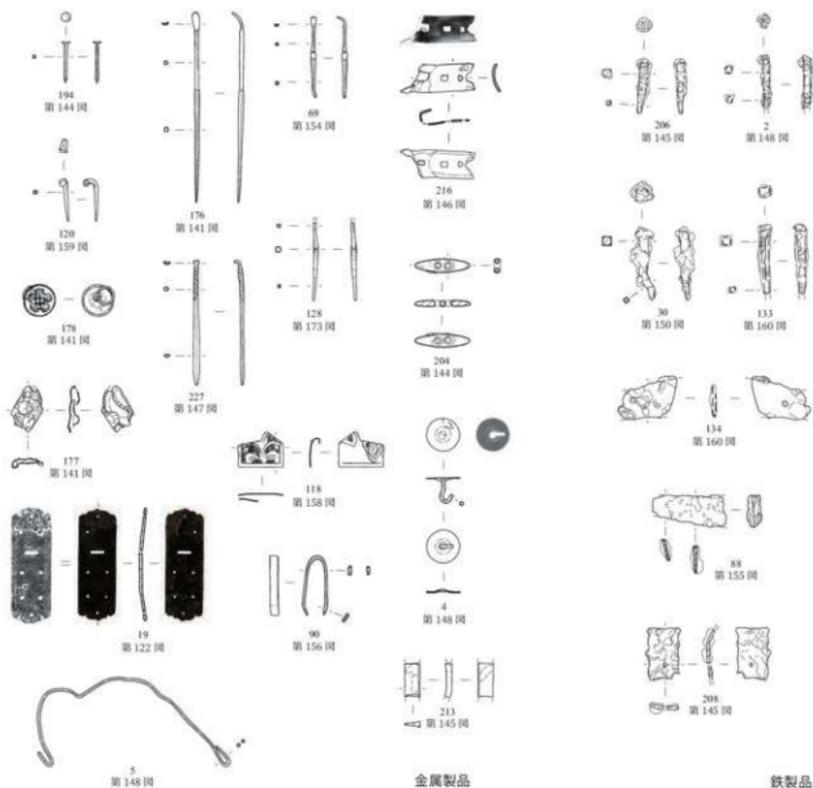
61  
第 153 图

第 229 图 出土遺物一覽 17

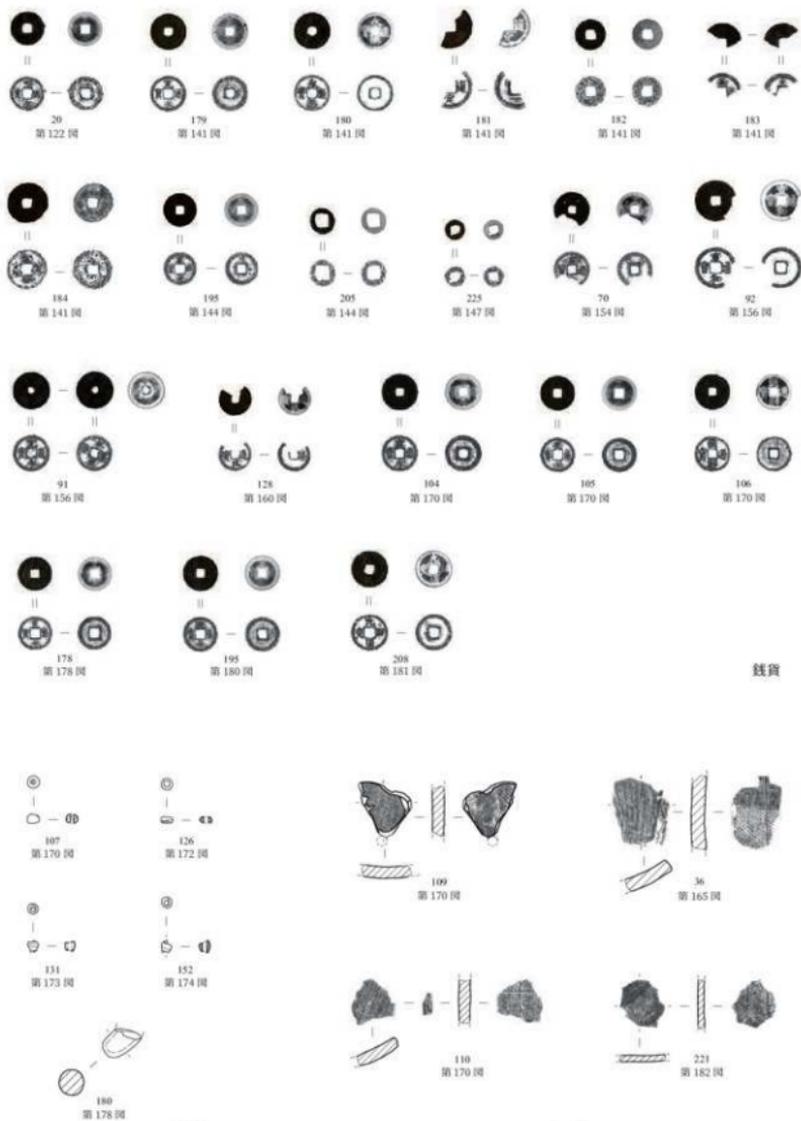
石製品



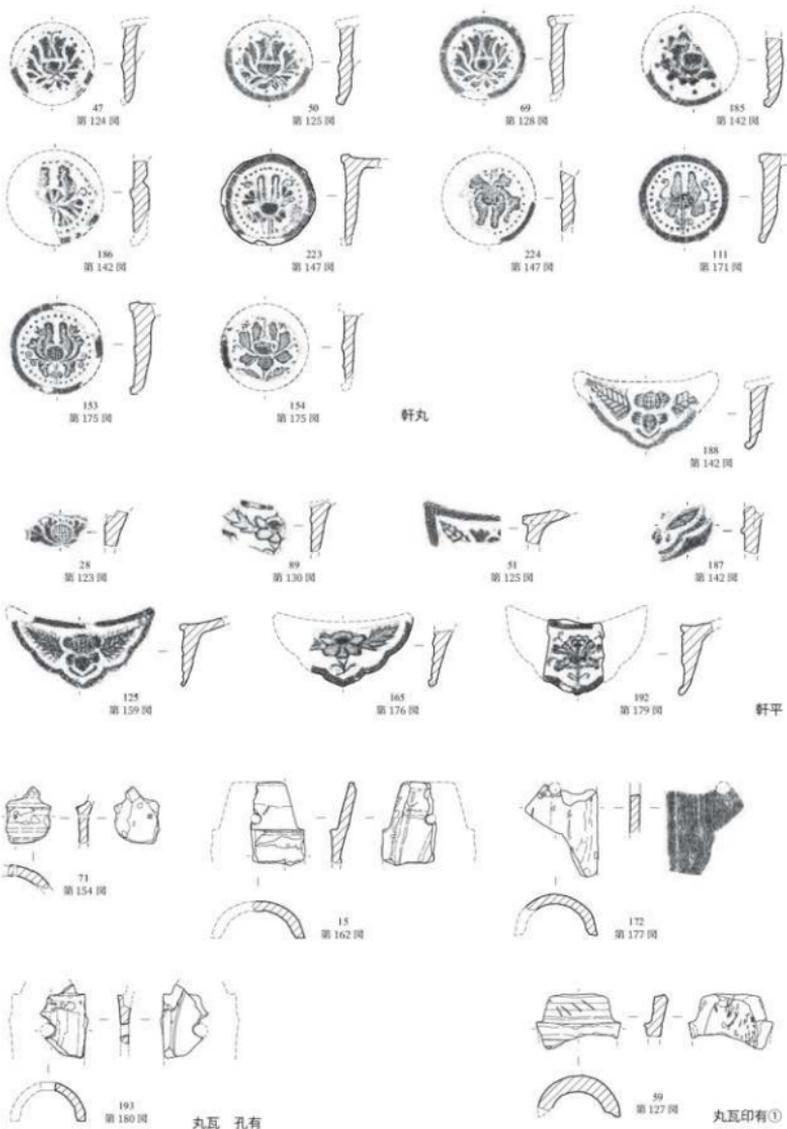
円盤状製品  
第230図 出土遺物一覽 18



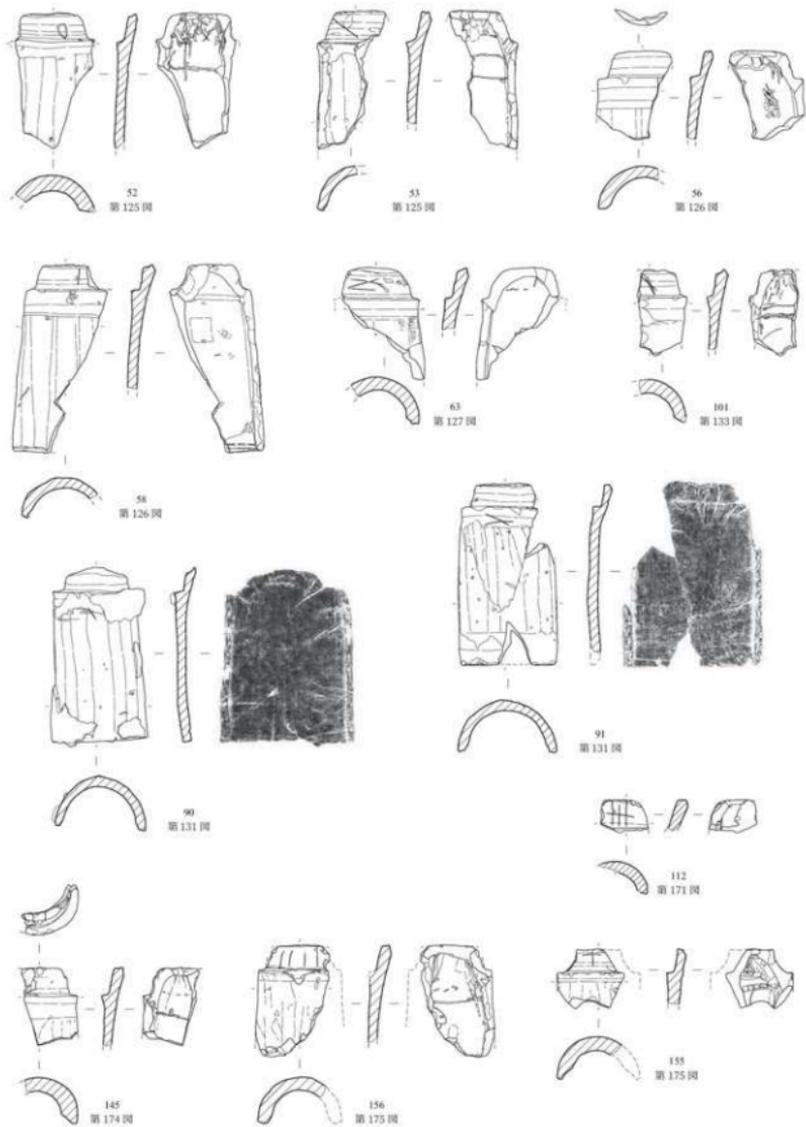
第 231 回 出土遺物一覽 19



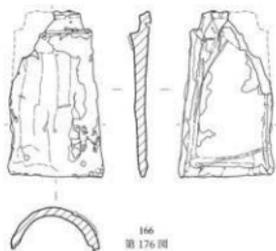
第232図 出土遺物一覽20



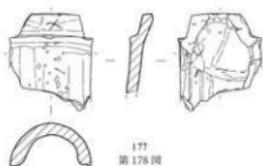
第 233 图 出土遺物一覽 21



第234図 出土遺物一覽22

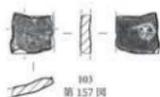


166  
第 176 图

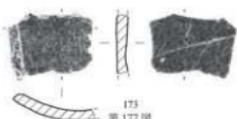


177  
第 178 图

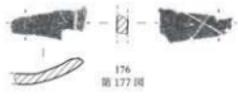
丸瓦印③



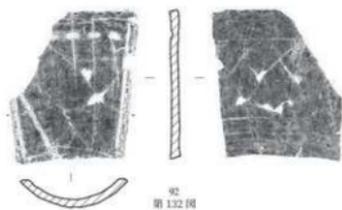
163  
第 157 图



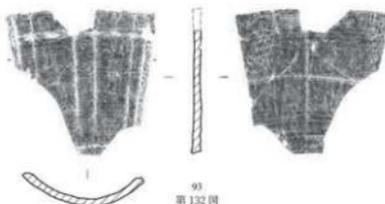
173  
第 177 图



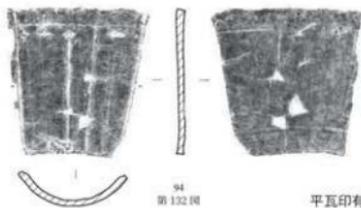
176  
第 177 图



92  
第 132 图

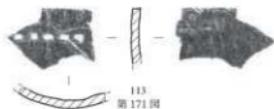


93  
第 132 图



94  
第 132 图

平瓦印有



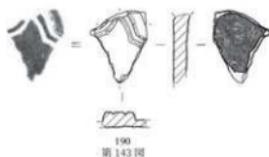
113  
第 171 图

平瓦 硬質陶器質



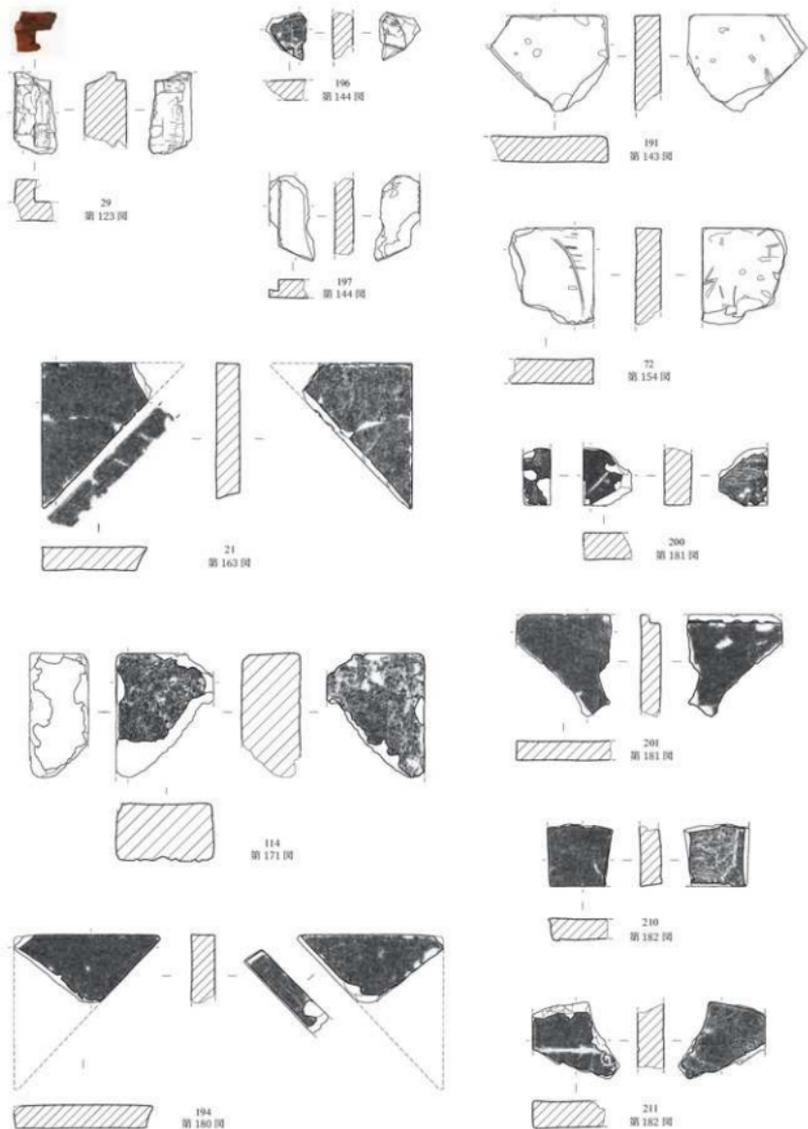
189  
第 143 图

大和瓦



190  
第 143 图

瓦4



第236図 出土遺物一覽24

埴瓦

## 引用・参考文献

- 愛知県陶磁器美術館・九州国立博物館 2014 『桃山・江戸の華やき 古唐津・古武雄』
- 新垣力 2003 『沖縄出土の清朝陶磁器』『紀要 沖縄埋文研究』1 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 2013 「17世紀前半～中葉の琉球陶器について―初期無釉陶器にみる薩摩焼の影響―」『鹿児島考古』第43号 鹿児島考古学会
- 池田榮史・津波古聡 1991 『灰釉碗の話』『沖縄県立博物館紀要』第17号 沖縄県立博物館
- 池谷望子・内田晶子・高瀬恭子 2005 『朝鮮王朝実録 琉球史料集成【訳注篇】』椋樹書林
- 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重 編纂 1972 『琉球史料叢書』第三卷(琉球国日記) 東京美術
- 上江洲均 1973 『沖縄の民具』考古民俗叢書<12> 慶友社
- 上原静 2011 『琉球の埴と煉瓦』『南島考古』No.30 沖縄考古学会
- 2013 『琉球古瓦の研究』椋樹書林
- 上原静・仲宗根求・小原裕也・伊波勝美・上門大悟 2011 『喜名古窯跡(瓦編)』『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第35号
- 大分市歴史資料館 2003 『平成15年度秋季(第22回)特別展 豊後府内 南蛮の彩り～南蛮の貿易陶磁器～』
- 沖縄県教育庁文化課(編) 1983 『重新校正 中山世鑑 卷五』沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育委員会 1993 『湧田古窯跡(Ⅰ)―県庁舎行政棟建設に係る発掘調査』沖縄県文化財調査報告書第111集
- 1994 『カイン浜貝塚―竹富島一周道路建設工事に伴う緊急発掘調査報告書―』前同第115集
- 1998 『首里城跡―京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)―』前同第132集
- 2008 『沖縄の金工品関係資料調査報告書』前同第146集
- 2011 『沖縄のガラス・玉等製品関係資料調査報告書』前同第149集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『首里城跡―下之御庭・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第3集
- 2007 『渡地村跡』前同第46集
- 2010a 『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(Ⅰ)―』前同第53集
- 2010b 『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(Ⅰ)―』前同第54集
- 2011 『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)―』前同第58集
- 2012a 『首里城跡―京の内跡発掘調査報告書(Ⅳ)―平成6年度調査の遺物編(1)―』前同第62集
- 2012b 『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)―』前同第63集
- 2013 『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書(2)―』前同第69集
- 2016 『首里城跡―銭蔵東地区発掘調査報告書―』前同第80集
- 2017a 『東村跡』前同第92集
- 2017b 『中城御殿跡(首里高校内)―首里高校校舎改築に伴う発掘調査―』前同第93集
- 2018 『中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(6)―』前同第95集
- 2019 『神山古集落―普天間飛行場雨水排水施設整備に伴う発掘調査報告書―』前同第99集
- 小野正敏 1982 『15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代』『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 勝連町教育委員会 1990 『勝連城跡―北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査(1)』勝連町の文化財第11集
- 河西大地 2018 『琉球ガラスの年代物コレクション～沖縄ガラス工芸図鑑～』白天草木庵
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念 九州近世陶磁学会
- 球陽研究会(編) 1974 『球陽 読み下し編』沖縄文化史料集成5 角川書店
- 金武町誌編纂委員会 1983 『金武町誌』金武町役場
- 久手堅憲夫 2000 『首里の地名―その由来と縁起―』南島文化叢書22 第一書房
- 熊本県教育委員会 1997 『浜の館＝阿蘇大宮司居館跡＝』熊本県文化財調査報告書21号
- 斎藤靖子・井上暁子 2016 『明治、大正、昭和のレトロでかわいい器と生活雑貨 美しい和のガラス』誠文堂新光社
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1998 『平成10年企画展 沖縄のやきもの―南海からの香り―』
- 桜井準也 2019 『増補 ガラス瓶の考古学』六一書房
- 首里高等学校 2020 『写真で辿る 養秀百四十年』国学創建二百二十年 沖縄県立第一中学校・首里高等学校 創立百四十年記念事業実行委員会(編)
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007 『沖縄における貿易陶磁研究―14～16世紀を中心に―』『紀要 沖縄埋文研究』5 沖縄県立埋蔵文化財センター

- 高橋誠一 2000 「『首里古地図』と首里城下町の復原」『東西学術研究所紀要』第33巻 関西大学東西学術研究所
- 高良倉吉 1996 「琉球王国成立期の首里城に関する覚書」『前近代における南西諸島と九州—その関係史的研究』多賀出版株式会社
- 都築晶子 2005 「龍のひそむ島—近世琉球の風水—」『沖縄県史各論編第4巻 近世』沖縄県教育委員会
- 坪井利宏 1977 『図鑑 瓦屋根』理工学社
- 土岐市教育委員会・(財)土岐市埋蔵文化財センター  
2008 『元屋敷跡発掘調査報告書』土岐市教育委員会・(財)土岐市埋蔵文化財センター
- 當眞嗣一 1985 「第4章 交通遺跡と金石文 3 石畳道」『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅱ—国頭・中頭方西海道(Ⅰ)・弁ヶ嶽参詣道—』沖縄県教育委員会文化課編
- 永井久美男 1996 『日本出土銭総覧 1996年版』兵庫埋蔵銭調査会
- 長崎市教育委員会 2001 『国指定史跡 出島和蘭商館跡—護岸石垣復元事業に伴う発掘調査及び工事報告書—』
- 中里太郎右衛門 1989 『唐津』日本陶磁大系第13巻 平凡社
- 今帰仁村教育委員会 2005 『今帰仁城周辺遺跡Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第20集
- 那覇市教育委員会 1991 『御細工所跡—城西小学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告—』那覇市文化財調査報告書第18集  
1992 『壺屋古窯跡群Ⅰ—個人住宅建設に伴う緊急発掘調査—』前同第23集  
2005 『首里旧真和志村跡 個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査』前同第68集  
2010 『那覇市内遺跡Ⅲ—首里金城村跡・首里旧真和志村跡—』前同第82集  
2012 『渡地村跡—臨港道路那覇1号線整備事業に伴う緊急発掘調査—』前同第91集
- 新島奈津子 2005 「古琉球における那覇港湾機能—一の港としての那覇港—」『専修史学』第39号 専修大学
- 波佐見町教育委員会 2013 『くらわんか藤田コレクショナー—寄贈記念図録—』
- 東恩納寛惇 1950 『南島風土記—沖縄・奄美大島地名辞典—』注釈 南島文化史料研究室
- 森達也 2014 「清朝輸出陶甕の生産地について 巡回展「魅惑の清朝陶磁」に寄せて」『陶説』第734号 公益社団法人日本陶磁協会
- 森毅 1995 「十六・十七世紀における陶磁器の様相とその流通—大阪の資料を中心に—」『ヒストリア』第149号 大阪歴史学会
- 森勉 1982 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- Angela Von Den Driesch 1976 "A Guide to Measurement of Animals Bones From Archeological Sites" Peabody Museum Bulletin 1. Peabody Museum of Aecheology and Ethnology. Harvard University



1 III区東 SA3001 内の砲弾破損痕 検出状況 (西から)



5 III区西 完掘状況 (東から)



2 III区西 SA3001 北側・SA3009 検出状況 (東から)



6 III区西 完掘状況 (西から)



3 III区東 SA3001 設置されたシャコガイ (南から)



7 III区西 SM3001 検出層序 (北から)



4 III区東 SD3003 半截状況 (北から)



8 III区西 SM3001 半截状況 (北から)

図版 1 遺構 1



1 III区西 SM3002 半截状況(北から)



5 IV区 SX4001 完掘状況(南西から)



2 III区西 SM3002 3層 遺物出土状況(北から)



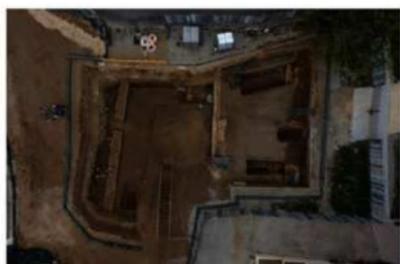
6 IV区 SD4001 完掘状況(北西から)



3 III区西 SM3003 半截状況(東から)



7 IV区 SA4001 立面(北西から)



4 IV区 完掘状況(西から)



8 IV区 SA4001 裏込め検出状況(東から)

図版 2 遺構 2



1 IVK SA4003 検出状況(北西から)



5 IVK SM4002 完翻状況(西から)



2 IVK SA4002 検出層序(北西から)



6 IVK SK4002 半截状況(北から)



3 IVK SA4002 立面(北から)



7 V区 SF5001 検出状況(南から)



4 IVK SM4002 半截状況(西から)



8 V区 SF5001 検出状況(東から)

図版 3 遺構 3



1 V区 SA5002 検出状況(南から)



5 V区 SA5005 検出状況(東から)



2 V区 SA5002 検出状況(西から)



6 V区 SA5005 検出状況(北東から)



3 V区 SA5002 断ち割り状況(西から)



7 V区 SA5006 検出状況(南西から)



4 V区 SA5004 検出状況(背面は遺構保護砂)(南西から)



8 V区 SA5006 立面(西から)

図版 4 遺構 4



1 V区 SM5002 完掘状況(東から)



5 V区 SA5003・SD5002 検出状況(北から)



2 V区 SP5032～5040 完掘状況(南西から)



6 V区 SD5002 検出状況(南西から)



3 V区 SA5003 立面(西から)



7 V区 SD5001 検出状況(北から)



4 V区 SD5006 検出状況(西から)



8 V区 SA5003 根石付近 遺構面(コーラル面)  
検出状況(北から)

図版 5 遺構 5



図版 6 出土遺物 1



SM3001 4層



III区の出土遺物 5



SM3001 6層

SM3001 7層



III区の出土遺物 6



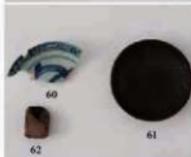
SM3001 9層



59



SM3001 11層



61



III区の出土遺物 7



63



SM3001 13層

SM3002 1層

SM3002 3層

SM3002 4層



III区の出土遺物 8

図版 7 出土遺物 2



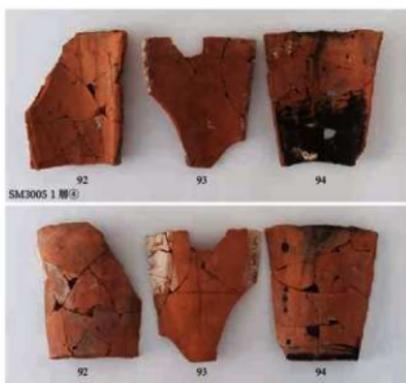
III区の出土遺物 9



III区の出土遺物 10



III区の出土遺物 11



III区の出土遺物 12



Ⅲ区の出土遺物 13



Ⅲ区の出土遺物 14



Ⅲ区の出土遺物 15



Ⅲ区の出土遺物 16

図版 9 出土遺物 4



I層④



I層③



III区の出土遺物 17



III区の出土遺物 18



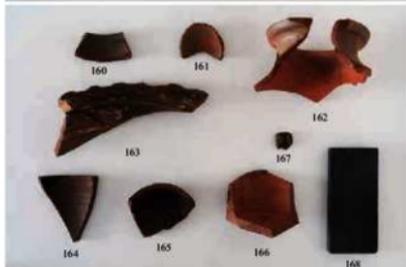
I層④



I層⑤



III区の出土遺物 19



III区の出土遺物 20

図版 10 出土遺物 5



III区の出土遺物 21



III区の出土遺物 22・23



III区の出土遺物 24



III区の出土遺物 25

図版 11 出土遺物 6



III区の出土遺物 26



III区の出土遺物 27



IV区の出土遺物 1



IV区の出土遺物 2

図版 12 出土遺物 7



IV区の出土遺物 3



IV区の出土遺物 4



IV区の出土遺物 5



IV区の出土遺物 6

図版 13 出土遺物 8



IV区の出土遺物7



IV区の出土遺物8



IV区の出土遺物9



IV区の出土遺物10

図版 14 出土遺物9



IV区の出土遺物 11



IV区の出土遺物 12



IV区の出土遺物 13



V区の出土遺物 1

図版 15 出土遺物 10



V区の出土遺物 2



V区の出土遺物 3



V区の出土遺物 4



V区の出土遺物 5

図版 16 出土遺物 11



V区の出土遺物6



V区の出土遺物7



V区の出土遺物8



V区の出土遺物9

図版 17 出土遺物 12



V区の出土遺物 10



V区の出土遺物 10・11



V区の出土遺物 12



V区の出土遺物 13

図版 18 出土遺物 13



V区の出土遺物 14・15



V区の出土遺物 16



V区の出土遺物 17



V区の出土遺物 18

図版 19 出土遺物 14



V区の出土遺物 19



V区の出土遺物 20・21

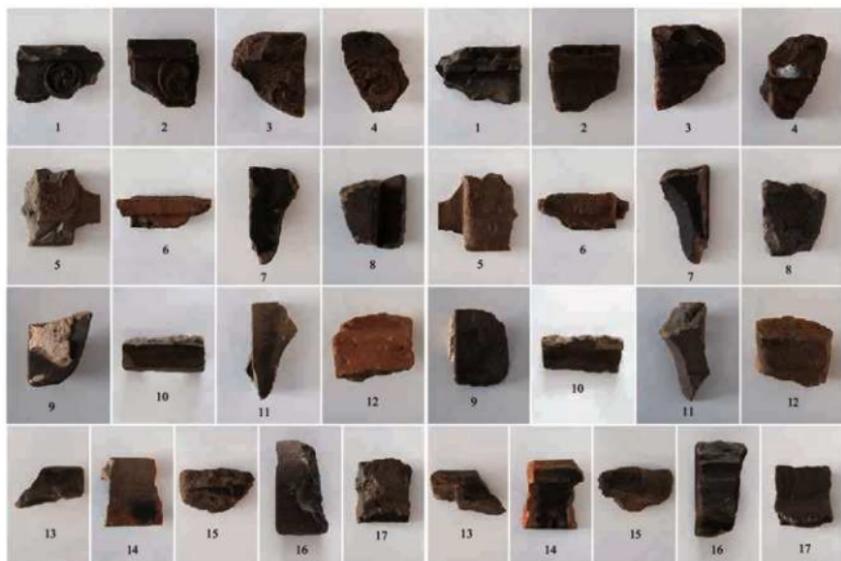


V区の出土遺物 21・22



V区の出土遺物 22

図版 20 出土遺物 15



III·IV·V区 埴瓦



I·III·IV·V区 埴瓦集合

图版 21 出土遗物 16



III区 写真のみ



IV区 写真のみ



V区 写真のみ

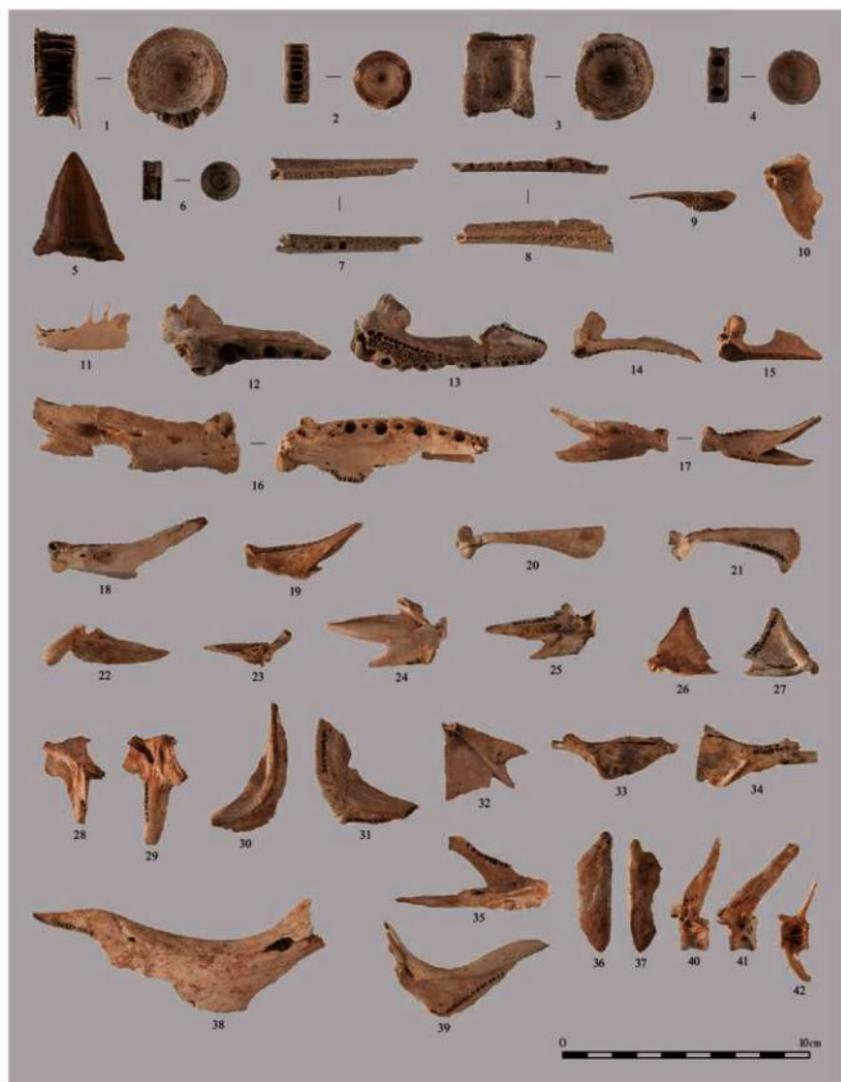


III・IV・V区 ガラス製品集合



III・IV・V区 三彩集合

図版 22 出土遺物 17



図版 23 脊椎動物遺体 1

ネズミサメ科 1. 椎骨 サメ類 2-4. 椎骨 5. 歯 エイ目 6. 椎骨 ダツ科 7. 前上顎骨右 8. 歯骨左 9. 上咽頭骨右 ボラ科 10. 主腮蓋骨右  
 カマス科オニカマス? 11. 歯骨? 左? ハタ科 12-14. 前上顎骨左 13-15. 前上顎骨右 16-17-19. 歯骨右 18. 歯骨左 20. 主上顎骨左  
 21. 主上顎骨右 22. 口蓋骨左 23. 口蓋骨右 24. 角骨左 25. 角骨右 26-27. 方骨左 28. 舌顎骨左 29. 舌顎骨右 30. 前腮蓋骨左  
 31. 前腮蓋骨右 32. 主腮蓋骨右 33. 角舌骨左 34. 角舌骨右 35. 後咽頭骨右 36-37. 上腕頭骨右 38-39. 腕頭骨右 40-42. 腹椎



図版 24 脊椎動物遺体 2

アジ科 1. 角骨右 2. 主総蓋骨右 タチウオ科 3. 歯骨左 タチウオ科? 4. 前上顎骨/歯骨 シイラ科 5. 前上顎骨左 フェダイ科  
 6・7. 前上顎骨右 8. 主上顎骨右 9. 角骨左 10. 口蓋骨左 11. 角舌骨右 12. 腹椎 クロダイ属 13. 前上顎骨右 14. 前上顎骨左 15. 歯骨左  
 16. 歯骨右 17. 主上顎骨右 18. 角骨右 タイ科 19. 前總蓋骨左 20. 主總蓋骨左 ヨコシマクロダイ 21. 前上顎骨左 フェエキダイ科  
 22. 前上顎骨左 23・24. 前上顎骨右 25・26. 歯骨右 27. 主上顎骨左 28. 主上顎骨右 29・30. 口蓋骨左 31・32. 角骨右 33. 方骨右  
 34・35. 舌顎骨右 36. 前總蓋骨右 37. 前總蓋骨左 38. 主總蓋骨右 39・40. 角舌骨左 41. 後側頭骨右 42・43. 上颞頰骨左 44・45. 颞頰骨右



図版 25 脊椎動物遺体 3

シロクラベラ 1・2, 前上顎骨左 3・4, 歯骨左 5, 主上顎骨左 6, 口蓋骨左 7・8, 角骨右 9, 上咽頭骨右 10, 下咽頭骨 ベラ科 11, 前上顎骨左 12, 前上顎骨右 13, 歯骨右 14, 上咽頭骨左 15・16, 下咽頭骨 17, 尾舌骨 18, 上腕頭骨右 フダイ科 19, 前上顎骨左 20・23, 前上顎骨右 21, 歯骨右 22・24, 歯骨左 25・26, 主上顎骨左 27, 角骨左 28・29, 方骨左 30, 上咽頭骨右 31, 上咽頭骨左 32, 下咽頭骨 33・34, 舌顎骨右 35, 前腕蓋骨左 36, 主腕蓋骨左 37・38, 尾舌骨 39, 上腕頭骨右 40・41, 腹椎 ニサダイ科 42, 舌顎骨右 43, 主腕蓋骨左 44, 腕頭骨左 45, 福鱗 46・47, 腹椎 モンガラカワハギ科 48, 前上顎骨左 49, 尾舌骨 50, 担鰭骨 51, 第1背鰭棘 カニ 52, 可動指右 53, 不動指左



図版 26 脊椎動物遺体 4

ニフトリ 1. 鳥口骨左 2. 鳥口骨右 3. 肩甲骨右 4. 上腕骨左 5. 上腕骨右 6. 尺骨左 7. 尺骨右 8・9. 中手骨左 10. 大腿骨右  
 11. 脛足根骨左 12. 脛足根骨右 13. 中足骨(オス)右 14. 中足骨(メス)右 イヌ 15. 下顎骨P<sub>1</sub>M<sub>1</sub>左 16. 下顎骨M<sub>1</sub>左 17. 肩甲骨右  
 18. 上腕骨右 19. 橈骨右 20. 尺骨左 21. 尺骨右 22. 中手骨V右 23. 中手骨左 24. 寛骨左 25. 脛骨左 26. 中足骨III左  
 ネコ 27. 下顎骨P<sub>1</sub>P<sub>2</sub>M<sub>1</sub>右 28. 橈骨右 29. 尺骨右 30. 中手骨III左 31. 寛骨右 32. 中足骨III左 33. 中足骨II右 ネズミ科 34. 大腿骨左



図版 27 脊椎動物遺体 5

イノシシ/ブタ 1. 頭蓋骨M<sup>+</sup>右 2. 上顎骨P<sup>+</sup>-M<sup>+</sup>左 3. 上顎骨dm<sup>+</sup>-dm<sup>+</sup>右 4. 下顎骨P<sub>1</sub>-M<sub>1</sub>右 5. 下顎骨C・dm<sub>1</sub>-M<sub>1</sub>右 6. 環椎 7. 肩甲骨右  
 8. 肩甲骨左(ブタ) 9. 肋骨右 10・11. 肋骨左 12. 上腕骨左(カットマーク) 13. 上腕骨左(ブタ) 14. 桡骨右(カットマーク) 15. 桡骨右  
 16. 尺骨右 17. 尺骨左 18. 中手骨II左 19. 中手骨III右 20. 中手骨IV右 21. 中手骨V右 22. 寛骨右 23. 寛骨左 24. 大腿骨右(カットマーク)  
 25. 大腿骨左 26. 大腿骨右(回転印切) 27. 膝蓋骨右 28. 脛骨左 29. 脛骨右 30. 腓骨左(カットマーク) 31. 距骨右(カットマーク)  
 32. 踵骨左 33. 中足骨II左 34. 中足骨III右 35. 中足骨IV右 36. 中足骨V左 37. 基節骨左 38. 中節骨左 39. 末節骨左



図版 28 脊椎動物遺体 6

ウシ 1. 角突起 2. 上顎 P<sub>1</sub>/P<sub>2</sub> 右 3. 上顎 M<sub>1</sub>/M<sub>2</sub> 右 4. 上顎 M<sub>1</sub>/M<sub>2</sub> 左 5. 上顎 M<sub>2</sub> 左 6. 下顎骨 P<sub>1</sub>-M<sub>3</sub> 右 7. 肩甲骨右 (カットマーク)  
 8. 上腕骨右 (螺旋状剥片, カットマーク) 9. 肋骨右 10. 肋骨左 (螺旋状剥片) 11. 桡骨右 (螺旋状剥片, カットマーク) 12. 尺骨左 (カットマーク)  
 13. 尺骨右 (チョップマーク) 14. 手根骨右 15. 手根骨 (中間) 左 16. 手根骨 IV 左 17. 中手骨右 (カットマーク) 18・19. 大趾骨左  
 20. 脛骨右 (螺旋状剥片, カットマーク) 21. 脛骨左 (チョップマーク) 22. 中心第 4 足根骨左 23. 中心第 2 第 3 足根骨右 24. 中足骨左 (螺旋状剥片, カットマーク)  
 25. 距骨左 (チョップマーク, カットマーク) 26. 跗骨左 27. 基節骨右 28. 中節骨右 29. 末節骨左



図版 29 脊椎動物遺体 7

ウマ 1. 上顎P右 2. 上顎P右 3. 下顎I右 4. 下顎P右 5. 下顎P/M左 6. 上腕骨左(カットマーク) 7・8. 肋骨 9. 腕骨左(螺旋状剥片) 10. 尺骨左(カットマーク) 11. 手根骨左(カットマーク) 12. 中手骨右 13. 脛骨右(螺旋状剥片) 14. 距骨左 15. 足根骨 16. 中足骨右(螺旋状剥片、カットマーク) 17. 中足骨左(螺旋状剥片、カットマーク) 18. 中足骨左 19. 種子骨 20. 基部骨 21. 中節骨左 22. 末節骨  
ヤギ 23. 上顎M/M<sup>2</sup>右 24. 上顎M<sup>2</sup>右 25. 下顎M左 26. 上腕骨左 27・28. 腕骨左 29・30. 尺骨左 31. 中手骨右 32. 寛骨右  
33. 大腸骨右(螺旋状剥片、カットマーク) 34. 中足骨左 イルカ類? 35. 後頭骨 ウミガメ? 36. 指骨?



図版 30 巻貝 1 (番号は第 153 表と一致)



図版 31 巻貝 2 (番号は第 153 表と一致)



図版 32 二枚貝 1 (番号は第 154 表と一致)



図版 33 二枚貝 2 (番号は第 154 表と一致)

第 153 表 巻貝出土一覧

番号	科名	目録名	年表順	番号	科名	目録名	年表順
1	ツタノコ科	オホベッコウガイ	I-1-a	41	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
2	ニシキウズ科	ニシキウズワノアシ	I-1-a	45	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
3		ニシキウズ	I-2-a	46	ツツシロガイ科	スミズキウズガイ	I-2-c
4		ムラサキウズ	I-3-a	47	ツツシロガイ科	ヒラガイ	I-4-a
5	ニシキウズ科	ギンタカハマ	I-4-a	48		コガンネキ	I-2-a
6		ウツノハヤシ	I-4-a	49		ガンゼキボラ	I-4-a
7		オホナワシシダタミ	II-1-b	50		ウメレイシダマシ	I-1-b
8		ニシキウズ科不明		51	アツキガイ科	アカイゲレイシ	I-3-a
9		ヤコウガイ	I-4-a	52		ツノレイシ	I-3-a
10		ヤコウガイの蓋	I-4-a	53		シラカモガイ	I-3-a
11	リュウケン科	チウウセンサザエ	I-3-a	54		オニコプシ	I-3-a
12		チウウセンサザエの蓋	I-3-a	55	オニコプシ科	オニコプシ	I-3-a
13		カシキク	II-1-b	56		オニコプシ科不明	
14		カシキクの蓋	II-1-b	57	エゾバイ科	シマベッコウバイ	II-1-c
15		コシダカアマガイ	II-1-b	57		イトマキボラ	I-2-a
16		マヨマヨナベ	II-1-b	58		ヒメイトマキボラ	I-2-b
17	アマモブ科	オモアルマヨブネ	I-1-b	59		ナガイトマキボラ	I-2-a
18		アマモブ	I-1-b	60		リュウキウツノマダガイ	I-3-a
19		ニシキウズ科不明	I-1-c	61		サトヒモ	I-2-c
20		オホノツノガイ	I-2-c	62		アツシロクロミナシ	II-2-c
21		オホノツノガイ	I-2-a	63		アツシロクロミナシ	I-2-c
22		メオニツノガイ	I-4-c	64		マダライモ	I-1-a
23	オホノツノガイ科	コガツノブ	III-1-c	65		ホヤガイモ	I-1-a
24		イノ(カニノ)カニモリ	II-1-b	66		オシラケササガイモ	I-1-a
25		カワノミカニモリ	I-1-b	67		ゴマフイモ	I-2-c
26		ナダツノコカニモリ	I-1-c	68		アカシマミナシ	I-2-c
27		オホノツノガイ科不明		69	イモガイ科	サツキミナシナシドキ	I-2-c
28	ゴマフイ科	ゴマフイ	I-4-a	70		ユキガイモ	I-2-c
29	ウツノコ科	ウツノコウツノ	II-1-c	71		ヤキイモ	I-2-a
30		フトヘナナリ	III-0-1	72		ヤナギンボリイモ	I-2-a
31	ヘナタリ科	カワイ	III-0-1	73		キヌカフガイモ	I-2-a
32		セシシガイ	III-0-1	74		アジロイモ	II-2-c
33		オウウロガイ	III-2-c	75		イモガイ科不明	
34		ムシシダモ	I-2-c	76	イモガイ科	キタケノコガイ	IV
35	スィシウガイ科	キタケノコガイ	I-2-c	77		トリウガサカワニナ科	IV-5-6
36		キタケノコガイ	I-2-c	78		スダカウニナ	IV-6
37		スィシウガイ科不明		79		オホナツマツニシ	V-5
38	スズメガイ科	カウチドリ	I-3-a	80		シムリマイマイ	V-8
39		ヤタシマダカラ	I-2-a	81		オキナワウスカワマイマイ	V-9
40		ボシダカラ	I-2-a	82		ハンダシマイマイ	V-8
41		チヂメキ	I-1-a		――	――	――
42	タカラガイ科	ハナヒラダカラ	I-1-a				
43		キイロダカラ	I-1-a				
44		ハナマルユキ	I-1-a				
		オホノツノガイ科不明					

第 154 表 二枚貝出土一覧

番号	科名	目録名	年表順
1	ツタノコ科	オホベッコウガイ	I-1-a
2	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
3	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
4	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
5	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
6	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
7	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
8	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
9	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
10	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
11	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
12	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
13	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
14	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
15	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
16	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
17	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
18	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
19	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
20	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
21	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
22	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
23	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
24	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
25	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
26	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
27	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
28	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
29	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
30	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
31	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
32	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
33	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
34	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
35	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
36	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
37	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
38	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
39	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
40	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
41	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
42	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a
43	ツタノコ科	リスガイ	I-2-c
44	ツタノコ科	オホニシ	I-2-a

## 報告書抄録

ふりがな	なかぐすくうどうんあとしゆりこうこうない・はじえんあと							
書名	中城御殿跡(首里高校内)・植園跡							
副書名	首里高校校舎改築に伴う発掘調査(2)							
巻次	—							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第110集							
編著者名	亀島慎吾(編) 太田樹也 平良和輝 古堅あゆみ							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7 TEL 098-835-8752							
発行年月日	令和3(2021)年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 °	東経 °	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
なかぐすくうどうんあと 中城御殿跡 しゆりこうこうない (首里高校内) はじえんあと 植園跡	おきなわけん、なほし 沖縄県那覇市 しゆりまわしちやう 首里真和志町 ちゆうが 2丁目	472018	—	26° 13' 10"	127° 42' 45"	2017.08.24～ 2018.04.27 2018.09.12～ 2019.04.24	3,260㎡	首里高校校舎改築 に伴う記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
中城御殿跡	屋敷跡	グスク時代		柱穴、土坑、石組土坑、石積		中国産陶磁器、石製品		中城御殿創建以前のグスク時代の遺構を検出した。 近世は検出した遺構や造成土の状況から前期・後期に区別することが出来た。 中城御殿移転後の遺構も確認され、首里高校に関連する遺構及び遺物が見られた。
		近世		石積、一括廃棄遺物、柱穴、土坑、石組土坑、石敷		中国産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産施軸陶器、沖縄産無軸陶器、土器、石製品、骨製品、貝製品、金属製品、明朝系瓦		
		近代～現代		井戸、集石遺構、石列、石組土坑		中国産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産施軸陶器、沖縄産無軸陶器、ガラス製品、石製品		
植園跡	その他	近世		石積、石組土坑		中国産陶磁器、貝製品、自然遺物		石積や石組土坑を確認した。石組土坑からは、貝製品製作に関連すると考えられる貝殻片が多く出土した。
要約	<p>中城御殿は国王の世子が暮らした邸宅跡で、近世初期に創建され、1875(明治8)年に那覇市首里大町の龍潭池の北側に移転した。移転後の当地は、沖縄県立第一中学校を経て、首里高校となっている。</p> <p>植園跡は、蛸燭や漆器の原料となる漆を採取する植園が置かれた場所とされている。</p> <p>首里高校校舎改築に伴い実施された発掘調査である。当初、記録保存調査として実施していたが、関係各機関と調整を行い、一部現地保存が可能な部分があった。</p> <p>調査の結果、グスク時代、近世、近代～現代の遺構、遺物を確認した。グスク時代の遺構は柱穴や石組土坑がある。近世の遺構は中城御殿が機能していた時期の石積、石組土坑など多種多様な遺構及び遺物を確認した。近代～現代の遺構は、首里高校校舎等に関連する遺構が確認された。</p> <p>植園跡の部分からは、石積や石組土坑が確認できた。石組土坑内からはヤコウガイをはじめとする貝殻片が多く出土し、貝製品等を製作していた痕跡が確認された。</p>							

---

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第110集

## 中城御殿跡（首里高校内）・櫛園跡

—首里高校校舎改築に伴う発掘調査（2）—

発行年 令和3（2021）年9月30日  
発行 沖縄県立埋蔵文化財センター  
編集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7  
TEL 098（835）8751（総務班）・8752（調査班）

印刷 沖縄自分史センター株式会社  
〒903-0804  
沖縄県那覇市首里石嶺4-288  
TEL 098（960）4104

---